
難攻不落彼女

齊凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

難攻不落彼女

【Nコード】

N9186U

【作者名】

斉凜

【あらすじ】

第1章 イケメン、金持ち、スポーツもできて頭もいい。完全無欠の学園の王子 榎木譲司。彼が勢いで助けた平凡少女は、平凡を装った腹黒鉄壁少女だった。譲司の誘いを斜め上な展開で完全ブロツク。恋愛バトルの行方は？譲司に勝ち目はあるのか？

第2章 まじめないい人のふりをした、腹黒遊び人朝比奈裕一。腐れ縁の同級生にはじめは反発していたものの、トラブルが二人の距離を近づけ、朝比奈は本当の恋を知る。しかし相手は美人だが凶暴な彼女だった。

ブレイボーイの二人が、なかなか落ちない二人の女性に悪戦苦闘。
同じ大学を舞台にした二組の物語。お互いのカップルの話はリンク
しながら、徐々に繋がっていきます。前半はラブコメディ、クライ
マックスが近づくにつれ鬱展開に、でもラストはハッピーエンドを
めざします

榎木譲司の場合 プロローグ（前書き）

コメディ強めのお話です。あまり甘い展開は期待できません。初投稿です。誤字脱字などありましたら、ご連絡いただけると嬉しいです。

榎木讓司の場合 プロローグ

「その手を離せ！彼女は俺のものだ」

気づいたら榎木讓司まなき・じょうじはそう叫んでいた。言われた男も、庇われた彼女も驚いて呆然と自分を見ている。騒がしかった周りも水を打ったように静まり返った。

しまったと思っただが引くに引けない。

いやらしく彼女の肩に手を伸ばしていた男の手を払い、彼女の手をそっととって引き寄せた。

「大丈夫？」

戸惑う彼女を安心させたくて、できるだけ優しく微笑んだ。

学園の王子の異名を持つ讓司に間近で微笑まれ、落ちない女は今までいなかった。

そう、今までは。

彼女は俺の微笑みに嘲笑で切り返して叫んだ。

「痛い！」

優しくつかんだはずの手を振り払われ、彼女は飛ぶように逃げ出した。

そして手近にいた、先ほどのいやらしい男―確か名前は鈴木だったかな？―とは別の、大人しそうな男子学生の胸にすがりついた。

「怖い……」

小刻みに震える彼女は暴力に恐れる子供のようにだった。

先ほどまでは周囲の非難は鈴木に向かっていたのに、今の彼女の言動で讓司に移った。特に男どもの視線が痛い。

彼女地味に隠れファンがいるって噂本当だったんだ…。などと感心している場合ではない。

誤解は速やかにとかねば。

俺はゆっくり彼女に近づきながら、恐る恐る声をかけた。

「ごめん。怖がらせちゃったみたいだね」

彼女は男子学生の胸からゆっくり顔あげ、振り返った。

素早く周りの気配を確認し、皆が譲司ばかりを見ていて、自分には注目していないことに気づいた。

それからやっと譲司を正面から見て、譲司を嘲るような笑顔を浮かべた。

その凶悪な笑顔を見て初めて悟った。コイツ、わざと俺を嵌めたな……

先ほどまでのただ純粹に彼女を助けたいという、優しい心は砕け散った。

上等じゃないか、売られた喧嘩は買ってやる。

ここに一人の男と女の、恋愛というには恐ろしすぎる戦いが始まった。

彼女の話

彼女との出会いはよく覚えていない。

榎木譲司はM大学経済学部3年でテニスサークルに所属。

彼女こと田辺紫は同じ大学の文学部1年でテニスサークルの新入部員だった。

テニスサークルの部員数は学内一だったし、特に譲司目当ての女子部員の入部は多かった。多くの女子部員に混じって目立たない、紫の存在に気づいたのは5月に入ってからだと思う。

譲司の周りにつきまとう女子。遠くから眺める女子。挨拶すると自然に仲良くなれる女子。

少なくとも譲司に対して女子は皆好意的だった。そんななか紫だけはいつも譲司から離れた所にいた。

目を向けない。近づかない。挨拶すら許さない距離感。

譲司からなにか近づこうとこころみたが、そのたびにさりげなく避けられた。

人見知り、男嫌い。そんな理由で避けられるなら納得はできた。

しかし遠くから観察する限り、紫は他のサークル仲間とは男女とわずそれなりに仲良くしていた。特別友達も作らず、仲の悪い相手もない。

それでも譲司には挨拶すらしないのに、他の人間だと、楽しみに笑顔を浮かべて話していた。

その笑顔をむけて欲しい。ただ一言軽く挨拶程度してみたい。なぜそんな簡単な事ができないのか。

歯がゆかった。

そんな時、運命の事件は起こった。

鈴木はサークル仲間でも評判の悪い男だった。女好きだがもてない。その鬱憤をぶつけるように、セクハラ行為を繰り返してた。

ギリギリ犯罪にならないレベルで、文句を言わないような女の子ばかりを狙った悪質な行為。まわりも時々軽く注意するぐらいで何もできない。

その鈴木が次にターゲットにしたのが紫だった。

「テニス教えてあげるよ」

先輩指導という名目のセクハラ。

「グリップが違っただよ」

そっいいながらベタベタと彼女の両手を握る。

「フォームチエックするね」

と腰やら背中を嫌らしく撫でる。

「スイングはこうだよ」

などと背中から抱きつくように体を密着させる。

彼女も当然嫌がってたが、先輩という事で無碍にもできず遠まわしに逃げていた。鈴木は彼女を逃すまいと、しつこくつきまとう。

周りのサークル仲間もみんな鈴木のセクハラに気づいていたのに誰も助けようとしなかった。

彼女も誰かに助けを求めるような視線すら見せなかった。

誰とも特別に親しくしてなかったとはいえ、なぜ誰も助けようとしらない！なぜ誰にも助けを求めない。

譲司の怒りが頂点に達して、その時何にも考えずに言ってしまった。

「その手を離せ！彼女は俺のものだ」
そして物語はプロローグに繋がる

その後の話と第1ラウンド

『柁木讓司俺のもの発言』の噂は翌日には大学中に広まった。

そして紫は多くの女子の敵になった。

ほとんどは無視・仲間外れ程度の敵意だったが、過激な一部の人間は小中学生レベルの陰湿ないじめをしているらしい。

もちろん讓司の目の前でいじめをするバカはいないので周りからの噂だが。彼女はいじめを華麗にスルーして、今までと変わることなく大学に通っているようだ。

いじめに耐えるけなげな姿に男子の隠れファンが増殖。

今の所お互い牽制しあっているが、中には抜け駆けする勇者もいて、ことごとく玉砕してららしい。

勇者達は何も語らないので何があったかは推測にすぎないが、あの腹黒い彼女の事だからひどい断り方をしてるのだろう。

讓司も機会をうかがってたが、二人きりになるチャンスはなかなかめぐってこなかった。

噂の二人が人前で会話するなど火に油を注ぐようなもの。それがわかっていたから我慢はしたのだ。

そして事件から1週間後チャンスは訪れた。

学内の図書館の片隅。本棚に埋もれるように置かれた小さな椅子と机の閲覧スペース。そこで紫は一人本を読んでいた。

本棚に隠れて他の人間からは見えない。

チャンスだ！と讓司の心は早鐘のように鳴り響いた。

紫はまだ讓司の存在に気づいてないようで、目の前の本を読みふ

けつてた。夢みるようなとろけそうな笑顔。

サークル仲間達に見せる可憐な笑顔以上に魅力的だった。多分彼女の心からの笑顔なのだろう。

サークル仲間達に見せていた笑顔など、ただの愛想笑いだ。そんなものを欲しがった自分が悔しい。

「楽しそうに本を読んでいるね」

そう言いながら、ゆっくりと近づいて向かい合わせの席に座った。紫は本から顔をあげたが、その時には張り付いたような愛想笑いが浮かんでいた。

「榎木先輩こんにちは」

余裕の笑顔だ。彼女にまったく隙は感じられなかった

「この前は申し訳ない事をした。俺のせいで田辺さんひどいめにあつてるんだつて？本当にごめん」

「先輩は私を助けようとしただけじゃないですか。先輩は悪くないですよ」

口ではしおらしいこと言ってみせても、背後に漂うオーラは『お前のせいだ』とありありと語っている。

女は怖いなあ。

「でも、軽い気持ちであんな事言ったんじゃないんだ。俺と本気でつきあわないか？」

公認彼女になれば堂々と彼女を庇えるし、彼女を屈服させたいというほの暗い欲望もあった。

紫は愛想笑いをやめて、探るような試すような無表情になった。

「お気持ちは嬉しいですが、私結婚を前提にしたお付き合いしかない主義なんです。先輩にその覚悟はありますか？」

結婚の2文字を突きつけられて、思わず酢を飲んだような顔をしてしまった。

まだ学生で20歳だぞ。学園一のプレーボーイでまだまだ女の子と遊びたい。しかも会社経営している家業を思えば結婚は政略が当たり前だ。

色々な考えが頭をよぎって、しばらく思考停止してしまった。落ち着け自分。

男女の恋愛駆け引きにおいて、男が口約束で「いつか結婚しよう」とか言つてのらりくらりとかわすなどよくある事。腹をくくってここは口約束に乗ったふりをしよう。

「軽い気持ちじゃないって言っただろ。もちろん将来的には結婚も考えて真面目に付き合おうよ」

将来的にはであって特に期限をもつけない事が重要だ。

彼女は薄笑いを浮かべた。まるで釣り人がたらしめた糸に魚が引っかかったように。

そして紫はバックから折り畳まれた一枚の紙を取り出して、俺の前で開いて見せた。

「ではこちらにご記入をお願いします」

それは婚姻届だった。

しかも妻の欄はすでに署名捺印済み。

「……」

ぶっ飛びすぎてて、何も反応できずに固まってしまった。

「判子今ないですよね？念のため先輩の判子用意してあります。」

柗木『って三文判で普通に売ってないから彫ってもらったんですよ』

ニコニコ愛想笑いを浮かべながら、恐ろしい言葉を続ける。つまりこの場で署名捺印しろと？

「先輩の記入が終わりましたら、私が今日中に役所に届けてきますので」

考えておくと行って書類を預かるのもダメというわけか。

へビーな攻撃にリタイア寸前だったが、なんとかかななしのプライドをかき集めてささやかな反撃を試みる。

「結婚って家とかの問題もあるし、そんな簡単に進めていいものじゃないよね。親御さんに挨拶とか…」

「私の保護者の同意は得てます。未成年ですから。ほら婚姻届の同意欄にも記入あるでしょう？」

嘘だ！確かに記入はあったが、どう見ても彼女の筆跡と同じだ。

まともに会話したのが今日初めてなんて男と結婚なんて、親は普通納得しないぞ。

「先輩は成人ですから親の同意はいらないですよね。私への気持ち
が本当だっというなら覚悟見せてください」

この女：平然と公文書偽造なんて犯罪してるあたり、初めから結婚なんてするきないんだろうな……

だからといって署名捺印なんてしたら、これをネタに今後脅されかねない。

「ごめん。やっぱり即答できないから、考えさせて……」

そう言い残して、その場から逃げるので精一杯だった。

恋の第1ラウンドはいきなりへビーな先制パンチで、ダウン寸前ラウンド終了まで立ってるだけで精一杯だった。

二人の恋愛バトルはまだまだ続く。

第2ラウンドは慎重に

譲司は数日迷った。彼女への恋愛攻撃を止めるべきかどうか。しかしかかつてない高いハードルにプレイボーイ魂が疼く。

それに彼女はしばらく観察してても、やっぱり一人で、それをまったく気にも止めてなかった。

それが譲司には許せなかった。

最初にひどいめにあったので次は慎重に行こう。

昼休み大学の敷地内。人気のない広場の片隅にあるベンチで、彼女は一人お弁当を食べていた。

譲司が近づくと、食べ終わってもないのに、弁当をしまつて腰を浮かせた。

「話があるんだ。食べながらいいから聞いてくれないか？」

紫は渋々という感じに、無言でお弁当をあげはじめた。

まるで野良猫のようにむき出しの警戒心で、愛想笑いもしない。

「色々考えたんだけど、恋愛や結婚を考えるにはお互い知らなさすぎると思うんだ」

「そうですね。とまったく気持ちのこもってない、相づち。

「だからまずは友達にならないか？」

「いいですよ」

即答で了承されると思ってもなかったのうろたえた。

しかし『まずはお友達作戦』はここからが本番だ。

「じゃあまずはメルアド交換から……」

「無理です」

今度は間髪いれずに拒否か。

「……なんで？ケータイ持ってない？」

「ありますよ」

彼女はバックの中から携帯をとり出した。

ストレートタイプのコンパクトなデザイン。色もポップで可愛らしい。しかし普通のケータイに比べて妙にボタンが少ない。

「キッズ携帯なんです。子供をネット犯罪から守るため、メール機能なし。電話もあらかじめ保護者が登録したアドレス帳からしかかけられません」

「……なんで大学生なのにキッズ携帯？」

ほんのわずかな間、紫の表情が曇った気がした。しかしすぐいつもの愛想笑いモードに切り替わった。

「私が小6の時両親が買ってくれました。それからずっと使ってます」

小学生の子供ならキッズ携帯も当然だが、それを6年以上も使い続けるか！

家庭の事情は色々面倒だ。深く突っ込むのは止めよう。

「じゃあ友達とはどうやって連絡とるの？」

「……そうですね……お手紙でしょうか？」

「文通！」

なんて今時古風な……しかも毎日通う大学内の友人宛てに手紙つて。

しかし考えようによってはチャンスだ。手紙を送るには住所が必要だ。自宅住所がわかれば遊びに行くことも可能ではないか。

「じゃあ手紙書くから住所教えて」

彼女はレポート用紙を取り出して、スラスラと書き初めた。彼女の字は年のわりに落ち着いた美しい文字だ。

多分、他人におばあちゃんが書いたと言っても誰も疑わないんだろうな。

受け取った住所を眺めて弾んだ声で話しかけた。

「ずいぶん遠くから通ってるんだね」

「私書箱ですから、そこには住んでません」

「……私書箱？懸賞とかでよくあるヤツ？」

「ええ。企業が使う場合が多いですが、個人でも利用可能です。でも郵便局の私書箱は制約が多くて面倒なので、私は民営の私設私書箱を利用してます。これだと一見普通の住所に見えて便利ですよ」
彼女は完璧すぎた。付け入る隙がみじんもねえ。

「……うん……じゃあ手紙送るね」

力なく返事してその場を立ち去った。

しかし俺の長所は立ち直りの早さとしぶとさだ。

その日のうちにレターセットを買いこんで、徹夜で手紙を書いた。人に手紙書いた事ないから書き方とか、よくわからないけど、こういう事は気持ちと速さが重要だよな。うん。

勢い余って便箋3枚にもなる長文書いちゃったけど。

手紙をポストに投函して数日。毎日自宅の玄関でうろろしながら待ち続け、待ちに待った手紙がやっと届いた。

思いつきり事務用茶封筒で、色気のなさに若干引いたけど。返事くれたんだし期待してもいいんじゃないか。

自室に戻ってワクワクしながら封をあけた。便箋が3枚入っているようだ。

良かった。一言でずっぱり切られる覚悟だったけど。彼女も長文書いてくれたんだと喜んでいられたのはつかの間だった。

「……うそ〜！」

便箋は讓司が紫に送った手紙だった。その上から赤ペンで誤字脱字や文法ミス、手紙のマナーなどびっちり添削つき。最後には桜のデザインの『もっと頑張りましょう』判子つき。

負けてたまるか。

こうして第2ラウンドも地味にぼこられてダウン寸前だった讓司であった。

二人の恋愛バトルはまだ続く。

反撃の第3ラウンド

マメにお手紙アタックは続けていたが、いつこうに二人の中は進展しなかった。

そろそろ新しい作戦を考えなければと思いつつも、彼女に付け入る隙はみじんもない。

半ばあきらめかけていたところ、突然チャンスはやってきた。

ひともまばらな学生食堂の片隅に彼女がいた。

遠目には何かレポート用紙のような物を、食い入るように見つめているようだ。

図書館でとろけるような笑顔で、本を読んでいたのとは正反対の青ざめて余裕のない様子は珍しい。

レポート用紙に集中していたせいか、譲司が間近に近づいてもまったく気づいていなかった。

譲司は後ろからレポート用紙を覗く。それは英語のレポートだったが、あまりにひどい点数に思わず絶句してしまった。

さすがに真後ろに立たれて、紫も気づいた。慌ててレポート用紙を隠したが、恥ずかしそうに頬を染める表情が、いつもと違ってごく普通の女の子に見える。

可愛い！

予想外の反応に感動しつつ、譲司はやっと見つけた彼女の弱点に付け入ることにした。

向かいの席に腰掛けて、余裕の表情で話しかけた。

「英語苦手なんだ」

「……………」
彼女は悔しげな表情を浮かべながら、俯いてた。

「俺が英語教えてあげようか？」

びつくりしながら彼女は顔をあげた。いつもよりぎこちない愛想
笑いを浮かべながら冷たく切り返す。

「結構です」

「俺、田辺さんに手紙で添削してもらったようになってから、文章書
くの上達したんだよね。おかげで課題のレポート評価がよくなった
よ」

「それが何か？」

わざと間を作って、意地悪な笑顔を浮かべてみた。

「今度は俺が協力するよ。お互い助けあうのが友達だね」

「……………」

目で人を殺せるなら、今俺死んでたかも。それぐらい彼女の目は
殺気だった。

「俺母親がイギリス人のハーフで、親の仕事の都合で、子供の頃イ
ギリスに住んでた帰国子女だから、ネイティブな英語話せるよ」

「英語がうまいからって人に教えられるとは限りませんよ」

「高校生の家庭教師した事あるけど、その子メキメキ英語上達して、
志望校のランク一つ上がったよ」

「それにその成績のままじゃ単位ヤバいんじゃない？」

彼女は渋柿をうつかり口にしたように、ものすごい嫌な顔をして
しばらく黙っていた。

俺の誘いにのるかどうか。プライドと成績アップを天秤にかけて
相当悩んでいたようだ。

そして長い長いちんもくの後、無理やりしほりだすように小さく声をだした。

「よろしくお願いします」

俺は心の中でガッツポーズをあげた。

それからすぐに、2人のスケジュールを確認して、個人レッスンの日程を組んだ。

下準備にまたも徹夜だったが、今回は得意分野で攻められる。彼女が悔しがる姿を想像してにんまりしてしまった。

今まで好意のある女性をいじめて喜ぶ趣味なかったんだけど、すでに散々精神攻撃を受けてちょっとおかしくなってるのかな？

レッスン初日。

場所は大学近くのコーヒーショップの片隅だ。

「まずは実力確認のためテストするね」

俺はパソコンで作った自作のテストを彼女に突きつける。

彼女も大人しくシャープペンシル片手にテストに取りかかった…

…はずだったが…右手を持ち上げたまま固まってしまった。

目はテストの隅々まで見るように動いているが、まったく手は動いてなかった。

しばらくして地の底から這うような重く暗い声が出た。

「……わかりません……」

つまり、全問手がでないくらいお手上げって事ね。いちよう高校生レベルで作ったテストなんだけどな……

「じゃあ次はこっち」

念のため作っておいたもう一つのテストを取り出す。

今度は彼女もちよっとほっとした表情で、テストに取りかかったのだが……5問で手が止まった。後はさっきと同じだ。

「……わかりません……」

ちよつとまで、これ中学レベルのテストだぞ。しかも回答した5問だって、スペルミスとか文法がおかしかったりで点数は0点だ。

「よくこのレベルでうちの大学受かったよね」

「……高校3年間この大学の英語過去問だけを徹底的にやりました。他の教科でカバーしないとやばいくらいギリギリでしたけど」

でも、受験対策の勉強って身につかないですよねって、最後にボソッと紫がつぶやいた。

つまり山はつて、意味もわからず丸暗記。受験終わったら綺麗さっぱり忘れたと。

俺も溜め息つきたい。先は長そうだ。

「じゃあ今日の課題。これ貸すからつきまでに暗記するくらい聞いてきてね」

差し出したのはMP3プレイヤー。紫が戸惑っていたので、イヤホンつけさせて録音していた音を再生した。

彼女が青ざめた表情のまま固まった。

それは俺が英文を読み上げるお手製学習教材だ。

「英語はまず耳からなれて覚えるのが一番だからね。いちようその英文と日本語訳の文章もあげるけど、できるだけみないで勉強してね」

「次のレッスンでその英文からテストするからよくよく聞く事」

彼女はあからさまに嫌な顔した。

俺の声を何度も聞きこめって言ってるのだから、かなりの精神的ダメージを与えられそうだ。

心の中で高笑いをあげたら、うっかり顔にもでたようで、彼女に

また目で殺せそうな殺意をこめて睨まれた。

第3ラウンドにして初の反撃成功。

先のわからなくなった恋愛バトルは、ついに運命の第4ラウンドに突入する。

閑話休題 個人レッスンとバツゲーム（前書き）

キモイ話要注意です。

前話の第3ラウンドの続きなんですが、予想外に第3ラウンドが長引いたのと、ダメな人もいそうなネタだったのでわけました。

この話読まずに先進んでも、話は繋がるので、ヤバいと思ったら読むのをすぐにやめましょう。

キモイネタを使ったギャグのつもりなので、笑っていただけたら嬉しいです。

閑話休題 個人レッスンとバツゲーム

英語の個人レッスンを初めてすぐわかった事だが、紫は英語に関わる事すべてを拒否する。いわば英語恐怖症だ。

町中のアルファベット単語の看板などは存在否定。テレビに外国人タレントが一瞬映っただけで目をそらす。

よく現代日本で生きてこれたものだ。

単位のために無理やり勉強しているものの、かなり嫌々だ。

「また課題やってこなかったな」

課題を元にしたテストの採点をしながら、横目で睨んだ。

「なんで毎回例文が恋愛小説なんですか？意味わからなくても、甘ったるい先輩の朗読に砂吐きそうです」

彼女も負けじと睨み返してきた。最近紫は俺の前では時々猫かぶり止めて辛辣な言葉を言うようになった。

仲良くなつたと喜びたいが、痛い皮肉に心が折れる事もしばしばだ。

「わかった。今度課題サボってテストの点数悪かったらバツゲームするから」

「バツゲームとか言ってセクハラとかしないでくださいね」

真顔で釘をさしてくる。冗談じゃなく、俺がそんな卑怯者だと思われているらしい。

不愉快だ。

「犯罪行為はしない。その変わり覚悟してね」

意地の悪い笑顔を作って彼女にプレッシャーをかけてみた。

しかし次の課題も彼女は真面目にやっつけてこなかった。

「さて約束通りバツゲームだ」

人けのない夕暮れ時の公園。彼女が叫んでも誰も助けはこないだろ。

「なんでこんな所なんですか？」

警戒心むきだしの紫が吠えた。

「田辺さんが叫んでも困らない所だから」

「やっぱり私が叫ぶようなセクハラするんですね」

警戒心マックスで噛みつかれそうだ。

「神に誓ってもいいけど、この場所で自分から田辺さんの体に触れ
もしないし、犯罪行為もしない」

「……」

「じゃあバツゲーム初めようか」

「この話は友人から聞いた実話。それは真夏の暑い頃だった」

「怪談ですか？私わりとそういうの苦手じゃないですよ」

彼女がほっとしたように余裕の表情を浮かべた。余裕でいられるのも今のうちだ。

「友人は口をあけたメンツユをキッチンの片隅に放置してしまったんだ」

彼女は眉をひそめた。怪談にメンツユなど普通関係しない。

「ふたは閉めてただけだね。暑さで中身の空気が膨張して、勝手にふたが開いてしまったんだ」

ますますわからないと彼女の顔は語っていた。

「メンツユって糖分が入ってるだろ？甘い匂いに誘われるように集まってきたやつなんだよね」

先の展開がやっつと読めてきたようだ。彼女の顔がみるみる青ざめる。

「何も知らない友人が、メンツユをお椀に入れたら……コバエがびっしり……」

「嫌あああ！」

予想通りに紫は叫んで、慌てて俺の口を手でふさいだ。

肩で息しながら、紫は必死に落ち着こうとしていた。俺は口をふさぐ手を無理やりひっぺがえして、爆笑した。

「よくそんな気持ちの悪い話できますね」

「他にも色々ネタあるよ？次課題やってこなかったらまたバツゲームだからね」

彼女はむちゃくちゃ嫌そうな顔した。

その後の紫は毎回必死で課題をこなし、今のところ2度目のバツゲームは行われていない。

閑話休題 個人レッスンとバツゲーム（後書き）

バツゲームの話は実話です。

夏って怖いですね。皆さん気をつけてください。

長い第4ラウンドのはじまり

いつものように、二人で英語レッスンの後。力つきてぐったりする紫の隙をつくように切り出した。

「相談があるんだけど」

彼女は疲れた顔を引き締めて、警戒レベルをあげた。

「テニスサークルのあの事件の時に、田辺さんが抱きついた男子学生の事覚えてる？」

彼女はさっぱり記憶になかったらしく、首を振った。

「2年の真宮拓海まみや・たくみっていうんだけどね。実はあの事件がきっかけで困った事になっててね……」

真宮には同じサークル内に好きな女の子がいた。しかも相手も好意を持っていそうで、二人はゆっくり距離を縮めてそろそろ告白かと思っていたという。

そんな時にあの事件だ。震える紫が胸に抱きついて、しかたなく庇ったが、同じサークル内なので彼女が見ていた。

彼女が真宮と紫の仲を誤解して、それから二人はギクシャクしたまま、まだ仲直りしてないらしい。

「真宮は関係ないのにとぼっちりだよ。彼女とうまくいかないって愚痴こぼしててさ。俺達にも責任あるよね」

「……人の恋愛に手出しなんて簡単にできません……しかも彼女さん私と真宮先輩の仲を疑ってるんですよね？」

紫の言う事は正論として正しい。譲司も本気で真宮達の事をどう

「こうしようなんて思ってない。
そうこれは口実だ。」

「二人が仲直りするきっかけが作れないかと思ってね。それにずっと気にかかっている事がもう一つあるんだ」

紫はやっぱり何か裏があると疑いの目で俺を見つめていた。

「田辺さん、俺のせいで学校でいじめ受けてるよね。しかも服とか持ち物とかにも被害がある。その損害賠償させてほしいんだ」

紫の眉がピクリと動いて、うすら笑いを浮かべた。喜んでいるのか、バカにしてるのか微妙な所だ。

「俺がかつてに選んで買ってきても、高級ブランドすぎるとか趣味じゃないとかなりそうだし。かといって金で解決とかそんな誠意のない事したくないんだよね」

「……」

「だから一緒に買いにいかない？」

「その話が先ほどの真宮先輩の話とどう繋がるんですか？」

冷静な突っ込みが入る。一緒に買い物などデートのような事、まともに話したら拒否されるのはわかっていた。

「真宮達に事情を話して、俺と田辺さん二人だと、田辺さんが嫌がるから真宮達二人も一緒にきてくれないか？と頼む」

つまり損害賠償を口実に、真宮達の仲直りを口実に、wデートに持ち込む2段作戦だ。

「嫌です」

まあ拒否されるとは思っていた。でも損害賠償はすぐに拒否しなかったから、紫もしてほしいんだろうな。

「ショッピングの後に俺お勧めの紅茶専門店でお茶とお菓子のおごりつきでどう？」

「またしても紫の眉がピクリと動く。どうやらこちらも心動かされたようだ。」

「1年女子の子に聞いたんだよね。田辺さんがかなりの紅茶好きだつて事」

学園一のプレイボーイは伊達じゃない。女子ネットワークからの情報収集はお手のものだ。

「かなりの紅茶好きですから、中途半端な店ならただでも飲みたくないですよ」

「俺の母親イギリス人で紅茶もイギリス伝統菓子好きだったし。舌の肥えた俺が味は保証するよ」

紫がゴクリとのをならした。かなりつれてきた。後ひと押し。

「今ならまだバラが咲いてる時期だよ。その紅茶専門店の庭、バラが綺麗なんだ……」

紅茶を飲みながらバラを愛でる。実に優雅で乙女チックだ。紫が園芸に興味あるのも、もちろんリサーチ済みだ。

紫も簡単に頷かなかったが、結局最後には首を縦に振った。

『Wデート作戦』の開始だ。

物語は起承転結でいうなら転。つまり波乱の幕開けである。

華麗なる勝負服

今日の予定はショッピングモールで買い物後、紅茶専門店でお茶だ。

どちらも駅から遠いため、レンタカーを借りてきた。

なぜ家の車を使わずにレンタカーにしたかというところ、紫の機嫌取りだ。

紫の家は経済的に不自由らしく、そのせいか逆に金持ちへの反感があるようなのだ。讓司が嫌われている原因の一つだと思われる。

家の車のような高級外車できたら、『このブルジョワめ!』と睨まれる。たぶん。

だからわざわざレンタカーで国産小型の一番地味な車を選んだ。4人を運ぶだけならそれで十分だ。

待ち合わせの駅前ロータリーはすいていて、多少止めておいても問題なさそうだった。安全運転で止めて車を降りようとした所、近づいてくる人に気づいた。

真宮拓海だ。

小柄な体で讓司に向かって一目散にかけてくる。犬っぽいよなこいつ。

顔も童顔だし、くるくるまわる表情とキラキラした瞳はまるでチワワだ。

女の子だったら懐かれて嬉しいけど男だしな……とつい心の中でため息をつく。だって他のメンバーは女子2人なのに、一番に嬉しそうに駆け寄ってくるのが男って……せつない。

俺は車を降りて、駆け寄ってくる後輩に軽く挨拶した。

「おはようございます。先輩」

律儀に深々とお辞儀つき。着ていたパーカーのフードがずり落ちて、前が見えなくなつて慌てている。

まごうことなき天然だ。男が天然で可愛くてどうする。

「他の子達は？」

「あつちに……」

まだフードと格闘しながら、首を回した。

真宮の想い人、佐倉美咲だった。

美咲は真宮と正反対にすらりとしたモデルのような長身だ。すつきりとしたショートヘアの髪で切れ長の瞳ときりりと引き締まった口元が凛々しい。

確か中学高校と女子校育ちと聞いているが、さぞかし同性にモテただろう。

真宮と並ぶとまるきり男女逆転カップルだ。

今日の彼女の服装は、Gジャンに黒のキャミソール（小さくワンポイントトリボンつき）。下はかなり短いショートパンツにミュールももちろん生足。

じろじろ見ては失礼だが、つい目がいつてしまいそうなほど、長くて綺麗な美脚だ。

ボーイッシュにまとめてきたが、ちゃんと自分の売りがわかってやってる勝負服だ。

まあ肝心の真宮が天然だから、気付いているのかわからないが。

「田辺さんは？」

やっぱりオシャレした女の子はいい。紫も可愛い服だといいなと期待して、あたりを見回した。

見つけた瞬間目をそらしたくなるほど、強烈なインパクトだった。

Tシャツ、ジーンズ、スニーカー。地味だ。しかもただものではない。

Tシャツのプリントは某有名キャラのバッタモノ。しかも何度も洗ったせいか、襟周りがクタクタだし、他の色物と一緒に洗濯しちやったみたいなの、まだらにあわいオレンジ色。

ジーンズはもとも安物のやぼったいシルエットのジーンズを、やっぱり長年使い込んだせいかまったくオシャレでなく色落ちしてサイズも伸びきってユルユルだ。

そしてスニーカーは……もともとそうとう履きつぶして、クタクタな上に、ペンキでもかけられたような感じ。たぶん本当にいじめでペンキかけられた被害品だろう。痛々しい。

頑張つてオシャレしたのが伝わるのは、左手首の幅広のブレスレットのみ。それもプラスチック製で子供のおもちゃのような安っぽいものだったが。

そして極めつけはバック。大きな紙袋ひとつだ。

しかもこれがファッションブランドのオシャレな紙袋ならまだいいが、某有名チェーンスーパーの紙袋で、しかも補強のためのガムテープつき。

これは狙ってやってるとしか思えない。大学の時の私服の方がまだましだ。

逆勝負服か？むしろ絶対デートだと思わせないための、本物の勝負服かもしれない。

引きつった笑みを浮かべて固まる俺。真宮と美咲だって紫に微妙に目をあわせないようにしてるし。

まるでガッツポーズでもしそうなほど、嬉しそうな笑顔を浮かべ

た紫。

やっぱりわざとだな。おまえ！

しかしあえて口ではつつこまず、みんなを車に誘導した。

「じゃあ助手席、真宮で後部座席女子2人ね」

「ちよつと！待ってください。先輩」

真宮が慌てて抗議した。まあWデートならカップルで隣になるものだが、紫が素直に助手席に座るわけない。美咲を助手席に座らせるわけにはいかないから、無難に真宮だろう。

「行きは俺が運転するけど、帰りは真宮変われ！だから助手席で道覚える」

適当な言い訳で真宮を軽くあしらって、車に乗り込んだ。

運転に集中しながら、時々ミラーで後部座席の様子を確認していた。

女子2人は気まずい空気で、目をそらしていた。まあ美咲は真宮と紫の仲を疑っててライバルと思ってるんだろうから、難しいのかな……

先に動いたのは紫だった。紙袋から何か取り出して、美咲に渡そうとしていた。

「美味しいよ」

おお！スイーツお裾分け作戦か。女子のコミュニケーションの定番だな……と思って、紫が渡そうとした物を見た瞬間、うっかりハンドルが滑って車が軽く蛇行した。

「先輩危ないですよ！運転に集中してください」

隣の真宮からまっとうな突っ込みが入る。でもあれ……鼈甲飴だ

よね。女子学生のスイーツお裾分けじゃなくて、おばあちゃんのお裾分けになってるよ。

いかにいかに。運転に集中だ。

真宮に道案内をしながら、極力後部座席をみないようにしていた。もうそろそろショッピングモールかなという頃、ちらつと後部座席を確認したら、いつの間にか2人が仲良さそうに話をしていた。うまくいって良かった。と思ったら紫の視線を感じた。何か企んでいそうな怪しい笑顔だ。

ヤバい目をそらさなければ、と思っただが、その前に紫は紙袋から水筒をとりだした。今時のオシャレでエコなデザインタンブラーではない。昔懐かしの水筒だ。

取り外した蓋をコップ代わりに、水筒の中身を注いだ。

それを目にした瞬間、盛大にハンドルが滑って、先ほど以上に大きく車が蛇行した。

「先輩本当に危ないですから、前見て」

いや待て、俺に変わって紫に突っ込み入れてくれ。なんだあの沼からすくってきたような、ドドメ色の液体は。

紫は平気な顔して飲んでいるが、中身が、気になる。見た目の凶悪さで言うなら青汁よりも恐ろしい。

しかし俺はドドメ色ドリンクの謎をとけぬまま、目的地へたどり着いてしまった。

華麗なる勝負服（後書き）

2011/9/22改訂

財布でショッピング

まずはショッピングモールで昼食後、紫の買い物は始まったんだが……

「田辺さんこつちも絶対似合うから、着てみて〜」

「佐倉さん、もう勘弁してください……」

紫が音をあげるのも無理はなかった。ショッピングモールのほとんどの店を覗いては、次々と試着を要求する美咲に、紫はお得意の愛想笑いが引きつっている。

紫。被ってる猫が脱げかかっているぞ〜と言ってあげたい。

「美咲ちゃん楽しそう」

なんともピントのずれた事言ってるのは、真宮だ。

大量の荷物を持たされて、小柄な体をユラユラさせながら、顔はヘラヘラ笑ってる。

「うん。このミュールもよく似合ってる。サイズも問題なし。お買い上げ決定」

かつてに断言する美咲。仄暗い笑顔を浮かべて俺に近づいてくる紫。

「榎木先輩。お願いします」

上目使いぶりっこモードの紫に、悪寒がはしった。

「うん。買ってくるね」

さっさと退散すべく背を向けると、背後からボソツと声が聞こえた。

「財布先輩がんばー！」

男以前に人として扱われてないなんて。さすがに腹が立って何か

言ってやるつと振り向いたら、いきなり紙の束を突きつけられた。手書きの細かい文字でびっちり書き込まれたのは、服やバックなどの名と数字。

「いじめ被害で使用不能になった品物とその金額のリストです。ついでに精神的苦痛に対する慰謝料も書き出しておきました」

ひとつひとつの値段は慎ましかかな生活をしている紫らしいのだが、はんばない量を一円単位で余すことなく書き込まれたリストに、執念を超えた恐ろしさを感じる。

「私からの提示金額は以上ですが、申し訳ないという先輩のお気持ちでさらに上乘せでもいいですよ。気持ちはプライスレスですよね」
プライスレスの使い方間違ってるし。しかも愛想笑いのまま、金出せおらあのだす黒いオーラを漂わせて脅された。

「最後の良心で先輩の敬称だけは残してあげます。財布先輩」
つまりお前の金にしか興味ねえんだよって事だね。

今日の紫はかなりの戦闘モードだ。全力で俺のやる気をそいで、二度と近づいてこないようにつぶしにきている。

紫が金持ちに嫉妬するのは反対に、俺は金目当てで近づく人間を虫以下ぐらいに軽蔑している。

だからこそこの財布扱いは今までで一番キツイ攻撃だった。

本人も嫌ってくれとばかりにこんな嫌がらせしてくるのだ、こんな女嫌いになってしまえばいい。

だけど何故だろう。彼女を諦められない。

なかなか落ちない女に意地になってるだけなら、軽蔑するような事をしてきたんだ。止めてしまえばいい。

でもきつと紫への気持ちは、単に意地の張り合いだけじゃない。

確実に俺の心に根を張り、蝕み、苦しませる。

もう引き換えせない所までできてしまったのだ。

ショッピングモール内の店を見尽くして買い物はやっと終わった。
荷物持ちの男二人係りでも、抱えきれないほどだ。

「車とはいえ、軽だからこんなに載るかな？」

俺がぼやくと、美咲は自信満々に言い放った。

「トランクあるし、後部座席女子二人でゆったりだから詰め込めるし、助手席の真宮先輩もコンパクトだから大丈夫です」

男なのにコンパクトと言い切られ、しかも当たっているため真宮は盛大に落ち込んでいた。

「じゃあ次はお着替えしましょ」

爛々とした目で闘志を燃やす美咲に、紫は後ずさりしたが、体格差でみごとに捕まった。

「じゃあ商品は全部置いてってください。待ち合わせはトイレ前で」
「了解」

思わず敬礼したくなる勢いで、同意した。あの悲惨な勝負服の紫を変えてもらえるならありがたい。

「行くぞ。真宮」

「えっ。待つてなくていいんですか？」

「服類だけじゃなく、化粧品や整髪料さらには持ち運び用のコテまで買ってたからな。まあ軽く一時間はかかるんじゃないか？」
「……」

天然な上に女に疎い真宮では、まったく理解不能だ。

「だから時間つぶしに行こうぜ」

普段男っぽい服装だが、美咲の選ぶ服のセンスは間違いなかった。さすが女子高育ち。出来上がりが楽しみだ。

ひまつぶし

「先輩どこいきます?」

重い荷物から解放されて、真宮は浮かれたように弾んでいた。俺は盛大に溜め息をついた。

「お前今日何しに来たわけ?俺と仲良く遊ぶんじゃなくて、美咲ちゃんと仲直りのためだろ」

真宮はしまったとつぶやいた。どうやら本気で忘れていたらしい。

「おまえなあ……」

「いいんです。美咲ちゃん最近ずっと暗い顔してたけど、今日はすごい楽しそうにしてたから」

真宮は嬉しそうな寂しそうな複雑な笑顔をしていた。いつも単純明快なこいつには珍しい。

俺は真宮の頭をポンと叩いて、笑った。

「じゃあこの時間を利用して、美咲ちゃんへのプレゼント買っておけ。後でこっそり渡せば、おまえの株もあがるぞ」

「ええー!……プ、プレゼントなんて、今までしたことないから……何あげたらいいのか……その前に突然渡されて、美咲ちゃん迷惑だった……」

「気になる男にプレゼント渡されて、喜ばない女はいない」

きっぱりと言い切った俺に、真宮はしがみついた。

「先輩!何買ったらいいか教えてください」

「お前が選ぶ事に意味があるんだろ」

真宮を振りほどこうとするが、必死にしがみつinaながら、上目使

いでお願ひされてしまった。だから似合うからって男がそんな事するな！

「……高すぎるプレゼントは気を使うからダメ。美咲ちゃんも女の子なんだから、可愛い小物とかいいんじゃないか」

渋々俺は答えた。

「行ってきます」

一目散に手近な雑貨店に駆け込む真宮。女の子達ばかりの可愛い店に男一人でつつこむとは、なかなかチャレンジャーだ。

思いつきり馴染んでいるんだが。

「先輩！これなんてどうですか？」

真宮が選んだのはマスコットつき、携帯ストラップ。

しかもキモカワイイ系を狙ったつもりがみごとに外れてて、グロキモイ感じた。

いっちゃった目と口から血を吐いたクマらしきキャラで、腹からリアルな内臓がはみだしている。

メチャクチャ売れ残ってて、半額セールしているし。

これはさすがにプレゼントされて困るだろう。しかも携帯ストラップだと、つけないと悪い気がするし、つけたら周りから趣味悪いとおもわれるし。

「……こっちのほうがいいと思うけど」

手近にあった無難なクマのぬいぐるみを指差してみる。

「ええー。普通すぎてつまらないですよ。こっちの方が可愛いし」
そのグロキモイキャラを可愛いというセンスは異常だ。

美咲ちゃんのために頑張ったが、結局あのグロキモイキャラのぬ

いぐるみで妥協した。

まあ携帯ストラップよりはましだろう。押し入れの奥にでも突っ込んで放置すればいいんだから。

夢見悪くなりそうな気持ち悪さだけど。

プレゼントのラッピングしてもらう間、手近な店を見渡して気になる物を見つけた。

「真宮悪い。適当に時間潰して、先行つてて」

真宮は笑顔で頷いて、そこで俺達は別れた。

俺は携帯シヨップで新機種を見ながら、ぼんやり思い出していた。紫の携帯を初めて見て、なんでそんな古い機種使ってるんだ？と聞いた時、僅かに紫は動揺していた。

機種変更するお金がもつたいないとか、いくらでもごまかせたはずなのに。

それが何故だか気になった。

「何かお探しですか？」

シヨップのお姉さんが愛想よく話しかけてきた。営業スマイル以上の下心含みで。

「機種を買いたいわけじゃなくて、古い機種について調べたいんですけど……」

売上に繋がりそうもない相談なのに、お姉さんはむしろやる気満々で乗り出してきた。

「おまかせください。どんな機種かわかりますか？特徴とか」

「6〜7年前に販売していたキッズ携帯なんですけど……」

俺の奇妙な相談にやる気になったお姉さんは、すぐにパソコンで調べ始めた。

しかし情報が少ない上に古過ぎる。お姉さんもまだ働いていないであろう頃の機種だ。なかなか見つからなかった。

苦戦中のお姉さんの様子に気がついたのか、裏から上司らしき中年の男性がでてきた。

「6〜7年前のキッズ携帯？……ああこれじゃないかな？」

さすがベテラン、すぐにパソコンを動かして画像を呼び出した。

その写真は確かに紫が持っていたのと同じだった。

「これです。よくすぐにわかりましたね」

「当社が他社に先駆けて、初めて作ったキッズ携帯だったので覚えてただけです」

俺はすぐに機種名やメーカーなどをメモにとった。帰ったら調べてみよう。

「さすがにこの機種の取扱い説明書とかもつないですよね」

「印刷物はありませんが、電子データのPDF版なら、当社ホームページからダウンロード可能ですよ」

頼もしい言葉に拝みたくなった。

男性はディスプレイの中の携帯を見つめながら、懐かしげに目を細める。

「ワンタッチのヘルプボタンがあって、押すとあらかじめ指定された保護者の携帯にヘルプメールが送られる機能がついてたんです」

「便利ですねぇ」

素直に感心したが、男性は苦笑していた。

「それが実際はあまり役にたたなくて。親がメールに気づかなかつたり、気づいても遠くについて間に合わなかったり」

なるほど、確かに連絡するだけなら、警察にでも繋がった方がいいかもしれない。

「最新機種ですと、警備会社と契約して、ワンタッチで最寄りの警備員が駆けつけるシステムになってます。機種変更されるならオススメですよ」

世間話をしながらさりげなく営業トークに持っていく男性に、うまいなと感心してしまった。

「6年もたつたら、キッズ携帯も卒業ですよ」

「親の立場にたつたら、子供はいつまでも子供で心配のタネですよ」
穏やかに話す男性の顔は、店員ではなく父親の顔になっていた。
きつと子供の事を思い出しているのだろう。

そういえば紫の親ってどんな人だろう。紫そっくりの腹黒だったらやだな。

君の瞳にノックアウト

待ち合わせの女子トイレ前で、期待を胸に待っていた。

「お待たせしました〜」

美咲が上機嫌ででてきた。

「懇親の力作です。って、田辺さん早くでてきなよ」

美咲に無理やり引っ張られて、躓きながら紫がでてきた。

長い黒髪をハーフアップにして、まとめた髪はくるくると遊びがあつて柔らかさそう。

メイクは肌が綺麗なためベースメイクはせずに、アイメイクのみ。眉は美しく整えられ、カーブを描いている。ひかえめなピンク系のアイシャドウ。つけまつげで長く伸びた睫が瞳に影を作る。お人形のように愛らしくなった。

「アイメイクがこんなに可愛いなら、リップグロスとかあるとバランスいいのに」

「柗木先輩もそう思いますか。私もつけようとしたんですけど、これから食事するのに、ベタベタして匂いの強いグロスは絶対やだつて」

非常に紫らしい合理的理由だ。

服装は、リボンやレース付きのシンプルなシルエットの白いワンピース。パフスリーブでも太く見えない二の腕と、スカート下の細い足があらわになって、華奢な紫の魅力が存分にでていた。

小物のバックとミュールもピンク系で纏めたのは、アイシャドウとのバランスか。

ただ気になるのは、さっきの安っぽいブレスレットがそのままだった事だ。

これだけオシャレになったため、よりその安っぽさが悪目立ちする。

「そのブレスレットない方がいいんじゃない？」

「ですよ。でも田辺さん。このブレスレットだけは絶対外さないって言うこと聞いてくれなくて」

そんなに大切なものなのかな？例えば子供の頃の思い出の品とかでも今まで学校で着けているのをみたことない。普段着けたくないほど大事なものなら、むしろ身に着けずに大事にしまったりしないだろうか？

紫が素直に話すとも思えないし、まあいいか。

しかし可愛いなあ。やっぱり女の子は可愛くしてなきゃ。

俺が紫に見とれていると、恥ずかしげに目を伏せた紫がゆっくりと近づき、俺の目の前で顔をあげた。

死んだ魚のようにどろっとした視線で、生ゴミでもみているように不快感に口のはしをまげた。

「先輩キモイ。鼻の下伸びてるし、変態。変質者予備軍。加齢臭がただよいそうなほどオヤジ顔。半径3m以内に近づくな」

本気だ。本気でこんな罵詈雑言を言ってるよ。てか、目が怖い。せめて生きた哺乳類の目に戻ってくれ。

ショッピングモールをでるまで、この視線にさらされて、ノックアウト寸前な譲司だった

車に大量の荷物を積み込み、紅茶専門店にむかう。

紫をいろんな意味で直視できない俺は、運転に集中して後ろはま

まったく見なかった。

「ここだよ」

住宅街の中、木々に囲まれた所にその店があった。

入り口はツルバラのアーチがあり、店の扉までの小道には、色とりどりのバラが咲き乱れている。

「バラの季節ももう終わりかな？見頃を過ぎてしまったのが残念だね」

バラはどれも散り始め、枯れ始めたのもあった。その分甘いバラの濃厚な匂いが漂っている。

「……私、バラは散りかけが一番好きです……」

ポツリと呟いた紫の声に気づいたのは、多分俺だけだと思う。

紫は切なく寂しげな瞳でバラを見つめていた。

今にも壊れてしまいそうな儂げな紫に、心惹かれて近づいた。

「半径3メートル以内に近くなって言ったよね」

またしても死んだ魚の目で俺を見る。

「それだと一緒のテーブルでお茶できないんだけど……」

「財布だけ置いて、離れた席で一人で飲め」

「うわまたでた。金しか興味ない発言。しかもお着替えが不満だったのか、さつきから柄悪いなあ。いつものですます口調じゃなくなってるよ。」

「た、田辺さん……怖い……」

真宮と美咲が震えながら紫を見つめている。

「冗談です」

にっこりいつもの愛想笑いで2人に言う。
さっきの本音だよね。もう誤魔化しても無駄だと思っけど。

君の腫にノックアウト（後書き）

2011/9/22 改訂

恋人達のティータイム 序章

窓際の席に座り、紫は窓の外をぼんやり見ていた。

やっぱり何か紫の様子がおかしい。しかし俺はまた睨まれないように見守るしかなかった。

お菓子はスコーンを予約してたのと、後は真宮達2人に任せた。

2人は甘党で、お菓子の話で盛り上がった。

こっちはほろっっておいて良さそうだな。

「田辺さんお茶どうする？」

メニューを渡しながら声をかけた。目をあけていたのに、びっくりにした顔でこちらを向いた。まるでこの場にいながら遠い世界に行っていたようだ。

「ストレートで2種、スコーン用にミルクティーで2種の4ポットにしようと思うんだけど」

俺の言葉が届いているのかわからないが、紫はお茶のメニューにゆっくりと目を通していった。

真宮達が店員を呼んでお菓子を頼んでいく。

「お飲み物はいかがいたしますか？」

「ダーズリンとウバをストレートで。アッサムとルフナはミルクでお願いします」

紫はわずかに愛想笑いを浮かべながらそう答え、また庭を向いて一人の世界に閉じこもってしまった。

「呪文みたいにスラスラとすごいね」

「真宮先輩。私紅茶あんまり飲んだことないし、よくわからないん

ですけど」

「僕もだよ。2人に任せておこうよ」

とりあえず紅茶の事は棚にあげて、また真宮達はお菓子の話に戻った。

紫はただバラを見ているのではなかった。他のテーブルのお菓子の甘い匂いに、カップがたてる音にいちいち反応している。

店そのものが居心地の悪いような感じで、逃げるように庭ばかりを見ていた。

「この店気に入らない？」

「……雰囲気はいいと思います。味は食べてみないと……」

うわごとのようにそうつぶやいた。かすかに緊張している気がした。

ここに来る前に態度悪かったのって、もしかしてこの店が原因なのかな？

しかし紅茶好きで店に来るのは乗り気だったはずなのに、なぜこんな顔をするのだろうか。

次々と運ばれてくるケーキと紅茶に、真宮達が歓声をあげた所で、やっと紫もこちらをむいた。

俺は紫の分のダーズリンを注いで渡した。紫はゆっくりとカップを持ち上げる。震えて危うげな手つきにハラハラする。顔の近くまできた所でピタリと止めた。

その時の紫の表情をなんと表現したらいいのかわからない。ただ自分にも覚えのある感情だった。

懐かしい昔の記憶、喜びも悲しみもごちゃ混ぜで、ただ懐かしい

としか言えなくなる。

讓司にとってこの店はそういう過去を思い出す場所で、だからここに紫を連れてきたかったのだ。

「お茶冷めちやうよ」

俺が勧めてやっとおそろのおそろの口をつけた。

「……………美味しい……………」

その後紫は慌てたように、ミルクティーやスコーンなど次々に手を伸ばす。無表情を装ったまま黙々と口にしていった。

お茶やお菓子がなくなってきた頃合いを見計らって、俺は立ち上がった。また外を眺めていた紫の後ろに立ち、彼女の腕をとって無理やり立ち上がらせた。

「ちょっと席外すから、2人でごゆっくり」

驚く紫を引きずって、店の中を歩く。途中で我にかえった紫が手を振りほどこうともがく

「離してください。何なんですか」

「君らしくないね。いつもの猫かぶりはどこに忘れてきたんだ。2人ともすごい田辺さんに気を使ってたよ」

紫は目を見開き、唇を強くかみしめた。少し冷静さを取り戻したのか、すみませんと呟いた。

もう大丈夫かなと思っただけ俺も手を離す。つかんだ所が赤くなっていて、申し訳ない気分になった。

「こっちこそ強引に連れだしてごめん」

彼女は首を横に振った。

「ちょっと他の席でお茶飲みなおそう。特等席があるんだ」

彼女は俺の後を大人しくついてきた。本当は今日あそこに行くつ

もりはなかったんだけどな。

ほろ苦く切ない思い出が心の中を通り過ぎて行った。

恋人達のティータイム 思い出 讓司の事情

讓司が案内したのは、店の中庭だった。

扉を開けた瞬間に香る、濃厚なバラの匂いに圧倒される。紫も思わず見とれていた。

店の入り口よりも多くのバラが植えられている。こちらの方が日当たりがいいせいか、いつそう醜く散りかけていた。

中庭の真ん中にテーブルとイスが1組置かれている。

2人が席についた頃、タイミングよく店員がやってきた。紫は又ワラエリヤを俺はニルギリを頼んだ。

お茶が運ばれてくるまで、お互い一言もなかった。

ただ散るバラを見つめながら、遠い日の出来事に思いをさせていた。

「イギリスから日本に帰国した小学生の頃、ここにはよくきたよ。母がこの庭とこの紅茶が好きだったんだ……」

俺がゆっくりと話し始める。

紫は話を遮る事なく、お茶を飲みながら聞いていた。

「最後にここにきたのは中学1年の時だった。母はここで言ったんだ。『私は離婚して国に帰るけど、讓司はお父さんと日本に残りなさい』ってね」

「……」

重い思い出を語っても、彼女は眉一つ動かすことはなかった。

「子供の目から見ても日本に帰国後両親の仲が悪くなっていたのは、薄々感ずいていたけど……俺に何も相談もなしにかつてに決められて……」

もう割り切った過去だと思っていたけれど、口にだすとまだほろ苦い思い出だった。

「あの時はなんだか母親に捨てられたように思えた……それから母とは一度も会ってない。話によるともうイギリスで結婚して子供もいるらしい」

話終えて紫を見つめた。彼女は先ほどから節目がちに黙々と紅茶を飲んでいった。譲司の話が終わると視線をあげて、まっすぐに見つめてくる。

まるで風のない水面のように、どこまでも澄み切って静かな瞳。そこには哀れみも共感もなく、ただ淡々と彼女は事実を受け入れていた。

「どうしてそんな話を急に？」

「さつき紅茶を飲みかけて、手が止まっていただろう。あの時の君の表情を見たら思い出したんだ」

「嬉しさと悲しさと両方の懐かしい思い出？」

「ああ……」

それからまた沈黙がうまれた。すっかり冷めてしまった紅茶を口にしながら思った。俺は古傷をさらけ出してぶつけたが、それで何か紫を変えられたのだろうか？

俺の話に怯むことなく、ただ淡々と聞く彼女を見ていて、俺以上に底知れない闇が彼女の奥に眠っている気がした。

「私にとっても、バラと紅茶とケーキは、複雑な思い出なんです。

二度と訪れる事のない幸せな過去の象徴だから」
紫は淡々とした表情を変えることなく、ポツリポツリと語り始めた。

恋人達のティータイム 思い出 紫の事情

「祖父母が紅茶専門店をやっていて、幼い私は両親に連れられてよく遊びに行っていました」

「祖母が好きなバラの鉢植えが窓際に飾られて、祖父はいつも美味しい紅茶とケーキ用意して迎えてくれました。家族5人揃ってのティータイムは私が一番好きな時間だった」

だった。すべては過去でいまだに消化できない思い出なのだ。

紫はそこで少し肩を震わせた。何かを言おうと口をあけて閉じる。そんな事を何度か繰り返した後、紫は深呼吸をしてやっと話を再開した。

「私が小6であの携帯を買ってもらった頃、父の『親友』という人がやってきました。その人は父に借金の連帯保証人になってほしいと頼んだんです」

譲司は思わず息を飲んだ。その先に待ち受けるだろう事を思うだけで胸が痛んだ。

「借金はすぐ返せる宛がある、迷惑は絶対かけないなどと言われ、人のいい父は連帯保証人になってしまったんです……でも契約成立直後『自称親友』は姿を消しました。父に借金を押し付けて」

譲司はカップを口にあてて、初めて空な事に気がついた。冷静に受けとめる覚悟だったのに、自分はだいぶ動揺しているようだ。

「両親は貯金もすべて投げ打ち、祖父母も店を売って返済に当てました。それでもまだ借金は残ったんです。……借金の取り立て屋が

家に押しかけてきて、すぐに近所にもしられるようになりました」

「学校の友達もみんないなくなって、何もわからないくせに、『貧乏人』と罵っていじめるバカな同級生しか近寄りなくなりました。でも私にはそんな事にシヨックを受けてる余裕なんてなかった。取り立て屋の嫌がらせの方がいじめの何倍も恐ろしかったから……」

大学で様々ないじめを受けながらも、平気な顔で学校に通う紫に驚いていた。しかし地獄を経験した彼女にとって、本当にたいした事ではなかったのだ。

「しばらく私達親子は我慢したんですけど、精神的に耐えられなくなって両親は夜逃げを決めました。でも子供の私は連れて行けないからって祖父母に預けられました。それが私が中学1年の頃……」

「それから一度も両親から連絡はありません」

6年近くも経過して、連絡がない。その事実には背筋が凍る思いがした。

「何度かこちらから電話しようと思いましたが、できませんでした……」

そこで言葉をくぎった彼女は、堪えるように唇を噛み締めた。淡々とした……というより壊れた人形のように無表情のまま、頬を粟がこぼれ落ちた。

「電話しても出なかったら？すでに使われていなかったら？……もし……すでに……この世にいなかったら……」

それから長い長い沈黙があった。

日が傾きかけ、夕焼けが中庭を照らすようになるほど時間がたった。

潤んだ彼女の瞳が渴き、少し冷静さを取り戻すためそれだけ時間がかかったのだ。

「私は友達なんて信じない。家族以外の人間なんて信用できない」

強く言い切った彼女は、揺らぐことなくまっすぐに俺を見つめた。

「人を信用できない人間に友人や恋人が作れますか？」

「……」

「私の事はもう忘れてください」

最後まで俺は何一つ言う事はできなかった。

嘘と作り笑いにまみれた彼女ではなく、最後は彼女の本音が譲司の息の根を止めたのだ。

恋愛バトルは譲司を再起不能に追いやって終了した。

恋人達のティータイム 思い出 紫の事情（後書き）

第1章 榎木譲司編の前半終了です

ここで一度恋愛バトルは終了し、駆け引きではない二人の関係が始まります

引き続きご覧いただけると嬉しいです

休戦協定（前書き）

後半開始です

お気に入り登録、感想ありがとうございます

休戦協定

夏休み直前の暑くなりはじめた頃、譲司は決意を胸に一步踏み出した。

久しぶりにみた彼女はあの日がなかったかのように、何事もなく過ごしていた。

「久しぶり田辺さん」

「お久しぶりです。 榎木先輩」

あの日以来初めての会話は、表面的には穏やかに見えた。

しかし愛想笑いの裏で彼女が警戒しているだろう事はわかっていく。

「田辺さんに話があるんだけどいいかな？」

「いまさら何のようですか？」

愛想笑いを崩さぬままで、さらりと釘を差してくる。

そう、あんなに拒絶されては何を言ってもいまさらだ。

それでも諦めなかったのは、単なる譲司のワガママで、彼女がそれに付き合う必要などない。

「田辺さんは夏休みバイトとかする予定ある？」

「祖父母が厳しくてアルバイト許して貰えないので……」

突然振られた話題に戸惑って、わずかに本音が見えた。

彼女はアルバイトしたいのだろう。家が金銭的に不自由なら小遣いも少ないだろうし、家にお金も入れたいだろう。

「ご家族に許して貰えそわないバイトがあるんだけど」

彼女の肩がわずかに震えた。愛想笑いを捨てた彼女の顔には、大きな警戒心とわずかな期待が浮かんでいた。

「先輩。私言いましたよね。人を信用してないって。そんな美味しい話、私が信用すると思ってるんですか？」

「別に俺を信用しなくていいよ。俺の言う事を後で裏を取るなりすればいい」

「……話を聞くだけですよ」

紫はまだ警戒心はといていなかったが、先の話促した。

「もう学生は夏休みだけど、大学は夏休み中も忙しい。

特にオープンキャンパスで訪れる、高校生の案内役が足りなくて、在校生のバイトを毎年雇ってる。

高校生も現役生との交流でキャンパスライフをしれるから好評なんだ。

大学のだすアルバイト料はささやかだけど、雇用主が大学でしっかりしてる。

夏期限定で仕事内容も校内の案内だからそれほど学業に支障も出ないだろう。

これならご家族の了解も得られるんじゃないか？」

疑いの眼差しを浮かべながら、彼女は言った。

「そんなアルバイトの話は、学内広報にもなかったですけど、本当に学校主催なんですか？」

「少数募集だから、大々的に募集せず、先生や先輩達から紹介を受けた人にだけ回ってくるんだよ」

本当は給料安すぎて普通に募集しても人が集まらないから、先輩

が後輩かきあつめて、無理やりアルバイトを押し付けているだけなのだが……。

「それに今年のオープンキャンパス担当は、文学部の古谷教授だよ。その言葉で初めて紫の目が輝いた。」

古谷教授はM大文学部・国文学専攻で、特に平安文学の研究に力を入れている名教授だ。紫は高校時代に古谷教授の著書を読み、その影響でM大学に入学したと以前聞いた。

「古谷教授とお会いできる機会はあるのですか？」

「オープンキャンパスを担当されるのだから可能性は高いよ。特にバイト最終日に行われる打ち上げには毎回参加されてる。」

M大学では、1年は一般教養を学び、専攻に別れるのは2年からはなる。紫はまだ古谷教授の講義を受けていないはずだ。

憧れの教授に会えるチャンスに思わず考えこんでしまったようだ。

「その話が本当か裏を取る時間が欲しいのですが」

「どうぞ。ただもう夏休みに入ってしまうから時間はないし、人脈がなければ回ってこないようなバイトだから、俺の誘いを断って他から探すのは難しいと思うよ。」

だから早めに回答欲しいなと付け加えたら、殺意を込めた目で睨まれた。

思わずため息をついた。空に籠もったままの、彼女の心に届くには、まだ足りない。

「田辺さんは人を信じないと言ったけど、現代社会で誰にもかかわらず生きていくことはできないよ。」

だから君はサークルに所属して目立たぬように過ごしてきたんだろ。」

「それはサークル内で築いた人脈を後々利用するために……」
「そう、君は人を信用はしないけど、利用はするんだ。だったら俺を利用すればいい」

驚いたように紫は目を見開いた。

「交渉はギブアンドテイクが基本でしょう。先輩はバイトを紹介して、私に何を要求するつもりですか？」

「君と一緒に俺もバイトする。そうしたら長期休みの間もバイト仲間として君に会えるだろ。それが俺の報酬」

紫は意地の悪い笑顔を浮かべて低い笑い声をあげた。
俺なにか間違いをしてしまったのだろうか？

「つまり先輩は私への好意で奉仕してくださいと？」

「……ま、まあ、そうとも言えるかな」

「そういうのを奴隷と言うのでは？先輩がそんなドM変態とは思いませんでした。変態先輩」

彼女の毒舌攻撃が俺の心を確実にえぐっていった。

それでも諦めの悪い俺は、やっぱりドMなのかもしれない。

出会い（前書き）

新キャラ登場です

重要人物なので、今後をお楽しみに

しかし今回一番時間がかかったのがタイトル

その割につまらないのは、ぐるぐる考えすぎて当たり障りのないものに落ち着いたからです

ネタバレせずに面白いタイトルって難しいですね

出会い

色々あったが、最後には紫は讓司の提案を受け入れた。

讓司はいたづらられてポロポロになりながらも、勝利を噛み締めていた。

「何ニヤニヤしてるんですか？気持ちの悪い妄想ですか？変態犯罪予備軍あらゆる意味で女の敵先輩」

先輩にかかる形容詞が長すぎて、もはや形容詞ではないと思う。

大学校内を二人は歩いていた。今日はバイト初日でこれから顔合わせだった。

「ところでバイト紹介してくださった先輩って、嫉妬深い元カノとかじゃないですよ。私に危害とか止めてほしいんですけど」

「なんで俺の知り合いってだけで元カノと断定するかな……先輩男性だけ」

「榎木先輩両刀なんですか？節操ないですね」

「だからなんで恋愛に結びつけるの？男同士で恋愛なんてあるわけないじゃない」

「偏見はいけませんよ。榎木先輩ぐらい変態なら、両刀ぐらいぜんぜんありえると思うんですよ」

意地の悪い笑みを浮かべる彼女の表情が、本気で言っていない事をあらわしてる。讓司をいじめて遊んでいるのだ。

「今は文学部の大学院に進んでるけど、テニスサークルのOBで俺の2個上だよ」

「やましい関係じゃなきゃ、なんでそうやって素直にそう答えないんですか？」

彼女の言葉に顔を引きつらないようにするには、最新の注意が必

要だった。

彼女が言つたとおり俺はわざと先輩の話をしなかった。正直先輩と紫を会わせたくはなかったのだ。

「今から会つんだし、会えばわかるよ」

紫は疑いの眼差しで俺を見ていた。

文学部・国文学専攻の研究室の前に立ち、ためらいがちにノックする。

中から返事が返ってきたので、ゆっくりと扉をあけた。

研究室内には何人か人がいたが、二人が入つてくると注目の的になった。譲司はどこでも周囲の注目を集める存在なのでしかたがないが、このまま二人が一緒の所を見られるのは紫に悪いので落ち着かない。

「榎木！こつち」

奥から男の声がした。すぐに呼ばれた方に向かう。

眼鏡をかけ、平均身長より少し高い痩せ形の男が、人の良さそうな笑顔を浮かべた。

「榎木は相変わらず目立つな。そちらが噂の彼女？」

「文学部1年の田辺紫です。テニスサークルで榎木先輩に今回の話を紹介していただきました。よろしくお願いします」

「院生1年目の朝比奈裕一です。同じ学部・同じサークル同士よろしくお願いします」

朝比奈は目下の相手なのに丁寧な挨拶を返した。朝比奈の一般的な回りの評価は、人がいい、優しい、穏やかなのだ。他の人間よりしたい譲司はそうおもわないのだが。

「榎木のせいで色々大変みたいだね。大丈夫？」

「榎木先輩が悪いわけじゃありませんし、榎木先輩に色々助けていただいでるので大丈夫です」

人目があるから紫は愛想笑いを浮かべた猫被りモードだが、その言葉に込められた悪意のニュアンスを譲司は正確に理解していた。

朝比奈は紫の悪意に気づいてないのか、安心したように穏やかな笑顔を返した。

「文学部のバイト担当僕だから、何かわからない事あったら聞いてね」

「ちょっと待つてください。なんで院生の先輩がバイト担当なんてしてるんですか？」

紹介だけして、朝比奈と紫を引き離そうと思ってたのに……

朝比奈は困ったような顔をした。

「教授や先輩達はお忙しいから、こういう仕事は下の人間がやらないと」

周りに気を使って優しい表現だが、雑用を押し付けられたということだ。

紫は眉をひそめて大変ですなとつぶやいた。それに嬉しそうにありがとうと朝比奈が答える。

朝比奈と紫は端からみると、同じ文系学生同士空気が似ていて、なんだかお似合いだ。

すぐくまずい気がする。だから先輩と会わせたくはなかったんだよなと一人焦る譲司だった。

「……あの……古谷教授は、オープンキャンパスにはあまりいらっしやらないんですか？」

「ああ。田辺さんは古谷教授に会いたかったってね。今回のオープンキャンパスの責任者だから、まったく顔出さない事はないけど、お忙しい方だからね」

明らかに落胆する紫を慰めるように、朝比奈は優しい言葉を囁く。

「終わった後の打ち上げには必ず参加されるし、ゆっくり話す時間とれると思うよ」

俺は焦って止めに入った。紫を打ち上げに参加させたくない理由があった。

「打ち上げて飲み会ですよ。田辺さんはお酒の席は苦手で……」
サークルの新歓コンパも欠席した紫だ。大学の飲み会など未成年に無理やり飲ませたり、酔っ払いの相手をさせられたりなど不愉快な事ばかりなのに、高い会費払わされるのが嫌との事。

「飲み会といってもこの研究室に、飲み物や食べ物を持ち込んでやる内輪なものだから、会費も安いし気楽だよ」

「それなら参加してみたいですね」

ちよつと乗り気になってきた紫を止めたかったが、打ち上げに参加させたくない理由を言うことができないのでどうにもできなかった。

「ああ……そろそろ時間だね。今日は講義室でバイトメンバー同士のミーティングがあるんだ。行こうか田辺さん」

そう言っ入り口に向かう朝比奈に、紫も素直に着いていく。俺も着いていこうとしたら朝比奈に止められた。

「柎木は研究室で雑用を頼む。今重い荷物整理とか男手足りないから、期待してるよ」

「ちよつと待ってください。俺もオープンキャンパスの手伝いのはずじゃあ……」

朝比奈はやれやれと言った感じでため息をついた。紫も気づいた

ようで、しかたないですよなどと同意している。

「先輩が案内役なんてしたら、いたいけな女子高生を惑わせて現場は大混乱ですよ」

ざっくり紫が俺を斬ると、朝比奈は同意するように何度も頷いた。

「悪いな柁木。そういう事だから、案内役とかは頼めないけど、裏方の仕事をよろしく」

せっかくの紫とのバイトライフを引き裂かれ、激しく落ち込んだ。

朝比奈と連れ立って歩く紫が、一度だけ振り返って譲司を見る。

紫には珍しく心細いような弱気な顔でそれが不安だった。

幕間 暑い戦い（前書き）

榎木編唯一の譲司視点ではないシーンです
会話劇のようなセリフの多さも他とは違うので、読みにくいかもしれませんが
『暑い戦い』をお楽しみください

幕間 暑い戦い

真夏の太陽に照らされ、室内には濃い影が生まれている。
冷房のない廊下はうだるように暑く、早く冷房の効いた室内に入りたいが、運動などしたくもなく、自然と足取りも重くなる。

朝比奈が先に歩き、3メートルほど離れて紫が後を続いた。朝比奈は歩きながら振り向きもせず、世間話を始めた。

「今日も暑いね」

「そうですね」

「雨が降って涼しくなればいいね」

「そうですね」

「この大学無駄に広いから移動が面倒だよね」

「そうですね」

「学食は安いけど、まずいよね」

「そうですね」

「柁木はモテるから近くにいただけで大変だよね」

「そうですね」

「アイツってバカなのに顔がいいから騙されて、周り気づいてないよね」

「そうですね」

「僕の事見ただけで、いけ好かないやつと思ったよね」
「それで……」

機械的に相づちを繰り返してたら、うっかり本音がでてしまったようだ。

朝比奈は立ち止まってゆっくり振り向いた。

二人は表面的には笑顔で見つめあっていたが、先ほどの会話が二人の間に緊張感をもたらしていた。

長い沈黙のままお互い探り合いを続けていたが、先に口火を切ったのは朝比奈だった。

「もうバレバレだから、その巨大な猫脱いだら」

「先輩こそ、その嘘臭い笑顔の仮面取ったらどうですか？黒いオーラが駄々もれですよ」

「あの馬鹿もいい趣味してるよね。こんな腹黒い女の子どこから探してきたのか。天然記念物級だよ」

「先輩の調教の成果で、あの馬鹿DMになったんじゃないですか？妙に打たれ強いと思ったら、身近にこんなサディストがいたなんて」

もう互いに作り笑いをする気もなくなって、震え上がるような怖い笑みを浮かべていた。

「調教って女の子が言うセリフじゃないでしょ。僕と奴の仲を妬いでるの？目障りだから惚気話は他でやってよ」

「アイツはただの奴隷ですから、なんで嫉妬しなきゃいけないんですか？」

そちらこそアイツの事可愛いがってたのに、私が現れたからイライラして私に当たってるんじゃないですか？

私同性愛者に偏見ないですけど、あなた達の色恋沙汰に私を巻き込まないでください」

「僕彼女いるし、同性愛の趣味はないね。」

あの馬鹿は僕の数多い手駒の一つにすぎないから、どうなるうとどうでもいいんだけど。

君こそ友達いないし、手駒も少なく、必死になってるんじゃないの」

紫は怖い笑みが消え、目で殺すような、物騒な顔で睨んだ。

「いいかげんにしなよ。オッサン」

朝比奈もすべての表情が抜け落ちて、氷のように冷たい無表情になった。

「生意気言ってるんじゃない小娘」

声を荒げる事はなかったが、紫の鋭い言葉と朝比奈の凍るような冷たい言葉は続き、罵詈雑言の泥仕合になった。

お互いボキヤブラリーの限りをつくして罵りあったが、暑さにしたいに言葉少なくなっていく。

「これ以上は無駄だな……」

「ええ……お互い体中毒まみれですから、毒舌も利かないみたいですね……」

「で、なんでこんな所でわざわざ喧嘩売ったんですか？」

「猫被ってるのはすぐわかったから、本性を見てみたかった」

「……馬鹿じゃない？」

朝比奈の回答に苛立ちを含んだ声で紫は返した。しかし朝比奈は再度喧嘩を仕掛ける気はないようだ。薄く笑ってかわした。

「君が僕を見ていけ好かないと感じたのは、同族嫌悪かもね。お互い腹の中は真っ黒なのに、外面だけはいいい」

紫はその言葉に同意するように笑った。

「でも、僕は自分の利益のために積極的に毒を使うけど、君は自分を守るためにその毒を使うんだね」

「何が言いたいんですか？」

「さつき手駒が少ないって言ったよね。君は壁を作って人を寄せ付けないみたいだけど、関係を絶つてばかりじゃ、いざって時に動かせない駒がなくて、そのうち追い詰められるよ」

「そんな説教みたいな事言うなんてらしくないんじゃないですか？」

朝比奈は同意するように笑った。

「うん。らしくない。会ったばかりの女の子に、こんな本性さらけ出してまで、お節介なんてほんとはらしくない」

「彼女のお節介が移ったかな」と愛おしげに微笑んで呟いた。

「惚気話とかやめて……」

言いかけてやめた。朝比奈が一步踏み込んで、二人の距離を縮めたからだ。緊張感の中、朝比奈が左手を持ち上げたことで、さらに緊張感が高まった。

左手が紫の顔の前まで持ち上がった時、朝比奈は手の甲側を紫に

見せた。

左手の薬指に光る指輪を見せつけるように。

「僕の婚約者が美人で、お人好しで、お節介で」

「惚気話はやめろ」

紫が心底嫌そうな顔を見ると、朝比奈は大笑いした。

「君には『毒』は『毒』でも、こっちの『毒』の方が効くんだね」

朝比奈はまだ笑いながら、左手をそのまま持ち上げて紫の頭をポンと叩いた。

「妬かない、妬かない。田辺さんには柁木がいるじゃないか」

「私とあの馬鹿はそんな関係じゃ」

「仲よくなりすぎて馬鹿が移らないようにね」

「……」

何を言っても無駄とばかりに朝比奈はニヤニヤと笑っている。紫も無言でむくれた。

「ミーティングが始まっちゃうし行くところか？」

何事もなかったようにあっさりと朝比奈は振り返って、勝手に歩き出した。

幕間 暑い戦い（後書き）

朝比奈株は登場シーン目にして大暴落ですね
皆さんは朝比奈表側と裏側どちらがお好みですか？

譲司は研究室で雑用をこなしながら、ため息をついた。

せつかく夏休みも一緒に過ごせると思ったのに、同じ校内にいても彼女との距離は遠い。

腕時計をちらりと確認し、そろそろかな？と思う。

「こつち終わっただんですけど、そろそろ帰ってもいいですか？」

譲司の仕事を監督している田所助教に尋ねる。

彼女はずつと譲司を見ながら惚けていたために反応が遅れた。

「え、ええ。そうねえ……」

だめ押しのように譲司が微笑むと、田所助教は猛烈に縦に首を降る。

「あつ、ありがとう。お疲れ様」

その言葉を待ってたかのように、研究室を飛び出した。

歩きながら再度時間を確認し、歩くペースをあげた。最後は走るに近いような速度だったが、視界に目標を見つけて安心した。

速度を落とし、呼吸を調えた。一応付近を確認する。

夏休みの学校にくるものは少なく、周りには目標以外誰もいなかった。

「田辺さんお疲れ様」

彼女は立ち止まってゆつくりと振り向きながら、可憐に微笑んだ。

「ああ、柁木先輩ですか。息を乱して追いかけてくるから、どんな変質者かと思ったら、変態先輩で納得しました。」

愛らしく首を傾けながら紡がれる毒は、痛みだけでなく甘い。

本気でいたぶられて喜ぶ変態に、自分がなってしまった気がして怖い。

「バイトどう?」

「高校生と適当に話しながら案内するだけだから、楽ですよ」

「じゃあ朝比奈先輩は?」

『朝比奈先輩』の単語に彼女のこめかみがピクリと反応する。黒いオーラがにじみ出てくるのが、目に見えるようだ。

「なんなんですかあの人。あんなだけ根性ねじ曲がってるのに、人前ではお人好しの振りして。周りも騙されてるし。気持ち悪いです。」
彼女自身を表現しているような感想に、思わず吹き出してしまった。

すぐに紫から睨まれた。

刺し殺されるような視線も、慣れてしまえば可愛く思える。

「同族嫌悪?」

彼女の視線がさらに厳しくなり、口をへの字に曲げながら呟いた。

「腹黒男と同じ事言う……あそこまでひどくないでしょ、私……」
つい大笑いしたら、紫に胸を殴られた。身長差的に顔まで届かなかったのだらう。

暴力などという無駄な行動に出るとは。彼女はそうとう怒り狂っているようだ。

思いつきり殴ったつもりだろうが、華奢な彼女の体格ではまるで痛くない。

悔しそうに何度も殴るが、子供が駄々をこねたようで、可愛らしい。

思わず微笑むと、彼女は大いに溜め息をついた。

「言葉でいたぶっても、暴力ふるってもヘラヘラ笑ってるだなんて……本気で変態度上がってますよね……榎木先輩を傷つける新たな方法を考えなきゃ……」

がっかりしている彼女の言葉に、今日一番ダメージを受けた。冗談じゃなく変態と思われている。

早めに軌道修正しないと、一生友人にすらなれないかもしれない。

「まあ、田辺さんが先輩の本性をすぐ見抜いてくれて安心したよ。ちよつと別の意味で心配だったから」

彼女が不可思議な表情をするので、素直に種証しをした。

「今は本命の彼女と長続きしてるけど、前はそうとうなプレーボーイだったからね。田辺さん狙われないか心配だった」

「ええー！なんであんな腹黒男が……信じられない……」

「確かに本性は腹黒でも、知ってる人間ほとんどいないし、騙されてるんでしょう」

それでもまだ彼女は納得いかないようだ。

「百歩譲って、あの嘘臭い良い人面で、汚い手口使って騙してるとしても、客観的にそんなモテそうな感じしないんですけど。顔も中の上ってくらいだし、別に榎木先輩ほど高身長でも、お金持ちの家でもないでしょう？」

「うーん、そこが俺も謎なんだよね。しかも女の子と、とっかえひっかえに付き合ってるのに、周りに全然気づかれてなくて、いい人認識が変わらないんだよね」

紫は少し考えこむように無表情になって、しばらくしたらニヤリと笑った。

「周りが朝比奈先輩の女遊びに気づいてないのに、どうして柁木先輩は知ってるんですか？」

嫌な所を突かれて、言い訳を考えたが、下手な嘘など許してくれそうにない。

「俺女の子にモテて仲いいから、女の子の噂情報とか詳しいし……」
「女子の間で噂になるようなら、周りも気づくでしょう。朝比奈先輩のお相手達が口が固い人だから、噂が広まらなかったんでしょうね。その口が固い彼女達がなぜ柁木先輩にだけ話すんですか？」
「……」

じわじわと追い詰めるように、ゆっくりと話す紫。

譲司は冷や汗をかきながら、それ以上はやめてくれと願った。

「口が固い女性が何か漏らしてしまうとしたら、恋する男とベッド……」

「うわー、それ以上言わないで。正直に言います。俺の彼女の元彼が朝比奈先輩とか、その逆とかかなり被ってました。すみません」

汚物を見るような目つきで、彼女は俺を攻める。

「最低。不潔。いやらしい。女の敵」

好きな女の子から、女性関係で軽蔑されるぐらいつらい事はない。地面に膝つけて土下座して謝ったら許してもらえないだろうか？

俺の追いつめられた顔に満足したらしく、紫は勝ち誇ったような笑顔を浮かべた。

「この手のネタならまだいたぶれるんですね……うふふ」

まだまだ俺をいじめたりないのか……。
ああ……前途多難な俺の恋……。

腹黒女と腹黒男のエトセトラ 前編（後書き）

途中までは、恋は盲目フィルターで甘々な展開だったのに
まだまだ隙が多すぎる譲司君でした

腹黒女と腹黒男のエトセトラ

後編(前書き)

8 / 30 誤字修正

研究室隣の資料室は冷房が効いてなく、蒸し暑い空気に包まれていた。

重い古書の入った箱を持ち上げていると、譲司の額から汗が流れ落ちる。

荷物を運び終わって一息ついた所に、部屋に入ってくる者がいた。

「朝比奈先輩……」

「お疲れ様。一人か？」

「ええ……他の方は食事に」

「一緒に行けば良かったのに、誘われたんだろう」

以前の俺なら女性からの食事の誘いを断る事はなかったろう。しかし今は紫に疑われるような事はしなくなかった。

朝比奈はそれ以上追求せずに、本を探し始める。いくつか手に取って中を確認していた。

「先輩。オープンキャンパスのバイト達はどうですか？」

「今のところは大きな問題はおきていないが……」

朝比奈はズレた眼鏡を直しながら、ちよつと顔をしかめた。

「高校生達とバイト学生が親しくなりすぎているのでは？と、一部のうるさ型の先生達が騒いでいるな」

譲司は紫の事が心配になった。

もし男子高校生達が紫に言い寄ったりとかしたら……

「仲良くなつた学生達がアドレス交換してるみたいで、後々トラブルとか起きるんじゃないかと……ネチネチ言われて困るよほんと」

「田辺さんは大丈夫……」

突然朝比奈が大きな音を立てて、乱暴に本を閉じた。議司は急に寒気がした。

『田辺さん』の言葉に反応して、朝比奈の周りだけ急に気温が下がったみたいだ。

朝比奈の無表情が異様に恐ろしい。

「目障りなガキだよほんと。大学に来られないように追い込んでやりたいが、イジメ程度軽くあしらうからな、可愛げがない」

淡々と紡がれる黒い言葉は、感情がなさすぎて逆に本音な気がした。

「……何やっただんですか？彼女」

「オープンキャンパスに関係する先生方に取り入ってるんだよ……オヤジ共め、優等生で若い女の子にチャホヤされて、鼻の下伸ばしてデレデレしまくって気色悪い」

「べ……別に先輩に……直接的な被害はないんじゃない……」

「あるよ。まだ僕の信賴の方が上だけど、あの女の言葉を先生方が信じるようになってみる、僕の悪い話とかばらされて立場が悪くなるんだ」

朝比奈は今まで本を見ながら話していたのに、急に議司の方を向いた。

ゆっくりと距離を縮める朝比奈が、悪魔のような笑みを浮かべている。

目をそらすのが不自然なほど間近に迫られて、議司は叫びだした

いのを懸命にこらえた。

「先輩近すぎ……」

「彼女、僕の過去の女性歴をネタにプレッシャーかけてきたんだけど、どこでそんな話仕入れてきたんだろうね」

至近距離で落とされた爆弾発言に譲司は震えあがった。

「彼女の弱みをなんか話せよ。それとも僕のプライベートはベラベラ話せても、彼女のはできないとか？」

朝比奈の手が譲司の首筋をなぞる。今はただ触れるだけだが、力をこめればしめられそうだった。

「弱みなんてあつたら、とっくにそれを口実に交際を迫ってますよ……」

朝比奈は目を細め、手に力をこめた。死ぬ事はないだろうが、首に跡が残りそうなほど苦しかった。

これ以上ないというほど、唇のはしを釣り上げて、朝比奈はあざ笑った。

「彼女にお前の元彼女達の話の詳細に語った方が良かったか？」

息が止まるかと思った。

紫と朝比奈、攻撃ポイントまで同じの二人に挟まれて身動きもできない。

「……わ、わかりました……話します」

俺が呟くと朝比奈は手にこめた力を緩めた。

俺は恐怖で腰が抜けて、ずるずると床に座り込んでしまった。

「……田辺さん、英語苦手ですよ。俺、勉強教えてましたし」
朝比奈は会心の笑みを浮かべ、笑い声をあげた。

「なるほどね。どおりで外語系の先生達への囲い込みが甘いわけだ」

俺最低だ……愛しい彼女を悪魔に売り渡した……。
まあ彼女も悪魔なんだけどね。

その時資料室の扉が開いた。

「柎木く〜ん。お弁当買ってきたわよ……って。朝比奈君もいたの？」

田所助教の甘ったるい声は、朝比奈を見てなりを潜めた。

「お疲れ様です。論文用の資料を探してたんですが……」

朝比奈は先ほどまでの、意地の悪い笑みなどなかったように、穏やかに微笑んだ。

朝比奈が譲司に視線を移したので、つられて田所助教も座り込んだ譲司を見た。

「どうしたの柎木君？」

「床にあった資料の箱につまづいたみたいで。大丈夫か柎木？」

本気で心配しているような顔で、朝比奈は譲司に手を差し出した。譲司も差し出された手を断るわけにもいかず掴んだ。

引き上げられている途中、穏やかな表情はそのままに、譲司にだけ聞こえるように囁いた。

「2度と僕を裏切るな。次はないと思え」

ぞつとするほど冷たい声音に、浮かしかけた腰がまた床に落ちる。

「大丈夫？ 柂木く〜ん。つまりいた時どこか怪我した？」

田所助教は慌てて駆け寄ってくる。朝比奈も、さも心配だという顔をして、大丈夫か？ などと聞いてくる。

悔しさ以上に目の前の男への恐怖が体をすくませる。それでもなんとか平静を装って立ちあがった。

きつとこのネタで朝比奈先輩は紫に喧嘩売って、俺がばらした事もバレて怒られるんだろうなあ……。
ため息しか出てこない。

腹黒女と腹黒男の板挟みって、どんな生き地獄だ……。
自分が招いた不幸だが、譲司は運命を呪いたくなった。

腹黒女と腹黒男のエトセトラ

後編（後書き）

鬼畜朝比奈光臨です。

ヒロインの紫の腹黒さが可愛く思えてきました。

次回からクライマックスに向けて話が進んでいきます。

宴の始まり

オープンキャンパスは表面的には、平和に終わった。

裏で腹黒バトルが繰り広げられ、その争いに譲司が巻き込まれ、散々にいたぶられた事を知るものはいない。

後半はお互い攻撃がうまくいかないストレスを、2人共俺にぶつけてくるんだもんな……

2人がかりで人間サンドバツクにされた気分だ。

「本当に打ち上げ行くの？」

「もちろんです。古谷教授とお話できるチャンスですよ」

紫は珍しく浮かれていた。彼女に打ち上げに参加してほしくなかった譲司はため息をつく。

「でも本当に自分の飲み物用意するだけでいいんですか？」

紫の手にはスーパーで買ったお茶やジュースのペットボトルがある。

「うん。つまみ類はまとめて買ってくれるから、後で割り勘で払えばいいし。多分千円にもならないと思うけど」

「安上がりなのは助かりますね。でもなんで先輩そんなにお酒買い込んでるんですか？」

隣を歩く譲司はケースで発泡酒と酎ハイを1つつつカートに載せて引いている。

「確かお酒は古谷教授が、用意してくださいと聞いてますけど」

「……まあ……後でわかるよ」

百聞は一見にしかず。今はただ曖昧に答えるしかできなかった。

飲み会会場の国文学研究室の近くまで来たとき、紫が突然讓司の服の裾を掴んで立ち止まった。

彼女らしくない可愛らしい仕草に胸がときめいたが、彼女の鋭い視線にすぐ気がついた。

少し前を一人の男が歩いていて、すぐに誰か気づかなかった。

「鈴木先輩……」

紫の呟きに讓司もやっと思いついた。

2人の出会いのきっかけであり、紫の最悪の相手セクハラ男鈴木だ。

「なんであいつこんな所に」

「鈴木先輩もバイトしてたんですよ。私わざと避けてたから一緒に仕事しませんでしたけど」

「つまり今日の打ち上げに参加するって事？大丈夫？」

紫の瞳がわずかに不安で揺れた気がした。でもすぐに不敵な笑顔を浮かべる。

「今度何かしようとしてきたら、遠慮なく痛めつけてやります」

同情の余地はないが、どんな報復をするのか恐ろしくもあった。

打ち上げの間は彼女のそばから離れないようにしよう。

「今年も無事終える事ができたのも、皆さんのおかげです。今日はおおいに楽しみなから、親睦を深めましょう」

乾杯の音頭をとったのは、当然古谷教授だった。

いつも仕立てのいいスーツを着こなす、ジェントルマンの見本のような上品な佇まい。

60は超えているというのに、いまだに女子学生のファンがいる

のも領ける。

「柎木先輩。どうして皆さん古谷教授の用意したお酒に手をつけないんですか？」

未成年のためお酒の飲めない紫は、不思議そうに言った。

古谷教授の飲み会常連メンバーは当然のように自分用の酒を用意している。何も知らずに『酒は古谷教授が用意している』という言葉を信じた人々は、慌てて買いに走ったり、譲司のもとに譲ってくれるように頼みにきた。

せっかく用意した酒を誰も手をつけないので、古谷教授は少し寂しそうに一人酒を飲んでいた。

「田辺さんはお酒飲まないからわからないよね」

俺は苦笑しながら『古谷コレクション』の酒を眺めた。

実は古谷教授はかなりの酒豪な上にマニアックな趣味があった。

「ワイン、焼酎、ウイスキー、ブランデー、スピリッツとか色んなお酒あるけど、どれもかなりアルコール度数が高いんだ」

まだピンとこない紫に具体的に説明した。

「俺の持つてるビールや酎ハイは3%ぐらいだけど、古谷教授は『10%以上じゃないと酒と認めない』って方だから」

3倍というのでやっと、アルコール度数の高さがやっとわかったようだ。

紫は自分のお茶のペットボトルを見つめて、明らかに落ち込んでいた。

「大丈夫だよ。古谷教授は未成年の飲酒は絶対認めないから、田辺さんに無理強いしたりしないし」

まあそのかわり、成人には容赦ないんだけどね。

俺の心の声を聞いているはずもない紫は、嬉しそうに古谷教授の元へ歩いて行った。

酒は飲んでも飲まれるな（前書き）

今回はアルコールに関する描写が多くなっています。

無理な飲酒は急性アルコール中毒の危険性があるのでやめましょう
フィクションだから、でたらしめにお酒が強い人ばかりでてくると思
ってお読みください

酒は飲んででも飲まれるな

紫が古谷教授と楽しそうに話す所を、讓司は離れた所から眺めていた。

俺と話す時もあんな無邪気に笑ってくれるといいのにな……。

発泡酒をちびちび飲みながら、一人ぼーっとしていたので、突然声をかけられてびっくりした。

「一人で飲んでるなんて珍しいな」

「あ、朝比奈先輩」

「女の子達が話しかけたがってるぞ」

「わかってます」

何人が話しかけられたが、無視していたら誰も声をかけなくなつたが、諦め悪くこちらをちらちら見ている。

「榎木がここまで入れこむとはな……簡単になびかないから意地になつてるのか？」

「そんな軽いものじゃないです」

発泡酒の残りを一気に飲んでため息をついた。

本当に自分の諦めの悪さを呪いたくなる。

「じゃあ僕は古谷教授の所に行つてくるから頑張れよ」

朝比奈は軽くひらひらと手を降つて、歩きだそうとする。

慌てて讓司は朝比奈を引き止めた。

「ちょっと待つてください。それってあの古谷教授に付き合つて飲むって事ですか？」

「誰も教授の相手しないと失礼じゃないか」

「自爆行為でしょ。そこまでして点数稼ぎしたいんですか？」

朝比奈は爽やかな笑顔を浮かべて、言い放った。

「死ぬ気で行ってくるから、骨は拾ってくれ」

「ああ……。だから田辺さん巻き込んだんですね。田辺さんが来るなら、俺も絶対来ると思ってた……」

引き止めても無駄だと悟ったので、俺はついていくことにした。

「朝比奈君、榎木君お疲れ様」

古谷教授はいつもどおりの穏やかな笑顔で2人を迎えた。

「教授、僕もコレクションのおすそ分けいただいてもいいですか？」

朝比奈が営業スマイルでそう答えると、教授は少年のように輝いた笑顔を浮かべた。

「もちろん。いや、最近の若い人はお酒に弱い人が多くて、なかなか老人の趣味に付き合ってくれないんだよ」

若くなくても教授の酒豪っぷりについていける人は、そうそういないと思うのだが。

「榎木君もお酒強かったよね。何がいい？ウイスキーの上物があったね」

ウイスキーってだいたいアルコール度数40%ぐらいだよなあ。

ちなみに教授はストレート派なので、水や氷などは一切用意されてない。

コレクションの中で比較的アルコール度数の低そうな、ワインとか日本酒の方がいいな……

「泡盛もあるよ。ちょっと珍しいの取り寄せただけ……」

一般的な焼酎のアルコール度数は25%ぐらいだが泡盛は要注意だ。40%以上の高アルコールのものもあるからだ。

「もしかして与那国島の……」

「よくわかったね。好きなのかな？」

全力でお断りした。アルコール度数60%のモンスターを始めから相手したくない。

俺は無難にワインをもらったが、朝比奈先輩は教授に勧められるまま、次々といろんなお酒を飲んでいる。

小声で先輩に耳打ちした。

「そろそろ止めたほうが……」

「この状態の教授が、止めてくれると思う？」

教授は無邪気な子供のように次はこれと、どんどん勧めてくる。教授自身も人に勧めながら強い酒をぐいぐい飲んでいる。

止めるのは無理そうだ。そろそろ逃げようかなと思い、近くで見ている紫に声をかけた。

「早くこの場を離れよう」

「先輩だけ行けばいいじゃないですか？私は教授にお酒飲まされる事ないし」

「危ないのは教授じゃなくて……」

「危ないのは誰って言うつもりだ？」

背後から肩を掴まれ、振り向くのも恐ろしい声がする。

「朝比奈先輩飲みすぎじゃ……」

「俺はまだ大丈夫だよ。お前全然飲んでないよな。付き合えよ」

朝比奈先輩が「俺」って言ったー！ヤバイヤバイ。

「どうしたんですか榎木先輩。急に顔色悪くなりましたよ」

紫は不穏な空気にまだ気づいてないようだ。目で逃げると言ったが通じてない。

朝比奈はしらぶでサディスティックにいたぶる時も、一人称は僕

のままだ。まだ冷静に計算していじめられているのでまだましなのだ。

しかし酒を飲みすぎると、もっと危険だ。

「榎木。お前ならこれぐらいまだまだいけるよな」

「そういいながら、紙コップに酒を注ぐ。」

「ちよっ、ちよっと待ってくださいそれ『スピリタス』じゃないですか」

「世界最強の酒。アルコール度数96%だ。もちろんストレートで飲むものじゃない。」

「ああん？俺の酒が飲めないのか？」

「助けを求めて古谷教授を探す。」

「榎木君。朝比奈君を頼みました。田辺さん、何か危険になったら私を呼びにきてくださいね」

「古谷教授は穏やかな笑顔のままさっで行った。」

「押し付けられたー！」

「古谷教授がいなくなったのを確認して、朝比奈は意地の悪い笑みを浮かべた。」

「お前が飲まないなら田辺さんに飲ますぞ」

「飲みます、飲みます」

「慌てて紙コップを取って、一口だけ口をつけた。」

「舌をビリビリ突き刺す刺激と、身体が燃えるような強烈な暑さが襲った。」

「飲み方が足りねーよ。もっとグビグビいけよ」

「朝比奈は俺の頭と紙コップを掴み、無理やり口に押し付けてくる。」

「口あける。流し込んでやる」

さすがにヤバいと思ったのか、紫は被った猫を捨てて、朝比奈に食ってかかった。

「酔っ払い。最低。下品な本性さらけ出して見苦しくくないですか？」
朝比奈は俺の頭から手を話し、一步紫へと近づく。

「酒も知らないガキが何言ってる。この……」

ここから先の朝比奈の言葉は文章化不可能です。はい。

放送禁止用語、R18指定が必要な危険な単語だらけで、さすがに紫も絶句している。

俺は朝比奈と紫の間に割って入った。

何度も、無理やり酒を飲まされ、最後には床に寝転がった。

その状態でも、まだ胸ぐら掴まれて、酒を強要されてた気がする。

しかし俺の記憶が飛んでしまったのでよく覚えていない。

紫大丈夫かなあ……。それだけが心配だった。

聖母たちのララバイ

讓司が意識を取り戻した時、不思議な気持ちでした。

頭は痛いし、気持ちも悪い、体中重くて、このまま眠りの世界に逃げ込んでしまいたいぐらい具合が悪い。

しかし今、讓司は暖かく柔らかい何かを枕にして寝ているようだ。いい匂いが鼻孔をくすぐり、誰かの手が優しく讓司の髪を撫でる。このまま寝てしまうのももったいないような居心地のよい状態だ。

このままでいたかったが、気持ちの悪さに思わずうなってしまった。

「気がつきました？」

聞こえてきた紫の声は、優しすぎて夢じゃないかと思った。

目を開けると真上から紫が、覗きこんでいる。

そこで初めて自分が置かれている状況を、悟った。

紫に膝枕されてる！

とても信じられない。しかも彼女は俺の髪を優しく撫でていた。

「先輩の髪って柔らかいですね。触り心地いい……」

うつとりと呟く紫の顔が、あまりに可愛いすぎて、これは絶対夢だと思った。

ああ夢ならば覚めないで……このまま死んでもいい……

などと物騒な事を考えてしまう。

あたりを見渡すと、薄暗い照明と、月明かりだけの部屋は、古谷教授の応接室だとわかった。

月明かりに照らされた紫の顔を見つめると、気になる事があった。なんだか頬が赤い気がするし、目がとろんとしている。なんだか様子がおかしい。

「もしかしてお酒飲んだ？」

「ジューズと間違えて酎ハイを一口のんじやいました」

酎ハイを一口飲んだだけでこんな様子なんて、どれだけお酒に弱いんだ……。

「初めてお酒飲んだんですけど、体が熱くなってフワフワして不思議ですね」

可愛く頬笑む彼女を見て、成人しても人前で絶対お酒を飲ませるものかと思った。

こんな可愛い姿、襲ってくださいと言ってるようではないか。

「みんなは？」

「まだ打ち上げ中ですよ。先輩が酔いつぶれちゃったから、古谷教授から先輩の介抱頼まれたんです」

見捨てられた事も忘れて、古谷教授に心の底から感謝した。

「田辺さん大丈夫だった？朝比奈先輩に襲われなかった？」

「柎木先輩が襲われている間に、古谷教授を呼びにいたので大丈夫です」

彼女が無事で良かった。

「でも不思議なんですよね。どうして朝比奈先輩まで倒れたんだろ
う?」

「古谷教授何したの?」

「朝比奈先輩にスポーツドリンクを飲ませただけですよ。酔っ払っ
てたから、よい冷ましにして事ですよね?」

わかってやってるなら、そうとうえげつない。紳士なはずの古谷
教授が悪魔に見えた。

「田辺さん覚えておいたほうがいいよ。酔った人に水分補給でスポ
ーツドリンク飲ませちゃ絶対だめ」

「?」

「スポーツドリンクは吸収が早いでしょ?お酒が入ってる時飲むと、
まだ吸収されてなかったアルコールまで一緒に一気に吸収しちゃう
から、酌量するんだよ」

紫は目を丸くして驚いていた。

「でも自業自得ですよね」

クスクスと笑う紫の笑顔も、いつもより毒がなく無邪気だった。

ああ、ずっとこのまま過ごしたいな……。

しかし先ほどから我慢していたのだが、そろそろ我慢の限界だっ
た。

「田辺さん……」

「どうしました?」

月に照らされて彼女に膝枕されながら、見つめあうなんて最高の
シチュエーションなのに……

「吐きそう」

「はっ？ちよっと待ってください。ここじゃだめですよ」

「うん。トイレいってくる」

俺は無理やり体をおこして、立ち上がったが、体がぐらぐらする。

「危ないです。私もついていきます」

「でも……」

「古谷教授に頼まれたからです」

結局断りきれずについてきてもらう事にした。

その時の判断を後に後悔するとも知らずに。

繋がる思い

紫をトイレの前に待たせて、慌てて駆け込んだ。

胃の中のものを出し切って、しばらくぐったりした。

洗面台で顔まで洗ったら、気持ちが大いぶすっきりしてくる。

そこで冷静になって思った。

夜の学校のトイレって不気味だな。そんな所に女の子一人にさせちゃいけない。

「ごめん、お待たせ……」

そう言いながらトイレを出たが、紫はいなかった。

あたりを見渡しても誰もいない。

先に戻ったのかな？

嫌な予感がしてあたりを注意深く観察すると、ソレが目に入った。

紫の靴だった。

譲司の心臓が跳ね上がった。

靴を片方だけ残していくなんで、普通ありえない。

紫に何があった？

気づけば紫の名を叫びながら走り始めていた。

手近な部屋を次々に開けながら探すか、見つからない。

落ち着け、自分。

夜の学校になんて普段は誰もこない。

今日ここにいるということは、打ち上げの参加者の仕業の可能性が高い。

酔っているなら、そう遠くまで行ってないだろう。

落ち着いて周りの音に注意深く耳を傾けていたら、何かがぶつかるような物音がした。

音がした方に慌てて駆け寄ると、近くの扉から声が聞こえた。

「榎木先輩……」

絞りだすような紫の悲鳴に、頭の中を真っ白にしながら扉を開けた。

「紫！」

部屋の中で紫が倒れていて、男が覆い被さっている。何かを口に出す前に勝手に体が動いた。

男の襟足を掴んで無理やり紫から引き剥がし、そのまま投げ飛ばして馬乗りになると、殴りつけていた。

あの鈴木だった。

目の前の男が行った行為と、気をつけなければと思っていたのに守れなかった自分への怒りで、完全に我を忘れていた。

自分の中の狂気を拳にこめてひたすら殴り続けていた。

俺を正気に戻したのは、小さな鳴き声だった。

「ひっく」

押し殺していたのに、思わず漏れたか細い声に震える。

鈴木は俺に殴られて、誰だかわからなくなるぐらい顔が腫れ上がったまま、気絶していた。

ほっつておいても問題ないだろう。それよりも今は紫の方が心配だ。

紫は俺に背を向け、壁際で座りこんで肩を震わせていた。

服は少し乱れていたが、まだひどい事をされる前だったようだ。

ゆっくり近づいたが、そばまで近づいた時に少しためらってしまった。

たった今男に襲われて恐怖を味わった彼女が、俺に怯えてしまわないだろうか？

できるだけ優しく声をかけた。

「紫……もう大丈夫だよ」

紫は俺に背を向けたままうわごとのように呟いた。

「……けいたい……」

後ろから覗きこむと、彼女は両手で携帯を握りしめていた。

あのキッズ携帯は液晶ディスプレイにヒビが入っていて、電源も切れていた。

「……壊れちゃった……お父さんやお母さんから連絡あったら……どうしよう……」

頭を殴られるような衝撃を覚えた。

今彼女は男に襲われた事よりも、壊された携帯にショックを受けている。

6年間連絡もなかったのに、それでもなおあきらめられない、た

った一つの希望が壊されたせいで。
思わず震える彼女の体を後ろから抱きしめていた。

「大丈夫。携帯なんて、修理すればいい」

「でも……でも……治らなくて買い替えたら、番号変わってしまうんじゃない……」

俺は宥めるように彼女の頭を撫でた。

「大丈夫。機種変しても番号はかわらないから」

彼女は頭を上げて俺を見上げた。

涙が頬を濡らし、目は不安に揺れていた。

「本当に？」

「本当。明日朝一で携帯ショップ行こう。だからそれまで我慢して
紫は小さく頷いた。

そして押さえていた感情を、すべて絞りだすように泣きじゃくる。

「……怖かった……」

「怖かったんだね。よく頑張った」

「体触られて……気持ち悪くて……でも私何にもできなかった……」
「紫は何にも悪くない。悪くないよ」

俺は壊れ物を扱うようにそっと彼女を抱きしめて、ずっと頭を撫でていた。

一歩進んで二歩下がる

嵐の一夜があけ、俺と紫は朝一番に携帯ショップに向かった。

店員の話だと、かなり損傷が激しいので、修理にだすより機種変の方が安いのではないか。

また古い機種のため、部品がなく修理できない可能性があるとの事だった。

仕方なしに機種変する事になったが、そこでまた揉めた。

「これ可愛いですね」

「なんでまたキッズ携帯選ぶかなあ。却下」

「じゃあシンプルなおっちで」

「シンプルすぎるにもほどがあるよ。高齢者用の携帯じゃないか」
「せっかく新しい携帯にするというのに、まったく女子大生らしくらぬチヨイスにため息がでる。」

「今の機種はカメラとかワンセグとかいろいろついてて便利だし、
いつそスマートフォンとか……」

「無駄に機能あっても使わないし」

どうにも頑なな紫の態度に、不信を抱いた。

「もしかして田辺さん。機械オンチとか？」

「そ、そんなことないですよ」

あつ、今声裏返った。凶星だったようだ。

俺は一つの携帯を手にとって渡した。

「カメラやワンセグもついてるけど、機能を絞って使いやすくしてあるやつだから、オススメ」

ライトユーザーの女の子向けな可愛いデザインだ。

紫は服にはこだわらないが、小物類は結構可愛いもの好きである。そのデザインが気に入ったようで、渋々という振りをしてそれに決めた。

「今度こそ、メール機能付き、アドレス制限ない機種だし、アドレス交換しようよ」

「いいですよ」

ダメもとで言ったのにあっさり頷かれてびっくりした。

「襲われた時、携帯で助けを呼ぼうと思ったんです。でもお父さん達は電話にできるかわからないし、おじいちゃん達に連絡しても間に合わないと思いました」

目を伏せ、ちよつと苦しそうに紫は語り出した。

「近くにいる先輩なら間に合うと思ったけど、アドレス知らないし……あの時後悔しました。先輩とアドレス交換しなかった事……だから思わず先輩の名前なんか呼んじゃって……」

思わず嬉しさがこみ上げてきて呟いた。

「紫……」

「昨日も思ったんですけど、どさくさにまぎれて勝手に名前ではばないでください。馴れ馴れしい」

俺の感動をバツサリと、切り捨てて紫は横目で睨んだ。

「すみません。田辺さん」

「よろしい」
すっかり調教された犬の気分だった。

「で、鈴木のことどうするの？田辺さんが任せてって言ったから放置したけど」

昨日ボコボコに殴られて気絶した鈴木を、放置して帰ったのだ。

紫は黒い笑みを浮かべた。

「元々セクハラされた時から、報復しようと情報収集や段取りはしてたんです。過去のセクハラ被害とか詳細に調べましたよ」

不気味に笑う彼女に恐ろしいものを感じながら質問した。

「どうするの？」

「セクハラや強姦未遂も含めて全部噂でばらまきますよ。学校から、自宅周辺、実家や親戚まで。どこにも逃げ場がなくなるくらい徹底的に追い込んでやります」

同情はしない。しかしそこまでやるか？とボコボコに殴っておきながら思ってしまった。

ちなみにその後鈴木は自主退学し、消息不明になった。ホームレス姿の鈴木を目撃したという話もあったが、本当だろうか？

帰ってからさっそく初メールを送った。今の紫の携帯に家族以外は俺のアドレスしかないというのが嬉しかった。

『お疲れ様（＾o＾）／昨日は色々大変だったね（T-T）でも新しい携帯になったからメールできるようになったね（ ）これからメールいっぱいしようね（＾　＾） - Chuu! -!』

紫はメール初心者なのでデコメとかは止めてみた。それでもそうとう自分でも浮かれていたと思う。

翌朝目が覚めたら紫からメールがきていた。

『メール、キシヨイ。ウザイからもう送んな。馬鹿じゃない？』

朝から刺激的なメールに目が覚めた。

紫なんかメールだとキャラ違う……

俺はしばらく悩んだが、意を決して紫に電話した。

『田辺さん。おはよう』

『おはようございます。どうかしました？』

『メールの事なんだけど……』

『ああ……私もメール初心者で、メールの作法というんですか？わからないからお隣の女子中学生ゆみちゃんに手伝ってもらったんですよね』

お隣のゆみちゃん。キミの仕業がこんなむごい初メール……と見知らぬゆみちゃんを恨みたくなった。

『あまりに気持ち悪いメールに吐き気がしたので、この不愉快さを的確に表現するにはどうしたらいいものか？と相談したんですが伝わりました？』

前言撤回。あのメールはゆみちゃんのせいじゃなかったんだね。疑ってごめんよ。

『メールって難しいですね。もっと罵倒したかったのですが、文字だけではうまく表現できなくて……』

『もう十分です。勘弁してください』

夏も終わりに近づく頃、やっと彼女のメルアドをゲットした。

誰かに自慢したくて、つい朝比奈先輩に言ってみたら

「普通女の子と会ったその日にメルアド交換ぐらいできるだろ。どれだけ時間かかってるんだ」

と、非常にもっともな突っ込みを受けた。
恋愛感情どころか、友人としても認めて貰えているか怪しい。
先の事を考えると前途多難だ。それでも茨の道を進めてしまっ
ど、俺は彼女に参っている。

さて次はどんな方法で、アタックするか？
2人の恋愛バトルはまだまだ終わらない。

第1部終了

一歩進んで二歩下がる（後書き）

第1部終了です。

ここで終わるのか！という感じですね。

一時譲司と紫の話をお休みして

第2部ではもう一人の難攻不落彼女をお届けしたいと思います。
引き続きご覧いただければ嬉しいです。

サブキャラの外伝とかご希望があれば書きたいなと思ってるのですが、皆さんどんな話がいいですか？

感想、メッセージお待ちしております。

朝比奈裕一の場合　プロローグ（前書き）

榎木譲司編でも登場した、朝比奈の物語です。
腹黒たらしの恋物語をお楽しみください。

朝比奈裕一の場合 プロローグ

話は譲司と紫が出会う前の年の初夏まで遡る。

当時文学部4年だった朝比奈は、卒論と院試の準備で忙しい日々を送っていた。

授業の合間に隠れて昼寝をするのが密かな息抜きだ。

朝比奈は警戒心が人一倍強い。一目に触れそう所では絶対寝ない。隠れていても、学校だと誰かに見られるかもしれない、と思うと深く眠る事もできずに、普段はうたた寝する程度だった。

だがその日は絶対人が来ないであろう場所だったので、油断してだいぶ熟睡していたようだ。

床にバックを置いて枕にし、眼鏡はつけたまま、上着を頭にかけて、夢の世界にいた彼を、現実に戻す者がいるなど想像もしていなかった。

そう彼は油断していたのだ。

「あゝさゝひゝな！なんてところで寝てるのよ」

そう大声で叫びながら、彼女は上着を勢いよくむしりとった。

突然叩き起こされ、寝ぼけていた朝比奈は、普段なら絶対しないようなミスをした。

「……………いい眺め……………」

床に寝転がってる朝比奈。その真横で美女が仁王立ちで立っ

る。彼女は今日膝丈のフレアスカートを履いていて、朝比奈の角度から中がよく見えた。

朝比奈の視線と言葉で気づいた彼女は顔を真っ赤にした。しかしそこから先が彼女が普通の女の子ではない所だった。

「きゃー！変態」

そう言っつて、彼女は足を振り上げ、思いっきり朝比奈の腹を踏みつけた。

「ゲホッ」

思わず腹を抱えて起き上がる朝比奈。

彼女もしゃがみこみ、朝比奈から奪った上着で足を覆った。

朝比奈の顔近くに彼女の顔があった。

はつきり言っつて美人だ。薄化粧でも華のある顔立ちで、高嶺の花と言っつてもいいほど。

スタイルも抜群にいいし、頭もいい。

彼女は経済学部4年で、学部は違っつが、4年間不思議な腐れ縁で繋がっつている。

色んな女の子に手を出してきた朝比奈だが、彼女に手を出そうと思っつた事は一度もない。

第1に彼女には隙がなさすぎる。

朝比奈は客観的に見て、特別かっつこいいわけではなかつた。

そんな彼がモテるのは、彼が今時の草食系男子風を装っつた、肉食男子だからだ。

朝比奈は姉や妹に囲まれ、小さな頃から女の子がいる事が当たり前な環境に育ったせい、女の子に警戒心を持たせずに親しくなるのは得意だった。

普通の女友達はたくさんいて、「朝比奈っていいひとで終わる夕イブだよ〜」などとよく言われる。

しかし朝比奈はいいひとで終わる男ではない。

女の子だってたまには弱る時もある。失恋した、友達と喧嘩した、バイトで失敗したなどささいな事でも落ち込むものだ。

それを朝比奈は見逃さない、弱った彼女達を慰める振りをして近づき、そこにつけこむ。

たいていの女の子はこれで美味くいくのだ。

しかし目の前の彼女には隙がなかった。

朝比奈は勝ち目がない勝負はしない。

それに……

彼女は朝比奈が見ている事に気づいた。

「顔近い！何見てるのよ。このたらし！」

そう言いながら、朝比奈の頬に肘鉄がとんだ。

第2に、そう彼女はひどく暴力的で危険だった。

猟奇的な彼女

「なんで君ここにいるの」

朝比奈は痛む頬をさすっている。

彼女はむくれた顔をそらしながら答えた。

「あんたを探してたのよ」

「ふ〜ん……毎回関心するよ……よく見つけるよね」

「あんたが毎回変な所に隠れて寝るんじゃない。ここどこだと思ってるのよ」

手近にあった本棚を、彼女は乱暴に叩いた。薄暗い部屋にホコリが舞う。

「大学図書館の書庫」

「そうよ。関係者以外立ちいり禁止区域で、どうどうと寝てるんじゃないわよ」

彼女の言う通りだが、その立ちいり禁止区域に彼女も入ってきているわけで、人に文句を言える立場ではないと思う。

「なんでわかったの？」

「あんたがこの前、司書のお姉さん口説いてるの見かけたから、もしかしてと思って」

「口説いてるだなんて人聞きが悪いな。友達になっただけだよ」

「あんたの『友達』は信用できないわよ。どうせ友達以上恋人未満な関係ばかりじゃない」

いつもながらに鋭い一言だ。

周りにバレないように曖昧に交友関係広げてるはずなのに、彼女はいつのまにか嗅ぎ付けてくる。

しかも大概、僕に都合の悪い、面倒事を持ってくるのだ。関わらないに、こした事はない

「君みたいな美人さんに、わざわざこんな所まで追いかけて貰えて嬉しいよ。でも僕は用事ないからさようなら。このまま寝かせて」
言い放ってそのまま床に寝転がる。

しかし彼女がそんな事ぐらいで諦めてくれるわけもなかったのだ。

彼女は感情的な声を抑えて、冷やかに言った。

「私がここに来たわけ知ってて、あんたわざとやってるでしょ」

僕は彼女を無視し、寝返りをうって背を向けた。

聞きたくないと意思表示したつもりだが彼女はそれを無視する。

「古谷教授に頼まれたのよ。朝比奈を探して連れてきてくれないか？って」

彼女の声は徐々に苛立ちをましていて、そろそろ危険区域だ。

「わざわざ経済学部の人に頼む事じゃないよね」

僕はこれ以上会話を続けるのが面倒になって、彼女の怒りを買うような言葉をわざと言った。

予測通り怒り狂った彼女は、僕のシャツの襟を掴んで無理やり引き上げた。

「誰のせいだと思ってるのよ。あんたが毎回影で隠れてトラブルおこすたびに、私が巻き込まれて、いつのまにか『朝比奈問題専用窓』として、上條彩花かみじょうあやかの名前が知れ渡ったんじゃない」

僕に噛みつきそうな勢いで、彼女が吠えた。

上條彩花——それがこの華のある美女の名前だ。
名は体を表すと言うが、まさに華のように艶やかに美しい彼女に
ぴったりの名前だ。

ただし凶暴さがセットでついてくるのが困り者。

上條は真面目な優等生で、面倒見がよく御節介だ。 自分に関係
なくとも誰かに頼られると、つつい口だし・手出ししてしまう。
僕がどこかの女の子を泣かせると、一番に嗅ぎつけて怒鳴り込ん
でくる。

迷惑な話だ。 関係ないのだからほっておいて欲しい。

「朝比奈……あんた何考えてるの？文学部の院試受けるんですよ。
ならなんで古谷教授から逃げ回ってるのよ」

「上條には関係ない」

僕はそれまでのいい加減な笑顔を捨てて、冷酷なまでに無表情で
上條を切り捨てた。

「関係なくないわよ。私は古谷教授に頼まれて……」

「無理やりにも連れて行く？それで君が責任とってくれるわけ？」

「はあ？責任って何言って……」

言いかけて止まった。僕が今まで上條に見せた事のない真剣な表
情をしていたからだろう。

「何か古谷教授に会つとまずい事があるわけ？」

「……………」
誰にも言いたくはなかったし、言ったら最後、御節介な彼女が首を突っ込んできそつだ。

上條は大きいため息をついた。

「でもいつまでも逃げ回ってもいられないでしょ」

「わかってる。これは僕の問題だから。古谷教授の所にも後で行くから、ほっておいてよ」

つい彼女にイライラして、すねたような言い方になってしまった。彼女の御節介な責任感が朝比奈は嫌いだった。

上條も僕の事を嫌ってるし、そろそろ愛想つかして立ち去るだろうと高をくくっていた。

「わかった。私があんたの面倒みてあげる。だから来なさい」

そう言つて上條は僕の襟を掴んだまま、ずるずると引きずった。

え……僕の面倒みるって、まさか僕にまで御節介するつもりか？などと考えてる場合ではなかった。

「ぐえっ。首……苦しい……行くから手を離して……」

「だったら早く立ちなさいよ」

どこからでもかかってきなさいとばかりに、上條は不敵に笑った。

上等だ。この御節介女が途中で音をあげたら、口先だけの人間と非難してやる。

僕は暗い闘志を燃やしつつ、立ち上がり歩き出した。

猟奇的な彼女（後書き）

朝比奈編は榎木編とは違い、朝比奈・上条両者の視点で書いていきます

というわけで、次のシーンは上条彩花視点です

招かれざる客

彩花は歩きながら、何度も後ろを確認した。

朝比奈がついつくるのか信用できなかったのだ。

いつだってその胡散臭い笑顔で煙に巻くヤツが、珍しく余裕をなくしているようにみえた。

だから話も聞かずに面倒みるなどと言ってしまったのだ。

なんでこんな詐欺師のような性悪男を助ける事になってしまったのか。

ふとそこで嫌な事を思いだしてしまった。

「朝比奈。美沙ちゃんがあんとより戻したがってたわよ」

「みさちゃん？美沙ちゃんかな？美咲ちゃんかな？美佐恵ちゃんや美砂子ちゃんもいたなあ……」

脳天気にとぼける朝比奈に苛立って振り返った。

「あんたそのうち刺されるわよ！」

「そんなひどい別れ方しないよ。いつも彼女達から別れたいって言うてるんだ」

「あんたがそう言うように仕向けてるんですよ。じゃなきどうして午前中に彼女と別れて、午後には新しい彼女ができるなんて曲芸できるのよ」

朝比奈は目を丸くして、わざと驚いたというような顔をした。

「相変わらずよくそんな情報掴んでくるよね。口が固い子しか選んでないんだけどな」

「人徳よ。『朝比奈問題専用窓口』をなめるんじゃないわよ」

私は朝比奈をまつすぐに睨んだ。朝比奈と私の身長差は5cm程。いつも彩花は5cmヒールの靴を履いてるので、朝比奈と視線は同じだ。

いつだって対等に張り合ってきた。学部は違うが、1年の時は一般教養で授業が同じ事もあった。

負けず嫌いの私はいつだって一番を目指して努力してた。

入学して気がゆるむ同級生達を後目に、1年からがむしゃらに勉強に集中してた。そんな私に余裕で追いつく嫌みな男、それが朝比奈だった。

最初は嘘の良い人面にも騙されていたが、実は影で女の子と遊んでいる事を知って腸が煮えくりかえるほど腹がたった。

人が必死に勉強してるのに、アイツは女遊びをしながら余裕で同じぐらいの成績だなんて許せない。

逆恨みかもしれないが、それ以来朝比奈が何かやらかさないか常に情報収集をして、見つけたら一番に乗り込んでいた。

朝比奈が何をためらっているのか？

気にはなったが、聞いて素直に言うとは思えず、結局何も知らないまま古谷教授の教授室へとついてしまった。

朝比奈をちらりと見ると、いつでも余裕な男が緊張していた。

私も一度深呼吸してドアをノックした。

「上条さん。すみませんね、面倒な事をお願いして」

古谷教授はいつもと変わらず、上品な紳士という感じで穏やかに微笑んだ。

「朝比奈君もわざわざ呼び出してすまなかったね。話があるんだ。かけなさい。上条さんご苦労様」

教授は優雅に応接室のソファを指し示した。暗に私に席を外して

欲しいと言われた気がして、部屋を出て行くつもりだったのだ。
しかし朝比奈が私の腕を掴んで引き止めた。

「朝比奈……」

私は文句を言おうとしたが、掴んだ朝比奈の手がわずかに震えていて、何もいえなくなってしまった。

「教授さえよれしければ、上条さんにも同席でお話を伺ってもいいですか？」

「いいですよ。君がいいなら」

古谷教授はソファに優雅に足を組んで座った。

朝比奈は向かい合わせに座り、朝比奈に腕を掴まれたままの私は、仕方なく朝比奈の隣に座った。

世間話もなく、教授はいきなり本題に入った。

「夏休み前にM大講師達の間で恒例の懇親会があるのは知っているかな？」

「はい、噂は聞いています」

「講師だけでなく、一部の学生も呼ばれるんだけどね。朝比奈君もこない？」

「お気持ちは嬉しいのですが……僕お酒が苦手で、ご期待にはそえないかと……」

「春の飲み会で、酒豪自慢が軒並み酔いつぶれた中、最後まで飲んでたんだって？」

「誰にそんな話を？」

「経済学部の柎木君」

朝比奈は表情を一切変えずに、私の腕を強く握りしめた。手から物凄い怒りが伝わってきて、恐ろしくなった。

経済学部の柎木君ってあの噂の『王子』よね。

話した事もない後輩だが、顔は知っている。きつと後で朝比奈にむづい目に会うんだろうなと思うと、同情してしまう。

「そんな堅苦しくない会だから、気軽に参加して欲しいですね。君の進路希望は研究職でしょう。今のうちから色々な先生方と交流を深めるのも君のためですよ」

古谷教授の言う事はもつともだ。世渡り上手なこの男の事だ、親睦会でちゃっかり先生方に気に入られるなど簡単な事だろう。なのになぜ朝比奈は親睦会に参加する事を嫌がるのだろう。

その時初めて朝比奈が私に視線を向けた。とてつもなく嫌な予感がする。

「その親睦会上条さんも同席してもいいですか？彼女意外にお酒好きなんですよ」

「ちょ……ちよっと待って……」

慌てて止めようとしたが、古谷教授は目を輝かせて私を見た。

「それはいい！ぜひ来なさい」

もう行きませんとは言い出せる雰囲気ではなく、私は苦々しく朝比奈を睨みつけるしかなかった。

七月の宴

「なんであんと懇親会にでなきゃいけないのよ」

上條は怒りながら廊下を歩いていった。横を歩く僕をすごい目で睨んでいる。

「『面倒みる』んでしょ。付き合ってくれてもいいじゃないか」

「じゃあ、事情を話しなさいよ。あんたがたかが飲み会ごとき嫌がる理由よ」

何も話さずに済ませる事はできなさそうだ。

僕はとりあえず空き教室を探して、上条を引っ張り込んだ。

文句を言おうと口を開ける上条に、人差し指一本立てて黙らせた。

「他の人には黙って欲しいんだけど……」

僕がわざともらったいぶつて話し始めると、彼女はイライラした顔をした。

非常にわかりやすく面白いなと思ったが、あまりからかってると鉄拳が飛んできそうだ。

「僕、酒癖悪いんだ。先生方の前で醜態させないじゃない？」

「でも、酒強いんじゃない……」

「普通の人と同じくらい飲む程度なら、問題ないんだけどね」

そこでどう説明したものかと悩んだ。

「『山村会』って知ってる？」

彼女は素直に首を横に振った。

「山村学長を中心にした酒好きの集まりで、古谷教授も中心人物なんだ。懇親会に行ったらかなり飲まされると思う」

「それはまずそうね」

「だから様子見てまずそうだったら、帰る口実に付き合ってくれないか？」

そう説明して、僕達は懇親会の打ち合わせをした。

お人好しなのか本気で協力しようとする上条に、思わず苦笑して怒こられた。

そんな簡単に引き受けて、どうなっても知らないからな。

懇親会当日。

ホテルの一室を借りた、立食型の飲み会上条は驚き戸惑っていた。

「たかが大学の懇親会でホテルの部屋借りる？」

「会場費用は大学の経費じゃなくて、諸先生方のポケットマネーらしいよ」

うちの大学の教授陣は教職以外に、文筆業やマスメディアの露出などで稼いでいる、裕福な人が多い。

つまりは金持ちの道楽だよなど、口には出さずに悪態をついた。

「じゃあ打ち合わせ通りに」

そう言って会場入り口で上条と別れた。

一緒に上条も巻き込まれてよいつぶれたら困るので、少し離れた所から監視してもらおう事になっている。

「古谷教授。遅くなりました」

「おお。朝比奈君。待っていたよ」

早めにきてすでに始めていた先生方の顔ぶれに、思わず緊張した。

山村学長や古谷教授を含め、学部長クラスの先生ばかり。
なんでお偉い方々に限って酒豪揃いばかりなのか。

「三田園教授のメキシコ土産のテキーラだよ。オークションで手に入れた上物だそう。ご相伴いただこうじゃないか」

始めからテキーラとはさすが悪名高き『山村会』だ。今まで数々の学生達を酒で潰してきた伝説は伊達じゃない。

テキーラって一般的には40度くらいだよな。
それを食前酒のように気軽に楽しむ爺さん達に寒気を覚えた。

極力控えめに飲んでいたが、ウイスキーだの、ブランデーだの40度超えの酒を次々進められた。

かなりキツイアルコールであるにもかかわらず、どれも高級品のためか口当たりよすぎて恐ろしい。

強くて高級な酒自慢大会を冷めた目で見ながら、しかし徐々に自分の理性が足下からぐらついてくる気がした。

「皆さん素晴らしいコレクションばかりですなあ。しかしそろそろ趣向を変えませんか？」

やっと酒豪自慢大会から解放されるかと安堵したが、甘かった。

「そうですね。やはりこの程度の弱い酒ばかりじゃ、全然酔えませんよね」

頷き合つ爺さん達に思わず表情が引きつった。

40度の酒をストレートで飲んで弱いつてどんな感覚だ。

「やはり安くても、強い酒にかぎりますな。どうですラム酒などは『バカルディ151』です」

瓶の表示には75・5度と書かれている。見ただけで酔いそう。

「私はやっぱり『アブサン』ですね。いや若い頃はよくこれを飲んでいました」

こちらは89度、もはやこれ以上先など見たくない……

頭がぼーっとしてきて、体から何かが湧き上がってくる。

ああ……もう限界だ。

僕は教授達から目をそらし、藁をも掴む思いで彼女を探した。

美女と野獣

上条は大原教授が主催するワインの集いに参加しつつ、遠くから朝比奈の様子を伺っていた。

先ほどから朝比奈の挙動がわずかにおかしくなっている事に不安を覚えた。

その時朝比奈がこちらを向いてアイコンタクトした。

「大原教授、今日は失礼します」

私は一人抜け出して、わざと足下をふらつかせながら歩いた。

「朝比奈、ごめん……」

「大丈夫？上条」

本当に大丈夫じゃないのは朝比奈の方だろうが、打ち合わせの通りなので話を合わせた。

「すみません教授。上条さんが酔ってしまったので、送っていきたいのですが、失礼してもよろしいでしょうか？」

「それはいけない。若い女性一人は危険だから送ってあげなさい」

朝比奈は周りの先生方に挨拶して会場を出るまで、いつもの嘘くさい笑顔を崩さなかった。

しかし会場を出たとたん笑顔が消えて、突然足早に歩き始めた。慌てて追いかけるが、ヒールと多少のアルコールも手伝って、なかなか朝比奈に追いつけない。

ホテルを出て、中庭の方へ歩き始める朝比奈を無理やり呼び止めた。

「朝比奈！ちょっと待ちなさいよ」

朝比奈は突然足を止めて近くのベンチへ座った。

肩を落として体を震わせる姿はひどく具合が悪そうだった。

「朝比奈！あんた大丈夫？」

「だい、じょうぶ……じゃない……もう……げんかい……」

慌てて朝比奈の前にしゃがんで、奴の顔を覗き込んだ。

「気持ち悪いの？トイレ行こうか？ついてく……」

最後まで言う前に朝比奈に腕を掴まれ、ひっぱられた。

天地がひっくり帰ったかと思うと、気づけば私はベンチに押し倒され、朝比奈が上に覆い被さっていた。

「朝比奈！何する……の……よ……」

いつもの調子で怒鳴るつもりが、小声になってしまった。

朝比奈はぞつとするほど意地の悪い笑みを浮かべて、私を見下ろしていた。

「つくづくお人好しでバカな女。ついてこなければよかったものを……」

朝比奈の目が狂気に捕らわれたように輝いていた。とても言葉が通じそうにない。

朝比奈の指が私の頬を撫でる。まるで肉食獣が獲物に爪を立てるように。

「怖いのか？いつもの威勢がいい上条彩花らしくないなあ。もっと抵抗して俺を楽しませろよ」

下品な笑い声に吐き気がする。私は睨み返すと、これ以上ないほどに口の端を釣り上げて笑った。

「いい顔だ……その強気な顔をいつまでしてられるかな？」

そう言いながら朝比奈は顔を近づけてきた。

その瞬間朝比奈は油断していた。そこを狙って私は思いつきり蹴

り上げた。

「ぐはあ」

見事に急所に当たって朝比奈は思わず起き上がった。

続けざまに顎に膝蹴りをいれると、朝比奈は後ろに倒れた。

こういう時は隙をみせてはいけない。完膚なきまでに叩きのめさなければ。

腹や胸に蹴りを入れ、ついでに頬をグーで何発か殴っておいた。

「目―醒めたか」

「ああ……でももうちょっと手加減してくれても……」

「するか、あほんだらあ」

腹がたつたので顔をヒールで蹴っておいた。

翌日以降腫れ上がった朝比奈の顔にみんな驚いていた。

なんでも『凶暴な酔っ払いに絡まれた』と説明してるらしい。

凶暴な酔っ払いで絡んできたのは朝比奈の方だとむかついたので、今度あつたらもう一回ぐらい殴っておこうと思った。

美女と野獣（後書き）

鬼畜ドS朝比奈VS暴力最強女王様上条の一戦でした
朝比奈が特別弱いわけじゃないんだけどな……
ただもやして現代っ子らしく喧嘩もせずになっただけ
むしろ喧嘩慣れしてる上条がすごいのだ

試練台

夏休みだったが、卒論の調べ物のために、大学図書館に来ていた。自宅の効かない冷房で過ごすよりずっと快適というのもあったが、朝比奈は欠伸をかみ殺しながらページをめくった。

近頃の熱帯夜でどうせ眠れないからと、つつい昨日の夜も徹夜で卒論にかかってしまった。

睡眠不足じゃろくな物書けやしないのだが。

今だつて本を開いていても全然頭に入ってこない。

このままここで寝てしまおうかと、机に肘をついてうとうととしていた。

いきなり頭に衝撃がはしって一気に目が覚めた。

「こんな所で堂々と寝るなんてあんたらしくくないわね」

「上条、手加減したつもり？ たんこぶできてんだけど」

上条は満足そうに微笑んで、僕の向かいの席に座った。

多くの本を開きながら、レポート用紙も開く。

「卒論？」

「そう。あんたもでしょ」

「上条は就活だろ、こんな所でのんびりしてていいのか？」

「私もう工商事に内定もらってるから」

上条はなんでもない事のように言っているが、一流企業だ。この就職氷河期によく入れたものだと感じしてしまう。

「会社の受付嬢とか？」

上条なら見栄えは抜群である。凶暴な番犬だが。

しかし上条は鼻で笑った。

「なんで私がバカみたいに愛想振りまくために会社入んなきゃいけないのよ。総合職よ。いつか初の女重役の座だって狙ってたんだから」
あまりに無謀な夢に呆れるを通り越して、笑ってしまった。

「何笑ってんのよ」

「いや、非現実的な夢なのに、上条ならやってしまいそうな気がして」

「私だってかなり無謀だってわかってるわよ。でも私は本気でとこ
とんやるわよ」

バカみたいにまっすぐで、お人好しな彼女が、ドロドロとした企業の中でどこまでやってくれるのか。見てみたい気もした。

まだ夏の途中のある日、古谷教授から呼び出された。

しかも上条も一緒に夜、教授室にきてほしいという事だった。

嫌な予感しかしないが、断る事などできない。

「なんで私まで巻き込まれるわけ？あんた今度は何やらかしたの？」

「僕もわからないんだ」

「まあ、あんたの場合バレたらまずい事だらけだから、どれが心あたりかわからないでしょ」

反論できないところが悔しい。

軽口を叩きながら歩いていたら、あっという間に教授室についてしまった。

気が重いが、ドアをゆっくりとノックした。

日も暮れた教授室というのは静かで、いつも以上に緊張した。

古谷教授に勧められるままソファに座った。

「すみませんね。こんな時間に。すぐに本題に入りましょう」

古谷教授はいつも通りの落ち着いた佇まいで、僕と上条を見てい

た。何を言われるのか緊張し、身構えてつい前屈みになった。

「朝比奈君は院に進んで、いずれは研究者の道を進みたいという事でしたな」

「はい」

「君の成績なら、よほど卒論に手を抜かない限り成績面では問題ないでしょうね」

「ありがとうございます」

誉められても全く安心などできなかつた。ここからが本命だろう。

「まあ、女性関係に関しては大きなトラブルも無いようだし、若いのですから私からとやかくは言いませんが……」

ぎくりとした。この教授はどこまで僕の事を知っているのだろう。次の言葉を聞くのが恐ろしい。

「今後お酒で醜態晒すような事があると、私も困るんですよ。院生の監督責任問題にもなりますからね」

顔から血の気が引いていく気がした。教授はすべて知っているのだ。

「君がどの程度飲むと危険なのか確認しようと思親会に呼んだのに、この前は途中で逃げられてしまいましたからね」

拳を強く握りしめた。ああ……教授は今僕に引導を渡そうとしている。

確かにこの先酒の席をすべて断るわけにも行かない、酒でトラブルをおこせば僕の未来はないし、教授に迷惑もかかる。

それでも、自分の努力と関係ない所で自分の目標を失うことはとてもつらかつた。

「だから今試験をしましょう」

「え……」

教授の言葉が理解できず、間拔けな声しか出なかった。

古谷教授は立ち上がって、瓶とグラスを持ってきた。

どこのスーパーにもありそうな、日本のメーカーのウイスキーだ。

「君がどの程度飲むと危険なのか、どうなるのか見せてください」

そう言って古谷教授はグラスにウイスキーを注いだ。

琥珀色の液体が誘うように怪しく光る。これは自分を壊す危険な飲み物だ。

「待つてください。朝比奈にそんなに飲ますなんて……」

上條が止めに入った。無理もない。彼女はこの前の僕を見てるのだ。

「だから上條さんにも来ていただきました。もし朝比奈君が暴れるような事があつたら、一緒に止めてください」

飲まなくてもすでに教授にはバレてるわけだ。飲まなければ後がない。

「いただきます」

覚悟を決めて僕は琥珀色の液体を喉に流しこんだ。

それから何杯飲んだのかよく覚えていない。

普段なら酔って理性を無くしても記憶は失わないのだが。気づ

けば僕は泥に埋もれるように、深い眠りについていた。

試練台（後書き）

次も朝比奈のターン続きます

次で一応前半終了かも

榎木譲司編に比べて短いですね

女神の報酬

目を覚ました時、むごい二日酔いで体を起こすのもしんどい。なんでこんな二日酔い……ああ……そうだ……古谷教授に試験と言われて酒を飲まされたんだ。

僕は教授室の応接室のソファで眠っていたようだ。今この部屋には誰もいない。どうなったんだろう。記憶があやふやで怖かった。

外は明け方なのか、少し光が差し始めている。だいぶ寝てしまったんだな。

その時ふと気がついた。応接室と教授室を繋ぐ扉が少し空いていて、光が漏れている。

近づいて覗くと、古谷教授がパソコンに向かって作業していた。

「ああ、朝比奈君、目が覚めましたか」

古谷教授は時計を確認する。つられて僕も見ると、4時半頃だった。

「もう朝だったんですね。朝比奈君もコーヒー飲みますか？」

古谷教授はゆっくりと立ち上がったが、慌てて僕は止めた。

「僕が入れます」

二人分をコーヒーマーカーにセットしながら、朝比奈は冷や汗をかいていた。

昨日自分は何をしでかしたんだろう？試験はどうなったのか？上條は？

聞きたい事は色々あったが、怖くて口を開けない。

「上條さんは終電前に帰りましたよ。君酔いつぶれてて大丈夫そうだったし」

「すみません。先生ずっと起きていらしたんですか？」

「学会の論文や本の原稿などたまってましたからね。気にする事はありませんよ」

僕からコーヒーを受け取った教授は、立ちのぼる湯気の香りを楽しみながら微笑んだ。

「それと試験についてですが」

僕は息を飲んで次の言葉を待った。

「合格です。もちろん卒論は別で頑張ってくださいね」

僕は力が抜けて呆然としながら、教授を見つめた。

「ほんとう……ですか？」

「まあ、だいぶ酒に強いようですね。飲み過ぎなければ問題ないですよ。理性を失っても私の言う事はちゃんと聞いてくれましたし」

「あ、ありがとうございます」

「私も付き合って飲んでくれる人がいないと寂しいのでね。『飲んだくれジジイ』などと言われても気にしませんよ」

そ、そんな事言ったのか？青ざめながら震えてしまった。

「ただし条件があります」

「条件？」

「今後私か上條さんの前以外でお酒を飲まない事」

「先生の前はわかりますが、何故上條ですか？」

「上條さんは事情を知ってますし、万が一君が暴れても、『力づく

で『どうかしてくるでしよう。まあ朝比奈君も私の前でしか飲めないなんてストレス溜まりそうだから、そこは大目に見てあげます』

『カづく』という単語をわざと強調して、教授はイタズラっ子のように微笑んだ。

そういえば昨日も、もしも僕が暴れた時のために上條を呼んだって言ってたな。

「懇親会の日酔っ払いに絡まれて怪我したって言ってましたが、あれ上條さんでしょう」

「なぜ……それを？」

「顔にすっかりヒール跡ついてましたからね。朝比奈君の顔に蹴りができるのは、上條さんぐらいじゃないですか」

恐るべし古谷教授。この人には何も隠し事などできはしないだろう。

「良かったじゃない」

そう言って上條は心からの笑顔を見せた。

「上條のおかげだよ」

教授に酒を勧められた時も、慌てて止めに入ってくれた。

最後まで彼女は僕の味方だった。

「ありがとう」

僕は頭を下げて言った。

「ちよ、ちよっと止めてよ。そんなしおらしい態度あんたらしくないわよ」

慌てる上條の顔はうつすら赤くなっている。照れてるのか？

意外に可愛いところあるじゃないか。手を振り上げようと拳を握り

しめてなければ。

頼むから照れ隠しで殴らないで欲しい。彼女の拳骨はシャレにならない。

駅前のコーヒーショップの中で、アイスコーヒーを飲みながら、上條と向かい合って結果報告をしていた。

見た目は綺麗なんだし、暴力さえなかったら美女とデート気分でも味わえるんだが。

上條の地雷は謎だ。いつその暴力がやってくるかわからないので、いつだってスリリングな会話になる。

上條は少し落ち着いたのか、振り上げた拳を下ろして呟いた。

「最初は勢いで『面倒みる』とか言っちゃったけど、途中から本気であんたが心配だったのよ」

「……え？」

意外な言葉に素で驚いてしまった。

「なんで？上條僕の事嫌いだったんじゃないあ……」

「嫌いよ。でも昔ほどじゃないわね。女遊びしながら、ヘラヘラ笑顔の余裕で成績上位だなんてム力つくじゃない。だから嫌がらせしやろうと思った」

だからあんなに絡んできたのか……。

面倒な女だと呆れた。

「でも違ったのよね。あんた、自分の弱みも努力してる姿も見せるの嫌いなだけでしょ。余裕のふりして、影でこっそり努力してるでしょ」

僕は思わず苦笑いした。凶星だったからだ。

そして少しイライラした。自分の内面を探られるのは嫌いだ。

「図書館で本読んでる時は、あんたいつもいい顔してるわよね。嘘くさくない、本当の笑顔でさ」

そんなとこまで見てたのか。

恥ずかしい、この場から早く逃げ出したい。

「あんたは私がバカみたいな夢を持つみたいに、本気で学問の道を究めたかったんでしょ。なのに酒癖の悪さなんて、努力じゃどうにもならない事でダメになりそうでしたらよかったのよね」

「そんなこと……」

慌てて否定しようとしたら、上條の手が伸びてきた。

また殴る気か？と身構えたら、人差し指で眉間をつかれた。

「最近ずつとここシワよりっぱなしだったわよ。目のクマだってひどかったし。寝てなかったんじゃない？」

そう言う彼女の笑顔はとびきり輝いてて、自分の事のように嬉しそうだった。

なんで嫌いな男を助けてこんな嬉しそうな顔できるんだ。

「もう降参……」

彼女に気づかれないように呟いた。

この瞬間僕の心は陥落していた。

上條彩花という、お人好しで暴力的な彼女に恋をしたのだ。

女神の報酬（後書き）

朝比奈ついに落ちましたね

長かった。ひねくれ者だから、なかなか思い通りにいきません
次も朝比奈のターン

ちなみに古谷教授は本編最強キャラです

老獪な老紳士大好物ですみません

残念な彼女と狼男（前書き）

今回は珍しく映画のタイトルにしませんでした
まあネタ切れなんですけどね

残念な彼女と狼男

「迷惑かけたんだから、一杯おごりなさいよね」

上條彩花のその希望には何の不満もなかった。

迷惑かけたのは事実で、多少たかられてもかまわない。

むしろ彼女に下心のある僕が、飲みに行くなどという絶好のチャンスを見逃すはずはなかった。

しかし彼女に連れられていった店は、男の僕でも十分引くほどのインパクトだった。

「おじさ〜ん。いつもの」

「はいよ！あやちゃん。珍しいね一人じゃないの。彼氏？」

「そんなもんじゃないわよ。コイツは今日の財布」

店員だけでなく、常連のオヤジ共と親しげに話す上條は生き生きしていた。大学にいる時より。

新橋ガード下のサラリーマンオヤジの憩いの場で寛ぐ女子大生。ものすごく残念な女だ。

「く〜うっ。染みる。やつぱ夏に熱爛もいいわよね」

手酌でおちよこをあおりながら、漬け物や干物をつつく。

夏に熱爛なんて、どんだけ飲んべえだ……。本当に残念な女だ。

「何よ。その上から目線の憐れみの表情は」

「いや、別に……。上條の意外な一面発見というか……」

ウーロン茶を飲みながら適当に濁した。

大学でこんな話したら上條株大暴落だな。まあ信じないだろうけ

ど。

M大学にも他の大学同様にミスM大というものがあり、学祭の花形である。

しかしミスM大は、ノミネートされた女子が辞退する事も多いので、新のミスM大ではないと言う男が多い。

そのためかいつの頃からか男だけの極秘投票による、裏ミスM大というものが存在する。

その裏ミスM大4連覇という偉業を成し遂げたのが、上條彩花だ。顔の美しさ、スタイルの良さ、さっぱりと裏表のない性格など、色々理由はあるが、一番はスキャンダルのない清純なイメージだろう。

男の影がいつさいなく、真面目に学生してる上條をアイドル視してる男も多い。

そんなやつらが見たら泣くぞ、こんな姿。まあ本人からしたらしつたこつちやないだろうが。

「ちょっと。あーさーひーなー。きいてる〜?」

気づけばいい感じに出来上がってる上條だった。

「お銚子何本目?」

「わかんなーい。おごりだし。こころおきなくのめるわよねー」

そろそろ止めた方がいいのだろうか。

そう言えば上條と飲むのは初めてだ。

強いと噂は聞いているが、熱燗を何本も飲めば酔っ払うだろう。

僕は手酌で注ぐとすのお銚子を、上條から取り上げた。

「なによ〜あさひなは、のんら、らめつていつてるてしよ〜」

「大丈夫。飲まないから。それよりちょっとトイレ行ってきたら?」

「うん。そうねえ。いつてくる」

素直に立ち上がった上條にほっとしたが、その足取りはフラフラ
していて危なっかかった。

会計を頼みながら店員に聞いてみた。

「いつもあんなんですか？」

「いや、今日はあやちゃん飲みすぎでしょ。多分安心してるのかな
？」

僕が戸惑っていると店員は苦笑いで答えた。

「うちのお客さんいい人多いけど、酒も入るし、あやちゃん若くて
綺麗だから絡まれる時もあるって、一人だと警戒しちゃうんじゃない
かな？今日は一人じゃないし」

当たり前だが若い女の子が一人でくるような店じゃないものな…
…と納得してしまった。

いつまでたつても戻ってこないのでも様子を見にいったら、上條は
トイレの前で寝ていた。

困ったように見守るおじさん達に謝りながら、とりあえず上條を
担いで店をでた。

さてどうしよう？

僕は上條の家なんて知らないから、タクシーに放りこんで返す事
もできない。

声かけても、揺すっても起きそうにない彼女を前に頭を抱えた。

いっそホテルにでも連れて行ってしまおうか？

しかし何もしてなくても、目を覚ました彼女が怒って暴力ふるいそうだな……。

想像したら震えてしまった。

夏とはいえ、夜の外に放置したら風邪引きそうだ。

しかも下手に美人だから目立つし。

改めて上條の顔を覗きこむと、無邪気な笑顔で寝ていた。

いつも隙のない女だと思ってたのに、今の彼女は隙だらけだ。

思わず頬に手を触れて撫でてしまった。

……………

やばい。今何考えた自分。

下手に手出しして半殺しとかシャレにならないぞ。

それに僕は今までこんなに女にのめり込んだことはない。

ここで嫌われたら、ちょっと立ち直れない気がする。

彼女の顔から目をそらし、背におぶった。

とりあえずタクシーが拾えそうな所まで行こう。

それで、その先は？

僕の肩にかかる彼女の髪からいい匂いがするとか、背中に感じる

弾力とか、腕に持つ足の柔らかな感触とか……

やばいぞ、自分。別に女の子背負った事ないわけじゃないじゃないか。

他の子なら体が密着しようがどうでもいい。

なのに相手が上條というだけで、酒も飲んでないのに、こんなに理性をなくしそうになるなんて……。

僕の葛藤をわかってるのか上條は譫言を呟いた。

「あさひなぐぶっころす……」

君はどんな物騒な夢を見てるのかな？

欲望と戦いながら、上條を背負い夜の街を歩いた。

残念な彼女と狼男（後書き）

譲司編ではR指定まったく必要なかったんですけど

朝比奈限定でR指定かけたい

野獣な男だなあ

今後もギリギリのラインで書いていこうと思いますが

もしR指定必要なんじゃないかと思われましてららご連絡ください

次はやつと上條視点に戻ります

飲みすぎはいけませんよ〜という話

ティファニーで朝食を（前書き）

すみません、かなり長くなりました

あとほかしてますが、R指定入れた方がいいかな？って事言ってます
ギリギリセーフと信じたい

ティファニーで朝食を

彩花は『だるい』と思いながら、目覚めた。
久しぶりに二日酔いの感覚だ。

酒好きだがいつもはほどほどにしてるので、あまり二日酔いになる事はない。

今日ってなんか予定あつたっけ？

なんもなければこのまま寝てたいな……

目を閉じたまま、また眠ってしまいたかったのだが、どうにも日差しがまぶしい。

朝に弱い彩花は、安眠を妨げられないために、遮光カーテンを愛用している。

なのにまぶしいなあ。カーテン閉め忘れたかな？

日差しから逃げるように、寝返りをうって背を向けた。

……ん？なんかおかしい。彩花はスプリングがきいたベッドを愛用してたはずだが、まるで煎餅布団に寝ているような感触ではないか。

それに匂いも……古い本の匂いと微かにタバコの匂いがして、それを打ち消すようにミント系のハーブの匂いがする。

目を開けるのは面倒だったが、これ以上見ないふりするのは怖かった。

彩花がそつと目を開けると見知らぬ風景だった。

畳の部屋に布団と小さなテーブル。もっとも存在感あるのは本棚だ。本棚から溢れだした本が積み重なり、まるで書庫のような生活感のない部屋。

「ここ……どこ？」

そこで今まで考えないようにしていた、昨日の夜の記憶をなぞった。

昨日は朝比奈と飲みに行って途中から記憶が……

って……まさか……ここヤツの部屋か？
本だらけの部屋はとてモヤツらしい。

え……えー！
ど、どうしよう！飲んだくれて男の部屋にお泊まりとか、ありえない。

とっさに自分の服を確認する。

昨日の服のままだ。さすがに服を着たまま寝てしまったからかシワはあるけれど。

体は二日酔いのしんどさがあるが、他に何かあったのだろうか？
……って何かあってなに？

パニックを起こしながら私は飛び起きた。

っていうかヤツはどこだ？

1DKの狭い部屋に朝比奈が隠れるような所はなく、ユニットバ

スにもいなかった。

闇雲に部屋の中をうろつろしながら、落ち着け自分と心の中で唱えた。

そつだ。携帯。

慌てて自分のバックを探して携帯を取り出した。

コール音が長く感じてイライラする。

『おはよう。やっと起きた』

『どこどこよ』

『僕の部屋』

『あんたどこにいるのよ』

『近所のファミレス。上條お腹すいてない？朝ご飯食べにおいでよ』

『……昨日何があったの？』

『来たら話すよ』

『なんであんたの部屋に私がいるのよ』

『それも来たら話す』

何度問い詰めてものらりくらりとかわされる。

仕方なしに朝比奈がいるというファミレスに行く事にした。

ファミレスの窓際に朝比奈は座っていた。

テーブルに本やノートパソコンを広げて難しい顔で作業している。ときおり眼鏡を外して目頭を押さえたり、遠くをぼんやり見ている。た。

朝から真面目に勉強しているただの学生にしか見えない。

でも……昨日の夜、アイツと私は何かあったかもしねなくて……
そう思うと怖くてなかなか声をかけられず、遠くからアイツを眺
めていた。

「お待ち合わせですか？」

店員が急に声をかけてきて、思わず挙動不審になってしまつた。

「あちらのお客様のお連れ様ですか？」

そう言つて朝比奈をさししめす。

そのやりとりに朝比奈が気づいてしまったようだ。仕方なしにア
イツのテーブルへと歩く。

朝比奈は朝から爽やかな嘘臭い笑顔を浮かべていた。

最近で一番のいい顔だ。

「遅かつたね。道に迷つた？」

「……」

「ああ……それとも体がしんどかつた？無理しない方がいいよ」

「……しんどいつて何で？」

勇気を振り絞つて聞いたのに、朝比奈は曖昧な笑顔で質問を無視
した。

「このモーニング結構美味しいよ」

「なんで私朝比奈の家にしたわけ？」

やっぱり私の話を無視して、勝手に私の食事を注文する。

「二日酔いの胃にコーヒーはキツイから、ジュースとかがいいよね。
ドリンクバーから持つてくるよ」

気持ちが悪いくらいに優しい。

いやに上機嫌な様子といい、この妙な優しさといい怪しすぎる。

「私達……昨日何かあったの？」

「何かって？」

「……はぐらかさないでよ……」

思いつきり叫びたかったが、朝の静かなファミレスで目立ちたくなかったし、二日酔いのせいで体力もない。

「はぐらかしてなんてないよ。うん。上條の体には触ったかな？」

その答えに血の気が引く思いがした。

わ、私、記憶がないまま……。

唇を噛み締めて震えていると、朝比奈が嘔き出しながら大笑いした。

「何笑ってるのよ」

「いや、ごめん、ごめん。あんまり反応が面白いからついからかった」

「じゃあ、今は嘘？」

「嘘は言っていないよ。上條運ぶのに背負ったから、体触ったし」

「じゃあ、さっきの体がしんどかった？とかは？」

「昨日飲みすぎだったから二日酔い大丈夫かなって」

人を喰ったような意地の悪い笑みに怒りがわいてきた。

「なんであなたの部屋の部屋に連れて行ったのよ」

「上條の家知らないし、放置するわけにもいかないし、ホテルの方が良かった？」

思わずテーブルを強く叩いた。

「あなたの言う事なんて信じられない」

「じゃあ上條は僕とそういう関係になったと思ってるの？」

思いつき朝比奈を睨みつけて、苦々しく呟いた。

「わかるわけないじゃない。そんな経験ないんだから……」

朝比奈が驚いた顔をした。

「ごめん。まさか上條みたいにもテそうな子がね……」

朝比奈はポケットからハンカチを取り出して私に差し出した。

「からかって悪かった。何にもなかったから、安心していいから。だから泣かないでくれないか？」

え？私が驚いて自分の頬に触れると、濡れていた。

バツの悪そうな、困った顔で朝比奈は言い訳した。

「君がそういう経験ないって今知った。これで昨日は何もなかったって事信じてもらえない？さすがにそういう事してたら僕だって気づくよ」

じゃあ、本当に何にもなかったの？

安心したら泣き声混じりに弱音がでる。

「朝比奈のイジワル……」

朝比奈は苦笑して愛おしそうに、私の頭を撫でた。ミント系の匂いがした。

「バカ」

「うん」

「イジメっ子」

「うん」

「眼鏡」

「それ悪口？」

私も自分が言った事に笑いがこみ上げてきた。

朝比奈の手から奪ったハンカチで涙を拭くと、丸めてヤツに投げつけた。

ふっと思いついた疑問が口にてた。

「朝比奈、煙草吸うの？」

「禁煙してた。でも最近ストレスたまってたからまた何度か吸った」

「見た事ないんだけど」

「吸う時は人目につかないように隠れてたから。でもまあストレス元なくなっただしもう吸わないよ」

「どんだん吸って、肺ガンで早死にしちやいなさいよ」

「その前に古谷教授に付き合っただら、肝臓ガンにでもなりそう」

私は朝比奈が古谷教授に無理やり飲まされる所を想像して、楽しくなっただけで笑った。

ちょうどいい具合に料理がきて、いい匂いに食欲がそえられる。

「さっきまで泣いてたのに、料理がきたらもう笑顔だなんて、食い意地はってるな」

言い返そうとしたのだけど、そのタイミングで腹の虫がなったので否定できなくなった。

笑う朝比奈にむかひいて、八つ当たりのように料理にかぶりついた。

「あんたは朝ご飯食べなくていいの？」

「徹夜明けで胃にもたれるから、食べたくない」

思わずフォークを置いて、思いつき飲み込んだら、喉に詰まった。

「……まさか、昨日の夜からずっとここに？」

「一緒の布団で寝たかった？」

思いつきり首を横に振ったら、朝比奈は楽しそうに笑った。

朝比奈がもう冷め切ったブラックコーヒーに口をつけようとしていたので、それを横からかさらう。

「胃にもたれるならコーヒーなんて止めておきなさいよ。ジュース持ってきてあげるから」

さつきと立場が逆転して、朝比奈が苦々しく呟いた。

「カルピスだけは止めてくれ。あれ嫌いなんだ」

ニヤニヤと笑った私が持ってきたのがカルピスだったのは言うまでもない。

ティファニーで朝食を（後書き）

イジメっ子朝比奈と可愛い彩花のやりとりが好きで長くなりました
なんかいい雰囲気なのにくつつかない二人
次も彩花視点です

昼下がりの情事

昼ご飯と言ってもいいほど遅めの朝食を食べた後、私は帰る事にした。

「別に送らなくてもいいわよ」

「駅までの道わかるの？それに今転びそうになったでしょ。4度目だよ」

悔しいがまだ二日酔い気味のしんどい体はふらつく。

強がってはいるが、転びかけるたびに朝比奈に手を借りる始末だ。

急に朝比奈が私の肩を抱き寄せる。

「ちよつと……」

「はい、拳あげるの待った」

私の後ろを自転車が駆け抜けて行く。

すぐに朝比奈は手を離して、笑った。

「なんか僕の方が危険だね。助けて殴られかけるって」

「私が本調子だったら、とっくに殴ってる所よ」

私はさつきからすごく不機嫌だった。

朝比奈に助けられてばかりだし、さりげなく車道側歩いたり、私に合わせてゆっくり歩いたり。

さすが女たらし。相手が誰だろうと条件反射でここまでやるなんて。

そういう事はちゃんと彼女作って、彼女にだけやればいいのに。

駅についても朝比奈はなんか口うるさい母親みたいに、私にかま

いたがる。

「帰りの電車わかる？切符は？」

「わかるし、ICカードあるし」

「チャージ切れで改札でひっかかったり……」

「あんたもしつこい男ね！昨日チャージしたばかりよ」

そう言いながら私は定期入れを出して朝比奈に突きつけてやるつもりだった。

なのに、あるう事かやつは私の腕を取って引き寄せ抱きしめた。

腕はホルルドされているので、とつさに蹴りあげようとした所に、朝比奈が耳元に囁いた。

「落ち着いて聞いて。僕達つけられてる」

は？一瞬冗談かと思ったが、朝比奈の声はいつになく、真剣だった。

「3年の吉岡雄大に心あたりない？」

記憶を探るとすぐに思い出した。

「夏休み前に告白されたけど、振った……つけてるのってそいつなの？」

「説明は後だ。行こう」

そう言うと朝比奈は私の手を引いて、かけるように改札をくぐり抜けた。

そのままの勢いでホームまで走り、発車寸前の電車に飛び乗った。

電車に乗って落ち着いたのか、すぐに朝比奈は手を離した。

「なんであんな誤解させるような事して逃げたのよ。勘違いされたらどうするのよ」

私は真正面から朝比奈を睨みつけたが、朝比奈は窓の外を無表情

で見つめていた。

「無駄だよ。アイツ僕の家知ってるもん。こんな時間に僕の家近くで歩いてるだけで誤解してるでしょ。だから後つけたんだ」

「……な……私があんたの家に泊まったと？」

「それは事実でしょ？逆恨みしてストーカー化しないように、男の影ちらかせて煽ってみた。夜道で刺されるなら僕のほうだよ。家近いし」

いつから気づいていたのか知らないが、そこまで計算して行動したのかこの男は。

「馬鹿！私あんたに庇ってほしくなんてないわよ」

「かつてに家連れてきたの僕の責任だし。どっかホテルにでも行ったら良かったね」

「自分の事は自分でなんとかするわよ。私が強いのは知ってるでしょ」

「上條は強いけど、結局女の子だよ。さっきだって僕の腕振りほどけ無かったし」

悔しい、悔しい、悔しい。

いつだって女に生まれた事が悔しくてたまらなかった。

だから強くなった。男とも対等に渡り合えると思っていたのに……

私が黙りこんでしまったからか、朝比奈は窓の外から私へと視線を移した。

「別に無理に男と張り合う必要ないんじゃない？女の武器使おうとかなんだろうと、上條は上條だろう」

「嫌だ。そんなのやだ……」

「自慢じゃないけど、僕も男なのに筋力ないし。まともに喧嘩したら女の上條にも勝てないよ。だから自分の得意分野でしか戦わない」

「得意分野って、どうせ腹黒い手段で人を陥れるだけでしょ」
朝比奈は人をくつたような意地の悪い笑みを浮かべた。
「そういう事」

昼下がりの情事（後書き）

なんかべた甘な朝比奈が続きます

でも天然な上條にはいまいち届いていません

ありがちなお話が続いてすみません

基本王道でちよっとわき道に入る話が好きです

噂の二人

朝比奈は自分の甘さを呪った。

どうも最近上條という時間が長かったせいか、鈍くなっていたよ
うだ。

それとも恋で目が曇って状況把握ができなくなっていたのか？

吉岡雄大の動きには気をつけていたが、人の口に戸はたてられな
い。

僕達の噂は広がってった。

やっきになって火消ししようとするれば、かえって噂を煽る事にも
なる。

夏休みだし、噂が広がるのも限られるだろうと思っていた。

まあ噂になってライバルが減ってくればいいなという下心もあ
る。

夏休みあけの学内の空気の変わりように驚いた。

学園のアイドルに恋人か？所の騒ぎではなかった。

噂は悪意に満ちて歪曲し広がっていた。

上條彩花のお泊まりデートならまだしも、他にも何人も男がいる
とか、高校時代にすでに何人切りとか、上條だけが一方的に悪者に
されていた。

おそらく裏ミスM大の清純イメージが仇になった。ファン達が裏
切られたと自暴自棄になり無責任な噂を垂れ流しているのだ。

それでも今下手に上條に近づくのは、火に油を注ぐようなもの。噂が落ち着くまで待とうと思っていたのだ。

しかし噂が落ち着く所か、最悪の展開に進んでいった。

ある日古屋教授に呼び出された。

人目を憚るように注意深く教授室に鍵をかける教授に嫌な予感がした。

「朝比奈君。君らしくない不手際ですね」

「すみません。軽率でした」

古屋教授はいつもの穏やかな紳士らしくないしかめっ面で、テールを指先で叩いた。

「上條さんの噂がさらにひどくなっています。なんでも女の武器で先生にすりより、成績を底上げしたとか……」

「馬鹿な！先生だって知ってるでしょう。彼女がそんな事する人間じゃないし、必要もない」

古屋教授はため息をついて、足を組み直した。

「私はもちろん上條さんを信じてます。でも噂に踊らされる人間もいるという事です」

そこで古屋教授は背もたれから起き上がり、前屈みになって僕を手招きした。

耳を近づけると、渋く低い声で教授は言った。

「工商事の採用担当に誰かが告げ口したようで、もしかしたら内定取り消されるかもしれません」

「そんな！」

「まだ検討段階です。でもこのまま放置すれば……」

悪意の噂を流すヤツも、それを告げ口するヤツも、みんなまとめ
て殴ってやりたい。

歯ぎしりする思いで見えない敵に罵倒した。

「力になってあげたいのですが……あいにく今回は私と上條さんと
の仲も疑われているようですね。身動きがとれないんですよ」

寂しそうな顔をする古屋教授を穴が空くほど見つめてしまった。

もし古屋教授まで疑われてるなら、教授の立場も危うい。

それでも教授の言葉は上條への気遣いで溢れていた。

「朝比奈君。上條さんを頼みましたよ」

その言葉に背中を押されたように、僕はある決意をした。

わざと大学から離れた目立たぬ街に、上條を呼び出した。

「何のようよ」

ぶっきらぼうな言い方は相変わらずだが、少し勢いが無い。

最後に会ってからそんなにたつてないと思うのだが、少し痩せた
ような気がする。

また痩せ我慢して一人で背負いこんでたんだな、コイツは。

そんなに僕が信用できないのか、と思うと腹がたつてつい僕も言
い方がきつくなった。

「内定取り消されるかもしれないんだって？なんで言わなかった？」

「なんで……それを……ってあなたには関係ない！」

「関係なくない！言っただろ。僕にも責任あるって！」

強く叫ぶように言ってしまった。

驚いたように上條が肩を震わせる。

ああ……こんな責めるつもりじゃなかったのに。

長い沈黙の間に、深呼吸した。

朝比奈裕一、一世一代の大勝負。絶対この博打、成功させてみせる。

「僕に考えがある、取引しないか？」

悪魔の囁きのように腹黒く。

それが僕の得意分野だ。

噂の二人（後書き）

集団の悪意というのは、誰も責任とらなくてすむため恐ろしいですね

古屋教授かつこいいとこ持ってきました

もっと出番増やしたいのですが、使い所が難しいですね

就職戦線異常なし（前書き）

珍しく日本映画のタイトルだ
私は邦画好きなんですけどね

就職戦線異常なし

本当にうまくいくのか？

まだ信じられないが、隣に立つ男は余裕綽々という感じで微笑んでいる。

ついつい見ていたら、気づかれてしまった。

「どうしたの？」

「何でもない……」

なんか調子くるうなあ……。

だっていつものヤツと違うんだもん。

朝比奈はいつもシャツにジーンズというカジュアルな服装だ。

なのに今日はスーツをビシッと着こなしている。

痩せ気味の朝比奈もスーツを着ると少しは逞しく見えるから不思議だ。

まるでやり手営業マンみたいだ。

「さあ、勝負の時間だ。上條は最低限以外できるだけ話さずに僕に任せて」

不適な笑顔の朝比奈に自分の未来を託すしかないのか……と彩花は心の中で嘆いた。

「お忙しい中お時間いただきありがとうございます」

朝比奈は丁寧なお辞儀とにこやかな笑顔を浮かべながら、隙のない眼差しで相手を見ていた。

工商事人事部笹本部長。

ヤツがどうやってこんな大物との会談に持ち込めたのかは彩花にも謎だった。

「えーっと、あなたは……」

「申し遅れました。私は朝比奈裕一と言いまして、ここにいる上條彩花さんの婚約者です」

堂々と言い放つ朝比奈と私の左手の薬指には、お揃いの指輪が輝いていた。

「上條さんの婚約者さんがどのようなご用件で？」

笹本部長はインテリ眼鏡を押さえながら、企業の役職につく貫禄たっぷりに朝比奈と対峙した。

「本来なら私ごときが口に挟むべきことではないのですが、今日は最近上條に関わる妙な噂と誤解についてお話させていただきたく伺いました」

笹本部長の貫禄に負けず、笑顔でかわしながら朝比奈は話を切り出した。

腹黒眼鏡同士の狐と狸の化かし合い……などと、人事みたいな事を彩花は考えてしまった。

「妙な噂ねえ……。なにせ採用選考は部下に任せているので、よくは知らないのですが……」

「彼女の男性関係や先生方との癒着の噂が流れているようですが、すべて根も葉もないデタラメです。彼女と私は正式にお付き合いさせていたでいたのですが、それがあらぬ誤解になって噂に尾ひれがついたようです」

「健全な男女交際が何故そのような噂に発展するのかな？」

そこでちょっと朝比奈は眉をしかめてため息をついた。オーバーリアクションすぎて嘘臭いなどと彩花は思うのだが、初対面の笹本部長には効果があったようだ。

「私の責任です。彼女はご覧の通り美しく、学業優秀な優等生で、大学でも人気があるので、自分が付き合ってるなどと周りに知られたら不釣り合いだと非難されないかと不安で、周囲には隠していたのです。でもこのような事態を招き、けじめをつけるべきだと考え、このたび婚約する事となりました」

いつから私達付き合ってたのよ。不釣り合い？そんな事気にするような殊勝な男か！

朝比奈の態度が私をイライラさせたが、そんな事顔に出す事でもきずつつむいて悲痛な表情を作った。

ああ、今すぐ隣の男を殴りたい。そんな欲求を抑えていると、自然肩が震えてくる。

「しかし、どうもこの噂のせいで御社が彼女の内定を取り消すというお話が進んでいるとか。きちんとご説明して誤解をとくべきだと思います、お伺いしました」

笹本部長は皮肉げな笑みを浮かべていた。

「確かに部下から、上條さんの選考について再検討の余地ありと報告は受けていますが、まだ調査中でね」

「調査するまでもないと証明するために私は来たのですが？」

「あなたを信用してないわけではないが、不確かな情報だけで採用選考を決めるわけには……」

「不確かな噂で、内定を取り消そうとなさってるではないですか。それとも他の理由で彼女の内定を取り消したいのですか？」

それまで低姿勢だった朝比奈が、急に牙をむき反撃に入った。笹本部長の表情も自然険しいものとなった。

「他の理由とは？」

「男女雇用均等法以来男女間の不平等な採用状況は表向きよくありませんが、暗黙の了解としてはまだまだ女性に厳しい。特に未婚女性は結婚退職などの不安から、採用に二の足を踏む企業も多いですから」

「それは当然でしょう。私達も慈善事業ではない。人材を育てる時間と費用を使って簡単に辞められては困りますからね」

結局女というだけで、仕事にマイナス評価されるのが悔しい。

「彼女とは婚約しましたが、最低でも5年以内には結婚はしません。私は大学院に進むので後5年は学生ですから、とても結婚などできる身分ではないですよ」

朝比奈はさらに、身ぶり手ぶりも加えてたたみかけるた。

「それに僕は彼女の仕事に対する真剣さを理解してますから、結婚しても同じく仕事は続けてもらうつもりですし、彼女のキャリアの邪魔になるなら子供もいらなと思ってます。それでも男がいる女性というだけで採用を見合わせるといふならこれは差別です」

正面きって喧嘩売った朝比奈を、笹本部長は怖い顔で睨みつける。

「差別などと、我が社への侮辱ではないかな？」

「失礼。一般論です。もちろん御社がそのような企業ではないと信じています。しかし……」

そこで朝比奈は本性をさらけ出すような意地の悪い笑顔を浮かべた。

「もし彼女の内定を取り消すなら、女性差別を行う会社として、裁判に訴える事も辞さないですよ」

完璧な脅しだ。

笹本部長も顔色を青くして、こめかみの血管がピクリと動く。

「言いがかりだ。我が社は差別など……」

「では今すぐ内定取り消しを撤回してください」

「その件は調査中だと……」

「私はこの問題の責任者と話がしたいと今日伺ったのです。あなたの責任で今すぐお約束いただきたい」

「常識も知らない子供と話す事などもうない。不愉快だ。そうそうに帰りましたまえ」

笹本部長が声を荒げる姿に彩花は背筋が寒くなった。

バカ朝比奈、なんてことするのよ！

しかし朝比奈はまるで慌てる事はなかった。

「いいんですか？ 笹本部長？」

朝比奈は低く囁くと、なぜか笹本部長部長に近づいて、耳元で何か言った。

私には何を言ったかわからないが、笹本部長部長の顔色を変えるには十分だった。

「な、なぜ、君がそれを……」

「なぜでしょう？ それで先ほどの内定の件ですが」

「わかった。私の権限で上條さんの採用を後押しする」

朝比奈はわざとらしい笑顔で丁寧にお辞儀した。

「ありがとうございます」

「あんだ、なんか笹本部長の弱みでも握ってるの？」

「本人の弱みじゃなくても、いくらでも交渉材料はあるものだよ」

どこでそんな情報仕入れてくるのか……本気で敵に回したくない男だ。

「ところで、本当に『取引』守る気あるの？」

「君の気が変わらなければね」

「あんだのおかげで内定取り消されずにすんだし、私は破る気ないけど……この取引、朝比奈に勝ち目あると思えないけど」

「それはわからない。覚悟しときなよ。僕は欲しいものには手段選ばないから」

朝比奈の不敵な宣言に私は真っ向から睨みつけた。

私だっけ負けるつもりはない。

弱みを見せたら負け、女と男の真剣勝負の始まりだ。

就職戦線異常なし（後書き）

取引の内容については次回に持ち越しです

まあだいたい今回の話で読めるかな？と思いますが
次回第2章最終回です

宣戦布告

「僕に考えがある、取引しないか？」

彼女は疑り深く、僕の話聞いた。

「僕が婚約者のふりをしてI商事に交渉する」

「は？なんで婚約者？」

「火のない所に煙はたたない。噂のすべてを否定しても信用されないからね。上條のイメージを壊さない程度に噂を認めた方がいいんだ」

「それが婚約者？そんなのすぐばれるでしょ」

「ばれないように、しばらく婚約者のふりは続けよう。これは上條にメリットがある事だよ」

彼女は理解できないと疑いの目でまだ僕を見ている。

「就職したら、しばらくは仕事に専念したいでしょう？」

「そうね。私あんたみたいに器用じゃないから、ひとつの事しかできないもん」

「でも上條美人だからいいよる男も多くなるし、セクハラ上司とかもいるかもよ」

上條はうんざりした顔で「そうね」とつぶやいた。

今だってモテるんだから、本人も自覚あるのだろう。

「だから男よけ」

そう言っけてポケットの中から指輪を取り出して、上條の左手の薬指につけた。

「は？いつのまに？」

「僕が何の準備もなしにこんな話持ち出すと思う？ちなみにI商事との交渉材料も揃ってるよ」

上條は指輪を抜き取って僕に返そうとする。

「いくらふりだからってあんたなんかと婚約者になんてなりたくない」

「取引だつて言ったでしょ。上條は無事就職する。僕は嘘の婚約者を手に入れる。なんなら期限付きでいいよ」

「期限？」

「僕が大学院を卒業する5年後。その時まだ婚約者になりたくないつていうんなら婚約解消だ」

上條は大きな瞳をさらに見開いて見つめた。

「5年たつたら私の気が変わるとでも思ってるの？」

「そうだね。5年後お互いよければ婚約延長してもいいし、なんなら結婚でも……」

「あんたみたいな腹黒と誰が結婚するか！」

いつもの強気な上條のテンションで吠えたかと思うと、拳が僕の腹にずしんと響いた。

思わずよろめいて何歩か下がるが、倒れないように歯を食いしばってこらえた。

「上等よ。あんたなんか絶対好きにならないって証明してやる。5年も時間を無駄にすればいいわ」

「……取引成立……かな？」

僕の計画通りだ。

痛みをこらえてニヤリと笑った。

「取引先のエロオヤジがしつこくてさ、上司に『セクハラだ』って相談したら、『ハニートラップしかけてこい』だなんて、Wセクハラだつての。腹立つ！」

いつものガード下飲み屋で、熱燗片手に仕事の愚痴をこぼす上條いつもの事だ。

あの取引から1年はたってるのに、朝比奈はいまだに飲み友ではない。

ため息しか出てこない。

あと4年で彼女を落とせるのだろうか？

1年の間にわかった事といえば、好きな酒やつまみの種類だとか、オヤジな経済雑誌ばかり見るとか知りたくない事ばかりだ。

耳に鉛筆さして競馬新聞読んでた時など、女の皮かぶったオヤジじゃないかと思った。

「競馬やるの？」

「普段やらないんだけどね。ほら有馬記念って一年に一度のイベントだし。でも今年は仕事忙しくて馬券買いにいけないんだよね。浅草の『ウインズ』にでも行って買ってきてくんない？」

結局渋々行ってきた。

自動券売機に慣れずにもたついてたら、ギラギラしたオヤジどもに睨まれて、やむなく対面販売に並んだが、行列がすごくてうんざりした。

もう二度と行くか。

「あー！惜しかった！ちょっと見てよ。もうちょっとで当たりだったのよ」

見てもわからんから適当に流した。

「もしかして……パチンコとか、他のギャンブルもやるの？」

「パチンコはね……私タバコ臭いの嫌いだからなあ。最近禁煙台とかもでてきたみたいだけど……まだまだ臭いし」

ああ、タバコなければやるんだ……そういう問題か？

考えて見れば負けず嫌いで勝負好きな上條はギャンブル向きな性格かもしれない。

ちなみに朝比奈は負ける勝負は嫌いなのでギャンブルは一切やらない。

「あんたも私と会う時タバコくさかったら、はっ倒して追い返すからね」

笑顔で握り拳作りながら言うな。

「タバコはやめたって言ったじゃないか」

「嘘つき朝比奈の言うことなんて信じるだけバカよ」

お互い忙しくてそんなに会ってないのに、会えばこんな感じだ。女性に夢なんて見てないけど、美人の上條がオヤジ臭い事してるど、見てて痛いんだよ。

今日もそろそろ上條は、酔って出来上がってきた。

いつものように酒を取り上げる。

「あさひな〜」

「上條目こすったでしょ。化粧が落ちてパンダになってるよ」

「うそ！」

素に戻った上條はバック片手に、トイレに駆け込む。

もちろん嘘だ。

そもそも上條のメイクは濃くないので気にする必要などないはず

なのだが、まだわずかな女子のプライドは残っているらしい。

上條がトイレに行ってる間にさっさと会計をすませとく。

上條が僕の嘘に気づいて戻ってくるからだ。

「朝比奈の嘘つき！」

「はいはい上條はいつも綺麗だね〜はい帰ろうか〜」

「酔っ払い扱いしないでよ」

文句を言う上條をタクシーに押し込んでいっちょ上がり。

ああ……酔っ払い上條のあしらい方だけ美味くなっていくな……。

酔い潰れた上條をホテルに連れ込んで、既成事実を作るのは簡単だ。

だが怒った彼女が暴力にでたり、二度と会ってくれなくなるのは困る。

まだ4年あるのだから、それは最終手段に取っておこう。

上條彩花。朝比奈の腹黒を持ってしても手強い彼女だ。

第2部終了

宣戦布告（後書き）

第2章終了です

朝比奈と上條のバトルは一時お休みして、次はどのキャラの話を書こうかなと迷ってます

朝比奈と上條は譲司と紫よりは仲のよいコンビでは？と思っただけですが

春雷 前編（前書き）

次のシリーズどれを書くか迷っているので、とりあえず短編をいくつかアップします

本当は第1章とこの春雷の間に話があるのですが、それは長くなりそうなので、後日書く予定です。

春雷 前編

大学の春休みは長い。

休み中会わなかつたら、紫に綺麗さっぱり忘れられる自信が譲司にはあった。

しかし春休みに会う口実も見つけられず、譲司はまた一線を踏み越えてしまった。

本人が個人情報を教えてくれないなら、周りから調べるしかない。固い紫のガードをくぐり抜け、住所を入手。紫の家付近で見つからないようにこっそりと、生活パターンを調べた。

人はそれをストーカーと呼ぶ。

わかってる。譲司にだって冗談抜きに変態で犯罪的な行為だと。しかし他に方法がなかったのだ。

「なんで先輩がここにいるんですか」

「あれ？田辺さん？偶然だね」

もちろん偶然ではない。ここは紫の近所の図書館で、いつもこの時間通っているのは調査済みだ。

紫は引きつった顔で鞆から携帯を取り出して、図書館の出口に向かおうとした。

コンパスの差を行かした譲司は、先回りして紫の前に立ちふさがった。

「どこ行くの？」

「ちよっとストーリーカーの変質者がいると通報に」

「人聞き悪いなあ。俺は偶然この図書館に来ただけで、君の自宅を見張ったり、しつこく電話したりとかストーリーカーみたいな事はしてないよ」

家は見張ってたので嘘だが、紫の様子を見ると気づかれてないよ
うなので黙っておく。

いつまでも馬鹿正直のお人好しでは、紫の相手などできない。

「証拠不十分で立件不可能という事ですか。先輩も段々犯罪者のレベルが上がってきましたね」

事実だが、改めて言われるとくるものがあるな。

紫はあきらめて、譲司を無視して本を探し始めた。

譲司もついていって周りをちよろちよろしてたのだが、閲覧用のテールまできた所で紫の機嫌が最悪に悪くなった。

図書館という場所のため、声は潜めていたが、突き刺すような鋭さがあつた。

「さつきからその笑い顔、気色悪い。目障りだからととと目の前から消えてください」

「だって田辺さん可愛いんだもん」

紫が小さい体を一生懸命背伸びさせて高い所の本を取る姿……あ、足がぶるぶるして可愛い。

取ってあげようとしても、断られるので見ながらつつい微笑む。重い本を持って、よろよろ歩く姿……顔を真っ赤にして一生懸命持つのが可愛い。

持ってあげようとしても断られ、やっぱり微笑むしかなかった。

「万年脳内常春男。発情するなら私に関係ない所でしてください」
「無理。もう田辺さん以外の女の子可愛いと思えない」

恋と馬鹿に薬は効かない。

結局紫は妥協して譲司を無視し、本の世界に逃げ込むしかなかったのだった。

その間に、外の天気は紫の機嫌のごとくどんどん悪くなってきた。

「雨降りそうだね。傘持ってきた？」

それまで紫の読書の邪魔をしないように、黙って顔を眺めていた譲司は、ちょうど読み終わる頃合いに話しかけた。

紫はきよとんとした顔で、外を見た。

きつと本に夢中で天気の変化など気づかなかったのだろう。

「ああ……持ってませんね」

「俺も。傘買ってこようか？近くにコンビニとか……」

質問の途中でゴロゴロと音がして、遠くで稲光が見えた。

「春の雷って、春雷しゅんらいって言うんだよね。最近読んだ本に書いてあったよ」

譲司は元々経済関連の書籍などは読んだが、小説や文学的な物を読まなかった。

最近紫の影響でそういう本も読むようになり、意外な面白さに興味が出てきた所だった。

紫は譲司の話など無視して、新しい本を開いている。

譲司は何も知らずに、紫の顔を眺めていた。

春雷 後編

しばらく眺めていて気づいた。

紫は本を読んでいるように見えて、さっきからまったくページが進んでいない。

しかも空が稲光で光る度、紫の体がわずかに揺れた。

もしかして……。

遠くで響く雷の音が近づいてきたころ。突然紫が立ち上がって、慌てて本を片付け始めた。

すでに紫の顔は青ざめている。

「帰る……」

つぶやくと紫は図書館を飛び出した。

「待って。雨に濡れる」

俺の制止を振り切って、雨の中かける紫。

すぐに追いついて、腕を掴むと紫は子供のようにだだをこねた。

「やだ、帰る……お家に……キャー」

その時近くに雷が落ちる音がした。

紫は目をつぶって必死に俺にしがみついた。　なだめるように背

中を撫でた時、ドキドキした。

紫は極度に素肌の露出を嫌うため、夏でも長袖だし、体の線がないゆつたりとした服を着ている。

しかし今雨に濡れ、素肌に服が張り付いて透けて見えた。

しかも今日は淡いブルーのブラウスだ。

し、下着の線が透けている。

しかも無造作に縛られた髪の下のうなじが、濡れて艶めかしい。

しばし譲司は煩惱と格闘した。

落ち着け自分。ひとまず雨宿りだ。

痩せすぎて、細く華奢な紫の体を壊さないように抱きよせて、歩き始めた。

幸い近くに大型スーパ―を見つけられた。

傘だけでなく、タオルや着替えまで買ったのはラッキーだ。

だいぶ濡れてしまったので、今更傘を差しても無意味だ。

まあ俺の身長にあう服が見つからなかったので、タオルでふくだけで紫の分だけ服を買った。

紫にスーパ―のトイレで着替えてくるように言っと、室内だというのにまだ外を気にしてビクビクしている。

「ここは大丈夫だから、行っておいで」

「ほんとに？」

目をうるうるさせて怯える紫はむちゃくちゃ可愛かった。

「濡れた服のままだと、狼の方が怖いよ」

つい本音が駄々漏れたら、紫にむちゃくちゃ睨まれて、トイレに駆け込むように逃げられた。

大きめのTシャツとスウェットに着替えた紫は、大人の服を着た子供みたいで可愛かった。

さてこの後どうしよう。

室内にいても稲光や雷の音に怯える紫。

まだ当分雨もやみそうにない。

ふと、スーパーの窓からある店が見えた。

「田辺さん。雷怖くない所に行こうか」

狼発言に警戒しつつも、紫は渋々ついてきた。

着いたのはカラオケBOX。

窓はないし、外の音も聞こえる事もない。

個室で2人きりというのは、かなりいいシチュエーションではないか！

紫は珍しそうに部屋の中をキョロキョロした。

「田辺さん。カラオケ初めて？」

「はい。友達いなかったし、来る機会なかったですね」
当たり前のように暗い過去を言う。

「せっかくだから歌おうかな」

俺は女の子受けしそうなラブソングばかり選んで歌ってみたが、紫はどうでもいいという顔で天井を見つめていた。

「先輩の気持ち悪い、愛の言葉攻撃は、英語の勉強で慣れました」
鼻で笑う紫の表情は、実に憎らしげだ。

「じゃあ田辺さんも何か歌ってみたら？」

「へ？」

「それとも、歌苦手だったりする？」

「歌えます」

紫は珍しく俺の挑発に引っかかった。

紫にペンタツチで選曲する機械を渡したら、まず操作方法からつまずいていた。

悪戦苦闘する姿も思わず助けてあげたくなるほど可愛い。たま

に紫には庇護欲をそそられる。

「本で選んで、番号言ってくれば曲入れるよ」

紫は分厚い本をめくりながらしばらく悩み、番号を言ったのでそれを入力する。

しばらくして流れてきた曲に驚いた。

童謡だった。

カラオケで童謡って子供じゃないんだから……

しかも歌い方がまた、舌っ足らずでたどたどしく、あどけない子供のようだった。

可愛い可愛いんだけど、自分がロリコンになったような気まずさがある

歌い終わって満足げに微笑む紫に思わず余計な一言を言ってしまった。

「ランドセルが似合いそうだな……」

「先輩、小学校付近で挙動不審者でつかまるんじゃないですか？ M大学の不名誉になるのだけはやめてくださいね」

ニヤリと微笑む紫の表情で、彼女がわざと童謡を選んだと確信した。

「いたいけな幼女に手を出す人間のくず」

猛毒を撒き散らしながら、彼女は実に愛らしく童謡を歌い続けた。君19だよね。

小学生と言い張るつもりか！

俺と彼女の間にあるハードルがまた一つ増えた。

夏カレー 前編（前書き）

朝比奈編最終話の婚約から一年後の間の話です。

譲司編だとちょうどオープンキャンパスで朝比奈と紫がバトルした頃ですね。

時系列ぐちゃぐちゃでわかりづらいので、活動報告にまとめようかと思えます。

夏カレー 前編

「あんだ、カレー食べた事ないの？」

珍獣を見るような上條の眼差しが不満で、僕はすぐ否定した。

「食べた事あるよ。給食とか学食とかで」

「そうじゃなくて家カレーよ。日本人のお袋の味っていったらカレーじゃない」

「なんで？お袋の味っていったら煮物とかじゃないの？うちの母親、和食しか作らない人だったから、家でカレーって食べた事ないけど」

今度は上條は憐れみの目で僕を見た。

たかがカレーごときでどうしてこんなに熱くなるんだろう……
ただでさえ暑いつていうのに。

クーラーの効いたカフェでも、外の日差しが目に暑苦しい夏のあ
る日。

上條がお昼に夏カレーが食べたいと言って始まった話だ。

どうにも飲んべえで食い意地のはった彼女とは、酒と食べ物の話
ばかりしてる気がする。

しばらく悩んだような顔をした後、ポツリと呟いた。

「仕方ないわね。私が作ってあげるわよカレー」

「へっ？」

「手作りカレーを知らないなんて可哀想だから……これは同情よ！」
同情を強調する彼女はちよつと顔が赤くて可愛い。

どんな理由だろうと彼女の手料理を食べられるなんて本望だ。

「嬉しいよ」

朝比奈は珍しく顔を緩ませて、本気的笑顔になった。

何も知らずに……。

どこでカレーを作るか。そこから嫌な予感が始まった。

「あんたの家借りるわよ」

「どうして上條の家じゃないの？使い慣れた台所の方が料理しやすいんじゃない？」

本音を言えば上條の家に行きたかったのだ。

実はまだ彼女の家に入れてもらった事がない。

「無理よ。私家ではまったく料理しないから鍋一つないもん」

人に食事を作ると豪語したのに、調理器具すらないほど料理しないとは……。

いやいや、朝比奈はカレーを作らないが、小中学校の調理実習やキャンプなどで作るほど、カレーは初心者料理だ。大丈夫だろう。根拠のない自信がむなし。

「炊飯器どこ？」

「ないよ。使わないもん？」

「は？鍋とか調味料はあるのになんで炊飯器ないのよ。あんたもあまり自炊しないのね」

そういうわけではないのだが、説明するのも面倒なので黙っていた。

「しかたないわね。じゃあご飯買ってきてよ。私カレー作っておくから」

僕は慌てて口を挟んだ。

「道具や調味料の場所わからないと困るでしょ。近くにスーパーあるし、後で行ってくるよ」

上條はそれもそうねと言って、材料を取り出した。

料理の手際を見ておかないと怖くて仕方がない。

朝比奈の悪い予感はすぐ的中するのだった。

「ピーラーどこ？」

「ピーラーって何？」

「野菜とか皮むくやつ。それも無いの？」

「ああ、調理実習で見かけたやつか。使わないね」

「仕方ないわね。まあ人参は皮薄いし、剥かなくていいか」

そう言つて上條は洗つた人参をまな板に載せ、左手で人参を押さえもせず、豪快に包丁を振り下ろした。

人参のヘタが勢いよく飛び、僕の眼鏡をべちつと叩いた。

言いたい事は色々ある。しかしせつかくのやる気をそいではいけない。

最小限の言葉に留めた。

「……人参左手で押さえないと危くない？」

「左手で押さえたら左手切りそつで危ないじゃない」

それは君の包丁さばきが豪快すぎるんです。力任せに叩きつける包丁が恐ろしい。

恐ろしい手つきで切っていくから、もちろん大きさなんてむちゃくちゃだ。

「まあまあかな。次玉ねぎ」

これでまあまあなのか？

包丁使つてる間は心配ででかけられない。

次に取り出した玉ねぎは皮を剥いて、豪快に分厚い串切りになった。

バーベキューなんかで見るような大きさだ。

その大きさのまま人参の乗った皿に並べようとしたから、思わず突っ込んだ。

「カレーに入ってる玉ねぎつてもつと細かくない？」

遠い調理実習の記憶ではみじん切りだった。

「べ、別にいいでしょ。煮込めば一緒よ」

そう言う上條が僕から顔を逸らした。

怪しいと思つて僕は彼女の顎をすくつて強引にこちらをむかせる。上條は瞳を潤ませて目を真つ赤にしていた。

玉ねぎが目にしみて、もう限界なんだろう。

あまりの可愛さにキスしたくなつたが、上條が包丁をぎゅっと握りしめてるのがわかつて慌てて後ろに飛びにげた。

危ない、危ない。素手で危険な上條が今は凶器を持っているのだ。

「目、洗つてきたら？」

上條は包丁を置いて無言で洗面台に向かった。

次のジャガイモはさすがに皮をむこうとしたが、手にもつのではなく、またまな板の上に置いたままだった。

分厚く皮をそぎ切りしていくもんだから、一個のジャガイモが一口分にしかない。

「ジャガイモたっぷりなカレー好きなんだけどなあ」

上條が自分の手際に文句を言い始めた。

もうどうでもいいと投げやり気分で、アドバイスした。

「皮付きポテトフライとかあるし、綺麗に洗えば皮付きでいいんじゃない？」

それもそうね、と上條は本当に皮むきを止めて切り始めた。

半分冗談のつもりだったんだけどな。

不幸中の幸いだったのは、肉がカレー用に切つてある肉を買ってきた所だ。

さすがに肉を力任せに切るのは無理だろう。

切るものは他にない。この先も心配だったが、僕はご飯を買いに行く事にした。

「ついでにビールと唐揚げと枝豆も買つてきてよ。あんたの家、酒の買い置きないんだもん」

上條は不満げだが、僕が酒飲んでたら怒るのになと、不条理さを感じた。

夏カレー 後編

「ただいま……」

扉を開けた瞬間顔をしかめた。

あきらかなコゲ臭。

ずいぶん古典的ミスだが、上條はまったく気にしていないようだ。「おかえり。カレーできたから。さっさとご飯出しなさいよ。温めるから」

彼女におかえりを言ってもらえる幸せ……などに浸っている余裕はない。

これから待ち受ける胃袋の危機に早くも胃が痛くなる。

和室のテーブル前に大人しく座って待つ。

気分は判決前の被告人だ。

上條は二人分のカレーをよそって持ってくる。

僕は買ってきたペットボトルのお茶を二人分注いで用意した。

「いただきます」

コゲ臭漂う、少し黒いものが混じった水っぽいカレーをスプーンですくった。

上條の一仕事終えた満足顔に水をさせない。

できるだけ何気ない顔を装って、思い切って口をつけた。

ガリッと生っぽく、泥の匂いがするジャガイモ。

ルーの味はするが塩、コシヨウなど下味はなく、多分ルー以外の調味料は入っていないと思われる。

しかもコゲ臭い。

野菜が生って事は肉もか？

「どう？初手作りカレーは？」

ニコニコしながら上條は自分もスプーンを手に取った。

誉める所がどこにも見つからない残念な味だが、彼女の手料理なんだから無理やりでも誉めねば。

「おいし「美味しいなんてお世辞言わないで！」」

言い切る前に上條が言葉を被せてきた。

「どうやら自分が作ったカレーを始めて食べて、絶望していた。

味見してなかったのか？まあ無理にお世辞いわなくて良かった。

「……作り直す……」

「いや、ちよつと火が通ってないのは危ないけど、もう少し火を通せば大丈夫だよ」

「この味ヤバいでしょ」

「うーん。食べ物を粗末にするのもいけないと思うけど……」

結局、カレーを鍋に戻して温め直した。

「カレーやっぱ作り直す……」

「やっと最強カレーを食べきったばかりなのに、そんな事を言われでは困る。」

「昼は上條に作ってもらったから、夜カレーは僕が作るよ」

上條は不満そうだったが何とか説得して思い止まってもらった。

彩花は朝比奈の手つきを呆然と見守った。

鮮やかに野菜を刻み、慣れたように冷凍庫から鶏肉を解凍し刻む。

「あなた、いつも家事してるでしょ」

「うん。自炊したほうが安上がりだし」

「ならなんで炊飯器ないのよ」

「土鍋でご飯たくからいらないし」

本当に土鍋でご飯炊きはじめてた時は驚いた。

土鍋でご飯たくなんて、今時女子でもやらない。

「実家に炊飯器なくて土鍋で炊いてたから当たり前っていうか……」
野菜を刻むだけではなく、生姜やニンニクのみじん切りを炒めたり、コンソメを入れたり。

隠し味にコーヒーをいれた時は、初めてカレーを作ったとは思えないほど芸が細かいと思った。

「うーん。スパイスきかせた方がもっと香りいいよね」

朝比奈は自分が作ったカレーに採点辛いが、母が作ったカレーより美味しい。

女子として非常に悔しい。

「なんでカレー作った事ないのに、あんたの方が美味しいのよ」

「やっぱり、料理作り慣れてるからかな。なんとなく上條が作るの見てわかるし」

酒のつまみに出された、残り物の煮物も美味しいなんて反則だと思っ。

朝比奈が料理上手な豆男とわかった。

嫁に貰ったら毎日美味しい料理作ってくれるのかな？と馬鹿な事を考えた。

おまけ

「唐揚げレンジで温めといて」

「トースターじゃなくてレンジで？」

「トースターだと時間かかるでしょ」

朝比奈は言われた通り唐揚げを温めたのだが、なかなか唐揚げがでてこない。

「いつまで時間かかっているのよ」

不思議に思っでレンジを開けた。

唐揚げが無残に小さくなっている。箸が刺さらないほど固い。

「あんた何分レンチンしたのよ」

「え？10分」

「10分もレンジするなんて、あんた馬鹿！」

「トースターで温める時それぐらいだから。ダメなの？」

心底わかってないようだ。

料理あんだけできて、なんでレンジの基本わからないんだ。

なんでも朝比奈の実家にレンジはなく、一人暮らしする時に初めて使ったとか。しかも普段は冷凍物を解凍する時しかレンジ使わないらしい。

「使わないのになんで買ったのよ」

「これオーブンレンジでトースター機能もあるでしょ。オープン使いたかつたんだよね」

残り物の料理もレンジを使わず、鍋に移して温め直すらしい。無駄に豆だとレンジの使い方わからなくなるのか……

私は大きいため息をついた。

「私がレンジの使い方教えてあげるから、覚えなさいよ」

「ありがとう」

女子なのに、料理の腕で負けて、レンジ手抜き技だけ詳しいなんて……。

スッゴい屈辱だ。

夏カレー 後編(後書き)

朝比奈は気づいてないようですが、彩花は朝比奈ではなく朝比奈の料理に目がくらんできますね
女の心も胃袋で掴めでしょうか

秋波 前編

夏が終わり、紫のアドレスを手に入れて1カ月。
ママにメールを送っているが、ほとんど返事は返ってこない。

大学でもしよっちゅう会えるわけでもなく、久しぶりに学内で見かけただけで浮かれてしまうほどだ。

昼休み、学食で彼女を見かけた。珍しく友達らしき女の子と一緒にだったので、近づかなかった。

遠くから彼女を眺めていたらふと目があった。
ウインクを返してアイコンタクトを試してみる。

彼女は俺の愛情表現など華麗に無視する。

まあそんなもんだよな……と思っていたら、急に彼女からメールがきて驚いた。

『秋波を送らないください』

なんだかよくわからない内容だったが、彼女からのメールは珍しい。すぐに返さねば。

『あきなみって綺麗な言葉だね』

『秋波。読みは「しゅうは」です。知ったかぶりする馬鹿ですか？
辛辣な彼女からのメールに慌てて、携帯ネットで『秋波』を調べ
る。』

秋波…色目を使う。媚びを売る。

……なんか、字を見た時は綺麗な言葉だと思ったけど、ひどい意味だな。

しかしこんな言葉日常会話で使わないぞ。

彼女はかなりの読書家なせいか、珍しい言葉を何気なく使う癖が

ある。

紫の様子を目で伺うと、一緒にいた女の子はいなくて、一人だった。

俺は紫の向かいの席に移動する。

「田辺さんって物知りだよ。いろんな言葉知ってる」

「先輩が無知なんです。秋波は日経新聞でよく使われますよ。経済学部なのに日経も読まないんですか？」

「読んでるよ。でもそんな言葉出てたかな？」

「主に政治欄でよく使われます。他国や他の政治家に『秋波を送る』とか」

「ああ、そういえば政治欄は概要だけで、読みとばしてるな。やっぱり経済ニュースの方が重要だし」

呆れた顔で紫は俺を見下した。慌てて俺も弁解する。

「俺、親から将来の社会勉強のためって、高校から株とかFXをやらされてたから。今だって親からの小遣いで、自分で利益出したお金が小遣いだし。自然と経済の方が気になるんだよ」

金の話とかあまり女の子にしたいくはないが、得意分野で自慢して少しは挽回したい。

紫の目も少しは見直したものに変わっていて、ちよつと嬉しい。

「株とかがって難しいんじゃないですか？失敗して大損したり」

「少ない資金で一攫千金の博打的な無理する人もいるからね。俺は分散投資でどこかで損でも、他で挽回できるようにしてるから、基本ローリスク・ローリターンだよ。初期費用は親から利子つきで借りてたから、早く返したくて無茶した時期もあったけど。」

「親から借りて利子あったんですか？」

「親父も経営者だからね。シビアだよ。まあ経済の教育って意味もあるみたいけど」

経済の話など専門外なので、紫もあまり深く突っ込まず話は終わった。

もつそんな話をする事もないと思っていなかったのだが……。

しばらくして急に紫から会いたいと連絡があった。

彼女から誘われるなんて初めてかもしれない。

大学近くのコーヒーショップ。

英語の勉強の時によく利用する店だ。

「お待ちしてすみません。榎木せんぱい」

いつもより一オクターブ高い鼻にかかった甘い声。彼女らしくなかった。

女の子っぽい服装、上目遣いのウルウル目。

絶対おかしい。可愛いけどおかしすぎる。

これこそ『秋波を送る』ってやつか。

今度は何企んでるんだろう。

「今日は。せんぱいに、お願いがあるんです」

やっぱり何かあった。しかしここまで露骨に媚びられなくても、

元から彼女のお願いを断るなんてできない譲司なのだが。

「何かな？田辺さん」

「英文学部の葛西准教授はご存知ですか？」

「うん。1年の時講義受けたよ」

「葛西准教授、最近FXで大損して、奥さんに内緒だったから相当困ってるみたいなんですよ」

嫌な予感の中。

俺は思いつきり逃げ出す気満々だ。

「俺学生の、素人投資家だし。そういうのはプロに任せたら」

「奥さんに内緒なんですから、堂々とプロに何か頼めないですよ。だから……先輩に何とかしてほしいなあって」

「無理。というか、なんで葛西准教授を助けなきゃいけないの。田辺さん？」

彼女はらしくない上目使いを止めて、いつものしたたかな笑みを浮かべた。

「私英語の成績が悪いので、単位危ないんです」

つまり賄賂替わりという事ね。

「俺が英語教えてあげるから、先生に取り入るの止めたら」

「1学期の成績不信は取り返せないし、まだまだ私の英語レベル低い先輩だって知ってるじゃないですか」

確かに前よりも進歩したが、紫の英語レベルはようやく中学3年にたどり着けるかどうかという所だ。

「英語の成績をあげる努力はします。でも時間はかかるから、その間はやっぱり先生にお世話にならないと」

そこで紫は肩を落として寂しそうに呟く。

「経済的に苦しい中大学に入れてくれた祖父母のために落第なんてできません。落第するなら退学しなきゃ……」

譲司は目を見開いて慌てた。紫が退学なんてしたら二度と会えなくなる。

「わ、わかった。取りあえず葛西准教授の収支状況を俺が見る。手に負えなさそうならプロに任せるって事でどう？」

ころっと態度を変えた紫は、ひまわりのような笑顔を向けた。

「はい。じゃあすぐ行きましよう。大学で葛西準教授がお待ちですよ」

初めっから俺が断るわけないと思ってたな……。

都合のいい男になってる所が悔しい。

葛西准教授は真面目で大人しい感じの人だ。なんか前より痩せた……とかやつれた気がする。こういう人でも熱くなって危ない橋渡ったりするのかな……。

恥ずかしげに身を竦ませる葛西准教授の横でパソコンに向かった。そして状況を見れば見るほど、頭抱えたくなった。

「なんで、こんな下降一直線の国にレバレッジ使ってまで投資したりするんですか！」

「そろそろ底値で上がると予測したんだよ」

「なんか怪しげな投資家達は煽ってみたいですけどね。そんなわけないじゃないですか」

紫は俺達の話の内容など理解はしていないだろうが、悲壮な声の響きで悟ったようだ。

「そんなに危ない状況なんですか？」

「これじゃ。プロだって逃げ出すよ。それにレバレッジって借金みたいなものだから……」

本当にギリギリを綱渡りしてる。

やつれるわけだ。

「黒字にして欲しいなんていわない。負けた分の半分でも取り返せれば……」

「追加資金あるんですか？」

葛西准教授の提示した金額は、半分でも負けを取り戻すのは厳しい金額だ。

「無理だよ田辺さん。精々優秀で信頼できる投資家を探した方がいいですよ」

俺は席を立つて部屋を出た。

すぐに紫は追いかけてくる。

「先輩言つてたじゃないですか。借りたお金返すのに無茶したつても美味くいったんでしょ？」

「昔の話だよ。今は堅実にやってるし」

紫はそれでも諦めずに俺の袖を掴んで引つ張った。

「ただでとは言いません。お礼もします」

縋るような彼女の目を見るのがつらくて、視線をそらした。

「お礼で付き合ってくれるとか？好きでもないのにそんな事されても嬉しくないね」

「決着がつくまで、毎日お弁当作ってきます」

讓司の体がピクリと震えた。

紫の愛情こもったお弁当。なかなか魅力的だ。

しかも彼女はいつも自分のお弁当を手作りしてたから、料理上手だろう。

「成功報酬も別につけます」

彼女は悪魔的な笑みを浮かべて俺を誘った。

「先輩が喜びそうなコスプレします」

俺は顎が外れるかと思うほど驚いた。

紫がコスプレ……。まったく想像できない。

「な、何するのかな……？」

「何を着るかはお楽しみです」

余計気になる。何を着るきなんだ紫。

結局悪魔の誘惑に勝てずに、俺は引き受ける事になった。

秋波 中編（後書き）

すみません

長くなつたので3つにわけました
次でこの話終わります

秋波 後編

それからの日々は想像を絶するものだった。

ほとんど睡眠もとらず、授業も出席しているだけで、意識は常にパソコンの中。

FXだけでは短期間で利益をだせないの、株と平行でデイトレをする日々。

約束通り紫は毎日お弁当を作ってくれるが、パソコンを見ながらマウスから手が話せず、せっかくの弁当も流し込むだけだ。

ああ……ゆつくり味わいたいの……そろそろこの株買いだなあ……あつだし巻き美味って……ヤバい下がってきたから売りだ……唐揚げ肉汁一杯で幸せ……何！ドルが売りの気配、おいおいまだもう少し持つてくれ……

とまあ、忙しすぎて余計な事考えてる隙がないのだ。

過労と睡眠不足とストレスで胃の調子も悪いし。

「先輩お弁当です」

紫がいつもの時間に持つてきてくれたが、顔見る余裕もなくパソコンの中と格闘中だ。

「何かリクエストありますか？」

「さっぱりしたもの」

最近食欲なくて、紫の弁当しか食べてないと思う。

しかしそろそろ彼女の愛情弁当でも揚げ物とかはきつい。

「せっかく秋ですし、旬のサンマの梅煮やサンマのほぐし身とこそ、ゴマの炊き込みご飯とか」

思わず唾を飲み込むほど美味しそうだ。

……ああ、いかに集中、集中。

「うん。任せるよ」

その後も紫は弁当にそうめんという荒技を繰り広げた。ごま油を絡めて一口ごとに小分けにしてあったので、固くならずゴマの風味が食欲をそそる。

柿と大根のサラダなど一風変わっっているながら、旬を忘れない心使いに癒される。

「松茸ご飯食べたい……」

「高いから無理。舞茸ご飯にしますね」

うん。そういう所はしっかり儉約家だよね。弁当の材料費ぐらいだすのに。

そうして秋が終わる頃なんとかメドがたった。

「約束通り、損失の半分は挽回しました。残りは長期的に利益が出そうな株やスワップポイントのいい通貨にしましたから、市場を見ながら無理せず、投資してください」

「ありがとう。榎木君」

葛西准教授はさすがりつかんばかりに、感激しながらお礼を言った。「もう二度と怪しげな情報に惑わされないでくださいね。次何かあっても、絶対協力しませんから」

釘を差す事も忘れず言い切って、意地で足を動かした。

今すぐ眠りたい、このまま倒れてしまいたい……。

教授室を出たところで紫は待っていた。

「お疲れ様です。榎木先輩」

毎日会っていたはずなのに、まともに顔見るの久しぶりな気がする。

「大丈夫ですか？」

不安げに下から見上げる紫に気持ちが緩んでいく。

ちようどいい高さだな……

紫の頭の上に顎を乗っけてもたれかかった。

紫の華奢な体で俺を受け止めきれず、倒れそうになりながら紫が慌てた声をだした。

「先輩！こんな所で寝ないでください」

紫の可愛い声は子守歌のようで、睡魔に襲われたが、紫に支えられながらなんとかどこかにたどり着いて、そのまま俺は眠り続けた。

後から聞いたなら、『朝比奈昼寝御用達場所』の一つで寝ていたらしい。

なんでそんな所を紫が知っていたのか？聞いてみたら、「古屋教授に頼まれて朝比奈先輩をよく探しにいくんですよ」との事。

昼寝に消えた朝比奈先輩を見つけられるのって、上條先輩だけだったのにな……。

朝比奈と紫が仲良さそうなのが悔しい。

その後約束のコスプレをするというので、人気のない公園に呼び出された。

しかも何故かスーツ着用と指定される。

何着るんだろう。ナースとかメイドとか癒し系なコスプレがいいな……。

でもそんなの公園じゃ目立つし……

高校の制服とか？去年までは着てたわけだから、お金もかからないし、公園で着ても違和感ない。

紫の高校ってどんな制服かな？ブレザー？セーラー服？

他人が見れば不審者極まりない表情で、俺はニヤニヤと笑っていた。

「お待ちせしました」

紫の声が背後から聞こえ、喜んで振り返る。

今まで何度も紫には驚かされてきたが、今回が一番驚いた。

ミ、ミニスカポリス……。

紫は半袖とタイトなミニスカートから、針のように細い手足を露わにしていた。

小柄なため長くはないが、色白で折れそうに華奢な足は十分に魅力的だ。

嬉しくないわけではないが、それ以上に何故婦警コスプレ？

「ど、どこでそんな服手に入れてきたの？」

「葛西准教授のコレクションをお借りしました」

「ただ変態教師だ……あのオッサン。」

「先生のお目に私が叶えば楽だったんですけど、あいにく先生は足の長いモデル系美女がお好みなんですよね……」

「いやいや、まてまて。変態オッサンの毒牙にかけてなるものか……」

「先輩。スーツのジャケット脱いで貰えますか？」

そう言われて、秋の終わりに半袖、ミニスカは寒いだろうと思いついた。

動揺しすぎてどうかしてる。こんな些細な配慮もできないとは。

俺はジャケットを脱いで紫に着せようと手を伸ばした。

カシャリ。

へ？自分の手首に着けられたものを、理解できずにまじまじと見つめた。

紫はニコニコと俺の両手に手錠をかけた。

そして、俺の手から奪ったジャケットを俺の頭にかけた。

「なんで？」

「変質者サラリーマンを婦警が逮捕プレイです」

「そんなプレイ嫌だー！」

「先輩犯罪者予備軍なんですから、予行練習です」

「その犯罪者予備軍認定止めて……」

俺の願い虚しく、紫は意地の悪い笑みで、しばらく手錠を外してくれなかった。

秋波 後編（後書き）

長くなりました。

投資に詳しくないのでいい加減な描写で申し訳ありません。

紫のコスプレとヘタレな譲司のカッコいい活躍を書きたくて書いたお話です

冬の贈りもの 前編

11月も終わり頃、来月にむけて朝比奈はまた一つ企んでいた。

「来月の予定どんな感じ？」

「月初めは忘年会ラッシュで、中盤から冬休みにかけては休み前の追い込みで仕事忙しいわよ。うちは28日から休みだからね」

「でも今年は23日から3連休だよ」

「休日出勤してでも、あんたとクリスマスやる気ないからね」

「……そこまで、露骨に避けなくても……婚約者なんだし」

「仮よ。仮。なんで朝比奈なんかと恋人みたいにクリスマスなんてやらなきゃいけないのよ」

予想通りの展開だが、上條の強情さは半端じゃない。

策でもなければ、二人きりのクリスマスになど持ち込めそうにない。

「せっかく実家から蟹送ってくるから一緒に食べようと思ったんだけどな」

そっぽを向いてた上條がまじまじと僕を見る。

「あんたの実家ってどこだっけ？蟹って事は北海道とか？」

「いや、金沢だけど。今タラバガニのシーズンだし、焼き蟹とか蟹鍋とかいいよね」

よだれが垂れそうなほど口を開けて、うっとりする上條。わかりやすすぎる。

「上條甲羅酒好き？」

「もちろん！って……」

「うん。3連休あたり時間があつたら僕んち食べにおいでよ」

甲羅酒に舌なめずりしそうな上條だが、そこで素直に頷かなかった。

「他の日じゃだめなの？」

「その頃送ってもらおうように頼んじやった。冷凍してても鮮度落ちるし」

「じゃあ私ん家直接送つてよ。一人で甲羅酒飲む」

「それないでしょ。酷いよ」

食べ物で釣れば簡単に引つかかるかと思つたが、なかなか今回の上條は頑なだ。

その日は諦めて翌日から僕は対策を練り始めた。

まずは数日おきに金沢蟹の美味しさや料理について、メールで散々語つて興味を引く。

返信はなかつたが、きいているものと信じたい。

本当は会つて話したかつたが、上條は忘年会ラッシュで忙しい。

忘年会ラッシュが終われば、今度は残業続きの日々。期日が迫り僕は焦つてメールではなく、電話をした。

自分の時間を邪魔されるのを嫌う僕達は普段電話はしないのに。

何回目かのコールでやつと上條が電話に出た。

『しつこいわよ。ストーカー』

『メール返信ないし。そろそろ気が変わってないかな？と思つて』

『だからあんたと3連休過ごす気は微塵もないわよ』

『蟹あつても？』

『……か、かにに……釣られると……思つたら……お、大間違いよ
思いつきり動揺しながら言つても説得力ない。

『いいもん。蟹料理の店いくもん』

ああ……やつぱり蟹メール攻撃は効いてたようだ。

今頃上條の頭の中は蟹でいっぱいだろう。

『上條は酔つ払い蟹つて知ってる？』

『何それ？』

『元は中国で上海蟹を紹興酒につけた料理なんだけどね。金沢では蟹を日本酒につけて作ってるんだ』

『……』

電話の向こうで無言で息を飲む音が聞こえた。

『香箱蟹っていう地元でしか食べない小さなメス蟹を使うんだけど、味噌が美味しくて、酒の魚として最高だよ。本当は金沢でしか食べられないんだけど、特別に知り合いに送って貰えるんだけど食べにこない？』

ギリギリと歯ぎしりの音が聞こえてきそうだった。長い長い沈黙の後、唸るように低い声が聞こえてきた。

『12月23日は蟹祭りの日……』

『へ？』

『12月23日は上條彩花認定、蟹祭りの日だからね。間違ってもクリスマスなんかじゃないんだから！』

思わず吹き出しそうになるほどおかしな言い訳だ。子供じゃないんだから……

『わかった。わかった。蟹祭りね。じゃあ他の料理は？』

『ケーキ禁止。私生クリーム嫌いだし。鳥唐揚げとかはあってもいいけど、竜田上げにしてよね』

クリスマスモードぶち壊しなリクエストだ。何が何でもクリスマスとは認めないつもりらしい。

『それから、プレゼント禁止。用意したら、蟹だけ持ってすぐ帰るから』

完全に裏を読まれてる。プレゼントの候補はすでに絞り済みだったのだが、買う前でよかった。

こうしてクリスマス……ではなく蟹祭りが実行される事となった。

冬の贈りもの 前編(後書き)

彩花の食い意地のせいで、食べ物の話にっ流れます
酔っ払い蟹食べたい

冬の贈りもの 後編

12月23日当日。

竜田上げの下拵え完了。上條は生野菜より煮物好きだから、野菜は筑前煮を作つてある。

日本酒飲むだろうから、あいそな酒のつまみを2〜3品。まあ今日は蟹あるし少なめでいいか。

用意した料理は純和風でまったくクリスマスらしくなかった。

朝比奈の実家もクリスマスに煮物出てくる家だったので変わりはないが、世間一般の常識から外れているのはわかっている。

玄関のチャイムが鳴つて、我にかえつた。

ああ……もうそんな時間か。

「寒かつたでしょう……」

言いながら玄関の扉を開けて目を疑つてしまった。思わず無言ですぐに扉を閉めた。

「ちよつと何やつてんのよ！」

扉の向こうからいつもの上條の怒り声が聞こえてくる。ああ……やつぱり見間違ひじゃなかつたんだ……。

もう一度扉を開けるとやつぱりさつきと同じ。

美女が片手に米袋担いで、片手に一升瓶。

「重いんだから。さつさと通してよ」

ぶつぶつ文句言いながら、上條は部屋に入る。

「それ、家から担いできたの？」

「まさか、カートで引いてきたのよ」

外にはカートがあった。

米袋はカートに載せたとしても、一升瓶を裸のまま持つてくるか？普通……………。

男前すぎるインパクトに、思わず肩を落としてため息をつく。

「お米と酒どうしたの？」

「あんとと同じよ。実家から送ってきたの」

「上條の実家ってどこだっけ？」

「新潟」

米どころだから、日本酒も美味しいの多いよな……………。

なんとなく上條は酒豪の多い四国や九州のイメージだったのだが

……………。

米を見ると魚沼産の高級米だ。

蟹に釣り合うように無理して調達したのだろうか？

「こんな高い米、ただで親送ってくれたんじゃないでしょ」

「それはあんたも同じでしょ。どうせ金払って蟹取り寄せたくせに見抜かれてる。」

金沢出身は本当だが、普通のサラリーマン家庭が蟹など高級品送ってくれるわけがない。

なんとというか女の子なんだから、もうちょっと可愛く奢られてもいいと思うのだが、上條は絶対理由もなくプレゼントも奢りもさせたくない。

上條行き着けの店で飲む時も、会計はいつも僕がしてるが、何故か毎回半額しか請求されない。残りは上條のつけで、後で払ってるのだろう。

「この米炊いといて、締めめ蟹雑炊にしようか？」

「いいわね」

米を研いで水につけて、鳥唐揚げを揚げながら、和室を見ると、上條はすでにつまみをかじりながら日本酒と睨めっこしている。

「先に飲んでいいよ」

「いいわよ。唐揚げ食べながら飲むから」

「じゃあ先に蟹焼いというて」

すでにテーブルにはコンロと焼き網がセットしてある。

僕が唐揚げを持って和室に行くと、上條は蟹の焼ける臭いに嬉しそうに顔をしていた。

「甲羅酒の前に一杯」

僕は上條のコップに日本酒を注ぐ。

「飲んで忘れる前に渡しとくわ」

上條はそう言ってバックの中から細長い箱を取り出した。

地味な包装紙に包まれ、リボンもないそれを、僕はあっけにとられたように見た。

「何？もしかしてクリスマスプレゼント？」

「違うわよ！今日は蟹祭りの日だけじゃないでしょ」

「……うそ……なんで知って……」

「仮でも婚約者の誕生日知らないわけないでしょ」

僕は全身の体温が上がって、顔まで真っ赤になった気がする。

僕が上條とのクリスマスにこだわったのは、本当の所クリスマスのふりして誕生日を一緒に過ごしたいだけなのだった。

一緒にいられば……プレゼントも何も期待してなかったのだが、こんな不意打ち……嬉しすぎるじゃないか。

「で、でも、僕は上條に誕生日プレゼントあげてないよ」

上條は夏生まれで、誕生日プレゼントをあげようとしたら猛烈な勢いで断られたのだ。

「いいのよ。私はもう貰ってるから」

「へ？」

「これ。学生の割には奮発していいの買ったじゃない」

上條は左手に光る婚約指輪を眺めて言った。

「これで仮はチャラだからね」

僕が彼女を縛りたくてあげた指輪だったのに、彼女はずっと気にしてたのだろうか？

嬉しくて顔がにやけるのが押さえられない。

プレゼント何だろう？細長い形だと、ネクタイかなんかかな？と思いつながら受け取ると意外に重くて驚いた。

「……開けていい？」

ひと仕事終えて満足したように、上條はもう飲み始めている。

焼き蟹の美味しさに舌鼓をうちつつ、上機嫌な上條。

「好きにすれば」

包みを開けて中を確認したら、思わずふたをしてしまった。

さっきの玄関の登場の仕方といい、なんでこう心臓に悪そうないんパクトのある行動するかなこの女は？

メガネをふいて、ついでに目頭も揉んでおく。

それからあらためてふたを開けて確認したが見間違いではないようだ。

「これ刺身包丁だよね……。なんで？」

誕生日プレゼントが刺身包丁ってすごいセンスだ。

突き抜けすぎだろう。

「前に居酒屋の店長と刺身話で盛り上がった時、欲しいって言うってたじゃない」

そんな話したかな？覚えててくれたのは嬉しいが、これはきつと

……。

「これで刺身さばいて上條に食べさせるって事？」

「そついう事」

甲羅酒いいわ〜と盛り上がる上條。

「じゃあ今度上條の家でさばいてあげる」

「ダメ。絶対。あんたにうちの敷居はまたがせん」

「なんでそんなに警戒するかな？男の家で酒飲んでる時点でもう変わらなと思うけど」

「あんたが襲おうとしても、私が張り倒すし」

僕は箱からプレゼントを取り出しながら言った。

「今僕が何持つてるかわかって言ってる？」

僕は意地悪な笑みを浮かべてささやかな反抗を試みる。

上條は強い眼差しで僕を睨みつけた。

「あんたみたいなモヤシ男、凶器のハンデつきでぶちのめしてやるわよ」

男前な捨て台詞も、すぐに蟹の美味しさで緩んでしまえばかたなしだ。

僕は諦めて、上條に食べ尽くされる前に蟹を食べ始めた。

蟹って食べてると会話なくなるよね。

蟹美味しいな……。

彼女からの初プレゼントに嬉しいような、悲しいような。

複雑な朝比奈だった。

冬の贈りもの 後編（後書き）

四季シリーズ終了です

この後も何作か短編をつづけようと思います。

だいぶ時系列がごちゃごちゃなので、活動報告に年表をのせようと思つてます

よろしければ活動報告も時々覗いてやってください

恋の応援 1

12月初旬ともなれば東京も寒くなってくるというのに、この街に来る女性達はオシャレの為に寒さなど関係無いのだろうか？

譲司は表参道駅近くのカフェで人を待ちながら、道行く人々を見つめそんな感想を抱いた。

譲司がここを選んだのは、待ち合わせ相手の職場が近いのと、芸能人や目立つ容姿の人々が集まるここなら、かえって目立たないと思っただからだ。

しかし譲司一人でもすでに注目を集めている。さらにあの華やかな美女がきたらさらに目立つんだらうな……。

少し冷めたコーヒを口にしながら、周囲に警戒を怠らない。

こんな所あの人にはばねならんでもない。あの人は今東京にいないが、他の人間から話がまわらないとは限らない。

その時吹いた風と共に空気が変わった気がした。

遠目からもよくわかる長身の美女が歩いてくる。

体育会系のくせと身についた女性への敬意に思わず立ち上がった。

「お待たせ、柎木君。そんな立ち上がりで迎えてくれなくていいわよ」

ヒールを履いているといっても、背の高い譲司と並んで見劣りしない女性はすくない。

多分170cmはあるだろう。しかも身長に対して顔が小さく手足が長いので余計に背が高く見える。

ビジネススーツに身を包んでもなおわかるグラマラスなスタイル、華やかでありながら知的な美貌。大きな瞳は目元がきりりと引き締め、長いまつげが作る影が美しい。ふっくらとした形のいい唇を

つりあげて微笑めば、紫という恋する相手がいる譲司でさえも思わずにやけてしまう。

モデルに間違われてもおかしくない容姿で、表参道があるけば大変だろう。

「スカウトに捕まりませんでした？」

「そんなの空気と違って目もあわせないわ」

譲司も同じようなもので笑顔で同意した。

彼女の椅子を引いてエスコートしようとしたら、呆れられた。

「ほんと榎木君は女の子には誰にでも紳士よね。そんなんじゃ誤解されるわよ」

「誰にでもじゃないですよ。先輩は特別ですから」

「そういう発言がまた誤解されるの。気をつけなさいよね」

怒ったような口調だが、彼女なりの気づかいに嬉しくなる。

最近俺の周りは腹黒ばかりだから、癒されるなあ……。

二人が席につくと彼女にメニューを渡した。

カフェ店員がすぐに注文を取りにやってくる。

「俺はおかわり。先輩はどうします？」

「ビールください」

午後のティータイムといった時間に、カフェで初めからビールとはなかなか男前だ。

運ばれてきたビールを一気に半分飲み干し、幸せ一杯の笑顔で微笑んだ。

「やっぱり昼間から飲む酒は最高ね」

「今日も休日出勤だったんですよね。お疲れ様です」

「最近忘年会続きで、残業できないから仕事貯まっちゃって。まあ1件予定の仕事が先延ばしになったから、今日は早めに切り上げられたけど」

「そんな貴重な時間、俺なんか突き合わせちゃってすみません」

「いいの、いいの。どうせ予定なんてないし。それに榎木君から呼

び出しなんて珍しいじゃない」

「ちよつと先輩の事が心配になって……。でもいつも通りお元気そうでよかった」

「心配つて……。もしかしてヤツなんかしでかしてるの」

鋭いな。普段は鈍いふりしてるが、実は彼女はなかなか切れ者だ。

多分俺が呼び出しをした時からわかっていたのだろう。

「正直に言ってください、上條先輩。何か困っていることありませんか？朝比奈先輩を怖いと思うことありませんか？」

上條は空になったビールをテーブルに置きながら、探るような鋭い眼差しを譲司に送った。

譲司は上條の事を先輩として尊敬してる。彼女には幸せになって欲しい。

しかし彼女の婚約者である朝比奈をよく知ってるがゆえに、彼女の事が心配でならない。

最初は朝比奈に脅されて付き合ってるのではないかと不安だった。付き合ってるという噂が流れた直後の、あまりに唐突な婚約だったから。

しばらく観察していたが上條に変化はなく二人の仲は良好に見えた。

大人の男女が合意で付き合ってるのに、口を挟むべきではない。

彼女が幸せになるなら二人の応援もしたい。そう思い始めていたのに、最近また彼女が心配になってきたのだ。

「榎木君に心配されるような事はないわ」

上條はおかわりのビールを頼みながら、そう答えた。

恋の応援 2

上條は仕事用の冷静な表情を作ったまま、素早く頭を回転させた。目の前の後輩が私を本気で心配してくれているのはわかる。

そして朝比奈と私の仲を疑っているのも。

まあ、朝比奈の性格知ってて、喧嘩ばかりしてた私達が、いきなり付き合ってた、婚約しますなんて疑われても仕方ないわよね。

しかし婚約してから1年たった今頃に、何故こんな質問をしてくるのだろうか。

実は上條は朝比奈とある約束をしていた。

それは偽の婚約者だという事は朝比奈と上條だけの秘密にするという事だ。

会社に乗り込んであれだけ言ったのに嘘でしたなんてしゃれにならない。

それに朝比奈の思惑通り、左手の指輪は大きな威力を発揮して、今の所本気で彩花に手をだそうとするバカな男は少ない。

彩花はまだこの都合のいい関係を終わらせるつもりはなかった。

人のいい後輩を疑うわけではないが、どこから情報が漏れるかわからないので用心する。

「どうして、私が困ってるだなんて思うの?」

「最近上條先輩と朝比奈先輩喧嘩してます?」

言い争い程度の喧嘩ならいつものことだ。当たり前すぎて喧嘩だと思えないぐらいに。

「してないわよ。というか忙しいから最近会ってないわね」

柎木は引きつった笑顔を浮かべた。

「忙しくて彼氏と会う暇がないのに、俺なんかとお茶してていいんで

すか？」

「朝比奈は今古谷教授のお供で名古屋の学会でしょ。どうせ会えないんだしいいじゃない」

「まあ、そうなんですけど……だから朝比奈先輩最近荒れてるのかな……」

「もしかして朝比奈、ストレス解消で柁木君をイジメてるんじゃないでしょうね」

「そうじゃないですよ」
わざとらしく笑顔を作っているが、引きつっている。

在学中から気がかりだったのはこの後輩の事だ。

学内で朝比奈の性格の悪さを知る数少くないこの後輩は、そのせいで朝比奈に散々利用されている。

『朝比奈問題専用窓口』上條彩花としてはほっておけなかった。

だから連絡先を教えて何かあったら相談するように言っておいたのだ。

そろそろ我慢の限界かしらね……。

「遠慮しなくていいのよ。私が今度キツくお灸をすえておくから」

「止めてください。そんな事したらますます酷い事に……って、ああ……」

自ら墓穴を掘って落ち込む後輩はなんとも可愛いもんだ。

朝比奈にはこういう隙がないもんなあ。

ちよつと癒やされる。

ハーフのせいか、少し色素の薄い髪や目、掘りの深さと日本人の柔らかな輪郭が合わさってきつすぎない甘い顔立ち。

身長も180cmを軽く超えている長身にスポーツマンらしくほどよく鍛えられた体はたくましい。

これで女性に優しく紳士的なのだから、『学園の王子』なのも納得だ。

体格的にはもやし朝比奈なんかよりずっと恵まれてるのだから、腕力で跳ね返せばいいものを、この人のいい後輩はそれができないのだ。

「大丈夫。柁木君の事は話さないから」

「俺の事はいいんです。もう慣れましたから。それよりも上條先輩の方が心配ですよ」

あまりに真剣な柁木の態度に、朝比奈との取引を隠す後ろめたさを感じた。

「初めはあんなに女遊びの激しかった朝比奈先輩が婚約だなんて、今度こそ本命の彼女ができたんだと思っただけです。上條先輩は朝比奈先輩の事よく知っててそれでもつきあってるんだと。でも、最近それが怖く感じてきたんです」

「怖い？」

柁木はそこで悩むような感じで押し黙った。

「俺最近好きな子がいるんです。今まで付き合ってた子と比較できないくらい特別な」

突然の話の飛躍に彩花も思考がついていけない。

「ああ……朝比奈から聞いてるわ。ずいぶん変わった子を好きになつたとか」

「俺も朝比奈先輩を非難できないくらいたくさんの女の子と付き合ってますけど、彼女は特別でもう彼女以外の人を好きに慣れないって思ってしまった」

「いいじゃない。本気の恋を見つけたんだから」

「周りのみんなから反対されるし、何より彼女自身から拒絶されるのに諦められずにしつこくつきまとってるんです。ストーリーだ、変態だって言われるけどその通りかもしれない」

思いつめた苦悩の表情の中、瞳に映る狂気にした揺らめきに彩花は冷や汗が流れた。

一人の女に執着し追い求める男の狂気。

恋愛小説だと、これだけ好条件の男に狂うほど愛されるヒロインというのは人気があるが、正直恋愛にさほど興味のない彩花には理解できない心境だ。

「俺の事おかしいと思いませんか？」

「ううん。人の事を好きになる事はいい事よ。私は応援するわ」

「ありがとうございます。そんな事言ってくれるの先輩だけです」

あまりに突っ走り過ぎて本当にストーカーとかは止めてほしいが、今の彼に何を言っても無駄な気がした。

「朝比奈先輩も俺と同じだと思っんです」

「へ？」

突然朝比奈の話に戻って、冷静さが崩れた。今の話、朝比奈に繋がってるの？

「上條先輩と婚約して1年。少しだけ朝比奈先輩は優しくなったし、いい意味で変わったと思っんです」

「朝比奈が優しいね……嘘が美味くなっただけじゃないかしらねえ」

「朝比奈先輩って誰も好きにならない分、誰とも深入りしないというか、距離感が常にあつたのに。大分最近は近くなつた気がします」

それは上條もわかる気がした。婚約者になつたからかもしれないが、3年以上の付き合いでまったく知らなかつた朝比奈の一面に、この1年何度驚かされた事か。

「近くなつた分かるんですよ。俺にとつての『彼女』と朝比奈先輩にとつての上條先輩は同じだつて。もし上條先輩が朝比奈先輩から離れようとしたら、多分かなり危険な事になるんじゃないかつて心配で」

「まさか……そんな……」

「最近会ってないんですよ。朝比奈先輩は焦ってるんですよ。このまま上條先輩がいなくなるんじゃないかつて」

「……」

いつも余裕で嘘臭い笑顔のあの男にも、目の前の後輩と同じ狂気があるというのか？

確かに最近クリスマスに会わないと宣言したのに、朝比奈はいつもと違ってかなりしつこく食い下がっている。

しかしそれは自分の誕生日を仮でも婚約者とすごすという朝比奈のきまぐれ。

朝比奈の考えに気づいていながら拒否してるのは、朝比奈が素直に誕生日を祝ってほしいと言わない事が、しゃくにさわるからなのだが……。そして朝比奈も私に拒否されて意地になっているだけ。互いに意地を張り合うだけで、私たちの間に恋愛感情なんてないと思ってた。

もしこのまま私が意地をはり通したら、朝比奈はどうするんだろう。

狂気にかられておかしくなるのだろうか？

そんな姿想像もできない。ただ『学園の王子』が狂うほど恋をしているだなんて、誰にも想像できなかった。

朝比奈もそうならないとはいいきれない。

彩花は心の中に暗雲が立ち込めるのを感じた。

恋の応援 2 (後書き)

譲司はイケメン、彩花は美女って設定だけど

今までちゃんと外見描写してなかったなと反省し

今回は少し描写多めです

初めは譲司と彩花のほのぼのコンビの交流のほが

書いてるうちに暗い展開に

作者は鬱展開好きですが、最後はハッピーエンド派です

恋の応援 3

朝比奈はまた学内で隠れて昼寝をしていた。

最近忙しくて睡眠不足なため眠気は強いのだが、うとうとする程度。

そんな時色々な事が頭をよぎる。

先日の名古屋での学会のレポート、論文、バイトの仕事もたまっている。

まだまだ睡眠不足の日々が続きそうだ。

だがその方が余計な事を考えなくていい。

上條の事が頭によぎって思わず顔をしかめた。最近彼女の顔を思い出すとイライラする。

クリスマスの方が美味くいかないからではない。

上條の拒絶などいつもの事だし、お互い意地になっただけだ。わかっているのにイライラする。

なぜイライラしてしまうのか？何度考えてもわからなかった。

その時頭にかけてあった上着が勢いよくはがされる。

懐かしい日々を思い出すその出来事に、有り得ないとわかっていても期待してしまった。

彼女が自分から探しに来てくれたのかと。

「明らかに残念な顔して、失礼な男ですね」

憎まれ口を叩く後輩の言う通り、朝比奈は思い切りがっかりしていた。

「古谷教授がお呼びですよ」

用件も昔の彼女と同じなのに、目の前の後輩には不愉快さしか感

じられない。

「田辺。なんでここ入れたの？鍵かかってたはずだよね」

ここは『中国文化研究会』というサークルの部室だ。

と言つても今は幽霊部員しかなくて、事実上の廃部状態だ。

朝比奈が在学中に先輩部員から鍵を預かっていて、隠れ寝床によく使っている。

「私も部員になったから鍵もらいましたよ」

「なんで？田辺さんテニスサークル所属でしょ？」

「あれだけ柁木先輩につきまとわれて、テニスサークルなんて続けられませんよ」

確かにテニスサークルには柁木目当てで入った女子が多いから居づらいたろつ。

「それに朝比奈先輩もテニスサークルと中国文化研究会掛け持ちしてたじゃないですか」

「それつてもしかして僕の隠れ場所暴くために中国文化研究会入ったの」

田辺は返事の代わりに意地の悪い笑みを浮かべた。

「そんな理由でサークル入るとは……中国馬鹿にするなよ」

「あら。私第二外国語中国語とってますし、勉強のためでもあるんですよ」

「どうせ君の事だから、英語と同じアルファベットってだけで、フランス語やドイツ語を避けて中国語にしたんだろう。漢字使ってるからって甘くみてるよ痛い目みるよ」

「中国の古典は日本文学に大きな影響を与えていますから。日本古典文学を学びたいなら当たり前前の選択です。先輩も同じ考えで中国語勉強してるんじゃないですか？」

悔しいがその通り。まったく趣味思考が似すぎて気持ち悪い女だ。

「中国語につまづいたら教えてあげなくもないよ。田辺」

「上から目線ムカつきますね。結構です。私中国語の成績いいですから。今にあなたを追い越しますよ」

「僕中国語検定1級だよ。そう簡単に追い越せると思うなよ」

「私も大学入学前から在日中国人の知人に習ってたから、日常会話程度はできますよ。HSK初級の3級持ってますし」

「まだ3級じゃあね。僕は次の試験で11級狙ってるよ」

「確実に喧嘩売ってますね。望む所です。私も次はさらに上をめざしますよ」

寝覚めに不愉快極まりない、冷戦を繰り広げて最悪に気分が悪い。

「それで誰と私を間違えたんです？」

いきなり突っ込んだ質問をされて思わず顔をしかめた。しかしすぐに表情を笑顔の仮面に塗り替えて言い返す。

「ノロケ話聞きたいなら語ってもいいけど」

「最近荒れてますけど、彼女さんと美味く行ってないんじゃないですか」

ノロケ話嫌いな田辺にしては珍しく反撃がかえってきた。

「忙しいから彼女不足で疲れてるだけさ。彼女に会えば癒やされるのになあ……」

わざとらしくため息つきながら、ノロケ攻撃を続ける。

田辺は怯んだように口をつぐんだ。

田辺を黙らせた事で満足した僕は立ち上がった。

「古谷教授呼んでるんだったよね」

僕は田辺を置き去りにして部屋をでようとして、そこで引き留められた。

「……怖いんじゃないですか？」

「何が？」

「彼女さんを失う事が」

田辺の言葉に心臓が止まりそうなほど衝撃を受けた。

「あなたは人当たりいい仮面つけながら、人と距離取るタイプですよね。人と深く関わるのが面倒で、親しくなりすぎると裏切られた時つらいから」

「わかったような事言うな……」

「わかりますよ。私も同じですから。あれだけ変態的なアプローチをする柁木先輩の気持ちも、私はいまだに信用するのが怖い。人の気持ちは変わるものですから」

めつたに本音など言わない田辺が何を言う気だと疑ったが、壊れた人形のように無表情で何を考えているのか読みとれなかった。

しかし声の真剣さから案外真実を語ってるのでは？と思う。

「私は昔人に裏切られて信用できなくなりました。それでも真剣に私を見てくれる人に会って信じたいと思った。でも怖くて結局自分から遠ざけました」

表情のないまま人形のように口だけ動かす田辺。

目を覗き込めば、暗い闇に飲み込まれそうなほど深い色をしている。

「その男が好きだったのか？」

「直接会ったのはただ一度だけ。好きとかそんな関係じゃないです

……でもまだ連絡をくれるんです。返事も無いのに」

『男』という言葉を否定しなかった。

しかもほんの少しだけ微笑む姿は幸せそうで、彼女にとって大切な人間なんだとわかる。

柁木。どうやらずいぶん手ごわいライバルがいそうだと。と心の中ですぶやいた。

「だから先輩も怖いんじゃないですか？」

「君と一緒にしないでくれ……」

否定した言葉は弱かった。

認めたくないが、田辺の言う事は凶星だった。そしてなぜイライラするのかわかった。

上條を思い出してイライラするのは彼女と近づきすぎたから、無意識に彼女を嫌いになって自分から遠ざけようとしてるのだ。

そうやって心のバランスをとらないと、彼女が僕から離れていく時、何をしてくるか自分でもわからない。

それこそ、自分の夢も、生活も、家族も何もかも忘れて、どこまでも落ちていく自分がいて怖い。

最近機嫌の悪い朝比奈が怖いくらいの笑顔で待ち伏せていた。

「ちようどいい、柁木。手伝ってほしいんだ」

俺の返事も聞かずに文学部研究室まで引きずられた。

悪い予感しかしない。

「なんですか？」

「ちよつと資料室の整理を手伝って貰いたいだけだよ」

「それなら朝比奈先輩の外面のよさをいかして人を集めれば……」

朝比奈は口の端を釣り上げ、不気味な笑顔で物騒な事を言った。

「資料整理の傍ら、暇つぶしに人間サンドバックをいたぶる方がストレス解消にいいからな」

冗談に聞こえないから怖い……。

「お前も最近田辺のおかげでずいぶん打たれ強くなったよな」

サンドバックって毒吐き攻撃のか！

紫にも誤解されているが、酷い事言われて傷ついたりしてるのだ。

ただ我慢強くなっただけで。

「先輩機嫌直してくださいよ。ほらもうじきクリスマスだし。上條先輩と……」

話の途中で朝比奈の周りの空気が急激に冷えてきて、俺は危険を感じた。

ヤバイ。これは朝比奈先輩最強不機嫌モードだ。

「柁木。お前本当に地雷踏むの美味いな。わざとか？」

「違います！」

「いいや、僕にイジメられたいとしか思えないね」

資料室の狭い本棚の間で近づいてくる朝比奈。

譲司より背も低く華奢なはずの体が、何倍も大きく感じられた。

「ケータイだせ」

「え、何で……」

「知らないとも思ってるのか？お前と上條が、僕が名古屋に行ってる間に会ってた事」

思わず死の恐怖を感じた。

あの時の事知られてたなんて……。

朝比奈の声はいつさいの感情を消した無機質な音で、醜悪なほどに不気味な笑顔とまるであってない。

「人の女に手をだそうだななんて、ずいぶんふざけた真似してくれるな」

「手をだすわけじゃないですか！」

「じゃあなんで上條のアドレスなんて知ってるんだ？」

先輩は俺の尻ポケットに入れられた携帯に気づき、ポケットに手を入れようとした。

俺は慌てて先輩の手を押しとどめようとする。

「何する気ですか」

「柁木のケータイから上條のアドレスを消す。それから、メルアドも変える。ついでに電話番号も変えてこい」

「やめてください。そんな事したら、他の人とも連絡とれなくなります」

「この場でケータイ壊されるとどっちがいい？」

「どっちもやだー！」

ケータイを取り合ううちに、俺は態勢を崩して後ろに倒れた。

朝比奈は体重をのせて膝を俺の腹に落とした。

「ぐはあ」

「僕、暴力嫌いだっただけだね。上條の影響かな……。最近口より手が早くなつたよ。次はどこがいい？綺麗な顔とか？」

「暴力反対！」

「だったらつべこべ言わずにさっさとケータイ出せ」

紫の貴重なアドレスとメールが詰まったケータイを人に渡せるものか。

俺は無駄なあがきで抵抗を続けた。

「というわけで、こんな感じなんですけどいかがですか？」

「いかがも何もあれ止めなくていいわけ？」

「榎木先輩はDMの変態さんなので、喜んでいたぶられてますから気にしないでください」

そんなわけがない。どうみても榎木は必死で抵抗している。

資料室での男二人の攻防をこっそり覗きながら、平気な顔で笑ってる少女が一番怖い。

突然少女に呼び出されてやってきた上條は疑問を口にした。

「ところでなんで私のアドレス知ってたの？」

「榎木先輩の隙を狙って少々ケータイをお借りしました」
しれっと言うが犯罪行為だろう。

「彼女さんにも是非朝比奈先輩の荒れっぷりを見ていただきたいと思って。ああ安心してください。上條先輩が嫌ならすぐアドレス消しますから。でも、貴重な情報提供者として残しておいた方が特ですよ」

悪魔のような提案をする田辺紫。

彼女が噂の榎木譲司の思い人。

周りが反対するのがよく解る。朝比奈に負けず劣らずの腹黒さ。

榎木に応援するなんて言ったが、心から祝福できそうにない。

しかし榎木が目をつけられた今、大学での朝比奈の情報を手に入る別の手段が必要だ。

「アドレスそのままでもいいわ。よろしく、田辺さん」

「こちらこそよろしくお願いします。これで一つ朝比奈先輩の弱みが握れます」

不気味な笑みを浮かべる、恐ろしい協力者にため息をつきつつ、彩花は思い悩んだ。

しゃくけど、意地はらずに折れてあげなきゃダメかな……。

朝比奈とクリスマス……嫌だなあ……。

ますますアイツがつけあがりそうぞ。

数日後朝比奈からかかってきた電話で、苦し紛れに『蟹祭り』と言ったら、電話ごしでも朝比奈が笑いかみ殺してるのがわかった。

古谷教授の秘密（前書き）

すみません

私の趣味で古谷教授ネタ書いてしまいました

お爺さんの話喜んでくれる、優しい読者様っているでしょうか……

古谷教授の秘密

古谷教授の学内での評判はロマンスグレーの素敵なオジサマ。60を過ぎててもなお姿勢よく、スラリとしたスタイルのよさ。銀縁眼鏡が似合う知的で穏やかな美貌。

仕草も言葉も丁寧で上品さがあり、着てる服や小物も上等だ。

還暦を過ぎても女子生徒に憧れられる大人の男。

しかしそんな完璧に見える古谷教授にも秘密があつた。

「あの人誰？」

学生が行き交うM大学校内を歩く一人の女性にみな目を奪われた。初老の着物を着た女性というだけで、大学という場に浮いている。その上、美しく年を重ねて、若い頃もさぞかし美人だっただろうという感じで、柔らかで清楚な中にほのかな色香が漂う美貌はどこにいても目立つだろう。

しかも着物姿で大きなカートをもち荷物を引いているから、そのギャップがますます目立つ。

女性は慣れた足取りで文学部研究室までたどり着き、上品にドアをノックしてから入った。

「皆様お久しぶりでございます。いつも主人がお世話になって」

「こちらこそお世話になってます。いつもすみません」

研究室にいた一番年上の助教が真っ先に女性を出迎えた。

研究室に入ったばかりの学生は驚いた顔で先輩に聞いた。

「あの着物の人誰ですか？」

「古谷教授夫人だよ」

聞いた学生は言われて納得した。

古谷教授と並んで立てばさぞかしお似合いな、上品で美しい夫妻だろう。

「お前今日きてラッキーだぞ。今日は月に一度夫人が来る日だからな」

「どうして来るんですか？」

「文学部研究室の学生に手作り弁当差し入れしてくれるんだよ。めちゃうまだぞ」

「マジですか！昼めし代がうく！もしかしてあのカートの中身ですか？」

「ああみんな食べるから、学食に運ぶの手伝え」

「なんでわざわざ学食に運ぶんですか？」

「知らないよ。俺が研究室入る前からの伝統だからな」

食べ物に釣られたのは学生だけでなく、講師や助教、准教授まで皆が学食に行ってしまった、研究室はもぬけの空となった。

「さて、初めましようか、あなた」

夫人がそう言うのと隣の部屋から古谷義孝教授が現れた。

「またするのか淑子^{しゆく}。着物汚れるぞ」

「往生際が悪いですよ。着物だつて毎月の事でしょう」

淑子は穏やかに、しかし有無を言わせず微笑んだ。そして着物の袖を紐でたすきがけして、ありえない俊敏さで本棚の梯子を登る。

迷わず最段の右から5冊目の本を引き出して、空いた隙間に腕を突っ込んだ。

「はい、ひとつめ」

引き抜いた手には一本の酒瓶がある。

「それはオークションでやっと手に入れたんだ……」

「ダメです。没収です」

「なんで迷わずわかるんだ。」

「あなたの考えなどお見通しです」

それからソファの隠し引き出しや、カーペットの下の隠し倉庫など次々と暴いて、淡々と酒を回収する淑子。

マルサのがさいれのようだ。義孝もみるみる顔が青ざめる。

回収した酒はすべてカートに積み込まれた。

「本当に毎回毎回困った人ですね。こんなに買い込んで」

「いや、付き合いでもらったりするから……」

「さっきオークションで手に入れたって言ってませんでした？」

「……」

「約束ですよ。飲み会とか仕事の付き合いで仕方ない時以外は、

1日家で晩酌2合までって。なのに隠れてお酒買って飲んで」

酒を取り上げられて立ったまま俯いて落ち込む義孝。

淑子はゆっくり近づいて義孝の頬に手を添えた。

「あなた」「淑子」

間近で見つめ合う夫婦。一瞬甘い空気が漂って、淑子の手が頬から滑り落ち、首を伝って胸元をなぞる。

ジャケットのボタンを器用に片手で外し始めた時、義孝は驚いたように身じろいだ。

ジャケットの内側にすると手を入れた淑子の手は確実に獲物を捉えた。

「これも没収」

義孝はスーツの内ポケットにウイスキーのミニボトルを隠していたのだ。

淑子はボトルの蓋をあけて匂いを嗅ぐ。

「安い角瓶のボトルに、いいお酒詰め替えていますね」

「なんで淑子は酒飲まないのにわかるんだ」

「あなたの妻になったせいです」

淑やかに微笑みながら、しかし淑子の追及はまだ終わらなかった。今回はまたずいぶんとお金を使ったものですね。さすがのあなた

のポケットマネーでも払えないのでは？」

「人からもらったから……」

「先ほどオークションでと言っていましたよね」

「……」

「購入資金はどこから調達したのです？」

完全に劣勢に回った私は黙秘を貫くことで反抗した。儂い抵抗でしかなかったが……。

「『古典に見る恋愛』の印税、もう入ってきてるころですよね」

「……」

「黙ってても無駄ですよ。ペンネーム変えて、文体変えたつもりでも、文章にあなたらしさがにじみ出て一読すればすぐわかります」

それは淑子に内緒で受けた仕事で、その分内緒で使えるへそくりができたと思っていたが、ばれていたとは……。

「すまない」

「罰として今週末は私と箱根に温泉旅行です」

「いや、来週締め切りの原稿や論文が……」

「締め切りなど無視です。旅行に仕事持ってきてちゃいけませんよ」

「淑子。仕事をワガママで放棄はできない」

いくら自分が悪いとはいえ、いつもは仕事には口を挟まない妻の珍しいワガママだ。

私が毅然と言い返せば、年甲斐もなく淑子は口を突き出してむくれた。

「あなた大学のお仕事と作家業で忙しいのに、さらにお仕事増やして無理して、年を考えてください」

そう言っただけで目を見上げる淑子の目は少し潤んでいた。

働きすぎの私の健康を気遣って、温泉旅行などと言ってくれたのか……。

妻の気遣いに嬉しくなっただけで抱きしめようと手を伸ばす。

「もう宿は予約しちゃいました。美肌に効く貸切露天風呂付きのお部屋なの」

少女のようにはしゃぐ妻。あれ？私のための温泉旅行じゃないのか？

「その年で美肌とか気にする事……」

「甘いです。あなた。若い子ならお手入れしなくても美しくいられるけど、年をとればとるほど、美にはお金と手間がかかるんですよ」「君は今でも十分に美しいよ」

「今はでしょ。いつまでも美しく、あなたの自慢の妻でいたいんです」

ああ……いつまでも美しく、可愛い私の妻。結局私はいつも彼女に弱い。

酒の没収も旅行も私のためと言われると、どうにも逆らえないのだ。

妻の尻に敷かれて幸せを感じる古谷教授であった。

小さな恋の物語 1 (前書き)

短編集なのに7話もある長編になってしまった。

しかも紫の過去編のはずが、なんか謎だらけでヒロインの出番少ない？

色々すみません。

しばらくお付き合いください。

小さな恋の物語 1

さわもりわたる
沢森渡は手紙の山を見つめてため息をついた。

すべて一人の人間宛てのものだ。

これがただの作家へのファンレターなら驚くに値しない。

何年も文芸雑誌『北斗』の編集者をやっているが、沢森もこんな話聞いた事がない。

手紙の山の宛名はすべて『源氏』となっている。

『源氏』は『北斗』の読者投稿コーナーの常連投稿者だ。

2年前ぐらいから投稿が始まって、今では毎号掲載されるほど。

それだけ掲載されるのは、投稿内容が面白いからだ。他の読者からの人気が高いのも理由の一つだ。

しかしいくら面白い・常連といっても、ただの一読者に山のようにファンレターが届くというのは異常だ。

『北斗』は硬派な文芸誌で、読書好きの目の肥えた読者が多い。

『源氏』は読者としては特に抜きん出た批評家だ。

しかしその内容は素人だから許されているのであって、お金をもらっているプロには業界の暗黙的に書けない、痛烈な皮肉に満ちていた。

毒舌というのは刺激が強く、多くの支持者とアンチを生む。

このファンレターの山の中にはカミソリ入りとかあったりもするんだらうな……。

投稿掲載者には景品として、図書カードが送られるので、最初はそれと一緒にファンレターも『源氏』に郵送していたのだが、量が増えた今となつては、郵送料と発送の手間がバカにならない。

それに解決しなければいけない問題がもつひとつあった。だから『源氏』と直接連絡をとる必要がある。

投稿の際に必要な事項として、住所や電話番号も書いてある。そして本名も。

『田辺紫』

一般的には女性名だろう。ただ『源氏』の書く文章は冷静で硬質で男性的な匂いがする。

年齢は？これだけの観察力と読書量は年配者を想像するが、文章には古めかしさと若さが同居するような不思議な感じが漂う。

沢森がただの読者だったら『源氏』が好きになっていただろう。

謎の素人批評家として正体など知りたくはなかった。

しかし私は編集者で、これは仕事だ。

何度も受話器を持ち上げては下ろすという行為を繰り返し、やっと思い切って電話をかけた。

『はい、田辺です』

若い女性の声が出た。子供か？大人はいるだろうか？

心配しながら私は名乗った。

『雑誌『北斗』の編集をしております、沢森といいます。田辺紫さんはご在宅でしょうか？』

わずかな沈黙の後、少女の声がためらいがちに答えた。

『……私です』

『えっ……。あっ、失礼しました……。『源氏』さんですか？』

『はい』

間違いではなかった……。あの『源氏』が少女？いや、声が若い大人の女性かもしれない。

それでも想像を充分に超えている。

『いつも弊社の雑誌に投稿ありがとうございます。お話があるのですが、今お時間大丈夫ですか？』

『はい』

それからまず比較的に話しやすい話から始めた。

毎月送られてくるファンレターを効率よく送る提案だ。

『私書箱？あの雑誌の送り先でよくある』

『ええ、個人でも借りられる私設私書箱を利用して、その住所を雑誌に掲載すればプライバシーは守ったまま、直接あなたのご自宅に届きます』

『お金がかかるのでは？』

『その費用は弊社が負担します。今あなた宛てに送り返す郵送費と人件費の事を考えたらその方が安いぐらいですから』

彼女にとって損はない話だったので、簡単に了承を得られた。

しかし本題はここからだ。

『実はもうひとつお願いがあるのですが』

『なんででしょうか？』

警戒するような声色が響いた。

『実はあなたのファン達から弊社に、もっとあなたの批評を読みたいという要望が多く届いています。『北斗』の編集長もあなたの文章を雑誌に載せさせていたきたいと言ってまして、読み切り1Pでコラム書いてみませんか？』

『お断りします』

躊躇いもなく即答で返事が返ってきた。

断れる事を予想してなかったわけではないが、ここまで即断されるとは思わなかった。

『今までどおり個人情報伏せてペンネームのみ。もちろん原稿料もお支払いします』

『お金の問題ではありません』

『何か事情があるなら、できる限り協力します。話し合いだけでも』
『…………』

『きちんと御説明したいので、一度会ってお話したいのですが。弊社に着ていただくか、私のご自宅にお伺いするか…………』

『家に来られたら困ります』

『ではなんとか弊社にご足労いただけられないでしょうか？』

『わかりました。話を聞くだけ、そのためにいきます』

私は丁寧に謝辞を述べ、待ち合わせの打ち合わせをして電話を切った。

あの『源氏』が若い女性だったとは驚きだった。

そして断られたコラムの件。

読者投稿にはあんなに熱心に送ってくるのに、なぜコラムだとダメなのか？

彼女は何を警戒しているのか。

それともあの文章のように難しく癖の強い人間なのか…………。

小さな恋の物語 1 (後書き)

沢森さんは今回の語り部役に作ったのですが、思いのほか出番が多くなってしまう

むしろ振り回される哀れな編集者の物語？

小さな恋の物語 2

約束の日、沢森の前にやってきた、『源氏』に衝撃を受けた。

セーラー服って女子高生だったのか！

声が若いとは思っていたが、ここまで若いとは思わなかった。

いまどきの子にしては珍しく洒落つ気のない大人しく真面目そうな女の子だ。

黒く長い髪を首の後ろできっちり纏め、化粧もしてない顔は平凡で印象が薄かった。

これで眼鏡でもかけてたら完璧な文学少女なんだけどな。

驚いてしばし呆然と見つめてしまったが、年頃の女の子をじろじろ見るなど失礼きわまりないだろう。

慌てて視線をそらして挨拶した。

打ち合わせ用にパーテーションで区切られた、簡易打ち合わせ室に案内し、早速説明を始める。

「電話でもお話したように、今回は読み切りで1Pのコラムをお願いしたいのです。原稿の内容は本の批評であれば自由にしていただいてかまいません」

「取り上げる本や作者も自由ですか？」

「はい、文字数の範囲内なら何冊でも」

「書く内容をあらかじめ決められる事もないのですか？」

「こちらで書く内容を指定しては、わざわざ『源氏』さんに書いていただく意味がありません。いつも通りで結構です」

少女は少し驚いた顔をしていた。

無理もない。彼女の普段の批評は痛烈すぎて、作者や出版社を敵

に回しかねない内容だ。

今までは読者投稿コーナーに何行かだったから目立たなかったが、1Pのコラムとなれば問題になるだろう。

編集長は『源氏』を気に入ってるので、どんな内容でもかまわな
いと言っているが、掲載すればどんなトラブルが起こるか。

少女は大人しそうな顔に似合わぬ、意地の悪い笑みを浮かべた。

「この仕事受けてもいいですよ」

「本当ですか？」

「でも条件があります。出来上がった原稿は私の許可なく、一字一句変えないでください」

「しかし、プロのライターでも校正やリテイクはあるものですよ」

「誤字脱字などは言っていただければ直します。記事の内容が気に入らなければ、掲載してもらわなくていいです」

いくらこちらから依頼しているとはいえ、素人の子供にここまでわがまま言われれば腹もたつ。

子供だから、こんなワガママを平気で言えるのか。

「私の事ワガママな子供だと思っていますよね。でもこれだけは譲れません。『源氏』の名前を利用して本の宣伝でもされたら困ります」

「そんな事は……」

「ないと言いつつ切れますか？私にファンレターをくださる方々は、私の批評を信じて本を買ってくださる方々ばかりです。私は皆さんの期待を裏切るような仕事はできません」

私は彼女をワガママな子供と思った自分を恥じた。

彼女は自分の書く文章が受け入れられず改変されるだろう事、記事が読者に与える影響まで考えて、始めから断ったのだ。

子供と思っていたが、『源氏』の文章らしい、鋭い観察力と冷静さを持っている。

私は彼女がどんな文章を書くのか見てみたくなった。

「わかりました。その条件でかまいませんので、原稿を依頼します」
「後悔してもしりませんよ」

彼女の不吉な言葉が耳に残って離れなかった。

しばらくして、彼女の原稿が届き、彼女の言葉通り、私は後悔した。

あのわずかに見せた意地の悪い笑みで、彼女の性格を見抜くべきだった。

原稿には5冊の本が取り上げられた。そのうち4冊は人気作家の作品で、『源氏』は散々に批判している。

最後の1冊はまだ3冊しか本を出していない無名の新人作家で、これだけは絶賛だ。ただしこの本についても、最後に釘を指す事は忘れていない。

『この作家の3冊目は文句なく秀作だが、1冊、2冊目は駄作である。願わくば次回作は良作である事を期待する』

5冊とも批判だけだったら、このコラムは毒舌を撒き散らすだけのつまらないものになっていただろう。

しかし有名作家であろうと駄作はあり、無名作家であつても秀作はあるという『源氏』のメッセージが、このコラムの価値を高めていた。

正直掲載はかなり難しいが、このコラムを載せてみたいと思った。

彼女は私が悩むのがわかっててわざと書いたのだろうか？

あの最後の言葉からありえそうな事だ。そして彼女は性格が悪い
と思いついた。

結局、私は彼女のコラムを載せるべく、東奔西走するはめになった。

彼女を気に入ってたはずの編集長も、原稿を読んで渋った。

頭の固いお偉方に耳に入って横やりいれられないように注意し、掲載作家にお詫びをし、他社の出版社の担当にネチネチいびられながら。

たった1Pのコラムのために胃に穴が空きそうな程ストレスを抱え、二度と『源氏』に原稿依頼などしないと心に誓った。

掲載雑誌が発売されるや否や反響は凄まじいものだった。

事前に根回ししていても、作家や出版社から抗議はきたし、有名作家のファン達からなぜこんなひどい記事を書くのかと、クレームの電話と手紙が殺到した。

しかし予想外の事も起こった。

5冊目で『源氏』に絶賛された本が売れているというのだ。

発売から半年が経過しても、まだまだ初版が有り余っていたのにあつという間に売り切れ、重版分もすべて配本され、再重版まで決まったという。

しかも書店員の評判がよく、書店のオススメにしたから本をたくさん回して欲しいと言う依頼が多い。

書店員の口コミから火がついてベストセラーになるケースも多く、今回もそうなるのではないかと言われている。

私も『源氏』の原稿を読むまではまったく知らない作家だったので読んだ。

葛城優吾作『繭の夢』

現代日本を舞台にした恋愛物語だが、リアルな現実感と運命に苦しみ葛藤する主人公の描写が素晴らしく、悲劇的なラストも希望を感じる美しいもので、全体的に暗い話ながらも読後感が良かった。

あの辛口な『源氏』が秀作と評価するのも納得できる作品だ。

今まで注目されずに埋もれていたのを、『源氏』は発掘し紹介したのだ。

だからこの本が売れたのは、本当に面白い本だったからだ。

しかし日々多くの本が出版され消えていく現代で、埋もれた良作を見つけたというのは大変な事だろう。

それを考えると、まだ学生のあの少女の凄さに圧倒されるのだった。

小さな恋の物語 3

『繭の夢』で人気作家になった葛城優吾のインタビューを、『北斗』に掲載するという企画が持ち上がった頃、沢森は頭を抱えていた。

初めは文芸担当編集の川田から話が回ってきた。

葛城優吾が『源氏』に直接お礼を言いたいので会えないか？という事だった。

あのガードが固い少女が素直に頷くとは思えない。それにこれ以上彼女に頼み事などしたくなかった。

しかし断つても、断つても川田はあきらめなかった。

『源氏』に会えないと次回作を当社で書いてもらえないと泣きついてきたのだ。

川田の境遇には同情しつつも、他部署の事と割り切って断り続けた。

しかし『北斗』でインタビューの企画が持ち上がって、他の編集が葛城優吾に依頼に行ったらやはり『源氏』に会いたいと言われたらしい。

『北斗』が発掘したベストセラー作家、という触れ込みでインタビューすればかなり話題になる。

しかも葛城優吾はまだ写真の掲載もインタビューも初という謎の作家なので、雑誌の売れ行きを大きく左右しそうなのだ。

編集長からも『源氏』と葛城優吾の会談場をもうけると言われ、もう関わりたくないと思ってた『源氏』とまた関わらざるをえない状況に追い込まれていた。

葛城優吾がどんな人間か知らないが、沢森の中では最悪な印象になった。

いくらベストセラー本を出したからってまだ新人作家なのに、だだをこねて原稿をかかない、インタビューにもでないなどとずいぶん生意気だ。

そんな作家のために『源氏』に合わせる苦勞などしたくない。

感情的にはそう思うのだが、仕事となるとそうも言ってもらえないな……。

しばらく禁煙していた煙草を無意識にくわえ、火をつけようとしていた時、編集部の入りがざわめいた。

なんだろう？と思ったら一人の男が歩いている。

日本人離れたかなりの長身。無表情な濃いめの顔立ちは人に威圧感を与え、顔を見ただけで思わず道を譲ってしまいたくなるような強面。

そんな人間が私と目があつたと思ったらまっすぐ歩いてくるのだ。正直怖かった。

男は私の前に立つと、鋭い目で私を見下ろした。

「『北斗』の沢森さんですね」

低くく体の底からわきあがるようなバリトン、この強面に似合うなかなかの美声だ。

「初めまして葛城優吾です。遅くなりましたが、『北斗』に私の本を紹介していただきありがとうございます」

葛城は深くお辞儀をして、なかなか頭をあげようとしなかった。

「私は慌てて立ち上がる。」

「頭をあげてください。私はたいした事してませんから。原稿を書

いたのは『源氏』ですし」

ゆつくりと頭をあげた葛城はゆつくりと頭を左右に振った。

「確かに原稿を書いたのは『源氏先生』ですが、原稿の内容が掲載するには難しいもので、沢森さんが頑張っていたいただいたおかげでなんとか掲載されたと聞きました。ですからお礼を申し上げるのは当然です」

私の苦勞をわかってくれるとは……思わず感激してしまっただが、ちよつと待て。

『源氏先生』？ たった1回コラムを書いただけの素人に先生とは…… まあそのコラムのおかげで本が売れたのだから感謝しているのだろうが。

「『北斗』にインタビューを載せていただけるとのお話、大変ありがたいと思っています。どうぞよろしくお願いします」

また深々と頭をさげたので、慌ててまた頭をあげてもらった。

そこで始めて表情らしきものが浮かんだ。困ったような、落ち込んでいるような、そんな表情でこう言った。

「本当は『源氏先生』にも直接お礼を申し上げたいのですが、やはり難しいでしょうか？」

迫力のある顔と声で言われると、断りにくくてしかたない。

「そうですね。難しいと思います」

今度はわかりやすく落ち込んでいた。

大きな体が床にめり込みそうなほど。

「無理を言つてすみませんでした。インタビューよろしく願います」

最後にまた深々とお辞儀をして帰って行った。

後ろ姿にも哀愁が漂い『源氏』に会えない事が相当ショックなのがすぐわかる。

私は葛城が出て行った入り口を見たまましばらくぼーっとしてし

まった。

初めて会ったが葛城優吾という作家は個性的すぎる男だ。

あの迫力にびびってしまったが、よくみればなかなか整った顔のいい男だし、インタビューで顔写真が出れば女性ファンが増えそう
だ。

それに言葉丁寧で腰も低く、生真面目すぎるくらいの真面目さ
で、想像していた人物像をまったく裏切ってくれた。

インタビュー受けてくれるみたいだけど、『源氏』の件はいいの
かな？

「沢森。沢森！」

「へっ？」

「何ぼーっとしてるんだよ」

気づけば隣に川田がいた。

「葛城先生来てただろう」

「初めて会った。びっくりした」

「まあなあ。外見から誤解されやすいけど、真面目でいい人だぞ」

「そうみたいだな。なんで『源氏』に合わせなきゃインタビュー受
けない、原稿書かないなんて話になったんだ？」

「誤解なんだよ。インタビューの件だって、依頼しに行った編集に
先生が『源氏先生にお会いできませんか？』とただ質問しただけな
のに、あの迫力だろ？編集がかつてに脅されたと勘違いしたんだよ」
なんとなくその光景が想像できる。

「次回作もな……書かないんじゃない、書けないんだよ」

怪訝な顔した私に川田は事情を説明してくれた。

それを聞いて私はなんとしても、葛城を『源氏』と会わせてあげ
たいと思った。

『はい、田辺です』

今回も最初にでたのはあの少女だった。

『お久しぶりです。『北斗』の沢森です』

『何のご用でしょうか？』

言葉こそ丁寧だが、不機嫌さをにじませた声だった。

『また記事を書けなんていいませんよね』

『ええ、もちろんです。一度で懲りました』

『良かった。あれで喧嘩売ってるの気づかない鈍い人だったらどうしようと思いました』

やっぱりあの原稿の内容はわざとか。しかも人を見下したような物言いは非常に不愉快だ。

『今回は別にお願ひがあるんですよ』

『沢森さんからお願ひだなんて。またるくでもないんでしょうね』

『あなたが絶賛した葛城優吾先生が是非『源氏』に直接会ってお礼を言いたいと言っ……』

『お断りします』

人の話が終わる前に拒否してくるとは……。

まあ予想の範囲内ではあるが。

『あなたはかなりの読書家だから、作家に会えて嬉しくないんですか？』

『私は作品と作家は別物だと思ってますから。だいたい作家なんて変人か、根性ねじ曲がった人格破綻者か、権威を笠にきるいけすかない人間ばかりです』

なんと酷い作家感だ。むしろ人格破綻者は君だと言ってあげたい。

『葛城先生は真面目で礼儀正しい、良いお人だよ』

『だとしても会う気はありません。沢森さんに『源氏』の正体を知

られているだけで嫌なんですから』

『源氏』のせいで葛城優吾という作家の作品が世に出なくなっても？』

『どういふ事ですか？』

『初めてベストセラーを出して、次回作を期待されすぎてスランプになるといふのはよくある話だが、今回はあなたのせいですっどくなくなっているのですよ』

『……………』

『実はあのコラムが出る以前から、葛城先生は『北斗』を読んでいて『源氏』のファンだったそうだ』

『……………そんな……………』

『あなたの事を『源氏先生』と言っんですよ。相当熱烈なファンだったんでしょ。そんな人に『次回作は良作である事を期待する』なんて書かれたら、すごいプレッシャーだと思わないか？』

『あれは期待しているからこそ……………』

『あの最後の一文はコラムを面白くするためのわざとだね。毒舌な『源氏』がただ誉めるだけなんてつまらない。そもそもあの原稿だってやりたくない仕事を頼んだ私への当てつけだ』

『……………』

『そんな当てつけで書いた原稿のせいで、真剣に悩んでせっかくの才能が潰れようとしているのを私は黙っていられない』

彼女は何も言いかえさなかった。

コラムの依頼の時もファンの期待を裏切れないと言っていた。彼女にとってはファンは大切な存在なのだ。

葛城優吾が作家である前に彼女のファンだというなら、彼女も無碍にはできないはずだ。

長い長い沈黙の後、彼女はため息ひとつついて答えた。

『わかりました。お会いします』

小さな恋の物語 4

葛城は店の前で立ち止まったまま、扉を開けて中に入る事ができなかった。

待ち合わせ時間の30分前に着いていたので、まだ時間の余裕はあるが店の前で立ったままでは迷惑だろう。

それでもなかなか踏み切れないのは葛城が酷く緊張していたからだ。

あの『源氏先生』に会える。

そう聞いた時は本当に嬉しいかったが、いざ会つとなると緊張するものだ。

『北斗』は葛城がデビューする前から愛読していた雑誌だ。

その読者投稿コーナーに突然現れた『源氏』。

初めて読んだ時、短い文章に込められた巧みさと鋭い批評に舌をまいた。

それから雑誌を買うと一番に『源氏先生』の投稿を読み、今までの記事はすべて記憶している。

そんな『源氏先生』がコラムを書いて、しかも自分の本を誉めてくれた。飛び上がる程嬉しかった。

その後本が売れ、名前が知れ渡り、仕事の依頼が次々と舞い込んできた。

何度賞に投稿しても落選していた頃、やっとデビューしても売れ

ない作家だった時代を思い出すと夢のようだ。

しかしそれもすべて『源氏先生』のおかげだ。年齢も性別も何も知らないのに、『源氏先生』は葛城の中で神のごとき雲の上の人になっていた。だからいざ会うとなるとこんなに緊張するのだ。

なんとか冷静さを取り繕って店に入った。

平日の午後の喫茶店は空いていた。この店を指定したのは『源氏先生』だと聞いている。

落ち着いた西洋アンティーク調の雰囲気の良い店だ。

葛城は『源氏先生』がどんな人か知らないが、『源氏先生』も自分の事を知らない。

目印として、互いに源氏物語の本を持っていく事になっている。

葛城のかつてないイメージでは『源氏先生』は人生経験を重ねた年配の男性だと思っていた。

しかしそれらしい人物は客にいなかった。

早く着すぎたかな……どこか適当な席に座って待とう。

そう思い席を決めるために店内を見回してたら、一人の少女が目についた。

セーラー服を着て、黒く長い髪を一つに結んだ、大人しく真面目そうな少女が本を読んでいた。

本の世界に浸るようにつつとりと読む姿は、葛城の昔の記憶を強く揺さぶった。

あんなに楽しそうに何の本を読んでいるのだろう。

気になって少女の席の近くまでできてしまった。
そして何の本かすぐにわかった。

源氏物語……。まさか、いや……。偶然ここで源氏物語を読んだなんてありえるだろうか？

葛城が迷う間に、少女が葛城の存在に気がついた。

葛城が手に持つ本を見て微笑む。

「葛城優吾先生ですね」

やはり間違いではなかった。

「『源氏先生』ですか？」

「先生はやめてほしいのですが、『源氏』です」

葛城にとって神のような存在が、少女だったとは……。驚きのあまり呆然と立ち尽くしてしまった。

「何を飲みますか？」

気づいたら葛城は少女の向かいに座っていて、店員が注文を取りにきていた。

慌ててメニューも見ずに答える。

「コーヒーをお願いします」

しかし店員も少女も困ったように顔を見合わせていた。

何かおかしな事を言っただろうか？

少女が申し訳なさそうに話す。

「葛城先生はコーヒー好きですか？すみません。ここ紅茶専門店なのでコーヒーないんです」

葛城は慌ててメニューを見るが、紅茶の種類が多すぎて、詳しくない葛城は何を頼んでいいかさっぱりわからなかった。

目の前の少女は先に紅茶を飲んでいたので、同じものを頼む。

紅茶が出てくるまでの間、緊張と混乱で何を話していいかわからず、押し黙ってしまふ。

運ばれてきた紅茶に機械的に口をつけると、香りの良さに驚き、緊張がほぐれていくのを感じた。

「気に入っていただけましたか？」

「はい。紅茶というのはこんなに美味しいもの何ですな」

葛城が素直にそう答えると、少女は無邪気に喜んで微笑んだ。

葛城にはこのあどけない少女と辛辣で鋭い文章の『源氏先生』が同一人物だととても思えなかった。

しかし少女は間違はなく、あの『源氏先生』なのだ。

「『源氏先生』。コラムで私の小説を紹介していただきありがとうございます。ございました」

座ったまま深く頭をさげる。本当は立ち上がってきちんとお辞儀をすべきとは思いが、この店では目立つだろう。

「頭をあげてください。机に頭ぶつけて痛くありませんか？」

言われて初めて気づいた。どうやら深くお辞儀しようとしすぎて、机に頭をぶつけてしまったようだ。

しかし不思議と痛みはなかった。

「大丈夫です。まったく痛くありません。ご心配かけてすみません『源氏先生』」

もう一度頭をさげようとしたら止められた。

「葛城先生。もういいですから。それより、その先生というのはやめてください」

「お気に召しませんか？」

「私はただの読書好きな学生で、先生と呼ばれるような人間ではありません」

「しかしあなたはあの素晴らしい批評家である『源氏』なのでしょう。先生とお呼びするにふさわしい方だ」

そう言って私は過去の源氏の投稿の内容を詳しく話しながら、『源氏先生』の批評がいかに素晴らしいか語った。

少女は引きつった笑顔を浮かべている。

「初投稿の内容までよく知ってますね」

「先生の投稿はすべてスクラップブックにとってあります」

「……ありがとうございます」

少女は複雑な表情を浮かべる。熱く語りすぎたか？

「でもやっぱり先生はやめてください。『源氏』でいいです」

今度は葛城が困ってしまった。ずっと心の中で先生と呼び、憧れた存在を急に呼び捨てになどできない。

悩んだ末に葛城は言った。

「『源氏さん』ならいいですか？」

「はい……」

「でしたら、私の事も葛城で結構です」

『源氏先生』に先生とつけずに、自分だけ先生と呼ばせるなんてできない。

これ以上呼び方一つで揉める事が嫌だったのかもしれない。少女は素直だった。

「わかりました葛城さん」

それからとりとめのない雑談をして、やっと少し緊張がほぐれた頃に質問された。

「葛城さんはどんな次回作を書く予定ですか？」

次回作……。『源氏先生』と会えると浮かれて忘れていた憂鬱な問題……。

『源氏先生』もコラムで次回作に期待するとおっしゃってください

つたのに、何度書き直しても満足いく作品はできあからなかった。

『繭の夢』より素晴らしく、『源氏先生』が認めてくれるような作品を書かなければいけない……。

「『源氏さん』のご期待に添えるような作品にするべく、構想中です」

「私の期待ってなんですか？私に気に入られたいから小説を書くんですか？」

その鋭い指摘は、投稿の中の『源氏』そのもので、衝撃を受けた。

「なぜ私が1、2作目を駄作と言ったかわかりますか？」

「それは私の力不足で……」

「違います。1作目。あれは賞をとるために、審査員受けを狙って書いたものですよね」

その通りだった。作家になりたくて文学賞に応募したが落ち続け、いつしか賞をとる事が目的になって、過去の受賞作品の傾向を研究して書いた作品だった。

「2作目は読者受けを狙った作品ですよね」

そう。1作目が売れず、担当編集と最近の読者の流行りを取り入れて書いた。

「でも3作目の『繭の夢』は葛城さんが本当に好きなものを書いたんじゃないですか？」

1、2冊とも売れずに次で最後かもしれないと思った。

それなら最後に自分が書きたいものを書いてみたいと思ったのだ。

「作家には売れる内容を計算して書いて、面白い小説をかける人もいます。でも葛城さんは人の目を気にするのではなく、自分が面白いと思うものを書いたほうが向いていると思います」

葛城の耳にその言葉は女神からのお告げのように響いた。

小さな恋の物語 5

沢森は川田から一早く葛城優吾の新作原稿を読ませてもらって驚いた。

今までの葛城優吾の作品は現代日本を舞台にした恋愛をメインにした人間小説とすべきものだった。

それが今回は恋愛を軸にした、歴史小説なのだ。

『初花』というタイトルのその小説は、源頼朝の娘『大姫』と木曾義仲の息子『義高』の幼い恋から始まった悲劇の物語。

沢森も正確には覚えていないが、大姫と義高はあまりに幼い頃に政略結婚として婚約し源頼朝の下で1年間共に過ごした。

しかし1年後、父である源頼朝と木曾義仲の間で戦が起こり、木曾義仲は討ち死。

大姫は息子の義高も父が殺そうとしてしていると知って、密かに義高を逃がすが、すぐに頼朝に気づかれ、頼朝の放った追っ手に義高は殺される。

それを知った大姫は嘆き悲しみ心の病にかかる。

日本版ロミオとジュリエットのような悲劇だ。

川田から聞いた話では、『源氏』と会った後方針を変えて突然歴史物にしたらしい。

作品としては素晴らしいのだが、葛城が最後のシーンにこめたメッセージは『源氏』に当てたものなのだろうか？

不安が頭をよぎった。

それからしばらくたち、『初花』の売れ行きが好調で『北斗』でまた、葛城優吾の特集をする事になった。

沢森がインタビュアー担当になり、久しぶりに会った葛城は初対面の時より少し柔らかい印象に変わっていた。

多分あの時はスランプの真っ只中で、悩みが顔に出て怖さがまじっていたのだろう。

背の高さと体格のよさは、同じ男ながら羨ましいくらい。

インタビュアー写真の撮影のためにスーツを着た葛城は、モデルのように様になっていて、女性カメラマンを喜ばせた。

記事にするプロフィールに間違いがないか確認してもらおう。アシスタントできていた後輩編集の井口が余計な事を言った。

「葛城先生って沢森さんと同じ28なんですか。同じ年には見えませんね」

「悪かったな童顔で。お前今日もう帰っていいよ」

「す、すみません。先輩。勘弁してください」

私達のやりとりに葛城は微笑んだ。

自然な笑顔にカメラマンは熱をあげて、何枚も連写していた。

「葛城先生最高です。今度写真集撮りませんか？」

冗談抜きでやりだしそうなカメラマンの勢いに、葛城も困惑していた。

「はい。遊びはここまで。仕事、仕事」

強引にカメラマンを引き剥がし、井口を後ろに下がらせた。

私と葛城二人が向かいあうと、少し緊張をといたようだ。

テーブルには葛城用にコーヒーと私用の紅茶が置いてある。

なぜか葛城は私の紅茶をじっと見ていた。

「葛城先生コーヒー党でしたよね。それとも紅茶の方が良かったですか？」

「普段はコーヒーなのですが、最近紅茶に興味があつて勉強中なんです」

「良かったら紅茶入れてきましょうか？」

「いえ、お手数おかけしては申し訳ないのでこのコーヒーで結構です。ただ少しだけ、紅茶の香りを嗅いでもいいですか？」

紅茶の香りだけ楽しみたいとは、また変わった注文だな。

私は紅茶を差し出すと葛城は口をつけずに紅茶の香りだけ嗅いだ。そして少しだけ寂しい顔をした。

「これも違う。あの時のお茶の名前聞いておけば良かった」

あの時とはなんだろう？引っかけたが、それ以上葛城は何も言わなかった。

インタビューは順調に進んだ。最大のポイントであった何故歴史物なのか？という質問も、前から書いてみたい題材だったという、面白みのない回答だった。

突っ込んで聞いてもかわされる。私の後ろのカメラマン達をちらちらと見ていたから、他の人間に聞かれたくない事情があると悟った。

「お疲れ様でした。後日原稿できましたら送らせていただきますので、確認お願いいたします」

「よろしく願います」

後ろを見るとカメラマンが機材のチェックをしていた。

井口に後片付けを頼んで、私は葛城を連れて部屋を出る。

「葛城先生。この後少しお時間ありますか？」

「はい、予定はありません」

「この近くに美味しい紅茶を出す店があるんです。行ってみませんか？」

葛城は強面な顔を綻ばせて頷いた。

「その紅茶の特徴ってわかりますか？」

「緑茶っぽい香りがしました。色も薄いのにしっかりと味があった。私はその特徴から近そうな銘柄を選んで注文した。」

葛城は出てきたお茶に恐る恐る口づけて、驚いた顔した。

「少し違うけど、似てます。よくわかりましたね」

「先生こそ、紅茶に詳しくないのに、一度飲んだ紅茶の特徴をよく覚えてましたね」

葛城は迷うように瞳をさまよわせ、迷いを振り切るように強く目を閉じた。

「『彼女』が飲んでいた紅茶なんです」

「『彼女』とは『源氏』の事ですか」

葛城は無言で頷いた。『源氏』の正体を知る数少ない人間だからこそ、葛城は私に話す気になったのだろう。

「今回の『初花』は『源氏』に向けて書かれたものですか？」

「ええ。『源氏』と名乗るぐらいだから、古典文学や歴史が好きだろうと思って」

「『初花』のラストシーン。死んだ義高の手紙を大姫の乳母が隠し持っていて、死の間際に大姫に見せるあの手紙。あれは『源氏』宛の手紙ですか？」

葛城は否定も肯定もせず黙って紅茶を飲んでいた。

義高の手紙とはこうだった。

「あなたと離れるのは心残りですが、私はあなたが幸せになる事

を神に祈り別れましょう。私の事は忘れて幸せになってください。
あなたの花がまた咲く事を祈って』

死に際に手紙を読んだ大姫が、虚ろな瞳を漂わせて呟く。

『あなたがいない世界でどうして私が幸せになれましょう。生まれ変わって来世でお会いしたいとずっと願っていました。やっと迎えに来てくださったのですね』

その言葉を最後に大姫は息を引き取る。

義高の手紙を2度と会えない愛する人と別れ、相手の幸せを祈る
と考えれば、葛城の気持ちそのものではないだろうか？。

葛城は『源氏』ともう会えないとわかっていて、自分の思いを押し殺してこの本を書いたのだろうか？

「『源氏』が好きなんですか？」

「そんな、とんでもない。年も離れているし、相手は未成年で、そんな目で見ては失礼だ……」

葛城は否定したが、その声はしだいに弱くなっていく。

「『初花』は私の初恋の投影なんです」

そう言って葛城は昔話を始めた。

まだ葛城が高校生だった頃、図書館でセーラー服の同じぐらいの年の少女を見かけた。

その少女はいつも夢見るように、本の世界に浸っていて幸せそうだった。

名前も知らない、話した事もないその少女に好意を持って、彼女に読んで貰えるような本を書きたいと思った。

それが作家になるきっかけだったという。

「そんなつまらない理由で作家を心ざしたなどと、お恥ずかしい限

りです」

「いえ、素敵な理由だと思えますよ」

お世辞ではなく、沢森はそう思った。世の中には金や名声目当てに作家になろうという人間だって多い。

それに比べたら初恋の人のためなどと、物語のように美しい。しかも完全な純愛だ。

「『源氏さん』を見かけた時、初恋の彼女を思い出し、重なって見えたんです。あれから2人の女性が私の中で1人になって区別がない。『源氏さん』にかつてな妄想を押し付けてるだけで、好きなどと言えるものではないのです」

真面目すぎる葛城は気づいてないが、表情に現れる苦悩は恋する男のものだった。

それなりに年をとり、これだけいい男がここまでまっすぐで純情だと、なんだか守ってあげたいような、助けてあげたいような……。沢森は不思議な感覚に悩まされた。

小さな恋の物語 6

『初花』が若手作家花形の賞を取った。

文芸部門はもちろん、我が社全体がお祭り騒ぎになった。

『北斗』編集部も葛城優吾を発掘した雑誌という事で、皆が興奮している。

興奮しすぎてとんでもない事を言い出す人間が約1名。胃が痛い。

「沢森君。第2、第3の『葛城優吾』を発掘すべく、『北斗賞』という賞を作ろうじゃないか」

これが同僚なら相手にしなければいいが、編集長の発言だから痛い。

そもそも『葛城優吾』を見つけて取り上げたのは『源氏』ではないか。それをさも自分の手柄のように……。

「賞ですか。すごいですね。うちの雑誌から人気作家がどんどん出たらかつこいですね」

不用意な発言の多い井口の頭を叩いて黙らせる。

賞なんて始めたら、選考のため数多くの本を読まされて、私達編集の仕事が増えるだけだ。

だからといって、『葛城優吾』のような逸材がそう簡単に見つかるわけもない。

無駄な仕事で過労死とか勘弁してほしい。

「沢森君。『源氏』を賞の選考委員にしよう。謎の素人批評家として売り出せば面白いぞ」

謎の素人が売りなのに積極的にアピールしてどうする！とツッコみ入りたい。

「編集長。『源氏』に交渉なんてできません」

「君しか会った事ないのに何弱気になってるんだ。仕方ない。私が交渉しよう」

本人を知ってる人間が無理って言うてるのに無謀な。

編集長がさっそく自分のデスクで電話をかけ始めた。

うん。さっさと逃げよう。

「昼飯行ってくる」

「先輩。胃の調子悪いから昼飯いらないってさっき言ってますでした？」

「……取材に行ってくる……」

「昨日入稿したばかりでどこに行くんですか。今日中に企画書作るんじゃないかったですか？」

空気の読めない井口がウザイ。

無駄に引っかけかかっているうちに、編集長の機嫌がどんどん悪くなり、最後は電話を叩きつけていた。

「沢森！なんだあの生意気で常識知らずな子供は。本当にあれが『源氏』なのか？」

はいそのとおりです。ついでに性格悪いとつけたせば完璧ですとは言えない。

「文章どおり、かなり癖のある人なんですよ。だから交渉は無理かと……」

「もう、いいー！」

その後編集長を説き伏せて、『北斗賞』はなんとか止めてもらった。

しかしまた『源氏』がらみで難問がやってくるのだった。

ある日突然かかってきた1本の電話。

『沢森さん。お久しぶりです』

『葛城先生。このたびはおめでとうございます』

『ありがとうございます。実は沢森さんにお願いがあありますが』
葛城から私へのお願いということは、『源氏』がらみと思って間違いない。

すぐ断りたいが、葛城の真剣な恋心を思うと無碍にもできない。
結局引き受けてしまう沢森であった。

「スコーンとショートブレッドにイチジクのタルトとベリータルト。それからバナナブレッド。あとでビスケットも何枚か頼もうかな」

「おごりだからって本当に容赦ないね」
「ええー。編集長の無礼のお詫びに奢るって言ったのは沢森さんじゃないですか」

紅茶専門店に、奢りとお詫びをネタに呼び出したはいいものの、
どう切り出したものかと悩む。

「『北斗賞』なんて馬鹿な企画どうなりました？」

「説得して止めてもらった」

「良かった。低脳オヤジを怒らせたかいありましたね」

「……わざとだったんだね。あの後大変だったんだよ。二度と『源氏』の投稿載せるな！とか言い出して……」

「気に入られて、いいように利用されるよりましです」

目の前の少女は嬉しそうにお菓子を食べている。

話さなければ、幼さの残る可愛い女の子なのだが……。

葛城はこういう所を好きになってしまったのだろうか？

葛城先生！絶対騙されています。すぐに忘れたほうがいいですよ。

「それで、本題は何ですか？わざわざ沢森さんがお詫びのためだけに、呼び出したわけじゃないですよ。またろくでもない話でしょうけど」

「わかっているならどうして来たのかな？」

「奢りでお茶とお菓子存分に楽しめますから。話聞くだけで断ればいいし」

身も蓋もない。まあわかっているなら話は早い。

「葛城先生から賞の受賞パーティーに『源氏』を招待したいって話が出てくるんだけど……」

「お断りします」

断られるのがもう毎度の決まり文句のようになってきた。

今回はどんな理由か……。

「『初花』は『源氏』がいたから書いた小説だから、そのお礼もかねて招待したいらしいんだけど」

「それで私はみんなになんて紹介されるんですか？『源氏』の正体がこんな子供だと？」

「いや、もちろん君が『源氏』だと知られたくないのはわかっているから、そこは隠して……」

「じゃあ『今話題の葛城優吾の正体はロリコン作家だった』とか騒がれたいんですか？」

悪意に満ちた考え方だが、彼女が言うように邪推する人間もいるだろう。

「葛城さんもいい大人なのにそういう所は気がまわらないですよね」「じゃあ受賞パーティーでない所でお礼するとか……」

「私はもう葛城さんには会いません」

彼女は笑顔を消して、意志の強い目できっぱりと言いつつ切った。

「葛城さんから発売前の『初花』が届いたんです。手紙と一緒に「手紙？」

「『この本を貴方に捧げます』って。恋愛小説を捧げるだなんてラブレターですよ」

葛城先生ー！あなた何してるんですか！

「たぶん本人気づいてないと思いますよ。無意識で女性を口説くなんて、天然ジゴロですね」

私はがくりとうなだれた。

いくら先生がイケメンでも、彼女ぐらいの年から見ればオジサンだろうし、オジサンに口説かれても困るだけだろうなあ……。

「これが下手な恋愛小説なら無視するんですけど、良い話だったんで思わずぐっときちゃいました」

え？まさか脈ありなの？つい期待の目でみたら笑われた。

「『あなたと離れるのは心残りですが……』ってあの義高の手紙いいですよ。離れた所で相手の幸せを祈る。私もこれからはただの読者として葛城さんの本を見守ってます」

「……作家ではなく、ただの友人でも人として見てあげられないかな？」

「私は大姫にはなれません。中途半端に期待持たせるほうがつらいと思います」

彼女の表情があまりに寂しそうで私は何も言えなくなってしまうた。

小さな恋の物語 7

店の前で別れる時に彼女は言った。

「さようなら。沢森さん」

前に会った時も電話の時も別れの言葉など言われた事はなかった。嫌な予感がして追いかけてみようとしたら、声をかけられた。

「先輩。今の子は？」

井口だった。まずい所を見られたかもしれない。

『源氏』の正体は編集部で私しか知らないし、セーラー服の女子高生と昼間から会ってるなんて、変な誤解をされかねない。

「あの子はだな……」

何か言い訳をしようとしたら、井口は険しい顔をした。

「どんな知り合いかわかりませんが、もう会わないほうがいいですよ」

援交とか思われて心配されてる？誤解はとかなければと慌てたが、そうではなかった。

「あの制服。清心女学園のですけど、3年前にモデルチェンジして今は使われてないはずですよ。変装するなんて、何かやましい事しようとしてるんですよ。先輩近づかない方がいいですよ」

驚きで言葉を失った。制服着てたから女子高生と思っていたが、彼女が本当は何歳なのか私は知らない。

警戒心の強い性格だとわかっていたはずなのに、私は彼女の制服

や住所を知っていることで、どこか安心して油断していた。
しかし本当は彼女の事は何も知らないのだと痛感させられた。

すでに見失った彼女を思い浮かべながら、口から出たのは全然違う事だった。

「おまえよくわかったな。制服マニアか」

「違います！妹が清心女学園に通ってたから知ってただけです」

会社に戻ってから彼女の残した情報を調べ直した。

住所をネットで検索したら、『該当の住所はありません』となった。

偽住所？いや、何度か郵送でやりとりしてる。存在しない住所に郵便物を送れるわけがない。

……まさか……私設私書箱？

私設私書箱は一見普通の住所に見える宛名にできる。

そこで初めて電話した時の事を思い出した。私書箱の話をした時、彼女から出た言葉。

『お金がかかるのでは？』

あれは実際利用しているからお金がかかるサービスだと知っていた？

住所もわからないとなると、わかっているのは名前と電話番号だけ。

『田辺紫』という名も本名なのだろうか？

今となつては確認するすべもない。

そして電話もそれ以降、繋がる事はなかった。

私書箱の住所に手紙を送っても返事はなく、彼女と連絡がとれなくなつた。

ただ編集部宛てで一方向的に届く、『北斗』への投稿が続くだけだった。

「『源氏』と連絡がとれなくなりました」

沢森からそう言われた時、葛城は驚かなかった。

彼女とはもう会えないのだと、薄々覚悟していたからかもしれない。

それにこれ以上会って、自分はどうするつもりだったのだろう。

ただお礼を言って満足などできるはずはなかった。

彼女さえいればいつでも良い作品ができると、きつと依存して努力を怠っていたかもしれない。

彼女がくれたきつかけを生かし、自分の力でこれから書き続けなければ。

それから『北斗』の購読は続けた。

何事もなかったように『源氏』の投稿は続いていて、それが嬉しかった。

いつかまた私の小説について、感想を書いてくれる日がくるかもしれない。

私は『北斗』に掲載されていた住所宛に5冊目の小説と短い手紙をつけて送った。

『私の一番の読者でいてください』

それ以上を望んではいけない。

彼女がどこかで見ていてくれる、そう思ってこれからも書き続けよう。

その後、葛城優吾は次々とヒット作を出し人気作家となった。メディアへの露出が増え、外見の良さもあいまって女性ファンも多かったが、いつまでも浮いた噂一つなく独身のままだ。

何作か作品の映像化もされたが、一番のヒット作である『初花』だけは何度オファーがきても断った。

ヒロインの大姫をのイメージに合う女優がないという話だが、たぶん葛城の中では大姫は『源氏』なのだ。しかし小説の中のように大姫は義高を思う事はない。

きつと『源氏』が生まれ変わるなりしないと無理だろう。

紫の小さな部屋に置ける本棚は小さく、本はすぐに処分しなければいつぱいになってしまふ。

それにまだ学生の紫は本を買うお金を作るため、読み終わった本はすぐ売っていた。

しかし紫の本棚に『葛城優吾』の作品だけは、一冊も欠ける事なく並んでいた。

まるで大切な宝物のように。

紫が習慣のように本屋で新刊小説を買いあさっていた。

譲司も勝手にくつついてきて、紫がどんな本を買うのか観察する。

ふと最近譲司がはまっている作家の新刊が目についた。

「田辺さん『葛城優吾』の新刊出てるよ」

「もう読み終わりました」

「なんで？これ今日発売だよ」

彼女は答えなかった。その代わりに『葛城優吾』の新刊本を優しく撫でる。

愛おしそうに微笑む彼女の姿に、讓司はなぜか嫉妬した。

金沢編 1 親密（前書き）

短編集と言いながら全然短編じゃない話が続いてすみません
しかもこの章長くなりすぎました

3章はこの金沢編で終わりです、全5話の予定です
よろしくお付き合いください

金沢編 1 親密

「28日から休みなんだよね。実家帰るの?」

蟹祭りのメイン酔っ払い蟹に頬を緩ませていると、朝比奈がそう言った。

せつかく忘れてた憂鬱を一つ思い出した。

28日か……。

「朝比奈。金沢で美味しい酔っ払い蟹が食べられるお店教えてよ。なんか同僚が金沢旅行行くらしいんだよね」

唐突な話の変え方に朝比奈は不思議な顔で私を見たが、深くは聞かずに教えてくれた。

実は28日から2泊3日で金沢に行くのだ。

しかし朝比奈には言いたくない。

事の起こりは、今月の始め、朝比奈からの蟹メール攻撃が続く頃の事だった。

蟹メールで仕事中も蟹が頭から離れなかった私は、うっかり一人事を漏らしてしまった。

「金沢に行つて蟹食べたい……」

それを耳ざとく聞いていたのが、同僚の平賀理子だったのがいけなかった。

「上條。金沢行きたいの?」

全開スマイルでそう聞かれては、今更行きたくないですとは言えない。

正直私は理子が苦手だった。

完璧男受けを狙ったメイクとファッション。いつだって爪のマニキュアはサロンで手入れされてるだろう完璧さ。残業を嫌って定時あたり。

入社1年目から目標は玉の輿に乗ってセレブ妻という肉食獣っぷり。

よくこんな腰掛け気分の女子を会社は雇ったなとは思うが、定時であるために仕事はフルスピードでサクサクこなすし、ミスはないから頭はいいのだろう。

男にかける情熱を仕事に向ければ、出世しそうなものにもつたいない。

「年末一緒に金沢旅行行かない？宿泊費と交通費ただだよ」

お昼一緒に食べたり、仕事仲間みんなで飲みに行ったりと、そこそ付き合いはあるが、まだ二人で夜食事に行った事もないのに、いきなり旅行というのは驚きだ。

「なんで？」

「詳しくは夜話すから、今日夕飯一緒に食べよう」

肉食獣に狙われた小動物のように私は抵抗できなかった。

理子の事情と言うのはこうだ。

理子は付き合ってた彼氏と28日から2泊3日で金沢旅行に行く予定で、もう宿も予約済みだった。

ところが最近彼氏の浮気が発覚。というか、理子の方が浮気だったらしく、ふられてしまったらしい。

「クリスマス仕事で忙しくて会えないから、代わりに旅行しようって言われてただけど、本当は本命の彼女とクリスマスだったのよ。悔しい！腹がたったから慰謝料代わりに金沢旅行の代金全部彼に押し付けたのよね」

というわけで、ただで旅行にいけるが、一緒に行く相手がいなかった所に私が金沢行きたいと言ってしまったため捕まったというわけ

けだ。

転んでもタダでは済ませないタフさがすごいな。

会社では男性社員を意識して、キャピキャピした態度が苦手だったが、二人で話すとき意外とサバサバして話しやすい。

しかも会社の飲み会では甘いお酒しか飲めないとか、ぶりっこしてたのに、今は芋焼酎お湯割り梅干し入りとか、嬉しそうにのんぶるし。

隠れオヤジ女子仲間っぽくてちょっと嬉しいかも。

話は蟹祭りの日に戻る。

「朝比奈は実家帰るの?」

「どうしようか迷ってる。上條が冬休み予定あるなら、早めに実家帰ろうかな……」

旅行先でうっかり鉢合わせとか勘弁してほしいんだけど。

しかし私の願いむなしく、やつに頼らざるを得ないはめになるのだった。

「上條オススメの店ってここだね」

理子が気まずそうにそう呟いた。

店はシャッターが閉まって『年末年始お休みさせていただきます』の張り紙が張ってあった。

しまった。定休日は確認してたけど、冬季休暇はチェック漏れしてた……。

まだ28日なのに早すぎるよ。

「ガイドブックとか、ネットとかで他の店探してみようか」

明るく笑って、理子がさっそくガイドブックを開き始めるのを見て、私は申し訳なく思った。

旅行前に食事の店は任せてと大見得を切り、さんざん酔っ払い蟹の美味しさを語っていたのだ。

女子二人の頭の中は酔っ払い蟹でいっぱいなのにお預け。ガイドブックに酔っ払い蟹特集なんて、マニアックな項目あるわけない。

冬の寒空の下、闇雲に歩き回ってまた店が休みでは目もあてられない。

私は思いつきりため息をついて、冬の冷たく済んだ空気を吸い込む。

少し冷静さを取り戻した私は理子に行った。

「ごめん。私のせいだから……責任とる……」

「無理しなくていいよ。上條さんすごい顔してるもん」

たぶん屈辱で怖い顔してるだろうなと思いつつながら、私は携帯を開いた。

『どうしたの？上條から電話って珍しいね』

『あんたに教えてもらった店。年末休みなんだけど』

『ああ……年末休みは考えてなかったな……って、あれ？もしかして上條。金沢に来てるの？なんで？』

『いいから、他に今日やってる酔っ払い蟹食べられる店教えてよ』

『本当に、いつも君の行動は意外性がありすぎて心臓に悪いよ』

『悪かったわね。可愛げない女で。同僚の女の子待たしてるから早くしなさいよ』

『心あたりはあるけど、休みはわからないから、確認してすぐメールするよ。それまでお茶でもして待ってて』

私は返事をして、素直に理子とお茶しながら待っていた。

「ねえ、さっきの電話の相手、噂の婚約者」

私はあからさまに不機嫌な顔をしながら、無言でコーヒーに口を

つけた。

「人事の笹本部長を恐れさせた切れ者なんですよ」

思わず口の中のコーヒーを吹き出しそうなほど、驚いた。

理子が入社前の話なのになんで知ってるの？

それとも私が知らないだけで、噂になってるのだろうか。

「安心して。社内でもトップシークレットで、ほとんど知られてないから」

「なんでそんなトップシークレットを理子が知ってるの？」

「私の男受け対策は情報収集にも役立つのよ。上條みたいに真面目に仕事やるだけが、仕事のやり方じゃないって事よ」

つまり裏で仕入れた情報をうまく活用して仕事してるわけだ。

理子があんなに効率よく仕事を終わらせて仕事を終わらせるのも、遊ぶだけじゃなく情報収集してるんだらう。

ビジネスにおいて、情報を制する大きさは私にもわかる。

私は同僚に出し抜かれた気がして焦った。

「いいのよ。上條は今まで通りまっすぐにバリバリ仕事やれば。私が時々情報流してあげる」

私は理子の言葉に驚いて、まじまじと見てしまった。同僚だけど時にはライバルにもなる関係なのに、何を考えてるのだ。

「その代わり、私が定時で上がれないとき、代わりに仕事やってくれる？」

ウインク付きで魅力的な笑みを浮かべる理子。

あまりの調子のよさに、私は吹き出した。

「手加減してよね。後、名前彩花でいいから」

「了解。彩花」

私達が朝比奈がメールで教えてくれた店に着いたのは、夕食には少し遅い時間だった。

空腹は最高のスパイス。私は期待を胸に膨らませて、店のドアを開ける。

カウンターで朝比奈が座ってた。

しかもなんかいつもとちよつと服が違う。

いつも安いシャツやセーターにジーンズなのに、今日はカジユアルだけど素材やシルエットが高級感あるブランドものっぽい。

なんだこの勝負服でやる気満々な感じは……。

「あんだなんでここにいるのよ」

「この店教えたの僕だよ。上條来るのわかってるから、来たんじゃないか」

隣の理子が肘でつついてくる。

「ねえねえ噂の婚約者？紹介してよ。いい情報になりそう」

ああ今すぐ東京に帰りたい。

「彩花がこんなイケメン彼氏隠してたなんてね」

「イケメンだなんて嬉しいな。理子さんも可愛いから社内でもてるでしょう」

「なんだこの置いてけぼりな意気投合っぷり。しかもすでに名前呼び。」

「婚約者の私を名字で呼んでるのに不自然じゃないか。」

朝比奈が女にだらしないのはわかっていたが、仮にも婚約者の前で同僚を口説こうなんていい度胸だ。無駄に勝負服なのも、そのためか？

カウンター席に3人横並び、私を挟んで両側の二人の間で話が盛り上がってる。

朝比奈のいい人仮面と理子のぶりっこモード。どっちもどっちの良い勝負だ。

「なんか私はお邪魔虫な気がする。」

「しばらくトイレ行ってるから、どうぞ二人でごゆっくり」とびきりの笑顔を作って席をたった。

「あーあ。彩花怒ってるよいいの？」

「今日は理子さんがメインだからいいよ。むしろ上条がない方が都合がいい」

朝比奈は仮面を脱いで、怪しげな笑顔を浮かべた。

「目的は何？」

「口説かれてるとか思わないの？」

「男が自分を女だと思ってるかどうかぐらいわかるわよ。早く話さないで彩花戻ってくるわよ」

朝比奈はウーロン茶の入ったグラスを傾けて、その水面を見つめていた。何かを迷うような目。しかしそれもほんのわずかな時間だった。

「上条が会社でどれくらいの男たちに目をつけられてるのかな？」

「やっぱり彼氏として気になる？情報料何がもらえるのかな？」

小悪魔笑顔で理子は微笑んだ。朝比奈は涼しい顔で受け流す。

「彼氏と別れたばかりって言ってたけど、新しい出会いほしくない？合コンセッティングしようか？」

「相手は？」

「弁護士なんていかがでしょう」

肉食女子な理子の獰猛な目が輝いた。その目の輝きだけで交渉成立とわかった朝比奈の行動は素早かった。

「じゃあ日程決まったら連絡ってことでアドレス交換」

「怖いわね。どこまでも情報搾り取られそう」

「上条に関する情報ならいつでもメール待ってるから」

「いいネタは情報料の追加請求するわよ」

二人がすばやく赤外線通信でアドレス交換している所に上条が戻ってきた。

「なにやってるの？」

「せっかく知り合っただしアドレス交換？」

「まったく悪びれもせず言う朝比奈の頬を上条の平手うちが襲う。」

理子の前だから手加減して平手打ちなのだ。いつもならこぶしが飛んでくる。

「彼女の前で堂々とナンパするな！」

理子はびっくりした顔で上条を見ている。

「意外。会社じゃクールなのに、彩花って結構怖い所あるんだー」
「しまったという顔で上条は理子を見る。朝比奈も苦笑していた。

理子はウインクしながら可愛く言った。

「大丈夫。これもトップシークレットにしておくから。それにしても朝比奈さんぜんぜん動じてないんだけど、これ日常？DVじゃない？」

理子の軽口に朝比奈が一瞬怖い顔をした。しかしすぐに愛想笑いの仮面をつけなおす。

「口より手が先に動くタイプだからね。愛のムチかな」

「わお。彼女にメロメロ」

上条の怒りが最高点に達して、伝票片手にさっさとレジまで行ってしまった。

朝比奈と理子はお互い目を合わせて、クスクス笑った。

「上条彩花の婚約者のイケメンぶりとラブラブ具合、社内で噂ばらまいてくれると嬉しいな。小悪魔さん」

「ついでにその婚約者は、敵に回すと怖い腹黒って付け加えておくわ」

「もうひとつ付け加えておく。上条はDVなんかじゃない」

朝比奈の目は全然笑ってない。理子は凍るような冷たい眼差しに背筋が凍る思いがして、無言で頷く。

朝比奈にとって触れてはいけない領域を、理子は即座に理解した。上条が抜けた席ひとつ分空いた二人の距離は、互いに歩み寄れる最大の距離だ。

互いに警戒して必要以上にかかわろうと思わない。上条が心配するまでもなく、二人は利害関係なしでは成立しない冷たい関係だった。

その日の夜には理子から朝比奈へメールが送られた。

『彩花レポート。同期の男共は女なのに仕事のできる彩花にライバル意識で嫉妬してるやつ多し（ただし例外的に狙ってるやつもいる）。むしろ先輩や上司の方が要注意。しっかりしているようで、どこか詰めの甘い彩花をほっておけないやつが多い。今は新入社員の女子に下手に手が出しにくくて、お互い牽制し合っているけど、その

うち積極的に狙ってくる男も多そう。左手の指輪も婚約者というより彼氏とのラブリングと思われる。社会人になると忙しくなっ学生時代の恋人と別れる人多いから、そのうち別れるだろうとたかをくくってるね。また状況変わったら連絡するから。追伸。合コンメンツはイケメンで将来有望そうな男をよろしくね』

朝比奈は一読しただけで正確に記憶し、すぐにメールは削除した。上条が勝手に盗み見るような事はしないだろうが、証拠は残さないに限るからだ。

「朝比奈のバカ……」

上条はホテルのベットにうつぶせになって思わず呟いていた。

朝比奈と理子の間にどんなやりとりがあったかも知らずに、朝比奈にムカついて眠れぬ夜を過ごす上条だった。

金沢編3 密会

眠れぬ夜を過ごした翌朝は最悪の気分だった。

しかし1日観光できるのは今日だけ。

誘ってくれた理子にも悪いし、昨日の事など忘れて今日は楽しもう。

そう思ってたんだけど……。

私は朝比奈の悪事を見つuckerセンサーでもついているのだろうか……

街中で若い女の子と腕を組んで歩いてる朝比奈を見つけてしまった。

私達より若い子。たぶん高校生ではないと思うが。

明るい無邪気な笑顔で、可愛い女の子だった。

朝比奈の顔も、嘘臭い良い人の仮面ではなく、優しく慈しむような笑顔。

あんな朝比奈を私は知らない。

朝比奈は私が見ている事に気づいてないみたいだった。

でも声をかける事もできなかった。昨日みたいに平然としらを切られたらどうすればいいのだろう。

「彩花……」

一緒にいた理子が心配そうに私を見た。

私は朝比奈から目をそらした。

「行こう。理子」

「朝比奈さんに声かけなくていいの？婚約者なんだし、遠慮せずに昨日みたいに怒れば……」

「いいのよ。アイツはもともと女にだらしないやつだったし。最近

は大人しいと思ってたけど、地元だからって油断して羽伸ばしてるんじゃない」

理子は言葉もなく、私の後をついてきた。

私は金沢の冬の味覚を食べ尽くしてやるとばかりに、食べて食べて食べまくった。

私の食い意地を知らない理子が呆れるぐらい。

でも何を食べても味を感じなかった。どれだけ食べてもみたされなかった。

蟹祭りの時に食べた蟹は美味しかった。朝比奈と一緒に食べた。

あれだって金沢産で、あの時より鮮度も良いはずなのに、蟹の味がしない。

やつが作った筑前煮も、竜田揚げも美味しかった。朝比奈の手料理は美味しい。一人じゃないから美味しい。

「彩花、もうやめよ」

「何を？」

「もうホテルに帰って休んだら。彩花昨日あんまり寝てないでしょ。なんで気づかれたんだろう？」

私は理子の言葉に逆らう気力もなかった。

そして私達はタクシーを拾うため、駅前のタクシー広場に向かった。

今頃になって一気に満腹感で苦しくなってきた。しかも睡眠不足でふらふらする。

ぼーっと歩いていたら、すれ違い際に人とぶつかってしまった。

「すみません」

「こちらこそ。大丈夫？」

ぶつかつたのは、私より少し年上ぐらいの美人だつた。
つい見とれてぼーっとしたら、美人なお姉さんに微笑まれドキドキした。

去つていく女性に引つかかる物があつて思わず目で追つた。気づいた時には遅かつた。

女性のそばに車が止まつて、中から男がでてきた。

朝比奈だつた。

目の前の女性とさつき朝比奈と一緒にいた女の子は似ていた。

こちらは落ち着いた色気のある大人の女性で、受ける印象がまるで違ふんだけど似ていた。

朝比奈好みの顔なんだろうか？

朝比奈はずいぶんリラックスした顔をしている。

私は知っている。朝比奈が警戒心強くて、自分を見せるのが嫌いな所。

私にもまだ壁を感じるのに、その人には壁作らないんだ。

2人が車に乗つて去つていくのを見かけた後も、私はしばらく茫然としていた……。

「彩花。大丈夫？」

理子も今の見てたんだろう。また心配そうに私を見ていた。

「ただの遊びだよ。1日に2人だよ。本気なわけないんだから気にしない方が……」

「指輪してなかつた」

「え？」

「いつも朝比奈がしてる左手の指輪。さつきも今もしてなかつた」

「あの距離じゃ見間違え……」

「私両目2,0だから間違いない。さつきの子と今の人には婚約者がいるって知られたくないんだね」

朝比奈が遊びで女の子と付き合おうとも、私の事本気じゃなかったとしても、ずっと指輪をつける約束だけは守ると思ってた。

あんなバカに振り回されるのは嫌だ。落ち込んで自己嫌悪で泣きそうになるのも嫌だ。

私が泣くのをこらえているのがわかったのかもしれない。理子が可愛い顔に似合わない凶悪な顔をした。

「彩花があのお叩いた気持ちわかる。私も今ぐーで殴ってやりたい」

彼女の優しさに癒されて、私は何とか泣くのを我慢できた。ホテルに帰るまでの間の事を、私はまるで覚えていない。何も考えたくなくて、ただ頭をからっぽにしようとして努力していた。

着替えもせずにベットに倒れこんで、からっぽの頭で眠った。すごいよく寝た気がするけど、目が覚めたらまだ3時間くらいしかたつてなかった。

暗くなった外を、横になったままぼんやり眺めていた。そしたら部屋のドアがノックされる音がした。理子かな？と思っていいよと返事する。

私は振り向きもせずぼんやりと体を起こした。

「上条」

名前を呼ばれて驚いて振り向いた。今一番会いたくない男がそこに立っていた。

朝比奈が携帯の着信に気付いたのは遅かった。自室に忘れてリビングでくつろいでいたからだ。

携帯を開いて着信件数の多さに驚く。すべて平賀理子からだ。嫌な予感がしてすぐに電話した。ワンコールで繋がり、第一声からどなり声だった。

『二度と彩花に近づくな。合コンももういいから私にも連絡しないで』

『……なんで急に？』

『自分の胸によく手をあてて考えてみる事ね』

『全然わからないんだけど。説明してくれないか』

『どこまでしらを切る気よ。彩花もとんでもない男につかまったわね』

話が平行線でまったく理解不能だ。しかし確実なのは理子が怒ってて彩花に関する事だろうという事だ。

『今日彩花になにがあった？』

僕は真剣な声で鋭く聞いた。僕の真剣さが多少通じたのか、理子は興奮を抑えて嫌味な口調で答えた。

『今日あなたが女と一緒に歩いてるのを私達見たのよ。ずいぶん仲良さそうな所をね。しかも一日二人もだなんてずいぶんお盛んです事』

『もしかして、それで上条がショック受けてるとか？』

『当たり前でしょ！婚約者の浮気現場目撃したんだから』

僕は不謹慎ながら笑い声が抑えられなかった。突然笑い出した僕に理子は怒り始めたけど、ろくに聞いてなかった。

そんな事でショックを受けるぐらい、上条は僕に好意を持っている。それが嬉しかった。理子は知らない。僕たちが仮の婚約者なの

も、僕の気持が一方通行なのも。

でもそうじゃないのかも。僕は上条に期待していいのか……。しかし期待しすぎて間違いだったらいけない。僕は心のブレーキをかけて冷静になるように暗示をかけた。

『ちゃんと説明する。君にも上条にも』

ベットから起き上がった上条の顔は涙の跡がしつかりと残っていた。顔色も悪く死人のように気力がない。ただ目だけが大きく見開かれ驚いている事がわかった。

こんなになるまで彼女を傷つけた事が苦しくなった。さっきは笑ってしまったが、のんきに喜んでいる場合ではない。

でもどう話したらいいだろうか？話せない事、話さなくてはいけない事、その区別をつけて上条を救うのはとても難しい事だった。

「上条。僕の話聞いてくれないか」

上条は声もなく、見開いた目をそっと伏せた。聞いてくれるのか、怒る気力もないのかわからない。ただ目の前にいて聞こえてないはずはない、そう思って勝手に話し始めた。

「今日僕は昼間母に頼まれて買い物に行った。その時妹が一緒だった。夕方実家に帰ってきた姉を車で迎えに行った。僕が今日外で一緒だった女性ってその二人だけだ」

上条は瞳に生気を取り戻したが、まだ力のこもらないか細い声です。

「嘘。嘘つき朝比奈。あの二人の女性と朝比奈全然似てないじゃない」

言われた言葉が鋭すぎて、朝比奈の心を抉った。動揺を悟られただけで、必死に表情を作ったつもりだったがそれは失敗したようだ。上条が明らかに困惑している。

「似てないってよく言われるよ」

拗ねたような言い方になってしまった。僕が言い訳する側なのに、怒ってどうする。自分で自分が嫌になった。しかし僕が動揺した分、逆に上条は少し冷静さを取り戻したようだった。

「嘘じゃないのね」

「嘘じゃない」

「じゃあなんで指輪外してたの？」

ここで一つでも嘘をつけば、二度と上条は信用してくれない。しかしどう答えたら上条を傷つけず、話せない事を話さず、嘘をつかずに答えられるだろう。少し迷った。

「まだ家族に婚約者の事を話してない。上条は言ってもいいの？」

「どういう事？」

「仮の婚約者なんですよ？家族に嘘ついて婚約者がいるって紹介して、上条つらくならない？」

上条が息をのむのがわかった。上条が唇をふるわせ、少しだけいつもの上条らしい強気を見せた。

「私だって子供じゃない。笑顔で嘘言つて騙す覚悟ぐらいあるわ」

「でも良心は傷つくでしょ」

「……」

「正直言えば、僕も家族を騙したくない。上条が本当の婚約者になつてくれるなら、喜んで家族に紹介するけど」

「それは嫌」

「うん。わかっている。だから家族の前で指輪をはずすのも、君の存在を隠すのも許してくれないか？」

上条はゆっくりとたちあがって僕の前に立った。片手もちあげて拳を作ったが、それはまったく勢いなく僕の頬に触れた。冷たい彼女の手の感触が心地いい。

「朝比奈のバカ。そんなのいいに決まってるじゃない。ちゃんとそういう事は早く言いなさいね」
「うん。ごめん。心配かけて」

それでやめておけばよかったのについ調子に乗って口が滑った。
「でも上条が嫉妬してくれて嬉しかったよ」

上条は顔を真っ赤にして全力を込めて、僕の腹を殴った。勢いで後ろに倒れるほどに。

「調子に乗るな！バカ朝比奈」

かなり本気だ。一瞬気を失うかと思った。さっきまでの元気のなさはどこにいったのだろう。

「理子はどこにいるの？あんたがここに来たのも、どうせ理子の差し金でしょ」

「他の部屋でキャンセルがあったから、僕が部屋代出してそっちに移ってもらった。上条と二人っきりで一晩話したかったし」

「一晩って！何考えてるのよ！この変態、野獣、たらし！」

上条の蹴りが容赦なく僕の腹に入る。今日は靴を履いてない分まだが、さっきのダメージに上乗せされて吐きそうなほど気持ちが悪い。

「ちょっと何青い顔してんのよ」

上条が襟をつかんで思いつきり首をゆすった。気持ち悪くなるからゆするのはやめてほしい。

結局理子が呼ばれて、僕は別にとった部屋に運ばれて寝かされた。その時理子は上条に聞こえないように小声で言った。

「前言撤回。とんでもない女に捕まったのは朝比奈さんのほうね」
「こんな状況じゃ否定できない。」

金沢編 5 秘密(前書き)

すいません

だいが長くなりました

1Pの最長記録？

次の日私と理子は帰りの時間まで土産を買いにうろうろすることにした。

朝比奈は朝には体調が戻ったようで、一旦家に帰ってから見送りに来てくれる事になった。別に見送りなんていいのにと思ったが、理子に朝比奈にひどい事したんだから少しは気を使いなさいと言われた。

ひどい事したかな。私も相当精神的に傷ついたんだけど。まあ勘違いで朝比奈が悪い事したわけじゃないか。でも朝比奈を殴り飛ばすなんてよくある事なのに。

よくある事ですませちゃうからいけないのか……と反省した。

土産物屋で会社への土産を選んでいたら、朝比奈からメールが届いた。

『悪いけど、予定を1時間早めて待ち合わせ場所にきてくれないか？できれば一人で』

説明もない用件だけの簡素なメールが上条を不安にさせた。なんかあつたな。

私はすぐに了解と返事を返した。

待ち合わせ場所に来て、上条は嫌な予感的中したと思った。

朝比奈の両隣りには、昨日見かけた若い女の子と年上の女性が立っている。

私は二人の女性に愛想笑いをして、朝比奈を手招きした。

二人に聞こえないくらい離れたところまで連れて行き、愛想笑いのまま声だけどすを効かせて言った。

「どづい事？」

朝比奈も笑顔のまま、額からものすごい汗を流している。

「朝帰りしたら問い詰められて、色々白状させられた。彼女が金沢に来てるとしか話してないんだけど、そしたら会いたいつてついてきちゃって」

「なんでいつもみたいに、うまくまるめこんだり、嘘ついたりできないのよ」

「姉さんは僕の裏の顔まで知り尽くしてるから、何言っても通じないんだよ」

朝比奈の情けない顔を見て、こいつにも苦手な人間がいるのかと驚いた。

「婚約者とは言ってないから、うまく口裏合わせてくれる？」

上条は大きく息を吸い込み、お腹に力をこめて気合を入れた。

まだ社会人1年目とはいえ、一流企業の第一線で働き、時には先輩の後について商談に行く事もある。第一印象の大切さ、情報の有効活用、交渉術、上条の脳をフル回転させて、とびきりの営業スマイルで臨戦態勢に入る。

「おまたせ。紹介するね。彼女の上条彩花さん」

「はじめまして。いつもお世話になってます」

わざとぎこちない笑顔で丁寧にお辞儀した。突然彼氏の家族に紹介されたのだ。余裕がある方が不自然だ。家族に紹介されて緊張している普通の女の子の方が無難だろう。

「こつちが姉の優姫ゆまきでこつちが妹の雛姫ひなき」

優姫さんは上品に微笑みながら会釈して、雛姫ちゃんひなきは満開のエンジェルスマイルで大きくお辞儀した。

全然タイプ違うけど、すごい美人とすごい美少女だ。笑顔がまぶしい。

やっぱりオーラが違うよね。二人は美形オーラあるのに、朝比奈って凡人の見本って感じで、顔だけじゃなくて雰囲気も似てない。

「私彩花さんと二人でお話したいの。雛、裕一連れてお散歩してくれろ？」

私と朝比奈は同時に顔を見合わせて青ざめた。引き離して別々に話して口裏合わせしてるか確認する気か？優姫さんの上品な笑顔からは何をたくらんでるかつかうかがう事も出来ない。

「わーい。じゃあ、お兄ちゃん。私欲しいワンピースあるんだ〜。つきあってくれない？」

あざといくらいのおうるうる上目づかいがすごく似合ってる。朝比奈も困った顔半分、にやけ顔半分。

「こら、雛。そうやって昨日も裕一にフェラガモの財布買わせてたでしょ。裕一も甘やかして買っちゃだめよ」

優姫の言葉に私は顎が外れるくらい啞然とした。フェラガモの財布って……ピンキリだけど数万はするよね？記念日でもないのにねだりされたぐらいで妹に買うものか？しかもまたたかられてるのに、ちよつと嬉しそうなたらんどんだけ甘やかしてんだよ。

私はクーラーの強風レベルの冷たい視線で朝比奈を見た。

朝比奈はその視線に気づいてて、わざと見ない振りしている。

「じゃあ、昨日のお礼に雛がアイスおごってあげる」

「優しいなあ雛は……」

愛おしそうに妹の頭を撫でる朝比奈。フェラガモの財布のお礼がアイス？それで優しい？どんだけ妹バカだ。このシスコン、ロリコン、変態男。

叫び声は心の中だけに押しとどめたが、視線はもう氷点下レベルに冷たい。

さすがにいたたまれなくなったのか、そそくさと逃げ出すように朝比奈が去って行った。ごく自然に朝比奈の腕にしがみつく雛姫。どこからみてもバカツプルだ。

私があきれたように遠ざかる朝比奈を見ると、隣で優姫が大笑いしていた。

「裕一を目だけでびびらせるなんて、たいしたものねえ」

しまった。お姉さんいるの忘れて、とんでもないところを見せてしまった。私は内心冷や汗をかいたが、優姫は特に怒っているようには見えなかった。

「じゃあ。私達もお茶しましょうか」

近くの喫茶店でコーヒーを頼んで運ばれてくるのを待つ。これから待ち受ける査察に内心びくびくしていたが、優姫の最初の言葉は意外にも優しかった。

「妹に甘すぎてびっくりしたでしょ。シスコン！とか思わなかった？」

「ええ……まあ」

あんな目で見ておいて、今更取り繕っても無駄な気がして、素直に答えた。

「妹だけ特別扱いしているわけじゃないのよ。私の言う事は何でも聞くし、両親にわがままなんて一度も言わずに、むしろ率先して家の手伝いしたり」

家族に優しい朝比奈。それはとても意外な気がした。朝比奈の腹黒さとか、何枚あるかわからないほど重ねられた仮面とか、女癖の悪い最低な所ばかり見てきたからかもしれない。

「成績優秀、先生受けの良い優等生。自慢の息子、可愛げのある弟、頼もしい兄。それを演じてるだけなんですよね」

優しい笑顔から紡がれる冷たい言葉が私の心に突き刺さる。ただ演じているだけ。それはとても朝比奈らしいと思った。学校でだって、ほとんどの人間には人の良い優等生を演じている。

でも家族の前でまで、ずっと演技を続けているのか？それはひどく孤独で寂しい事だった。

「大丈夫。私は知ってるわ。あの子のだめな所も、弱い所も。いつも周りに気を使って神経すり減らしてるから、たまに息抜きしたかったんでしょね。高校生のくせに隠れてお酒飲んだり、煙草吸ったり」

すごい朝比奈らしかった。最近煙草の匂いはしないが、上条は匂い対策して隠れて吸ってるんじゃないかと疑ってる。でも、無理に辞めさせてそれで朝比奈が苦しむのを見たくなくて、あまり言わないようにしているが。

「なんかね。最初は説教しようと思ってたんだけど。くたびれた中年サラリーマンみたいな顔で煙草吸ってる姿見るとね、何にも言えなくなっちゃうのよね。十代のくせにどれだけ抱え込んでるんだろうこの子って思って」

悪い所はすべて隠して抱え込む。朝比奈の悪い癖だ。昔から筋金入りなのだろう。そこまで無理してアイツは何を守りたいんだろう。

「だからね、さっきは嬉しかったのよ。彩花さんの前ではずいぶん素直に我がまま言ってるんだなあと思って。そういう人に出会えてあの子も救われたわ」

「全然素直じゃないですよ」

「裕一は相手を怒らせる前に、怒る気にもならないようにうまく立ち回る子よ。裕一の悪い所も知っててきちんと叱ってくれるなんて、すごい貴重よ」

確かに私は気が短い、職場でトラブル起こした事ないし、我慢すべきところはちゃんと我慢する。でも朝比奈はわざと怒らせてるんじゃないかってぐらいにひどくて、私も力づくでどんどん怒って私が怒っても楽しそうにへらへら笑ってて。

あれって朝比奈なりの素直なコミュニケーションなのか？だとしたらそうとうねじくれ曲がった性格してる。

優姫は冷めかけたコーヒーに手をつけて、ゆっくりと匂いを楽しんだ。そういえばさつきから優姫さんが一方的に話してて、コーヒーにまったく手をつけてなかった。

ゆっくりとコーヒーを味わいながら、表情を緩める彼女を見て、ああこの人も緊張していたんだと気がついた。

私も嘘の婚約者という後ろめたさがあるが、この人は弟のやつかいな性格を知っていて、その恋人があきれて愛想尽かさないか怖いのかもれない。

「彩花さんは裕一の『傷』も知ってるのよね」

優姫からこぼれおちたその言葉は、私には理解不能だった。

傷？腹黒とか女にだらしないとか酒癖悪いとか、そういう素行の悪さの事だろうか？でも『傷』と漏らした言葉の響きは別の意味がある気がした。

「何のことですか？」

優雅に微笑んでいた優姫の顔が驚きで見開かれた。いきなり前のめりになって私に顔を近づけると小声で聞いた。

「恋人なんでしょ？見てないの？」

そう言われて私は顔を真っ赤にして固まってしまった。『傷』って比喻じゃなくて本当に体の傷か！恋人なら男女の仲になって当然で、裸なんて知ってて当たり前。でも私が朝比奈の裸なんて見てるわけがない。

どうしよう。下手に知ってるって言っても、どこにどんな傷なのかもわからないから、すぐに嘘だつてばれる。必死で言い訳を考えて無言でいると、急に優姫の顔が優しいものに変わった。

「あらあら。ずいぶん大切にされてるのね」

言葉に含まれる大人な響きにますます私は赤くなった。つまり朝比奈が私を大切にしているから手をださないと勘違いしてるのだ。しかしその方がいいのかもしれない。実際私たちの間に何も無いし、無理して嘘をつく必要がなくなる。私はそれに乗る事にした。

「たぶん。私が男の人とつきあうの初めてだから、気をつかつてるのかも……」

嘘は言っていない。朝比奈に会うまで、年齢〃彼氏いない歴だった。嘘の婚約者が付き合っているうちにはいるのかは別だが。

「それだけ大切な人ができたんならいいのだけど……」

そこで優姫は言葉を濁した。言い淀む姿は彼女には似合わない。彼女が何を察しているのか、上条はわかってしまった。

朝比奈が私を大切にしているのではなく、心を開いていないだけ、そう言いたいのもかもしれない。それは上条がずっと心の奥底で感じてきた事だ。

朝比奈は私を信用していない。だから朝比奈の言葉も行動もどこか嘘くさくて、本当に私を好きなのかわからない。もしかしたらこれは、朝比奈を知るチャンスなのかもしれない。アイツを知らなきゃ、私も信用できないし、信用させられない。

私は昨日から気になっていた事を思い切って口にした。

「昨日朝比奈に言ったんです。『お姉さん達と似てない』って。兄妹で似てないなんてよくある事だし、実際今までだつて言われなれてるだろうに、朝比奈すごいショック受けた顔してて。表情取り繕うのが上手な朝比奈があんなに動揺するのはなんでかな？って思ってたんですけど、家族にも気を使ったり、人を信用しなかったり、一人で抱え込んだり、そういう悪い癖に何か関係あるんですか？」

優姫は瞬きを忘れたかのようにじっと私を見つめていた。重い荷物を降ろすように息をはきだして、厳しい顔をした。

「裕一が貴方に話していない事を私の口から言うわけにはいかないわ」

正論だが、私にはもどかしく感じた。朝比奈に手が届くかもしれ

ない可能性が目の前にあるのに、お預けにされたようで。私の苦悩が伝わったのか、優姫はバックから名刺を取り出した。

そこには『浅井弁護士事務所 弁護士 朝比奈優姫』と書かれていた。

「弁護士さんだったんですか」

「まだ見習いよ。だから弁護士料なんて取らないから、もし裕一の事で何か困ったらそこに連絡して」

優姫は厳しい顔から優しい顔に戻して、また魅力的な笑顔を浮かべた。

「私はあなたの味方よ」

きつと優秀な弁護士になるだろうなと思わせるだけの、頼もしさが彼女の笑顔にあった。

第3部終了

金沢編5 秘密（後書き）

第3部終了です

次回から第4部譲司編2になります

活動報告で時系列の整理とか書いてますし

今後の展開とかちよこちよこ書いていこうかなと思っているのでよければのぞいてください

引き続きよろしく願います

ダブルアタック（前書き）

たいへんお待たせいたしました

第3章譲司・紫編となります

時間軸としては短編集の「恋の応援」ラストシーンから12月23日の間の時期から始まります

譲司と紫の恋愛事情はどう変わっていくのか？

お楽しみください

ダブルアタック

季節は12月。寒い季節ではあるが、暖房の効いた室内は本当なら季節を忘れるほど温かなはずだった。

しかし今文学部・国文学専攻の研究室にいる人々は、激しいブリザードの中にいるような寒さに息を飲んでいる。寒く重苦しいこの空気の破壊者が訪れるのを今か今かと待ち望んでいた。

体感温度を下げている主犯の二人はかれこれ数分、無言で睨みあっていた。周囲の人間には数時間に匹敵するほど長く感じられたのだが。

ここまで聞いて、二人が誰かわからない国文学専攻研究室の人間はいない。それほどまでにごく一部で有名な敵ライバル、朝比奈と紫であった。

朝比奈が周囲の温度を奪うような氷の微笑を浮かべれば、紫は周りの人間を底なし沼に引きずり込むような重く暗い笑みを浮かべている。

周りから見れば普段は温厚で優等生な二人が、どうしてもはち合わせただけでこれほど険悪になるのか、M大7不思議の一つにしたいぐらいなのだが、これが二人の本性である。

研究室の人々を救う救世主は意外な所から現れた。彼の場合救世主というよりも、生贄の方が正しいのだが、どちらにしてもこの嫌な空気から救ってくれることには変わりがない。

「失礼します……って、何やってるんですか！二人とも」

譲司は二人の険悪という表現ではまだ生ぬるい地獄絵図に、慌てて二人の腕を掴んで教授室へと引っ張って行った。幸い古谷教授は不在で無人だった。ここなら他の人間がうっかりやってくる事もない。

「二人とも、本性ダダ漏れだよ。せつかくの似非優等生の評価が台無しになったらどうするんだ」

讓司のため息混じりの苦言に朝比奈は恐ろしいまでの無表情のまま淡々と答えた。

「ああ、悪い。柁木。1年のくせに今から古谷教授に取り入ろうとつけ狙う毒虫を、どうやって駆除するべきか。完全犯罪でばれずに始末する方法をいくつか検討中だった」

当然の事の用に言い放つ恐ろしい朝比奈の言葉を、紫は眉ひとつ動かすことなく可憐に微笑んで受け止めた。

「奇遇ですね。私も院生1年にしてすでに古谷教授の寄生虫を、一刻も早く排除する方法を考えてました。まあ私はひと思いに殺してあげるような生ぬるい方法より、生き地獄に突き落として精神的に追い詰める方法を考案中だったんですけどね」

二人とも表情は変わらないし、声も穏やかだ。しかし二人の周りの目に見えない気配だけが黒く膨れ上がっていく。

普段から険悪な二人が今日は過去最高に険悪な状態だった。最悪の事態に出くわした事を、讓司は神に呪いつつ、しかし聞かすにはいられなかった。

「今回は何が原因ですか？」

「この前資料室で、僕が柁木を少しいじめただろ？あれをわざと上条に見せて嵌めたんだよ。この女は」

今まで散々朝比奈にいたぶられてきたが、暴力を振われたのは初めてだった。まああの膝落としては物理的ダメージはたいしたことなかったのだが、むしろまだ手加減してやってるうちに言う事聞けというようなプレッシャーは、かつてない恐怖だった。あれを少しと
言うか？

だがちょっと待て、上条先輩にあれをわざと見せたという事は、紫はああなる事を事前にわかっていて、なおかつあの状況下で止め

もせずに傍観していたという事か？

むごすぎる。紫に対して殺意に近い感情が一瞬芽生えた。そしてすぐに落ち込んだ。こういう事する子だってわかっているのに、どうしてまだ俺は好きなんだろう。

「あら。その報復を先輩もしたじやないですか。葛西准教授の変態趣味をネタに、私の単位取り消しをせまるなんて。私が気付いて阻止しなければ、葛西准教授の教員生命まで危ういところでしたよ」
「自分がFXで失敗したつけを生徒に尻拭いさせて、その見返りに単位を与えるような不良教員なんか、社会的抹殺しても許されると思うが」

落ち着け、自分。今はこの腹黒悪魔達の戦争をどうにか鎮静化させなければ。すでに葛西准教授はまきこまれたようだが、他にも被害者続出する。

「一時休戦してください。でなければ古谷教授に報告します」

二人は睨みあっていた視線を同時に俺に向けた。恐怖のあまり逃げ出さなかった自分を褒めてあげたい。二人の急所である古谷教授なら止められる。しかし今回はそれだけではまだ足りない。俺はさらに追加攻撃をしかけた。

「それでもだめなら、上条先輩と他の先生方に今回の全経緯報告しますが」

二人とも苦虫をつぶしたような顔をして、俺から目をそらした。

朝比奈先輩にとつてもつとも怖いのは上条先輩。そして紫は葛西准教授から不正に単位を取得した事を先生方に知られる事はまずい。長い長い沈黙の後、二人が盛大なため息をついたのはほぼ同時だった。

「嫌々だが、一時休戦だな」

「ええ、苦渋の選択ですが一時休戦ですね」

讓司がほっとしたのもつかのま、二人は恐ろしい笑顔で同時に言い放った。

「邪魔ものを先に排除しなければ」

二人の敵意を一身に浴びた譲司は、古谷教授が訪れるまでの間地獄のような2段攻撃にさらされる事となった。

ダブルアタック（後書き）

はじめからむごい目に会う議司ですが
きつと、いつか、たぶん、もしかしたら、
いい事あるはず……だと
思う

コーヒープレイク（前書き）

この作品でコーヒータは珍しいです。

理由は作者がコーヒータ嫌いの紅茶好きのため、コーヒータがないのです

初めてまともに飲めたのは20歳の頃のマックスコーヒータ

それをコーヒータ飲めたと判定できるかは正直微妙

コーヒーブレイク

古谷教授の取り成しで、渋々ながら怒りの矛先収めた二人は、仲直りのために強制的にコーヒータイムへ突入させられた。

一番年下という理由で、紫が自分からコーヒーを入れようとした。しかしコーヒー嫌いで機械音痴な彼女は、コーヒーメーカーの使い方がわからず、結局譲司が入れてみんなにふるまった。

古谷教授が何も入れないブラックコーヒーの香りを優雅に楽しんでいる横で、コーヒー嫌いの紫がコーヒー牛乳かマックスコーヒーかというような、牛乳と砂糖の塊のような液体を作り上げていた。

その差を微笑ましく見守りながら、俺は隣の朝比奈を横目で観察した。

表面的にはいつもと変わらぬ良い人で優等生の仮面を張り付かせていたが、コーヒーに砂糖は入れず牛乳だけ大量投入していた。

「あれ？朝比奈先輩ブラック派じゃなかったですか？」

「最近胃の調子が悪いから、少し控えようと思ってね。そういえば榎木がコーヒー飲むの珍しいな」

「別にコーヒー嫌いじゃないんですけど、紅茶党なので紅茶の方が多いですね」

俺は角砂糖ひとつだけで牛乳は入れない。4者4様のコーヒースタイルというのは珍しいかもしれない。

「すみませんね。残念ながらコーヒーしか用意がなくて」

古谷教授が寂しげに微笑めば、反射的に苦しい弁解が飛び出した。「先生。これは新しいコーヒースタイルの研究なんです。ごく甘でマイルドでコーヒーの香りがするようないような、不思議美味しいコーヒースよ」

紫、それコーヒースとは言えないよ。俺は心の中だけで突っ込みを入れた。

「僕はコーヒー好きですよ。これだけ牛乳を入れても負けない力強い味、さすが良いコーヒー豆を……」

「近くのスーパーで売ってる徳用コーヒーなんですよけどねえ」

朝比奈先輩。冷や汗がすごい事になってます。

「紅茶がまつたくないわけではないですが……」

紫の目が希望で光輝いていた。しかしその希望はすぐ突き落とされた。

「リプトンの徳用ティーパック。しかも賞味期限切れですね」

紫は涙目で頭を横に振った。紅茶好きならコーヒー以上にまずい紅茶を飲む方が苦痛だ。

「なんでそんなものがあるんですか？」

俺は好奇心からパンドラの箱を開けた。

「昔の院生が持ち込んだ置き土産ですよ。戸棚の奥で眠ってて最近発見されたんですけどね。確か彼が卒業したのは10年以上前でしたかね……。試飲する勇氣はありますか？ 柎木君」

俺も速効首を横に振った。10年以上前のティーパックなんて恐ろしすぎる。

「私は試してみたのですが、味も香りもまつたくない色水でしたね。幸いお腹は無事でしたよ」

古谷教授！そんな無駄なチャレンジ精神はもっちゃいけません。

きつとみんな突っ込みたかっただろうに、必死でこらえるような顔をしていた。

コーヒーのおかげか、古谷教授のブラックジョーク？のおかげか、場の雰囲気はだいぶ穏やかに変わっていった。

「もうじき冬休みですね。皆さんクリスマスはどうされるのですか」

俺は古谷教授の何気ない質問に背筋が凍った。この前それで朝比奈の逆鱗に触れたばかりだ。恐る恐る朝比奈を見ると、穏やかに返していた。

「23日ですが、上条と過ごす予定ですよ」

あれ？この前までクリスマスに予定がなくて不機嫌だったんじゃないかったか？それとも上条先輩が折れたのか？

「23日ですか。それはよかったですね」

古谷教授は何だか含みを持たせたような言い方をして、朝比奈も意味ありげに微笑んだ。俺も紫も理解できずに目を合わせて首をかしげた。

「田辺さんは？」

俺はクリスマススイブへのささやかな夢をこめて尋ねる。無駄な事だとわかっていても、まったくチャレンジしないわけにはいかない。紫にとっても譲司にとっても一年で一番大切なイベントなのだから。「何も。クリスマスで浮かれるバカップルが街中に増えるのが目障りで仕方ないくらいですかね」

いつそクリスマスちゃんじゃないので祝いませんとか言ってくれた方がまだ可愛げがある。なんか恋人がいないのを僻みつつ、本当は羨ましい痛い人みたいだ。紫に限って恋人が欲しいなどと思ってるわけではない。紫がクリスマススイブを嫌う気持ちを譲司はわかってた。

「柎木先輩は、体がいくつあっても足りないくらいのハードスケジュールですか？1日に何人の女性とデートできるかギネス記録に挑戦ですね」

「そんなわけないじゃないか。俺がクリスマスを過ごしたいのは田辺さんだけだよ」

「なかなか迫真の演技。やはり女たらし歴長いだけありますね。今までそのセリフで何人の女性を口説いてきたんですか？たらしのプロとして朝比奈先輩、解説をお願いします」

紫の無茶ぶりに朝比奈は笑顔で即答した。

「柎木なら3桁行くんじゃない？女性に言わせるようにしむけた回

数なら4桁行きそつだよな」

絶対二人がかりで俺をおもちゃにしている。こういつ時のコンビネーションは抜群だよな……。俺はさっさと逃げ出すべく、強引に話題転換を図った。

「冬休みと言えはやっぱりお正月。田辺さんだって初詣はするですよっ？」

「それはもちろん。日本人ですから」

「じゃあさあ。俺と明治神宮とか行かな……」

「地元の氏神様に家族でお参りするのが筋ではありませんか。だいたい何が楽しくて、あんな人ごみの中で行列に並ばなきゃいけないんですか？ 清正の井がパワースポット？ 携帯の待ち受けで運氣が上がる？ なんて馬鹿馬鹿しい」

怒る割には詳しいなあ。流行とか興味ないと思ってたんだけど。

しかしクリスマスデートが無理なら初詣デートは逃したくない。俺は必死でくいついた。

「初詣は何度してもいいんだよな？ 元旦じゃなくてもいいから行くよ。ほら俺達学生だし、天神様にお参りして学業成就の祈願とか……」

紫の目がランランと燃え、突然語りだした。

「菅原道真はいいですよ。実にすばらしい。藤原氏が圧倒的に強かったあの時代に下積みから実力でのし上がったあの実力と強運は……」

何が彼女の琴線に触れたのだろう。機関銃のように猛烈な勢いで繰り出される、道真トークに譲司は全くついていけなかった。

「なんで初詣の話から菅原道真？」

俺が考えなしに呟いた言葉で、今度は隣の男に飛び火した。

「馬鹿かおまえは！ 天満宮の神は菅原道真じゃないか。そんなことも知らずに学問成就とか良く言えるな。そもそも菅原道真が神に祭

り上げられたのはだな……」

生前の菅原道真を紫が賛美し、朝比奈は菅原道真が死後神格化された経緯とその後の天満宮の歴史を語る。しかしお互い勝手に俺に向かってマシンガントークを繰り出すので、どちらの話も理解不能だ。

歴史好き、古典オタクな二人は、妙な所だけ気が合う。ヒートアップする二人を覚めた目で見ながら、どうしたもんかと思っていたら、古谷教授と目があつた。

ちやめっ気たっぷりに俺に微笑えみかけた教授は、軽く両手を打ち鳴らして二人を沈黙させた。

「確かに柎木君は不勉強ですね。田辺さん。良い機会ですから柎木君に教えてあげたらどうですか？初詣がてら実地勉強で」

「ナイスアシスト！先生。今ゴール前に送られてきたキラーパスが見えました。」

「田辺さん、いつなら都合がいい？俺はいつでもいいよ」
紫はしかたないという感じで肩をすくめた。

「1月3日ならいいですよ。」

俺は心の中でガッツポーズをした。見事得点を入れて浮かれるサッカー選手の気分だ。しかしまだ勝負は決まらない。試合はまだまだ始まったばかりだ。

コーヒープレイク（後書き）

作者の趣味で古谷教授の出番を作ったら、なんだか独壇場になっちゃいました

本文で書ききれなかったので補足。譲司は勉強できるので歴史の授業で教わる範囲の菅原道真については知ってます。でも天満宮の祭神という常識が欠如しているのではたから見るとおバカさんに見えます。なぜ知識が偏ってるのかは次話をご覧ください

当たり前のようにマックスコーヒート書いてしまいましたが、知らない方もいるかな？

活動報告の方で解説させていただきますので、詳しくはそちらをご覧ください

ファントムジャーニー（前書き）

サブタイトルは作者の造語です

しかも初期の紫レベルの、壊滅的な英語音痴の作者が作ったので信用しないください

イメージは「幻の旅行」みたいな？

英語音痴なのにこの章英語タイトルしぼりで始めちゃって早くも3話目にして挫折しそうです

フアントムジャーニー

古谷教授と朝比奈と別れ、俺と紫は学食でお茶しながら初詣の相談をする事にした。

「天神参りと言っても、問題はどこに行くかですよね」
紫の言葉に俺は驚いて目を丸くした。

天神様ってそんなにいくつもある神社なの？

みんなに散々バカにされるのも仕方ないぐらいに、譲司は神社の事が何もわかってなかった。

昔大学受験の頃、友人が「天神様にお参りしてお守り買ったから、受験合格するぞ」と言っていたので、世の中には学問の神様がいて、天神様と言っらしいと知っているだけだ。明治神宮も紫の読み通り、パワースポットで女の子に人気らしいと言う理由で知っていた。

譲司のある意味世間知らずな偏った知識には理由があった。

譲司はイギリス生まれの帰国子女でおまけに母親はイギリス人だ。何で日本人と結婚したんだろうと不思議に思うぐらい、日本文化に興味も知識もない人だった。父親は仕事で忙しかったし、祖父母は譲司が生まれる前に亡くなっている。

学校で教わる以外に譲司に何かを教えてくれる大人はいなかった。

家政婦や運転手などはいしたが、家政婦は譲司が学校に行っている間に仕事を済ませて帰ってしまうし、運転手は無口な人で世間話などしたことがなかった。

料理はお金があるから、外食するか弁当食べればそれでいい。衣食住には困らない環境。寂しくないと言えば嘘になるが、譲司がぐれたりすさんだりすることはなかった。

たくさんの女の子にちやほやされたし、同性の友人だつてそれなりにいた。寂しければ友達といればいい。夜遅くて会えなくても、明日になれば会えるとわかっていれば、我慢して寝てしまえばもう明日だ。

唯一父から教わつた事は、将来経営者になるための経済学のみ。日本に来たばかりで『国語』にも苦勞していた小学生の俺に、日経新聞を読めと言つた。バイトをした事もなく、ただお金を与えられるだけだつた金銭感覚などない中学生の俺に、銀行・貸金業・不動産・株・FX・外貨預金など、金融の本を読めと山の要に積まれた。高校になつたらいきなり大金持つてきて「この金を貸すから資産運用して増やしなさい。利益が今日からお前の小遣いだ。ただし貸した金だから利子を払ってもらう」などのたまつた。

毎回毎回無茶振りにも程がある。しかしおかげで世の中の金の大切さと恐ろしさ、お金を稼ぐ大変さと大金を持つ苦勞を10代にして身につけてしまった。

毎年当たり前のようにさくさく確定申告する大学生なんて普通じゃないよな……俺の事なだけどね。税金が怖い。

この年になるまで譲司の中にあつた知識は、経済学をのぞけば、学校の勉強と、友達のおしゃべりと、テレビの受け売りだけ。今思えばずいぶん薄っぺらで中身の無い頭だ。

それで不便はなかつたし、俺はそこそこ幸せだと思つてた。でもそれは過去の話で今振り返ってみればまるでモノクロテレビの用に味気ない世界だつた。

そんな俺の世界が突然フルカラーになつたのは紫のおかげだ。

紫は現代の若者には珍しいぐらい、古風で保守的で、正直おぼあちゃんみいだつた。でもそれが譲司にはものすごく新鮮だつた。欠けた譲司の知識と経験を補い、鮮やかな思い出に変えてゆく。

まだ出会つて1年もたつていないのに、紫といると懐かしくて温

かい気持ちになる事がある。

俺がいまだに紫に惹かれる理由はそんな所にあるのかもしれない。そう最近になって気がついた。

「天満宮と言えはやはり大宰府天満宮ですかね」

ちよつと待て、日本文化の常識知らずな俺でも、歴史の授業で習った知識はある。

「大宰府つて九州なんじゃ……」

「はい。九州です」

九州は日帰りで行かれる距離じゃない。という事は泊まりか！いきなりお泊りデートか！紫ならホテルより旅館だろう。旅館と言えは温泉に浴衣……。俺の脳内妄想は留まることなくひたすら突っ走った。それにブレーキをかけたのは、紫の一言だった。

「まあお金もないですし、外泊など祖父母が許すわけがないので無理ですけどね」

そうだよ。そうですね。そうだと思いますよ。でも、だったら勘違いさせるような言葉を言わないでほしい。俺が激しく落ち込んでいたら、紫は意地悪な笑顔でクスクスと笑っていた。

やっぱわざとか。わざと俺をもて遊んでるのか。

「もう一つ代表的なのは北野天満宮」

「それはどこかな？」

「京都」

「日帰り無理です」

「三番手も大阪と山口あたりなんです」

「だから無理だってば、なんでそんな遠い所ばかり言うかな」

口で無理と否定しても、俺の脳内では京都・大阪・山口への二人旅妄想が湧き上がり、そのたびに現実リアルへと突き落とされる。可憐で

悪魔的な笑みから、この攻撃が確信犯なのは間違いない。

「だって仕方ないじゃないですか。天神信仰が盛んなのは西日本なのですから」

「もつと近くで有名なあるはずでしょう。えーっと確か……」

思い出せ。高校時代の友人が行ったのは都内で有名な神社だったはず。そうだ。

「湯島天神」

譲司の答えに紫は良くできましたというような、会心の笑みを浮かべた。

「少しは物を知っているようですね。御褒美です」

紫は俺の頭にふわりと手を置いた。紫に頭撫でてもらった！好きな子に撫で撫でてかなり嬉しい。譲司が思わず笑みを浮かべると、すかさず紫の一撃がやってきた。

「良い子ですね。ポチ」

犬か、ペットか俺。俺はただ頂垂れることしかできなかった。

フアントムジャーニー（後書き）

譲司はかなりのポジティブ精神の持ち主です

両親の離婚は多少引きずってますが立ち直ってるし

他人から見たら寂しそうな子供時代も、本人はそれほど気にしてないし

そんなポジティブな譲司だから、紫のネガティブ精神攻撃すら良い方に良い方に解釈してついていけるのだと思います

ジャパニーズビューティー（前書き）

最初の予定より、全然話が進みません

たぶんやつとキャラクター達の心や行動が掴めてきて、ラストがしつかり定まったから、丁寧に書きたいなと思えてきたせいでしょう
初めの頃より描写が暑苦しく、読みづらくなっているかもしれない
んが

少しでも譲司や紫を好きになってもらえたら嬉しいです

ジャパニーズビューティー

年が明けて1月3日。地下鉄湯島駅で待ち合わせ。

約束時間の30分前に譲司は待ち合わせ場所についてしまった。

落ち着かずについ早くなってしまったのだが、元々早めに来ようとは思っていた。

紫はまじめで時間前につくのが当たり前なので、彼女を待たせないためにはさらに早く来ていないといけない。約束時間までに着けば、紫だつて怒りはしないが、女性を待たせるのは譲司自身のプライドが許せない。

今日の譲司の服装はジーンズにシャツとセーターを重ね着して、ダウンジャケットとマフラーというかなりカジュアルな格好だ。手ごろな値段のブランドだが、シンプルで綺麗な感じでまとめている。

テレビで見る参拝客は割と普段着みたい人が多いし、あんまりかっこつけた感じは紫の好みではないだろうから、できるだけ地味でカジュアルにしたつもりだ。

そして譲司の読み通り、約束時間の15分前に紫は到着した。

譲司はあまりの衝撃に息をするのも忘れるほど、紫に見とれてしまった。

彼女のいつもの常識はずれな行動のせいではない。むしろ湯島天神にお参りに行く人々の中に彼女は溶け込んでいた。当たり前前事なのかもしれないが、譲司は忘れていたのだ。

伝統を愛する日本人女性ならば、初詣は着物だという事を。

紫は濃いピンク色の振りそでを着ていた。しかも最近の成人式で

見かけるような現代的なバラや蝶やラメがきらめくけばけばしいものではない。かといって地味ではまったくなかった。

どういふ種類の物かはよくわからない。つたない讓司の知識では昔沖繩で見た紅型のような、大胆で多彩な色遣いの大輪の花が、着物全体にちりばめられている。

華やかで、艶やかで、でもどこか日本の伝統を感じる古典的なデザイン。

派手だけど、無理に洋服的な感覚を取り入れた最近の着物とは違う美しさが、非常に紫によく似合っていた。

以前美咲が見立てた白いワンピースも可憐でとてもよく似合っていた。しかしこの着物はあれ以上によく似合っている。

紫の一見平凡で地味に見える顔立ちは、華やかな着物を着ると上品で清楚な和風美人に見える。しかもゆっくりと歩くその仕草は、着物に慣れているのか、他の着物客よりもたおやかでありながら凛として芯の強さを感じさせた。

「公衆の面前でいつまでそのアホ面を晒すつもりですか」

紅をさした、愛らしい口から、いつものように毒が紡がれる。いつもの彼女らしい言葉に、讓司はようやく現実世界に戻ってこれた。

「すごい……すごい似合ってるよ。田辺さん。綺麗だね。お人形さんみたいだ。」

ほんのり頬に朱が混じって見えたのは、気のせいか、それとも彼女にしては珍しい化粧のせいか。

「古典だけど斬新で、すごい素敵な着物だね。紅型？」

「京友禅です。知ったかぶりじゃべると、馬鹿にいつそう磨きがかかって見えますよ」

確かに自分の知らない事を無理して話し合わせるのは、愚かなことかもしれない。知らないなら素直に聞けばいいのだ。

讓司はまたひとつ、彼女に大切な事を教わり、救われた気がする。讓司は今までいつだって完璧な、なんでもできる男だと周りから思われ、その期待を裏切らないように演じ続けてきた。

でもそんなつまらないプライドにこだわっていたら、讓司はいつまでたつても何も知らない馬鹿な男のままだ。素直に教えを請い、学び、成長して、見せかけじゃなく本当に尊敬されるような人になりたい。例えば古谷教授のような。

「行こうか、田辺さん」

俺は彼女の手を取って、着物の彼女にあわせてゆっくりゆっくり歩き始めた。

最初は手をつなぐ事を嫌がった紫だったが、不安定な階段でふらついてからは、渋々俺のエスコートを受け入れてくれた。

初めてつないだ彼女の手はあまりに小さく華奢で、讓司の手の中で簡単に壊れてしまいそうだった。冬の寒さに冷える二人の手。彼女の手をにぎったままコートのポケットにしまったかった。冷え切った手を温めてあげたい。でもそんな恋人のような大胆な行為をしたら、彼女は怒って手を離してしまうだろう。

離したくない。ずっと彼女の隣にいたい。彼女なら、俺のつまらない常識や価値観をぶち壊して新しい世界に連れてってくれる。例えばそれが天国か地獄かもわからなくても、彼女が入ればどこでもいい。

彼女の事は体を張って俺が全力で守る。そういう守る存在がいれば俺はどこまでも強くなれる。

――

その時の讓司は恋する男性としてはごく自然な、でも愚かな幻想を抱いていた。ちつぽけな自分の力を過大評価して、どんな時でも一人の女性を守れると。彼女自身もまた一人の人間だという事を忘れて、自分が守ってあげなきゃ生きていけないような弱い存在だと。

その少し傲慢で、でも好きな女性にかっこよく見せたくて強がる男の可愛さ。彼女はそんな愚かな男を、愛おしく好ましく思い見つめていた。けれどもそれに答える事のできない苦しさもまた同じぐらいあつた。決して人に見せられない彼女の抱える重い心の苦しさを、譲司はまったく気づいていない。

それでいい。悟られてはいけない。まだ、その時ではないから。その時が来るまで、ほんのひと時夢を見よう。腹黒でなんのとりえもない自分なんかには、のぼせあがる変わり者がこの世界に一人いた奇跡を楽しもうじゃないか。

咲けばすぐ散ってしまう桜のように、儂いからこそ美しい夢を。いくつもの仮面と猫を被って隠された本音を、心の奥底に沈めて、彼女はいつものように作り物の笑顔を浮かべてただ黙って歩いていく。

ジャパニーズビューティー（後書き）

初めて紫の心理描写を入れてみました

今まではわざと、第3者から見た紫しか書きませんでした

紫は平気で嘘をつくし、演技だつて、計算で行動することだつて当たり前

だから他者から見ると、彼女の言動が本当か嘘か、本性がどんな人物かわからない

そのスタイルで最後の最後まで引っ張つていこうと思つていたので

すが
だれにも理解してもらえないだろう紫が可哀そうになって、ほんの
少しだけ語らせてみました

彼女の本音が見られる所は、最後の最後までお待ちください

物語はまだまだ続く予定です

アイ ウィツシュ（前書き）

今回のサブタイトルイメージは「願い」です
二人は神様に何をお願いしたのでしょうか？

アイ ウィッシュ

「あのさ、こんな恰好でよかったのかな？」

紫は愛らしく小首をかしげて俺の話の続きを待った。

「ほら、田辺さんはきちんと正装で来たけど、俺は普段着だし。初詣ってちゃんと着物きなきゃとか、何か決まりあるの」

また馬鹿にされるかなと、内心ビクビクだったが、紫はまったく馬鹿にするでもなく優しい笑顔で微笑んだ。

「いいんですよ。私は着物着たくて着ただけですから。神様に御挨拶するのに失礼な、不潔だったりよっぱらおかしな服でもなければ無理するよりも、神様を敬う気持ちの方が大切だと思いますよ」

俺が変にプライド高く見栄を張らなければ、紫も素直になつてくれるのかもしれない。俺たちの間にあつたハードルの一つをやっと乗り越えられた気がした。

「まあ先輩の顔と体格じゃあ着物なんて全然似合いませんし」

最後にとどめさす所はやっぱ変わらないんだ……。ハードル越えたと思つたのは気のせいか？しかし、どんな服も着こなせると褒められるモデル体型も、着物には不向きとは、意外な盲点だった。顔は変えられないが、体系は多少は努力で何とかなる。

「どんな体系だと似合うの？」

「そうですね。全体的に肉付きの良かつぶくのいい、おすもうさんみたいな？特に下っぱらがどんと出た方が重々しくて安心感がありますね」

中年太り体系か力士系。究極の選択だが、正直どつちもお断りしたい。

「他にはないの？もうちょっと若くてかっこよさげな」

「華奢で細身なひよろつとした人が、着流しなんかを着ると割と様

になりますね。芥川龍之介みたいな感じですか？」

文豪タイプのインテリ系。なかなかいいではないか。

「まあ先輩は骨格もしっかりしてるし、筋肉質で鍛えてる感じだからそれも難しいと思いますよ。ああ……例えば朝比奈先輩とかそういうの似合いそう」

想像だけで無理だと思った。骨格は変えようもないし、筋肉を無理に減らしても贅肉になるだけで、朝比奈のような肉も筋肉も全然ないがりがりにはなれない。

「贅沢な悩みですね。それだけ身長あつたら、洋服ならたいていさまになるじゃないですか。私なんて背が低いから、洋服選びも色々大変なんですよ」

「意外だなあ。田辺さんおしゃれとか興味ないのかと思ってた」

「馬鹿にしてるんですか？年頃の女の子として少しは気になりますよ。ただ私はそれ以上に、お金とかお金とか、お金とか、あと面倒だなとか気になるだけで」

お金の問題6割、めんどくさい3割でおしゃれしたい願望1割くらいか。お金抜きにしてもめんどくさがってオシャレしないんじゃないか？

「でも着物って高いんじゃない？特に振り袖とか」

成人式の振り袖を買う女子達から、相場を聞いてるのでだいたい想像つく。一揃えするだけで、ブランド服が何着も買えるよな。

「これは母が成人式の時にあつらえたものなんです。20年以上前の物でも、手入れと保管さえしっかりしていれば、まだまだ着られるでしょう。着物は何代も着られるからむしろお得です。来年の成人式はこの振り袖着る予定なんですよ」

なるほど、少し古めかしいデザインと思ったのは昔の着物だからなのか。しかし今でも十分に魅力的なのだから、これから先だつてきつと通用する。もしかしたら紫の娘がまた成人式をする頃にも、

まだ現役かもしれない。

「紫の娘」と考えて俺の体温が一気にあがった。その娘の父親が俺だったりしないかな。紫が妻で可愛い娘がいて、男の子も欲しいな。

幸せ家族計画が俺の脳内を駆け巡る中、紫はいつかのように死んだ魚のようなどろっとした目で見上げる。

「また気持ちの悪い妄想中ですか。これからお参りしようというのにどれだけ煩惱まみれ何だか。水でもかぶって清めてきたらどうですか。汚らわしい」

真冬に水被ったら死ぬるよ。その前に君の冷たい言葉と目だけで十分凍死できそうだ。

そんな話をしていたら、もう湯島天神の目の前だった。着物の紫にあわせてゆっくり歩いても駅から近いからあつという間だ。

先ほどまで確かに手のひらにあった、冷たい感触を名残惜しんでいたら、紫が俺を置き去りにしてさっさと入っていく。

俺が慌てて紫の隣に並んで歩いたら、すかさず紫の鋭い視線が光った。

「先輩！私の後ろでおとなしく見て覚えてください」

何が彼女をそんなに怒らせたのかわからない。しかし迫力に押されて、小さな彼女の体に隠れるように後ろを歩いた。

「神社の参道の真ん中は神様が歩く道だから、遠慮して端を歩かないやいけないんです」

なるほど、確かに俺は道の真ん中を歩いていた。しかし周りの参拝客は誰もそんな事にせず堂々と真ん中歩いているのだが。

「先輩はただの初詣じゃありません。これは勉強なんですから、基本からみっちり仕込まなきゃだめなんですよ」

やっぱ、俺しつけのできてないバカ犬ポジション。女の子の後ろをついて歩かなきゃいけないし。もし俺に耳としっぽがあつたなら、力なく垂れていただろう。

その後も 手水舎という所で、手の洗い方がなつてないと何度もやり直しさせられた（この寒さだからみんな形だけ、水をちよつとかけたただでごまかしてるのに、紫はそんなの絶対許してくれない）賽銭投げて手をあわせてお祈りしようとしたら、順番も作法もなつてない、それじゃ仏教だと、くどくど説明された。なんかひも引いて鈴鳴らしたり、お辞儀とかお寺とお参りの仕方が違うようだ（しかし後ろで他の人が待つてるからほどほどにしてほしい……）お参りが済むまでが大変だった。お参りの列に並んでいる間も、道真トークが延々と続いたし。

やつと一息ついた所でふとそれが目に入った。

「田辺さん。おみくじひこうよ」
「勝手に一人でやってください」

あれ？占いとか興味なくても、こういう日本文化的なのは好きそうなのに。譲司は一緒におみくじひいて運勢を喜んだり笑ったり、一緒に木におみくじ結んだり。そんなたわいのない、でも幸せな他の参拝客達が羨ましかった。一人でやつたって意味がない。

俺は紫の手を引いて、半ば強引に連れて行こうとしたが、まるで足に根が生えたように紫は動かなかつた。

俯いたまま顔を上げない紫の様子がおかしくて、また過去のトラウマとかに触れてしまったのだらうかと心配になってしまった。

「元旦に近所の神社でおみくじひいたんです」
ぼつりと紫がつぶやいた。なんだ。おみくじが嫌いなわけじゃないんだ。だったらまた引いてもいいじゃないかと思つたのだが、そうでもないようだ。紫が目をうるうるしながらぼつりぼつりとつぶ

やく。

「大吉だったんです。今日また引いて運勢悪かったら、せつかくの幸運が逃げてしまいそうじゃないですか」

「ささやかな我がままを、恥ずかしそうに言う姿が、身もだえしそうなほど可愛かった。」

しかしここで調子にのったり、妄想したらせつかくの雰囲気がち壊した。耐えろ、どんなに紫が可愛くても、耐えるんだあ。

「じゃあお守りだけ買って帰ろうか」

こくりと頷いておとなしく紫がついてくる。お揃いのお守りにしようとしそかな野望で盛り上がっていた俺に、後ろにいた紫がささやかな声をあげた。

「東風吹かば 匂ひをこせよ 梅の花 主なしとて 春を忘るな」

「それって道真の歌だよ。それぐらいなら俺も知って……」

俺は振り向きながら言いかけて言葉を失った。なんだか永遠の別れを告げ、今にも消えてしまいそうな紫の儂い空気が、怖くて、引き留めたくて、思わず手を伸ばす。

紫の肩に触れる直前に、彼女は逃げるようにすつと一歩引いて、ごまかすように微笑んだ。

「私が道真みたいに遠くへ行っても、先輩は覚えていてくれますか？」

「あたりまえだ。一晩で君の元へ飛んで行くよ」

彼女は伸ばした俺の手のひらを優しく撫でて、嬉しそうに言った。

「よく勉強してきましたね。合格です」

梅が大好きだった道真。大宰府に左遷される時、京の自宅にある梅の木に別れを告げる歌。それが「東風吹かば」だ。

本来は梅の匂いを風に乗せて届けてほしい。主人がいなくなっても春を忘れないでくれという意味だ。遠く離れても、美しく咲いてほしい。できればその香りだけでも咲いている事を知りたいと。

でも譲司には道真が梅の木に思いを残して、いつまでも自分を忘れずにいてほしい。そんな思いだったのではと思えてしまう。

そして梅の木が道真の想いに答えて、一晩で大宰府まで飛んでくるといふ「飛梅伝説」という話がある。きっと道真の忘れられたくない思いを知っていて、梅は飛んでいったのだ。

俺もどんな事になっても、紫を忘れない。遠く離れても彼女が呼ぶならどこへでも飛んでいく。

アイ ウィツシュ（後書き）

またまた着物ネタでずるずると
作者の好きなものを無理に絡ませようとすると話長くなるんです
よね

道真の歌作者も好きです

最後の5文字が2つ説があつてどっちにしようか悩んだのですが、
こちらの歌の言葉の方がわかりやすいかな？と思いましたが、こちらにしました
個人的には「春な忘れそ」も語感が古めかしくて好きなんですけど
ね

イト ランチ

「お腹すかない？お昼にしようよ」

湯島天神の参道を歩きながら、俺はデートの引き延ばしプラン遂行中。

紫は俺のたくらみに警戒しつつも、俺の提案に同意した。

「何食べたい？」

「お寿司がいいです」

即答で帰ってきた返事に苦笑しつつも、俺はすぐに頭の中で近くの寿司屋のリストアップを始めた。譲司は上野近辺で江戸前ずしの店とかなかったかな？などと考える。

カウンターに隣に並んで、職人のすしと一緒に食べる姿を想像した。夜ならいくつか肴でも頼んで、日本酒を軽くと行きたいところだが。昼だしどうしようかな……。

譲司が色々悩んでいるうちに、紫はさっさと上野駅方面へと歩き出す。

迷いのない歩き方は、どこか目的地でもあるのだろうか？

「どこか行きたい所あるの？」

「アメ横です。あのあたりは寿司や海鮮丼とかの店多いじゃないですか」

確かにその通りだが、せまく小汚い店とかが多いイメージで、着物を着た女の子を連れていける店などあったかなと悩む。

「久しぶりにくるくる寿司行きたいんです」

嬉しそうに微笑む紫に茫然とした。くるくる寿司って回転寿司か

？その言い方小学生レベルだぞ。可愛いなあ紫は。思わず頭を撫で撫でしてしまった。

そしたらむくれた顔で俺を睨んできた。

なんだか今日の紫はいつもより素直だ。嬉しいけど、どうしてだろう。

「こんな高級なお店で奢りなんていいんですか？」

店の前で尻込みする紫に、おおげさなと驚いてしまう譲司だった。「回転寿司だよ。安い皿なんて1皿200円からだよ。そんなに気にしなくても……」

「何言ってるんですか！くるくる寿司は基本1皿100円なんです。田辺家では一番安い皿中心で、ちよつとリッチだと、120円とか150円とか。なのに200円スタートなんて高級すぎですよ」

ああよかった。いきなり高級寿司とか連れてつたら、看板も見ずに逃げ出したかも。しかし金銭感覚の差というのは難しいな。

いっそ高級店連れてってもらえてラッキーとか思うような子だったら楽だけど。紫がそんな子だったら好きになつてなかった。

席につくと紫は回っているお皿を、目を輝かせて見つめていた。でもまっさきに皿の色と値段チェックしてたな。たぶん一番安い皿しか選ばない気なんだろう。

俺はそんな紫の横で、二人分のお茶としょうゆ皿を用意した。いつもは紫がこういう事を率先してやってしまいが、今日は紫が回転寿司に夢中で気づいてない。

「お寿司は逃げないよ。メニューもあるからゆっくり頼んだら」

「くるくる寿司の醍醐味は回る寿司をわくわく待つ所にあるんですよ」

「でも今あんまり回ってないみたいだよ」

皿は数枚しか流れてない上に、高級な皿ばかりだった。他の客も

回るレーンの中の寿司職人に、直接頼んで握ってもらっている。

紫は渋々メニューを開いてじっくりと見始めた。

「あつ。あら汁がある！でもかに汁もいいなあ。どっちにしよう」
椀物ひとつにぐるぐる悩んでいる紫は本当に微笑ましい。

「両方一つづつ頼んでシェアしようか」

「わけっこいいですね」

なんだか今日の紫は単語や行動がいちいち子供の要で、まるで小さな子供をつれたお父さんの気分だ。

「すみません。あら汁とかに汁一つづつ……」茶碗蒸しもお願いします」

猛烈な勢いで紫が俺の注文に割り込んできた。そしてあいも変わらず、数少ない寿司が回る姿を夢中で見つめている。

そんな姿を見ていてふと思った。

紫の子供の頃ってこんな感じだったのかな？本来の紫の姿はこんな無邪気な子供みたいで、不幸な事件が彼女の性格を歪め、人を疑い、利用する人間になってしまったのではないかと。

彼女を不幸の連鎖から、救ってあげたい。本来の無邪気で可愛い女の子に戻してあげたい。

そんな事を思いながら、ボーっとしていたら、椀物と茶碗蒸しが出てきた。

「先に両方味見していいよ。残った分飲むから」

俺は下心なく、純粹に優しい気持ちでそう言った。しかし……。

「人に先に口つけさせて、間接キスとかいってニヤニヤする気じゃないですか？変態妄想列車先輩」

さっきまでの子供のような無邪気さはどこに行ったのだろうか。この毒娘が。

俺は非難がましく睨むが、紫は平然と椀物2つと茶碗蒸しを美味しくそくに食べていた。

「田辺さん。寿司屋に来て寿司食べないわけ？」

紫がいつまでもサイドメニューに心奪われているので、珍しくつつこみをいれてしまった。紫も言われて初めて気づいたという顔をした。

「すみません。たまごとかっぱ巻きサビ抜きでお願いします」

俺は思わず椅子から滑り落ちそうなほどろたえた。

何そのいかにも安くて子供向けメニューしかもサビ抜き？

「田辺さん。遠慮せずに好きなもの頼んでいいんだよ」

「子供の頃から定番というか、食べないと落ち着かないんです。よかったですら1巻食べません？私いろんな種類食べたいし」

「いいけど。もしかして全部サビ抜き？ワサビ苦手なの」

紫は真つ赤な顔して勢いよくいい返してくる。

「苦手じゃないです。ちよつとなら美味しいと思います。でも時々いっぱい入ってて、鼻ツーンとするじゃないですか。ツーンってあれびつくりしてやなんです。あのツーンが」

言いたい事はわかるが、わざわざツーンを強調する所がおかしくて、思わず笑ってしまった。

紫が子供のようにわかりやすくむくれているので、ますますおかしくて笑いがとまらない。本当に今日デートできてよかった。学校じゃわからない色々な紫が見れた。

今日の紫のガードの低さにこれはもしかしたらいけるかも、とさらに邪な計画をこっそり企てる譲司だった。

イート ランチ（後書き）

作者も寿司好きだけど、値段が怖くて安い回転寿司しか入った事ありません

サビ好きだけど、たまに職人さんがうつかりでサビ多めにされると、ツーンにやられてネタの味わからなくて涙目になる

アメ横近くは魚介好きの作者には誘惑の多い、魅惑のエリアですね

カモナ マイ

(前書き)

いつもと反対に、讓司が紫を嵌めようと虎視眈々と狙ってます
紫の珍しくゆるいガードの隙について、果たして今回のアタックは
成功するのでしょうか？

カモナ マイ

「食後のお茶しようよ」

「いいですね。甘いもの食べたいです」

俺の誘い即快諾。本当に今日の紫は別人のようにノリがいい。しかしここで問題がひとつ。今日は1月3日。最近は正月休み返上で店を開ける所もあるが、一般的には臨時休業が多い。

さらに譲司も紫も紅茶にこだわりがあるので、中途半端なものを飲むくらいなら、飲まない方がマシというくらいうるさい。

「困りましたね。私がお気に入りの店はみんな休みみたいです」

紫は心当たりの店に電話を掛けまくったが、どこも休みでがつくりとんだれている。すでにお菓子と美味しい紅茶でティータイムモードに入っているのか、あきらめきれないようだ。

紫に気づかれないように、譲司はほくそ笑んだ。いつもの爽やかな譲司らしくない意地の悪い笑み。だいぶ紫の色に染まってきた。

「一つだけ美味しいお茶が飲める所、心当たりあるんだけど」

「行きたい」

紫の目が喜びに満ち溢れた。譲司は内心のガッツポーズを悟られないように何気なさを装う。

「駅から歩くと面倒だからタクシー使っちゃおうか」

いつもならタクシーなんて贅沢なと言いつつ紫も、今日は素直に乗り込んだ。初詣や湯島天神からアメ横まで歩いたり、紫も疲れしているのだろう。

しかしタクシーがなかなか目的地に着かない事に、しだいに紫が不審がってきた。

「近くだと思つてタクシー乗りましたが、遠くなら電車の方がよかつたんじゃないですか？」

「電車使つても最寄駅から歩くと、着物で駅の階段上り下りとか大変でしょう。そろそろ鼻緒ずれもできてるころじゃない？」

「なんで着物に無知な先輩が鼻緒ずれなんてわかるんですか？」

紫は慌てて、草履を履きなおした。タクシーの中でこっそり草履を脱いでいたのに譲司は気づいていた。すでに草履を履き続けるのがつらいぐらい、鼻緒ずれになっているのに我慢していたのだろう。

「浴衣の女の子といっしょに出かけた事あるから。女の子って大変だよ」

女つたらしめという非難めいた視線を感じるが、思惑通りだ。どこに行くのかの問いが、鼻緒ずれに話題がすり替わっているのに紫が気付いていない。

「浴衣は素足で下駄履くから、鼻緒ずれになりやすいんですよ。普通の着物は足袋を履くからずっとましです」

「ああ、なるほどね。素足で慣れない靴履くと靴ずれする感じか。」

でも靴下履いても慣れない靴だと靴ずれするよね。田辺さんもいつも着物じゃないでしょう。足袋履いてても鼻緒ずれするんじゃない？」

「たいしたことないです。少し休めば治ります」

譲司はたわいもないおしゃべりでごまかし続けた。話をしていると時間の流れなどあつという間に感じてしまう。

タクシーが住宅街に入っても紫は気にも留めてないようだ。本当に美味しい隠れ家的紅茶専門店は駅近くになく、たいがい辺鄙な場所にあつて、住宅街のド真ん中という事も時々あるからだ。

タクシーが目的地に着いたので、俺は先に外に出て反対の扉を開けた。戸惑う紫に手を差し出して半ば強引に車から引きずり出す。

小さな紫は目の前の建物を茫然としながら、首が痛くなりそうなほど見上げていた。

「ここ、どこですか？」

紫が逃げ腰になっていたが、繋いだ手を離さずに俺はにっこりと微笑む。

「ここの上の方に俺の家があるんだ」

どう見ても高級そうな高層マンションを前に、さらりととんでもない事を言っただけで退ける。

「な、何いってるんですか。お茶って、紅茶専門店とか……」

「店とは一言も言っていないよ。最近仕入れたいい茶葉があるから、美味しい紅茶入れてあげられるし、お歳暮のお菓子とかあるから、お茶菓子もある。ね、ティ・タイムの条件はそろってるよ」
「騙して女の子を自宅に連れ込むとか信じられない。やっぱり最低最悪な女つたらしですね」

無理に暴れて逃げ出そうとするが、俺は絶対に手を離してあげなかった。痛くさせたり怪我をさせないように手をつかみ続けるのは、中々に難しい。

「そもそもここどの辺りかわかってるの？一人で帰ろうとしても道に迷うよ」

住宅街のド真ん中で目印になりそうなものなど何もない。タクシ―で着たから着た道もわからない。頭の良い紫は状況認識も素早い。まさに袋の鼠だと悟ったのだろう。

「外で言い争っても寒いでしょう。とりあえず中入ろう」

悔しげに睨みつける紫を引っ張るように、マンションに入っていく。

オートロックを空いた手で素早く解除する。吹き抜けのロビーが広々と広がり、管理人というよりコンシェルジュと言う方が似合う、スーツ姿の男性が丁寧にお辞儀をした。

「お帰りなさいませ榎木様。荷物が届いておりますが」
「後で取りに行くのでまだ預かってもらえますか？」

心得たように男性は返事をして、隣で暴れる紫の存在を完全に黙

殺している。見殺しにされた恨みをこめて紫は男性を睨みつけるが、男性は気にも留めずに管理人室に戻っていく。

俺達はロビーの一角のソファに座って、向かい合った。手は離しているが逃げようとすればすぐに止められる距離。逃げた所で着物に草履でろくに走れないし、土地勘もない。

先ほどまではむやみに抵抗していた紫も、状況の不利を悟って冷静に機会をうかがっていた。

彼女が落ち着くの見計らって、俺はゆっくりと手持ちのカードを開いていく。

「新茶のニルギリがあるんだ。田辺さんが喜びそうだなと思って」

「ニルギリの新茶は普通3〜4月頃じゃないですか。今の時期にあるわけですよ」

「確かに流通の問題で一般的に日本に入荷するのは春先だけど、茶摘みの時期は11〜12月頃だから。知り合いで現地の農園に直接買い付けに行く人がいて付けてもらったんだ。ニルギリ好きでうるさい俺でも感心するぐらい、なかなか今年のお茶は出来がいいよ」

まだ一般では入手できないほど早い新茶。しかも出来がいい。紅茶好きの彼女の興味をひくには十分な条件だ。紫の表情も、逃げ出すか、俺の誘いに乗るのが得か、計算しているのがよくわかる。

「お茶菓子は？」

「クッキーとかチョコレートとか？まあ田辺さん好みのイギリス菓子じゃあないけど味は一流の名店がいくつか。紅茶を楽しみたいなら、軽いお茶受けてドライフルーツとかもあるよ。アンズやイチジ

クとか」

紫の眉が小さく動いた。彼女がドライフルーツ好きで特にアンズとイチジクが好きな事はよく知っている。

譲司も好きで家には常備している。お茶だけじゃなくブランデーやワインなど酒にも合うし日持ちもするので便利だ。

今日彼女を家に呼んだのはやましい事がしたいわけじゃない。大切な話があったのだ。前々から話したくて、でも中々機会がなくて切り出せなかった事。

ここで浮ついて逃げられては困る。俺は甘い微笑を引き締めてまじめな顔を作った。

「田辺さんに話したい事があったんだ。話が長くなるし田辺さんのためにも人に聞かれない方がいい事だね」

紫は俺の真面目な表情と意味深な言葉に鋭く反応した。ゆっくりといつも通りに余裕の愛想笑いを浮かべながら、俺の言葉の続きを待っている。つまらない話ならばさりと切ってやる。そんな緊張感が漂っていた。

「田辺さんの家の借金について、合法的に人に借りを作らない解決策が、もしかしたらあるかもしれない」

俺の最後の切り札に紫の余裕の笑顔は崩れた。しばらく茫然とし

たまま、俺の言葉を脳内でよくよく考えたのだろう。落ち着きを取り戻した紫がゆっくりと立ち上がって俺を見降ろした。

「お話伺えますか？」

悪魔のような^{こわくてき}靈惑的な笑みを浮かべた紫は、完全に戦闘モードに入っていた。

俺の話が信用できるか、どれだけ利用価値があるのか、自宅で俺に何かされるかもしれない覚悟も計算して、しっかり警戒している。したたかで強いいつもの彼女だ。

日本文化に熱いオタクな姿、突然消えてしまいそうな儂い姿、寿司を前に無邪気で子供のような姿。腹黒くしたたかで計算高い姿。たった1日でめまぐるしく変わる紫のどれが彼女の本性かわからない。それともすべて真実の彼女なのだろうか。

譲司も腹をくくって立ち上がる。彼女の真実がどこにあるかなんてどうでもいい。今まで見てきたすべてが俺にとっての真実で、彼女のすべてを受け入れる。

紫の冷えた手をそっと包んでさりげなく導いた。甘いデート気分を封印して、ドライで計算高いビジネスモードに思考を切り替える。本質的に人の良い譲司は計算より情にながされやすい。だが大学を卒業すれば厳しいビジネスの世界に身を投じなければいけない。そのために長年かけて甘さを切り捨てる訓練をしてきた。好きな女の子を口説くのにもさか役立つとは思いつとは思いもしなかったが。

「話の続きはお茶でも飲みながら、ゆっくりと」

繋がれたその手は初詣に向かう時のような甘やかなものではなく、ビジネス前の握手の用に形式的で緊張感漂うものだった。

二人をのせて上がっていくエレベーターの浮遊感。すでに離された手と距離感。互いに顔も見ずに気配で探り合う空気。心が沸き立つのは愛なのか闘志なのか。

今新たな戦いの火ぶたが切って落とされる。

カモナ マイ

(後書き)

サブタイトルの は「ハウス」です

あっさりわかってしまいそうな単語ですが

読む前からネタばれはつまらないのであえて伏字にしました

精神的なタフさを身に付けた譲司と紫のひさびさの駆け引きはどうなるか？

ボストン ティー パーティー

讓司は玄関の扉を開けて紫が入るのを待ったが、彼女はなかなか動こうとしなかった。紫は表情こそ余裕の笑顔を浮かべていたが、小さな肩を微かに震わせている。

自分に言いよる男の家に入る。しかも庶民派な紫には不慣れな高級マンション。事前準備もなく、完全アウエーの敵地に乗り込むのだ。しかもこれからの会話の主導権を握っているのは讓司。インシニアティブいくら強くしたたかな紫でも緊張するのは当たり前だ。

玄関から中を見ていた紫がシニカルな笑みを浮かべて言った。

「なんだかドラマみたいに無駄にセンス良く生活感のない部屋ですね。厭味ったらしい。さすがお金持ち様様は違います事。成金趣味の金ぴか悪趣味な部屋の方がまだ可愛げがありますね」

緊張しても強がって嫌味を言う根性があるのはさすがだ。讓司は内心その強がりには拍手をしたいぐらいだったが、さらりと受け流した。

「うちは成金だよ。父親が1代で稼いだんだ。別に血筋がいいとかないからね。母親はそこそこのお嬢様だったみたいだけど。それだつて成金が良家の妻と結婚したいなんていう、血筋へのコンプレックスみたいなものでしょう」

自分の親の事を皮肉めいて軽口叩く讓司。面白いものを見たようにちよつと驚いて紫は小さく笑った。少し緊張がほぐれたのか、ゆ

つくりと紫は部屋に入り、丁寧に草履を端に寄せて奥へ進んでいく。よそのお宅に入る時の礼儀作法を、着物でも流れるように完璧にこなしていて、譲司は思わず見とれてしまった。庶民派な紫がどこでこんな礼儀作法を覚えたのかと驚いてしまう。

廊下をまっすぐ歩くとつきあたりがメゾネットのリビングになっていた。紫も迷うことなく辿り着きソファに優雅に腰をおろした。

吹き抜けのリビングは天井が高く、ガラス張りの窓からはなかなかいい眺めが見られる。最近は高層マンションやビルが増えて、少々鬱陶しく感じるのだが住宅地のド真ん中で贅沢というものだろう。

「意外でした」

「何が？」

俺はリビングにあるカウンターキッチンの中から、お茶の準備をしながら答えた。ここからだと言った紫の背中しか見えなくて、この景色をどんな表情で見つめているかわからない。

少し残念だと思う。彼女の感動する表情を見たい。しかしすぐに無駄な事だと悟った。彼女は本音を隠すのが上手すぎて、感動した振りをしてるのか本心か、譲司に見抜く事などできないだろう。

「『学園の王子』と噂に名高い先輩なら、家柄もさぞや御立派で、都内に庭付き一戸建ての豪邸とか、使用人がたくさんいて執事がいたり、そんなマンガのようなバカバカしい世界に生きているのかと想像してましたから」

彼女の言うような期待を持っている女子はたくさんいたし、その夢を壊すのも無粋かと思つてわざわざ家の話はしないようにしていた。だから学内でも讓司が金持ちの息子と言う事は誰でも知っているけど、具体的にどんな家なのか、親の仕事や生活スタイルなど知る者はいない。

「今時先祖代々の土地持ちでもなければ都内の一軒家の豪邸なんて難しいし、それだつて手放してマンションに住み替える家の方が多いよ。一軒家はメンテナンスも必要だし、土地付きだと税金が高いからね。頭のいい金持ち程自分達の資産を守るために、お金にシビアだし無駄な出費はしないものだよ。家柄とかしきたりとかしからみのある金持ちは別だけどね」

紫にとっては驚きかもしれないが、讓司にとっては常識であり当たり前のことだった。だから他人事のように淡々と話していた。讓司の感覚ではこの高級マンションですら無駄に思える。

父と自分の2人暮らしなのに4LDK。それぞれの部屋一つづつと、父の書斎と客室。だが父はあまり家に仕事をもちこまないし、めつたに客も来ない。以前は高層マンションも人気があつて資産価値があつたから、いずれ転売するつもりで買ったんだろう。

しかし地震の影響で高層マンションを嫌がる人間が増え資産価値は一気にさがつた。じっくり待てば地震など忘れてまた高層マンションの人気も持ち直すかもしれないが、その頃には築年数が古く流行遅れなデザインのマンションなど安く買いたたかれる。

売り時を逸して身動きできず様子を見てるだけなんだろうな。まあ父親の資産なんだし好きにすればいい。あと1年もすれば学生も終わる、家を出ようと居座ろうと自由なのだ。

俺はティ・セットとお茶菓子をトレイにのせてソファに向かった。ホテルのウェイターのように優雅にテーブルに置いていく。

日本式の礼儀作法など知らない。でもビジネスマナーと欧米式の作法ならわかる。父の英才教育と子供の頃の母の躾のおかげだ。

紫がさつき部屋に入るときに見せた日本式の優雅な作法はわざとだと思う。だから譲司もあえて見せつけるように普段やらない優雅なしぐさを心がけた。

作法や礼儀は本来相手への気遣いだが、交渉では自分を優位に見せる武器だ。

紫は俺の対抗心に何も言わずに微かな微笑で返した。俺も同じ様な表情を浮かべてたと思う。

本来ならリラックスして穏やかな空気を楽しむはずのティータイムが、相手の出方を伺う心理戦に突入していた。

紅茶が蒸らし上がる時を図る砂時計を見つめていると不思議な気持ちになった。ピリピリした緊張感を肌で味わいながら、心の底ではむしろそれを楽しむような冷静な自分がある。冷静な思考が自身に命令した。本題は後回しにして、日常会話を装いながら情報を集めろと。

「田辺さんって感心するぐらい、礼儀作法が綺麗だよ。普通の一般家庭ではそんな事まで教えないと思うけど？」

紅茶をティーカップに注ぎながら何気なく話し始める。紫も俺の

真意を探るように慎重に、でも余裕を持ってかえした。

「祖母の影響ですね。両親共働きで良く祖父母に預けられてましたし。祖母は昔お茶の先生をしていたせい、孫の私にも礼儀作法だけはうるさく躡けてくれました」

譲司は意外な情報にすぐ頭を回転させる。茶道は素人だが父の知り合いに連れられて、ビジネスの勉強としてお茶会に招かれた事はある。

たった一度の経験だけだが、知っているように見せかけてみよう。そんな言動は紫に嫌われるとわかっている。でも交渉では知ったふりをしたり、逆に知らない振りをしたり、その駆け引きも必要だ。

「茶道つてさ道具や設備を揃えるのにすごいお金かかるよね。着物だって何着も必要だし。小さな教室だとしてもある程度お金がないとできないよね」

お金だけではなく、名品を見抜く目や、手に入れるコネも必要だ。1代で揃えるにはかなりのお金や手間暇がかかるわりに実入りの少ない道楽だと聞いた。

昔から父の教育のせいかどうかどうも金に関する事だけはよく覚えてい

る。
今の自分ならせつかくのお茶会なのだから、文化や歴史的な側面など雰囲気は素直に楽しみたいと思える。もったいない事したなとほろ苦い後悔が少し残る。

「先輩の家とは反対ですよ。祖母の家系は遡れば武家につながる由緒正しい家柄だったみたいですね。でも明治維新で武家は一気に傾いてしまいましたから。昔ながらの財産として茶道具や着物が残っていたけれど、それもほとんど手放して、祖母の代ではたいした名

品はなかったと聞きます。家も昔から残った家に住んでただけで、それともたいして大きなものではなかった。」

「まああの時の借金で、家も茶道具も全部手放したそうです」

紫も俺と同じ様に自分の家の話を他人事の様子に語っていた。祖母の昔の話では紫としては実感わかないのかもしれない。

彼女はティーカップをゆっくり持ち上げて立ち上る香りをまず楽しむ。次に一口だけ口に含んでゆっくりと味わった。俺も同じ様に紅茶に口をつける。

緊張した空気が少しだけ緩んだ。お茶好きとして、美味しい紅茶に出会ったらやはり心奪われるし、飲めば穏やかな気持ちになる。

「ニルギリらしい穏やかな味わいですね。ほのかに香りが甘いような……。ミルクにも合いそう」

「そう思って最初の一杯はストレートで、2杯目以降はミルクで楽しめる濃さにしておいたよ」

言う必要もない事をあえて口にした。お茶がくれた穏やかな時間を少しでも引き延ばしたくて。

紫はお茶受けのドライフルーツをもて遊びながら口に含む。しかし他のお菓子には手を出さなかった。

紅茶もカップに半分残ったまま、置いてしまった。穏やかなティータイムはしばらく保留という事だろう。また見えない緊張感が二人の間に生まれた。

優雅なティータイムもこの後の戦いの前哨戦にすぎないのだ。讓
司も気を引き締めて紫に向き直った。

ポストン ティー パーティー（後書き）

激しいバトルに突入する前のピリピリとした緊張感だけで1話使っちゃいました

次回は譲司の得意分野で猛攻に入ります
もうちょっとシリアス展開をお楽しみください

マネー トラップ（前書き）

今回借金に関する法律とか色々長ったらしい説明になります

作者は専門家じゃないし、大学もいつてないので、色々な体験や聞きかじりの知識を総動員して書いてます

「わかりにくい」とか「ここ間違ってる」とかあったら御指摘くださるとありがたいです

マナー トラップ

「それで祖母の話と先ほどの借金について何か関係あるのですか？」
あえて避けていた話題を、紫の方から鋭く切り込んできた。紫には見抜かれていたのだ。先ほどの会話がただの世間話ではない事であったらもう遠慮する必要もない。

「田辺さんが借金を背負わされた頃の田辺家の経済状況を知りたかったんだよ。でも今の話でよくわかった。『両親が共働き』、『祖母の茶道具』、『祖父の紅茶の店』。さらに田辺さんの真面目で堅実な性格から御家族もまたきちんとした経済感覚を持っていただろうから、当然多少の貯金はあったはずだ。それらを合わせたら田辺家は一般家庭の水準以上の資産があったはずだよ。それなのに返せないで夜逃げするほどの借金ってなんだろうね」

紫の取り繕った余裕の表情が少し崩れた。彼女にとって意外な事実だったのかもしれない。小学生だった紫には『田辺家』は平凡な一般家庭に見えただろう。中学になる頃には借金に苦しめられての極貧生活で、それに慣れすぎて実は意外に恵まれた家庭であった事に気付かなかったのだ。

「田辺さんは子供だったし、俺もその田辺さんから聞いた少ない情報だけで話してる。これから話す事も俺の『不確かな推測』だよ」

俺はわざとそこで区切って、強調した。情報が少なすぎて推測でしかないのだ。本当は情報を集めてから話したい所だが、借りた『親』がいないのでは調べようがない。でもいつ現れるかもわからない『親』を待つ間、彼女の心の負担を軽くしてあげたかった。

「お金を借りたりその連帯保証人になるって事は、借りたお金を払えるだけの返済能力があると貸す側が判断したから契約できるんだ。だから田辺さんの家がある程度お金があるから目をつけられたのかなと思う」

「だったらおかしいじゃないですか。返済能力があると判断して連帯保証人になったのに、全財産はたいても返せず夜逃げするなんて」
「そこが難しいんだよね。当時の契約内容がわからないし、貸した金融会社の情報がまったくない。違法行為を行うような悪質な高利貸しだったのかもしれないけど、あの当時だとグレーな可能性もあるから」

未成年で文系の紫にはお金の貸し借りの基本などぴんとこないのだろう。まだまだ話の始まりなのにもうついていけないような顔をしている。俺は紫を残して自分の部屋から本と筆記用具を持ってきた。

聞くより見る方がわかりやすいし、俺も説明しやすい。戻ってくる間に1杯目を飲みきったようだ。今彼女のカップはミルクティーの色に変わっている。

テーブルの真ん中にスペースを開けて、白い紙に書きながら話を再開した。

「お金を貸す側は常に利益とリスクを考えている。もしお金を貸して返ってこなかったら損だ。簡単に言うと『貸し倒れ』だね。貸し倒れにならないように、お金を貸す時の審査を厳しくしてその分金利を安くするか、万が一貸倒れてもダメージを減らすためにあらかじめ金利を高くするか。これがお金の貸し借りの基本。ここまではわかった？」

お金を貸す側になった事のない紫にはなかなか難しい話なのかもしれない。しかし紫は書きだされた単語や図と俺の言葉を反芻して、やっと飲みこめたようだ。

「つまりうちの場合、貸した側の審査が甘くて、高い金利だった。だから返済能力以上の契約ができてしまった？」

元々堅実な金銭感覚で頭の良い紫は飲みこみが早い。俺はよくできましたと褒めてあげたくて、紫の頭を撫でたかったが、今はそんな雰囲気ではないのが残念だ。

「田辺さんの言う通り。でも金利というのは法律で上限が決められている。それを超えたら犯罪行為だ。わかって犯罪に手を染めるヤミ金もあるけど、犯罪だからリスクが高すぎる。悪い言い方をすれば法律の範囲内で上げつない手口で搾取するほうが安全で確実だよ
ね」

「つまり両親の借金が違法なのか合法なのか。もし違法なら犯罪だから貸した人間も表沙汰になったらまずいわけですね」

「そう。そして難しいのは法律と言うのは時代とともに変わっていくという事だよ。田辺さんは日経読んだ事あるんだよね『グリーン金利』とか『改正貸金業法』とか『過払い金請求』という単語目にした事ない？」

紫は眉間にしわを作って少し悩む。一時期新聞やニュースをにぎわしたし、今でも法律事務所などが広告でアピールしているが、この情報化社会では気をつけないとうずもれていくものだ。

「単語は聞いた事はあるんですが、よくわからなくて。私の家の借金に関係あるのかもわからなかったから、どこか別世界のように思っていました」

日本人の美德なのか欠点なのか、真面目な人間ほど借金は悪で、働いて返すものだと思っ込んでいる節がある。しかし借金は時として必要なものだし、ただ言われるままに返すのではなく制度や法律を勉強して交渉したり闘ったりしていかないと騙されるリスクもある。

紫は、両親に連帯保証人を頼んだ『自称友人』を憎み、騙された両親の人の良さを疑うばかりで、ひどい取り立てを行った金融会社の人間には弱腰だ。たぶん刷り込みもあるのだろう。

例えば「貸した金を返せない悪人」「泥棒」などと散々脅されれば、自分達はひどい事をしているような罪悪感で、貸した側に立ち向かう勇氣すらなくなる。それが悪徳な会社の手口だが。物理的な暴力ではなく、言葉の暴力なら言葉や状況を選べば犯罪行為だと気が付かない。

紫の心の中のそういった思い込みを取り除いて、戦う勇氣を持たせ、サポートする。それが彼女を救う一番な方法だと思っている。

俺は彼女に合わせて休憩をはさみながらゆっくりと続きを始めた。

「以前は金利の上限を定めた法が2つあったんだ。『利息制限法』と『出資法の上限金利』と言ってね……」

紙に単語を書きだして見せても、専門用語がたくさん出てくるとなかなか頭に入ってこないのだろう。紫の顔が渋いものになんて変わっていく。

「それぞれの上限が『利息制限法』が15〜20%で、『出資法の上限金利』が29.2%だった」

「ちょっと待ってください。金利とかよくわかりませんが、2つ

の法律の上限が違うなら矛盾が生まれませんか？この2つの間の金利だった場合どうなるんですか？」

「そうそこだよその2つの法律の間の矛盾が『グレーゾーン金利』って言われているもので、以前は大手の金融会社もこの曖昧なルールを利用して儲けてたんだ」

「簡単に言うとまず29.2%を超えたら確実に犯罪。でも『グレーゾーン金利』は法律上無効なんだけど、条件つきで有効だったんだ。でもおかしいでしょう。2つの上限があつて違反になつたりならなかつたりって」

「あたりまえです。普通の人は金利の上限とか法律とかよくわからないし、まして細かい条件とか2つの法律が矛盾してるなんて……」

「他にも色々理由があるんだけど、そんな曖昧で借りる人に不利な法律で『多重債務者』が増えたから、法律を変えようって事になったの。それが『改正貸金業法』。この改正で金利の上限は15〜20%に統一された。実施されたのは平成22年6月18日からだよ」「つい最近じゃないですか。その前に借りたお金はどうなるんですか？」

「今まで20%を超えて払った金利分は払いすぎって事で、借りた人に帰ってくるんだよそれが『過払い金請求』。適用されるには長い間高い利率で支払いしていた人とか、色々条件はあるんだ」

「つまり法律が変わったから、払いすぎた分お金が帰ってきて、元の借金が減つたりするかもしれないんですね」

少し興奮した様子の紫にチョコレートを手渡した。甘いものを口にして落ち着いたのか、いつもの冷静な紫が戻ってくる。ミルクテ

イーを口にして、ほっと一息つく。

「最初に言っただろう。『不確かな推測』だつて。ご両親が契約した内容がわからなければ、違法なのか、合法なのか、過払い金があるのか、ないのかわからない。でも確かな事もある」

紫の目をまっすぐに見つめて、力強く言った。

「時代は変わった。君が子供の頃よりお金を借りた人間に優しい世の中になった。君が受けた取り立ての恐怖をもう味わう必要はないし、借金があるからって引け目を感じなくてもいい。」

「胸を張って生きていいんだ」

俺の言葉がゆっくりと紫の中に響いて、こわばった表情が緩んでいく。

俺はただ無言で彼女が俺の言葉を受け入れるのを待った。彼女は何度も瞬きを繰り返しながら、まるで譲司の存在を忘れてしまったかのように、ぼんやりとした目を伏せる。

紫の目からこぼれた透明な滴が頬を伝ってティーカップの中に落ちていった。塩味がついたミルクティーを紫は無言で眺めている。

かつて彼女は紅茶を『二度と訪れる事のない幸せな過去の象徴』と言った。でも『過去』じゃなくなるかもしれない。両親が戻ってくれば、平和だった温かな時間が戻ってくるかもしれない。

不確実な要素の多い話でも、『過去』と言いきって無理に我慢し

なくてもいい。もしかしたらまだ『希望』は残されている。その希望だけで彼女は変われるかもしれない。過去の亡霊に捕らわれて、心を閉ざし続ける彼女が、前向きに生きていけるなら。

もし『希望』がかなわなくて、最悪の事態になっても俺がその時は全力で支える。譲司は無言で涙をこぼし続ける彼女に向かって心の中で誓った。

マネー トラップ（後書き）

現実の話として、上限金利は低く統一されましたが、借りられる金額の上限も下がったので以前よりお金を借りにくくもなりました
ご利用は計画的にということですね

紫の固く閉ざされた心の扉を、一つ一つこじ開けていかないと譲司に勝機はありません

軽いラブコメ展開期待してた方ごめんなさい

でもシリアスとコメディを行ったり来たりしながら物語を進めていく予定です

ハニーバトル ファーストパート

十分泣いて落ち着いたのか、紫は手の甲で涙の跡を拭った。その手を見て、慌てて立ち上がる。

「お手洗いお借りします」

場所も聞かないまま、背を向けて廊下に向かった。

たぶん泣いた事が恥ずかしいのと、珍しく化粧をしているので、涙で化粧崩れが気になったのだろう。

迷うような家でもないし、説明しなくてもいいかと思って放っておいた。

ティーカップにまだお茶は残っているが、ポットの中身は空だ。

お茶を入れ直そうと片づけていたら、紫の小さな悲鳴が聞こえた。

慌てて廊下に向かうと、俺の部屋の前で紫は呆然と立って部屋の中を見ていた。

俺の部屋がおかしいのかな？

覗きこんでみたが特に変わった様子はない。

パソコンを乗せたデスクとベッドに本棚。シンプルすぎて生活感のない部屋だ。

譲司はものがゴチャゴチャしてるのが嫌いで、できるだけ見える所ものは少なくしたい性格だから。

「どうしたの？」

紫は俺が隣で声をかけた事に驚いて、全身を震わせた。

「なんなんですか。この無駄にでかいベッドは！」

言われて初めて気づく。そういえばキングサイズベッドなんて、日本じゃそうお目にかからないかもしれない。

譲司は背も高いし、腕も足も長い。寝相が悪くても落ちないくらい、広々としたベッドが好きだ。

大きいだけで、デザインはシンプルなのだが、何か問題あるか？

「俺のベッドだけど変？」

「こんな大きなベッド一人用のわけないじゃないですか。なんでこんな……女性を連れ込むためですか？」

ああ、なるほどそう解釈したのか。見れば紫の頬がほんのり赤い。

「友達も女の子も家に呼んだ事ないよ。家に来たの田辺さんが初めて」

疑いの眼差しで見上げる紫に意地悪しなくなった。
わざと紫の耳元に唇を近づけて囁く。

「田辺さんがお望みならこのベッドで寝てみる？」

甘い甘い誘い言葉に、紫は耳まで真っ赤にして固まった。

恋愛経験値の低い紫には少々刺激が強すぎたようだ。

可愛いなとしばらく観察していたら、機械人形のようにぎこちない動きで、リビングに向かう。
ソファに座って残っていた紅茶を一气飲みした。

「ニルギリらしい穏やかな味わいですね。ほのかに香りが甘いよう
な……。ミルクにも合いそう」

ちよっとまで、それミルクティーだよ。というか最初に紅茶飲ん

だ時と一言一句同じセリフ。そこまで君の中で時間が戻ってるの？
お金の話とか、泣いた事とか、今の甘い囁きとか、全部なかった
事にされた？

無茶苦茶なスルーっぷりに呆れた。

無防備な泣き顔は、鉄壁の愛想笑いに塗り替えられ、剥き出しの
警戒心が突き刺さる。

こんだけ丁寧の説明して、ほぐれた心があつという間に逆戻り？

俺はちよつと腹がたつてわざと話を蒸し返した。

「お金の法律とか一度説明しただけじゃよくわからないでしょう。
入門者向け貸すから、よく読んで勉強してみたら」

俺が差し出した本をろくに見もせず、「ああそうですね」と適当
な相づちを返して本をソファに放りだした。

ますます腹がたつて、無言でティーセットを片づける。

カウンターキッチンで、次のお茶の準備をしながらリビングをう
かがった。

本当なら次は何のお茶がいい？とか言いながら和やかなティータ
イムにしたかったのに、紫の背中は警戒心で閉ざされたまままった
く隙がない。

紫好みだろうつと思うお茶を適当に見繕って淹れる。

運び方もさつきと同じように優雅に音もたてずに。

先程は冷静に砂時計を見つめられたが、今は重い沈黙に耐えきれ
ず、ひどく長く感じた。

互いに相手の動きを気にして緊張感を保ったまま、注がれた紅茶を目で鼻で楽しみ、ゆっくりと口にする。

つかの間の平穩。お茶を味わう瞬間だけは互いに気が緩んだ。

「ダージリンのセカンドですか？青すぎない落ち着いた味」

「田辺さんこういう中国種系のダージリン好きでしょう」

「ええ、まあ」

好みを言い当てられ、気まずげに頷く。そしてまた重い沈黙。

手持ち無沙汰で俺はドライフルーツに手を伸ばす。

干しアンズを噛み締めると甘さより強烈な酸味が口の中を刺激する。

いつも紫といる時間のように、甘さひかえめで刺激的な酸味は、やみつきになる味だ。

「それで、先輩がわざわざ借金の話で私を釣って、この部屋まで私を来させた本題はなんですか？」

譲司はさっきの話が本題のつもりだったが気が変わった。

紫が挑発するなら、それに乗ってやろうじゃないか。

また自分の部屋に戻ってずっと温めていたものをこっそり持って戻ってくる。

注意深く紫の顔色をうかがいながら、しかしいつもの弱腰にならないように堂々と向き直った。

「今日時間ある？夕食食べて帰りなよ」

「言いたい事は早く言ってください。私早く帰りたいんですけど」

「もう少ししたら、父が仕事から帰ってくるから田辺さんを紹介したい」

紫が小さく息を飲むのがわかった。たぶん俺が紫に手を出そうと狙ってるんじゃないかと疑ってた分、意外に感じたのだろう。

「前に言ってたよね。付き合うなら結婚を前提にっ。それならお互いの家族に紹介しないとね」

「それは……」

あれはまだ紫への俺の気持ちの本気じゃなかった頃。

俺の甘さを切るような、鮮やかな彼女の攻撃。

あの頃の俺はまだ何も知らなくて、何の覚悟もなかった。

でも今は違う。その覚悟を示すために一枚の紙を取り出した。

『婚姻届』。あの日とは逆に俺から彼女へ。でもあの日の彼女と違って俺は本気だ。

自分の分は署名捺印済み。

甘さの欠片もない戦^{バトル}争のようなプロポーズ。

彼女も紙を凝視して、青ざめていた。自分の過去の行為に自分の首が締められる日がくるとは思っても見なかっただろう。

「私はまだ未成年です。親の同意がないと……」

「前は同意あるって言ったのに？」

彼女の嘘をわかって言うなんて、俺も相当性格悪くなった。

「ご両親に挨拶が無理なら、保護者のお祖父様達に挨拶して、同意をいただこうか？」

「ふざけるのはやめてください。前に言ったはずですよ。『人を信用できない人間に友人や恋人が作れない』だから忘れてくれと。それでも先輩は、利用するだけの関係で良いって言ったんじゃないですか」

彼女は愛想笑いを捨てて、ストレートな怒りをぶつけてきた。こんな直情的な紫は初めて見た。それだけ彼女の逆鱗に触れたのだ。

紫が近づくなと再三警告し続けて、今まで慎重に踏み込まずに保っていた二人の適度な距離感。ある意味彼女は信用し始めていたのかもしれない。

自分のテリトリーに入らずにつきあえる人間だと。だから嫌々でも俺の家まできたのだ。

それを俺は土足で踏みにじった。だからこそその怒りだ。

それでも譲司はその怒りを嬉しいと思った。

好きの反対は無関心。

前に「忘れてください」と以前言われた時は、彼女にとって俺は切り捨てて怒りも湧かないほど、どうでも良い存在だった。

でも今は俺に対してこんなにわかりやすい怒りの表情を見せてくれる。その変化に胸が高鳴る。二人の距離は近づいているのだ。

ハニーバトル ファーストパート（後書き）

前回のシリアス路線から一転コミカルな恋愛バトルへ

紫のスルースキルはかなり高いです

まあむごいじめを受けても、スルーできちゃう子なので
でも限りなく恋愛経験値は低いから、その手の攻撃は弱い

ハニーバトル レターパート

俺が紫の言葉を見殺しして、無言で婚姻届を押し出すと、紫が押し返す。無言の押し付け合い。それをしばらく繰り返して紫は観念したように婚姻届を手を取った。

そしていきなり破ってゴミ箱に放り込んだ。

涼しい顔に戻って紅茶をすすする。

「ダージリンのセカンドですか？青すぎない落ち着いた味」

はい、また戻ったね。俺の覚悟のプロポーズはなかった事にする気か。

そっちがその気なら容赦しないぞ。

俺はずらりと婚姻届を並べた。こんな事もあるつかと、複数枚用意してある。何枚破かれようが、燃やされようが、また役所に行つて書類もらつていくらでも署名・捺印してやる！

俺の決死の覚悟に紫も顔を引きつらせている。

「なんでこれだけ言つてもわからないかな。変態ドMバカ犬ストーリーカー男。Mだからむしろこうやって罵られるのがいいのか？放置プレイしてもしつこくつきまとうし。ああイライラする。あげくの果てにいきなり婚姻届？私もやったわよ。でもあれは嫌味で本気なわけじゃないじゃない。それを本気でやるなんて気が狂ってる。この犬以下有害男め、今すぐこの世から消えてなくなれ」

普段の何倍もエスカレートした毒攻撃が続く。しかもいつもはわ

ざとなのに今日のはきつと無意識。だってイライラと親指の爪噛んだり、なんだか余裕がない。言葉遣いもいつもの丁寧な感じから少し柄悪くなってる。

「田辺さんがよければ、別に今すぐ結婚してくれなんて言わないよ。ただ男として見てほしい。できれば恋人になりたいって話だよ」
「だからそれが無理」

「なんで？過去に人に裏切られたから一生人を信じない？いつまで殻に閉じこもってる気なの。一生恋愛も友情もなく生きるつもり？」
「ええ、そうよ。大学卒業したら就職して、堅実に老後の蓄え作って、働けなくなるまで働き抜いたら、貯めたお金で老人ホームにも入るの。誰にも迷惑かけてないんだから、どんな人生歩もうといじゃない」

「甘いよ。田辺さん俺を金持ちのボンボンとバカにしてるけど、君だって十分箱入りだよ。バイトもしたことない、一人暮らししたこともない。一人で生きていくのがどれだけ大変かわかってない」
「それこそ大きなお世話。私のがたれ死のうとあんたなんかに関係ない」

「関係なくない。俺は田辺さんを好きだから。俺も前は女性関係色々あつたし、なかなか信用してもらえないだろうと思って、最大限の誠意を見せるために『婚姻届』を用意したんだ。俺が田辺さんを一生、面倒みる。親御さんの借金だって俺に任せてくれれば……」

そこで紫が音を立ててティーカップを置いた。見るからに高価なティーカップを粗雑に扱うのは、それだけ紫の怒りが強いから。

燃え上がる炎のような怒りから、一気に凍りつくような冷やかな

怒りに変わった。決して怒りが静まったのではない。むしろ反対に怒りが強くなるはげしくなっている。

強気で押していた譲司も思わずひるんだ。

「私を金で買う気ですか？」

言われた言葉は水をぶっかけられたように、俺の頭を冷やした。

金の力で一生面倒みてやるし、借金も肩代わりしてやるから自分の女に慣れだなんて、どんなバカな金持ちおやじだ。だが俺が言ったのはそういうことだ。

彼女が俺を好きでもないのに、気持ちだけ一方的に押し付けていた。

紫は俺を利用するが、理由もなく物をねだったり、奢らせたりしない。

どれだけ貧しくても恵んでもらうほど落ちぶれたりしない。それが彼女なりの矜持プライドなのだ。

俺は踏み越えてはいけない二人の距離感を踏み越えた。一方的に自分の気持ちを彼女に押し付けた。しかも彼女のプライドを傷つける形で。

自分の過ちに真つ青になる思いだったが、何を言っても言い訳がましくて何も言えない。

唇が切れそうなほど強く唇をかみしめた。

「じゅめん」

謝る以外に言葉がなかった。でも俺は何を謝りたいんだらう。ひどい事言った事？それとも彼女を好きになってしまった事だらうか。

謝った所で諦められるほど、簡単な想いではない。

「帰ります」

紫が冷たい怒りをたたえたまま立ち上がった。彼女とこんな喧嘩したまま別れなくなかった。このまま別れてしまったら二度と会えないような。

「待つて」

次の言葉が続かないのに思わず引き止めてしまった。紫は背を向けたまま立ち止まって俺の言葉の続きを待った。

「ニルギリの茶葉いっぱいあるんだ。よかつたら持つて帰らない？」

顔半分だけ振りかえった彼女の横顔には壮絶な笑みが浮かんでいた。

「施しのつもりですか？」

まだ物で釣るつもりかと嘲笑う彼女の誤解をときたくて、必死で言葉を続けた。

「違うんだ。田辺さんのお爺さん達も紅茶好きなんだろう。みんな楽しくお茶してもらいたいんだ。田辺さんが家族以外信用できないなら、せめて家族という時間は幸せでいてほしいから」

紫は目をつむって、ゆっくりとため息をついた。みるみるうちに冷たい怒りがとけていく。紫は体ごと俺に向き直る。

「本当にあきれます。顔がよくて金持ちだから無意識に上から目線の傲慢なバカ。自分の力を過信するバカ。でも自分が悪いと思っただけで勝手に謝っちゃうバカ。自分の事より他人の事に熱くなっちゃうバカ」

そんな人にバカ呼ばわりするのはひどいと思うな。俺は思わず俯いて落ち込んでしまう

「でもそういうお人よしのバカ嫌いじゃないんですよ。だから簡単に切り捨てられない」

驚いて頭を上げた。言われた言葉は嘘じゃないようだ。紫の顔には呆れたような苦笑が浮かんでいる。

「ニルギリいただけですか」

「う、うんちょっと待ってて。今取ってくる」

カウンターキッチンの中に逃げるように駆け込んで、深く深く深呼吸する。心臓が止まりそうなほど激しい鼓動。さっきまで絶望的な状況だったのに、紫はまだ俺に救いの手を差し伸べてくれるのか？

ほんの少しでもまだ期待していいのだろうか。

茶葉のパックを持つ手が震えるし、手から変な汗が出る。自分の拳動不審ぶりに彼女は呆れてしまわないだろうか？それでもこれ以上待たせるわけにはいかない。

思い切ってリビングに戻り、精一杯の笑顔で彼女に手渡した。

「お茶でも飲みながら俺の話、お爺さん達にしてくれると嬉しいな」
「ええ。そのつもりです」

家族に話をしてもらえるほど、親しく思ってくれているのだろうか。嬉しさのあまり舞い上がりそうになる。

「昔から、私をいじめるいじめっ子とか碌でもない人間の話ししかないから、祖父達は私が話す人間は敵だと思っっていますけど」

紫はとびきりの笑顔で爆弾投下。やばい。お爺さん達の俺の評価、会っ前から最悪になってしまう。

「俺、そんな碌でもなくないよ」

「だって私にしつこくつきまとうストーカーじゃないですか」

完全に否定できない所が痛い。

またしても恋の障害が増えて落ち込む讓司だった。

ハニーバトル レターパート（後書き）

第4章前半終了です

中々気持ちを通じないようで、徐々に紫の態度が変わっていく
でもただではすませない
したたかで、しぶとい紫でした

閑話休題 傾向と対策（前書き）

第1章後半頃の裏話番外編です

第1章に盛り込みたかったのですが、カットしたエピソードを今更
あげてみました

『腹黒女と腹黒男のエトセトラ 前編』と見比べていただけると面
白いかと思います

閑話休題 傾向と対策

譲司と紫が出会うきっかけになった、例のテニスコートでの鈴木からのセクハラ、およびその救出劇は通称『榎木譲司俺のもの発言事件』と呼ばれている。

以前から譲司が女の子にストイックなわけではまったくなく、むしろ『来るもの拒まず、去る者追わず』のオープンなプレーボーイだった。公認彼女がいる時期も、他の女の子とお茶や食事ぐらいは普通にしていた。それが嫌だというような子とは譲司はそもそもつきあわない。

しかもその公認彼女達も、その地位にふさわしい美人揃いだった。それで女の子同士で大きなトラブルがなかった。

だから紫の時もとりあえず今までみたいに公認彼女にすれば問題ないだろうぐらいの気持ちで、彼女を気軽に『俺のもの』などと言ってしまった。

しかし結果は壮絶ないじめへと繋がった。

理由の一つは紫が今までの公認彼女のような美人でない、ごく平凡な女の子だったから。なんである子がと他の女子達はあなどった。

そしてもう一つは譲司の態度だ。紫を口説くのに夢中になって他の女の子達を疎かにしてしまった。『みんなの王子』が『たった一人のための王子』になったため、紫への嫉妬がすさまじいものとなったのだ。

それに譲司が気付いてから、譲司は態度を改めた。

正直他の女の子とおしゃべりしてもちっとも楽しくなくなってしまったのだが、紫を守るためならと今まで通り、女の子達は平等に

扱った。ただ、今までは学校の外でもデートや食事ぐらいしていたが、学内で軽くお茶や昼ご飯に付き合う程度だ。

そして紫とも学内の生徒の前では他の女の子と同等に扱っていた。そうすることで彼女のいじめを減らせるなら、『みんなの王子』と思われたままでいい。

そうなると思えるのは学校が終わった後だ。今までなら誘えば誰でも、むしろ誘わなくても勝手に女の子と夜は食事となっていたのだが、そうもいかなかった。

父親は仕事で忙しいし、男友達は元々讓司が女の子とばかり付き合っていたから、今更食事に誘うのもむしろ良い程度の付き合いしかない。

結果的に讓司一人で食事となる。

最初はオシャレなレストランやバーを食べ歩こうかと思ったのだが、そういう所では逆ナンとかされてかえって面倒だった。

元々普通の食事の味にこだわらない讓司は、牛丼屋やラーメン屋のような、男一人で行くのが当然なファーストフード通いをする事になった。

「しょっぱい飯だよな」と愚痴れば、

「もてない、金ない、若い男なんていつもそうだ」と男友達に怒られた。

そんなしょっぱい飯にも良い所はある。庶民派な食生活の目撃情報学内に広がると、『王子ブランド』が失墜して、讓司のファンが減った。まだまだ「学園の王子」として人気はあったが、以前ほどではない気がする。それは紫以外の女の子はどうでもいい讓司にとってはむしろ喜ばしかった。

「讓司様隠し撮り写真。テニスプレイ版と午後のティータイム版1つづつ頂戴」

「私は爽やかスマイル版がいい」

「授業中の真剣なお姿版もいいわよね。シャッター音隠してよく取れたわね」

女子の集団が隠れてこそこそと隠し撮り写真の引き渡しをしていた。『学園の王子』など手が届かない雲の上の人と、初めからあきらめている女の子達は、讓司に近づくことなく陰でこっそりこんな写真を楽しんでいる。

むしろ手が届かない2次元的な感じがよい。その方が一方的にきやーきやー言って楽しめると言うものだ。彼氏は別にいる。彼氏と讓司様は別腹だ。

「でもさ。この田辺紫って何者？この子といる時が讓司様一番いい顔してるわよね」

「わかる。いつもは同じ『王子スマイル』なのに、なんか私生活がいまみたような、人間臭い顔よね」

「ねえねえ、二人ってどんな会話してるのかな？何の話だとこんなニヤケ顔になるの？」

「わかんない。遠くから望遠で隠し撮りだから、何話してるかまではわかんないのよね」

「知りた〜い」

「教えてあげましょうか？」

女子の集団が振り向くと、紫が怪しげに微笑んで立っていた。噂をしていた人間が表れて気まずい空気が流れる。しかし紫は余裕の笑顔のまま不気味だった。

紫の平凡な少女と思えない存在感と話術に乗せられて、讓司ファンの女子達は紫の企みに協力することとなった。

「本当に二人がどんな会話してるかちゃんと撮れてるの？」

「任せて、望遠で映像記録して、事前にセットして拾った盗聴器の音とあわせてあるから。ふ、ふ、ふ。見て驚け、聞いて驚け。これが讓司様の正体よ」

『田辺さんお疲れ様』

『ああ、柁木先輩ですか。息を乱して追いかけてくるから、どんな変質者かと思ったら、変態先輩で納得しました。』

むごい事言われてるのに讓司まったく動じず、むしろちょっと嬉しそうな表情。しかも呼吸がわずかに荒く、汗も滲んでいる。

『バイトどう？』

『高校生と適当に話しながら案内するだけだから、楽ですよ』

『じゃあ朝比奈先輩は？』

『なんなんですかあの人。あんだけ根性ねじ曲がつてるのに、人前ではお人好しの振りして。周りも騙されてるし。気持ち悪いです』

『同族嫌悪？』

讓司が嘔き出して、楽しそうにつっこむと紫の視線がきつくなる。腹黒男と同じ事言う……あそこまでひどくないでしょ、私……』

大笑いする讓司。怒って讓司の胸を叩く紫。紫に叩かれて恍惚の表情を浮かべてニヤケル讓司。

『言葉でいたぶっても、暴力ふるってもヘラヘラ笑ってるだなんて

……本気で変態度上がってますよね……柎木先輩を傷つける新たな方法を考えなきゃ……」

駄目押しのような『変態発言』にちよつと落ち込む讓司。しかしすぐに立ち直つて、また笑顔で紫の周りを付きまとい始める。

「これヤバイね。本当に変態だよ」

「『学園の王子』の正体がDM変態つてかなりのニュースじゃない」「これ広めたら鬱陶しい俄かファン減りそうだよね」

ファン達の讓司への容赦ない評価に、皆が大きく頷いた。そこに一人の女子がぼつりと呟いた。

「……でも私ちよつとこの『ヘタレ讓司』好きかも……」

「わかる。なんか『空気読めないバカ犬』っぽくて憎めないよね」

「自分が付きまとわれたら『キモイストーカー』って思うけど、相手は田辺さんだし。むしろ二人の掛け合いが面白くない？」

「良く付き合うよね、田辺さんも」

「ありがとうございます。好評で嬉しいです」

またもや突如現れた紫は相変わらず余裕の笑顔だった。しかしファン達の目にはもう『平凡な少女』ではなく、『バカ犬ストーカーの腹黒ご主人様』としてしっかり認識されている。彼女の漂わせる存在感も不気味さより、頼もしさに感じられる。

「いいものがあるのですが買いませんか？」

「いいもの？」

「暑苦しい長文ラブレター。コピーですが、柎木讓司の手書き文字

が拝めるチャンスですよ」

ファン達の喉がごくりとなる。讓司の直筆手紙が拝める。しかも内容がどれくらい変態なのか、好奇心をくすぐられる。

「おまけに『恋愛小説英文朗読MP3データ』もつけちゃいます。気持ち悪いくらいに甘ったるいですが、無駄に良い声してますから聞く価値ありますよ」

「私欲しい!」

「私も!」

皆先を争うように紫に詰め寄る。圧倒される事なく余裕を持ったまま一言付け加えた。

「お売りするには条件があります。他人への譲渡・転売時には私へ許可を取る事。そして今後も情報を流して欲しければ、勝手に私のテリトリーに踏み込まない事」

挑発的な紫の言葉にファン達の表情も一瞬険しくなるが、その後続いた紫の言葉に言葉もなかった。

「3年の三島茜さん。最近学校に来てないでしょう。あの方学校をお辞めになったんですって、まあ仕方ないですよ。嫉妬に狂って醜く人をいじめる小さなゴミは、反撃される可能性を考えられる脳味噌なんて持ち合わせてなかったのでしょうね」

三島茜は紫へのいじめを行っていた人間の中で、もっとも過激な女で女子達の間でも眉をひそめるものが多かった。三島の名前を持ち出す意味。それは彼女が『見せしめ』だと言う事だ。

紫に逆らえば同じ目にあうぞと脅され、ささやかないじめに加担したり、見過ごしたものは恐怖に身をすくませた。

紫はいつもの優等生愛想笑いを作って小首をかしげた。

「賢い皆さんなら、私と仲よくしていただけますよね？」
皆頷くしかなかった。

『アメとムチ』を使い分け、紫が陰でいじめ撲滅と小遣い稼ぎを
している事を譲司はいまだ知らない。

閑話休題 傾向と対策（後書き）

譲司編は基本的に譲司視点なので、本人気付いてないけど実はバカ丸出しな譲司

バイトもしてない貧乏少女 紫のあざとい副収入でした

セクシー ウーマン(前書き)

第4章後半スタートです

セクシー ウーマン

冬休み明け、冬晴れの珍しく温かい日。そうは言ってもまだ1月、1年で一番寒い時期だ。

それなのに大学内をコートを羽織っただけのスーツ姿の女性が歩いていた。学生にしては少々落ち着いた20代後半の妙齢の女性。スーツからこぼれんばかりのダイナマイトボディと、垂れ目がちの幼さの残る甘い容姿のギャップが、男心をくすぐる。すれ違う男子生徒達はいち立ち止まって目で追ってしまっていた。

鼻の下を伸ばして女性を見ている男達に、呆れた女生徒達もスーツの女性が気になって仕方がない。

みんなに共通する思いは、あれは誰だ？という疑問だ。あれだけ目立つ容姿で今まで噂にならなかったのなら、現役生や今までの教員ではない。OGか新しい研究生か。

注目が集まるのを感じながら、女性はわざとゆっくりと歩いた。視界に目標を見つけると、細い足首を見せつけるように高いヒールを優雅に操りながら、まっすぐに目標の男へと近づく。気付いた男の顔が憎々しげに歪むのを、楽しそうにコケティッシュな笑顔で受け止めた。

「こんな所まで何の用ですか？」

「あら、讓司さんを迎えにきたのよ。今日は一緒にお食事の約束でしょ」

「あなたと行く気はないと言ったはずですが」

「あらあなただなんて、余所余所しい呼び方。亜紀さんって呼んでって言うてるでしょう」

「あなたと仲良くなる気はない」

ギャラリー達は固唾を飲んで見守っていた。あの『学園の王子』
榎木譲司にふさわしい美貌を持つ亜紀という女。女の親しげ態度とは反対に譲司は冷たい。学園内での紳士で女子には誰にでも優しいイメージを壊す不思議な光景だ。

譲司が振った元カノが学校に押し掛けてきた？それとも本命の彼女で喧嘩中？譲司の女性関係は最近大人しかったが、外にあんな良い年上女がいたなら無理もない。そんな勝手な想像を膨らませながら、ギャラリー達は譲司と謎の女を遠巻きに見ていた。

ギャラリー達にどう見られてるか、そして女がわざと誤解を招くような行動をとっている事は、譲司にもすぐわかった。ここで無理に否定した所で勝手な噂が広まるだけ。ここまでこの女の侵入を許してしまったのがいけないのだ。

相手するだけ無駄だ。冷静に対応しなければ、そう思って女を無視してその場を立ち去ろうとした。

その時譲司の視線は1点に釘付けになった。囲むギャラリーの中に紫がいたのだ。他の誰に誤解されようとかまわないが、彼女にだけは誤解されたくない。

紫に向かって行こうとした所を、細く白い指が絡みつくように譲司の頬を撫でる。

「余所見はだめよ譲司さん」

気を抜いた隙に亜紀は讓司のすぐそばまで近寄っていた。まるで色っぽい視線としぐさで讓司を誘っているような姿のまま、讓司の耳元に口を寄せた。

「ずいぶん地味で大人しそうな子が好みなのね。泣き顔が見てみた
いくらい可愛いわ」

紫の口から紡がれる毒はいつも甘いのに、この女の放つ毒は醜く
気持ちが悪い。まるで毒蜘蛛のようだ。讓司は人目も忘れて、冷や
かな視線で亜紀を睨んだ。

「彼女に手を出したらただじゃすまない」

「あら。やっと私を見つけてくれた。嬉しいわ。でもそんなに大切
な子なら目を離しちゃだめよ」

讓司が慌てて振り向くと、紫が下げずんだ目で見ていた。目が会
うと逃げるように紫は背を向けて去って行く。

完全に誤解されてる。今すぐに追って誤解を解きたい。

しかしこんなに注目されている中で、彼女を追いかけたらどんな
噂になるか。やっと最近落ち着いてきたのに、また彼女をいじめに
さらしたくない。

それにこの場にこの女を放置していくのは危険だった。どんな過
激な行動に出て、讓司の悪い噂を作り出す事か。

まずはテリトリーからの敵の排除。そう心に決めて讓司は毒蜘蛛
のような女に対峙した。

「凍死したいのか？」

言われて初めて讓司は寒さに身震いした。温かな日は傾き、空が茜色に染まる。学内の外にあるベンチで座ったままずいぶんと時間が過ぎてしまったようだ。

いつの間にか目の前に立っていた男は、いつものように意地の悪い笑みを浮かべている。無言で讓司の隣に座って空を眺めた。その意地の悪い横顔が優しく見えるのは、夕日に染まっているからか。

「柎木」

呼ばれて初めて差し出された手に気付いた。反射的に差し出した手に暖かな温もり。コーンポタージュの缶だった。隣の男、朝比奈は缶コーヒーを開けて飲んでいた。

「いじめてやろうと思ってたのに、誰にいじめられたんだか。いじめがないつまらない顔してたから、今日は勘弁してやるよ」

朝比奈らしいひねくれた言い訳だった。この男はたまに時々ものすごく優しくなる。だから嫌々ながらこの不条理な先輩の我がままに耐えられるし、心配もしてしまうのだ。

夕日を見つめたまま、讓司の事など忘れたように、小さく呟いた。「いつまでも落ち込んでるなんてらしくないな」

朝比奈が慰めようとしているのか、何か企みがあるのか讓司にはわからなかった。俺のために言ったようであり、朝比奈は自分自身に向けて言ってるようにも見える。

「今日目立つ女がやってきたって、もう噂になってるぞ」

「先輩こそ上条先輩とまた何かあったんですか？ミルクコーヒー飲むなんて、またストレスで胃を痛めてるんじゃないですか」

「そんな生意気言つならそのコンポタ返せ」
「嫌ですよ。もう俺のです」

いつまでもこの温もりを手の中で味わっていたが、譲司は缶を開けてゆつくりと口をつける。体の中から温まって、わずかの間寒さを忘れられた。

しかしその温もりは長く続かない。現実はまだまだ暗く厳しい。

「柁木、今回は共同戦線といかないか？」

「また何企んでるんですか」

「まだ検討中。お互い女の事で悩んでるわけだし、自分だけじゃどうにもならない事あるだろう」

意味ありげな朝比奈の笑みに譲司は釣られて笑みを返す。プレーボーイの譲司と朝比奈だからこそそのトラブルや悩みという物もあるわけで、しかしそんな物他の人間には中々理解されない。

この2人だからこそ、深く言わなくてもわかることがある。

「ですね。お互い女性関係に関しては後ろ暗い事だらけだから」

譲司は飲みきった缶を軽くふる。缶に残ったコーンが中にあるのがわかってるのに手が届かないもどかしさ。

気持ちが空回りしたり、上手く伝わらずに誤解される、そんな恋のもどかしさ。

譲司は初めて味わうこの気持ちを楽しんでいた。

セクシー ウーマン（後書き）

この時の朝比奈の落ち込みの原因については、第5章朝比奈編2で書く予定です

同じ時期に起こる同時進行の2つのトラブルを別視点で描く
なかなか難しいチャレンジですが、頑張ります

トリック プレー

大学図書館の片隅で、一人読書に浸る紫の前に、朝比奈が現れたのは1月の終わりの頃だった。

いつも人気のない穴場スポットに現れた最悪な闖入者に、紫は明らかに嫌な顔をした。わざわざ向かいの席に座ったので、立ち上がろうとする。

「ずいぶんごきげんななめだな。お気に入りのペットに毒蜘蛛でもついてたか」

「そちらこそ、何の風の吹きまわしですか。自分から私の所へ来るなんて。雪でも降るんじゃないですか？」

朝比奈はいつもと違ってけんか腰ではなく、余裕の軽口をたたきます。何を企てるのかよくわからない。紫は様子を見るつもりなのかイスに座りなおした。

「柫木の所へやってきたスーツ姿の年上の女。気になってるんじゃないか？珍しいなアイツの女を気にするなんて。とうとう奴のしつこさに根負けして白旗あげる気になったか」

「冗談。別に柫木先輩にどれだけ女がいろいろがどうでもいいです。ただ……」

「ただ？」

「あの女、あの時あきらかに私を挑発してた。それがむかつくんですよ。先輩の恋愛に私を巻き込むなって感じですよ」

朝比奈が声を殺してに笑うと、紫は目を吊り上げて睨んだ。

「自分に降りかかる火の粉を振り払うのは当然のことです」

「だったら敵の情報は事前に入手して傾向と対策を怠らない事だ」

朝比奈はまっすぐに紫を見ていた。何を考えてるのかわからない仮面の笑顔を張り付けて。こんなにまっすぐに紫を見るのは初めてかもしれない。いつもは逃げて、目をそむけている。自分にあまりに似すぎている人間を見ると、鏡を見ているようで気持ち悪い。

「おまえの手を借りたい。代わりにあの女狐退治手伝ってやるよ」

信じられない物を見るような目で、紫は茫然と朝比奈を見つめた。二人の間にしばらく沈黙が流れたが、互いに目をそらす事はなかった。

紫がやっとショックから立ち直ると、図書館内である事を氣遣ってか、声を落として笑い出す。

「あなたが私の手を借りたい？そんな日がくるなんて、今日は雪どころか隕石直撃コースですね。人類滅亡クラスの馬鹿馬鹿しい話」
「田辺にとっても悪い話じゃない。聞くだけ聞いてみないか？」

張り付いた笑顔の下にある真剣さに気が付き、朝比奈が冗談を言ってるわけではないとやっとわかったようだ。

「正気の沙汰には思えませんが、しかし私には判断する情報がなさすぎる。話を聞くだけ聞いてあげてもいいですよ」

挑発的な紫の発言も朝比奈は軽くかわして、探るような目線を送ってきた。

「あの女の名前は『真野亜紀』。柎木の父親の秘書の一人だ」

「セクシー美人秘書。あら、ずいぶん古典的で男共が群がりそうな設定です事」

「しかも父親の愛人」

「一人の女を巡って父と息子が血みどろの争い！なんて昼ドラマみたいな陳腐な設定」

「昼ドラマみたいだが、柎木と真野の間はそんな甘い関係じゃないよ」

真剣な目で讓司を庇う朝比奈の発言に、紫は我慢できないといった感じで嘖き出した。

「何真剣になってるんですか。朝比奈先輩らしくない。そんなに柎木先輩が心配ですか？それとも自分の企みに自信がない？」

朝比奈は恨めしげに紫を見ながら、大きくため息をついた。

「仕方ないだろう。今回のプランで最難関は田辺を協力させる事だからな。猿に文字を書かせるより難しい」

「そうそう。人を庇うより、そうやって悪口言ってる方が、断然らしいですよ」

朝比奈が口をへの字に曲げて嫌そうな顔を見ると、紫はますます楽しそうに笑った。

「わかってますよ。少なくとも柎木先輩にとって、あの真野という女が敵だっことは。最初は元カノかなんかかと思いましたが、あのお人よしが過去に好意を持った人間を、あそこまで冷たく睨めるわけがない」

「そこがわかってもらえるなら話は早い。真野は愛人から妻の座を狙ってるんだよ」

「父親の後妻を良く思わない息子と、その息子を手なずけたい愛人。やっぱりドロドロの昼ドラですね」

「最初は手なずけようとしてたけど、柁木が譲らないものだから、痺れを切らして排除する事にしたようだよ。あの女は」

朝比奈が人の不幸を楽しげに話すと、紫も興味津津で聞き始める。悪だくみと悪口だけは気が合う二人だ。

「真野は父親を唆せて、柁木を留学させようとしているようだ」

意外な新情報に紫は目を輝かせた。こんなに素直に喜ぶなんて珍しいぐらいに。

「ああ。やっとこれであの変態ストーカーとおさらばできる」

朝比奈は苦笑するしかなかった。気持ちはわかるがおさらばされては朝比奈が困るのだ。

「いいのか？そんな簡単に手放してしまって。前にも言ったが、手駒は多いほうが良い。特にあのバカは使い勝手の良い便利な手駒だぞ。ちよつと優しくしただけで、ころつと騙されるし」

「つまり朝比奈先輩はその使える手駒を失うのが惜しいから、真野の排除に協力するつもりなんですね」

「そうのことだ」

紫は人差し指を立てて顎にあて、考え込んだ。朝比奈の言った言葉に嘘はないか、不審な点はないか考えているようだった。

考え込んだような表情のまま、ぽつりと呟く。

「私の手を借りたい事ってなんですか？また上条先輩がらみなんでしょうけど」

「そうだ。『中沢出版』の人間を紹介してもらいたい」

紫が顎から指を外して、思わず口を大きく開けて驚いた。すぐに自分が動揺してしまったのをまずいと思ったのか、取り繕ったような笑顔を浮かべる。

「なぜ私なんかが『中沢出版』なんて大手出版会社とコネがあるなんて妄想を思いついたのか」

「数年前、古谷教授が『中沢出版』の会社内で君を見かけた事があるそうだよ。学生服姿の女の子を出版社で見かけるのは珍しいから覚えていたそうだよ。まさかその時の女の子が自分の学校に入ってくるとは思わなかったから、とても驚いたそうだよ」

紫は血の気が引いたように青い顔でわずかに震えていた。人に知られたくない事だったのだろうか。

「なぜ？古谷教授は『中沢出版』にいたんですか」

「先生は、学術書以外にも、ペンネームを変えて現代小説も書いてるから、打ち合わせで出版社に行ったらしい」

「なんてペンネームですか？」

尋常じゃないほど目をぎらつかせて、紫が朝比奈にせまった。古典だけでなく、現代小説も大好物の紫にとっては、身近な人間が作家だった事に興奮しているのだろうか。

「協力してあげるなら教えてあげるよ」

今度は紫が口をへの字に曲げて嫌そうな顔をする。

「『中沢出版』にコネが欲しいなら、私より古谷教授に頼んだらいいじゃないですか。私より確実ですよ」

「これ以上古谷教授に借りを作るわけにはいかないから」

「弱みの間違いじゃないですか？あるいは今回のプランが古谷教授に知れたらまずいような危ない橋とか」

紫の疑いの眼差しと朝比奈の何かを企むような目線が絡み合って、空中に火花が舞った。

「こつちのプランに関しては、『中沢出版』の人間を紹介してくれるまででいい。そこから先は僕の手ですべてやる。僕の計画に目をつぶってくれるなら、田辺と『中沢出版』の関係については誰にも口外しない」

古谷教授のペンネームと『中沢出版』との秘密。アメとムチを使い分けた朝比奈の交渉に、紫も渋々ながら応じずにはいられなかった。

トリック プレー（後書き）

紫と朝比奈のシーンはお互い口が良く回るので会話が多いです
後、隠し事や嘘も多いので、心理描写が難しく、あまり地の文を
書けないせいでもあります
腹黒な二人のやり取りをお楽しみいただけただけなら嬉しいです

ムーン ウォーク

『夜のお散歩しませんか。先輩』

突然の紫からの電話はそこから始まった。電話越しでも笑っているだろうとわかる、怪しげな紫の声を聞いた時から譲司は怖かった。今度は何をしでかすのか。朝比奈先輩が何か紫に吹きこんだのは知っているが、その内容は知らない。

朝比奈先輩も最近別件で忙しいようで聞く事も出来ず、譲司は一人悩みながら待ち合わせ場所の駅に向かっていった。

弓の様に細い月が譲司を照らす中、ふと気がついた。夜に紫と会うのは打ち上げ以来2度目だ。しかし今日は学校の外。厳しい保護者に育てられている紫が夜遊びなどするはずはない。とても珍しい紫が見られるのだろうか？

駅前の繁華街を抜けて、駅改札前へと向かう。帰宅ラッシュのピークを過ぎてもお、人通りの多い場所だった。早めに来ているが、紫はもう着いているかもしれない。

携帯を握りしめ周りをしばらく見渡していた。

「先輩」

人ごみの中に埋もれるように紫が立っていた。

ニットの帽子とマフラーにダッフルコート。コートの下に見えるのはジャージとスニーカー。

近所のコンビニに出かける高校生っぽいカジュアルな格好だ。意外にこういうカジュアルな感じも可愛い。特にサイズの大きすぎるダッフルコートが、紫を余計に幼く小さく見せている。

「行きましようか」

一言そう言っただけで、何の説明もなしに歩き始めた彼女に慌ててついていく。

電灯の下で見る紫の微笑みは、いつも以上に怪しげで、どこか別世界の住人の様にふわふわと漂っていた。繁華街のネオンが、紫の不思議なオーラをいつそう引きたてている。

何も聞いてはいけないような、しかし何をするのか聞きたい様な複雑な気持ちだった。

「田辺さん、こんな時間に家出ておうちの人大丈夫だった？」

「寝てる振りして黙って抜け出してきました。気付かれる前に早く帰らないと。急ぎますよ」

そんな無茶してまでこの時間に何をやる気なのだろうか？ 譲司は胸騒ぎがした。

そのまま無言で歩き、迷うことなく紫は小さな中華料理屋の前で立ち止まる。商店街の片隅でひっそりとやっている昔ながらの店。閉店してしまったのか、入口の照明が消えていた。

それでもためらいなく、彼女は店の扉を開けた。

店内はカウンター内だけ明かりがついている、薄暗い感じだった。カウンターの中に若い男が立っている。

『小紫？』と男が答えれば、

『是』と紫が返す。

譲司には聞きなじみのない言語。おそらく中国語なのだろうその

会話を何度か繰り返して、それから紫はカウンターに座った。俺も隣に座ると、人懐っこい笑みを浮かべた男が話しかけてくる。

「小紫、友達、オヤカタ、ないしよでサービスするよ」

「俺は讓司。君は？」

「林少？よろしくね」

少？は頼んでもいないのに勝手にラーメンを作り始める。素人目にも危なっかしい手つきだ。それを見ながら横の紫に尋ねる。

「事情を説明してくれないかな？」

「彼は一応、留学ビザで中国からやってきた、中国人留学生って事になってます」

何その『一応』とか『つて事になってます』とか不穏当な発言は。不法滞在者とか、不正入国者とかそんなニュアンスが入ってるんですけど……。

「どこで知り合ったの」

「朝比奈先輩の紹介ですよ。榎木先輩は知らないんですか？朝比奈先輩は中国語の翻訳・通訳のバイトしてるんですよ。その関係で中国人の知り合い多いんですよ」

それは知らなかった。朝比奈が中国語を勉強している姿を見た事はあったが、まさかバイトできるほど堪能だったとは。しかも先ほどのやりとりからして、紫も中国語ができるようだ。謎だらけの二人だ。

「お待ち」

少？は2つのラーメンをカウンターに並べた。紫はかしこまった

ように無言で、右手をグーに、左手をパーにして胸の前で右手に合わせるジェスチャーをしている。少？は手をたたいて笑っていた。何かのシャレだろうか？感じ的にはお礼っぽいのだが。

よくもわからず真似るのは逆に失礼な気がして、譲司は素直に日本語で「ありがとう」と言った。少？も笑顔で頷いたからまあいいか。

ラーメンの味は微妙。スープは美味しいが、麺は少しのびていた。スープは作り置きだけど、麺を茹でるのに手間取ったのだろう。紫はラーメンをすすりながら写真を取り出してカウンターに置いた。

譲司はその写真に驚く。『真野亜紀』の写真だ。どこで手に入れたのだろう。

そしてなぜ自分を連れてきたのか、何をしようとしているのかわかってきた。紫は真野に何かしようかと企んでいる。紫の事だから、用意周到に陥れていくのだろう。

しかし何のために？誰のために？
その疑問を問うこともできず、黙ってラーメンを食べた。

ラーメンを食べながら中国語で話す2人の表情は、少し真剣でなんだか密談みたいだ。
しかし最後にはお互い笑顔で「シエインエイ謝謝」と譲司でも知っているようなお礼を言っていた。

二人のやり取りを不思議そうに眺めていた俺に、少？は一生懸命説明してくれた。

「この店、働く、小紫、おかげ。お礼、約束」

つまりこのバイトを少？に紹介したお礼に紫は何か頼んだのか？

店を出ると、ラーメンで温まった体がすぐ冷めていく。紫は少しだけ立ち止まって俺を見上げた。月明かりに照らされた紫の目は、澄んだ水のように透明で綺麗だった。まるで海のそこにいる人形姫みたいだ。

「一緒に来てくれてありがとうございます。ちょっと一人で会うの心配だったので」

「仲良さそうだったけど？」

「朝比奈先輩を通じてバイトの紹介はしたけど、今日初めて会ったんですよ。どんな人かもわからないし、夜だし」

人一倍警戒心の強い紫なら、なおさらの事だろう。

「何を頼んだの？」

「ちょっと調べ事を。結果が出たらすべてお話します。先輩の問題ですから」

「俺のために田辺さんが何かしてくれるの初めてだよ。どうして？」

弁当を作ってくれた事はあるが、あれはあくまで仕事の報酬で、紫から譲りに何かしてもらったことはなかった。じつと紫を見つめていたら、俺を置いて紫が歩き始めた。

紫の背を追いながら、背中越しに紫から返事が返ってきた。

「借金相談の件で借りがありますから。返しておかないと、心おきなく悪口言えないじゃないですか」

どんな顔してそんな事を言っているのだろうか。暗い夜道を俯きながら歩く紫の表情はわからない。でもその後ろ姿は少し照れてい

るよつに見えた。

俺は後ろから抱きしめたくなるような嬉しさを抑えて、少し後ろを無言で歩いた。

二人を月明かりが温かく照らしてくれた。

ムーン ウォーク（後書き）

『小紫』小：「くちゃん」的な愛称

本来なら初対面の相手には使わないと思うけど、たぶん朝比奈が『小紫』と紹介したんだと思う。中国文化よくわかってないのに使ってますみません

あんまり話が進まなかった

すみません

紫の企みがあっさりわかっちゃうのがつまらない気がして

戸惑う譲司のシーンを描いてみたのですがどうだったでしょうか？

フォックス ハント

「女狐狩り（フォックス・ハント）しましょうか」

紫の邪悪な事を考えてるだろう微笑みが、いつにもましてまぶしい。真野亜紀をどうにかする企みの下ごしらえがすんだようで、やつと譲司にもプランの一部を教えてくれた。

「先輩は狐を罠にはめるための餌です。餌が余計な知恵をつけるとかえって怪しまれますから、必要最低限の指示しかだしません。万が一想定外な事態になった時には、臨機応変な対応をお願いします」

人を餌とか、余計な知恵をつけると怪しまれるとか、どれだけ信用ないんだろう。なのにいざとなったら臨機応変な対応って、無茶振りにもほどがある。

「陰でこっそり見守ってますね」

言葉の可愛さとは裏腹に、下手したら承知しないぞオーラが漂っている。絶対気配消して隠れてる。チェックされて、後でねちねち嫌味言われる。

紫がストーリーカーだなんだと、俺を嫌がる気持ちが少しわかった。今度から紫を『隠れてこっそり情報収集』して、もしヤバイ物見ても見なかったふりして、俺の心の中だけに閉まっておこう。

『隠れてこっそり情報収集』などと、すでにストーリーカー行為を当たり前のように考えている所が、譲司の変態化は末期だ。

――

ちよつとオシャレな居酒屋の個室で、俺はわざわざ真野と向かい合っていた。扉を閉めると外から見えないはずだが、紫はどうにかして監視しているだろう。

俺と真野は互いに酒に口をつけてはいるが、警戒してまったく酔ってない。最初に頼んだシャンパンが気が抜けてぬるくなる頃、やつと口を開いた。

「讓司さんからお誘いなんて珍しい。嬉しいわ」

「亜紀さんとお話したい事があつたので」

俺の呼び方に真野は意外な顔をして、嬉しそうに微笑みながら、警戒レベルを高めた。あれだけ邪険にしたのに、急に呼び出して名前呼びでは警戒するのもしかたない。

それでも讓司の王子スマイルと女性のエスコートっぷりに、真野も悪い気はしないようだ。

「親父に俺の留学勧めたんでしよう。正直あれにはまいりました。当分日本から離れたくなかつたので」

「あら、あれは博巳さんが決めた事。讓司さんの事を思つての親心よ」

抜けぬけと親父の名前を出して責任逃れするとは。腹が煮えくりかるほど腹がたっていたが、讓司は心を落ち着けてポーカーフェイスを保った。

「俺は日本にいたいんです。亜紀さんから親父を説得してただけ

「ませんか？」

「それは私が義母ははになってもいいと認めてくれたということかしら？」

真野は獲物がかかったように目を輝かせた。表情こそ余裕を取り繕っているが、シャンパングラスを持つ手が、ぎゅっと力をこめて握りしめている。

「そうですね。条件がありますが」

「条件？」

真野はまた警戒心を強くして、軽く譲司を睨んだ。年上の女の貫禄で譲司を圧倒しようとしているようだ。しかしその程度でひるむような譲司じゃない。紫や朝比奈の方が何倍も怖い。

「失礼ですが、親父の結婚相手ですからね。亜紀さんの身边を調査させていただきました。大学時代にキャバクラでバイトしてたんですね」

「昔の事よ」

「そこで稼いだお金でホスト通いもしてたとか。お気に入りの『スバル』というホストに貢いでたでしょう」

「若気のいたりね。でも博巳さんは女の過去をいちいち気にするような、器の小さな人じゃないわ」

淡々と返す真野は薄ら笑いをあげている。それぐらいの事で私をどうにかできると思って？というような余裕すら感じる。

「『過去』ならいいんですけど、今もその『スバル』という男と続いているんじゃないですか？」

「そんなわけないでしょう。もうずっと会ってないわ」

真野は軽くかわした。狡猾な狐はなかなか尻尾を出さない。そろそろとびっきりの餌を出した方がよさそうだ。

「だったらよかった。亜紀さんがまだあの『スバル』という男に騙されて、利用されているんじゃないかと心配しましたよ」

「あら、心配してくれてありがとう。取り越し苦労だったけど」

「そうですね。知ってますか？あの男もホストとしては年を取りすぎてホスト引退するようです。今まで貯めた金とスポンサーからの出資でバーを出すようですよ」

真野の眉がわずかに跳ねた。真野も知らなかったであろう。内心の動揺を眉一つに留めたのは、敵ながら見事だ。

「そのスポンサーが、ずいぶんと美人な元モデル女実業家で、『スバル』と結婚の噂もあるそうですよ」

「……………」

声をこらえる事が精一杯の様だ。真野は唇を震わせ、怒りをかみしめている。うっかりシャンパングラスを落とさぬように、譲司はさりげなくグラスを奪った。

「おや？知らなかったようですな」

「……………」
「………」
「………」

『昔の男』を強く強調するあたり、まだ昔の話ではないと認めているようだ。

「お相手の女性も著名人なので、ホストと結婚するなんておおぴらにできないから、『スバル』がホストを辞めて、バーのマスターの

肩書になってから結婚らしいです。でも二人が仲よく歩いている目撃談は多くあるらしいんですよね」

真野は取り繕う余裕もなく、目を泳がせている。必死で今後の計算をしているのだろう。

「結婚前にホストの『スバル』に貢いでた女は皆切られるでしょう。可哀そうに。亜紀さんは早めに手を引いておいてよかったですね」
「……ええ。そうね」

真野の返事はどこかうわのそらだった。先ほどまでの余裕が欠片も残ってない。でもまだ足りない、狐は畏につま先しか入れてない。これでは逃げられる。

「俺も最近本命の彼女のために、今までの女と手を切ったんですけどね。』どうでもいい女』のために時間なんか使いたくないんで、メールと電話だけで済ませましたよ」

強引に関係ないひどいセリフをはさんだが、真野は不審には思わなかったようだ。

「男の人ってどうでもいい女とは直接会いもしないものなの？」
「下手に顔合わせて本命の彼女と修羅場とか困りますからね。はっきり『別れよう』とかいうと、しつこくストーリーカー化する女もいるから、必要な時だけ電話やメールして、しだいに連絡を減らしてフエードアウトです」

真野は慌てて携帯を取り出して操作しようとして辞めた。讓司の前で男に連絡するわけにもいかない。しかも今いかに『電話やメール』が信用できないか思い知らされたばかりだ。

紫の描いた筋書きとほぼ同じように進行していく。今や真野の心は讓司の手のひらで転がされているような物だ。あの狡猾な女狐がこつも簡単に畏にかかるとは思わなかった。

『27才の女だなんて、私達学生からみたらだいぶ大人に見えますけど、実際はまだまだ子供です。恋愛や結婚がかかると正常な判断力もなくなるし。特に自分の容姿に自信を持っている女は、男が自分を裏切るわけがないと高をくくってますから、脆いですよ』

紫がプラン説明中に言った言葉を思い出した。紫はまだ19才だというのに、27才女子の心理を正確に把握できるとは恐ろしい。

讓司は気の抜けたシャンパンをあおって、薄ら笑いを浮かべた。本人は気付いていないが、紫に良く似た意地の悪い笑みだった。

フォックス ハント（後書き）

前半に比べて後半はずいぶんあっさり終わりそうです

『真野』の強さをもうちょっと出したかったけど、紫・朝比奈最強コンビの前ではもはや小物ですね

ところで皆さま活動報告をご覧になるのでしょうか？

時々更新してはいるのですが、コメントがないのであまり見てないのかな？

大切な事は後書きに書いた方がいいでしょうか？それとも長い後書きは携帯ユーザー様は御迷惑でしょうか？

レディ トリスト（前書き）

レディ トリスト…イメージでは「悲しき女性」って感じですよ

Triste トリスト…悲しい

サッドの方が日本人になじみ深い気がするけど、あまり名詞では使われないようだしこっちにしました

レディ トリスト

亜紀は夜の街をただよっていた。自分が取りつく人間を探している幽霊のように。自分では冷静なつもりでいたが、わざわざ確認せずにはいられないとは、かなり動揺しているようだ。

私と彼は決めたのだ。金目当ての玉の輿セレブ婚はしても、結婚後もお互いだけが本当の恋人だと。

榎木博巳をターゲットにしてからは、男の影がばれるとまずいからと、直接会う事も控えた。結婚さえしてしまったら、世間体も考えるとそう簡単に離婚はしないだろうから隠れて会えばよい。それまでの辛抱だと自分に言い聞かせて辛抱した。

その約束を破ってまで、今彼を探し歩いている。思えばあまりに都合の良すぎる話だ。他の男と結婚してしまっただかまわない、会わなくてもかまわないなど恋人として終わっているのではないか。

私はただ彼にいいように利用されていたのだろうか。

目標の人間を見つけた瞬間、薄ら笑いが込み上げてきた。男女のカップルが歩いている。彼が女連れなのは珍しい事ではない。仕事柄、客と同伴とか付き合ってる振りをするのはわかっている。

この女もいつものそれならかまわなかった。

だが二人の歩くのをつけているうちに気が付いてしまったのだ。二人の行き先が。亜紀の心の中でくすぶっていた嫉妬の炎が、メラメラと燃え始めた。

彼は客を自宅には連れて行かない。自分のテリトリーに入られる

のを嫌う性格だし、客にストーカーとかされたら困るから当然だ。だが、今二人の向かっているのは彼の家だ。私しか知らないはずの、他の人間が入って行かれないはずの彼の家。

ゆっくり歩く二人を避けて、別の道から彼のマンションへ先回りする。自分の勘違いで二人が来なかつたら、大人しく帰って柁木との結婚まで会おうのを我慢しよう。

でも、もし彼が女性を連れてきたなら……。

彼が来ない事を願っていたのに、闇夜に二人の影が見えた。亜紀は深呼吸をして精一杯余裕たつぷりの笑顔を作った。

街灯の下で彼が私に気付く前に、先に亜紀から声をかけた。客と一緒にの時に声をかけない事。それが彼との約束の一つだった。今それを初めて破った。

「孝博」

二つ、『スバル』ではなく人前で本名で呼ばない事。それも破った。

「そちらはどなた？」

三つ、客との関係を詮索しない事。

「おまえ、なんでここにいるんだ！」

四つ、彼に連絡なく自宅に来ない事。

約束を一つ破っていくたびに、頭の芯から冷えて暴力的な喜びが沸いてくる。この男を痛めつけてやりたい。自分を騙してた分、死ぬほど後悔させてやりたい。どす暗い怨嗟に包まれていきながら、唇の端を吊り上げた。

「私を散々利用して、その女と結婚するつもり？私の存在を知って孝博と付き合ってるのかしら？」

女は明らかに動揺して、孝博を疑いの眼差しで見ている。

「いい加減にしる。春奈さん、違うんだ。この女は俺の客で、勝手に付き合ってると思いこんで、しつこいストーカーで困っているんだ。」

私よりその女が大事か！それなら怨嗟の沼の中まで引きずり込んでくれる。

「私は貴方に貢いだ金額すべて記録しているのよ。見せましょうか？それだけじゃない。他の客も店に呼ばずに孝博に直接金を貢がせてたでしょう」

孝博にゆつくりと近づくと、綺麗な顔立ちが醜く歪んでいる。私はこんな男のためになんてバカな事をしていたのだろう。

「お水の世界で客を店に呼ばずに、直接金を巻き上げるのはルール違反よね。そんなことしたら店の売り上げが貴方の懐に奪われてしまうもの」

私は孝博に口づけできそうなほど顔を近づけた。夜でもわかるほど青ざめている。

「店にばれたら、死ぬよりむごい目に会うわよ」

私の毒を含んだ粘っこい声が、孝博に伝わって体を震わせている。ゾクゾクするほど快感だ。

「お、俺にどうしろっていうんだ。おまえとやりなおせって言うのか？」

「別にあんたみたいなバカな男に未練なんかないわよ。ただ、今ま

で貢い分はきつちり返してもらおう」

「ふざけんなよ。金持ち親父捕まえて、セレブ妻なる人間がそんな事言ってるのかよ。俺との関係その親父にばらされてもいいのか？」

「あら、残念ながら私に夢中なバカ親父だから、あなたみたいなバカ男の戯言なんか聞きはしないわ」

「金、金うるさい強欲女め。男を財布かなんかと思ってるんじゃないか？」

「あたりまえじゃない。私は若さと体を提供してあげてるんだから、貢いで当然。今まで私に恵んでもらっていたあなたこそ感謝するところね」

男と女の毒と強欲まみれの修羅場はそれから1時間以上続いた。

――

「というわけで、『真野亜紀』という女がどんな女かわかっていただけでしょうか？」

ビデオに映し出された毒々しい真野を見て、男は青ざめた顔で頷いた。

「よくわかった。この女とはすぐ別れる」

「さすが敏腕社長なだけあって、決断は迅速ですね。女を見る目はないようですが」

紫は初対面の目の前の男にも、情け容赦なく嫌味をはく。表情はまだ10代の少女が可愛らしく微笑んでいるのだから、男は得体の知れなさに本能的な恐怖を感じ取った。

榎木博巳59歳、長年ビジネスをしてきた勘が、この少女を敵に回してはいけないと告げていた。

「付け加えるなら、財務の平社員もたらしこんで、ささいな不正も行っているみたいですね。調べてみてはいかがでしょう。その問題で脅してプレッシャーかけて、自主退職にしむけるのがスマートかと。下手にクビにすると逆恨みされるし、周りの社員からも『愛人を辞めたからクビにした』と信用そこねますからね」

紫が余裕の表情で微笑んでいるので、博巳も年上の貫禄で余裕で笑ってみたが、内心冷や汗ものだった。内部事情に社長である私よりも詳しいとは、どういう手を使ったんだ。

「本当に大変だったんですよ。今回私も色々コネ使ったり、手間かけたり……本当に色々と大変だったんですよ」

大変をやけに強調してくどくどと繰り返す。空気読んで何か礼すると脅されている気がして、助けてもらったはずなのに全然ありがたいがない。

「本当にありがとう。何かお礼できないかな？」

待つてましたとばかりに会心の笑みを浮かべる。

「今はまだいいですが、いずれ腕のいい弁護士をポケットマネーで紹介していただけないでしょうか？」

「弁護士を紹介すると言っても、弁護士ごとに得意内容があるし、具体的に話してもらわないと難しいな」

「その時がきたらお話しします。お約束いただけますか？」

内容のわからない空手形をきるほど恐ろしい物はない。後でどんな無理難題を吹っ掛けられる事か。躊躇していると紫は追いつめるような一言を付け加える。

「『真野亜紀』から押収した、社長のニヤケ切ったバカっぽいアベック写真とかあるんですけどいりますか？それとも会社内にはらまいてもいいですか？」

「わかった。いずれ弁護士を紹介する。だからばらまくのは辞めてくれ」

躊躇う猶予さえも与えてくれない少女は、満足そうに頷いた。

「もちろんこの約束は柁木先輩には内緒でお願いします」

――

「譲司。前に結婚したいくらい好きな女の子ができたと言っていたが、まさか『田辺紫』さんじゃないだろうか」

親父の口から紫の名前が突然飛び出して驚いた。久しぶりに夕食を誘われたかと思えば、紫の名前がでてくるとは、何かやっていると思ったけど親父にも手を回していたのか。

「そうだけど、どうして？」

親父が盛大にため息をついた。すごい言いづらそうにポツリポツリと言いはじめ。

「今日会社に来て、会ったんだが……」

「真野さんの問題解決してもらったんでしょ？」
「そうなんだが……」

親父らしくなくなるとも歯切れが悪い。

「私はな、今の時代ビジネスに政略結婚なんて古いと思うし、おまえも好きになった女性と結婚してもいいと思ってる……」

「もしや紫と結婚とか歓迎してくれている……にしてはなんとも歯切れが悪い言い方が気になる。」

「私は一度離婚してるし、今回も女で失敗してるし、言える立場じゃないが……」

親父が仕事以上に真剣なまなざしで、すがるように言った。

「悪い事は言わない、あの子だけはやめておきなさい。ましてや息子の嫁とか恐ろしすぎる……」

仕事の鬼なはずの親父が本気でビビって震えてる。紫、君は親父に何したの？逆仲人？外堀から埋めるように、親や保護者に悪い印象作って、周りから恋愛を邪魔しようとしてるの？

もしかして今回『真野亜紀』の問題を解決してくれたのは、俺のためじゃなくこのためなのか？

レディ トリスト（後書き）

好きな異性を口説くのに、親や友人と仲よくなって「外堀を埋め
って展開はよくあるけど
嫌われるために、わざと親に悪い印象を与えるのも外堀を埋めるな
のかな？

バレンタイン ラブ（前書き）

後日談、というか伏線回収と小話です
この話で第4部終了となります

バレンタイン ラブ

2月中旬のまだ寒い日の昼。お礼も兼ねて紫お気に入り紅茶専門店でお茶とお菓子を御馳走しながら、俺は紫に事の顛末を聞いた。

「俺も興信所とか使って、『真野亜紀』の身辺調査はしてたんだけど、ホストとの繋がりなんて全然調べられなかったんだ。どうやったの？」

「探偵業も、今や個人情報保護法のために、警察に届け出制だから、非法なことはできなくなりましたからね」

つまり君は何か非法な手段を使ったってことだよな。これ以上聞くのが怖いような……。紫は何でもない事のように、堂々と一枚の紙を取り出した。

『携帯の通話明細記録』。しかも『真野亜紀』の。

「何でこんな物、田辺さんが持つてるの。『通信の秘密』って憲法知ってる？法律違反どころか、憲法違反じゃないか」

「入手経路は秘密です。まあ見てもらえればわかりますよね。頻繁にやり取りしている電話番号があるので、その番号にオレオレ詐欺的に電話して、相手を探ってみました」

『通信の秘密』とは、個人間の通信の内容や記録を第三者に漏らしてはいけないというもの。

刑事ドラマなんかだと犯人の通信記録とか簡単に割り出してるけど、あれは警察が犯罪捜査のための特例で、個人には絶対漏らしてくれないんだけど。

しかも続けざまに『オレオレ詐欺』って物騒な単語並べないでほしい。

「あと、なんか朝比奈先輩が別件調査中に『たまたま入手』できて、情報流してくれました」

そう言っつてプリンターで出力された、書類の様な物を取り出した。斜め読みして、俺はこれ以上ないほど青ざめた。

「これ真野から男の口座に振り込んだ、振り込み記録だよね。どうやったらこんな情報『たまたま入手』だなんてできちゃうの?」

「さあ?朝比奈先輩に聞いてください。でもおかげでだいたい読めました。電話と振り込みだけで直接接触なしだったから、興信所の調査も引つかからなかったようですね」

俺の手元から落ちた書類を、紫は丁寧に拾い上げてファイルに閉まった。

「これらは非合法な手段で手に入れた物なので、これをネタに『真野亜紀』は脅せません。だから先輩に罠をしかけてもらって、直接会うように仕向けたんです。そこからは林さん達の活躍」

そういえば例の中国人留学生がどんな働きをしているのか知らなかった。

「彼に何を頼んだの?」

「日本に滞在している彼のお友達を総動員しての人海戦術で、24時間『真野亜紀』を監視してもらいました」

それって集団ストーカーみたいだ!探偵・刑事もののドラマでは良くある話だけだね。リアルで中国のお友達使ってやるか?

「あとは、私の知り合いで盗撮・盗聴に詳しい人がいるので、機材

借りてきて修羅場を録画・録音しただけです」

「普通盗撮・盗聴に詳しい知り合いなんかいないから」

紫は意味ありげに俺を見て、クスクスと笑った。

「先輩が気付いてないだけで、意外に近くにいるかもしれないですよ」

俺に何か関係あるの？なんか急に寒気がしてきたんだけど。

「世の中には知らない方が幸せな事もあるってことです。いいじゃないですか。先輩が幸せなら」

これ以上聞くともっとヤバそうな気がしたので、俺はここで『真野亜紀』に関係したすべての事を忘れる事にした。

紫が別れ際に「忘れてた」と呟いた。

「先輩。今日何の日か覚えてます？」

今日？2月14日……って……まさか！

紫がチヨコをくれるなんてありえないと思ってたし、期待してなかったから記憶から消去してたんだけど、まさかチヨコ用意しててくれたのか？

「手作りなんですけど、よかつたら食べてもらえますか？」

手作りチヨコ！すごい！気合入ってる。本命っばいではないか。期待に胸ふくらませて思いっきり頷いた。

「もちろん田辺さんが作った物ならなんでも」

「よかつた」

そう言っつて紫が取りだしたのはタッパーだった。その色気のない

包装はもうどうでもいい。しかしどう考えてもチョコではありえない匂いが漂っているのだが……

「田辺さんこれ何かな？」

「カレーです。昨日の田辺家の夕飯の残りをおすそ分けしようと思っ
つて」

バレンタインを持ち出して、期待をあおっておいて、夕飯の残り物のおすそ分けか！確かに紫の手作りなんだけどね。俺はがっくりと肩を落とした。

「隠し味にチョコ入れたので、バレンタインチョコの変わりにならなくもないかと」

これはバレンタインにチョコをもらったと、カウントしていいのか？俺のプライドにかけてそんななさけない事……でも紫に一生まともにチョコもらえそうにない事を考えると、これはこれでカウントに入れておいたほうが……いやまてまて早まるな。

俺の脳内葛藤が沸騰している所に、彼女の言葉が突き刺さった。

「一つ言い忘れてましたが、田辺家は皆辛口好きなので、激辛カレーです」

「……俺辛すぎるの苦手なの知ってるよね」

「もちろん。以前お弁当作りの時に先輩の食べ物好みは聞いてますから」

紫は極上の笑顔を浮かべて言った。

「私の愛のこもった手料理を、頑張って食べてくださいね」

君の愛はムチのようにいつも痛いんだね。命捨てて、ありがたく

食べさせていただきます。

上官命令に逆らえない一等兵が最敬礼した気分で、カレーを受け取った。好きな女の子が愛を込めた手料理（昨日の家の残り物カレー）これで食べなきゃ男がすたる。

その夜、譲司はあまりの辛さに身もだえしながら、紫の愛を感じたのだった。

第4部終了

バレンタイン ラブ（後書き）

紫らしく、無駄のないバレンタインプレゼントかと
ちなみにタッパは譲司から綺麗に洗って返してもらいました

上条と研修（前書き）

第5部はじまりです。

第4部と同じ時間で同時並行に起こった物語です
こちらの方がシリアスタツチかな？

上条と研修

上条は工商事入社後、半年間新入社員まとめでの一斉研修を受けた。その後、秋から実務研修として半年間総務部に仮配属された。正式な部署に配属されるのは春からだ。

入社時の希望部署は営業か企画部だったが、やってみると総務の仕事もやりがいがあつて面白かつた。

総務は会社の裏方的で地味な仕事だが、各部署とつながりがあつて人脈も広がるし、備品管理をしているとその部署の物の動きから状況を図れる。

初めにこういう裏から会社の全体像がつかめてよかつたと思つてゐる。いずれは表舞台に立ちたいが、その時きつと今の仕事の経験が役にたつ。

仕事内容には何の不満もないのだ。ただ上条は今の総務部は嫌いだ。それには色々と事情があつた。

正月休み明け。休みボケで感覚が鈍つているとたまつた仕事で、部署全体が慌ただしい。

そんな中いつものそれが起こつた。

「佐藤君。見積もり出来たから、業者に発注の連絡しておいて貰えないかな？」

菱沼主任が私の隣のデスクの佐藤さんに仕事を頼んでいた。

内容はたいしたものではない。主任が見積もり書類を作成済みなので、ただ業者に連絡して調整するだけ。研修の私でもできる簡単なものだ。

しかも佐藤さんは入社2年目でこの部署では研修中の私達を除けば、一番の下っ端になる。上司の依頼など二つ返事でやるのが当たり前なのに、佐藤さんは沈黙したまま動きをとめた。

周りの人間も仕事をしながら固唾をのんで見守っているが、誰も口出ししようとはしない。佐藤さんの反応にむしろ周りの社員は同情的な空気だ。

菱沼主任は受け取ってもらえない見積書を前に、困った顔をしていた。上条は佐藤さんの反応にも、日和見的な周りの社員達にもイライラしていたので、新米のくせに生意気だとは思ったが、みずからしゃしゃりでた。

「菱沼主任。私、今手が空いてるのでやります」

「いいのかな？」

「はい。その業者なら、佐藤さんの仕事の手伝いで何度か連絡しますから、担当者もわかりますし、任せてもらえませんか？」

「助かるよ」

菱沼主任は助かったという顔をして、私に見積書を渡した。周りでやり取りを見守っていた社員達は気まずげに眼をそらす。

たぶんまた色々後で陰口言われるんだろうな……。

私に仕事を頼んで自分のデスクに戻る上司の背はいつもどこか寂しげだった。

ひしめまゆたか

菱沼豊29歳。高い身長、一流商社で20代で役付き、穏やかな人柄な上に、整った顔立ちの中にどこか男の色気を漂わせる。これだけ好条件がそろっていれば、普通女子社員が黙っていないが、残念ながら既婚者だ。

それでも昨年までは、冗談で不倫でもいいから付き合ってみたいなどと先輩女子社員達が騒いでいた。

昨年までは。

菱沼主任は昨年の秋から移動で総務部配属となった。秋の人事異動、しかも以前の財務部にいた期間は一年半と短い。この異例の移動に公式的に会社は何も言わなかったが、社員の間では左遷人事と認識されている。

噂が飛び交っているが一番有力なのは、部下の女子社員との不倫。しかもその女子社員と別れ話がこじれて相手は会社を辞めたらしい。噂なのでどこまで本当かわからない。相手の女子社員が勝手に主に熱をあげて騒いだけという話もある。ただ財務部の若い女子社員が昨年、突然「一身上の都合により退職」したのは事実だと理子は言っていた。

菱沼主任は役職は据え置きのまま、財務部から総務部へ異動になった。しかも重要な仕事からは外されている。周りが左遷人事だと噂するのも仕方がない。

事件の前は出世頭の菱沼ファンが男女問わず多かったのに、今では皆が腫れ物に触るような扱いで距離を置いている。

そんな周りの対応が上条は嫌いだった。

何か仕事でミスしたわけではない。本当に不倫してたのかもわからない。もし不倫だったとしても菱沼主任が既婚者なのは、周知の事実だし相手もわかってつきあっていた事になる。

相手が退職してしまったから部下の管理不足として責任を問われるのも、そのための左遷人事なのも納得はできる。だけど仕事に支障がでるぐらい露骨な態度をとるのは大人としてどうかと思うのだ。

上条自身が身勝手な噂に振り回されて、就職を駄目にしかけた経験があるので、余計に菱沼主任に同情的になっているのかもしれない。

部下として数カ月一緒に働いているが、菱沼主任は仕事もできるし、気配り上手で、この嫌な空気の中でも腐らずに真面目に働いている。それだけでも尊敬できる上司だ。

だから周りから白い目で見られる事がわかっていても、ついつい菱沼主任に肩入れしてしまうのだ。

まだ入社1年目の研修中の自分にできるフォローなど、微々たるものでしかないのだが。

理子にはあまり肩入れしすぎない方がいいと忠告もされている。理子が私の身を案じて心配してくれているのはわかる。それでもやっぱり主任の寂しげな背中と理不尽な社員達の態度を見ると、黙って見過ごせないのだ。

「それが彩花の良い所なんだけど。困りものよね」と理子は笑う。彼女は周りの社員達に合わせて、主任と距離を取ってはいるが、私に情報をくれたり、人目に付かない所では主任とも普通に会話しているらしい。

世渡り上手な彼女らしい対応だが、上条はそんな彼女の行動が嫌いじゃなかった。彼女は情報を集めるために、表や裏で誰とでもつきあう。誰に対しても肩入れしないし、拒否もしない。情報を上手く集めながら誰に対しても公平に付き合うということだ。

冷静な彼女の存在が私を力づけてくれる。彼女と仲良くなっただけなら、上条も周りの空気を読んだり、距離感を保つ事が気持ち的に楽になった。彼女の様に割り切ってしまう方がいいのだと。

それでも菱沼主任への社員達の露骨な態度は、私を苛立たせるのだった。

上条と研修（後書き）

上条の職場環境を書きたくて書いてみました。

正直作者は普通の会社員やったことないので、これであってるのかな？と悩みます

リアル会社員な方のご意見・ご指摘いただけると助かります

朝比奈と警告

指定されたオイスターバーに朝比奈がついた時には、テーブルの上には空の殻がいっぱいになっていた。

オイスターバーの牡蠣つて1個で千円前後するよな、しかもこれだけ大量に。そして支払いは全部朝比奈に。これが彼女の『情報料の追加請求』なのだから、諦めるしかないのだが。

朝比奈が来るまでに白ワイン1本をすでに空にした、理子がほろ酔い顔で朝比奈に微笑む。

「お先」

「そんな酔っててまともに話なんてできるのか？」

朝比奈は呆れてため息をつきながら、理子の斜め前の席に座った。4人がけのテーブルに2人で座るなら、向かい合わせが普通だろうが、2人にとってほどよい距離感がそれぐらいだったのだ。

「酔ったふりぐらいいくらでもできるわよ。どれだけ飲んでも頭は冷静で記憶力もばっちりじゃなきゃ、諜報活動なんてしてられないわ。やっぱ冬は牡蠣よね！久しぶりに思う存分堪能したわ」

「合コンでお気に入り見つけたんだろ。こんな所で油売ってていいの？」

「あれはキープ君だし。あんまり初めから甘やかすとがつつくからおあずけして教育中」

朝比奈はやれやれと肩をすくめた。ノンアルコールカクテルを頼んで、それが来るのを待つ間理子の出した写真を観察する。

整った顔立ちで穏やかそうな顔をしているが、どこか独特の雰囲気醸し出す男だった。写真を見ただけで、『うさぐさいやつ』

と心の中で呟いた。

「こいつが上条に危険な虫って事」

「菱沼豊、29歳。総務部主任。既婚者」

「既婚者！そんな不倫なんて上条が相手にするわけないだろう」

「だから危ないんでしょう」

理子は人差し指をたてて、『ちゅちゅち』と言いながら大げさに振った。

「彩花は基本ガード堅いから、マトモにアプローチしてくる男なんて相手しないわよ。でも相手が既婚者なら自分に気があるわけないって油断があるから付け込まれるでしょう」

「なるほどなあ。まあルックスは良さそうだけど、中身はどうなの？」

理子は顔をしかめた。

「よくわからないのよね……」

情報戦でいつも余裕の理子にしては歯切れの悪い返事だった。

「周りの評判は温厚で公平、でも仕事のできる男。実際話して見た印象はその通りなんだけど、色々と悪い噂があつて……」

理子は秋の人事で突然左遷人事された経緯を朝比奈に説明した。

特に『部下との不倫』という噂に朝比奈は過敏に反応する。

「前科ありか。黒いなあ」

「まだ噂で裏は取れてないわ。実際今回の事件は不可解なほど会社から情報規制されていて、実際何があつたか知っている物はほとんどいないみたいなのよ」

「火のない所に煙は立たず。実際その女子社員『秋山玲菜』だっけ

「は辞めてるんだらう」

「確かに退職はしているけど、理由が不明って事になってるから。菱沼にアタックして相手にされなかったから、嫌がらせに辞めたって話もあるのよ。実際前から彼女菱沼ファンだったし」

朝比奈は口にしたノンアルコールカクテルの甘さに顔をしかめながら飲みこんだ。確かに上司と部下の不倫などというスキャンダルを公にしたくない会社の事情はわかるが、情報規制して圧力かける度の事か？男女の中などどれだけ押さえつけようとも、勝手に噂になるのに。

「それにもう一つ気になる所があるのよ」
「何？」

「菱沼は一昨年春の春の人事で財務部に移動になってるんだけど、その前は営業だったのよ。しかも営業成績ナンバーワン。何もミスもなかったし、菱沼が抱えてる顧客の仕事がたくさんあったのに、突然の財務部移動でしょ。当時もこの不可解な人事にみんな首を傾げてたらしいわ」

「何か噂でもないの？」

「上層部の派閥争いに巻き込まれたとか、ライバルに嵌められたとか陰謀説があるけど、どれも証拠もない憶測ね」

不可解な移動を短期間に2度も……怪しすぎる。写真の中の穏やかな笑顔に隠された男の真実が朝比奈は気になった。

「それにねえ……今回は……彩花が」

「上条がどうかしたの？」

理子は言いにくそうに言葉を止めて、空のグラスをもて遊んだ。

「菱沼が左遷人事の影響で社員達から、軽いいじめみたいなものを受けて、それに怒って菱沼に肩入れしてるのよ。ほら、あの子そういうジメジメしたの嫌いだし、困ってる人ほっとけないタイプでしょ」

朝比奈の脳裏には上条が取るであろう行動が十分想像できた。肩入れしすぎて、親しくなって、気づけば……なんてことはありえそう。特に男が自分の境遇を利用して同情を引けば、上条は簡単にひっかかるだろう。

「私も軽く彩花に警告はしてるんだけど、聞いてくれなくてね」

たぶん直接言っても上条に効果はないだろう。自分が正しいと信じた道をひたすら突き進む所が彼女の良さでもあり、悪さでもある。今回は上条にないしよで裏で動いて、この男の正体を暴くしかないかな。

「引き続き監視を頼む。特に菱沼の情報ならなんでも。こつちでも動いてみるけど」

「了解。あのだ……」

理子が横目で探るような視線を投げかけてきた。

「私内容までは知らないけど、上条の内定問題の時、人事の笹本部長を動かしたって。あれなんか弱みとか握ってるんでしょう。そのルート使えないの？」

「今はまだ動かせない。菱沼と会社との繋がりも見えないし、切り札はそう簡単に使ったら効果が薄れるからね」

『そう』と何気なさを装って、理子は視線をそらしたが、瞳に宿った好奇心の炎は隠せなかった。僕の握ってる情報まで搾り取るうとは、なかなか抜け目ない女だ。油断できない。

たぶん理子も同じことを考えているだろう。

危険だが互いの利益が一致している限りは、付き合いやすい関係とも言える。今の所は上条防衛戦線の協力者にカウントしてもいいだろう。

「とりあえず、なんか飲む？ 僕達の勝利を祈願して乾杯と行こうじゃないか」

「いいわね。じゃあ、もう1本高い白ワインボトル入れてもいい？」

「だめ。これ以上は奢らない」

「ケチ」

朝比奈と警告（後書き）

今回の章のイメージはトランプゲームの「ダウト」です
裏替えて置かれたカードは菱沼自身

「ダウト」を宣告するのが朝比奈

宣告したら初めてカードをめくれば、菱沼が白か黒かわかる
白だったら朝比奈の負けで、黒だったら菱沼の負け
敗者への罰は上条からの信頼の喪失
さて、菱沼は白か黒か？

上条と昼食

すでに12時を回って、社員は皆昼ご飯に出てしまった。菱沼主任は本来ならサポートに回る部下達がサポータージュしたために、鬼のような勢いで一人残って仕事していた。

見かねた上条は書類整理ぐらいと手伝いを買って出た。

「すまない。仕事手伝わせてしまって。昼食遅れてしまっね」

会話中も仕事のスピードは全く落ちない。菱沼主任の仕事ぶりに改めて感心した。

「いえ、私いつも仕事が溜まってるときは、コンビニおにぎりで済ませて、仕事しながら食べちゃったりするので」

「お詫びに何か昼飯奢るよ」

私は思わぬ提案にどうしようかと少し悩んで、素直に希望を言うてみた。

「近くのコンビニで「オホーツク産限定鮭ハラスおにぎり」売ってるんですけどアレ食べたいです。」

菱沼は思わず仕事の手を止めて、驚いた顔で上条を見た。

「せっかく奢りなのに、コンビニおにぎりなんかでいいの?」

主任は遠慮しているのではないかと心配しているような表情だ。しかし遠慮など全然してない。今日の私は美味しい鮭が食べたい気分なのだ。

「ただのおにぎりじゃないですよ。数量限定鮭ハラスの大きな切り身の入ったやつ。いつものコンビニ高級おにぎりよりさらに高い、特別感あふれる鮭の切り身が美味しいんです」

私のつい熱のこもった力説に、遠慮でなく本気で鮭おにぎりが食べたいのだとわかってもらえたらしい。菱沼がクスクスと笑いだした。

そういえば主任はいつも穏やかな微笑みだけど、こんな風に笑うの初めて見た気がする。

「そんなに鮭の切り身食べたいならいい所あるよ」

「どこですか？」

「近所に『久野』って定食屋あるだろう。あそこの常連限定裏メニューに焼き鮭定食あつて美味しいよ」

「『久野』行った事あります。サバの味噌煮が絶品でした。あそこの焼き鮭定食なら美味しいんだろうな」

私がつつとりとしている間に、あっさり菱沼主任は仕事に戻つて、私も慌てて書類のファイリングに戻る。

「仕事早く終わらせて『久野』に行くか」

「了解です。主任」

私の頭の中は焼き鮭定食がぐるぐるしていたが、書類整理とはいえミスなく素早く終わらせねば。二人の食欲に火がついたおかげか、仕事は10分もせずに終わった。

「美味しい！ほっぺた、落ちる」

私口が広がる鮭の脂を楽しんでいると、主任は満足そうに頷いた。

「よかった。まだあつて。それに気にいってもらえたみたいだね」
「脂が乗つてて美味しいです」

「秋鮭ならもつと脂が乗ってて美味しいんだろな」

「それ嘘らしいですよ。旬は秋ですけど、むしろ秋の鮭は他の時期より脂が落ちてます。その分卵や白子が美味しんですけどね」

「よく知ってるね上条さん。食べ物に興味も深いよね。お酒とかも好きなの？」

「いえいえ、付き合いでビール飲む程度ですよ」

社内の飲み会では飲みすぎ防止のためビールしか飲まない。私にとってビールは水みたいなものだから、飲んでも酔っぱらった事ないのだ。

主任が私の定食盆をじつと見た。私の漬物に乗せた小皿が空になっていたせいか、主任の漬物の小皿をくれた。

「漬物が一番に無くなるなんて、やっぱり上条さん渋いなあ」

「美味しいですよ、この漬物。主任食べないんですか？」

おふくろの味的に手作り感あふれている。今時珍しい。

「私は漬物食べると酒が飲みたくなってしまっから」

「わかります。今の時期、熱燗きゅっと、漬物ぼりっとして最高ですよね……」

しまった！さっきビール飲む程度って言ったそばから、熱燗と漬物について語ってしまった。主任は一瞬目を見開いて驚いていたが、すぐに大笑いしはじめた。

そういえば主任と飲んだ事がない。秋の移動の際も歓迎会やるって噂になったけど、スケジュールが合わないとかなんとかぐだぐだ引き延ばして、結局うやむやのうちにやらなかった。主任も皆に歓迎されてない空気はわかっていたから、忘年会も新年会も不参加だったし。

漬物で酒が飲みたくなるなんて、結構酒好きっぽいなあ。

「他の人に言わないでくださいね」

「わかつてる。まさか23の女の子で熱爛の魅力を語れる子がいるとは思わなかった」

顔から火が出るほど赤くなった。秋鮭だの、漬物だの、熱爛だの、完全に中身オツサンだ私。しかも朝比奈と理子以外の人間に知られるの初めてかも。

「でも上条さん営業向きかもね。取引先のオジサン達に可愛がられるんじゃない？お酒強そうだし」

「営業つてやつぱり飲みニケーション大事ですか？」

「基本は信頼関係を築くことだからさ、別にお酒じゃなくてもいいけど、一緒に飲んで仲良くなると一気に人との距離縮まる感じがしない？」

「そうですね。確か主任つて以前営業にいた事もあるんですよ」

私が顔を伺うように主任に話を振った。左遷人事の事とか気にしてるかな？あんまり昔の話とかしない方がいいのかな。

しかし私の心配が杞憂だったみたいにあっさり主任は頷いた。

「そうだね。上条さん確か営業配属志望だったよね。配属どうなるかはわからないけど、よかったら時間ある時に営業時代の話しようか？聞いてみたい仕事の内容とか裏話とか」

「よろしくお願いします」

私が定食屋のおばちゃんにご飯おかわりをお願いしたら、また大笑いされた。だって鮭美味しかったんだもん。

上条と昼食（後書き）

オッサン上条がダダ漏れしてしまいました

いちよう、職場では上手に猫かぶってごまかしてたはずなんだけどなだから女子ランチでカフェとか、ポリユーム足りなくてもものたりないこんなこじゃれてるだけで、ちょっとなのに1000円って高くない？とか

いつも心で突っ込みいれながら、愛想笑いで付き合っるのが苦痛

朝比奈と取材

理子から追加情報がきた。昨年から一昨年にかけて、財務部近辺を3流雑誌記者が嗅ぎまわってたらしい。菱沼の財務部配属期間と一致するこの情報は、調べる価値がありそうだ。

雑誌の名前は『週刊経済ジャーナル』経済誌を謳っているが、実際は根も葉もない企業の黒い噂を取り上げる胡散臭い雑誌だ。調べてみたが、工商事が記事になっている号はなかった。取材はしたが、記事にならなかったということか？担当した記者に会って直接話を聞いてみたかった。

発行元は『中沢出版』。その会社と古谷教授がかかわりがある事は知っていた。しかし今回は力を借りる事はできない。

以前、上条の内定取り消し交渉に行った事も古谷教授にすぐばれて、しっかりとくぎをさされた。

「君が優秀な人間なのは私もよく知っています。しかし個人の力には限界がある。このままだと大企業という巨大な集団の力に簡単にひねりつぶされますよ。もう2度とこんな事はしないように」

僕を心配しての苦言だとわかっているから、今回は心配かけられない。

雑誌記者が嗅ぎまわってた所をみると、工商事に都合の悪い話を調べ上げる事になる。またあの会社を敵に回す事になりそうだ。

となると他に『中沢出版』とコネがありそうなのは……。該当人物を思い出しただけで頭が痛い。アイツをどう説得するかが朝比奈の悩みどころだった。

何とか『中沢出版』の『週刊経済ジャーナル』で工商事を取材していた、中本という記者と接触する事に成功した。出版社の近くの喫茶店で、コーヒーを飲みながら話をした。無精ひげが少し残った、いかつい中年男だ。中本は煙草を吸いながら切りだした。

「意外な所から頼まれ事されたもんや。ジャンルも全く違う編集部やし、断りたかつたんやけどあの人の強い紹介で断れなくなりましたわ。雑誌にも掲載できなかった取材内容やから、あまり話せんけどいいか？」

田辺のコネがどこから繋がってるのか？あの人とは誰かは聞かない事になっている。

「最初に聞いておきたいんやが、なんで工商事の事を調べてるんや。脅迫とか物騒な事はやめてくれよ」

「僕の恋人が工商事に勤めてまして、悪い噂があると聞いて心配してるんですよ。スキヤンダルで株価が落ちて会社が傾いたり、経営立て直しのためにリストラとかされると困るでしょう」

上条が工商事に勤めているのは本当だ。嘘と言うのはできるだけ少ない方が、信憑性があがるというものだ。

「ふーん。まあ個人的な事ならいいんやけどね。くれぐれもニユースソースは明かさんでくれよ」

「もちろんです」

中本は煙草の煙を大きく吐き出して、灰皿で火を消した。すぐにもう一本に手を伸ばして辞めた。

「最初は内部からのタレコミだったんですわ。金の動きに不審な点があるってね。組織的裏金作りによる脱税かと思っただわ」

財務部というお金に関する部署だけに予想はしていたが、ずいぶん大きな話しになったものだ。

「だが、調べてみたら案外金額が小さそうやし、上から圧力がかかってね。たいした記事にならない事件で上に睨まれたらかなわんと、結局記事にしなかったんですわ」

「金額が小さい？」

「脱税するなら、数千万、数億単位で所得隠ししないと脱税の意味がない。実際は数百万程度だったみたいやな」

額が少なくても、理子の集めた情報では何もなかった。社内ではまだ気付いていない事件なのか？それとも気付いてて隠してる？菱沼と秋山玲菜に関して『会社から情報規制』がかかっているという話だったが、もしかして本当に隠したかったのはこっちか？

菱沼はこの事件にどう関わっている？

思考が煮詰まっていた時、突然携帯が鳴った。意外な人間からの着信に思わず皮肉げな笑みが漏れた。

『珍しいな。田辺から電話だなんて』

『こっちの件で調べてたついでに、お伝えしておいた方がよさそうな事がわかったので』

田辺には僕が何について動いているか全く話していない。まあ上条がらみだとは思われているが、どんな情報だと言うのだろうか？

『榎木先輩の父親の愛人秘書に男がいたんですよ。』スバル』って

『いうホストなんですけど』

『ホストに貢ぐ女かまた古典的な話だな』

『その男の方も一樣調べてみたんですけど、顧客の中に元工商事社員がいたんです』

元工商事社員という言葉に嫌な予感がした。

『秋山玲奈という28歳の女で、年齢の割に羽振りがよくて、店でも話題になっていたようですよ。最近は来てないみたいですが』

ここで秋山の名前がでてくるか。田辺は何も知らずに情報を流してきたのか、あるいはこっちの情報を知っているのか。今後のために警戒しておくべきだな。

『お役にたちました？』

『ああ。助かった。そっちはどうだ？』

『愛人秘書と男の決定的瞬間でも撮って見せれば一発なんですけど、なかなか尻尾をつかませないんですよ』

『連絡手段は？』

『携帯で頻繁に連絡を取ってるのはわかっているんですけど』

『だとしたら、男に貢ぐために金を渡す現場があるはずだろう。それとも会わずに渡しているのか……』

そこまで言って朝比奈は思いついた。思わず意地の悪い笑みが浮かぶ。そうか。そういうことか。

『金の動きは置いておいて、現場写真が抑えられないなら、罫にほめて会わせればいいだろう』

『……そうですね』

電話越しでも田辺が黒い笑みを浮かべているのがわかる。所詮僕

達は似たもの同士という事か。

朝比奈と取材（後書き）

中本のしゃべり方がおかしい

でもどこをどうなおせばいいか悩んで、こついうおかしなしゃべり方するオッサンなんだと思いこみました

きつと地方誌を渡り歩いているうちに、いろんな方言がごちゃ混ぜになって似非方言になったんだよ……

言い訳してすみません

上条のオフィスラブな雰囲気と朝比奈の企業犯罪の匂い

全く雰囲気の違う話を行ったり来たりな感じです

上条と菓子

最近わずかながら、私への風当たりも悪くなってきた。午後のお茶を入れる時、以前なら先輩も手伝ってくれていたのに、今日は一人でやるように言われた。

まあそろそろ独り立ちしろって事かもしれないが、この人数分までとめて淹れようとしたら、初めの方の人確実に温くなるし、そもそも一人じゃ運べないよな。

かといって給湯室と部署は少し距離があるので、何往復もすると非効率的だ。

どうせみんなゆっくりお茶してる時間ないし、デスクに置いて回ったって冷める頃飲むんだろうな。まあ適当でいいか。

私が一人給湯室でお茶を入れようとしている所に菱沼主任が顔を出した。廊下を見て他の人がいない事を確認してから、こっそり給湯室に入ってくる。

「みんなには内緒だよ」

そう主任が言っただけで私の手のひらに乗せたのは、こぼれそうなほどたくさんのお茶だった。

「上条さんそんなに甘いもの好きじゃないって聞いたけど、これは塩が効いた飴だからわりと甘いもの苦手な人も好評なんだ」

私は茫然と飴の山と主任を見ていた。「みんなには内緒」などと子供のイタズラみたいな言葉が、大人なはずの主任とミスマツチだ。ちやめっ気あふれる表情がユーモラスで、なんだか優しい気持ちになる。

「ありがとうございます。でも、なんで突然飴ですか？」

その時の主任の困ったような微笑みは、異性として十分魅力的だった。不倫でもいいから付き合ってみたいなんて、バカな事を言う女子の気持ちが少しわかってしまう。

私は恋愛より仕事ってタイプだから、一時期のバカな気の迷いで仕事を駄目にする気はないんだけどさ。

「昨日辺りから上条さん、時々咳してるでしょう。喉悪くしてるのかな？と思って。風邪ひきやすい季節だし」

そういえば喉の調子があまり良くない。たいしたことないし、周りに心配かけないように気を使ってたつもりだったのだが。

「私のそんな変化、よく気がつきましたね」

「部下の管理も上司の仕事のうちだよ」

ちよつとした体調の変化まで見逃さないとは、できる男は違う！私は思い切り感動してしまい、思わず主任の手を握って握手したくなかった。

しかし手のひらには飴の山。せつかくいたただいたものを無駄にできない。握手してもらったら、仕事できる力とかかわけてもらえそうなので、パワーが主任にはありそうなんだけど残念。

「基本だけど喉ならやっぱりうがいだね。塩うがいつて知ってる？」

すぐに首を横に振る。私はめつたに風邪ひかないぐらいの健康体なので、あまり病気の予防とか気にした事がなかった。

「塩水でうがいするんだよ。普通の水より効くよ」

おばあちゃんの知恵袋的な豆知識にびっくり。塩なら料理をしない私の家にもある。しかも殺菌効果高そうだ。

「風のウイルスを洗い流すなら、鼻うがいも効果的だけど、女の子

は抵抗あるかな……」

「鼻うがい？」

「鼻から塩水を入れて、口から出すうがい法」

想像しただけで鼻が痛くなりそうだ。しかも鼻水とか混じった水を口の中に入れるのって気持ち悪い。

「痛くないですか？鼻うがい」

「失敗すればね。慣れれば痛くないし、すっきり気持ち良いけど」

「主任もやるんですか？」

「風邪ひいたかな？って時はやるね」

この整った顔で鼻から水入れる所とか想像できない。なかなかシユールで笑える。笑っちゃいけないのはわかってはいるんだけど、噴き出しそうでこらえた。

こういう時は強引に話題転換して、鼻うがいから離れるんだ自分。

「なんか主任健康法にやけに詳しいですね」

「社会人なら体調管理も基本だよ。子供みたいに具合が悪いからって簡単に休めないし、体調悪かったら仕事の能率も下がるだろう。」

病気になる前に予防、なったらすぐに回復できるように治療法。人によって合う、合わないあるから色々試してみた方がいいよ」

健康管理なんかしなくても大丈夫と思ってたし、風邪引いても気力でなんとかなるって思ってたけど、やっぱり10代と体力違うしな。主任のいうとおり、普段からの体調管理やいざという時に備えておくのは大切だ。

「それにね。健康法って話のネタになっていいんだよ。営業で取引先の人と世間話で盛り上がった。健康でいたいって気持ちに年齢は関係ないから」

「それも営業のコツですか？」

「そう。健康法だけじゃなく、色々話の面白いやつって思われた方が、顔や名前も覚えてもらえるし、仲よくなれるからね」

私は仕事の時は仕事って固くなりがちだけど、世間話やジョークで親しみやすいキャラクターって重要かもしれない。主任も仕事できるけど、物腰柔らかかで、さっきの飴をくれた時のちゃめっ気とか、鼻うがいの話とか、なんかただイケメンで仕事できる上司ってだけじゃなくて親しみやすいもんな。

「他に話のネタになりそうな健康法とかないですか？」

「私の営業時代だともう2年は前になるしなあ。健康ネタは流行あるからね。常にセンサーを使って情報収集してないと、話題に取り残されちゃうよ」

やっぱそこまで人に甘えるのはずうずうしいか。後でひそかに調べておこうと、私の心の付箋でチェックをつけた。

上条と菓子（後書き）

朝比奈が必死になってる時に、なに上条はほのぼのやってるんだ！
って感じですが

何も知らないんだし、会社でちょっと尊敬できる上司ができたって
感じですね

健康ネタって職場で盛り上がるネタだったな

そしてそんな自分を年取ったな自分っと思うようになった

朝比奈と共犯

今日の理子との待ち合わせ場所は、オシヤレなカフェバーだった。アイツに任せると、どれだけたかられるかわからないので、今日は朝比奈チョイスだ。落ち着いた雰囲気話せるし、インテリアやメニユーも女の子好みのデートスポットだ。

なのに理子は不満顔だった。

「オシヤレとかいいからもっとつまみを充実させなさいよね。しかもここお酒甘いのはっかりじゃない。芋焼酎とか置いときなさいよって感じ」

『類は友を呼ぶ』という諺があるが、さすが上条と仲いいだけあって、色気より食い気かこの女は。朝比奈は酒を飲む気がなかったので、パスタセットですませた。理子はナッツ類などをつまみに色々なカクテルに挑戦している。

カクテルって意外にアルコール高いし、ちゃんぽんして悪酔いしないか？と思つたが、とりあえず情報交換さえすんでしまえば、帰りは置いて帰ればいいかと、かなり投げやりだ。

「彩花もねえ。だいぶ懐柔されてるわよ。この前昼ごはん菱沼と一緒に緒だったし、給湯室で二人が話しているの見かけた人間もいるみたい。このままじゃ、二人の仲が噂されるのも時間の問題ね」

状況は最悪だ。菱沼に懐柔されているのも危険だが、上条に不倫の疑惑でもかけられたら、上条の今後の会社内での評価にも関わらしかも上条は僕という婚約者がいる事になつていいるから、婚約者がいるのに不倫をするなど、そうとうなイメージダウンだ。そこら

へんを察して上条が菱沼から手を引いてくれればいいんだが。

「で？そっちはどうなの？」

理子の質問に朝比奈はどこまで話すか迷った。工商事の不祥事という貴重な情報源を簡単にこの女に渡してしまっていないのか？完全に信用できるとはいいがたいやつだし、こういう情報は知っている人間が少ないほど価値が高いものだ。

しかし会社内部の調査を朝比奈が出来ない以上、理子の力は必要だ。せめてこの情報を有効活用できないものか？

「いい情報が入ったよ。貸しでいいなら話すけど？」

「何よ。こっちは色々協力してあげてるのに」

「それだけでかいのが釣れそうだって事。食事程度じゃ売れない」

「何をすればいいの？」

僕の真剣な口調に、理子もふざけた態度をやめて鋭い視線を投げかけた。大きな情報という餌と要求されるだろう仕事の釣り合いが取れるか、図りかねている様子だ。

「秋山玲奈の給与振込先の金融機関と支店名あたり、まだ社内に残ってるだろう。それを調べてくれないか？」

理子が息を飲むのがわかった。察しの良い彼女はこれだけで何があったのかわかったのだろう。まだ十分に残っているカクテルを思いつき飲み干すと、理子は僕を睨んだ。

「それ思いつきり犯罪だし。人に危ない橋渡らせて自分は高みの見

物？」

「まさか。秋山玲奈の口座がわかったら、過去の金の動きを僕が調査するつもりだよ。まともな手段で入手できない情報だけだね」

「つまり共犯って事ね。報酬は？」

「工商事が揉み消した事件の全貌。上層部を脅す切り札になるんじゃない？」

「冗談じゃない。やばすぎる情報をもつてたら、かえって危険分子とみなされて消されるのよ」

「すでに君なら、会社に目を着けられるような情報の一つや二つあるだろう」

僕達はしばらく無言で目をそらした。互いに自分の利益と相手の思惑などを図って計算に入ってる。感情じゃなく打算で動く人間は楽だ。前もって相手を動かせるだけの切り札を用意しておけば、たいてい計算どおりに行く。

僕は小出しに『中沢出版』でつかんだ情報を説明し始める。

「秋山の金周りのよさと、財務部での不審な金の動き。これって会社が共謀しての裏金作りというより、個人の業務上横領かなって思うんだけど」

「確かにありえるけど、財務部の平社員が横領って可能かしらね？」

理子の冷めたつつこみが引っかけた。朝比奈も会社勤めをした事はないから、業務上横領が可能かどうか、実情は知らない。

「財務部って会社の金を管理する部署だろう。確か過去のニュースでも財務部の人間が業務上横領した事件あったと思うけど」

「過去の事件の犯人はたいてい上の方の役職クラスの人間よ。お金を管理する部署なんだから、上からの監視は厳しいし、現金を直接扱うんじゃないでデータでやり取りしてるだけでしょう。目立たぬように少しづつでも引きだすの難しいと思うわ」

「そうなのか」

「いっそ、営業が接待費の名目で個人の飲食代を経費扱いにしたり、総務が業者に不必要に発注かけてバックマージンもらったりする方が楽かもね」

確かに他の人間にわかりづらい所で小さい犯罪を繰り返す方がリスクは小さい。だとすると……。朝比奈の中から一つの考えが浮かび上がった。

「秋山の上司は菱沼だったわけだね。当然部下の監視もしてただろうし、その菱沼が協力してたら業務上横領はやりやすくなるんじゃないか？」

理子も僕とほぼ同時にその推測にたどりついたようだ。瞳を好奇心の色で輝かせている。

「業務上横領は企業が被害者の犯罪だけど、不祥事を起こすような体制や人材がいたという事は企業のマイナスイメージよ。被害額が小さいなら表沙汰にせず、裏で交渉するでしょうね。不倫の末の退職と左遷人事の方が会社の体面は守られるわ」

「二人が共犯なら、会社の不倫問題にして情報統制も納得だね」

まだ推論だがかなり確率は高い。後は裏付けをとればいい。さてこの情報をいかに利用するか。僕達は同時に嫌な笑みを浮かべた。

朝比奈と共犯（後書き）

不正に対する事件ってどうなんでしょう？

会社の規模とか体制によっても違ってくるとは思いますが

フィクション小説内なので嘘・間違いはあると思います

あまり本気にしないでください

上条と距離

給湯室での会話が他の人間に見られていたらしい。数日後、噂を聞きつけた理子が昼休みに私を急に呼び出した。

「彩花と菱沼主任が最近仲がいいって噂になってるよ。少し主任と距離を置いた方がいいと思う」

いつになく真剣な目で見つめられたが、私は人にどう噂されようが平気だ。ただ目の前の友人に心配させているのは申し訳なく思う。

「心配かけてごめんね。でも私と主任はただの上司と部下だし。何にもない事は自分自身がよくわかってるから、どんな噂たてられても平気だよ」

「本当かわからないけど、菱沼主任は不倫の噂があつた人だよ。上条が平気でも周りの人間が勝手に勘違いして、上層部に睨まれたら出世も会社員生活もだめになるかもしれないんだよ。彩花は菱沼主任と心中する気？」

私は自分がこの会社に入った目的や夢の事を考えた。それらがかなわなくなるかもしれない現実が苦しくなる。人々の悪意に流されて、翻弄されて、何度そんな思いを味わえば、夢へと辿り着くんだろう。

でもしかたないと飲みこめるほど、私は大人じゃなかった。

「人の噂に左右されて、困ってる人を見捨てるなんて私らしいと思う？」

そうだ。ここで菱沼主任と距離をとって、自分の身の安全を考え

るなんて私の性格に合わない。そんな事してまで出世なんかしたくないって思ってしまう私はまだまだ青いのだろうか。

理子は困ったように眉をひそめて、大きくため息をついた。彼女なら私の気持ちをわかってくれるだろう。

私を説得するのを諦めてくれると思っていたのに、彼女から反論が飛び出した。

「主任のために彩花は噂なんてされてもいいと思っっているかもしれないけどさ。それって本当に主任のためになるの？」

「……どういう事？」

「主任は部下との不倫の噂があつて左遷された人なんだよ。もしまた同じ様な噂があつたら、今度は左遷どころかクビの可能性だってあるって事」

私はなんでこんな当たり前の事に気付かなかつたんだろう。自分がひどく言われる分には構わないと思つてた。皆が敵に回るなら、私はそばで主任の味方でいようと。

なのに、その私が主任の足を引っ張っていた？

すでに私と主任の仲の良さに疑いを持っている人間がいるなら、それを噂にどれほど誇張されねじ曲がつていくか。

かつて経験した噂の恐怖を思い出して背筋が凍る思いがした。

「ちよつとは冷静になった？」

理子の言葉に私は力のない返事しか返せない。

「……あり、がとつ……」

彼女の言う通り私は今回冷静さを欠いていた。周りの理不尽な態度に腹をたてて、主任への気遣いを履き違えてた。

「元気だしなよ。彩花らしくないよ」

「うんそうだね」

「あっそうだ。これあげる。この前行った雑貨屋でいいの見つけたんだ」

そう言っただけで理子を取り出したのは携帯ストラップだった。シンプルな黒をベースに小さな牡丹の飾りがついた、甘すぎない渋い感じのデザインだった。

「彩花の仕事がうまくいくようにお守り」

私を心配して元気づけようとしてくれる友人の気遣いが嬉しい。

「ありがとう理子」

私はストラップを握りしめ、今後の事に色々悩みながら仕事に戻った。

それから私はわざと主任との距離を取った。二人つきりにならない。自分から主任に話しかけない。

周りから見られてどんな憶測が飛び交うかと思うと、主任の前で笑顔一つ作れない私が出た。ただ仕事をこなし、心を閉ざして殻に閉じこもった。

周囲の人間の態度や、噂の変化を観察して、不自然にならない程度に適度な距離を保つ。

人の噂も七十五日。どうせ春の正式配属で私は総務部でなくなる

可能性が高い。それまで避けていけば自然と変な噂も消えてなくなるだろう。

私の態度の急変ぶりも、周りの人間は冷やかに見つめるだけだし、主任も仕事以外で近づいてこなくなった。主任はこの急変ぶりをどう思っているだろう。噂に惑わされて距離を取る他の人間と同じかと、私に失望しただろうか。これで主任の疑惑が晴れるなら、疑われてもかまわないと思っっているが、それでも主任の姿を見るのが怖かった。

穏やかに微笑みながら、あの寂しそうな背中を見せてるんじゃないだろうか？

理子の忠告を受けてから1週間ほどたった。急ぎで財務部に備品を届けに行った帰り道、うっかり耳にした陰口。聞かなかつたふりをしてすぐに立ち去ればよかった。でもその内容に足を縫いとめられたように動けなかった。

「菱沼が懲りずにまた総務の女に手を出したんだって、しかも今年の新人の中でも評判の美女だったさ」

「バカだなアイツ。っていうか、奥さんなんで離婚しないの？確か奥さんもいいところに勤めてるから、生活の心配ないんだろう？菱沼となんか慰謝料がつぽりもらって別れりゃいいのに」

「夫の浮気に一度くらいは大目に見ても二度目はないだろう。今度こそ別れるんじゃないね」

「最近お気に入りその新人と距離を置いてるらしいけど、離婚調停に入ったからじゃないの？」

「そういう計算高い事しそうだよな。無駄なあがきだと思っけど」

名前も知らない男達の、笑い声が私の中でこだます。何も知らない癖に、主任をバカとか計算高いとか、怒りに震えて思わず怒鳴りこみたくなった。

そんな私を引きとめたのは肩に置かれた手だった。

慌てて振り向くと主任がいた。悲しい目で私を見降ろしながら、首を横に振る。陰口なんて放っておけと言ってるのだろう。声を出さずに主任は口だけ動かす。

『いつものことだ』

そう言っていた。主任はとっくに諦めている。噂にあらがう事の無駄を知っていて、ただ黙って耐えている。自分の無力さに惨めな思いで私は唇を噛みしめた。

上条と距離（後書き）

理子の「菱沼のために距離を置いた方がいい」という説得は朝比奈の入れ知恵です

理子はまだ彩花と仲よくなってまだ日が浅いので、扱い方がまだわかってない

だから「彩花のために言ってる」というスタンスで説得してて失敗した

という話を前回入れたかったのだけど、入れるタイミングがなかったのがきで言い訳してみました

朝比奈と調査

秋山の口座情報は数日で理子から届いた。この異常な早さは特別なコネでもあったのか、それともあらかじめ知っていたのか。やはり油断ならない女だと思った。

朝比奈も負けないうらい急ぎで仕事に取り掛かった。口座のある支店の女性銀行員に近づいて、親しくなり、入出金情報入手。これまでの過程は約1週間。

今までにない急ぎ仕事だ。こういうやり方だと、後々別れ話でもめて面倒なので、いつもはやらない。だけど今は時間が惜しい。

もちろん上条には今回の件は秘密だ。上条のためにしてるんだし、浮気のカウントには入れてほしくないな。

偶然、秋山と同じ支店に真野も口座があったので、ついでに情報を引き出しておいた。個人情報漏らしている時点で一人も二人も同じとあっさり引き出せた。

真野の情報は田辺に流した。秋山とホストの情報をリークしてもらった借りがある。早めに返しておかないと、あの女にどんな難癖つけられるかわからない。

秋山のホスト通いが始まったのが4年前。その頃までの秋山の口座は堅実で、定期預金以外にも普通口座に十分な貯金があった。しかし4年前から徐々に減り始め、定期も解約して半年ほどで資金が底をついた。

そして数カ月後不自然な入金が始まっている。給料日とは別の日に数十万単位の入金。おそらくこれが横領の始まった時期とみてい

いだろう。そしてそれが今年の春頃まで続いている。

その後自己都合退社をしている所から、会社に横領が発覚し内々で処分されたのだろう。退職後、秋山の口座から月に1度3万円づつ振込されている。おそらく横領した金の返済を分割でしているのだろう。

秋山の口座の入出金記録は業務上横領を行っていたらと十分に推測できる内容だった。しかし予想より横領の開始時期が早すぎる。開始が3年程前ということは、その頃菱沼はまだ営業にいた。最初に立てた仮説では、菱沼が共犯で秋山の不正を見逃していたと思っていたが、他部署にいた菱沼が協力できるはずがない。

ではなぜ菱沼まで左遷人事されたのか？秋山との不倫が事実で、横領の事実を隠ぺいしようとした会社にそれを利用して巻き込まれた？

しかしホストにはまっている女が、同時に不倫だなんて危険な恋愛をするだろうか？

だからといって不倫がデマだったら、理不尽な左遷人事を菱沼は大人しく受け入れるだろうか？

朝比奈は直接会っていないが、物腰柔らかな印象とは裏腹に仕事はできる男だと言う話だ。営業成績トップを取るなら、ある程度のはたかかさや計算もできないと無理だろう。

そう考えると全くの濡れ衣だった場合、簡単に会社の命令に従わずに、影で取引とかしてるのかもしれない。

そういえば営業から財務への移動も不自然だったな……。そこまですべてある一つの推測が頭によぎった。証拠は何もない。詳細もまったく不明。ただもしそれが事実なら……。

「上条が危ない……」

上条に電話したが繋がらない。僕は慌てて理子に連絡をした。

『何？突然。こっちは給料日後の花金で、キープ彼氏とデート中なんですけど』

『上条が今どこにいるかわかるか？』

僕の焦りが声に出たのだろう。理子も浮ついた声を引っ込めて、真剣な口調になった。

『確か今日は溜まった仕事と調べ物したいからって、サービス残業するって言ってたわよ』

『菱沼は？』

『アイツは部下が仕事手伝わない分一人で仕事抱えているから、いつも残業……』

そこまで言って理子も事態の危うさに気付いたようだ。

『私みたいにたいいていの社員は、週末の金曜日で残業を嫌がるわ。会社も残業代カットののために、早めに上がるように推奨してるし。特に今総務はそれほど忙しい時期じゃないから、わざわざ残業する物好きな人間なんて他に……』

『上条の電話に繋がらない。もしかして二人は一緒かもしれない。菱沼が上条を落としにかかったのだとしたら、上条が危ない』

僕の危険な発言に理子が息を飲むのが聞こえた。

『何かわかったの？上条が危ないってどういう事』

『まだわからない。ただ今回の件は僕のせいかもしれない。上条は何も知らずに巻き込まれただけで……』

『工商事の人間じゃないあなたのせいで、なんで上条が狙われなきゃいけないのよ』

『詳しく話している余裕はない。まだ会社に残っているかもしれないし、上条の居場所探し手伝ってくれないか？』

理子は軽くため息をついて、頭を素早く切り替えた。

『私のデートを邪魔したお代は高くつくわよ』

『後で菱沼にたっぷり払わせるさ』

『そこはかつこよく、自分がいくらでも払うって言っときなさいよ』
『理子さんの追加請求をいくらでもなんて、怖い事言っわけないだろっ』

軽口をたたき合うのは、お互いに焦りを沈めて事に当たりたいら。焦って動けば碌な事にならない。

一旦電話を切って少し待つ。その間に上条が行きそうな所を考えたがすぐに無駄だと思った。上条の親父趣味な店は会社では秘密にしているし、上条の性格と上司である菱沼の関係から考えて、行く場所は菱沼が決めるだろう。

だが菱沼が行きそうな場所など心当たりはない。

すぐに理子から電話がきて、二人は会社を出た後だった。しかも守衛の話によれば二人一緒に会社を出たらしい。

朝比奈は心の中で悪態をつきながら、上条の居場所を探し始めた。

上条と残業

2月10日金曜日。今日は給料日で金曜日。月の初めて仕事に追われる事もない社員達は、残業も早めに終わらせて、次々と職場を後にしていく。上条が残っていた仕事をこなし、勉強のため色々過去の記録を調べていたら、気づけば9時を過ぎていた。

もうこんな時間かと驚いて辺りを見渡すと皆いない。正確には一人だけ残っている。菱沼主任だ。

一人黙々と仕事をこなしていた主任が、私の視線に気づいたのか、パソコンから目を話さずに言った。

「どうしたの上条さん。もう仕事ないだろう。早めに帰った方がいいよ」

「主任は？」

「もう少しで区切りがいいから、そこまで仕上げたら私も帰るよ」
区切りがいい、という事はまだ仕事が残っているという事だ。週明けの月曜日は会議があったり何かと忙しい。今のうちにある程度終わらせておきたいのだろう。

「私でよければ手伝いますが」

「大丈夫だよ。私に関わっていると上条さんが迷惑かかるし」

「迷惑だなんてそんなことないです」

そこで初めて主任は顔をあげて私の顔を見た。いつもの穏やかな笑顔とは違った真剣な表情は私のわずかな嘘さえも簡単に見抜かれてしまいそうだった。

「私のせいで何か言われたり、されたりしたんじゃないのかな？最近上条さん笑ってる所見なくなっただよ」

主任の言葉が私に突き刺さる。私が態度を変えたのを、私が何かされたからと思ってる。自分の事より私の事を気遣ってくれる主任の優しさに涙がでそうになる。

「違います。私は……私のせいで主任が悪く言われるのが嫌で……」

「ああ。この前の財務部で聞いたみたいな事？私は気にしてないけど、上条さんは困るよね」

他部署まで広がってる私達の噂、主任の悪口を気にしてないと言いつ切る主任。

「あの……私のせいで、噂のせいで奥様と何か気まずくなったりとかないんですか？」

「うちは大丈夫だよ。お互い忙しくて、最近話してないから噂とか何も知らないんじゃないかな。まあ。夫婦で会話がない方が問題かもしれないけど」

どこか他人事のように語る主任は、まったく寂しそうに見えなかった。奥さんと話ししなくなって寂しいとも思わなくなるほどののか？職場でもつらい思いをしているのに、家庭でも安らげないなら、この人の安息の場所はどこだろう。

「上条さんはいいの？週末の夜なのに仕事してて？確か婚約者がいるんだよね？変な噂たてられて、婚約者さん心配してるんじゃない？」

「私も主任と同じです。最近会話してないというか、会ってないの。向こうは何も知らないと思います」

朝比奈の事を思い出して唇を強く噛みしめた。アイツが知ったら絶対に放っておいてくれない。就職の時みたいに横からやってきて、

何もかもうまくこなして私に手出しもさせてくれない。アイツが私を心配してくれるのはわかるが、いつまでも守られてばかりの子供じゃられない。

今回の事は朝比奈には絶対に言わない。だから今は会いたくない。アイツに隠しきる自信がない。

主任もやっぱり奥さんに余計な心配かけたくないのかな。いつも残業ばかりしてるのも、それを言い訳に奥さんから逃げてる？

前の財務部時代の不倫疑惑や左遷人事の事はどう説明してるんだろつ。

そもそも本当に主任は不倫なんかしてたのか？目の前の優しくして真面目そうな人がそんな事するとはとても思えなかった。

「主任が噂を否定しないのは言っても無駄だからですか？それとも事実だからですか？」

思わず口からこぼれ出た言葉は、あまりにもストレートすぎて慌てた。主任も苦笑していた。

「直球だね。そんなにまともに聞かれたの初めてだ」

「すみません。つい、口がすべってしまって……今の聞かなかった事にしてください」

「そうだね。男女の仲って相手の考えもあるからね。私の一方的な言いぶんではないなら話すけど？」

「一方的な言い分？」

「そう。上条さんが噂の不倫相手の女性と会う事はないだろうから。

私が一方的に彼女を悪者にして言い逃れもできるだろう」

「主任はそんな事する人じゃありません。私そこは信じてますから」

「ありがとう。上条さん」

嬉しそうに穏やかな微笑みを返されて、少し私は動揺した。主任のこういう笑顔反則だ。朝比奈もいつも笑ってるけど、アイツは偽笑いだってわかってるから、むしろへらへら笑われると腹が立つのよね。

「10分待つててくれる？」

「……はい」

そういえば主任はまだ仕事終わってなかったのに邪魔してしまった。区切りのいい所まで終わらせて、落ち着いて話してくれるのだろう。きっかり10分後PCをシャットダウンして、机の上の書類を片付け始める。

「さて、いこうか」

「へ？どこですか？」

「もう10時近いよ。お腹すいてるだろう。なんか食べに行こう。それとも上条さんは飲みのほうがいい？」

「主任！そんな奥様がご飯作って待つてたりとかは……」

「しないね。うち共働きだから、基本自分の事は自分でやるし。今日は妻が接待で遅くなる予定だったから、一人で食事する予定だったんだ」

「でも……噂が……」

「やましい事をするつもりはないし、堂々としてればいい。上条さんが嫌ならやめるけど」

「嫌じゃないです。一度上司とさし飲みとかしてみたかったです」

「熱燗で？」

「はい！」

「じゃあ行くつか。飲みながらゆっくり話そう。噂の事とか、営業の話とか」

「上司とさし飲みは仕事のコツとありがたいお説教が定番なんですよね」

「おじさんの鬱陶しい説教されたいの？」

「はい」

主任は大笑いしながら「やっぱり上条さん渋いなあ」と言った。

上条と菱沼

菱沼主任に連れられて入ったのは、小さな小料理屋だった。カウンター席のみで、女将が一人で接客している。いつも私が行く酔っぱらい親父の溜まり場みたいな騒がしい所より、落ち着いた雰囲気だ。

この漬物美味しいな。壬生菜と聖護院大根の漬物、えび芋の田楽、九条ネギとマグロのヌタ。ここは京都料理の店なのかな？美味しいし、私好みな渋い料理だけど、味付けがどうにも上品すぎて居心地悪い。

朝比奈が作る料理にも似てるけど、こっちの方がプロの味って感じで洗練されている気がする。

そういえば朝比奈以外の男性と2人で食事や飲みって初めてだよ。ヤツに主任の話をしていないせいかなんか後ろめたい。

いや、これは上司と部下の飲みニュケーションで、何もやましい事ないし。

「どう？上条さん気に行っただ？」

「美味しいです。でも何だか高級そう」

「そんなことないよ。私は一人でもここに良く来るし。懐かしい味なんだ」

「主任つてもしかして、京都出身ですか？」

「そう。だから京野菜とか見つけると、ほっとする」

主任の言葉に訛りはないけれど、ゆつくりとした話し方や、穏やかな表情は、京都人のイメージにぴったりだ。着物とか着たら似合いそうだな。

「私も米とかお酒とかつい新潟産買っちゃいます」

「ああ。上条さんは新潟出身なんだ。美味しい地酒多いよね。残念ながら、ここは京都の地酒ばかりなんだけど」

「京都の地酒飲んだ事ないから嬉しいです。やっぱり土地柄でしょうか。なんだか上品な味」

「口当たりがいいので、思わずぐびぐび飲んでしまいそうなのが怖い。」

「上条さん飲みっぷりがいいね。いくつか頼んで利き酒してみようか」

「嬉しいんですが、あの……」

主任がお銚子を持って進めてくるので、ついお猪口を差し出してしまつが、こんな美味しい料理とお酒に舌鼓打ってる場合じゃない。色々話を聞くためについてきたんじゃないか。

このままだと真面目な話をする前に、酔ってしまいそうだ。

「ああ。ごめん。話があつたんだね」

そう言いながらも主任はお猪口をグイッとあけた。いい飲みっぷりだ。もしやもう酔ってるのか？まあ楽しい話ではないから軽く酔つた方が話しやすいのかもしれない。

今度は私が主任のお猪口に注いだ。飲みすぎないように気持ち少なめに。主任は注がれたお猪口をこぼさないように器用に手の中で転がしながら話し初めた。

「財務部に異動したばかりの頃、秋山君という女性がいてね。仕事に真面目で大人しい子だったんだけど、周りになじめず孤立しててね、見てて心配になったんだ」

そういえば理子が言っていた、財務部で辞めた女子社員の名前が秋山と言った気がする。

「それで積極的に話しかけて、悩み相談とか受けているうちにね。妙な噂をかけられるほど仲よくなりすぎた。でも不倫とかではないよ。彼女も職場の人間関係に悩んでいたみたいで、結局辞めてしまったんだ」

「それじゃあ、主任全然悪くないじゃないですか。なんでこんな噂立てられたり、部署移動とか左遷人事みたいなの……」

言ってしまったって慌てて私は口をふさいだ。本人を目の前にして左遷などと言っただけじゃない事を言ってしまった。しかし主任は特に気にすることなく微笑んでいる。それでもなんだか気まずい。

気づけばまたなみなみと私のお猪口にお酒が注がれていて、気まずい空気から逃げるようにお酒に口をつけた。つまみの漬物を一口、お酒を一口などとしている内に、すぐお猪口が空になる。

そろそろお銚子空じゃないかな？新しいの頼まないと思っていたら、良いタイミングで女将が新しいお銚子を出してくれた。適度に熱い燗だ。主任が事前に頼んでいてくれたんだらうか？こういうのは部下が気を利かせなきゃいけないのに、申し訳ない。

新しくきた燗を主任のお猪口に注ぐと、注ぎ返される。今日はいつもよりペース早いせいも、緊張してるからか、酔いが回るのが早い。この辺で辞めといた方がよさそうだと思うのだが、主任は涼しい顔で飲み続けるので、私も辞めるわけにはいかない。

「部署移動は私から会社に願い出たんだ」

「どうして……」

初めて聞く言葉に私は首を傾げた。

「秋山さんと私の噂はひどくなるばかりで、周りとの摩擦がひどくて仕事にならなかつた。今の総務部よりもっと状態は悪かつたんだ。私を庇ってくれる人と責める人で対立が出来たり、私一人が我慢したり無理してもどうにも回らない程で……申し訳なくなつてしまつてね。新規一転新しい部署に移動すれば、少なくとも私が抜けた財務部の人間関係は改善されると思つたんだ」

主任は自分一人背負いこんで、会社を守り、皆の仕事が上手く行く道を選んだんだ。覚悟して茨の道を歩む主任の背中には寂しげでも、強くかつこよく思えた。

「私迷惑ですか？」

「どうして？」

「私が主任を庇えば庇うほど、周りの人と軋轢ができて、主任はそういう事にならないために移動したのに。私がしてるのはただの邪魔……」

「そんな事はないよ上条さん」

今までカウンターに向かっていた主任が突然私をまっすぐに見つめた。真剣で、酒のせい少し熱を帯びた瞳がますます色っぽさに磨きをかけていて、まともに顔を見られない。目をそらして、お銚子を取ろうと伸ばした手に主任の手が重なつた。

思わず見上げたら、主任の眼差しに縫いとめられて固まつてしまつた。

「上条さんのおかげで、一人じゃないと思える。本当に心強い味方だよ」

酔いが回ったせい、重ねられた手と熱っぽい瞳と色っぽい囁きのせい、私の心臓はものすごい勢いで動いていた。

まずい。ここで酔って、こんな雰囲気のまま主任といると、不倫が噂じゃなくなってしまいそうで危ない。でも、体が固まって動けなかった。

何か言おうと思って言葉が出てこない。男に言い寄られる事はたくさんあったけど、今まで名前も知らないうちにすぐ振ってしまっていたから、こんなに親しくなった人をおかす方法がわからない。男性経験のなさが裏目に出た。

「上条さん酔ってるの？そろそろ出る？」

主任から助け舟を出されて、やっと呼吸ができた。私が一息ついている間にさっさと会計を済ませた主任が立ちあがって私に手を差し出した。

私はその誘いを断り、自力で立ちあがって歩き始めたが、少しふらついてしまう。

「無理しない方がいいよ」

店の扉を開けながら主任は当たり前のように私の腰に手をまわして支えた。

まずい。これはまずいでしよう。こんな所会社の人間に見られたら。そう思うのだが、まっすぐに歩けない私は主任に支えられているようなもので、腰にまわされた手を無理にほごこうとすれば転びそう。

2月の寒い空気に一気に酔いも醒めそうで、思わず体が震えた。

「寒い？大丈夫？」

主任が空いた手を私の背中にまわそうとした。このままでは完全に抱きしめられるような状態だ。どうしてですか主任？私達上司と部下じゃないんですか？こんな事、一線越えてます。

それとも覚悟した茨の道でも寂しいのか。私みたいな新人にすがっってしまうほどに……そう思うと強く抵抗できずにどうしていいかわからなくなる。

混乱した私の心を現実に戻してくれたのは、憎たらしくも懐かしいアイツの声だった。

「上条！」

声かした方を向けば朝比奈がそこにいた。

朝比奈と菱沼

今にも上条を抱きしめようとしている菱沼の姿に、朝比奈は怒りが暴走していた。いつもの余裕の愛想笑いなどできそうにない。

僕の怒りさえも余裕の笑みで流す男の姿が腹立たしい。その男の腕に支えられ、上条は真っ青な顔で固まっていた。

「上条がご迷惑をかけたようでどうもすみません」

いちようこいつは上条の上司なわけで、いきなり喧嘩売ったら上条の立場がない。それにまだこの男の化けの皮を剥がすまでは、慎重に行動しなければ。そう理性が感情を押し付けていた。

僕は上条を自然に引き寄せようと手を伸ばしたが、菱沼が上条ごと引っ張ってかわす。

「誰かな？上条さん」

しらっとぼけてるのか？理子から婚約者いるって話は流してもらってるし、お揃いの指輪までしてて、この発言でわからないわけがない。

これは挑発だ。わざと僕を怒らせて僕と上条の関係を悪くさせようとしている。それに上条を押さえていると僕に見せつけたいのだろっ。

今の上条は人質なのだ。

上条は菱沼の支えから抜けだそうとしていたが、だいぶ酔っつい

るのかうまくいかなかった。僕と菱沼を交互に見つめて困ったように言う。

「主任、私の婚約者です」

「そういうことです。上条はだいぶ酔っているみたいですし、僕が責任を持って彼女を送り届けます」

菱沼は微笑を浮かべて上条に言った。

「なんでこんなにタイミング良くここに彼現れたのかな？上条さん連絡してないよね」

上条もその言葉に少し体をこわばらせた。

「上条さんは今日飲みに行く決めてからずっと一緒に、携帯いじった様子もなかったし、この店も私が選んだから上条さんは知らないはずだよ。ということは上条さんか私を見張ってたのかな？なかなかいい趣味してるね」

既婚者のくせに人の女に手を出そうとしているのに、よくもまあその女の婚約者相手に言えるもんだ。怒りを通り越してあきれくらないだ。しかし朝比奈にとって痛い所ではあった。

ここにこれたのは、理子が事前に上条に渡していたストラップに探知機をつけてたおかげだ。理子に頼んで上条の行動を監視していたわけだが、それがばれれば上条と理子の関係も問題になるし、今後理子に情報を流してもらえなくなる。理子の関与を絶対に言う事はできない。

上条は不審な目で僕を睨んだ。

「どういう事？朝比奈」

いつもなら気の強い彼女の鋭い瞳は、酔っているせいかもしれない。いつもよりのぼんやりとしていた。それでも彼女が僕に不信感を抱いているのはわかる。

「感？上条探知機が僕にはついてるから」

冗談まじりで上条を挑発した。いつもなら怒って殴りかかるなりして、僕に向かってくるはずだ。菱沼から離れて僕の方に来てくれるなら殴られたってかまわない。

案の定上条が怒って一歩前へ踏み出したが、菱沼が引きとめた。

「上条さん。さっき婚約者には私の話はしてない。知らないはずだ。って言ってたよね。でも彼知ってるみたいだよ。だってさっきから一度も私の名前も何者かも確認してない」

上条は踏み出した足をとめ、僕への不信をますます強めたような目をしていた。

本来なら婚約者を既婚者上司がお持ち帰りされそうになった、僕の方が立場が強いはずなのに、巧みに上条にささやいて僕の評価を落とそうとしている。

形勢は僕の方が悪い。菱沼の狙いは推測出来ているが、状況証拠に基づく推論でしかない。この男相手に弱いカードで攻めてもかわされて、上条の信頼を損ねてしまう可能性が高い。

「朝比奈ずっと私の事見張ってたの？それで主任の事も知ってたわけ？」

彼女の責めるような発言に、どう答えてよいか困って沈黙してしまった所に、携帯の着信があった。確認すると理子からの電話だった。

「失礼」

二人に断りを入れて強引に電話に出た。電話の間、答えを引きのばせるし、たぶんこの電話は追加情報の援護射撃だ。

『彩花は見つけられた？』

「ああ、すみません。今ちよつと立てこんでまして」

僕の返事で理子はすぐに状況を理解したようだ。余計なあいさつなど省いて直接本題を切りだす。

『言つてた通り、菱沼が財務部に異動になった頃、入れ替わりで吉本係長が他部署に移動してるわ。5年ほど前、吉本係長と秋山も一時期噂になったみたいね。その頃吉本係長は結婚してなかったから、問題にはなつてなかったけど』

僕の推論を裏付ける有力情報に素直に感謝した。

「わかりました。ありがとうございます。夜遅くにわざわざすみません」

『本当よまったく。残業料金、後で請求するわよ』

「もちろん。今度埋め合わせはさせていただきます。失礼します」

僕は携帯を切りながら、形勢逆転を悟って思わず笑みがこぼれた。その笑みに上条の顔が引きつる。たぶん僕の黒い企みが漏れ出しているのを、長年の付き合いで感じ取ったのだろう。菱沼はまだ気づいていない。

「すみません。ちょっと学校関係から電話があつて、もう解決しましたから。それで質問は菱沼豊さんを僕が知つたのか、上条を見張つてたのかという事でよろしいでしょうか。答えは両方YESです」

開き直つた僕の態度に、初めて菱沼の動揺が見えた。僕は余裕の笑みを浮かべてゆつくりと二人へ近づく。

「婚約者とはいえ、本人に承諾もなく見張つたり調べたり、ストーカーみたい……」

「僕には彼女を守る権利があるんですよ。あなたみたいな男からね。なにせ一様『婚約者』ですから。虫よけぐらいはね」

上司を虫呼ばわりされて上条がまた怒つて僕に向かった。それを狙つて上条に言った。

「知つてた？上条。この男の本命は僕なんだ。君は僕の人質なんだ」

僕の不穏当な発言に上条の表情がこわばる。菱沼はまだ冷静に僕の言葉を受け止めていたが、彼女は僕の事をよく知っていた。普段の人当たりのよい演技も、感情だけで突っ走つて攻撃するような人間じゃない事も。僕が愛想笑いの仮面を脱いで、腹黒な素顔を見せる時、確実に相手の急所を握っている。

「人質？何を言っているんだ？君は。上条さん、あまり彼の言葉は信用しない方がいい」

「上条も秋山玲菜と同じ様に籠絡できると思っただけじゃないか。上条をなめないでください。彼女はそんなに簡単なバカな女じゃない」

僕は宣戦布告と同時に上条の腕を掴んで、強引に引き寄せる。僕の開き直りに動揺した菱沼の手は緩んでいて、上条の体から離れた。左腕の中におさまった上条が、戸惑ったような表情をしているのが、珍しくて可愛い。

本当ならこのまま攫って行きたい所だが、上条の今後のためにしつかり釘をさしておかなきゃ。僕は上条に耳元で囁く。

「少しだけ説明する時間をくれないか」

上条の瞳が瞬いた。それはYESのサインだった。

上条と朝比奈

上条はわけがわからなかった。

腹黒メガネな悪友を信じればいいのか、信頼できる上司と思っていたはずの男を信じればいいのか。店を出た直後はだいぶ酔っていたが、寒い外でやり取りしている内に少し酔いが冷めてきた。

冷静になつてみると今日の主任はおかしい。噂になっている私を飲みに誘ったり、手を重ねたり、腰に手を回したり。寂しいからつい出来心でとか酔ったからなんて言い訳はきかない。さっきからの朝比奈を手玉に取っている主任は、十分に冷静で酔っているとは思えない。

かといって朝比奈が疑わしい行動をしているのは事実で、しかも何か企んでる。

判断するには情報が足りない。だから私は二人のやり取りを見ていることしかできなかった。

「僕はまだ例の一件も、秋山の事も何も上条に話してないんですが、いいんですか？ここで明かしてしまつて」

「何を知ってるのか知らないが、言いがかりに耳を傾ける気はないよ」

「僕は上条に貴方や会社への不信なんて持つてほしくないんですけどね。余計な事は考えずただまっすぐ走つてほしかった。でも僕が足をひっぱっていた」

朝比奈が足を引つ張っていたってどういう事？私は目で朝比奈に問うた。

「始まりは上条の内定取り消し騒動の時。覚えてる上条？僕が笹本部長に何か囁いて脅した事」

そういえばそんな事もあった。あの時何を言ったのか詳しく聞いてなかった。世の中には知らない方がいい事があるのは私にだってわかる。

「あの時僕はＩ商事にとって外部に漏れたら困るような情報を持っていた。だからそれをネタに脅して上条の就職を後押しできた。しかし、それで僕は目をつけられてしまったんだよ。会社にとってみれば、一新入社員の上条より、まずい情報を握っている僕の方が危険だ」

朝比奈の言っている言葉の意味がすぐにわかった。

「じゃあ私が朝比奈の人質ってそういう事」

「そう。僕が余計な事を言えば、君をクビにしたり、左遷したりできるわけだからね。僕も大人しくしてるしかない。そしてこの男は君の監視役なんだよ」

私が菱沼主任を見ると、彼はいつも通り微笑んでいた。いつもなら穏やかな微笑みと思っていたのが、今は不気味な笑みに見える。

「人質の君を懐柔して、僕まで飼い慣らそうとしていたんだ。まあ僕も上条もそんなバカじゃないけどね」

「そうだね。朝比奈君。その様子だと君はまた余計な事を知ってし

まっただらうね」

「ええ。あなたがなぜ財務部に急に移動になったのか、不倫疑惑の汚名を被って何をしようとしていたのか。あなたは工商事上層部の誰かのスパイだ。秋山とその上司の不正を調べるために送り込まれた」

不正。その犯罪的な言葉の響きに私は驚いた。秋山とその上司の不正を調べるために、わざと秋山に近づいて不倫の噂になり、その噂を利用して秋山を退社に追い込んだということか？

そして今度は朝比奈を押さえるために、左遷人事という名目で私と同じ部署にきて、また会社のために裏の仕事をしているのか。

「上条さん。君の婚約者はずいぶん想像力たくましいようだ。こんな妄想信じられる？」

主任の否定は声は柔らかだが目が真剣で、まるで獲物を射抜く狩人のようだ。私はここにいたってやっと確信した。ここは朝比奈を信じるべきだと。

「私は朝比奈の話で納得しました。そもそも左遷人事なら役職の降格だつてあるはずなのに、役職は据え置きで会社からの説明もない。公式記録ではただの移動です。ほとぼりが冷めたらまた出世だって可能ですよね」

私の言葉に主任は肩をすくめてため息をつく。急に主任の微笑み

に皮肉の色がまわりついてきた。

「上条さん。君は中途半端に賢くて、面倒な子だね。気付かなければバカで可愛い子だし、気づいても知らない振りをするのが本当の賢い人間だ。そういう爪の甘い所直さないと出世も営業も無理だよ」

主任の開き直った言葉は、朝比奈と同じくらいに毒を含んでいた。それでも上司の立場を崩さず忠告の振りをしつづけるのがずるい。

私が主任に同情して応援しようとしていたのを、全部わかって私を懐柔するのに利用しようとしていた事も、認めたくはなかったが真実の様だ。

会社の都合でこんな監視役つけられて、朝比奈に言われるまで何も知らずに懐柔されてた私は本当に爪が甘い。理子に何度も忠告されてたはずなのに耳を貸さなかった私は、本当に使えないただの新社員だ。

「私、菱沼主任と過ごした最近の日々を後悔してません。色々教わりましたから。一番大きな収穫は簡単に人を信用するなって事ですけどね」

私のささやかな反撃を、主任は笑った。大笑いして私の言葉を否定する。

「君みたいなお人よし、何度痛い目見ても無駄だと思っよ。不倫の噂がある人間と飲みについて、酔わされている事に気づかずにごんごん飲んで、そのままその彼がいなかったら簡単に流されてた。ただの尻軽でバカな女の子だ」

主任の言葉に私が動揺する事はなかった。言っている事は、その

通りだったからだ。私以上に過敏に反応したのは朝比奈だった。私を支えていた左腕がするりと離れた瞬間、朝比奈の全身からいまだかつて感じた事のない殺気が出ていた。

止めようとしても間に合わない程すばやく、朝比奈は主任と距離をつめ、右手の拳を叩きつけた。

突然の事に主任は身動きもとれず茫然としていた。彼の左頬をかすめ、後ろの壁に朝比奈の拳が傷を作る。主任が少しでも動いていたら当たって、シヤレにならない怪我をしていただろう。

朝比奈の脅しじゃない本気の怒りを見て、主任も皮肉げな笑みをひっこめて無表情になる。

「当てていたら傷害罪で告訴したのに。私なんて会社の捨て駒だ。私一人をつぶしても他の人間が上条さんを監視するだけだよ」

「わかってます。だからこれは警告です。これ以上僕を下手に刺激したら、貴方だけでなく、I商事すべてを敵に回そうと攻撃します。僕はすでに2つのカードを握っている」

「君の愛する女性を会社から追い出す結果になっても?」
「そんな事させませんし、そう簡単に引き下がるほど上条も弱くない」

主任はまた皮肉げな笑みを浮かべる。

「おてなみ拝見だな」

朝比奈の怒りをするりとかわして、主任は立ち去った。

私に背を向けたままの朝比奈が心配で仕方なかった。朝比奈は今まで私にどんな暴力を受けようと反撃しなかったし、怒った時も常に口で相手をねじ伏せる男だ。

一度柁木にたいして暴力をしていたのを見たが、あれは柁木を信頼していたからこそできた事で、感情に任せてよく知らない人間に拳を振うなんて……。

朝比奈が脅しても暴力を振った。その事実が私を動揺させた。朝比奈の背中も微かに震えていた。

私が簡単に人に騙されるようなバカだから、朝比奈は私を見張ってないと心配なんだ。そして何度だって私のために動く。それを繰り返せばこんな風にまた手を出させてしまうのだろうか。

そしてそのたびに朝比奈は暴力をふるった事を後悔するんだ。わたしのせいだ。

私は謝罪と朝比奈をなぐさめたくて、朝比奈の震える背中を後ろから抱きしめた。

朝比奈と上条

朝比奈はあまりにありえない事態に茫然としていた。

見下ろせば回された細い腕、背中に感じる柔らかな感触。白く華奢な手に自分の手を重ねると、冷え切って冷たいが確かにそこに手があつた。

夢や幻ではなく本当に上条に抱きしめられている。

驚きのあまりその前に自分のしでかしたことへの後悔や悩みが嘘のように消えてしまった。

「ど、どうしたの？急に」

自分でも声が上がっているのがわかる。こんなに動揺したのは初めてだ。

「ごめん。心配かけて」

上条の素直すぎる謝罪が信じられなくて、やっぱりこれは夢なんじゃないかと思う。それとも上条は具合が悪いのだろうか？酔ったからって抱きつくような癖はなかったよな？

「こんな寒い日に立ち話で風邪でも引いた？」

「なによ。私が素直に謝ったらそんなにおかしいの」

抱きしめられたまま、いつもの上条らしい不機嫌な声が聞こえてくる。やっぱり夢じゃなかったんだと実感できた。

この甘い空気のまま、二人の仲を急速に締められないかなどと邪念が生まれる。するとそんな事を考えたせいも、甘い時間は唐突に終わった。

上条が急に僕の右手首をつかんだかと思うと思いつきり引つ張る。

「なにこれ！壁なんか殴るから血が出てるじゃない」

「ああ。そういえば痛いかも。忘れてた」

「忘れてたじゃないわよ。早く手当しないと、病院に……」

「そんな大げさな。こんな時間じゃ急患でもなきゃ見てくれないよ」

「じゃあ、あなたの家にすぐ帰って手当を……」

「うちに手当てる物なんてあったかな？消毒液どころか、絆創膏一つなかったと思うけど」

上条は「信じられない」と呟いて肩を震わせた。

「あんた今まで私に殴られたりした時どうしてたのよ」

「目立たない所が多かったし、たいしたことないから放っておけばそのうち治るか……」

「自然治癒に頼りすぎよ！他の事はママメメしいあんたが、どうして自分の怪我にはそんなはずばらのよ」

「死ぬようなもんじゃないし、気にする事ないからかな」

「おかしい。おかしすぎるあなたの感覚。痛いとかつらいとか思わないから、いつも私が殴ってもへらへらしてられるんじゃないの……」

……」

「痛いとは思うけど、我慢できない程じゃないし。上条の暴力は一種の愛情表現だから仕方がないというか」

上条が怒って拳を振り上げて、途中で辞めた。どうやら怪我人という事で勘弁してくれたようだ。

「愛情表現なんかじゃないわよ。あんたがバカだから仕方なく……」

ぶつぶつと文句を言う上条が、木枯らしに体を震わせた。

「寒いでしょう。とりあえず暖かい所に移動した方が……」

「自分の怪我より、私の体の方が心配なの？」

「それは女の子は体を冷やしちゃだめでしょう」

「お母さんみたいに口うるさいわね」

文句を言いつつもやはり寒さの限界の様だ。結局近くでタクシーを拾って乗り込んだ。

今日二度目のありえない事態にまたも茫然とした。上条に連れられてタクシーで行った先は上条の部屋。今まで何度頼んでも絶対教えてくれなかった上条の家。

玄関を開けられてもまだ信じられなくて、立ちすくんでいたら上条に手をひかれた。朝比奈の住むアパートより少し新しいフロアリングの部屋は、少し散らかっていた。それでもぬいぐるみの一つもなく、代わりに一升瓶が置いてあったりする所は上条らしい。かろうじて、棚の上に鏡と化粧品類がある所が女の子の部屋らしさがある

るかな。

「じろじろ見ないですよ。今日は散らかってるけどたまたまで、いつもはもつと綺麗なのよ」

上条がぶつぶつ文句を言いながら、僕に水道で傷を洗うように言った。その間に救急箱を持ってくると言う。

台所の水道を借りたが、前に上条が言った通り、とても料理ができそうにない台所だった。あるのはやかんと電子レンジと炊飯器とコップや皿などだけ。インスタントや買ってきた総菜だけで生活しているのだろう。

一人暮らしの男の様な生活だと思う。上条らしいと思わず笑みがこぼれる。

「また勝手に人の台所見て！」

上条が怒りながらダイニングの真ん中に引つ張った。5帖ほどのダイニングには暖かいラグが敷かれていて真ん中に小さなテーブルとクッションがあるだけ。一人暮らしならこれで十分だ。人を呼ぶにはいささか殺風景だが。

テーブルの脇に座って大人しく上条の手当てをうける。消毒液を思いっきりつけられて、しみて痛いし、薬の塗り方も荒っぽい。最後に包帯を巻こうとしているのだが、不器用な上条は上手く出来ずに四苦八苦している。

これなら左手一本で自分がやった方が上手いかもしれない。

それでも一生懸命手当してくれる上条の姿を見ただけで幸せだったし、彼女の家で至近距離で向かい合っているのは少しドキドキした。

上条のまつげの長さや綺麗な唇の形に見とれていたら、つい出来心が生まれる。

このいい雰囲気のまま、上条が流されてキスとかできたりしないかな……などと

不格好ながらなんとか包帯を巻き終えた上条はやつと顔をあげた。そのタイミングで僕は、僕の右手を手当てしていた彼女の手首を逆につかんで引き寄せる。無言で顔を近づけると、間近に迫った上条の目がふせられた。

よし、いけると確信して僕も目を閉じた所で、突然の衝撃が襲った。

おでこが痛い。どうやら上条に頭突きをかまされたようだ。

「あんた何考えてんのよ。このドスケベ朝比奈！」

キスが嫌なら突き飛ばすとか、顔をそらすとかすればいいのに……
…よりもよってそのまま前のめりに頭突きとは……。上条らしい
が女子としてはかなりNGだと思う。

「手当終わったんだしさっさと帰りなさいよね」

「え。泊めてくれるんじゃないの？」

「そんなわけあるか！」

立ち上がりざまのひざ蹴りが僕のお腹に綺麗に決まった。さっきまでは怪我人として遠慮してくれてたのに、手当てが終わったら暴力は健在か。

僕は痛むお腹をさすりながら、上条に部屋を追い出された。

上条と朝比奈とそれから

金曜夜に寒い中立ち話をしていたのが響いたようだ。上条は風邪を引いた。週末の土日ゆっくり休めば治るだろうと、市販の風邪薬とコンビニおにぎりや飲み物を買って、週末ゆっくり休んだ。

おかげで月曜日には大分調子がよくなったので、大丈夫だろうといつも通りに出勤したのだが、病み上がりは無理したのがいけなかったようだ。また風邪がぶりかえした。

それでもなんとか我慢して火曜日出勤したが、すぐに菱沼主任にばれた。

「上条さん体調悪そうだね。風邪引いた？」

「たいした事ないです」

週末に化けの皮が剥がれたばかりの人間に優しくされても、ちっとも嬉しくない。これぐらいの会話上司と部下なら当たり前なのが、信用できない人間と話するのはストレスがたまる。

「無理はよくないよ。今日は早退していいから、病院行ってきなさい」

「おおげさです。本当にたいしたことないですから」

「もしインフルエンザとかだったらどうする。他の人間にも移って迷惑になるんだよ」

正論であり、逆らう事の出来ない当然の理屈だった。私は皆にお詫びをしながら早退して病院に向かった。

この時期は同じ様に風邪の人が多いのか病院も混む。ただの風邪

だったら、かえってインフルエンザ移されそうで怖い。いちようマスクはしているけど。

診察してもらったらただの風邪でインフルエンザではなかった。風邪薬をもらい、これで仕事に復帰できると報告の電話をいれた。やっぱり菱沼主任が電話に出た。

「わかった。じゃあ今日は帰ってゆっくり休んで。明日も休みでいいからきちんと治してから出勤するように」

「大丈夫ですよ。仕事できます」

「体調悪いと仕事の能率が下がるって言ったよね。昨日の君に頼んだ仕事いつもよりミスが多いんだけど。昨日も無理してたんじゃないか？」

「すみません」

体調が悪いからってミスが許されるわけじゃない。かえって足を引く張るくらいなら仕事しない方がましかもしれない。

「ミスを責めてるわけじゃないよ。ただ今焦って無理してもしようがないってことだ。今は風邪を治す事を優先しなさい」

先週末までの私なら喜んでいただろう優しい言葉も素直に喜べない。複雑な気持ちだ。しかし上司命令に逆らえないし、風邪もどんどん悪くなっていったので、仕方なく帰る事にした。

家に着いたのは夕方前。家について玄関開けたらそこで緊張の糸が切れて、そのまま入口で座り込んでしまった。こんな所にいたら風邪が悪化する、すぐそばにベットのある部屋がある。それなのに動くのがひどく億劫だった。

しばらく入口に座ったまま休んでいたらチャイムが鳴った。

だれだこんな時間に、宅配業者かなんかか？しばらく放っておいたらまたチャイムが鳴る。何度も鳴らされてうるさくて、仕方なしに立ちあがって鍵を開ける。

確認もせずにドアを開けたら朝比奈がいた。なんか大荷物持って立っている。

「なんであなた来たのよ」

「上条探知機がそろそろ風邪ひいてる頃じゃないかと探知して」

「バカ！何言つて……」

それ以上言う前に具合の悪さにふらついた。朝比奈に支えられながら部屋の中に入っていく。なんで突然来たのか知らないが、正直あのまま玄関に寝たままよりも、運んでくれる人間が来てくれたのは助かった。しかし相手があの朝比奈なのが問題だ。

病人相手に何をやる気か？この前この部屋でキスされそうになった事を思い出し、別の意味で身の危険を感じる。しかしあの時のように反撃する元気がない。

ベットのがある部屋まで来た時、朝比奈が私の着ていたコートに手をかけようとして、反射的に突き飛ばした。いつもより力のない抵抗で、朝比奈をひるませる事も出来なかったのだが。

「嫌……」

泣きそうな声を出したら朝比奈が目を細めて私の頭を撫でた。

「大丈夫。病人に変な事はしないよ。コートとスーツ着たまま寝るの？着替えた方がいいでしょう」

子供に言い聞かせるみたいにな優しい声で朝比奈が私の頭を撫でた。子供扱いされてるみたいで腹がたつたが、何かされるわけではないとわかって安心した。

「自分で着替える……。出てって」

朝比奈は素直に寝室から出て行った。私はなんとかクローゼットから部屋着を取り出して着替えると、力尽きたようにベットにもぐりこんだ。

眠りたかったのに、体がしんどいし頭が痛いしで、なかなか眠れない。そうだ、病院で薬もらったんだあれ飲めば……。だめだ。食後に服用なのに、今家には食べ物が無い。帰りにコンビニ寄る気力もなかったからな。

うんうん唸ってたらず、ドアがノックされた。

「上条今大丈夫？」

朝比奈の声に私は慌てた。

「あんたまだ帰ってなかったの？」

呆れたような私の声を聞いて、朝比奈はドアを開いた。お盆の上にお椀とスプーンを乗せて持ってきた。

「葱としょうがの豆乳スープ作ったんだけど、薬飲むのになんか口にした方がいいよね」

「作ったって、鍋もないのにどうやって……」

「この前来た時確認済みだったから、調理器具一式持ってきた」

私は呆れて大きく口を開けた。だからあんなに大荷物だったのか。いい匂いのスープに食欲なかったはずなのに、自然とつばが出てきた。

朝比奈がスプーンでスープをすくって、息を吹きかけようとする。ちよつと待て、それはあれか、いわゆる「ふーふーあーん」的なべたで甘々な展開か！断固拒否する。

私は気力で朝比奈からスプーンを奪い取ってスープを口にした。

「熱っ！」

「慌てて人からとろうとするから」

「あなたが気持ち悪い事するからじゃない」

「いいじゃないか。病人は大人しく看病されてれば」

「断固拒否する。あんたの看病なんかまっぴらごめんよ。安心して眠れやしない」

朝比奈はやれやれとため息をついて出て行った。私は安心してゆつくりとスープを飲む。よく冷まして飲めば優しい味で美味しい。しょうがのおかげか体がぼかぼかして気持ちいい。

すぐに朝比奈は水の入ったペットボトルと小さなタッパーを持って戻ってきた。水はわかるけどタッパーは何？

「何そのタッパー」

朝比奈は開けて見せてくれた。丸い手作りっぽいチョコが何個も入ってる。

「上条チョコなら今食べれそう？」

「ああ。食べる」

スープで食欲のわいた私は、ひよいとチョコをつまんで口に放り込んだ。ビターチョコが口でとろけて、中から液体がにじみ出てきた。これって……。

「日本酒？」

「そう、チョコレートボンボンみたいに、上条に合わせて日本酒で作ってみた」

「作った？なんで？ふだんあんた菓子なんか作らないじゃない」

「今日何日か覚えてないの？」

確か金曜日が給料日の2月10日で、と指折り数えて気がついた。

「まさか……バレンタイン？」

「そう。最近は逆チョコって言って、男性から女性にプレゼント流行ってらしいよ」

「あんなんかにチョコなんてもらいたくない……」

言った後に気付いた。もう食べてるじゃん私。ええい。1個も2個も同じとチョコに手を伸ばすが、朝比奈がタッパーを取り上げた。

「風邪ひいてる時にあんまりお酒は良くないから、治ったら残りも食べてね」

「あんたが作って持ってきたんでしょ」

恨みがましく朝比奈を睨むと、朝比奈は楽しそうにへらへら笑っている。ああ、むかつく。いつもなら一発殴ってやるのに。早く体調治さなきゃ。

スープを飲みほし、薬を飲んだら体が楽になって急に眠気がでてきた。夕日がまぶしいと思ったら、朝比奈がカーテンを閉めてくれた。

朝比奈がベットサイドに座っている。そばにいられると警戒して眠りづらい。出てけとか色々言っただけなんだけど、眠くてあくび混じりで舌が回らずまともな言葉にならない。

瞼が重くなって目を閉じたら、額に冷たい感触があった。気持ちいい冷たさが私の額を撫でる。

「おやすみ彩花」

意識が遠のく間際に聞こえた声を私は覚えてない。

上條と朝比奈とこつなつた(前書き)

第5章最終話です

上條と朝比奈とこうなった

目覚めたら体がだいぶ楽になっていた。まだ体のたるさやのどの痛みはあるものの、自力で起き上がって歩けそうだった。ベットのそばに置かれた目覚まし時計を見ると、7時を少し過ぎた頃だった。昨日は確か夕方頃寝たから半日ぐらい寝てたのか。だいぶ寝たな。体の調子が戻ると今度はお腹がすいてきた。しかもなんだかいじい気がする。

ゆっくりと起き上がって、寝室とダイニングをつなぐ扉を開く。

「おはよう。上条。調子はどう？」

朝比奈が台所で何か作りながらそう言った。いるのが当たり前みたいなふてぶてしさだ。

「あんなんでまだ家にいるのよ！まさかここに泊まったの？」

「うん。ここのダイニングに寝袋敷いて」

「寝袋？そんなものうちにあったけ？」

「持ってきた」

「勝手に持ち込むな！というか勝手に泊まるな」

「だって上条の看病しないといけないからね」

「あんたの看病なんかもういらないわよ」

「そろそろお腹すいたんじゃない？中華粥作ったんだけど食べる」

プライドと食欲を天秤にかけたら、食欲が勝ってしまった。結局

朝比奈が作った中華粥を二人で食べる。朝比奈が嬉しそうなのが悔しい。

しかしこの前の一件といい、昨日からの風邪といい、朝比奈に借りを作っただけだ。それがさらにムカついてしまう。

「いちよう礼を言っておくわ。看病ありがとう。なんか色々借りばかりだから、返さなきゃね」
「だったらひとつお願いがあるんだけど」

朝比奈のお願いなんて、ろくなもんじゃないと思うんだけど、今回は何も聞かずにやだと言える立場じゃない。しかたなしに聞いた。

「何？」

「これから上条の家に僕が来た時、家にいる時は居留守を使わないで。家へ上げたくなければその場で『帰れ』って言ってくれれば帰るから」

これからも家に来る気満々だなこいつ。しかし今回受けた借りに比べれば随分小さな要求だと思えてしまう。

「そんなんでいいなら、いいわよ。すぐに追いついてやるから」

その時の私は気付かなかった。この約束の大きさを。甘くみていたのだ朝比奈の腹黒で計算高い所を。

金曜夜。私が帰ってきた頃、狙ったようにチャイムが鳴る。ヤツだな。私は大きいため息をついた。

今日こそは追い払ってやると覚悟を決め、玄関に向かった。チエーンをつけたままドアを開けると予想通り朝比奈が立っていた。

「帰れ」

「今日はエイヒレ持ってきたんだけど」

お互い挨拶もなし。単刀直入にも程がある会話だ。エイヒレは好きだ。しかし飲み屋に行けば結構あるし、今日は我慢、我慢。

「帰れ……」

「ひれ酒用のふぐひれも持ってきたんだ」

冬のひれ酒最高！はっ、しまった。心がゆらぎかけた。危ない。

「かつ、帰れ……」

「実家から手作りのぬか漬けが届いたんだ。酒のつまみにご飯のお供にいいかなと思ったんだけど、仕方ないな。帰るか」

手作りのぬか漬け！私は思わず聞いた。

「ぬか漬けの中身は？」

「大根、カブ、きゅうり、人参、みょうが」

みょうがのぬか漬けって初めて聞いた。他じゃ食べられないかも。そう思うと私は今日も食欲に負けてしまった。

いったん閉じてチエーンを外してから扉を開ける。すかさず朝比奈が入ってきて、当然のように台所に向かった。

「つまみだけ置いて帰りなさいよね」

「まあまあ、僕がつまみの用意しとくから、先に飲んでたら？ 燗の準備しておくよ」

朝比奈はすぐにコートを脱いで手を洗い、鍋に燗用の水を張って火にかける。まな板を洗って、持ってきたぬか漬けを取り出した。

「自分でやるから」

「うちのぬか漬けは野菜を丸々漬けてあるんだけど、上条切れる？」

失礼な！と怒りたいが、正直包丁を使うのは苦手だ。切らずにかぶりつくとか駄目かな？ 家だし、一人なら誰も見てないからいいよね。

などと私が思っている間に、朝比奈が手際よく漬物を刻んでいく。

「別に切らなくても……」

「はいきゅうり」

話の途中で、きゅうりのぬか漬けを口に入れられた。美味しい！ っかりすぎず、浅すぎず、程良いつかり具合。思わず頬を緩めて味わってしまう。

その後も大根、カブ、人参と切ったそばから、味見の一切れを放りこまれる。こうなったらみょうがもと、思わず朝比奈の横で待ち構えていた。

「後は全部用意したら持つてくから、座って待つてて」

「みょうがだけお預けつてずるい」

「立ったままつまみ食いつて行儀悪いでしょう」

今まで口に放りこんでにおいて今更と腹が立つ。しかし朝比奈がみ

ようがを切らずに、エイヒレを焼き始めたので諦めてダイニングのテーブルの前に座った。

まだかな、まだかなと待ってて、はたと気づいた。しまった。また朝比奈のペースにはまった。今日こそは追い返すはずだったのに……。

今日は3月2日金曜日。バレンタインの日の週末から毎週末、朝比奈はやってくる。今日で三度目で、まだ一度も撃退に成功してない。食べ物に釣られる私が悪いのだが、やはり居留守を使えないのが痛い。

結局ひれ酒片手に、つまみを食べる。みょうがのぬか漬け最高！などと浸っていると、朝比奈が煮物とか作ってきた総菜を温めなおして持ってくる。

「みょうがのぬか漬けて初めてだね。地元の新潟でみょうがの味噌漬けは見た事あるんだけど」

「上条が前言ってたよね、それ。だからぬか漬けもいけるかな？と思っ作ってみたんだ」

「へ？実家から送ってきたぬか漬けじゃないの？」

「正確には実家からぬか床送られてきて、僕が漬けた」

「ぬか漬けて毎日かき回さなきゃいけないとか、すごく面倒だったよね。しかもつかり具合とか絶妙なんだけど」

「実家でよく家事手伝ってたし、ぬか漬けかき回す係とかやってたな。いろんな野菜つけてみてつかり具合研究するのもなかなか面白いよ」

この豆男め！どこの世界に仕事じゃなしにぬか漬けをこんなに美

味しくつくれる男がいるんだ。あんた性別間違えて生まれたんじゃないの？

つまみは美味しいし、朝比奈が酒を切らさずに持ってくるものだから、ついつい飲みすぎてしまう。気付けば気持ちよく酔って寝てしまった。

土曜の朝。美味しそうな焼き魚の匂いに釣られて目覚めた。猫か！と自分の食欲に思わず心の中で突っ込みを入れる。

起き上がって扉を開けると、当然のように朝比奈が台所に立っていた。

「おはよう。もうそろそろ朝ごはんできるよ」

「おはよう……。また泊まったの？」

「うん。この季節の寝袋はきついね。寒いよ」

「だったら帰れ……」

文句をいいながらもダイニングのテーブル前に座る。テーブルにはすでに漬物やおひたしなど並んでいて、それらをつまみながら新聞を読み始める。

朝比奈は焼き魚と味噌汁を持ってきて、ご飯を土鍋からよそった。炊飯器があるのにわざわざ土鍋で炊くんだよね。いまだに朝比奈は炊飯器の使い方知らないらしい。まあ土鍋で炊くとお焦げができて美味しいんだけどね。

「いただきます」

朝ごはんのあいさつの後は無言で食べる。私が行儀悪く新聞読みながら食べてても、朝比奈は特に何も言わない。朝から機嫌よく、

にこにこ笑いながら私を見てる。私はその視線を無視して新聞を読む。

私がお飯やみそ汁おかわりしたいなと思うと、何も言わないうちから気を効かせて、朝比奈がよそつてくれる。食後のお茶のタイミングも絶妙だ。電気ポットがなく、やかんでお湯を沸かしているんだけど、いつも食後のタイミングにあわせてお湯を沸かすのだから、感心してしまう。

こいつ、いい奥さんになりそうだよな。男だけど。

「あのさ、いつもつまみとか、朝ごはんとか用意してもらってばかりだと悪いから、もう来なくても……」

「外で飲むより安上がりだからいいよ」

確かに安上がりだ。おかげで今月は給料だいぶ残った。私の給料の多くが飲み代に消えてる事がよくわかった。しかし酒は私がいつも買ってあるけど、朝比奈は飲まないし、つまみや朝ごはんの材料費と手間暇の負担は朝比奈が一方的だ。

「私は安上がりで助かってるけどさ、あんたが払ってばっかじゃ私やだ……」

「じゃあかわりに布団買ってよ」

「は？なんで？」

「やっぱり寝袋寒いし、僕まで風邪引いちゃうよ」

「あんたこれからも泊まる事前提にしてるでしょ！いつとくけども泊めないからね」

「まあ、まあ。僕だけじゃなくて友達とか泊めるかもしれないから、

客用布団の一つも用意してあってもいいじゃないか」

ぜったい自分のためだと思う。しかしやっぱり借りを作りっぱなしなのは嫌なので、仕方なく布団を買う事にした。嫌味なぐらい、いい布団買ってやる！

ふかふかの羽毛ぶとんと毛布と枕をどんと買って用意しておいたら、次の週に来た朝比奈が感激していた。

「すっごいふかふかで寝心地良さそう。うちの布団よりいいね。毎日泊まりに来ちゃだめ？」

「だめに決まってるでしょ！」

「じゃあ僕の家の布団と交換で」

「させるか！」

こうして私は不本意のだが、いつのまにか毎週朝比奈が泊まりに来るのが当たり前のようになってしまったのだった。

第5部終了

上條と朝比奈とこうなった(後書き)

キスどころか、婚約者の振りじゃなく、上條に告白の一つもしない
まま

週末通い同棲

朝比奈はチキンでずるいと思います

上條はいつになったら食欲に勝てるのか？

桜咲く頃 1 (前書き)

また短編が続きます

わかりづらいですが物語り内の時間だと、第4章、第5章の後に、第3章の春雷が入って、その後この『桜咲く頃』が入ります

桜咲く頃1

いつものコーヒーストップで譲司と紫は英語レッスンをしていた。もうじき夕方という頃で、外はよい天気には晴れている。そろそろ桜も見頃でこのまま花見にでも行きたい所だ。しかし紫は難しい顔をして英語と格闘中。最近ご機嫌斜めの紫は、花見など付き合ってくれるわけがない。

紫の機嫌が悪いのは俺のせいなんだけどね……。

やっぱり家の近所の図書館まで押し掛けたのがまずかった。あの春雷の日以降、メールも全然返信してくれなくなった。かろうじて英語の勉強は紫も渋々継続中だが、遊びの誘いなどのつてくれる気配はない。

先走ったのは反省しているが、譲司も焦っているのだ。この春で譲司も大学4年。あと1年で卒業だ。このままの関係で大学を卒業したら、大学でしか接点のない紫と確実に交流が途絶える。

せめて卒業後も会ってくれるぐらいの『友達』ポジションにはなっておきたいのだ。あと1年しかない……。そう思うと焦るのだった。

俺の出した問題をやっと解き終わった紫が顔をあげた。俺の後ろの方を見て立ち上がる。

「いけないもうこんな時間。スーパーの夕方特売に間に合わなくなる」

どうやら店の時計で時間を見て気づいたようだ。それにしてもス

パーの特売に慌てるなんて、主婦みたいだな。紫は慌ててテーブルの上に広げた筆記用具をしまった。

「すみません。先輩。今日はもう帰らせていただきます」

讓司の返事も聞かずに紫は帰って行った。紫のいなくなった席を見つめてため息をつく。その時テーブルの端に置いてあった物が目に付いた。

紫のケータイだ。忘れていったのか。今追いかければ間に合うか？俺は紫のケータイを手にとって立ち上がるうとして辞めた。

ひとつひらめいたのだ。

携帯はここにあるから連絡できない。貴重品だし早めに届けた方がいい。だったら家まで持って行ってもおかしくないよね。まあ紫に家の住所聞いてないのに押しかけたらまたストーカーだって怒られそうだけど、忘れ物を届けるという正当な理由があるから、ストーカーじゃないと言い張ってやる。

俺は紫より早く家につくために急ぎ、紫の家に向かった。

紫の家は2階建ての少し年季の入ったアパートの2階だった。表札に『田辺』と書いてあるのを確認して、玄関前で俺はしばしためらう。紫がスーパーに寄ってるならまだ帰ってきていないはず。留守かお爺さんかお婆さんがいるはず。そこが問題だった。

確かお正月に家に来た時、お爺さん達に俺の事を話すって言ったけど、紫がまともに話してるとは思えない。悪い印象持たれてたらどうしよう。

何度かチャイムを押すのをためらいながら覚悟を決めて押した。

しばらくして扉の向こうから男性の声が聞こえてきた。

「どなたですか？」

「初めまして。紫さんと同じ大学に通っている、柁木譲司と言います」

扉がゆっくりと開いたが、すっかりチェーンがついたままだった。扉の隙間から小柄な老人が顔を出した。銀縁眼鏡をかけ、眉間にしわを寄せて俺を睨むように見上げる。

おもいつきり警戒されてる気がする。

「紫はまだ帰っておりませんが」

「今日会ったんですけど、紫さんが忘れ物をしてしまって届けにきました」

「わざわざご丁寧にも。預かって紫に渡しておきます」

ろくに挨拶もできぬまま別れたのではここまで来た意味がない。多少お爺さん達と仲よくなつて、紫の外堀を埋めていきたい。しかしここで忘れ物を渡さず粘るのは不自然だ。悩みながらのろろと携帯を取り出そうとしていたら、家の中から別の声が聞こえた。

「あなた、誰が来たの？」

「紫の知り合いらしい。柁木さんとかいう人だ」

「あら、あなた、前にニルギリいただいた方じゃない。お礼言っただの？」

その言葉を聞いて目の前の老人は、眉間のしわを緩めて目じりを下げ、急に優しい表情で微笑んだ。

「ああ、あのニルギリの人か。あれは美味しいお茶だった。すみません失礼して、ちょっと待ってください」

そう言つて一旦扉を閉めた。中からガチャガチャと音がしたと思つたら、すぐに扉が開いた。

「初めまして紫の祖父の幸吉です。美味しいお茶をありがとうございます。良かったです。よかつたら上がつてお茶でも飲んでってください」

打つて変わつて友好的な態度に驚いたが、素直にお邪魔した。玄関の中にはやはり小柄で少しふつくらとした年配の女性がいた。

「初めまして、紫の祖母の勝子です。うちの人失礼してすみませんね。この人、人を紅茶でしか覚えられない紅茶バカなものですから」

「紅茶でしか覚えられんわけではないぞ、ただちょっと前に聞いた事だから、忘れてただけだ」

微笑ましいやり取りを見てると、気持ちや和んできた。単に忘れていただけで、どうやら悪い印象は持たれていなかったようだ。

居間に案内してもらつと、7帖ほどの畳の部屋で小さなちゃぶ台があつた。

「おい。紅茶入れるが何か茶菓子なかつたか？」

「紫が作ったおからクッキーがあつたんじゃない」

「あれか……。さすがに紅茶に濡れせんべいはあわないし、仕方ないか」

畳に木の古いちゃぶ台でティーポットとティーカップとはなんとモアンバランスで面白い。どちらも揃いのいい茶器だった。それにクッキー。紫の作ったお菓子って食べた事なかったから嬉しい。

「去年の又ワラエリヤですわ。昨年のですけどなかなかできのいいのが手に入って」

「この人紅茶のわかる人がくると、すぐ嬉しくなっただけ紅茶自慢始めちゃうんですみません」

「いえ、ありがとうございます。いただきます」

繊細な味わいの紅茶を味わって、香りを楽しんだ後、クッキーを口にした。甘さ控え目な素朴な味のクッキーだった。お爺さんはクッキーを食べて眉間にしわを寄せた。

「紫め。砂糖とバターケチって入れんかったな。甘さが足りないしぼそぼそするわ」

「その分ヘルシーでいいんですってよ。材料もおからとホットケーキミックスと卵だけで作れるから安上がりだし」

なんとも紫らしい合理的な理由だ。しかしお爺さんは昔お店をやっただけあって、お菓子にはうるさいようだ。確かに素朴な味だが、家庭的な味で悪くはないと思うのだが。

「優しい味のクッキーなので、又ワラエリヤにあいますね」

「まあぼそぼそした焼き菓子は紅茶にあいますからな。しかしこれフリーマーケットとやらで売るとか言っただけなかつたか？こんなもの人様にお金出して買ってもらうていいのか？」

「最近健康志向の人も多いからこういうのもいいんだって言うてたわよ。材料費が安上がりだから儲かるって喜んでたわ。今日もスーパーの特売で材料買いこんでくるんじゃないかしら」

これ売るんだ。しかも儲けを狙ってただでさえ安い材料を、特売でさらに安く仕入れようとは、紫もそうとうがめつい。

「そうやって稼いだ金で友達と遊びに行くとかならいいんじゃないが、あの子は全部本につき込んでひきこもるから、困ったもんだ」

お爺さんの愚痴に俺は苦笑した。紫らしいお金の使い方だ。紫の日常が垣間見えていいな。

俺はお爺さんとお婆さんの会話を聞きながら、温かい気持ちになっ
ていった。

桜咲く頃2

「柁木さん。紫は学校ではどうですか？休みの日も遊びにいかんと勉強や読書ばかりで、友達いるんですかな」

お爺さんの心配はもつともだ。紫に親しい友達はいない。しかも学校でいじめられたりもした。その原因が自分にあるとはいいづらいのだが。

それでも最近はいじめられなくなつたし、学校内で時々昼ごはんを食べる程度に親しい子は何人かできたようだ。

「お昼と一緒に食べたりする友達はあるみたいですよ。時々同級生の女の子と一緒に所見かけますから」

「そうですね。いや、昔から友達のいない子で、家に友達が遊びに来た事もなければ、休日も一人で引きこもってるから心配してるんですよ。紫が大学入ってから学校の人で話題にしたのも柁木さんくらいだし」

紫が俺の事をどう話したのだろうか？気になって聞いてみた。

「紫さんは俺の事なんて言うてました？」

お婆さんは日だまりのように温かで可愛らしい微笑みを浮かべて答えた。

「勉強を見てもらったり、色々お世話になつてる先輩だつて言つてましたよ。本当に紫が面倒をおかけしてすみませんね」

「いえ、面倒だなんてそんな事ないです。俺も紫さんに助けられる事もありますし」

紫が俺の事を悪く言っただけでなかったのに驚いた。だからこんなにあつさり家に入れてもらえて、お茶まで出してくれたのか。

「紫は私達に悪いを隠す癖があつて。私達に心配かけないようないい子でいようと頑張りすぎてしまふんでしようけど。本当に榎木さんのように親切な先輩がいてよかった。これからは紫をよろしくお願いします」

「こちらこそよろしくお願いします」

お爺さんの頼みに俺は戸惑っていた。紫はお爺さん達に心配かけまいと俺の事を親切な先輩と言ってるのか、本心でそう思ってるのかわからなかったのだ。今までは紫に嫌がられようとも付きまとう事にためらいはなかったが、この人達の期待を裏切るような事をするのは罪悪感があつた。

「そういえば去年の夏に大学のバイト紹介してくださつたのつて榎木さんですか？」

「はい。あの余計なお世話だったでしょうか？お二人は紫さんのバイトに反対されているようですし」

「いやいや、違ふんですよ。あの学校のバイトのおかげで学校内で知り合いが増えたようで、お礼が言いたかつたんですわ。それにバイトを禁止してるのも、紫を縛るためじゃないんです。本当はバイトでもした方が色々な人と知り合えて紫も少しは友達が増えるんじゃないかとは思ふんですがね……」

お爺さんは困つたようにため息をついた。お婆さんも温かい笑顔を曇らせて同じくため息をつく。お婆さんがぼつりと呟いた。

「私達が不甲斐ないばかりに紫に心配ばかりさせてしまって」

お爺さんも悲しそうな顔で話し始めた。

「紫が高校1年の時バイトがしたいって始めたんですが……。バイトに熱心になりすぎて、勉強も友達づきあいも疎かにして、バイトに熱中してとうとう体を壊してしまいましたな」

「もともとあの子は体力ない子なのに、家の家計を助けようと無理して。紫がいう通りにしていたら、大学にもいかずに、せつかくの青春を働きづめで終わらせてしまいそうで、可哀想で可哀想で……」

「勝子。落ち着きなさい」

お婆さんが目を潤ませながら訴えるのを、お爺さんがなだめていた。昔の紫の無茶を想像して胸が痛くなる。

二人は本当に紫を可愛がっているんだ。紫のためにバイトもささず、せめて学生のうちは子供らしく幸せであってほしいのだろう。それなのに休みの日も遊びに行かずに、家にこもっている姿を見ていたらどれだけつらいだろう。

「紫と約束したんですわ。期限つきで今だけはバイトをせずに、思いつきり好きな事をしなさいと。そしたら引きこもって本読んではっかり。約束の期限までそう長くもないのに……。これで期限がきたらあの子が何をするか、心配で心配で……」

「期限っていうのはやっぱり大学卒業までとか……」

「何やってるんですか！先輩！」

突然後ろから声がして、振り向くと紫がいた。表情を引きつらせて慌てている。

「おかえり。紫。柗木さんがおまえの忘れ物をわざわざ届けてくれたそうだ」

そういえばそんな口実だった。すっかり忘れていた俺は、慌てて紫の携帯を取り出した。紫は俺の手から携帯を奪うと、いきなり俺の手首をつかんで引つ張った。

「すみません先輩。わざわざ届けに来ていただいて。せつかくだから私の部屋も見えていきませんか？お勧めの本があるんですよ」

わざとらしい笑顔を無理に作って俺の手を引く紫の手は、思い切り力がこもって爪が食い込みそうだ。まずいこれは相当怒っているな。

逆らうわけにもいかず、紫に引かれるまま彼女の部屋に行く事になった。

紫の部屋は5帖程の和室で、布団と勉強机と本棚しかない、さっぱり女の子らしくない部屋だった。本棚も小さなもの一つ。服とかは押し入れの中に入れてあるのかな？などとちよっと考えていたら、何だか恐ろしい空気に寒気がした。

紫が無言で俺を睨んでいる。作り笑いさえもない、むき出しの悪意に俺は思わず後ずさりした。

「なんで先輩が私の家知ってるんですか？図書館の時から嫌な予感してましたけど、私の事つけまわしたりして、本気でストーカーしてるんじゃないですか？」

「ごめんなさい。田辺さんの後付けて自宅の場所知ってました」

あまりの勢いに素直に白状してしまった。紫は地の底から這い出たような低い声で俺を罵る。

「この変態ろくでなし最低最悪バカで危険人物で吐き気がするぐらい気持ち悪いストーカー変質者先輩」

ノンプレスで一気に毒を言い切った紫に、俺は恐れあまり思わず土下座していた。

「本当にすみませんでした。なんでもします。許してください」

「本当に何でも？」

「はい」

「じゃあまず二度と私の家にこない」

「はい」

「私の許可なく後をつけて探るとかもしない」

「はい」

「おじいちゃん達に余計な事は何も言わずに今日はさっさと帰る」

「はい」

「上条先輩にちよつかい出して、朝比奈先輩に散々にいたぶられて、社会的抹殺の刑にされてくる」

「は……ちよっと待ってなんかそれおかしくない？」

おもわず頭をあげたら、さっきよりもずいぶん機嫌がよくなった紫が、笑みを浮かべながら見下ろしていた。

「畳に這いつくばって、まるで虫みたい。とても恰好悪くて気色悪い。お似合いですよ先輩」

紫の毒舌攻撃に慣れていた俺は、久々に紫の容赦のない毒攻撃に顔を青ざめた。その反応が楽しいのか紫はそれからしばらくの間、土下座状態の俺に毒の嵐を浴びせ続けたのだった。

桜咲く頃3

「おや、もう帰るんかい。もうちょっとゆっくりしてけばいいのに」

お爺さん、お気持ちは嬉しいですが、後ろのお孫さんから』とつとと帰れ』という無言のオーラが漂ってます。

「すみません。この後予定があつて……」

「あらあら、それじゃしかたないですねえ。でもまた来てくださいね」

お婆さん、そんなに可愛らしく微笑まれて頼まれても、後ろのお孫さんに怖い顔で『二度と来るな』と脅されてますから。

「また機会があれば」

「紫。駅まで送って行ってあげたらどうだ」

「はい。行つてきます」

紫はお爺さん達が振りかえる直前に、無言のオーラと怖い顔を引っ込めて、猫かぶりの笑顔になつてる。器用だな。

部屋を出て、アパートの前で立ち止まって振り向いた。玄関から二人が手を振って見送つてくれていたので、手を振り返す。名残惜しいが二人に背を向けて歩きだした。

「とても優しい、お爺さんとお婆さんだね」

本当に腹黒な紫と血が繋がつてるとは思えないほど、良い人達だ

った。

「両親もそうですけどお人よすぎるんです。だから騙されてもいまだに人を簡単に信用してしまう。こんな怪しい先輩なんて簡単に家入れて……」

紫はぶつぶつ文句を言っているが、顔は楽しそうに笑ってた。普段あまりみない無邪気な笑顔に、家族の事をどれだけ好きなのか、すぐわかってしまう。

「俺じゃなくて田辺さんを信用してるんだよ。俺の事『お世話になってる先輩』って話してくれてたんだろう」

「お、お爺ちゃん達、そんな事……。本心じゃないですからね。スニーカーの変態先輩に付きまとわれてるなんて言ったら、二人が心配するから……」

珍しく紫は余裕なく慌てていた。照れてるみたいで可愛いな。

俺の肩より紫の背は低く、うつむきがちに歩く紫のつむじが見えている。紫がどんな顔して歩いているのか、隣にいるのに俺はわからなかった。

すると唐突に紫が顔をあげて、上目づかいで聞いてきた。

「先輩。明後日の日曜日暇ですか？」

「うん。特に予定ないね」

「近くの公園でフリマやるので出店するんですけど、先輩も何か家の不用品とか一緒に売りませんか？」

「ああ……お爺さん達が言ってたね……。って、俺も一緒にいいの？」

珍しく紫からの誘いに嬉しくなって、思わず声が弾んだ。

「二人の方が、出店料も半分ですむし、交代で店番できますから」
「ああ。そういうことね……。いいよ」

実に合理的で紫らしい回答だ。でも日曜日に二人でフリマデートというのも、ほのぼのして良いではないか。

さっそく帰ってから家の中の物を色々物色した。人にもらったけど使っていない食器やタオルとかがあったのでそれを出すことにした。フリマ会場の公園についてネットで調べてみたら、地味に地元では桜の名所になっているようだった。明後日の天気予報は晴れ。きつとちょうど桜も見頃だろう。

紫と花見がしたいという望みがかないそうだ。日曜が楽しみだと俺はのんきに構えていた。

天気予報通り日曜はいい天気の花見日和だった。公園の桜の木の下で、人々が集まってお花見をしている。フリーマーケットの会場は、桜の林から少し離れた芝生の広場だった。桜の木から距離はあるが、遠くから見る桜林もピンク色の霞のようで綺麗だ。

「良い天気で桜綺麗だね」

「そうですね。この分ならお客さんもいっぱいいきそうでした」

俺達はフリーマーケットの準備をしながら話していた。紫が持ってきたレジャーシートをしいて、商品を並べていく。紫はおからクッキー一種類のようだ。1袋100円という値札のみなので準備は簡単だ。

俺は初めてフリマに出店で要領が悪かった。値段の付け方がわからずうんうん悩みながら準備をしていたら、開始時間を過ぎてしまった。

「お店まかせて、ちょっと他の所見てきてもいいですか？こういう所で掘り出し物の本とかたまにあるので」

「ああいいよ。まだこっち準備終わってないし。おつりと集計表はこれでいいんだよね」

「はい。お願いします。それから先輩。フリマとはいえお店ですから、接客は笑顔でお願いします」

「そうだね。まかせて。本見ておいでよ」

紫が店を離れて少ししたら、やっと俺の方も準備が終わった。俺が顔をあげたらなんだか店の前に人が集まっていた。しかもなんか子供連れの主婦とか、女性ばかり。

「あの……。このおからクッキーひとつください」

ああ、そうか。クッキーとか甘いものは女性向けだよな。だから女の人ばかり集まってるのか。

「はい、ありがとうございます。100円になります」

そうだ。紫に言われていた通り、笑顔、笑顔、笑顔で商品の受け渡ししたら、なぜか周りのお客さんが騒がしくなった。あれ？なんか俺間違えた？

「私もクッキーください」

「私も、私も」

あっという間にお客さんが押し寄せて、対応に困ってしまった。紫にはまかせてなどと言ってしまったが、一人では対応しきれない。

早く帰ってきてくれないかな……。などと心の中で弱音をこぼしつつ、夢中で接客した。

気づけば大量にあったクッキーがあつという間になくなった。そしてら急にお客さんがいなくなった。ほっと一息ついた所で紫が帰ってきた。

「おかえり。すごいよ。クッキー全部売れたよ」

「とうぜんです。そのためにわざと私いなくなつたんですから」

「え？なんで？」

「無駄に顔の良い先輩が一人で接客してる方が女性受けいいからですよ。そのために今日誘つたんですから」

え？お客さんが女の人以上ばかりだったのはクッキーのおかげじゃなく俺のせい？つまり俺、紫の売り上げのために利用された？

「でも、俺の出してる商品は全然売れないよ」

「当然です。先輩の値段の付け方はフリマでは高すぎますから」

「そうなの？でもこれ新品未使用のブランド品ばかり持って来たんだけど」

「ブランドとか関係ありません。フリマではいかに安いか勝負です。それにどうせ先輩の顔に釣られただけのお客さんなら、買う商品は安い方がいいですからね。100円でイケメンスマイル買えたらお買い得じゃないですか」

そうなのか。じゃあ俺の並べた商品も値下げせねば。

「私商品全部売れたんで、先に帰りますね」

「ちょっと待ってよ。人に店番させて、先帰るとかずるい……」

「店番のお礼です。先輩の分とっておきました」

紫が取り出したのは一袋のおからクッキーだった。

「店番しながら食べてください。おつかれさまでした」

さつさと片付けて、売り上げとともに紫は帰って行った。結局デパートのつもりが紫に利用されただけで、少ししか一緒にいられなかった。

取り残された俺は、一人泣く泣く値下げ作業を続けた。せめて紫のクッキー食べて元気だそう。

うっ。ぼそぼそしてるから飲み物なしだときつい。天気がいいからますますのど渇く……。しまった！飲み物用意しておくの忘れた。買いに行きたくても一人……。

紫！帰ってきて！せめて飲み物買う時間だけ店番代わってくれ！

しかし時すでに遅く、紫が戻ってくるわけはなかった。

桜咲く頃3（後書き）

かつてに家まで乗り込まれた紫のささやかな？報復でした
バイトできない分紫は、いろんな手段でちまちま小金稼ぎしてます

次の話が記念すべき連載100日目になります

100話記念 鍋(前書き)

連載100話め記念に外伝をひとつ

ここまで続けられたのも、読んでくださる読者の皆様のおかげです
ありがとうございます

100話記念 鍋

それが行われるきっかけは上条の一言だった。

「冬も終わりよね……まだ寒いうちに鍋やりたいな……」

「じゃあ来週は鍋の用意しとくよ」

上条の部屋で週末に当たり前のように朝比奈がやってきて、つまみを用意してくれた。

「やっぱ鍋ならもつと人数いた方が楽しいわよね」

「じゃあ理子さん呼ぶ？」

「無理。今月理子の誕生日だから、いろんな所で誕生日祝いで忙しいのよ。ねえ柁木君と田辺さん呼んでやらない？」

朝比奈がいつものへらへら笑いを崩してしかめっ面をした。朝比奈があからさまに嫌そうな顔をしたのが楽しくて、ますますやる気になってきた。

「来週の土曜日、場所はこの部屋でいいからさ。なんなら二人に連絡しとくわ」

朝比奈はしかめっ面のまま、大きなため息をついて言った。

「いい。どうせ学校で会うだろうからこっちで連絡する。どうなっても知らないからね」

朝比奈の言葉をただの悔し紛れと流したことを上条は後で後悔す

ることとなった。

「四人で鍋やるうって言ったの私だけどき。それがなんで闇鍋になるの」

「なんか朝比奈先輩と田辺さんまたやりあったみたいで、気づいたらそうなってました。お互いに嫌がらせしてやるうとやる気満々みたいですよ」

彩花は讓司の解説を聞きながら、目の前でにらみ合う二人を見た。顔合わせただけでここまで殺気立つ関係ってなんなんだ。それでいて似たような趣味してるのが、仲がいいんだか、悪いんだか。

しばらくにらみ合っていた二人だったが、ようやく互いに目をそらして鍋の準備を始めた。

「じゃあ今回の闇鍋のルール説明。まず電気消してから水はった鍋に、各自持ち寄った材料を入れてふたをして火をつける。煮えたらふたを開けて食べる。この間ずっと電気消したまま」

朝比奈の説明を聞いていて疑問がひとつ。彩花は気になったので聞いてみた。

「水に具を入れるって、だしはどうするの？」

「具が何かわからないから、シンプルに水がいいと思うよ。具からもだしでると思うし」

こいつ何入れる気だ？とにらんでみたがまったく効かなかった。

「具は普通鍋にいれないものを用意するんですよ。どんな鍋に

なるのか……」

譲司は言いながら紫と朝比奈を見た。明らかに危険人物はこの二人よね。彩花も心の中で同意した。

「私食べ物をそまつにするの嫌いなんだけど、食べられないようなもの出来上がったりしないでしょうね」

「大丈夫だよ、上条。今回はちゃんと食べ物しか入れてはいけないうって決まりだから」

決まりがなかったら、食べ物以外を鍋に入れる気かお前は！とつつこんでやりたい。

「始めましょうか。電気消しますよ」

紫は不気味な笑顔を浮かべて電気を消した。ああ、どうなるのか……心配……。

具を入れて火を付けてしばらく立った頃、今回の鍋奉行・朝比奈が切り出した。

「そろそろ開けてみようか」

ふたを開けた瞬間匂ってきたのは甘い匂い。匂いをかいだ瞬間、誰もが何を入られたのかわかった。

「誰！チョコレート入れたの。鍋にあり得ないんだけど」

「私じゃないとしたら一人しか考えられませんね」

「田辺さんじゃなかったんだ、だとしたら……」

3人の疑いの声に、朝比奈は気にもとめずに言った。

「闇鍋らしくおもしろくなりそうで、だしになりそうでしょう」

「この匂いだけで食べる気なくなるわよ。このバカ朝比奈」

他に何が入っているのか……、初めの一人になるのが怖くて皆なかなか手を付けなかった。沈黙を破ったのは譲司だった。

「じゃあ、俺からいきます」

彩花は心の中で譲司にエールを送りながら、譲司の反応を待った。

「ぐっ……。やわらかくて、ねばーっとしたものが……これって納豆？」

「先輩。さっそく当たり引きましたね」

「嫌！チョコレートと納豆って、想像しただけで気持ち悪い」

「はい……。チョコは匂いだけで、味は納豆なんですけど気持ち悪いです」

「本当に言い趣味してるな。田辺」

「先輩がチョコなんていれたせいで最悪な組み合わせになったんじゃないですか」

「……お互い様だな。じゃあ、次は僕がチャレンジしようか」

朝比奈の言葉にまた沈黙がおとずれた。しばらくして朝比奈の笑い声が聞こえてきた。

「何入ってたんですか？先輩」

「噛めば噛むほど味が出る……。するめだなこれ。これ入れたの上条じゃない？」

「美味しいじゃないするめ」

「いつもながら、選び方がオヤジだよな」

「うるさいわね。鍋にいいだしでてるんじゃない……」

彩花が言葉の途中で沈黙した。どうやらしゃべりながら鍋を食べたようだ。

「誰よ！りんご入れたの！」

「俺です。果物って女の子喜ぶかなって……」

「喜ぶか！チョコはまだしも、するめとかなんか他の味が混ざっただしがしみこんで思い切り不味いわよ」

「意外にチョコレートが合う食材入ってたんだね。チョコ入れてよかった」

「ぜんぜん良くないです。誰です？ぬか漬け入れたの」

さつきから沈黙していた紫が、震えた声で言った。いつのまにか食べていたようだ。

「ああ僕いれたよ。ぬか漬けのキュウリ」

「鍋にぬか漬けもキュウリもおかしいですけど、チョコと合わさって破壊的です。両方用意したんだから、朝比奈先輩これ狙ってたね！」

「田辺が引いてくれて嬉しいよ。上条に食べさせたら怒られそうだから」

「怒るわよ！美味しい漬け物を何てこと！しかも鍋のだしがぬか漬け臭くなるじゃない。りんごにしみてるわよ」

「朝比奈先輩、これ本気でどうします？このままじゃ誰も食べない鍋になりますよ」

讓司のぼやきにあっさり朝比奈は答えた。

「大丈夫。最後にはカレーのルーでも入れて煮込めば、たいてい大丈夫。ほらカレーの隠し味でチョコとかりんごいれるじゃないか」
「納豆とぬか漬けとするめはカレーにははいりません。締めをカレーにする予定だったら、ぬか漬けなんか用意しないで下さい」

「納豆は田辺が入れたんじゃないか。まあまだまだ色々用意してるんだけどね」

「あら、私も用意していますよ。ぜひ朝比奈先輩に食べていただきたいですね」

「嫌！もうこれ以上、この二人の入れる変な鍋食べたくない」

「上条先輩、ここで二人を止めないと、いつまでもケンカしますよ。先輩だけが頼みなんです」

四人がギブアップするまで、この後も鍋が続けられ、締めはわけのわからないカオスなカレーができあがったのだった。

100話記念 鍋（後書き）

会話中心のコミカルな話にしてみました

四人がそろって話するのはこれが初じゃないかな？

会話文だけで誰のセリフかわかるように頑張ってみたけど、果たしてみなさん区別つくでしょうか？

そろそろラストの山場に向けて話がシリアスマードに傾くと思います

こんなギャグ回、当分予定ないです

この小説に笑いを求めている方ごめんなさい

どんなに鬱展開になろうとも、最後は笑えるハッピー？エンドをめざしておりますので、よろしければお付き合いください

決裂 前編（前書き）

第5章の後日談です

5章に笑いで落ちをつけたかったので、こちらにいれました

決裂 前編

3月に入ったばかりでまだ夜は寒かった。駅の改札前で待ち合わせなんてするんじゃないかなかったと理子は後悔した。

今日は『残業料金』の回収の約束だ。私の方が立場は強いはずなのに、待ち合わせ場所も勝手に指定された上に遅れてくるなんて。まだここにいない男の事を考えて、心の中で文句を言った。

「怖い顔してるね」

いつの間にか後ろに男がいた。遅れてきたというのに、まったく悪びれもせずに笑っている。

「女を待たせるなんて、追加請求するわよ」

「ごめん。寒かったんだね、顔赤くなってる」

男の手が私の顔に触れる前に止まった。私が冷たい目で睨んで手の甲をつねったからだ。

「そういうご機嫌取りは彩花にしなさいよ」

「やっぱり理子さんはごまかされてくれないか」

「それで、今日はどこいくの？まさか『残業料金』が食事奢るだけとかじゃないでしょうね」

「食事を奢るのはおまけだから、とりあえず寒いし行かない？」

どこへ行く気なのか、朝比奈の様子から伺う事はできなかった。考えてみれば私はあまりに朝比奈の事を知らない。彩花の婚約者、大学院に行っている。性格が腹黒で頭が切れる。そんなことぐらい

だ。

まあこの前みたいに女子受けの良さそうなこじやれたカフェとか選ぶあたり、女慣れして遊んでたんだろうなとは思う。しかし何が好きとか、趣味嗜好となるとさっぱりわからない。

彩花もよくこんな謎だらけの胡散臭い男と付き合うなとは思う。彩花も細かい事にこだわらない大雑把でさっぱりした性格だから、あんがいうまく行くのかもれない。

着いたのは高級そうな中華料理店だった。しかもオシャレ系ではなく、本場中国って感じがする無駄に豪華で派手な感じの店だ。派手でも下品にならない微妙なバランスが高級店なんだろうなと思わせる。

「私そんなに中華興味ないんだけど」

「まあ今回は我慢して。今日はここにきた理由があるんだ」

店に入るとまっさきに店員が朝比奈に声をかけた。

「お待ちしておりました。朝比奈様。ご希望のお席をご用意しております」

案内されたのは入口にほど近い席だった。窓際で景色がいいとか、個室とか特に目立った特徴のない席だ。なぜこの席なのだろう。

「高級そうな店に顔パスって嫌味ね」

「自分のお金では来ないよ。仕事で何度か来るうちに店の人間と仲よくなっただけで」

「仕事？大学院以外で何かアルバイトとか？」

「中国語の翻訳や通訳の仕事してるんだ。中国人の接待とかで日本の会社がこういう所使うんだよ。そういう時に通訳でちょっと付き合うんだ」

初めて聞く事に私は驚いた。ビジネスで通訳というのは専門用語などもあるため、日常会話以上に高いレベルが必要とされる。学生のアルバイト程度で感覚で務まるものではない。

オイスターバーで奢らせた時も、高額な請求をあっさり払って、学生なのに金周りがいいなと思っていたがそんな仕事をしていたとは。

「学生がよくそんな仕事できるわね」

「在学中に中国語の資格取ってて、翻訳や通訳の仕事してるOBの手伝いから初めて、少しづつフリーで仕事頼まれるようになったんだ。今は学業優先で時間の融通がきく、翻訳の方を中心にしてるんだけどね」

朝比奈はたいしたことではないと言った感じで、仕事の話をした。こんな風に朝比奈自身の事を聞くのは初めてだった。何が目的でこんな話をするのだろうか？今日の私は朝比奈の思惑に困惑するばかりだった。

「何食べたい？」

「上海蟹」

メニューも見ずに答えた。中華なんて普段あまり食べないから、料理名を見てもピンとこないのだ。

「上海蟹はもうシーズンじゃないから無理だよ。理子さん魚介系好きだったよね。適当に選ぶよ。飲み物はビールでいい？」

「ビールでいいわ。今日は朝比奈さんも飲まない？お酒弱くても少

しぐらい飲めるでしょう」

朝比奈が酒を飲んでいゝ所を見た事がない。酒に弱いのだろうか？と思つと朝比奈の困る所を見てみたくて意地悪な質問を試してみた。しかし朝比奈は動じる事無く笑顔を返した。

「酒に弱いわけじゃあないよ。むしろ普通の人より飲める方だし」

「じゃあなんでいつも飲まないのよ」

「飲みすぎて酔つと酒乱で暴れるんだ。理子さんが怖い目にあつてもかまわないなら飲むけど」

「遠慮しとくわ」

この腹黒男の酒乱な様子など怖くて見たくもない。まあ本当かどうかわからないが。

結局いつものように私一人で酒を飲んだ。朝比奈は小さな中国茶器を慣れた手つきで操つて、温かいお茶を飲んでいる。

運ばれてきた料理を食べながら、朝比奈は私に菱沼の件の報告をした。まさか笹本部長を脅した件で、朝比奈が会社に目をつけられていたとは。いったいどんな情報を掴んでいたのか。私の中の好奇心がうずく。

「その笹本部長を脅した工商事の秘密つて何？」

「それは、また後で話すよ。それより、そろそろ4月からの上条の配属先情報わからない？」

「もったいつけるわね……。彩花の希望通り営業よ」
「そう。今回の件が上条の配属に影響しなくてよかった」

「そうでもないわよ。同時に菱沼も営業に異動になるわ。まだ上条の監視は続くって事ね。まああらかじめ菱沼が営業に戻るよう、会社と裏取引していた可能性もあるけど」

「今回の事は会社だっておおごとにしたいくないはずだ。菱沼も仕事で下手に嫌がらせとかはないだろう。理子さんはどこに配属なの？」

「営業」

「あれ？前は総務とか庶務とか比較的残業少なそうな所希望って言うてなかった？」

「どうやら朝比奈さんに力貸した事会社にばれたみたいよ。私も目をつけられて、まとめて菱沼の監視下ってことね」

本当は営業に配属されるように会社に持ちかけたのは私からだ。彩花と菱沼が同じ部署になると聞いて、彩花を一人で営業に行かせられないと思ったのだ。会社からは営業に配属する代わりに朝比奈の動きを探るように脅された。

朝比奈と会社のWスパイという立場だ。うまく立ち回らなければ両者から切り捨てられるかもしれない。

「理子さんも大変だね」

「本当に誰かさん達のせいで、大迷惑よ。だから迷惑料に知ってる情報はとつと話して欲しいわ」

朝比奈がふいに無言で視線を入口の方にずらした。唇が釣り上げ、目で私に合図を送る。入口の方に朝比奈の視線がまた移ったので、私もつられて入口に視線をやった。

ちょうど一組の客が入ってくる所だった。

身なりのいい痩せた初老の男とその秘書風の中年の男。店の店員が飛んで出迎えた様子といい、初老の男の醸し出す貫禄といい、只者ではない雰囲気だ。

初老の男達が奥の個室の方へ案内されるのを確認した後、やっと朝比奈が口を開いた。

「あの老人が黄偉。上海に本社がある中国南部最大の小売業会社『蘇美集団』のCEOだよ」

「『蘇美集団』って言ったら工商事の大口取引先よね」

そこで朝比奈は周りに聞こえないように声をひそめて囁いた。

「ああ。表向きは健全な商取引を装ってるけど、黄偉は裏で上海マフィアとのつながりがあると噂されている。工商事もその上海マフィアグループに資金や物資を流してるらしい」

私は思わず目を見開いた。しかしすぐに周りの目がある事を思いだし、引きつった笑顔を浮かべた。

「なぜうちの会社がそんな危険な事を。そんな事マスコミに漏れたら株価暴落じゃすまないわよ」

「中国は今急速に発展していて、経済市場として魅力的な所だ。しかし外国企業が中国国内への販売・流通を行うには様々な障害がある。早く簡単に市場に食い込むなら、中国国内の企業と手を組むのが一番だ。『蘇美集団』と取引を行う交換条件に、裏の組織に手を貸してるわけだ」

「もしかして……その情報で笹本部長を脅したの？」

「そう。どうやって知ったのかは言わないけど、脅しが効いたって事は全くのでたらめではないって事だね」

朝比奈は重大な事をさらりと言ってお茶に口をつけた。私も料理に口をつける。たぶん美味しい料理なんだろうと思うが、味わう気持ちの余裕などなかった。

こんな話聞かなければよかった。知らない方がまだ安全だった。それとも朝比奈の協力者と会社に認識された時点で、私はこの情報を知っていると会社に思われていたのだろうか。だったらどっち道手遅れだ。知らないより知っていた方が武器として使い道があるかもしれない。

しばらくの沈黙の後、私は余裕のあるそぶりを取り繕って微笑んだ。

「そんな重要な情報、なんで今になって話す気になったの？」

「秘密っていうのは、知っている人間が多ければ多いほど情報の価値が下がるだろう。イ商事からの僕へのマークを和らげるためにはあえて情報を拡散させたほうがいいかと思って」

「菱沼の一件があったから？彩花のためなら私が危険な立場になるのは構わないっていうの？」

「それは申し訳ないけど、理子さんも知りたがってた情報でしょ」

確かに笹本部長を動かしたネタは前から狙ってた情報だ。欲を出しすぎた私はずかしくもかもしれない。しかしこっちの貸しをあだで返すとは、本当に嫌な男だ。

今まで彩花のためと思ってこの男と協力していたが、もうこのあたりで見切りをつけよう。

こうして計算だけで成り立っていた、私と朝比奈の奇妙な協力関係

係は終わった。

決裂 前編（後書き）

初めての理子視点のお話です

1話で収めるつもりが長くなってしまったので続きます

決裂 後篇

私の中で朝比奈との関係を清算するための、計算が働き始めた。

今までいっぱい貸しを作った分、最後に会社に流すための情報でも、この男から搾り取らなければ割に合わないな。

そこでふと閃いた。I商事と『蘇美集団』の関係を朝比奈が知つたのは、朝比奈が通訳として仕事をした企業とのコネクションから仕入れた情報だろうか？

そう思わせるためにわざと、朝比奈は通訳の仕事の話をしたのか？

「通訳の仕事って守秘義務ってないの？」

「もちろんあるよ。機密事項を漏らした事がばれたら僕もただじゃすまないね。だからそう簡単には僕も顧客の機密を漏らせないよ」

「でも彩花のために最終手段を使ったって事ね。どこからの情報がばれたら困るって事よね」

「うん。だからI商事に伝えてくれないかな。もう僕は上条の事で手出ししないし、関わらない。代わりに他に情報を漏らさないってね」

私は息を飲んだ。私がI商事と繋がっている事を朝比奈は見抜いているのだ。その上ですべてを私に明かしたのか。

「私にそんな事言われても、会社が信用すると思う？」

「今日聞いた情報を君がどう使うかは自由にして。ただ本当に今後上条への介入をしないし、もう理子さんに情報を流してもらおうように頼まない」

朝比奈は淡々とそう言った。薄い微笑を浮かべたままだが、朝比奈が嘘を言っているようには見えなかった。この男は本気だ。私をもう信用していないという事か？

こちらから見切りをつけて、最後に利用するつもりだったのに。私は最後の悪あがきを試みた。

「いいの？私と手を切ったら上条が困っても知る方法がなくなるし、手出しもできなくなるわよ。それとも他に情報源でも手に入れた？」
「今回の事で上条も勉強しただろう。もういつまでも僕が手出ししなきゃいけないような子供じゃないよ。だから工商事で上条に何があっても関わらない。理子さんに任せる」

「任せる？頼むじゃなくて？そんなに私を信用してないの」
「理子さんが今上条の味方だって事はわかってるよ。でもいつまでも同じ会社、同じ部署にいるかわからないし、状況が変われば社内でも上条と理子さんが対立する立場になるかもしれない。それを僕はどうこう言いつもりはない」

朝比奈の笑顔などもはやただの飾りにすぎなかった。

この男が今どんな気持ちでこんな事を言ってるのかさっぱりわからない。ただいつもの軽口ではなく、本気でこの男は私と手を切つて彩花から手を引く気なのだという事はわかった。

「どうしてそんなにあっさり手を引くの？そんなに自分のせいで彩花の会社内の立場をまずくしたのがこたえた？」

朝比奈は小さく首を横に振った。

「確かに今回の事は僕のせいで起きたけど、笹本部長を脅してでも

内定を勝ち取らなきゃ、上条が工商事に入ることすらできなかった。後悔はしてない」

根拠はないが嘘だと思った。この男は自分を責めている。責めて彩花から逃げるつもりなのか？あんなに守ろうとしたものから。

「あんなに必死に彩花のために動いていたあなたらしくないわね」「らしくない？そんなことはないよ。僕は元々上条と違って誰かのために必死になるなんてしない人間だ。むしろ今まで上条のためと色々してきた事が僕らしくなかったんだ」

なんだか今日の朝比奈はおかしい。笑っていても余裕が感じられないのだ。いつもの愛想笑いと思っていたが、何かあったのか？

バレンタインの日、彩花が早退した事を朝比奈にメールで連絡した。その後どうなったか詳しくはわからなかったが、彩花は前よりも朝比奈の文句をよく言うようになった。話の内容は文句だけどのろけにしか聞こえない話ぶりから、二人は無事うまくやってるのだと思っていた。

だがそれは私の勘違いだったのだろうか？

「なにそれ。彩花とうまくいってないの？だからやけになって……」「上条のせいじゃない。上条を嫌いになったわけじゃない。これは僕の問題なんだ」

そこで朝比奈は今日初めて作り笑いを辞めた。あらゆる感情が抜け落ちたような、からっぽの表情で小さくため息をつく。

私から見たら上条と朝比奈は互いに大切な存在で、相手の事を思い合ってるのに意地を張り合ってるだけに見えていた。二人はこれからもずっと一緒だと思っていた。

そんな根拠のない未来が崩れ落ちていくような、強い不安が私の中に押し寄せてくる。

でも二人の問題に介入できるほど、私は二人を知らないし、その資格もない。恋人同士の問題に外野がどうこう言っただけになるのだ。

「朝比奈さんの言いたい事はわかったわ。でも私は私の勝手に彩花のために動くから」

私は返事を聞かずに立ち上がって店を出た。

彩花になんて言えばいいのだろう。朝比奈がおかしい？こんな根拠のない不安などどう説明すればいいかわからない。今の私には二人の仲がまたうまくいくように祈るしかできないのか。外の寒さを忘れるほど、私は茫然と夜の街を歩いて帰って行った。

嵐の前の静けさ

5月・初夏。爽やかで過ごしやすい季節。譲司は大学の構内で昼間から全然爽やかでない人に遭遇した。

「朝比奈先輩どうしたんですか？」

思わずそう呼びとめてしまっぐらい、いつもと様子が違う朝比奈だった。久しぶりに顔を見たが、元々痩せてるのにさらに痩せて、やつれたと言っていていくらいだ。表情もかろうじて笑顔だったが、力のない薄笑いだった。

「ちょっと疲れてるだけだよ。今日はもう帰って寝る」

朝比奈はそう言ってゆっくりと去っていった。今はまだ昼休みだ。午後の授業ない日なのかな？と首をかしげながら、その時は気にも留めずに午後の授業に向かった。

午後の授業がすべて終わり、これからどうしようかと考えていた。本当なら紫に会いに行きたい所だが、確か彼女はもうすでに今日の授業は終わっているはずだ。もう帰ってしまったているだろう。

そう思っていた所に視界の片隅に移った映像に首を傾げた。

紫が歩いていて。しかも彼女らしくなく不機嫌さをストレートに顔に出したまま。どうしたのだろうか？気になって声をかけた。

「田辺さん。どうしたの？」

「柎木先輩。朝比奈先輩知りませんか？」

「ああ。朝比奈先輩なら昼休みごろに帰ったけど」
「はっ？あの人午後の授業あるのに、サボったんですか！まったくどうりで1時間探しても見つからないわけだ……」

紫の言葉に俺は驚いた。大学生が授業サボるなんてよくあることかもしれないが、朝比奈に限ってはそうではない。なにせ普段は真面目な優等生を演じきっているのだから、無遅刻無欠席無早退が当たり前。授業のない時間にどこかに隠れて昼寝する事はあるが、寝過ぎて授業に遅れた事もなかった。

その朝比奈が授業をサボった。そういえばあの時の朝比奈は何かおかしかった。ひょっとして体調が悪かったのだろうか？

「田辺さん。朝比奈先輩具合悪いのかも。大丈夫かな？」

「別に倒れたとかじゃなく、自分の足で普通に帰ったんですよ。だったらほおっておけばいいじゃないですか。子供じゃあるまいし」

朝比奈にはとことん容赦がない紫だ。そんな彼女がなぜ1時間朝比奈を捜しまわったのか？

「どうして朝比奈先輩を探してたの？」

「古谷教授に頼まれたんですよ。朝比奈先輩、提出期限切れてるのに論文出してないわ、ゼミも休みがちだわで教授が心配してて」

俺はますます不安になった。あの優等生を演じてる朝比奈が急にそんな素行不良になれば、古谷教授でなくても心配になる。

上条先輩に連絡した方がいいたろうか？と思ったがすぐにやめた。確か4月から営業に配属になって相当忙しくなつたと聞いている。

4月頃に送ったメールの返信が最近やっと帰ってきたぐらいだ。

時間のない中ではつきりしたこともわからないのに、心配させるような連絡するのは上条先輩に悪い。本当に何かあったら朝比奈

先輩が直接上条先輩に連絡してるだろう。

「仕方ないですね。私古谷教授に報告してきます。とうとうあの男の化けの皮が剥がれはじめましたって……」

意地の悪い笑みを浮かべる紫がどんな『報告』をするのか。心配になった俺は紫に「邪魔です」と邪険にされたがついていくことにした。

「というわけで、堂々と授業をサボってさつさと昼には帰ったそうです。先生の貴重な時間を使って、朝比奈先輩の事に頭を悩ませるなんてそろそろ辞めた方がいいですよ」

「そうですね。朝比奈君がとうとう授業を休みましたか……」

紫の悪意を含んだ意見を聞きながら、古谷教授はこめかみに人差し指をたてて押さえ、まるで頭が痛いというようなジェスチャーをしました。

「様子がおかしかったし、きっと体調が悪かったんですよ。今まで真面目に授業出ましたし、論文とかちゃんとだせば問題ないですよね」

紫とは反対に俺は一生懸命、朝比奈を弁解をしようとしたが、古谷教授の顔色はすぐれなかった。

「一時的な事だったらいんですけどね……」

古谷教授は窓の外に目をやる。放課後に帰宅する生徒達の姿を眺めてしばらく沈黙していた。

「私も今までいろんな学生を見てきましたが、真面目な優等生が壁にぶつかって、ぼきりと折れて挫折してしまう事もありますからね。最近の朝比奈君の論文のできもよろしくなかったし……。研究に息詰まる事は研究者を指摘すなら、誰しも通る道ですから、後は朝比奈君本人が頑張るしかないですね」

朝比奈の様子がおかしかったのは、壁にぶつかっていたからなのか？もしそうなら俺たちにできることなんてないのかもしれない。

「田辺さん。手間をかけてすみませんでした。忙しい時期に」

そう言つて古谷教授は少しだけ微笑んだ。田辺さんになんだか意味ありげな視線を送っている。

「田辺さんも学業が疎かにならない程度に頑張ってくださいね」

「ご存じなんですか？先生」

「私も同業者ですから」

紫が目に見えて戸惑っている。俺の方をちらつと見て困った表情をした。まるで俺に聞かれたら困るとでも言いたげな雰囲気だ。

なんだろう？とても気になったが古谷教授はそれ以上何も言わなかった。俺も何も聞けなかった。

教授室を出てそのまま二人で帰る流れになった。並んで歩いていたら突然紫が立ち止まった。どうしたんだろうと首を傾げたら、真剣な表情で俺を見上げていた。

「先輩。私に英語の勉強教えてください」

「いつも教えてるよね？」

「学期末の試験対策です」

「試験つて7月だよ。まだ1カ月以上時間あるのに」

「今回はどうしてもいい点数取りたいんです。はやめにみっちり教えてもらえませんか？」

「いいよ。でもどうしたの？」

紫は俺の問いに答えず微笑みでごまかした。そういえば古谷教授が忙しい時期つて言ってたけど、何かあるんだろうか？

「お礼はします。試験が終わったらどこかに行きませんか？」

「それつて2人でデート？」

桜の咲く頃にフリーマーケットをした以来、学校の外で会っていない。あの時もデートだと思ったのに、結局利用されただけだったので、今度も何か企んでるのかと警戒した。

「どこか行きたい所があるの？」

「いいえ。今回は全部先輩にお任せします。1日どこか遊びに行きましょう」

「え？本当に？嘘じゃないよね？大丈夫？どこか具合悪いとか」

紫の言葉を素直に信じられずに、俺は思いつきり疑いの眼差しで聞き返す。すると紫は少しむくれた顔をした。

「別に嫌ならしいです」

「嫌じゃない！すごい嬉しい。勉強頑張ろう！成績アップで試験終わらせて、楽しいデートしよう。さあてさっそく今から勉強しようか」

「先輩って単純ですね。やっぱり犬みたい」

紫は意地悪な事を言いながら笑った。その笑顔は作り物ではない、心からの笑顔に見えた。

その時俺は何も知らなかった。紫の考えている事、朝比奈先輩や上条先輩達の事、これから待ち受ける様々な事を。ただ紫との久しぶりのデートに浮かれて、平和な日々を満喫しているだけだった。嵐の前の静けさだとも知らずに。

催涙雨（前書き）

この小説のラストに向けて話が大きく動きます
唐突すぎる急展開ですみません

催涙雨

上条は4月から希望の営業に配属された。新人の内は先輩について外回りも多く、その後の書類作りで残業も続き、その上接待に駆り出されて週末に休日出勤する事もあった。たまの休みは色々用事がたまっていたり、疲れた体を休めたくて一日何もせずにごろごろしたりもした。

そんな忙しさだったので、もう1カ月半も続いていた朝比奈の週末家飲みもきつぱりと断った。それでも4月のうちは何度か朝比奈から誘いのメールがきたが、忙しさのあまり返すのも面倒で放置していたら、連絡すらなくなった。

そのうち連絡しなくちゃなと思いつつ、あっという間に時間が過ぎ去って気がつけば7月になっていた。

「彩花。今日は早く帰らなくていいの？」

当たり前になっっていた残業中に理子にその声をかけられた。なぜ急にそんな事を言うのだろうか？

「どうして？」

「どうしてって明日は彩花の誕生日で今日は金曜じゃない。週末に朝比奈さんと約束とかないの？」

言われて気がついた。そう言えば明日7月7日は私の24歳の誕生日だった。社会人になると1年が早くなるっていうけど本当だ。

「誕生日忘れてた。それに朝比奈とは最近会ってないし、連絡もしてない」

「最近つていつから？」

「最後に会ったのは3月の終わりで、メールは4月頃まで？ああそ
ういえば2カ月近く連絡してないけど、どうしてんだろうアイツ」

私の言葉を聞いて、理子がなぜか怖い顔をした。どうしたのだろ
う？

「どうしたの？」

「どうしたの？じゃないわよ。信じられない。あなた達婚約してる
ほどの間でしょ。なのに音信不通で2カ月以上たつてて平気なの？
誕生日に連絡一つなく残業してていいわけ？」

「でも仕事忙しいからしかたないし。連絡ないなら朝比奈だって忙
しいんじゃない？」

「連絡ないなら彩花からすればいいじゃない」

そう理子から言われて気がついた。そう言えばいつも朝比奈から
連絡がきたのを返信するばかりで、自分から連絡した事なかった。

「まあそのうち時間ができたら……」

「何のんきな事言ってるのよ。婚約者の立場に甘えて連絡も怠って
たら、恋愛関係なんて簡単に自然消滅するわよ」

恋愛関係なんて私と朝比奈の間にはないのだが、友情も自然消滅
するのだろうか？そういえば朝比奈以外の学生時代の友人とは就職
してから一度も会ってない。

こうやって皆大人になっていくのだな……。なんて私がつみじみ
と考えていたら、ますます理子是不機嫌になった。

「誕生日プレゼントに残った仕事代わるから今日は帰りなさい」

「いいよ。理子も自分の仕事あるでしょ？悪いから」

「いいからさっさと帰って、今からでも朝比奈さんに連絡しなさい。もしかしたら彩花の連絡待ってるかもしれないじゃない」

「そんなわけない……」

「そんなわけあるの！ほら、さっさと帰る」

私は理子に追い出されるように職場を出た。まあ、前から連絡しなきゃとは思っていたし、電話するだけしてみるか、朝比奈に電話したが繋がらなかった。

誕生日直前にいきなり電話しても朝比奈が困るだけだね。しかない。私は会社の廊下で一人ため息をついた。

外に出ると雨が降っていた。天気予報では明日も雨だった。梅雨だから仕方ないけど、七夕に晴れて星が見える事ってあんまりないわよね。

そういえば前に朝比奈が、七夕の夜に降る雨を『催涙雨』というのだと言っていた。織姫と彦星は1年に1度、七夕の夜にだけ会うことができる。しかし雨が降ったら織姫は天の川を渡れず、二人は会う事が出来ない。

恋人に会えない悲しみから、二人が流した涙が雨になるから『催涙雨』というのだそうだ。

私は会えなくて悲しくて泣くような恋愛などしたことがなかった。だから理子がなぜあんなに怒るのかもよくわからない。でも、もし朝比奈が私に少しでも好意を持っているなら、私からの連絡を待つて寂しがったりしてるのだろうか？

想像できない。朝比奈が寂しいとか言う所が。アイツだったら、会いたかったら勝手に私の所まで押し掛けてきそうだ。

ただ、ストレス溜めてまた榎木君あたりをいじめたりしたらやだな……。今度榎木君か田辺さんに探りいれてみよう。

そんな事を考えながらぼーっと歩いて、自宅までついてしまった。そういえば最近買い物する時間もなかったから家には何も無いはずだ。帰りにコンビニでもよって、なんか食べ物買えばよかった。

しかし家の前まできて雨の中また出かけるのもおっくうで、とりあえず一度家に帰ろうと私は鍵を開けて玄関の扉を開けた。

開けたら室内の明かりがついていた。あれ？私電気つけっぱなしで家をでちゃった？おかしいなと思って部屋に入ったらなんだかい匂いがする。なんで？疑問ばかりが頭の中に湧き上がって、私はそのまま部屋の奥に進んだ。

ダイニングテーブルに料理が用意されていて、その上朝比奈がいた。

「なんであんたがここにいるのよ」

「誕生日サプライズ。上条誕生日おめでとう」

サプライズ…意味は驚き、不意打ち。確かに驚いた。誕生日を祝われたことじゃなくて、私の家に朝比奈が勝手に入り込んでいた事に。

「どうやってこの家にはいったのよ。鍵かけ忘れてた？」

「戸棚の引きだしに合鍵いれてるでしょう。前に泊まった時に借りて合鍵作ってあったから。それで入った」

私は瞬間的に頭に血が上って、気がついたら朝比奈の頬を殴っていた。

「私の許可もなしに勝手に合鍵作って入り込むなんて住居不法侵入でしょう。いくらサプライズって言ったって……」

そこで私は言葉を続ける事ができなかった。朝比奈が勝手な事をして、私が怒って殴って、そんな事いつものことだったのに……。いつもなら怒られても朝比奈はへらへら笑っているのに、今日の朝比奈は悲しそうな顔をしていた。

「ごめん。勝手な事して。今日はもう帰るよ」

「ちょっと、待って……」

「ああ。勝手に作った合鍵は置いておくね。これ以外にはないから。もう住居不法侵入なんてしません。すいません」

「何？その反応。もしかして怒ってるの？」

「なんで？勝手に部屋に入った僕が悪いのに。どうして上条の事怒るの？」

「いやまあ、勝手に部屋に入ったのは悪いけど、そんな怒る事でもなかったかと……」

「怒ってないのに上条は僕を殴ったの？違うよね。僕が怒らせるよ
うな事したからだよね」

朝比奈の一言に私は頭が真っ白になった。

今日の朝比奈は何かがおかしい。それとも今日だけじゃなくても前からののか？3か月ほど会わない間に朝比奈に何かあったのだろうか？

でも思えば今まで当たり前前みたいに朝比奈に怒る時、殴ったりしていたけど、いくら怒ったからって暴力振るっていいわけじゃない。今までは朝比奈がまるで堪えてないみたいにならなくて笑っていたから、そんな疑問考えもしなかったけど、これっておかしい事だったのだろうか？

おかしいのは私の方？連絡もしないで平気だった私がおかしいのだろうか？

気がつけばもう朝比奈は部屋にいなかった。残されたのは朝比奈が作った料理。

煮物とかお母さんの日常の手料理みたいな料理ばかりで、全然誕生日祝いらしくはなかったが、全部私の大好物ばかりだった。そして気付いた。テーブルの上にラッピングされた箱が置かれていたのを。

これ誕生日プレゼントよね？箱を開けると2つの茶碗が入っていた。

デザインは同じだが、大きさに大小の違いがあった。これって……。

「夫婦茶碗？何バカな事考えてるのよ……。アンタなんかただの友達じゃない……。」

いつものようにつつこんでも、いつものように朝比奈はそこにはいなかった。

一人朝比奈の作った料理を食べた。いつもと変わらない味なのに、一人きりの食事は美味しいと思えなかった。誕生日の事なんてさっ

きまで忘れていたのに、今は一人の誕生日が寂しい。
涙でしょっぱくなったご飯を食べながら私は一人食事を続けた。

次の日朝比奈からは何の連絡もなく、私から連絡もできなかった。
今の朝比奈に何を言えばいいのかわからない。

私は食欲がなく、一日部屋にこもって気づけば泣いていた。今年
の7月7日も雨。一人きりの七夕だった。

催涙雨（後書き）

上条と朝比奈の今後が不安になるような終わり方になってしまった

……

大きな事件はなくても、いつのまにか気持ちやすれ違つ
じりじりとじれたい感じですが、しばらくおつきあいください

夏の思い出 1 (前書き)

上条と朝比奈の関係が気になる所ですが、紫と譲司の物語に戻ります
3回の短編ですが、こちらも大きく話が動きます

夏の思い出 1

無事夏休み前の試験が終わり、紫との約束の日がやってきた。譲司は嬉しくて朝早く目が覚めてしまった。この日のためにデートプランを練って待っていたのだ。

行き先は渋谷。学生のデートらしい場所だと思うのだが、紫に言ったら「人が多くて犯罪者とかうる居ついてそうで嫌」と言われた。人が多いのは確かだけど、犯罪者が多いというのはずいぶん偏見にみちた意見だ。しかもどうやら紫は東京育ちなのに、一度も渋谷に来た事がないそうだ。

そのくせお爺さん達と一緒に巣鴨とか上野のアメ横とかはよくいくらしい。ぜひ紫にも若者らしい街で夏の思い出を作ってあげようと、かなり強引にせまってようやく渋谷で納得してくれた。

待ち合わせ場所と時間だけ決めて、どこにいくのか何をするのかは当日までのお楽しみ。紫が驚く顔が見たかったのだ。

そしてデート当日。初めての渋谷でもわかりやすいようにと、待ち合わせは八チ公前にした。いつもの通り待ち合わせ時間よりだいぶ早く着いたのだが、予想通り八チ公前は人であふれていた。

初めての渋谷で紫は無事にここにたどり着けるかな？もう着てて見失ってないかな？心配になって待ち合わせ時刻の10分前に携帯を取り出し、紫に連絡しようとした。その時後ろから服の裾をひっぱられた。振り向くと紫がいた。

「なんでこんなに人が多い所で待ち合わせなんかするんですか」
「よく見つけられたね。田辺さん」

「無駄にでかくて目立つ先輩のおかげですね。周りの女の子達の視線が痛いんで早く移動しましょう」

言われてみれば、周りにいる女性の多くがじろじろと俺達の方を見ていた。周りの視線に恥ずかしそうにうつむく紫が可愛い。俺は紫の半ば強引に手を取ってひっぱった。

「どさくさにまぎれてなんで手を繋ぐんですか」

「人が多いから手を繋いでないとはぐれて迷子になっちゃっよ」

「子供扱いしないでください」

紫はむくれたが、すぐに不安な顔になって落ち着きなく周りを見渡していた。慣れない街への戸惑い、気を抜くとぶつかってしまいそうな人の渦。頼りない子供のような紫の姿を見て、俺は手を強く握りかえた。正月に握った時冷たかった手は、今少し汗ばむほどに温かった。

横断歩道が青が変わってすぐに足早に歩きはじめる。小柄な紫には駆け足のようなスピードだが、この交差点は信号が変わるのが早いので、皆急ぎ足でその流れに乗らないと人にぶつかってしまう。横断歩道を渡り切って、少し呼吸を乱した紫のために一度止まって休んだ。

「どこに行くんですか？」

「まだ時間あるから先にお昼食べよう」

「時間？なんの時間ですか？」

「お昼食べながら話すよ」

不安そうな紫に微笑み返して、また手を繋いで歩き始めた。10
9の左の坂をゆっくりと歩いた。渋谷は駅が一番低い所にあるから、
どこに行くにも上り坂ばかりだ。

坂の途中で右に曲がる。すぐに小さなペットショップが見えた。
ガラス張りの窓から狭い部屋の中に押し込められた子犬や子猫達が
外からでもよく見える。こんな所で大勢の人間の視線を浴びる動物
達が可哀そうだ。

きっとそういう人間の同情心に付け込んで買わせようという、店
の人間の狙いなのだろう。そんな思惑など気付いていないかのよう
に、若い女の子達は立ち止まって無邪気に「可愛い」なんて言っ
ていた。

「あんな所に押し込められて動物達が可哀そうだよね」

俺は紫にそう言ったが、紫は無言で挙動不審に辺りを見渡すばか
りだ。やっぱり慣れない街に来ない方がよかったかな？と少し後悔
もしたが、今日はどうしても渋谷じゃなきゃいけない理由があつた
のでしかたない。

俺は紫の手を引いてまた歩き出した。しかし少しして2手に別れ
る道の途中で紫が立ち止まった。

「どこに連れていく気ですか？」

紫の顔が青ざめて震えている。どうしたんだろう。ここら辺は裏
道なのでさっきよりは人も少なく歩きやすいと思うのだが。

「どこっつてお昼だよ」

「私が渋谷知らないと思って変な所に連れていく気じゃないですよ
ね」

「変な所って……」

改めて考えてみた。俺が紫を連れていこうとした回転寿司の店はこのまま右の道を少し歩けばつく。そして紫の視線は左の道へ向いていた。左の道に何があるんだっけ？と思いだしてはたと気付いた。ま、まさか……。

左の道を行くとすぐにラブホテル街だった。

「田辺さん、なんか誤解してない？」

「私を甘く見ないでください。渋谷に行くと言いついてからネットで渋谷の情報を調べたんですよ。特に危なそうな所を中心に。ここ左に行く……」

「右だよ、右。この先に田辺さんの好きな回転寿司の店があるんだ。店内の皿ほとんどが1皿100円の激安店で……」

「慌てる所が怪しいですね。寿司で釣ろうとしたってそうはいきませんよ」

疑いの眼差しで絶対動くもんかと強情をはる紫を説得できず、結局目の前のパスタ屋に入る事にした。完璧なデートプランが、初めから頓挫した。ああ、こんな場所を選んだ過去の俺を呪いたい。

不幸中の幸いだっただのは、入ったパスタ屋が激安だったのと、もち太麺が値段の割にかなり美味しかったため、紫が店を大いに気に入り機嫌が直った事だった。

夏の思い出 2

ドリンクバーのお茶で食後のティータイムをする頃には、さっきの気まずい雰囲気もだいぶ良くなってきた。それでもまだ内心ビクビクだった俺は、紫の機嫌を伺う様にそつと話を切り出した。

「この後なんだけど映画を見に行こうと思うんだ」

「ああ、それで時間がまだあるんですね。なんの映画ですか？」

「『過去からの手紙』」

紫が目を丸くしてわかりやすく驚いた。ここは予定通りだと嬉しくなる。

「まさか……。葛城優吾原作のあの映画ですか？確かあれは公開は秋だったはず……」

「試写会なんだ。うまくチケットが手に入ってね。田辺さん葛城優吾のファンでしょう」

「そ……うですが……。どうして先輩わかったんですか？」

「前に田辺さんの部屋に行ったときに、本棚に葛城優吾の本ばかり並んでたから」

「人の部屋じろじろ見て……変態」

紫は俺を非難するようにつめて、ぼそつと呟くように言った。せつかく機嫌直ってきたのに、よけいな事言ってしまった……。俺は慌てて紫が喜びそうな話をした。

「試写会の舞台挨拶には原作者の葛城優吾が来るんだよ」

紫は息をするのを忘れたように茫然としていた。もっと喜ぶかと思っただのに、あんまり嬉しそうには見えなかった。

「どうしたの？嬉しくない？」

「い……え……嬉しいです。……あの席って決まってるんですか？」

「ううん。先着順で早めに行かないと席がなくなって見れなくなっちゃうかもしれない。開始は夕方からなんだけど今から行って並ぼう。だいぶ待つけど大丈夫？」

「待つのはかまいません。私も見たいと思ってた映画なので嬉しいです」

まだ表情がぎこちなくて全然嬉しそうに見えなかった。驚きすぎて実感わかないのか、それとも憧れの作家を近くで見られるかもしれないから緊張してるのか？

映画開始まではかなり時間があつたのに、すでに映画館には多くの人が集まっていた。やはり舞台挨拶付きの試写会という事で、皆良い席を狙っているのだろう。

俺と紫は列に並びながら、色々話をしながら開始を待っていた。

「田辺さんが読んでいたから葛城優吾の作品読んでみたんだけど、はまって結局今発売している本全部読んだよ。今雑誌『北斗』にも連載小説書いてるでしょう。だから毎月『北斗』も買ってるんだ」「ずいぶんお気に入りですね。どの話が好きですか？」

「ううん……。どれも好きだけど、やっぱり『初花』かな。ヒロイ

ンの大姫がなんとなく田辺さんに似てる感じがするし」
「え……。どうしてですか？」

紫は啞然とした表情で俺を見た。そんなに的外れな事を言ったかな？好きな作家の作品だけにキャラクターのイメージとかこだわりあるのかもしれない。俺は今までなんとなく似てる気がすると思っただけなのだが、それを具体的にしようとして少し頭を悩ませた。

「うまく言えないんだけど……。義高と一緒にいた頃の大姫って、優しくて可愛くて本当に無邪気な子供だったよね。それが突然義高がいなくなつて、すっかりひねくれて周りの人間に急にキツイ事言うようになつちゃつて。周りの人間は『こんなの本当の大姫じゃない。気が狂つてしまったんだ』なんて言い始めて。そんな周りの慌てぶりも大姫は冷めた目で見てるんだけど……」

その後の事を言うのに少しためらつて紫の反応を見ると、無言でじつと俺の話の続きを待っていた。本人を前にその人の性格を客観的に話すのってなんか気まずいな……。

「俺の勝手なイメージだけど、本当は田辺さんも大姫みたいに純粋な子供でいたかったのにそれを奪われてしまったんじゃないか？とか。田辺さんもキツイ事言つたりするけど、皆が目をそむけていた本音をずばつと言つてるだけで。それで慌てる周りを大姫みたいに冷めた目で見てるのかな？とか……」

なんか俺の中で作り上げていた勝手な紫像を話して、呆れられるんじゃないかと思つたが紫はただ一言「そうですか」と呟いただけだった。

バカとか勝手な妄想するなとか言われた方が、紫らしいと思うのだがなんだか今日の紫は大人しいな。

その後も最近読んだ本の感想とかそんな事をずっと話していた。紫の感想はどれも毒を含んだシニカルなものばかりで、彼女らしいのだが不思議な魅力があつて面白かつた。それになんだろうか？こんな感想どこかで聞いた事あるような？と時々思うのだが、どこで知つたのか思いだせない。

紫が誰かの受け売りで感想を言うなんてしないと思うが、しかし本の感想について紫と話すのは今日が初めてで、どうしてこんなデジャヴを感じるのかわからなかつた。

長い時間待つてようやく席について上映が始まつた。『過去からの手紙』は葛城優吾初のミステリー小説だつたが、小説ならではのミスリードがあつて映像化は不可能と言われていた作品だ。それがどんな話になるのか楽しみなような、不安なような気持だつた。

原作を読んでストーリーは知っていたのに、初めから終わりまで目が離せないような緊張の連続で、見終わった後はただ茫然としてしまつた。

「すごい演出だつたね。まさか原作と犯人まで変わるなんて」

「ええ……。原作とは全然違う物語になつてますけど、上手く原作の世界を表現した上で、映画ならではの表現を加えたというか……」

「これ、原作ファンからは賛否両論だろうね。俺は好きだけど」

「私もこの映画好きですね。もう一度初めから見返してみたいです」

そんな感想を二人で話していたら、上映後の舞台挨拶が始まつた。監督や役者と一緒に最後に葛城優吾が壇上に上がった時にひときわ大きな歓声があがつた。

やっぱり女性ファン多いな。作品の内容的には男の俺でも共感で

きるような話なんだけど、やっぱり作者の見た目で釣られるファンも多いんだろうな。生で見るのは初めてだったが、雑誌の写真で見る以上に葛城優吾はいい男だ。迫力というか、オーラが漂っていて簡単には近づけない独特の空気を醸し出している。

出演者達と当たり障りのない話が続いていたが、司会から「原作から大きくアレンジした内容になっている点をどう思うか？」という、誰もが気になる質問をされ、葛城優吾は穏やかな表情で答えた。

「監督の大胆な変更はとてすばらしく、私もただの観客になって楽しみました。小説と映画はまったく違う媒体ですから、小説と同じものを作るうとしたら、原作よりつまらなくなると思います。特にこの話はミステリーですから先の展開を知っていると面白さが半減してしまうと思うのですが、原作でトリックを知っている方が見ても、映画は良い意味で裏切ってくれるのではないかと思えます」

大勢の観客に向けてのリップサービスだけとは思えないほど、葛城優吾は映画を褒めちぎっている。見た目は近寄りがたい感じなのに、話し方がまっすぐで誠実な温かみのある雰囲気、俺はますます葛城優吾のファンになっていた。

隣の紫も葛城優吾を食い入るようにまっすぐに見つめていた。ただその表情は何か苦しそうで、なぜ彼女がそんな顔をするのかわからなかった。

夏の思い出 3

試写会が終わって映画館を出るともうすっかり外は夜だった。この後食事に誘おうか、それとももう帰った方がいいのか？あのお爺さん達なら紫が遊びで多少遅くなっても、むしろ喜んでくれそうな気がするのだが……。

「田辺さん。この後夕飯食べていかない？」

「夕食は家で食べます。それよりもここらへんでどこか渋谷の夜景を見られる所ないですか？」

「夜景がみたいの？」

「今日初めて渋谷に来た記念にこの街の全体を見てみたくて」

紫らしくない、ロマンティックで女の子らしい希望だった。俺は彼女の珍しい希望をかなえてあげたくて、頭の中で必死に候補を考えた。

「近場でなくはないんだけど……」

そこで俺はためらった。昼間の紫の反応を思い出して、また変に誤解されたらどうしようかと不安になるのだった。俺のためらいをうちけすように、紫は目を輝かせて無邪気に微笑んだ。

「どこですか？」

「セルリアンタワー東急ホテル。ホテルのバーからの東京の夜景が綺麗に見えるんだよね……」

またホテルに連れ込もうとしてみるとか、変に疑われるんじゃないかと恐る恐る紫を見たが、まったく怒るそぶりもなくあっさりと言った。

「そこ、行ってみたいです」

「へっ？いいの？」

「だってそこからなら、先輩の家みたいに無駄に綺麗で嫌味な夜景が見られるんですよ」

いつもの紫らしい毒のある言い方だった。今日の紫はいつもの彼女らしくない反応が多かったので、俺は苦笑しながらも嬉しくなった。

ホテルのバーではピアノの生演奏が流れていて、いい雰囲気だった。窓際のソファ席に座り、紫は紅茶を俺はグラスのワインを1杯頼んだ。

紫がぼんやり外の景色を眺めている。夜景を喜ぶなんて普通の女の子らしい面もあったんだな。

「作り物の景色なのに綺麗ですね……」

紫は皮肉げな微笑を浮かべてそう呟いた。素直に感動できない所がいかにも紫らしい。紫は夜景を堪能した後、紅茶を一口飲んでまた外の景色を眺めた。そのまま外を向いたまま、ひとり言のように俺に言った。

「前に初詣に行った時、私が遠くに行っても覚えていてくれるって言いましたよね」

そういえば湯島天神でそんな話をした。なぜ急にそんな話を始めるのだろう。俺は不思議に思いながら相槌を打った。

「今日大姫に私が似てるって言うてくれましたけど、もし……。私
が先輩のイメージを壊すようなひどい事しても、それでも私を信
じていてくれますか？」

紫の横顔は何の感情もない人形の様で、なぜそんな質問をするの
か、何を考えているのかさっぱりわからなかった。だから俺も深く
考えもせずに素直に思った事を口にした。

「イメージを壊すも何も……。田辺さんがひどい事をするのはいつ
ものことじゃないか」

紫は驚いたような顔をして俺の方を向いた。その後花の様な笑顔
を浮かべた。

「そうでしたね。どんなにひどい事しても先輩は今もしつこく私に
付きまっていますね」

「その言い方ひどいなあ。それだけ田辺さんの事を好きって事なん
だけど……」

俺のぼやきに声をたてて紫は笑った。夜景の見える雰囲気の良い
バーという最高のシチュエーションでの愛の告白だったのに、どう
にもしまらないシーンだった。

ホテルを出ると駅はすぐ近くで、あっというまに改札前までつい
てしまった。

「先輩、今日は本当にありがとうございました。とても楽しかったです」

紫のストレートな感謝の言葉をなぜか俺は素直に受取れなかった。いつもの彼女らしくないし、なんだか嫌な予感がする。

「田辺さんに喜んでもらえてよかった」

「ええ。いい思い出ができました」

その言葉には重みがあつて、本心からの言葉だと思えた。紫に学ばらしい思い出ができたなら、喜ぶべきなのに、なぜだろこの胸騒ぎは。

俺は送っていくと言ったが、家があつたく反対方向のため紫に断られた。それで渋谷駅の改札で別れる事になったのだが、いざとなるとなかなか別れがたくなつた。

さよならなんて言いたくなくて困っている時に、紫の体が行きかう人達にぶつかられて少しよろめいた。

俺はどさくさにまぎれて思わず紫を抱きよせる。たぶんほんの一瞬间の事だったが、俺の胸は早鐘のように高鳴り、とても長い時間が過ぎたような気がした。

また紫に睨まれるかと恐る恐る紫を見降ろすと、紫は泣き出しその表情をしていた。

「田辺さん？大丈夫？」

「はい……。すみません。大丈夫です」

紫は目をつむって軽く深呼吸すると、すぐにいつもの愛想笑いを浮かべた。

「今日は1日ありがとうございました」

「うん。今度は夏休み開けに学校でだね。またね」

そこでいつもなら「また学校で」と帰ってくるのに、紫は無言だった。彼女はそのまま改札に向かって歩いて行って、改札を通りこした所で振り向いた。

「さようなら。先輩」

それはごく当たり前の別れの言葉だったのに、なぜだか今生の別れのような悲しい響きがした。

夏休みに入って紫と会う機会がなくなった。時々メールを送っていたのだが一度も返信はない。以前からなかなか返信をくれない事が多かったので仕方がないとあきらめてすごしていた。

夏休みのある日、『北斗』の発売日だったので本屋に行ったのだが、最新号の『北斗』の目次を見て驚いた。今月の一番の特集が葛城優吾だったのはそれほど驚くことではないが、一つの小特集に『源氏』の名前があったのだ。

今年に入ってから『北斗』を見始めた俺は知らなかったのだが、『源氏』はこの雑誌に長年投稿を続けていた素人批評家だったらしい。それが評判で去年の春頃から書籍コラムの連載が始まった。『源氏』というペンネーム以外、いっさいのプロフィールを隠した謎の批評家というのが売りだった。

それなのに小特集の見出しが『今明かされる『源氏』の正体』と

いうまるで三流芸能雑誌のような挑発的なものだった。どうやら1年程にわたって続いたコラムをまとめた本が出版されるため、それにあわせて特集が組まれたようだ。

俺は雑誌コーナーでそのまま真っ先に『源氏』の特集ページをめぐった。特集の扉ページには衝撃的な煽り文句とともに、『源氏』こと田辺紫独占インタビュー』という言葉がおどっている。

まさか……。ただの偶然。同姓同名だよ……。と思いつつページをめくるとそこには紫の写真が載っていた。

俺は信じられずに頭が真っ白になった。しばらくして機械的にレジに向かって、『北斗』買って帰った。

家に帰って夢中で特集記事を読んだが、まったく頭にはいつてこない。この1年ずっと一緒にいたのに紫がこんな事をしてるなんて俺は知らなかった。その事実がとてもショックだった。

撮影用のメイクとセットで着飾られた写真の中の紫は、遠い世界の人間のように現実感のない雰囲気微笑んでいた。

蝉時雨 1 (前書き)

珍しく古谷教授視点での物語です

蝉時雨 1

梅雨が明け、今年も暑い夏がやってきた。大学内の木々から蝉の声が聞こえてくると、義孝はいつも彼と初めて会った時の事を思い出す。私はしばらく教授室の窓から暑い外を眺めて物思いにふけていた。

その時遠慮がちなノックの音がした。

私が返事をするに「失礼します」と声が聞こえ、若い女性が入ってくる。

以前は明るく澆刺とした健康的な美しさだったが、久しぶりに会った彼女は大人しく元気がなかった。就職して忙しくなり疲れている……ばかりではないだろう。もう彼女も彼の異変に気付いている頃だ。

「お久しぶりです。古谷先生。今日はお忙しい所、お時間いただきありがとうございます」

「私は大丈夫ですよ。それよりも上条さんは仕事大丈夫ですか？」

「はい。最近やっと少し慣れてきて余裕が出てきたので……。それに悩み事を抱えたままだと仕事にも集中できないし」

「朝比奈君の事ですか？」

「はい。本当は榎木君か田辺さんに聞こうと思ったのですが、なぜか二人に連絡取れなくて」

「彼らも夏休みとはいえ色々忙しいようですね。それに二人よりも私の方が朝比奈君とのつきあいも長いですから。私の方が冷静に判断できると思いますよ」

本当の所、二人は今それどころではないだろう。あの『北斗』の記事に柁木君も気づいているだろうし、田辺さんも本格的にメディアに露出した事で忙しくなっているはずだ。

それにまだ自分の事で精一杯の彼らに、朝比奈の問題を受け止められるとは思えなかった。だから朝比奈が授業をさぼったと聞いた時、研究の壁にぶつかっているなどと言って、二人が朝比奈を気にしないでいいようにごまかしたのだ。

強気な上条らしくなく、不安げに揺れる瞳を見て、私はため息をついた。学生時代の彼女はいつも自信に満ち溢れ強く輝いていた。弱者を守り引つ張り上げるような力強さを持ち、そんな彼女なら彼を任せても大丈夫だろうと思っていたのだが……。果たして今の弱々しい彼女に現実を受け入れるだけの強さはあるだろうか？

「この前朝比奈と久しぶりに会ったんですが様子がおかしくて。しばらく会わないうちに何かあったんじゃないかと思って」

「どれくらい会ってなかったんですか？」

「最後に会ったのは3月頃です」

「そうですか……。確かに5月くらい頃は朝比奈君は柁木君が心配するぐらい様子がおかしかったですね。授業をさぼったり、論文の提出が遅れたり」

「朝比奈が？本当ですか？何かまた遊びまわったりして、勉強がおろそかになつてるとかなんでしょうか？」

「そんな事ならいいんですが。まあ最終的には夏休み前に論文は提出されましたし、出席日数にも特に問題なかったので安心してくだろ」

授業をさぼったり論文を提出しないなど、普通の学生なら褒められた事ではないが、朝比奈の場合は別だ。むしろ普段の彼は周りに気を使いすぎて、神経をすり減らして生きている所がある。多少若者らしくはめを外して息抜きをしてるとかならまだ良かった。

2年前の夏。上条と朝比奈が急速に仲よくなる前の朝比奈は、適度に影で遊んで息抜きをしていた。朝比奈は隠しているつもりのもうだったので、見て見ぬふりをしていたがあの頃とはまったく様子が違う。

「最近よりもむしろその前に何かあって、それから徐々におかしくなったのではないかと、私は思うのですが……。例えば2月頃朝比奈君に何かありましたか？」

「……どうして先生はそう思うのですか？」

「長年の教師生活で培われた観察力が、おかしいと思ったのがその頃だったので。まあ朝比奈君との付き合いも長いですからね。彼が上手に隠し事をしてもすぐにわかるんですよ」

上条は何か悩むようにしばらく沈黙していたが、やがて何かを決心したように話し始めた。

「これは内密にさせていただきたいのですが……」

そう言って彼女が巻き込まれた会社のトラブルに、朝比奈が介入した一件について、上条はすべて話してくれた。

あれほど朝比奈に釘をさしたのにまた工商事に関わるとは……。朝比奈の無茶にも呆れたが、それ以上に驚いたのは朝比奈が菱沼という男を殴ろうとしたという事だった。

あの朝比奈がそんな事を……。朝比奈は酒が入った時は別にして、

どれほど怒っても決して他人に暴力をふるう男ではなかった。

「朝比奈君も上条さんと付き合いだしてからは、ずいぶんと安定して穏やかになりましたが、たぶんその一件で彼の中のバランスがまた狂ってしまったんでしょね」

「安定したとか、また狂ったとかどういことですか？私の知る限り朝比奈がそんな情緒不安定になった記憶がないんですが」

「朝比奈君は本音を隠すのが上手いですから。大学入学してからずっと無理をして隠していましたね。まあ私は初めてあった時に、彼のやっかいな性格に気がついたので、それから彼が隠してもわかってしまうようになったのですが」

私はそこで言葉を区切って、また窓の外に目をやった。まだ日が傾きかけたばかりの時間で外はかなり暑いだろう。

「上条さん。ここからベンチが見えるのわかりますか？あの木陰の下です」

上条は私が示した場所に目をやって頷いた。

「6年前のちょうど今と同じ頃。朝比奈君があそこに座っていました。私が初めて彼と出会ったのも今日のように暑く、蝉の音が聞こえていました」

「6年前？その頃はまだ朝比奈は大学入学前ですよね」

「夏休みを利用して、大学受験の前に下見に来ていたそうです。しかし初めて会ったあの日の彼は危うげで、最近の彼とどこか似ていました」

「高校時代の朝比奈……」

そう言って上条は何かまた何か悩むように沈黙した。今日の彼女は以前のような自信が欠片もない。朝比奈につられて、彼女も何か見失ってしまったのだろうか。

「上条さん。しっかりしなさい。以前の自信はどうしたんですか？君がそんな様子では、朝比奈君の事をどうにかなんてできませんよ」

上条は目を見開いて、それからゆっくりと瞬きをした。唇をきつく噛みしめて何かをふっ切ったようにまっすぐに私を見る。その目には強い意志がこもっていた。少しは以前の彼女の様な強気が戻ってきたようだ。

「去年の年末、朝比奈の地元に行く機会があつて、その時朝比奈のお姉さんと会つたんです」

そう言って彼女が朝比奈の姉から聞いた、昔の朝比奈の話をしてくれた。それは私が初めて会った時の朝比奈の姿と同じだった。そして彼の姉が語った『傷』という言葉。それに思わず顔をしかめた。

「そうですか。朝比奈君は昔から周りに気を使いすぎて生きてきたのでしょうか。それが最近私や上条さんに心を開いて、少し楽に生きられるようになっていた。でもきつとその2月の一件でまた自分の殻に閉じこもって壁を作る癖がでてきました」

「そんな……どうして。私何か朝比奈が気に触るような事をしてたのでしょうか？」

「そうではないんですよ。たぶん彼自身の問題だ。私もはっきりとした事はいえませんが。ただこれだけは言っておきます」

私は上条を真正面からまっすぐに見つめた。私が大事な事を話そうとしている意志が伝わったようで、彼女も私の視線からそらさずに受け止めた。

「上条さんが朝比奈君にただ同情してるだけなら、すぐに手をひきなさい」

「どうしてそんな事言うのですか」

「彼の問題と向き合うなら、本気で朝比奈君とぶつかりあう覚悟と強さが必要なんです。今の上条さんはまだ迷いがある」

上条は困ったような表情をして少しだけ俯いた。しかしすぐに強い意志を持ってまた顔をあげた。

「先生は何かご存じなんですか？」

「こうではないかという推測です。真実は上条さん自身が見つけない。そのための協力なら私はいつでもします」

「ありがとうございます。お忙しい所ご心配おかけしてすみませんでした。少し考えてみます」

彼女は礼を言って部屋を出ていった。上条は迷う気持ちと、気を強く持とうとする気持ちの間で揺れているように見えた。それでも今は彼女が答えを出すのを待つしかない。

また窓から外を見て、木陰の下のベンチを見た。あの日の様に朝比奈がそこに座っている気がした。しかしそこには今誰もいなかった。

蝉時雨 1 (後書き)

お気に入り登録がついに50件突破しました

読んでくださる皆様に心よりお礼申し上げます

お礼の小話でも書きたい所ですが、執筆が追い付いていないので、
いずれ余裕が出来たら書きたいと思います

何か読んでみたいものなどリクエストあれば、ご連絡ください

蝉時雨 2

あの日、夏休みでいつもより静かな大学内には、蝉の声がよく響いていた。冷房の効いた室内から見ても、外は暑そうな昼を少し過ぎた頃だった。

義高が窓から外を眺めるとベンチに若い男が一人で座っていた。ベンチには木陰が出来てはいるが、この暑さの中で長袖のシャツとジーンズ姿だった。

冷房が当たり前に育った最近の若者は、暑さに弱いと思っていたが珍しいなと思うだけで、すぐに興味を失って仕事に戻った。

それから一時間後、空になったコーヒーを入れ直そうと立ち上がった時に、何気なく外を見たらまだあの男がいた。

先ほどから動いた様子もなく、同じようにベンチに座っていた。

私は少し心配になった。この暑さなら長時間外にいるだけで熱中症になる危険性がある。もしかしたらすでに具合が悪くなって、動けずにあそこで休んでいるのかもしれない。

取り越し苦労ならそれでもよい。そう思って様子を見に外へ向かった。

近くまで来ても、男はぼんやり空を眺めていて私に気づいていなかった。この暑さを感じていないかのように表情に乏しく、大丈夫か？とますます不安になった。

「君。大丈夫ですか？どこか具合が悪いのでは？」

私が話しかけると、今私の存在に気づいたようでとても驚いてい

た。しかしすぐに人当たりのいい微笑みを浮かべて口を開いた。

「お気遣いありがとうございます。大丈夫です。少し休んでいただけなので」

「しかしもう一時間以上ここに座っているでしょう。休むなら涼しい所に移動した方がいい」

男は笑顔を曇らせて、少し動揺した。それでもまた微笑もうとしていたが、ぎこちなさが残るものだった。人当たりのいい笑顔と思想たのも無理して作ったのかもしれない。

「見覚えのない生徒だ。私は学内でも目立つ人間なので男の方は私が誰か知っていて、緊張してるのだろうか？」

「よかつたら私の部屋に来ませんか？冷房も効いてるし、アイスコーヒーぐらいありますよ」

「いえ……そんな、申し訳ないです」

「遠慮しないでいいですよ。私のお節介ですから」

戸惑う男を連れて私は自分の部屋へ案内した。廊下を歩く途中で男が急に立ち止まった。視線の先には研究室の看板があった。

「失礼ですが、国文学の先生ですか？」

男の質問に私の方が驚いた。てっきり自分を知っているものと思っていたが、うぬぼれていたようだ。

「そういえばまだ名乗っていませんでしたね。私は国文学の古谷義高と言います」

私が名乗ると男は大きな口をあけて驚いた表情で固まった。しばらくして慌てて頭を下げた。

「失礼しました。僕は朝比奈裕一と言います」

「朝比奈君ですか。君は何科かな？」

朝比奈は困ったような表情で、おそろおそろ言った。

「あの……僕、ここの生徒じゃないんです。来年の春受験しよか悩んで、今日は見学に」

「ああ、見学ですか。それはいい。ぜひ来年の春から一緒に勉強しましょう」

朝比奈は今度は無理ではなく、素直な笑顔を浮かべた。

「実は僕、古谷先生の本が好きなんです。お会いできて嬉しいです」「そうですか。ありがとうございます」

研究所以外にも色々と本を書いているため、私の名前は学外でも知っている人間は多い。時々志望動機が私の本に影響を受けてという生徒もいる。

お世辞で言われる場合も多いが、彼は素直に嬉しそうにしているので、嫌味な感じはなく私も気持がよかった。

冷房の効いた部屋に入って、私が紙パックのアイスコーヒーをコップに入れようとしたら、朝比奈が隣にやってきた。

「すみません。コーヒーは結構です」

「遠慮はいいですよ。それともコーヒーは苦手ですか？」

「好きなんです、最近胃の調子が良くないので、あまり飲まないようにしているんです」

「それはいけませんね。ではこれならどうですか？」

私は冷蔵庫からミネラルウォーターのペットボトルを取り出して渡した。だいぶ汗をかいているから水分補給をしないと、脱水症状になりそうで心配だった。朝比奈も今度は遠慮なく受け取って、美味しそうに飲んだ。

ソファに座って一呼吸ついた朝比奈は、少し顔色が良くなったように見える。少し休ませた方がいいだろう。私は無理に彼に構わず自分の机に座った。

「私は仕事してますから、自由にくつろいで下さい。本棚の本は自由に読んでいいですよ」

「いいんですか？ありがとうございます」

嬉しそうに微笑んで、彼はさっそく本棚に足をのばした。仕事をしながら横目で観察していると、彼は平安期の古典に関する研究書を何冊か手に取って見ていた。どれも希少な本ばかりで、その選び方から日頃の読書量の多さがわかる。

こんな文学に熱心な若者が、来年うちの学生になるなら嬉しい。

彼は迷いながら1冊を選び、ソファに戻って静かに読書をしていった。私もそのまま仕事に戻ってしばらく彼の存在を忘れていた。蝉の声だけが聞こえる静寂の中、仕事に区切りがつくまで熱中していたら、いつのまにか日が傾いていた。蝉の声も日中のアブラゼミの五月蠅い音から、夕暮れ時のヒグラシの悲しげな声に変わっている。

朝比奈を見るとまだ先ほどと同じ本を読んでいた。私が視線を向

けるとすぐに朝比奈も顔をあげて私を見た。もしかしたら私が声を掛けるまで待っていたのだろうか？

今日初めて会ったが、初めて会ったときから彼は私に気をつかって、遠慮してばかりだった。そういう性格なのだろうか、だからこそ教師の私が気に掛けてあげないといけない。

「お仕事終わったのですか？」

「はい。すみません。仕事に集中しすぎて、待たせてしまったみたいですすね」

「いえ。おかげさまで普段目にできない、貴重な本を読ませていただきました」

「受験勉強で忙しいでしょうが、また時間がある時にいつでも本を読みにいらっしゃい」

「……はい。ありがとうございます」

朝比奈がすぐに喜ぶかと思ったが、少しためらってから頷いた。その反応にふと考えた。彼は一体どこから来たのか？バック一つ持たずに手ぶらだったので、てっきり近場からふらつと遊びに来たのかと思ったが、もしかして遠くから来たのではないか？

「朝比奈君はどこに住んでいるのですか？」

思った通り彼はすぐに返答できずに、言葉を詰まらせていた。私が彼の返事をじっと待っていると、観念したように朝比奈は口を開いた。

「金沢です」

「……大学の下見に上京したのかな？それにしては荷物が無いけど、

ホテルに置いてきたとか？」

「いえ。荷物は他にありません。ホテルとかも予約してないです。昨日急に思い立って深夜バスに乗ったので何も準備してませんでした」

「今日の夜どうするつもりだったんですか？」

「まだ決めてません」

呆れて物も言えなかった。言葉は丁寧で礼儀正しいし、しっかりとした優等生に見えるのに、ずいぶん無鉄砲だ。なぜ急に思い立って金沢からやってきたのか？それに暑い中なぜずっとベンチに座っていたのか？

何だか急に不安になって、目を離してはいけないと思った。

「今日泊まる所がないならうちにきなさい」

私がそう言うと朝比奈は慌てて立ち上がった。

「そんな！結構です。今日はお世話になりました。そろそろ失礼します……」

逃げようとする朝比奈。私はすばやく回り込んで、入口の扉の前に立った。退路を断たれた朝比奈は困ったような顔をして俯く。

「うちに来るのが嫌なら、保護者の方に一度連絡を……」

「それだけは辞めてください！」

今日初めて聞く朝比奈の大声に驚いた。大人しそうに見えて実は気が強いのもかもしれない。先ほどまでうつむいていた顔は私にまっすぐ向かっている。その目にはかすかに敵意を感じる。

「家出ですか？ご家族が心配してるでしょう」

「まだ大丈夫です。みんな今家にいませんから」

「どういうことですか？」

「本当は昨日から泊まりで家族旅行だったんです。でも僕は受験勉強に集中したいと言って家に残ったので……明後日にならないと家族は帰ってきません。大丈夫です、親達が帰ってくる前に家に帰ります」

何の計画もなしに東京まで来てしまうような無鉄砲さと、家族に

ばれないように気を使う冷静さを同時に持つなんて、どこかアンバランスで奇妙な気がした。

家族のいないうちにはめを外したい、東京で遊びたいというならまだわかるが、東京まできて大学のベンチで暑い中座っていたのはなぜか？

「では今日はやはりうちに泊まりなさい。教育者として家出少年を見過ごせません」

朝比奈は悔しそうに唇をかみしめて明らかな敵意をむき出しにした。今までの大人しい優等生というイメージから想像もつかないような攻撃的な眼差しだ。

この年頃の男の子というのは扱いが難しい。ちょっとした事ですぐ切れる。朝比奈は若いが体格は細く華奢で、もし暴れても取り押さえられるだろう。だが力づくで押さえつけても問題は解決しない。この少年の心を解きほぐさなければ。

私は朝比奈を無言で圧倒しながら一步踏み込んで彼を観察した。彼は手ぶらだが万が一凶器を隠し持っていたりしないか……。

その時彼の服装を見ていて気がついた。シャツの胸ポケットとジーンズの両側のポケットが膨れている。財布と携帯とあともう一つは……。

私はにやりと笑って、彼のポケットの一つからあるものをかつさらった。朝比奈は慌てて取り返そうとしたが素早く後ろに引いてかわす。

やはり煙草だったか。

「これを宿代替わりにいただきましょうか」
「……返してください」

私は朝比奈から取り上げた煙草を1本口にくわえて、ポケットからライターを取り出して火をつける。わざと朝比奈に見せつけるようにゆっくり煙を吐き出して見せた。

「もう吸ってしまいましたから返せませんね。家出と未成年喫煙で警察に補導していただきましょうか」

「先生……優しそうな顔して性格悪いですね。そんな美味しそうに吸われたら、吸いたくなるじゃないですか」

悔しそうに眉間にしわを寄せる朝比奈の額を人差し指でつついた。

「子供にはまだ早いですよ」

自宅への帰り道、助手席の朝比奈は無言だった。ふてくされていくわけではない。最初にベンチで見かけた時と同じ様に、ただ窓の外の夕焼け空をぼんやりと眺めていた。

「今日はどうしてあのベンチでずっと座ってたのですか？」

朝比奈はすぐには返事をしなかった。空を見たままこちらに顔を向けない。運転しながら横目で表情を伺ったが、その横顔からはどんな感情も読みとれない。

「蝉時雨を聞いてました。東京は蝉の声も違う」

朝比奈の眩きは本心なのかわからない。しかしそれ以上何もいう気もないようで、ひたすら無言を貫いた。

「うちは子供も独り立ちして、妻と二人暮らしですから遠慮はいりませんよ。可愛い私の子猫ちゃんが待っていてくれるんです。小顔で目の大きな美人さんなんですよ」

私が愛おしそうに微笑むと、朝比奈は気味の悪いような表情で私を睨んだ。声は出てなかったが口の動き方でなんて言ったかわかった。『色ぼけじじい』とはなかなかいい性格してますね。朝比奈君。

玄関の扉を開けるて朝比奈を招き入れると、私はいつものように玄関でかがんだ。

「今日もお迎えありがとう。伽羅^{かろ}」

私が手を差し出すと、華奢な三毛猫の伽羅が私の手にすり寄った。

「可愛い子猫ちゃんって……本当に猫の事だったんですか……」
「猫じゃなければなんだと思ったんです?」

気まずそうに眼をそらす朝比奈。この優等生ぶった、性悪少年をどうからかってやるうかと思っていた所に、奥から妻がやってきた。

「あなた。お帰りなさい。暑い中ようこそいらっしやいました」

淑子が笑顔で声をかけると、朝比奈は爽やかな笑顔で礼儀正しくお辞儀した。

「急にお邪魔してすみません。お世話になります」

実に模範的な態度だ。人を色ぼけじじい呼ばわりするような不良とは思えない。

私が意地の悪い笑みを浮かべると、朝比奈は淑子の目を盗んで一瞬私を睨んだ。

最初に会った時に比べて、ずいぶん素直になったと嬉しくなった。

リビングのソファに座って、二人で冷たいお茶を飲んだ。

私の膝の上には伽羅が丸くなって眠っていた。私が座るとすぐ膝に乗りたがる可愛い子だ。

「外は暑くて汗をかいたでしょう。朝比奈さん。お風呂の用意できてますから、どうぞ」

「いえ、僕は後で結構です」

「遠慮する事ありませんよ。私はまだこの子の相手をしないと。ねえ、伽羅？」

伽羅は頭を上げて、可愛い声で返事をした。私は可愛い反応に思わず目を細める。そんな私達を朝比奈は呆れたような顔で見ている。

「……わかりました。それではお先に失礼します」

朝比奈が部屋を出たのを確認して、私は淑子に目で合図をした。

「わかってます。着替えを用意して、ついでに着ている服を洗濯する時に、うっかり財布の中身が見えてしまっても仕方ないわよね」

人のものをもって探るのは、あまり気が進まないのだが、もし

もの時のために住所や連絡先を確認しておく必要がある。わかって
いるが私より乗り気な妻に呆れる。

「さて、そろそろ行きましようか」

「まだ早いだろう。服を脱いでる頃じゃないか？」

「だからですよ。タオルを持って行った所で、うっかり見てしまっ
ても不可抗力よね」

「何を見る気ですか。まったくあなたは……。若い男の子が遊びに
来たからって……」

私のボヤキを笑いながら妻が出て行った。

年を取ったとはいえまだまだ美しい淑子に裸を見られ、恥ずかし
がる反応を見て楽しむに違いない。

我が妻ながらずいぶんいい性格をしている。本人はちょっとした
イタズラぐらいにしか思っていない所がたちが悪い。

愛猫を撫でながら私は悩んだ。まだ朝比奈の衝動的な家出の理由
も、本気で帰る気があるのかわからない。

最悪金沢まで無理やりついていって、家に無事帰るの見届ける
べきか？しかし朝比奈が嫌がるのは目に見えている。

「あなた」

気がついたら、いつのまにか淑子が戻っていたようだ。淑子の顔
は青ざめ、目が不安に揺れていた。

「どうしたんですか？」

妻はずいぶん動揺しながら、自分が見た事と、ある疑いを話した。それを聞いて私は思わず顔しかめて呻いた。

もし妻の想像通りなら、彼を家に帰していいのか？ますます複雑になった難問に頭を抱えた。

蝉時雨 3 (後書き)

古谷教授は元愛煙家。

でも奥さんに体に悪いと禁止された

ライターは昔愛用してた物をいまだに持ち歩いて、隠れてたまに吸ってたりもする

でも奥さんにばれると怒られる

それから古谷教授は猫好き

警戒心が強くて厄介な子をてなづけるのが好き

淑子夫人は悪気なく、若い男の子をからかう小悪魔さんです
ねでも大人しく恥ずかしがるような朝比奈ではなかった
ので残念

蝉時雨 4

「お風呂ありがとうございました」

「では、次は私が入ってきますか」

平静を保って風呂に向かおうとしたが、朝比奈の探るような目を感じて足を止めた。

「何か？」

「いえ……。何か様子がおかしい気がして」

彼は人の顔色の変化にずいぶん敏感なようだ。なかなか手ごわい相手だ。私は今思いついたという顔を作って言った。

「そつだ。朝比奈君ちょっといらっしやい」

私は彼を連れて書斎に向かった。すべての壁が天井まで本で埋め尽くされたその部屋を見て、朝比奈は圧倒されたように茫然と立ち尽くした。

「夕飯まで暇でしょうから、ここの本好きに読んでいいですよ」

朝比奈の顔から思わず笑みがこぼれた。しかしすぐに慌ててすました顔を取り繕う。素直に喜ばしいものを。昼間の学校での素直な笑顔は皆作った物だったのだらうか？なんとも厄介な性格だ。

私は彼をおいて風呂へ向かった。シャワーでも浴びて冷静にならなければ、考えもまとまらない。

風呂からあがってから音を立てないように廊下を歩いて、書斎の前で立ち止まった。音をたてないようにゆっくりと扉を開けると、デスクスタンドの明かりの下で本を開く朝比奈の姿があった。

本を読んでいるようであり、視線は本を通り越してぼんやりとしていた。ひどく疲れたような顔で、ため息をつく姿は、若者らしくなく生氣のかけらもない。

無意識のしぐさでポケットを探って、ライターしか出てこなかった事に自嘲気味に笑っていた。煙草がない事を忘れて思わず吸おうとしてしまうほど、彼にとってはごく当たり前の行為のようだった。

どんな人生を過ごしたら、こんな病みつかれた10代になるのか。彼に同情した所で何も解決などしない事はわかっていても、どうにもやるせない気持ちになった。

その時、朝比奈がゆっくりと頭をあげてこちらを見た。皮肉めいた微笑の朝比奈と目があった。気付かれたならしかたがない。私は堂々と部屋に入った。

「人の書斎で煙草を吸おうとするなど、いけませんね」

「そんな所から見てたんですか？悪趣味な人ですね」

丁寧な言葉を使っているにも、どこか人を見下すような少年の言葉に思わず顔をしかめ、すぐに悲しくなる。若者に説教するのも老人の役目だが、どうも彼の背景に見える暗い影に躊躇してしまう。どんなに不幸な人間であろうとも、してはいけない事はだめだと言ってやらなければ、人として駄目になってしまうのに。

朝比奈の視線が私の顔から下へと移る。私の足元にすり寄る伽羅を見ているようだ。

「さっきトイレに行こうと風呂場の前を通りかかったら、その猫が

じつと立って待ってました。いつも先生がでてくるの待っているんですか？」

「ええ。冬寒い廊下でも、私が長風呂しようとなげに待っていてくれますよ」

朝比奈はバカにするような笑顔で伽羅を見て、近づいて手を伸ばした。伽羅は不愉快そうに朝比奈の手を引っ掻いた。

「警戒心は一樣あるんですね」

「この子はとても臆病で私以外の人間には懐かないんですよ。妻の方が私より世話をしているのに、妻にもまったく懐かなくて。台所に立っている妻の足をよく噛みにきたりするそうですよ」

「そんな可愛げのない猫じゃあ、奥様には嫌われているでしょうね」

「いいえ。妻もこの子が好きですよ。この子は私達の子供の様なものですからね。懐かないからといって子供を可愛がらない親はいませんよ」

「先生達がお人よしなだけです。見ず知らずの僕を心配して家に泊めてしまうようなお人よしですからね」

彼の皮肉を含んだ言葉に怒る事はなかった。むしろ人を信じられない可愛そうな子だと同情してしまいそうになる。私は心を鬼にして彼が聞きたくないであろう質問をした。

「君のご両親が、君を可愛がってくれないから逃げ出したんですか？」

朝比奈は怖い顔を作り、声を荒げて言った。

「違う！父さんも母さんも姉も妹も、みんな優しいし僕を可愛がってくれる！」

「なら、なぜ旅行も拒否して、一人で東京まで来たんですか？家族が嫌いなんじゃないですか？」

「僕が家族を嫌いなんじゃない。家族にとって僕が必要ない人間なんだ。だから旅行も断って家に残った。でも一人で家にいたら寂しさに耐えきれなくなった。あの家じゃないどこかに行きたかった」

彼の目から一粒の涙がこぼれ落ちた。まるでダムが決壊したように、朝比奈は押さえていた感情があふれだし、苦しい表情で話し続けた。

「別に東京じゃなくてもどこでもよかったです。夜思ひ立ってすぐに乗れたのが東京行きの深夜バスだっただけで……。東京についても行きたい所なんてなかった。東京で知ってる場所なんて大学のパンフレットで見たM大ぐらいだった」

「それでうちの大学まで来て、あのベンチに座っていたんですか？」

「少し疲れて座っていたら、動けなくなりました。逃げ出した事を後悔してすぐに帰りたい様な、帰るのが怖いような、どうしていいかわからなくなっ……」

彼の話だけではどんな家族なのかわからなかった。本当に優しい家族なのか？だとしたらなぜ必要がないなどと彼は思っているのか？彼の表情が何かに脅えているように見えた。

その時気付いた。彼は伽羅と同じだ。私が拾った頃の伽羅は人を

信用できずに脅えていたが、同時に愛情に飢えていた。彼は家族の愛を信用できないのだ。だから必要とされていないと家族を否定し、でも一人になるのが怖いのだ。

「明日家に帰りなさい。ご家族があなたの帰りを待っていますよ」
「そんな事ないです……」

「ちょっと離れただけで落ち込むような、寂しがりやな君を放っておけるわけないじゃないですか。今からでも遅くない。家に電話してごらんなさい」

朝比奈はなんどもためらったが、私が強くすすめると、最後には観念して震える手で携帯を取り出した。強く目をつむって恐る恐る電話をすると、彼の表情はすぐにゆるんだ。

「父さん。どうして……家に……。まだ旅行にいつてるはずじゃあ……」

それ以上朝比奈は言葉を紡ぐ事ができなかった。ただ相槌を打つだけで何を話しているかわからなかったが、彼の表情はとても優しい笑顔になった。

その笑顔は嘘偽りのない綺麗な笑顔で、彼の家族は本当に優しい家族なのだ。私も信じられた。朝比奈が何か困ったように口ごもっていたので、私は朝比奈から携帯を奪って勝手に話した。

「朝比奈君のお父様ですか？初めまして。私はM大に勤めています、古谷義孝と申します」

「先生！何勝手な事してるんですか！」

朝比奈が慌てたように私の携帯に手を伸ばしたが、私はそれをかわして逃げ回った。

『古谷さん……ですか？あの……息子が何かご迷惑をかけているのでしょうか？息子はどこにいるんでしょうか？』

「いえいえ、とても礼儀正しく真面目な息子さんで、感心してまですよ。今息子さんは東京の私の家にいます」

『東京！？なぜそんな所に息子が！』

「大学見学にきたそうなんです、泊まる所がないようだったので、私のうちに招きました。明日そちらに帰るそうですよ」

『……それはご迷惑をおかけして申し訳ありません』

「いいえ。お気になさらず。学生の世話をするのも私の仕事ですから。来年朝比奈君がうちの大学に来てくれるのを楽しみにしています……」

そこまで話した所で、私は朝比奈に壁際まで追いつめられ、携帯を奪われた。彼は慌てたように電話の向こうにむかって謝っていた。あの生意気な少年が情けなく頂垂れる姿を見ながら、私は安心してため息をついた。

理由はわからないが、彼の中には人に対する圧倒的な不信感がある。それは家族さえも信じられないくらいに大きなもので、それが彼を悩ませているのだろう。

信じられないから人の顔色ばかり見て、機嫌を取るように良い子のふりをし続ける。

彼の心の中の問題はそう簡単に解決はしないだろう。しかし優しい家族が待っていてくれるなら、いずれ彼の心に届いて、人を信用できるのではないだろうか？

電話の終わった朝比奈の背中に向かって私は声をかける。

「余計なおせっかいでしたでしょうか？」

「いえ……ありがとうございます。先生のおかげで父も安心したみたいです」

「私の言った通り、ご家族が待つていたでしょうか？」

「はい。家に電話してもでないから、心配してみんな家に帰ってき
たみたいで」

恥ずかしそうにうつむく朝比奈を私は優しい目で見つめた。ゆっくりと顔をあげた朝比奈の顔は、先ほどの疲れた顔から一転、若者らしい生気が感じられた。

「先生。これ預かってもらえませんか？」

そう言って取り出したのは、ライターだった。安物だが使い捨てではないオイル式のライターだ。

「来年、大学に入学したらそれを取りに伺います」

「それはだめですね」

朝比奈の手からライターを奪って、彼の額を人さし指でつついた。

「来年じゃまだ未成年でしょう。20歳になってから返してあげます。でも来年君が来るのを楽しみに待つてますよ」

朝比奈は照れ笑いを浮かべながら頷いた。

その次の年の春。霞のような雲が浮かぶ春の空を、私は教授室の窓から見ていた。窓から見えるベンチには学生のカップルが座っていた。あの時の少年は今頃どうしているのか？そんな事を考えていたら部屋の扉がノックされる音がした。

私が返事をすると思扉が開いた。振り向くと彼がいた。

「お久しぶりです。先生。また本を読みにきました」

久しぶりに見た朝比奈は、去年の夏より顔色もよく、まだまだ痩せているが健康的な程度にはふっくらしたようだ。どこか情緒不安定な脆さが、自信に満ちたふてぶてしいまでの愛想笑いに変わっている。

私はゆっくりと彼に近づいていく。

「もう煙草は吸ってないでしょうね」

「もちろんです」

私は彼に急接近して、彼の耳元に囁いた。

「この匂いはマルボロメンソールかな？」

朝比奈は顔を引きつらせて慌てて飛び退る。

「匂いだけで銘柄当てるなんて、先生は犬ですか」

「感心しませんね。猫派の私を犬呼ばわりわ」

私は朝比奈の額を人差し指でつついた。

「隠れて吸つても私にはお見通しですよ。だからもう禁煙なさい」
「そんな風にしつこく何度も怒るのは、先生ぐらいですよ」

そう文句をいいつつも、彼の表情はどこか嬉しそうだった。

煙草だとか疲れた顔だとかそんな物はまだ君には早い。そんなに急いで大人にならなくても、君はまだ子供でいていいんです。そう朝比奈を見るたびに心配してしまう。

世話のかかる子ほど可愛い。だからついついついまでもかまいたくなる。しかしいつまでも私が目をかけているわけにもいかない。君は他の人間にも頼る事を覚えるべきだ。

人は一人では生きてはいけないのだから。

とある編集者の憂鬱 1 (前書き)

久しぶりの沢森視点のお話です

事件の幕開けは、偶然が重なって始まった。今にして思えば不幸な偶然としか言いようがないが、時間を戻せるなら、何が何でも止めていたと思う。

2011年2月 沢森渡 31歳。始まりは一本の電話からだつた。

『お久しぶりです。沢森さん。私の事覚えてますか？』

三年ぶりに聞く声だったが、忘れられるわけがなかった。散々振り回された揚句に、突然音信不通になった……。まあ、毎月『北斗』に投稿はきてたのだが……。にしても、こちらからいっさい連絡つかなくなっていた人物だ。それが今更急に連絡とは一体なんのつもりだ。

『『源氏』いや、田辺紫さんとお呼びした方がいいのかな？本名か知らないけど』

『さすがに私でも偽名は使いませんよ』

コスプレで女子高生の振りしてたけどね。いまだに彼女の実年齢は不明だ。

『それで？今日は何のご用ですか？こちらは忙しいんですが』
『ずいぶんご機嫌ななめですね。そんなに私と話しするの嫌ですか？』

電話越しの彼女の声はからかうような、笑い声混じりで不愉快な気分になる。年齢は不明だが確実に自分より年下だろう女の子に、いいようにもて遊ばれてる。

『ご相談があるんです。一度お時間いただけませんか？』

先ほどのからかうような声音から一転、真剣な口調で彼女はそう言った。私は嫌な予感しかしないその言葉に逆らいたかった。しかしずっと気になっていた彼女の正体を確かめるチャンス、自分の好奇心にあらがう事ができなかった。

3年前、最後に彼女と会った店で彼女と待ち合わせた。顔立ちは少し大人びたような気がするが、身長も体型も変わりなく、時間が止まったままの様だ。大きく以前と違うのは、着ている服がブレザーの制服だという事。

以前のセーラー服が偽装だったのだから、今回だって信用できないのだが、幼さの残る容姿によくあってまったく不自然ではなかった。

本当に今彼女はいくつなのだろう。

「今日はお時間いただきありがとうございました」

愛想良く微笑む彼女は、以前より余裕があつて、彼女も年をとつたのだという実感がわいた。外見年齢10代なのだから、この世代の3年は大きい。大人になっても不思議ではないのかもしれない。

「まさかまた君に会えるとは思ってなかったよ。それでご用件は何かな？」

少し困ったような表情を浮かべ、言いくそくに切り出した。

「『北斗』の編集部に『紫』という名前の読者からおかしな投書とありませんでしたか？」

「ああ……。いるね。初めは君かと思ったよ。名前も同じだし」

「まさか。私が本名であんなおかしな投書送ると思います？どうせ『源氏』だから紫式部からとって『紫』なんて安易な考えなんですよけど」

人事みたいに批判しているが、君の『源氏』というペンネームも本名の紫からきてるんじゃないか？

『紫』という人間からの投書は以前から続いていた。『紫』は『源氏』の熱烈な信者だ。

初めはまた『源氏』にコラムを書いてほしいという要望だったのだが、要望は次第にエスカレートしていった。いわく、『源氏』の才能を『北斗』編集者が妬んで、コラム掲載の邪魔をしているとか。『北斗』は源氏の才能が他社に流出するのを恐れて、他の雑誌社で書けないように妨害しているとか。

あまりの執念と妄想力に恐ろしさを感じる。最近では『源氏』のコラムを乗せなければ、『北斗』編集部に災いがおとずれるという、予言なのか脅迫なのかわからないような危険な手紙まで送られてきた。

まだ具体的に何をすると脅されたわけではないが、威力業務妨害で警察に相談した方がいいのではないか？という編集部内の意見もある。中には『源氏』にまたコラムを書かせたら満足するんじゃないかと言いだす人間もいた。不本意ながら『源氏』担当と認識され

ている私には頭の痛い問題だった。

「君の方も『紫』から何かされてるの？」

「ええ。『北斗』は私を陥れようと陰謀しているとか、他社で本を出版出来るように協力するとか、頼んでもいないのに大げさな事書いてきますね」

「君の信者だろう。うまく言いくるめられないのか？」

「無駄ですよ。なんとか手紙を返して諭しましたが、私の言葉を美化して自分の都合のいいように解釈してますから。最近送られてきた手紙ですが、読んでみてください」

宛名までパソコンで書かれた手紙には『源氏』を神のように神聖視し、あがめ褒めたたえる文章が延々と続いていた。狂氣的なまでの執拗さに褒め言葉なのに寒気を覚える。

「この手の人間は下手に逆らえば、裏切られたと勘違いして危険な逆恨みをする可能性が高いのでなんとかしたいのですが。『紫』の正体を探る事できないんですか？」

「『紫』っていうペンネームしかわからないしね。編集部でも問題になってるけど、まだ明白に危険な脅迫というような表現ではないから。警察が動くのも難しいみたいで。まだどんな人間なのか調べようがないよ」

彼女は表情を曇らせてため息をついた。

「こんな人間の思い通りに動くのは不本意ですが、もし『北斗』の都合がよければまたコラム書いてもいいですよ」

私は彼女の意外な言葉に啞然とした。かつてはこちらから依頼し

ても拒み、編集長に喧嘩を売ってまで逃げ出した彼女が、自分から仕事をすると言いだすとは。

何を企んでる気だ？とつい疑ってしまう。

「本気で言ってるの？」

「ええ。とりあえずまた1回コラムでも書けば『紫』も満足するでしょう。それで時間を稼いでいる内に相手の正体を探ればいい」

「あれだけ嫌がってたのに、今回はずいぶん素直だね。また私の胃に穴が開くようなとんでもないコラム書いてくれるのかな？」

「3年前はご迷惑をおかけしました。若気の至りとはいえやりすぎたと反省しています」

あまりに唐突な彼女の謝罪の言葉を、私は戸惑い素直に受取れなかった。作り物かもしれないが、申し訳なそうな彼女の表情を見ると、子供の謝罪を受け入れない大人げない自分の態度に罪悪感がわいてくる。

「若気の至りって、今でも若そうに見えるけど。そもそも君が今いくつなのか知らないんだよね。制服着てても本当に学生なんだか…」

『源氏』は鞆から取り出したものをテーブルの上に置いた。

学生証だ。偽装とはとても思えないきちんとした作りだ。都内の公立校の高校三年生。これが本当なら、3年前はまだ中学生だったという事か？

あれだけ私達大人を振り回した女の子が中学生だった。その衝撃の事実には私は言葉を失った。

「実は3年前は家族に内緒で投稿やコラム書いてたんです。家族にばれたくなくて必死だったので、態度悪くてすみませんでした」

そういえば電話は毎回彼女が出ていたし、家に来られたら困ると言っていた。中学3年生なら受験生。親に隠れて投稿とかしてたのだとしたら、必死になるのもしかたがないのかもしれない。

今まで感じてた『源氏』の得体の知れなさの謎がとけて、私はすっかり油断してしまった。なんだただの子供の強がりで、本当はごく普通の女の子だったのかと。

『源氏』がただの子供なわけがないのに。

とある編集者の憂鬱 1 (後書き)

沢森さんは不幸な星の下に生まれてきたとしか思えません
救いがない分譲司より不幸かも……

沢森さんに春が来るような話し考えても、こんな脇キャラメインの
話なんて読みたい読者いないだろうな……。。

とある編集者の憂鬱 2

『源氏』にはコラムの件考えておくと聞いたが、正直やる気もなかったし、無理だと思った。

3年前に『源氏』が怒らせた事、編集長まだ根に持ってるし、前のコラムから3年もたって今更もう一度素人に記事書かせるなんて……。誰も3年前の記事の事なんて忘れてるよな。

次の日編集部に珍しい人が現れた。編集部内の人間も仕事をしながら、皆気になってその人の注目が集まっていた。

中沢出版の名物編集長として名高い小松崇45歳。今までに様々な新雑誌を立ち上げては成功させてきた、挑戦的でやり手の編集者だ。

『北斗』みたいな地味で固めの雑誌に、そんなやり手編集者が何の用だろう？

「先輩。秘密情報入手してきました」

井口が嬉しそうに小声で話しかけてきた。秘密情報ってそんなに簡単にばらしたら、秘密じゃなくなると思うんだが……と思いつつ、後輩の話に耳を傾けた。

「何？」

「実は編集長が変わるらしいんですよ。しかも新編集長は小松さんらしいです。だから今日引き継ぎで顔見せに来たんですって」

「は？なんで急に。しかも新連載の多い4月号製作中の忙しい時期に、編集長が変わるとかおかしいだろう」

「だかららしいですよ。改編期の4月号に間に合わせて、小松さんの手腕で『北斗』テコ入れするって。ほら最近『北斗』の売り上げ落ちてるじゃないですか」

確かに最近の売り上げは芳しくない。しかし『北斗』は伝統ある雑誌で、長期購読者も多く手堅い雑誌だ。売り上げが多少落ちたからと言って慌てるほどじゃないと思うのだが。

「しかし小松さんはうちみたいな地味な雑誌向けじゃないだろう。もつとこうファッション誌とか華やかで新しい分野の雑誌とか……」「上は『北斗』の支持者の高齢化を危惧して、思い切って若者向けにシフトするために、小松さんを編集長に選んだらしいです」

私は思わず顔をしかめた。確かに『北斗』は地味で手堅い内容で、読者も年配者が多い。だからといって無理に若者向けを狙ってしまったら、今までの固定ファンが見放して、新規ターゲットをつかめずさらに売り上げが落ちて廃刊だってありうる。

かなり危険な賭けだ。お偉いさん達は何を考えているんだ。

私は元々ねっからの文芸ファンで、若いころから硬派な『北斗』が好きだった。だから配属が決まった時にはかなり嬉しかった。愛着のある雑誌が変に換えられるのは面白くない。

しかし私は下っ端編集者で上の方針に逆らう力なんてない。嫌な事だろうと上から命令されれば大人しく従うしかないのだ。好きな雑誌を作る仕事をしているのに、その雑誌を守る事さえできない。こつこつ時好きな事を仕事にして一番つらいと感じる。

小松さんが新編集長になると公式発表されてすぐ、私は小松新編集長に呼び出された。

「なんの「ご用」でしょうか？」

「4月号の新連載記事の企画、すべて私が目を通す事になったのは知ってるよね」

「はい。もうすでに私の担当の企画は進行中ですが、何か問題ありましたか？」

「嫌……。君の企画には何の問題もないんだが、困った事が起こってね。ほら狩谷美穂の新エッセイがあっただろう。あれ、だめになっただ……。」「

「……えっ！どうして？」

「狩谷先生が急に妊娠が発覚して、仕事を休養する事になったんだよ。おめでたい事だし、どうしようもない事なんだけど困るよね」

「……そんな！新しい企画立てるにしても時間ないですよ。代わりに原稿頼むのも、この忙しい時期に急な話に乗ってくれる作家なんてそうそういませんし」

「第一線で活躍してるプロの作家なら無理だろうね」

ものすごい嫌な予感がする。なぜこんな緊急事態に私が呼ばれたのか。若者向けの新しい雑誌に生まれ変わらせようとするとする小松編集長の方針から考えて、無難な安全策より斬新な企画を選ぶだろう。

「昔『源氏』という素人がコラム書いて評判良かったじゃないか。沢森君担当だったらしいけど、もう一度頼めないかな」

「なんでこんな緊急事態に素人なんかに依頼するんですか。有名作家を今から捕まえるのは無理でも、素人に頼むぐらいなら力のある新人作家に依頼するとか……」

「ネームバリユーのない新人なんか頼んで、雑誌が売れると思うのかい？それぐらいなら『北斗』の読者に人気ある素人に記事を書かせた方が確実に売れるだろう」

「確かに『源氏』は読者受けいいです。しかし前回も内容に問題があつて賛否両論、各方面から苦情も多かつたですし」

「辛口の内容というのはそういうものだよ。刺激的で若者受けもいい。『北斗』の新規ターゲットを獲得するチャンスだ。大丈夫。もし業界内でトラブルがあれば私も対応する」

「しかしですね！」

「まずは1回やらせてみて、問題があれば5月号から変えればいい。別の企画を準備する時間稼ぎになる。これは上司命令だ。沢森君、『源氏』への原稿依頼をしまえ」

上司命令と言われてしまえば逆らう事はできない。私は嫌々『源氏』に依頼するしかなかった。そして今回『源氏』は何の注文もなくすぐに引きつけた。

あの『紫』という読者への対応のためとはいえ、あまりにあつさりすぎて逆に不安になる。

『紫』などという狂信的な読者がいなければ……。編集長が小松さんに変わらなければ……。狩谷先生の新連載がお蔵入りしなければ……。ば……。

今更恨み事を言っても仕方がないのだが、また『源氏』と仕事すると考えると憂鬱だ。

こうして様々な偶然が重なって『源氏』のコラムがまた『北斗』に掲載する事になった。

この事があんな大きな事件になるなんて、その時の私は知るよしもなかった。

4月号の締め切りまで時間がないため、さつそく『源氏』と打ち合わせする事になった。場所はもはや恒例となった紅茶専門店。しかしお茶の味を楽しむような時間も心の余裕もない。

「今回はとりあえず読み切り1ページ。好評であれば連載の可能性もあります。前みたいに1度で辞めるからってとんでもない記事書かないように」

「わかっています。ちゃんと書いた原稿は事前に沢森さんにチェックしてもらって、問題あると沢森さんが判断したらすぐに修正します」

「ずいぶん素直だね。『源氏』の名前がいいように利用されるんじゃないかって、あれだけ警戒してたのに」

「ファンは大事にする主義だったんですけど、『紫』なんて大変なファンがついて……。なんか『源氏』のイメージを無理に守るの辞めようかなと思って……」

『源氏』は苦虫をつぶしたような嫌そうな顔をした。よほど『紫』の崇拜ぶりに嫌気がさしているのだろう。どんな理由にせよ、こちらの修正提案を素直に受け入れてもらえるなら、だいぶ私も気が楽になる。

「チェックや修正の事を考えると、とりあえず今週中には原稿一度見せてほしいんだけど間に合う？」

「大丈夫です。大学入試も終わって、もう卒業式までほとんど授業もないし、時間の余裕はありますから」

「そういえば高校生だったっけね。いまだに信じられないよ。3年

前はわざわざ高校の制服で偽装までしたぐらいだし」

「あれ偽装だつてばれてましたか。まあ仕方なかったんです。私身長低いし童顔出し、一番大人っぽく見える格好が高校の制服だったんです。中学生だと思われたら、子供だとなめられて利用されるんじゃないかって心配で……」

「高校の制服で堂々と編集部来る時点で無駄だと思うけど。中学生も高校生もあんまり変わらないし……」

「高校生ですら驚かれるんだから、『女子中学生』って肩書がついちやうと余計にそれを利用されるじゃないですか。『源氏』の正体は現役女子中学生なんて勝手に売り出されちゃうんじゃないかと……」

「君は本当に警戒心が強いよね。もう少し人を信用してほしいな……」

「無理ですね。私のモットーは『人を見たら泥棒と思え』です。世の中の大人なんて汚くて、平気で嘘ついて騙すような人間ばかりだと思つてますから」

どういう育ち方したら、10代でこんな偏見に満ちた価値観の持ち主になれるのか。普通ならこれだけすさんだら、ぐれて不良とかになりそうだけど、彼女はお茶の飲み方一つとっても上品だし、化粧つきのない地味な服装も大人しい優等生風だ。

打ち合わせはスムーズに終わり、原稿も3日で送られてきた。内容は『源氏』らしく皮肉の効いた毒舌風味ではあったが、ぎりぎり掲載できそうな表現に押さえられていたし、取り上げた作家も新人が多く、これなら抗議も少なそうだ。それでいて文章の面白さは損なわれていないのだから感心する。

短期間でそういった計算を働かせて原稿を上げられるなんて、ま

だ10代とは信じられない。

いくつか細かな修正は必要だったが、それもすぐ対応してくれたので予想より早く原稿もしあがった。小松編集長も気にいったようで、この内容なら5月号も引き続き頼みたいと言われた。

こうして『源氏』の辛口コラム『源氏の徒然日記』は始まった。

4月号が発売し世に出回ると、コラムの評判もよく、思った以上に掲載作家からの抗議は少なかった。例えば批判記事でも売れてない新人作家の場合、雑誌に掲載される事で宣伝効果があるようだ。

そもそも本当の駄作なら、『源氏』が取り上げるはずもない、葛城優吾のように将来性のある作家ではないかという期待が読者の中にあつた。

『源氏』は筆が早いし、文章のミスも少なく、編集者にとってはありがたい作家だった。あまりに好調な連載にいつしか私の中の『源氏』への危機感が薄れ始め、このまま問題なく連載が終わるのではないか？というような楽観的な気分になっていった。

そんな私が再び危機感を覚えたのは、連載が始まってもうじき1年という頃だった。

「沢森君。『源氏』の連載好評だし、このまま連載続けよう」

「はあ。しかし、ただだからと書籍批評だけを続けて読者に飽きられるぐらいなら、1年で切り上げて新しい企画でもスタートさせた方がいいのでは？」

「もちろん、このまま同じ事だけを続けていてもだめだ。そこで今後の事を私が直接『源氏』と話がしたい。1年も連載を続けている

のに、まだ私も会った事がないからね」

私は逆らう事が出来ずに頷いたが、内心冷や汗ものだった。警戒心の強い『源氏』のためにわざと他の人間には『源氏』の正体を隠して連載を続けていた。彼女が編集長と会つのを拒んだら……。また『源氏』と編集長の間で板挟みになる。下手したら『源氏』の機嫌が悪くなつて、また過激な行動に出たりしないか。

恐る恐る『源氏』に編集長との打ち合わせを提案したら、拍子抜けするほどにあっさり了承が得られた。

「いいですよ。いつまでも沢森さんとだけ話していれば、すむとは思ってませんでしたから。前の編集長ほどバカじゃないみたいだし」

こうして『源氏』と小松編集長の初顔合わせとなった。しかしなぜか私は二人を紹介してすぐ、編集長に席をはずすように言われた。自分の知らない所で何かトラブルが起こるのではないかと心配だったが、『源氏』も大人になったんだ、昔とは違つたと自分に言い聞かせて席を外した。

それからしばらくして編集長からとんでもない話が持ち込まれた。

「源氏の連載を書籍化しようと思う」

「……は？正気ですか？」

思わず上司に失礼な返事を返してしまうほど、私にとって意外な話だった。『北斗』の長年の読者の間では人気があるとはいえ、『源氏』は所詮素人の作家だ。本を出した所でもとも売れるとは思えない。

「お言葉ですが、1ページコラムを月1でまだ1年。分量的にもと

ても足りませんし、書籍化しても一般読者への売りがありません」
「分量に関しては問題ない。3年前の初コラムや過去の読者投稿欄に掲載した投稿もすべて載せる。最近『源氏』ファンになった読者から、過去のコラムや読者投稿を読みたいという要望が多くある。実際それでバックナンバーの取り寄せが多くて、特に3年前のコラムを取り上げた号は在庫がなくて不満が上がってるじゃないか」

「確かにそういう要望はありますが……。すべてって……5年分ありますよ。それを全部集めるんですか？」

「作業負担は大きいから、書籍化に当たっては担当の編集を別につける。君は連載や『北斗』の別の記事に集中してくれてかまわない。それに売れる本作りに関しても、私に考えがある」

小松編集長の何か企んでいる表情に、私はまた『源氏』に関わるトラブルが起こるのではないかと大いに不安になった。しかし書籍化の企画から外され、どんな本が作られるのか全く分からないまま製作は進んでいった。

直接編集長が『源氏』と書籍化の企画の打ち合わせをしているはずだが、『源氏』の様子は依然と変わらない。水面下で何が起きているのか……。根拠のない不安で憂鬱な日々が続いた。

そして本が完成し、書籍見本が出来上がる頃、ようやくその内容を見せてもらう事ができた。そしてその内容に愕然とした。

連載記事や過去の投稿やコラムは特に手を加えられずに、全文掲載されていてそれに関しては特に問題はない。しかし問題はそれまでプロフィール非公開の謎の批評家だったはずなのに、今回の本では本名や年齢を公開しているのだ。

著者紹介に書かれた女子大生コラムニストの肩書に頭がくらくらする。『源氏』が危惧していた通り、『現役女子大生』の肩書をい

いように利用して売りにしている。

その上書籍化特典に対談が掲載されていた。

それはよりにもよって『源氏』と葛城優吾だった。

いつのまに対談なんかやったんだ？ 『源氏』 から何も聞いてないぞ。対談の中には3年前の例のコラムや、2人が初めて会った時の事まで書かれ、しかも葛城優吾が『源氏』 に対して特別な感情を持っているかのような書かれ方をしていた。

「沢森君。源氏の初書籍の宣伝のために『北斗』で特集をやるぞ。……どうした？何か不満でもあるのか？」

「どういう事ですか？この対談まるで葛城先生が『源氏』に、昔から好意を抱いていたような書かれ方をしているのですが……」

「実際、葛城先生は古くからの『源氏』のファンなんだし、恩人でもあるのだから好意はあるだろう」

「それはあくまで作家として、批評家に尊敬を持っているのであって、ここに書かれているような男女の恋愛感情では……」

「別にはつきりと恋愛感情を持ったとは書いていない」

「詭弁です。読者が誤解するような表現をあえて使ってるじゃないですか！当時の『源氏』は中学生ですよ。中学生の女の子に有名作家が恋愛感情を持ったなんて、葛城先生のイメージを大きく損ねます」

「心の中でどう思おうと、犯罪ではない。実際葛城先生と源氏は一回会ったきりで、その後連絡さえもとってなかったじゃないか。むしろ美しい純愛からあの名作『初花』が生まれたなんて製作秘話、ファンが喜ぶ……」

「誰のファンですか？これは『源氏』の本ですよ」

「源氏は知名度の低い素人作家だ。葛城ファンにも期待させて本の売り上げをアップ……」

「ふざけるな！本が売れば何をしても許されるのか！」

思わず編集部内に響き渡るような大声で叫んでしまい、騒がしかった部屋が静まりかえった。皆が驚きこちらを見ている。それに気がついて、自分のしでかした事に青ざめた。

編集長に向かって大声で暴言を吐いてしまった。私の編集人生終わったかもしれない……。

部下に大勢の目の前で暴言を吐かれても、小松は涼しい顔をしていた。

「今回は『源氏』を発掘・記事を書かせた功績に免じて聞かなかつた事にする。しかし次はないよ、沢森君」

静かに淡々と、しかし部屋中に響き渡る声で小松は宣言した。その言葉を聞いて編集部内の人間は、皆何も聞かなかつたふりをして仕事に戻った。

私は無言で小松にお辞儀をして編集部から足早に逃げ出した。今口を開けばまた小松に噛みついてしまいそうだ。

あのタヌキ親父め！初めから葛城優吾を利用して売る事を見込んで、書籍化なんて言ったのか！もしかしたら連載だってこのために初めようと言いだしたんじゃないか？

葛城の純粹な恋心を利用するなんて許せない。そう編集長に怒りながら同時に自分が許せなかった。甘かった。編集長の意図を読めずに簡単に利用させてしまった自分が愚かだった。

『源氏』に警戒心が強すぎる、もっと信用しろと思っていたが、『源氏』の読みを信じるべきだった。3年前もう葛城と会わない方

がいいと身を引いた『源氏』の判断が正しかったのだ。

しかしなぜこんな本が出来上がってしまったのか？『源氏』はこうなる事がわかって大人しく協力したのか？私は苛立ちを押さえつけ、頭を冷やそうと何年も禁煙していた煙草を買って吸い続けた。しかし何本煙草を吸ってもちっとも落ち着かなかった。

感情的な気分のまま、私は『源氏』へ電話をかけた。コール音がやけに長く感じる。まだ半分ほど残っている煙草の袋を握りつぶして、ゴミ箱に投げ入れた。

繋がらない電話に苛立ち、仕事も放り出して気づけばM大学へと足を運んでいた。

「どうしたんですか沢森さん？大学までわざわざ来るなんて」

『源氏』は呆れた顔をしていた。当然だ。これまで『源氏』のプライベートを守るために、極力彼女の私生活に関わらないようにしていた。まして連絡もなく突然現れ、その上たぶん今の私は最高に不機嫌な顔をしているだろう。

「君の本の見本を読んだ」

彼女の表情が暗く陰つたのを見てすぐにわかった。彼女もすでにあの内容を知っているのだ。

「君はあの内容を了承して協力したのか！」

「沢森さん落ち着いてください。場所を変えましょう」

言われて初めて私達がずいぶん注目を集めている事に気がついた。本当にこんな女の子に気を使わせるなんてどうかしてる。自分の情けない程の動揺ぶりに落ち込んで、ようやく少し興奮がおさまった。大学内の人気のない木々の下まで来て『源氏』は立ち止まった。初夏の爽やかな風が頬を撫でるが、その心地よさを味わう事などともできない。

「初めから嫌な予感はしていました。あの編集長は何か企んでると。しかしまたコラムを書くこと決めた以上、自分の肩書が利用される事は仕方がないと諦めていたのです」

「葛城先生との対談について、なぜ私に何も言ってくれなかったんだ」

「同じ編集部内だから沢森さんも知っているものだと思ってました。まさかあんな風に編集で改ざんされて、収録されるとは思わなかった。ただ久しぶりに葛城さんにお会いできるのが楽しみです……」

「葛城さんも再会を喜んでくれて……」

彼女の目から思わず涙がこぼれそうなほど、悲しげに顔が歪んだ。彼女もまた被害者なのか……。小松に利用され、傷つけられた。いくら大人びてしっかりして見えても彼女もまだ20歳にも満たない少女なのだ。

「今からでも出版差し止めの抗議を……」

「無駄です。印税は私に入ってきますが、発行の権利は中沢出版にある。そういう契約なんです」

「どうしてそんなおかしな契約……」

「過去の私の投稿が大部分を占めているので……。読者投稿記事の著作権は出版社にあると、だから形式的に今回の著作権は中沢出版にと、初めの契約の時に説明されて……。本を出版するなんて初めてで、契約とか著作権とかよくわからなくて反論できず……」

素人の女の子の無知に付け込んで、陥れるとは……。なんて卑劣な！

「ごめんなさい……。私のせいで、葛城先生にご迷惑をかけてしま
う……」

「君のせいじゃない」

私は震える彼女の肩に手を置いて、バカみたいに君のせいじゃないと繰り返した。小松への個人的な憤りよりも目の前の少女をなくさめる事を優先すべきだ。そう自分に言い聞かせて少しづつ冷静さを取り戻した。

「今後は二度と小松の好きにはさせない。もう連載も何も辞めてしまえばいい」

「いえ……連載は続けます。今度の特集インタビューも受けるつもりです」

「どうして？」

「ここで辞めて泣き寝入りしたら、私と葛城さんは何かやましい関係があると認めるようなものじゃないですか。せめて読者の誤解が少しでも解けるように、紙面にメッセージを送り続けたいと……。今度は改ざんされないように、見張っていていただけますか？ 沢森さん」

少女の売るんだ目に映る決意に、私は感動して協力を約束した。しかし私の憂鬱はまだ始まりに過ぎなかった。

まだまだこの時の私は何も知らないバカな男でしかなかった。後に私は死ぬほど後悔することとなる。

第6部終了

とある編集者の憂鬱 4 (後書き)

沢森さんの苦難の続きは次の柁木譲司編で

第7部は上条彩花編になります

すべてが彩花視点のため朝比奈編ではなく、上条編と題します

本当は次の朝比奈・上条の話と譲司・紫の話は同じ時間軸にあって、ラストがどちらもすぐ後引く展開なので同時に進めたい所ですがラストまでまったくお互いのカップルがからまない展開を交互にやると読みにくくなるので

変則的に上条編を前編後篇に分けて、間に柁木編を一気にやります
第7章上条編前編 第8章柁木編 第9章上条編後篇 第10章、
最終章(譲司・紫、朝比奈・上条共通エピソード)を予定しています

男心と夏の空

8月ももう終わりか……。あつという間に夏が終わってしまった。彩花はこの夏の事を思い出してため息しか出てこなかった。

結局誕生日に気まずくなってから、朝比奈とは一度も会ってない。朝比奈を殴っていた事、朝比奈がまとわりついてこなければ放置してしまう事、それらを当たり前だと思っていたのは間違いだったかもしれない。

6年近い付き合いでこんな簡単な事に今更気がついた。でも今までそれでうまくやってこれたのに、今になってなぜ朝比奈はおかしくなってしまったのか？朝比奈は誰とでも仲よくなれる奴だが、深い付き合いとなるとほとんどいない。

その数少ない人間の榎木や田辺に連絡がつかず、結局古谷教授を頼った。しかしますますわからなくなりました。

「彼の問題と向き合うなら、本気で朝比奈君とぶつかりあう覚悟と強さが必要なんです。今の上条さんはまだ迷いがある」

朝比奈の問題ってなんだ？何の覚悟が必要だというのだ？何が問題なのかわからないから迷っているのに、迷いがあってはだめだというならどうすればいいのか？

答えの出ない問いを頭の中で繰り返している内に夏が終わった。人生最悪な気分の夏だ。

そんな夏の終わりに突然兄から連絡があった。遅い夏休みが取れたので東京に遊びに行く、ついでに私の家に遊びに来るというのだ。

兄は地元で就職して、まだ実家の両親と一緒に住んでいる。未婚、彼女なしの27歳。身長も高く、彫りの深い顔立ちは悪くはないのだが、なにせ目つきが悪い。昔ラグビーで鍛えたたくましさすぎる筋肉と、太くて短いクビがさらにいかつさを強調している。

本当は優しくて面倒見がいいのに、第一印象で女の子に怖がられて逃げられる可愛そうな兄だ。

たぶん今回も東京に遊びに行くなんて口実で、本当は私を心配して様子を見に来てくれるのだろう。

「久しぶり、元気にしてたか」

「まあまあね。兄貴はどうなの？」

「まあ変わらないな。彩花は仕事どうだ？忙しいんじゃないか？」
「忙しいよ。でも希望の営業だし、やりがいあって楽しい」

兄と二人駅から私の家に歩きながらそんな話をしていた。会うのは3年ぶりぐらいだが、目つきの悪さも無愛想な強面顔も何も変わらない。母親みたいに細かく私の心配をする優しい所も昔のままだ。

「少し痩せたんじゃないか？顔色も悪いし」

「夏バテかな。今年の夏は忙しくて疲れが溜まってさ」

最近朝比奈の事で悩んでばかりで寝つきが悪いし食欲もない。でも男友達との関係で悩んでる、なんて恥ずかしくて家族に言えるわけがない。

恋愛に興味なしで男勝りの私が、男で悩むなんてらしくない。

「あがつて。まあ何にもないけど」

「初めから彩花の部屋に期待してない。どうせ酒とつまみぐらいしかないんだろっ」

「そんな事ないわよ。お茶ぐらいあります」

私は兄の余計なひと言に文句を言いつつ、急須を取り出した。そういえばこのお茶どれぐらい入れていいんだっけ？急須もお茶も全部朝比奈が持ち込んで、いつもアイツが入れていたのだからない。会社のお茶くみはコーヒーマーカー任せだったからな……。まあ兄貴だし適当でいいか。

「本当にお茶あったんだな。しかも急須まで。暑いし水でいいぞ」

そうか夏なんだし、わざわざ急須で熱いお茶なんか入れなくてもいいわよね。確か冷蔵庫に麦茶があった。私が冷蔵庫を開けると、後ろから兄が覗き込んでいる。

「何？」

「いや？なんかタッパーに入った梅干しとか、妙に手作りっぽいものが入ってるから驚いた。調理器具も増えてるし。おまえが料理してるのか？」

「なによ。私が料理したら悪いの」

「彩花が包丁を握っていると考えただけで、心臓に悪い」

「悪うございました。どうせ私は料理出来ないわよ。調理器具もみんな友達が持ってきて、家で料理してくれるの」

「でも最近使った形跡がないな。鍋ほこり溜まってるぞ。その友達と喧嘩でもしたのか」

この兄は見た目ごつい割に、妙に細かい所まで気がつく繊細な人間だ。私は下手に嘘を言っても無駄だとわかっているので、つい黙ってしまう。

私が黙っていたら、兄は無言でダイニングの押し入れの扉を開けた。

「ちょっと、何するの!」

「おまえ寝るのはベットだったよな。なんで布団がある?」

「客用布団。友達くるし」

私の言葉に満足していないみたいに、今度はユニットバスの戸棚をあさり始めた。

「兄貴! いいかげんにして」

「その友達って男か?」

「そんなわけ……」

「これどう見ても男用のひげそり」

しまった! 朝比奈が持ち込んだ私物処分し忘れて、戸棚に放り込んだままだった。

「なるほど。彼氏と別れて落ち込んだたのか」

「違うわよ! 彼氏じゃないし。別れるどころか付き合ってもないわよ」

「彩花も社会人なんだし、彼氏の一人や二人いてもおかしくないだろう。そんなむきにならなくても……」

「本当に彼氏じゃないってば。何にもしてないもん。キスひとつしてないし」

「家で料理作ったり、泊まっていたりしてたりしてるのに、キス一つしてないって……。おまえ女扱いされてなかったんだな」

可愛そうな目で見るな！悔しくて、ついつい余計な事まで口をすべらせてしまった。

「別に女扱いされてないわけじゃないわよ。キスされそうになっ
し」

「そうなのか？」

「でも頭突きくらわせてやったから未遂だけどね」

どうだ！と自慢したら兄は呆れた顔をしていた。

「キスを迫られて頭突きって……。女として終わってるな。それで
気まづくなつてこなくなつたのか……。当分嫁の貰い手なさそうだ」
「違うわよ。それはヤツが初めて、家に来た時よ。その後も懲りず
に家に押し掛けてきて、ずうずうしく料理作ったり、泊まりこんだ
り……」

「バカかおまえ」

兄はなぜか思い切り落ち込んで、ダイニングに座り込んで肩を落
とした。

「なんでバカ呼ばわりされなきゃいけないのよ」

「男を一人暮らしの家に入れといて……。勘違いしてキスぐらいする

だろう。嫌なら気を持たせるような事するなよ」

「それは……。あの時は非情事態で……」

「その後押しかけられても家に入れなきゃいいだろう。しかも丁寧に布団まで用意して」

「それはヤツが寝袋じゃ寒くて風邪引くとか文句言うし。いつも料理作ってくれるから、その借りを返すためというか……。アイツのためだけに布団があるわけじゃないし」

「おまえ本気で言ってるのか？ 同じ部屋で自分を女扱いする男がいるっていうのに、よくのんきに寝られよな」

「同じ部屋じゃないわよ。私はそっちの寝室で、アイツはこのダイニングで」

「部屋に鍵ついてないんじゃないか。いつでも寝込み襲えるじゃないか」

「大丈夫よ。アイツ弱いし。変な事してきたら、殴れば……」

言ってる途中で、兄のげんこつが脳天に落ちた。久しぶりにくらったげんこつはやっぱり痛い。子供の頃から、私が悪い事するとすぐ鉄拳制裁がやってくる。そのかわり、私がいじめられたら、相手を殴り飛ばしてくれるような面相身のいい兄だったが。

「何で殴るのよ!!」

「俺はな、おまえが好きな相手とどうなるうとかまわない。だけど好きでもない男に油断して、何かあったらどうする。男に油断するなんて彩花らしくないぞ」

兄が本気で私を心配してるのだとわかったから、私は何も言えな

くなつてしまった。兄の言う通り、朝比奈は女好きで襲われたつておかしくないし、そんな危ない男を平気で泊めてたのがおかしかったのだ。

私は昔から告白されたり、色々恋愛関係のトラブルがあったから、人一倍そういう警戒心は強い方だと思っていた。どうして朝比奈だけは油断してしまったんだらう。

「俺、その男に同情するわ」
「どうして？」

「好きでもない女のためにわざわざ調理器具まで持ち込んで手料理作るか？キスしたくなるぐらい好きなのに、手を出さないなんてそれはよっぽど……」

「よっぽど……？」

「おまえを大切にしてるんだらう。じゃなきゃ、おまえに嫌われるのが怖くて手が出せないか。なのに彩花は友達扱いで無防備に部屋に泊めたりしてたんだらう。そこまで男扱いされてないなんて、俺だったらとつくに諦めて、友達も辞めてるわ」

「なんで友達じゃだめなの？」

「好きな女と一緒に寝泊まりできて、綺麗なお友達なままでいてなんて生殺し、男なら耐えられるわけないだらう」

兄に言われて愕然とした。もしかして朝比奈の様子がおかしいのってそのせいなの？週末お泊りが定番化してたのに、仕事が忙しいってアイツを放置したまま連絡もしなかったから、もう私の事諦めて距離を置こうとした？

もう私と友達でいるのがつらくなつたのだから？

「彩花」

兄に声をかけられて、驚いて私は顔をあげた。兄は心配そうな表情で私の顔を覗き込んでいる。

「なんだかんだ言っつて、そいつはおまえにとつても大切なやつなんだろう。信頼してたから家に入れて、泊めたんだろう」

「そう……なのかな？わかんないよ、私。自分の気持ちなのに」

兄は私の頭に手を置いて、子供をあやすみたいに撫でた。

「本当に彩花は、恋愛がからむと鈍いよな。無意識に恋愛を避けているんじゃないか？まだあの男にされた事が忘れられなくて……」

「違う！あんなのもう忘れた。だって中学の頃の話だよ。何年前の話よ」

私の心の中に奥深くに沈めていた記憶がよみがえり、息がつまりそうなほど苦しくなった。泣きたくない。あんな男の事引きずって、いまだにおびえて泣いたりなんかしたくない。

「俺はあの男としか言っつてないんだけど。そうやってすぐにむきになるくらい、まだトラウマになっつてるんじゃないか？世の中あんな男ばかりじゃないんだぞ」

「違う！違う……あんな最低男なんか……」

兄の前で泣かないようにするのが精一杯で、私はそれ以上言葉が続かなかった。

男心と夏の空（後書き）

彩花兄、初登場

しかし名前つけ忘れた

過去の傷跡

私が泣くのをこらえているのがわかったのか、兄は気を使って早めに帰ってくれた。

一人になつて、私はずっと記憶の奥に封印していた過去をゆつくりと思いだした。できればずっと目をそむけたままでいたかった。だけどこのままじゃ前に進めないとわかってしまった。

私が恋愛を避け、男に対して異常に対抗意識を燃やすようになったきっかけ。それは私が中学3年のころだった。

中学に入りみんな思春期を迎え、周りの女子が恋愛話に夢中の頃、私はいまだ小学生気分抜けきれない子供だった。男子と一緒になつて外で思いつき遊びまわつて、泥だらけになろうと気にならないう。オシャレとか全然興味なかったから、制服以外はいつもTシャツ、ジーンズとか動きやすいラフな格好。

周りの男子と私はそう変わらないと思つてた。でもそう思つてたのは私だけ。

私は身長が伸び、胸も膨らみ、女らしい体つきになっていった。それまで仲の良かった男子の友達が急に私を意識し始め、避けられたり告白されたり。どうして昔のまま友達でいられないんだらうと悩んでいた。

そんな時あの男に放課後呼び出された。中学3年でみんな受験で忙しくなる頃の事。

同じクラスの新谷努という男子だった。背が高く体格もよく、野球部だったから坊主頭。部活やつてたのに成績良くて、優等生だったから先生達のお気に入りだった。でも正直同じクラスでも、ほとんど話した事ないからどんな性格なのかよくわからなかった。

「上条の事好きなんだ。付き合ってくれないか？」

呼び出された時からそういう事だろうと思った。そしてがっかりした。碌に話もした事ない癖に、何で好きとか言えるんだろう。どうせ私の外見だけ見て勝手に好きとか舞い上がってるんだ。

そんな男子の態度にうんざりしていた私は即座に返事した。

「無理。新谷君の事よく知らないし」

私の言葉に新谷は茫然としていた。まるで断られるとは思っても見なかったという顔だ。そういう自惚れの強い人間は嫌いだ。

「冗談だよな」

「冗談なわけないじゃん。そういう事だから諦めて。じゃあね」

私は新谷をおきざりにしてさっさと帰った。ふる時はきっぱりあつさりの方がいいのだ。可愛そうなんて下手に同情したら、ずるずる未練が残っていつまでも付きまとわれたりする。相手だって望みのない恋にすぎるより、新しい女の子でも見つけた方がよほど建設的だ。

だからもうこれは終わった事と思っていたのだ。しかし事件はまだ始まったばかりだった。

それから数日後、携帯に電話がかかってきた。しかも着信表示は『非通知』。不信に思ったが、いつまでもなり続けるのでしかたなく電話に出た。

『誰？』

『上条？俺だよ。新谷』

『……は？なんで私の番号知ってるの？』

『上条の友達に聞いた』

誰よ！勝手に人の番号しゃべった奴！誰かはわからないが、心の中で悪態をついた。

『俺、やっぱり上条の事諦められない。付き合ってくれ』

『嫌。ていうかなんで新谷君は私の事好きなの？』

しばらく沈黙の後ぼそぼそしゃべった。

『体育の授業の時……体操着姿の上条が可愛いな……って思ってた』

体操着ってブルマでしょ。それ見て好きとか、気持ち悪い。私は生理的嫌悪でますます新谷が嫌いになった。

『キモイ。付き合つとか、絶対無理』

『嫌な所あったら直すから、つきあってよ』

キモイだなんて最悪な悪口なのに、まだ諦めないしつこさが、ますます気持ち悪い。

『あなたの全部が嫌』

『全部って具体的には？』

ああ……めんどくさい。いつそどうやっても無理な事を言い訳にしよう。

『私つきあつなら年上じゃないと嫌なの。同じ年の男子なんてガキだもん』

年は変えられないもんね。新谷はまだ未練がましくぐちぐち言っていたが、電話を切った。これで諦めてくれるかと思っただが甘かった。

それから毎日学校が終わると『非通知』の電話がかかってきた。電話に出ないといつまでも鳴りっぱなし、電話にでるとあの男の未練がましい話に付き合わされる。どんなに怒ろうが罵倒しようが、付き合ってくれの一点張りでらちが明かない。

学校でも付きまとうんじゃないかと心配したが、学校では特に変わった様子もなく、今まで通り話す事もなかった。学校ではいつも通りの優等生のままだから、電話の気持ち悪いあの男は別人じゃないか？と疑いももったが、声は新谷の声だった。

本当に新谷は私を好きなんだろうか。こんなに嫌がってるのにしつこく電話をかけてくる。これ新手のいじめか嫌がらせじゃないか。電話の着信表示を見るのも嫌になって、最後は私は電源を切ったままにしてしまった。

電話攻撃から解放されたと思ったら、今度はまた新手の嫌がらせが始まった。私の友達はみんな部活をやっていて、私は帰宅部だったからよく一人で帰っていた。帰り道なんか気配を感じて後ろを振り返ると少し離れた所に新谷がいた。

速足で歩いても立ち止まっても、いつも同じ距離であの男はいた。ホームルーム直後に教室を飛び出しても、何時間も学校に粘った後でも、いつも同じ距離でついてきた。

いつも無表情で私につきまとう新谷が不気味で気持ち悪かった。耐えきれなくてとうとう振りかえって叫んだ。

「ついてこないで！」

「たまたま同じ道を歩いているだけだよ」

「今まで通学中に新谷見かけた事ないんだけど、家こっちなのか？」
「どこを歩くかは俺の自由だろう」

つまりわざわざ遠回りして私の後つけてるって事よね。だったら私も違う道通るわよ。

それから新谷をまくために、毎日違う道を歩いたが、それでもあの男は毎日後ろをついてきた。

今まで恋愛沙汰を他の人間に話すのは恥ずかしくて、ずっと黙っていたけどもう一人じゃ手に負えない。そう思って友達に相談した。

しかし信じられない事に誰も私の話を信じてくれなかった。新谷みたいな優等生がそんな犯罪者みたいな事するわけない。気のせい、勘違い、自意識過剰なんじゃないか？

友達だと思っていたのに裏切られた気持ちになった。しかも誰かが先生に話したみたいで、放課後職員室に呼び出された。

「上条。勘違いで人を貶めるような事、言うもんじゃないぞ」

そう言っただけ先生達は私のつらさとか恐怖心をまったく理解してくれなかった。証拠を見せたくても電話は非通知で新谷という証拠はないし、帰り道の付きまといも誰も見てないから信用してもらえない

い。

そのうち私は嘘つき呼ばわりされて、学校で浮き始めた。男にもてるからっていい気になってる。本当は男好きで誘惑してるんじゃないか？などと陰口をたたかれますます私は追いつめられた。

学校に行くのもつらかったけど、ここで行かなくなったらあの男に負けた気がして、根性で通い続けた。

過去の亡霊

そしてある日。今にも雨が降りそうなどんよりとした雲行きの中、いつものように後ろを気にしながらの帰り道。新谷との距離がいつもより近い気がした。

おかしい。嫌な予感がする。そう思った時には遅かった。新谷が突然駆け寄ってきた。慌てて逃げ出そうとした私の二の腕を掴みむ。

新谷は死んだ魚の様に濁った目で私を見降ろし、開いた手で私の尻を撫でた。

「嫌ー！離して！」

あまりの気持ち悪さと怖さに思わず叫び声をあげた。すると新谷の表情が気持ち悪く歪んだ。

「可愛い声だね」

あまりの事にぞっとした。私の叫び声がこの男を喜ばせてる。まるで声まで汚されたようで、悔しい。これ以上こんな男を喜ばせてたまるか。

そう思うと口を開いてもひゅーひゅーという呼吸音しか出てこなくなり、声がでなくなった。

私は掴まれていない方の手を振り上げて、新谷の顔をひっぱたこうとした。しかしすぐに新谷の手で掴まれ押さえつけられた。

自分より背が高く強い力。男と女の圧倒的な力の差。それをま

ざまざと見せつけられて、自分が非力な女である事が嫌で嫌でしかたがなかった。

私が女だからこんな変な男につきまとわれるのか。女だから力勝負では勝てない。悔しい。どうして私は女なんかに生まれてきたんだろう。男なんかに負けたくない。

両腕を掴まれ逃げられない状況で、新谷は顔を近づけてきた。こいつ私にキスするつもりだ。気持ち悪い！嫌！誰か助けて！

私は心の中で助けを求めながら、必死で無駄な抵抗を続けた。

「何をやってる！」

私の願いが通じたのか、そこに現れたのは偶然通りかかった兄貴だった。突然やってきた助けに勇気づけられ、私の喉は機能を取り戻し叫び声をあげた。

「助けて兄貴」

私の叫びに兄貴はものすごい迫力で駆けつけた。兄貴の勢いに恐れをなした新谷の手が離れる。私がすぐに新谷の手から逃れると、兄貴はその重量級の拳で新谷の腹を殴りつけた。

文字通り新谷が吹き飛んだ。私が兄貴の背中にしがみつくと、兄は私を背にかばったまま新谷を睨みつけた。

「二度と妹に近づくな。今度近づいたらボコボコにするぞ！」

兄貴の迫力の低音に恐れをなした新谷は、震えた体でよろよろと逃げ出した。

「彩花。もう大丈夫だ俺がついてるから」

兄貴がそう言って私をなぐさめてくれたから、私は緊張の糸がほどけたようにその場で泣き崩れた。兄貴にすべての事情を話したら、学校の送り迎えをしてくれるようになって、兄貴を恐れた新谷は私に付きまとわなくなった。

あれから9年近くたつというのに、あの時の事を思い出すと震えがでる。力づくで理不尽に踏みにじられた心。妄執というべき恋に狂った男の恐ろしさ。

あの時の新谷は私を好きだったんじゃない。私の体を物みたいに扱って、ただ支配したいだけだった。あれ以来私に言い寄る男が皆、あの時の新谷のように見えて仕方がない。

美人だから、可愛いからと褒められても、不愉快さしか湧いてこないのは、私の表面的な飾りしか見ていない男達に苛立ちを覚えるから。

男に負けないように、一人で立ち向かえるように、強くなりたい。誰にも負けないくらい強く。そんな過去の亡霊に捕らわれたまま私は生きてきた。

でも朝比奈は他の男と違った。細くて頼りなくていつもへらへら笑ってて、ちつとも怖くなかった。女好きだけど、女なら誰でもいいといった態度は、いつそ女子全員に平等だ。私の容姿で特別扱いするわけでもなく、女だからとバカにするでもなく、私の力を素直に認めてくれた。

私がからんで文句を言っても、うっとおしそうにしながら、それ

でも完全には私を突き放さなかった。

朝比奈と一緒にいるのは居心地良かった。婚約者の振りと言いだした後も、私に気があるような言葉はいつも冗談のように軽くて、私が怒ればあっさり引いた。

どんなに私が殴ろうとも、一度も反撃しなかった。怖いと感じる事さえなかった。

だから家に入れた。勝手に泊まっても、居座っても、本当に私が嫌だと言えば朝比奈はあっさり帰る。そう確信があったから、どこか安心できた。

朝比奈は特別だ。新谷みたいなバカで気持ちの悪い男と違う。

古谷先生の言った覚悟ってこの事だろうか？恋愛と向き合う覚悟が足りない。

兄貴の言う通り、私にとって朝比奈は特別な存在なの確かなようだ。それでもこの感情に恋愛という言葉を付け加えるのは、まだ抵抗がある。それでも朝比奈という居心地のいい場所を失いたくなかった。

私が朝比奈を好きだと言えば、アイツを引きとめられるのだろうか？またそばにいてくれるだろうか。そんな風に女を武器にするのは私らしくない。

それでも私が朝比奈を恋愛相手として扱わない事で、アイツが離れていくのなら引きとめる手段は他にない。

過去との遭遇

悪い夢でも見てるのかと思った。ずっと忘れていた過去を思い出したばかりの時期に、再び遭遇するなんて。彩花は仕事だという事を忘れて茫然としてしまった。

「上条。どうしたんだ？」

彩花の態度を不審に思った先輩の関本が声をかけた。その声で彩花も我に返ってビジネス用の顔を作る。心の中はまだ嵐のように吹き荒れていたのだが……。

「上条です。よろしくお願いします」

「初めまして。こちらこそよろしくお願いします」

本当に初めて会ったというような、何食わぬ顔で接する男が腹立たしい。名刺交換のために差し出した手がわずかに震えた。他の人間に気付かれない程度に、さりげなく私の指に触れた男の手の感触が嫌らしい。

この男は何も変わっていない。心の中だけで目の前の男を睨みつけた。

新谷努との9年ぶりの再会だった。

先輩の取引先に、挨拶まわりのために連れられて行った。そこで同じ様に先方担当者から新人として紹介されたのが新谷だった。

中学を卒業した後、新谷がどんな人生を送ってきたかまったく知らなかった。まさか同じ様に東京に出てきて、こんな偶然に再会す

るなんて……。私は不幸な偶然を恨んだ。

しかも仕事だから避けるわけにもいかず、名刺交換までしてしまった。会社や部署まで知られてしまったわけで、嫌な予感しかない。

不幸な偶然から数日もたたない内に悪い予感は的中した。

「上条。電話だ。内線3番」

「わかりました」

仕事にかかってきた一本の電話。取引先からだと思って何気なく挨拶した。

「お電話変わりました上条です」

「久しぶり。上条」

声を聞いた瞬間鳥肌がたった。名乗らなくてもわかる。散々昔聞いた電話越しの気持ち悪い声は今も変わらない。新谷だった。

私は周りの人間に気付かれないように、小声で話し始めた。

「私用電話は困ります」

「仕事だよ。取引先への挨拶さ」

「御社の担当は関本です。よろしければ変わりますが」

「冷たいなあ。俺と上条の仲なのに」

どんな仲だ！仕事だと言ったそばから馴れ馴れしい態度。あまりの不愉快さにどなってやりたかったが、ここは職場だ。

『今日の夜、食事に行こう。時間開けといてくれ』

断られるとは思ってもいない命令口調。どこからそんな自信が湧いてくるのか。理解不能だ。

『お断りします』

『大切な取引先との接待を断るのか』

馴れ馴れしくしたと思つたら、仕事を言い訳に使う。卑怯で身勝手なバカな男にこれ以上付き合う気はない。

『仕事の用件は担当の関本にお願いします。私用ならお断りです。失礼します』

私はそれだけ言いきって、一方的に電話を切った。どれだけ言葉を尽くして断つても、どうせ新谷には通じない。話すだけ無駄なのだ。それにあの男は昔も第三者の前では大人しい。職場の人間がいる前ではそうそうちよっかいはかけられないだろう。

しかし私の読みは裏切られた。その後も毎日のように私宛の新谷からの電話がかかってきた。

いつかかってくるかもわからない電話におびえ、電話に出るのが苦痛でしかたなかった。昔のように電源を切ってシャットダウンする事もできず、ろくに相手もせず切っているのだがストレスは確実に溜まっていった。

本当は朝比奈との事を早く解決したかったのに、そんな心の余裕もなく、また朝比奈を私のトラブルに巻き込みたくなくて連絡もできなかった。

しつこい電話に悩まされるようになって2週間以上すぎたある日

の事。その日電話を取ったのは菱沼だった。

「上条ですか？少々お待ちください」

そういつて保留にせず、菱沼は、私に意味ありげな目線を送ってきた。それだけで誰からの電話かわかってしまった私は、一瞬表情を作るのに失敗して不愉快な顔になった。それだけで菱沼には十分だった。

「すみません。上条は外出しているようです。よろしければ上司の私が代わりにご用件を伺います」

その後すぐに電話は終了し、受話器を置いた菱沼はすぐに私と理子を呼んだ。

「何のご用でしょうか？」

事情は知らないが集まったメンバーだけで何かを感じ取った理子は、あきらかに警戒していた。菱沼は一見穏やかそうで何を考えているかわからない笑顔で言った。

「上条君と話があるんだが、君にも同席してもらった方がいいと思つてね。会議室に行こう」

どうしたのかと目だけで理子が問いかけてきたが、私は無言で俯いてしまった。

「S物産の新谷という社員から頻繁に、上条君あてに電話がきてるみたいだけど何があつたんだい？」

「何もありません」

「何か仕事でトラブルがあったなら、上司に報告するのが当然だろう」

「業務において特にトラブルはありません。ですからご報告するよ
うな事は何も……」

「例えプライベートでも仕事に支障をきたしているなら、上司に早
めに相談するべきだ。最近外線電話を明らかに避けているね。電話
がなるたびに手が止まったり……。何があった？」

「彩花、どういう事？」

二人に真剣な表情で問い詰められ、私は素直にすべてを話した。

菱沼は冷静に聞いていたが、理子は怒りをあらわにした表情で、こ
こにいない男に吠えた。

「信じられない。最低最悪な男ね。S物産に抗議して、嚴重に注意
をした方が……」

「それは辞めた方がいい」

菱沼のいつもと変わらない笑顔に、理子は食ってかかった。

「どうしてですか！明らかにストーカーじゃないですか」

「確かに私用電話だが、まだ直接的に何かされたわけじゃない。下
手に騒げばS物産での上条君の評価が下がるだけだよ。それがわか
ってるから相手もこんな露骨な手を使うんだ」

「彩花は被害者なのにどうして……」

「上条君が訴えても、周りはただの痴話喧嘩だと相手にしない。む
しろ騒ぎ立てれば自意識過剰だととられる。S物産の人間は見知ら

ぬ上条君より新谷を信じるだろうからね。昔も同じだったんだろう」

菱沼の言う通りだ。新谷はきっと会社内でも優等生を演じて、周りの信用を得ているに違いない。昔と同じ。誰も私の言う事なんか信じてくれない。だから今まで他の人間に話せなかった。

「まだうちの社内で他の人間は気付いていない。話が広がって変な噂が立つ前にこのメンバーだけで対処する。今後新谷からの電話は私が平賀君に回すように部署内に通達しよう。重要な案件だから私達が不在で、上条君を指名しても、繋がないようにとね」

そう言いきった菱沼を、穴があくほど凝視した。なぜ菱沼が私を助けてくれるのか？この男が情で動くとはとても思えない。何か裏があるのか？

「どうして……」

「部下のメンタルをフォローするのも上司の仕事だよ。君はこの件はすぐに忘れて仕事に集中しなさい」

菱沼の言葉を全面的に信用するほど、私もバカじゃない。何か裏があるはずだ。それでも今の私にとって、新谷の電話をとる必要がなくなつた事はありがたかった。

「何かあつたらすぐ私に相談しなさいね。大丈夫、私は彩花の味方だから」

理子の言葉に私は救われた。昔と違う。今の私には信じてくれる人がいる。

過去の再現

それからしばらくの間、私は仕事に集中できるようになった。菱沼が行った通達は部署内にしつかり浸透して、新谷の電話を私に繋ぐものはいなかった。

菱沼がうまく言いくるめたのか、部署の人間はよほど重要な案件と勘違いし、私の態度を不審に思うものはいなかった。

それでもまだ不安は消えない。あの男がそう簡単に諦めるはずがない。電話がだめなら他の手段を取るに違いない。またあの男に付きまとわれるのではないかと不安で、一人になるのが怖かった。事情を知っている理子とできるだけ行動を共にするように心がけたが、常に一緒にいるわけにもいかない。

「ごめん、上条。今日一緒に帰れそうにないわ。取引先のバカ親父が明日までに見積もり作りなおせて無理難題吹っ掛けてきて、これ以上どう安くしろっていうのよ、まったく……」
「終わるまで待ってようか？」

「今日は早く帰った方がいいわ。彩花仕事しすぎで疲れた顔してるもん。まあ仕事に熱中して嫌な事忘れたいんだろうけど、このままじゃ倒れちゃうわよ」

そんなにひどい顔してるだろうか？確かにひどく疲れてる。でも早く帰っても眠れもしないし、ちっとも疲れは取れないのだが。それでも理子の気遣いを無駄にしくなくて、私は一人会社を後にした。

注意していたはずなのに、気がついたのは自宅最寄りの駅を出て少ししてからだった。後ろから気配を感じる気がする。時々振りかえっても姿は確認できない。でもこの感覚は昔感じたものと同じだ。つけられている。相手はあの男しかいない。私はできるだけ人通りの多い道を歩きながら考えた。たぶん会社からつけてきたんだ。あの男が私の家を知っているはずがない。このまま家に帰ったら自宅がばれて押しかけられる。一人暮らしの今は昔よりはるかに危険だ。

わざと自宅から離れるように遠回りしたが、時間稼ぎにしかならない。私は震える手で携帯を取り出した。

『どうしたの彩花？』

『……さっき最寄駅出たとこなんだけど……つけられてる気がする』

理子が息を飲むのが電話越しにもわかった。

『どうしよう……』

『とりあえず近くのコンビニに避難して。今から私が迎えに行くから』

私は理子の言う通り、コンビニに入って時間をつぶした。メールで場所は連絡したからあとはここでじっと待ってればいい。雑誌を立ち読みする振りをして外の様子を確認すると、コンビニ内が見える位置から、こちらの様子をうかがっている人影が見えた。

暗くて新谷かはわからなかった。しかしあんな所で立ち止まっているなんて明らかに不審人物だ。

その人影ばかり気にしていた私は、男が後ろに立っている事に気

がつかなかった。いきなり手首を掴まれ驚いてガラスに映る背後の男に気がついた。

新谷だった。……どうして？外にいたはずじゃ……。

私が茫然としている間に、無理やり腕を引かれ、私は引きずられるようにコンビニの外に連れ出された。声をあげて抵抗すればよかったと気がついた時にはもう遅かった。

ふりほどけない程強く握られた手が恐ろしかった。昔と同じ様にこの男には勝てないのか？声を上げようとしたのに、あの頃と同じようにのどの奥が張り付いて声がでない。私は必死に暴れて抵抗した。しかしあっさり両腕を掴まれて、取り押さえられた。

「どうして俺を受け入れないんだ。せつかく運命的に再会できたのに」

あんななんと再会したのは運命なんかじゃない。不幸な偶然だ。

「俺は上条の事まだ好きなんだ。諦められない。昔は邪魔が入ったが、もう俺達の仲を引き裂く邪魔者はいない。いいかげんに諦めろよ。俺の物になれ」

私は物じゃない！誰の物でもない。私は私だ！なんでそんな事もわからないのか？人を見下す態度、物としか考えてない自己中心的な考え方、私を見下ろす死んだ魚の様な濁った目。気持ち悪くて、怖くて、何もできない無力な自分が悔しい。

昔と全然変わらない。私もこの男も。時間が巻き戻ったみたいだ。

新谷の顔が私に近づいてきたその時、私は目の前の男への恐怖心でパニックになっていてまったく気が付いていなかった。

新谷の真後ろにいつのまにか近づいた者がいた事を。

新谷もまた私を襲う事に夢中で気がついてなかった。自分の首に刃物が当てられるまで。

「彩花から手を離せ」

低くどすの聞いた声が響いて、新谷は固まった。見えなくても首に当たった感触で状況がわかったのだろう。ゆっくりと私の腕を離れた。私は何歩か後ろによるめいて、そのまま地面に崩れ落ちた。

見上げれば新谷の背後に朝比奈が立っていた。

いまだかつて見た事がないほど恐ろしい表情の朝比奈だ。朝比奈が怒る姿を見た事がないわけではない。いつもは意地の悪い笑顔や不機嫌な表情だ。さらに怒りがすごい時でも、朝比奈の怒りは底冷えするような冷気を放つものだ。

しかし今日の朝比奈の背後には、炎が燃え上がったような気配を感じる。まともじゃない！菱沼に殴りかかった時の事を思い出す。あの時の様に怒りにまかせて何かしでかす気じゃ……。

朝比奈は刃物を新谷の首に当てたまま、ゆっくりと回り込んで私を背に庇うように立った。見えない相手に恐怖を感じて青ざめていた新谷の顔が、朝比奈の顔を見てさらに青くなり死人のようだった。

「誰だ？」

「彩花の婚約者だ」

「……嘘だ。上条は俺の物……」

「彩花は物じゃない。どれだけ欲しがろうと永久におまえの物になる事はない。死にたくなければ二度と彩花に近づくな」

「……」

新谷が怒りを込めて朝比奈を睨むと、朝比奈の手に握られた刃物が首をなぞる。朝比奈の顔は私から見えなかったが、恐怖に震える新谷の表情で想像はつく。たぶん本気で人を殺しかねないような狂気に満ちていたに違いない。

「……わかった。近づかない。約束する」

「ならとつとと去れ」

新谷はそのままゆっくりと下がり、朝比奈の向けた刃物から目をそらさずに、そのまま慌てて逃げ出した。新谷が視界から消えたのを確認してから、朝比奈はゆっくりと手を下して振り向いた。

「大丈夫？上条。立てる？」

朝比奈の顔はいつもと同じ嘘くさい笑顔だった。声もいつもと変わらない。たった今新谷を振りあげさせた男とは思えないほどにいつも通りだ。それが逆に恐ろしかった。

それでも新谷がいなくなった事で、私の声はなんとか機能してくれた。

「あ……あなたねえ……そのぶつそうなもの、さっさとしまいなさいよ」

「ああ。これね」

朝比奈はあるうことか、無造作に背後にほうり投げた。

「ちよつとあんた何するのよ！危ないじゃないのよ！バカ！」

私が慌てて立ち上がって刃物を拾うと、朝比奈がくすくすと人を小馬鹿にしたような笑い声をあげた。間近で見ると妙に作りが安っぽい。刃に触ると柄の中に引っ込んだ。

「ただの脅しだから、それで人は傷つけられないよ」

人を食ったような朝比奈の笑顔に私は腹がたった。

「じゃあ何？さっきの怖い顔も脅し？」

「うん。演技。あの男の方が身長も体格もいいし、まともにやり合っても勝ち目ないから」

「この！ヘタレバカ朝比奈！」

私はいつものように朝比奈に殴りかかろうとして、途中で止まっ
てしまった。最後に朝比奈と会った時の事が頭によぎったのだ。こ
こで朝比奈を殴って本当にいいのか？朝比奈は私を助けるために演
技しただけ、全然悪くないのに暴力をふるっていいのか？

「どうしたの？上条らしくないね。殴りたければ殴ればいいのに」

朝比奈は笑ってなかった。何を考えてるのかわからないような無
表情だ。私は振り上げたこぶしを下ろして俯いた。心がずきずき痛
い。また朝比奈がおかしくなるんじゃないかと不安になる。

しかしすぐに朝比奈はまた嘘くさい笑顔になった。それにほつと
した。作り物の笑顔だとわかっていても安心できた。

「ありがとう……。でもどうしてここに？……もしかして理子に頼まれた？」

「うん。まあね。念のため家まで送るよ」

私は歩き出す朝比奈について足を踏み出した。その時携帯が鳴った。理子からだった。

『彩花！大丈夫？今近くまで来てるから……』

『大丈夫。朝比奈が追い払ってくれた。朝比奈に連絡してくれてありがとう』

『……。そう。よかった。私もすぐそっち行くわ。コンビニの前で待ってて』

そう言っただけで理子は携帯を切った。なんだろう？なんか理子の様子がおかしかったな。気になって様子を探るように朝比奈を見た。

「朝比奈ちょっと待って。今理子がくるって」

「うん。わかった」

朝比奈がいつも通りの笑顔だったので、私はただの思いすぎしかと忘れる事にした。

「よかった！彩花が無事で」

理子は私に飛びついて喜んでくれた。

「心配してくれてありがとう。残業中に呼び出すごめんね」

「そうねえ。王子様が登場しちゃったら、私が来る必要なかったかも」

理子がニヤニヤ笑いながら私と朝比奈を交互に見る。

「誰が王子よ。このへっぽこ、腰ぬけ男！戦う前から勝ち目ないって諦めて、ずるい手使うような男よ」

「ひどいなあ。確実に上条を助けるためじゃないか」

私と朝比奈と理子の3人でそんな軽口叩きながら、家へと帰って行った。やっといつもの日常が戻ってきたようで、気が抜けて安心した。朝比奈もこの前みたいにおかしくないし。いつも通り嘘くさい笑顔だ。

また朝比奈に借りが増えたな……。どうしよう？などと私はのんきに考えていた。

幕間 冷たい戦い（前書き）

上条編ですが、この話だけ理子視点のお話になります

幕間 冷たい戦い

彩花が無事部屋に入るのを見届けるまで、私はいつもどおりの笑顔を貫いた。彩花の目がなくなつたのを確認した後、笑顔を捨てて隣に立つ男に冷やかな目を向ける。

「どういう事か説明してもらいましょうか？」

「どういう事って？」

朝比奈も笑顔を捨てて、無表情になつた。先ほどまでの軽い調子が嘘だつたように。

「どうしてあの場にいたのよ。私あなたには何の連絡もしなかつただけど」

朝比奈は私の問いを無視して、歩き出した。

「ちょっと待ちなさいよ。前に彩花にはもう関わらない、私に任せるって、あれ嘘だったの？」

「別に嘘はついてないよ。今回は工商事と関係ないし、理子さんを頼ってないし」

「じゃあどうやって彩花の状況を知つたのよ。私以外に今回の事知ってる人間何て……」

そこまで言つて私は気がついた。今回の件を知っている人間がもう一人いる事。その人間は先ほど彩花から電話がかかってくる時、会社で私と彩花の電話の内容を聞いていた。

「まさか……いつのまに、あなたと菱沼が繋がったの……」

「理子さんと手を切った頃だったかな。それが交換条件だったから」
「何と？」

「I商事は僕と理子さんが組んでまた動くのを恐れて引き離そうとしたんだよ。だから菱沼は理子さんには僕の監視をするように命じて、一方で理子さんとの関係を切る事を条件に、僕に上条の情報を流す約束をした」

つまり朝比奈は私の情報の価値がなくなったと見限って、I商事と手を組んだのか。だからあの時やけにあっさり彩花から手を引いたのか。この男がそう簡単に彩花を諦めるはずがなかったのだ。

騙された私がバカだったが、腹立たしい。

「いいわけ？ そんなあっさり白状して。私とまた繋がった事が、I商事にばれたらまずいんじゃないの？」

「理子さんは言わないよ。そんなことしてもお互い何の得にもならない。手を切ったままだと思われたままの方が都合がいい」

その通りだった。また朝比奈と組んでいると思われる、会社から目をつけられれば私の立場が悪くなる。

「いつから今回の事知ってたの？」

「菱沼が上条に事情を聞きだしてすぐ連絡がきた」

「なんですぐ新谷を排除しようと動かなかったのよ」

「証拠がなかったから」

「証拠？」

「新谷が上条のストーカーって証拠が」

朝比奈は私を振り切ろうと足早に歩いてしたが、負けじと私も食いつ下がった。私がしつこくつきまとうのにうんざりした朝比奈はいらだたしげにビデオカメラを取り出して映像を映した。

そこには少し遠かったが、コンビニで彩花が新谷に捕まった所から、彩花が必死に抵抗している姿まで、しっかり映っていた。

暗い中で新谷の顔も、彩花の顔が恐怖で歪んでいるのもわかる。

「……これを撮るために、わざと新谷を泳がせてたの？」

「そう」

「そう……じゃないわよ！こんなに脅えてる彩花を前で、よく平気でカメラなんて回せたわね」

「上条が被害者だって、他人が見てもわかるように撮らなきゃ、証拠にならないだろう」

朝比奈は淡々と答えてカメラをしまった。罪悪感の欠片もないその態度にかつとなつて、衝動的に朝比奈の頬を平手打ちした。

痛そうない音がした。私の手も痛い。それでも朝比奈は無表情のまま、瞬き一つしなかった。

「気が済んだ？」

「本当に最低な男ね。あなたにとって彩花の事大切な存在だと思つてたのに。だからあんなに彩花のために必死になつてると思つたのに……」

「上条は大切だよ。だから上条のために二度と手出しできないよう証拠を押さえた」

「好きな女が他の男に襲われて、脅えている所を、平然とカメラで

撮れる男なんているわけないでしょう！」

「じゃあ理子さんは僕がかっこよく止めに入って、殴り合いでもすれば気が済んだ？」

「そうよ。あんな男殴ってやりなさいよ！」

朝比奈はいらだたしげに吐き捨てた。

「暴力で何も解決しないよ」

「何かっこつけてるのよ。あなたにとって体張って守る価値もない、彩花はその程度の女って思ってるんでしょう。彩花がどう思おうと私はあなたを認めない。徹底的に彩花との仲を邪魔してやる」

「好きにすれば？」

朝比奈はまた無表情に戻ってそう口にした。私の言葉は朝比奈の顔色一つ変える事はできなかった。

悔しい！なぜ彩花はこんな最悪の男を好きになったのか？彩花はいつもこの男の悪口を言ってるけど、いつも楽しそうで、心の底では信じているように見えた。

そんな彩花の思いはこの冷たい男に届いていない。彩花の思う以上に、腹黒く最低な男だ。たぶん私がどれほど朝比奈の事を悪く言おうとも、彩花には届かない。

『朝比奈が腹黒なのはわかってるわよ』

笑ってそんな事を言うのは目に見えている。それにもし信じてくれたとしても、彩花がどれほど傷つく事か……。そう思うと今回の真相を彩花に話す気にはなれなかった。

彩花を守りたくても私には何の力もない。無力な自分が不甲斐な
くて情けなかった。

女心と秋の空

彩花は秋晴れの空の様に久々に気持ち良く目覚めた。

過去の亡霊に付きまとわれた恐怖の日々から解放されたのと、久しぶりにあった朝比奈の変わらぬ様子に安心して、昨日の夜はよく眠れた。

朝比奈はいつものように人を食ったような態度と嘘くさい笑顔で、なにかあったのかもしれないという私の心配は考えすぎだったようだ。

私が放置しすぎたもんだから、作戦を変えてきたのかも。押ししてもだめなら引いてみなという恋愛駆け引きと言うやつだ。まんまと奴の策にはまって、うっかりアイツの事好きなのかも……などと考えてしまった私がバカだった。

しかし今回もまた朝比奈に借りを作ってしまった。早めに返さなきゃとメールしてみるも返事はない。まだ引いてみる作戦続行中なのか？

ヤツが逃げる振りをするなら、追いかけて力づくで引きずり出せばいい。学生時代に散々朝比奈を探しては、古谷教授に引きずって行ったあの頃のように。

その次の日曜日。私は何の連絡もなしに朝比奈の家の前までやってきた。いつもは朝比奈の方が突然現れて、私は驚かされてばっかりだから、たまには逆の立場になるのもいいわね。アイツどんな顔で驚くんだろう……。そんな事を考えながらチャイムを押した。

玄関の扉がゆっくりと開く。さあ驚かせてやる！と意気込んでい

たのに私の方が驚いてしまった。

朝比奈はよれよれのシャツとパンツに無精ひげという小汚い恰好で現れた。私の長年の記憶で、朝比奈は常に安物で平凡でも清潔感ある姿だった。朝比奈が女友達が多く、その子達と影で遊べた理由の一つはその完璧なまでの清潔感であったと思ってる。

いくら不意打ちに休日自宅に押し掛けたからといって、こんな隙だらけの格好をしてるのはらしくなかった。しかも寝起きなのか、表情もぼーっとして虚ろだ。

「何？上条。用事でもあったの？」

「急に時間できたから……たまにはあんたの様子でも見に行こうかと思ってる……気まぐれよ」

「悪いけど用がないなら、帰ってくれない？忙しいんだ」

あくび混じりのいかにも寝起きですって感じで言われても、全然忙しそうに見えない。ここまで来てはいそうですかって引きさがれるか。

それに今日の朝比奈は隙だらけだ。この絶好の機会にこの男の本音を暴いてやる。

「すごい暇そうに見えるんだけど、婚約者がわざわざ遊びにきたのに門前払いつてないでしょう」

私はそう文句を言いながら、玄関の扉を無理やり開いて部屋の中に入った。入った瞬間私は絶句して固まってしまった。

ゴミと物が散乱した部屋、脱ぎ散らかした服、台所には洗いものが山のように溜まっている。

いかにも男の一人暮らしという感じの荒みっぷりだ。これが他の

男ならまあこんなもんよね……と納得できるのだが、朝比奈の部屋とは信じられない。豆すぎるほど豆。清潔感だけが取り柄の男のはずが何があったのか？

今まで私が急に我がママを言っただけで朝比奈の家に来た事も会ったけど、いつも綺麗に片付いていて嫌味な男だと思ったものだ。

「最近忙しくて、部屋片付いてないんだよね。それでもよければどうぞ」

朝比奈は慌てるでもなくそう言って、部屋の中に入っていった。驚く私を放置して、平然と布団に寝転がって目をつむる。

「僕寝るから、好きなだけいて……。帰る時鍵閉めなくていいから」

なんだこのマイペース朝比奈は。まめまめしく人の世話ばかりしてた男とは思えない程の、そっけなさだ。これもヤツの作戦か？私を慌てさせたいのか？

「この間助けてもらった借りを返しに来ただけど」

「ん……。ああ……。別にいいのに」

朝比奈は目をつむりたまま、どうでもいいといった感じでなげやりにそう言った。私はよくない！と怒りそうになるのを押しとどめて、必死に考えた。この朝比奈にどういう行動をしたら、この放置プレイを辞める気になるか。

色々考えて、私は一つの結論に達した。

「あんた今まで私の家で看病とか料理とか色々してくれたじゃん。今日は私が代わりにしてあげようか？」

「…………ん？」

「この荒みきつた部屋掃除してすっきりさせたあげるわよ。溜まってた借りの利子代わりだね」

「どうぞ、ご勝手に」

面倒そうにそう言って寝返りをうち、私に背を向けた。おかしいな。そんなことしないでいいと慌てるかと思つたのに。朝比奈の態度は変わらなかつたが、言いだした事をやっぱ辞めるなんて私の主義に反する。私は無言で掃除に取り掛かつた。

掃除しながら朝比奈に色々話しかけたが、適当な相槌は返つてこなかつた。でも寝ると言つた割には、ただ目をつむつて横になつてるだけで寝てるようには見えなかつた。

服を洗濯機にかけ干して、ゴミを分別して、台所に溜まつた洗い物をすべて片付けて、掃除機かけから拭き掃除までかなり気合入れて掃除した。

おかげで見違えるように綺麗になつたが、その頃にはもう日が傾き始めていた。乾いた洗濯物をとりこんで畳んでいたら、急にお腹がすいたなと思つた。

家事つて結構体力使うのよね。

冷蔵庫や台所の戸棚を探ってみても、食べられそうなものは何一つなかつた。

冷蔵庫の中身がミネラルウォーターだけつて、料理上手な朝比奈らしくない。ちゃんと食事してるんだらうか。横になっている朝比奈の顔を間近で見ると、痩せたを通り越してやつれた感じがする。

この前は夜、暗い中で見たから気付かなかつたけど、がりがりつて感じた。忙しいからって食事もろくに食べてないんじゃないかと心配になる。

「朝比奈」

「……何？」

「お腹すいた。なんか食べに行こう」

「面倒だから、勝手に行ってきたら？」

人が心配して気を使ってるのに、何だこの態度は！私は朝比奈のシャツの襟首を掴んで、無理やり起こした。

「あんたも行くの！いいから、早く身支度整えてきなさいよね」

朝比奈は無気力な表情のままのろろと起き上がった。私の態度に脅えるでも、いつもの余裕で笑うでもなくひたすら無気力。動作も遅くぎこちない。

私はイライラしながら待っていた。顔を洗いひげを剃って、服を着替えた朝比奈はずいぶんマシになったが、無気力な表情は相変わらずで眠そうだ。

朝比奈がひたすら面倒だというので、しかたなしに近所のファミレスに行く事にした。私はお腹がすいていたので、がつりチーズハンバーグセットを頼んだが、朝比奈は和風雑炊でしかもちつとも食事が進まない。

「早く食べないと冷めるわよ」

「……うん」

「こっちのハンバーグ上げるわよ」

「いらない」

「痩せたでしょう。肉食べて、あんたの肉増やしなさいよ」

私が強引に朝比奈の器にチーズのかかったハンバーグを入れる。朝比奈はすごく嫌そうな顔をして、上げたハンバーグを細かく刻んで、一口だけ食べた。それっきり和風雑炊の方も一口も食べなくなつた。まだ半分は残っているのに……。

朝比奈に色々話しかけたが、それきり相槌も返ってこない。どうしたんだこいつ？まだ寝ぼけてるのか？

私が行ってから何も食べてないし、お腹いっぱい食べられないという事はないはずなんだけど。

朝比奈がわざと私にそっけない態度をしてるんじゃないかと思つていたが、本気でおかしいんじゃないか？具合悪いか。

私は心配で朝比奈に聞いたただそうとしたその時、朝比奈の携帯が鳴つた。すぐに止まないのだから電話だと思ふのだが、朝比奈は出ようともしない。

「電話じゃないの？私に遠慮せずでたら？」

「……」

朝比奈は心底めんどくさそうに、携帯を持ち上げて電話に出た。

「どうしたの？何かあった？」

本当に器用な男だ。顔は無気力にわずかにめんどくさが混じつたような表情のまま、声だけ愛想よく優しい。電話の向こうの相手は、きつといつもの胡散臭い笑顔の朝比奈を想像するだろうな……という感じの話し方だ。

朝比奈は相槌ばかりで何の用件か、相手がどんな人間なのかかわらない。ただ時折「大変だね」とか「あなたは悪くないよ」などと慰めるような事を言っている。なんか愚痴聞いている感じ？

いつまでたつても終わりそうにない電話に、私はつい軽く朝比奈を睨んでしまった。冷めきつた雑炊を最後まで食べさせないと思つたからだが、わずかに電話の向こうの人間に嫉妬してた。

私にはそっけないのに、ずいぶん親切につきあつてあげてるわよね。

朝比奈は私の不機嫌さに眉をひそめた。

「ごめん。玲子さん。今日はまだ仕事あるんだ。また何かあつたら連絡して」

玲子さん？電話の相手は女か！まあ、女好きで女には優しい朝比奈なら当然かもしれないが、親しげな話し方とか、細やかな気遣いとか、なんだか腹立たしい。私の婚約者の振りをするようになってから、女と遊んでるようには見えなかったのに、いつのまにそんな相手が出来たのか？

最近放置している間に、また昔の女癖の悪さが出てきたのか？

朝比奈は電話が終わって、また無気力な表情のまま背もたれに寄りかかった。

「誰？」

「知り合い」

答えになつてない。しかし朝比奈は話す気がないようで、それっきり黙ってしまった。放置された私は電話の相手になってしかたがない。しかし気まずい空気が流れてて、聞きづらい。

「トイレ行ってくる」

そう言って席を立った朝比奈の後ろ姿を見ていたら、余計な物まで目に入ってしまった。テーブルの端に置かれた朝比奈の携帯。

今の着信履歴で名前わかるよね……。メールとかしてたら内容でどんな相手かわかるかも……。いやいや何考えてるの私！人の携帯を覗き見るなんて、私らしくない卑怯な方法だ。

そんな葛藤は長いようで短い間の事だった。気がつけば朝比奈の携帯を手に取っていた。

朝比奈に会うまでは晴れやかだった私の心は、今や暗雲が立ち込め今にも嵐が来そうなほどに荒れていた。

嘘つきは泥棒の始まり

朝比奈の携帯を開いてまず着信履歴を確認する。『加藤玲子』という名前が確認できた。しかも着信履歴を見ると、ほぼ毎日着信がある。朝比奈からの発信には加藤玲子の名前はなかった。

一方的にかかってくるという事か？それにしても頻繁すぎる。怪しい……。メールの方も確認しようとしたその時、すぐそばに気配を感じて顔をあげた。

朝比奈が間近に立って私を見降ろしていた。冷やかな眼差しに息が止まるかと思った。朝比奈は無言で私の手から携帯を取り返して席に座る。

何も言えなくてしばらく無言でいたら、朝比奈がぼそつと呟いた。

「らしくないね。上条がこんな事するなんて」

そう。全然私らしくなかった。自分のした愚かな行為に罪悪感で胸が痛む。それでも素直に謝る事ができずにいた。加藤玲子って何者？朝比奈の何？

後ろめたさから、恐る恐るといった感じで尋ねた。

「加藤玲子とどういう関係？」

「昔の彼女。もつずいぶん連絡とってなかったんだけどね」

「どうして昔の女から朝比奈に連絡がくるの？」

「さあ？どうしてだろうね」

「ずいぶん面倒そうだったけど、嫌なら避ければいいじゃない。大
学時代だって未練たらたら元カノ達をあっさり振ってたのに」

「姉さんの友達なんだ。あんまり無下にできなくて」

優姫さんの友達？って事は朝比奈より年上の彼女？しかも昔の女ってなんか怪しい。

「昔っていつ頃の事？」

「中3の頃かな。つきあってたのは半年ぐらいだけど。別れてから一度も連絡とってなかったのにな」

「中学生で年上の彼女って……。ませた子供ね……。もしかして初恋とか？」

朝比奈はわずかに皮肉げな表情を滲ませて、ため息の様に言葉を紡いだ。

「初恋って言葉が似合わないような、甘くない話だよ」

初恋っていうか、もしや……。初めての女とか？私が新谷から逃げ回って男性恐怖症になっている頃、こいつは年上の女とそういう関係で……。もしや、いまさらやけぼっくいに火とか？朝比奈らしいけど、生々しくてなんか嫌だった。

「なんか誤解してるみたいだから言っておくけど、玲子さんもう結婚してるよ」

「えっ？じゃあなんで今更あなたに電話してくるのよ」

「ほぼ、旦那の愚痴？面倒だよな」

夫婦喧嘩は犬も食わない。そんな話で毎日電話掛けてきて、それに律儀に付き合ってるのか……。バカだな、朝比奈も……。そう思

「ただ、待てよ。嘘つき朝比奈が本当の事を言っているとは限らない。」

「浮気がばれるのが嫌で適当にごまかしてるのかも。」

「しかし私にじっと見られても、動じることなく無気力でぼーっとしたままの朝比奈。」

「気になるの？」

「別に……あなたが女友達多いのは知ってるし」

「そう強がって嘘を言ってみたものの私の胸の中に、疑惑の芽がでてすっかり根付いてしまった。この時もっと突っ込んで聞いてすっきりしておけば、この後悩む事もなかったのにと後に後悔した。」

「もやもやした気持ちを抱えたまま、私はしばらくの間すごした。去年の年末に金沢行った時は、朝比奈の浮気に落ち込んで悔しかったけど、今は違う。」

「やっぱり女の影がちらつくとか気分悪い。でもそんな朝比奈を攻められるのか？と今の私は思ってしまう。だって朝比奈とは婚約者の振りをするって約束だけで、本当の恋人じゃない。私は朝比奈が好きって、言葉でも態度でも表した事なかった。」

「曖昧な関係に甘えてはつきりさせなかった私に、朝比奈が他の女と付き合ったからって責める権利があるだろうか？」

「それにまだ玲子という女と何かあったのか証拠はない。深い関係になってたら不倫なわけだから、友達としてやめたほうがいいと忠告もできるかもしれないけど……。」

「いつまで『友達』なんて都合のいいポジションにいる気だ私。もし相手の女がフリーで朝比奈が本気なら笑って祝福できるのか？友」

達なら当たり前の事ができそうになかった。やっぱり朝比奈はただの『友達』じゃない。私にとって『特別』なのだ。そうまざまざと突きつけられた気分だ。

気づけば秋も終りの11月。風も冷たくなってきたこの季節、仕事帰りの街中でなぜか見つけてしまった。金沢の時も思ったけど、やっぱり私は朝比奈の悪事を見つけるセンサーでもついているんじゃないだろうか？

夜の街を親しげに女と歩く朝比奈を見つけた。この前の無気力ぶりが嘘みたいに愛想笑いを浮かべている。相手の女はものすごく美人だった。

朝比奈より年上だとは思いがまだ20代半ばぐらいじゃないだろうか。背は私と同じくらい高く、スレンダーでコートを着てもわかる、モデルの様なスタイルの良さ。だってショートコートからのびるジーンズに包まれた足が半端なく細くて長い。女の私でも見とれてしまうほどだ。

思わず後をつけて様子をつかがってしまった。

顔は少々メイクが濃いけど、すっぴんでも十分美人だろうと思うほど顔立ちが整っていた。朝比奈と同じ目線で並んで微笑む女を見ていると胸が苦しかった。朝比奈と同じ目線で並んでたつそのポジションは私の物だ！などと子供じみた独占欲に支配される。

二人はオシャレなレストランに入って行った。外から何うと店員が駆け寄るようにやってきて、女に丁寧にお辞儀して親しげに話しかけている。しばらく店員と女は立ち話を続けてから、奥の席へと案内されていた。常連なのかしら。

さすがに店の中まで後をつけたりしたら気付かれると思って、そこで諦めた。そもそも女と一緒にだからって後をつけてこそこそ嗅ぎまわるなんて、私らしくない。

どうしちゃったんだろう私。最近の私は全然私らしくない。朝比奈の女の影に嫉妬しておかしな行動ばかりしている。

自己嫌悪で心の内側から腐っていく気がする。こんな自分嫌だ。あんな男の事なんて忘れて仕事しよう。

結局仕事に逃げても何も問題は解決しないのだが……。

「彩花。最近どうしたの？新谷の一件が解決した後機嫌よくなったのに、最近また荒れてるわよ」

久々に理子に飲みを誘われたと思ったら、さっそく突っ込まれた。

「そんなにわかりやすいかな？私」

「上条をわかってない他の人間は気付いてないだろうけど、私にはばればれよ。また朝比奈さん関連？」

やっぱり理子に隠し事なんてできないんだ……。私は諦めて素直に電話とこの前の目撃情報を話した。

「それ完璧浮気じゃない！なんで怒らないのよ！」

「だってまだ食事行っただくらいじゃ浮気かわからないし……」

「本当にそう思ってるの？だったら何でそんなに落ち込んでるわけ？彩花も怪しいと思ってるからでしょ」

返す言葉もなかった。理子の言う通り、私は朝比奈を疑ってる。

でも問い詰める勇気もなかった。また自己嫌悪に落ちていきそうだが。

「はつきりさせないから落ち込むのよ。ここは浮気の現場押さえて、しっかり引導渡して別れちゃいなさいよ」

「……なんか最近理子おかしくない？前は朝比奈と私をくつつけようとしてたのに、最近なんかやけに朝比奈の悪口に乗ってくるし」

理子は少し口ごもって気まずそうにしていたが、しばらくして重い口を開けた。

「男の浮気が許せないのよ。ほら私も二股で嫌な思いしたじゃん」

そうだった。去年の今頃、別れた男から金沢旅行もぎ取って、一緒に行く相手がいなかったのがきっかけで、私と仲よくなっただ。あれからまだ1年しかたつてないのか。理子とはもうずいぶん長い間友人だったような気がしていたが、まだたった1年なんだ。

「ごめん。嫌な事思い出させて」

「いいよ。もう立ち直ってるし。でもやっぱり朝比奈さんの事ははつきりさせた方がいいと思うの。ねえ、ちょっと私にまかせてくれないうい？」

理子の何かを企むような小悪魔笑顔に嫌な予感がした。しかし悪魔の誘惑というのはそう簡単に逃げられるものではない。結局理子に乘せられてまた私らしくない行動をする事になってしまったのだ。

嘘から出たまこと

「なんでここに来たの？」

私が居心地悪そうに店内を見回すが、向かいの理子は楽しそうに笑っている。ここはあの日朝比奈と女が入って行ったレストラン。高級感があってオシャレで、女性客かカップルしかいないような店というのは、私はどうも苦手だ。

理子はまともに説明もせずいきなり私をここに連れてきた。しかも今は私を放置してメール中。私が不機嫌なのが分かっているのだろう。理子はメールを送り終えた後、上目遣いのぶりっこで言った。

「ごめんね。彼からのラブメールに返信してた」

「そういうぶりっこは男にだけ使いなさいよ。女にしてもむかつくだけよ」

「そういう彩花のはつきりものを言う所好きよ」

褒められたって嬉しくない。

理子が勝手に料理を頼んでいるが、私はメニューの横文字だらけの名前が嫌で、すぐに見る気を失った。ほにやら肉のなんとか風とか？どこの国の料理だかさっぱり分からない。

オーダーを終えて最初の一杯に口をつける。まずいわけじゃないんだけど、甘いワインは私好みじゃなくて、なんだか気分が悪い。

最初の一杯を飲みきった頃、やっと理子は話し始めた。

「彩花が見た女がここの常連風だったって言ってたじゃない？だからこの前ここにきて調べたのよね。そしたらその女はただの客じゃ

なくて、この店のオーナーなんですって」

「え！この店の？その女が加藤玲子なの？……」

「加藤っていうのも旧姓で、今は真柴玲子。肩書だけは立派よ。旦那はベンチャー企業の社長で真柴玲子は結婚前はモデルやってたんですって」

「元モデルのセレブ妻ってなんでそんなハイスペックな女が……。やっぱ昔の知り合いってだけで何にもないわよ。じゃなきゃそんなすごい人が朝比奈相手にするわけないし」

「でも電話は女の方から毎日でしょ？なんかあるわよ。昔が忘れられない？とか」

理子の言葉に胸が痛む。私は何も言いたくなくて運ばれてきた料理を機械的に口に運んだ。

だってあの朝比奈ならありうる。

「今まで聞かなかつたけど、朝比奈さんって昔はそうとう女と遊んでたんでしょ？でもさあわかんないのよね……。顔は悪くないけど、特別かつこいいとかじゃないし、清潔感はあるけど特別オシャレじゃない普通の服装だし、物腰柔らかで女扱いが美味いのはわかるけど、それだけでなんでモテるの？腹黒な所隠してたらいい人どまりで終わりそんなキャラじゃない？」

「そのいい人キャラが曲者なのよ。朝比奈って腹黒を隠せば、とりあえず『友達』ぐらいにならなくてもいいかな？って感じじゃない。いちよう学校では、真面目で優しくて豆だし交友関係広いし、友達になつておけば得みたいな」

「そうねえ。あの腹黒を知ってたら、信用できないけど。知らなかつたら便利な男だから、とりあえず『友達』なんていつて都合よく

使うかも」

「その朝比奈の『友達』がね、問題なのよ。そうやって誰にでも愛想ふりまいてるからどんどん繋がりが増えてって、アイツの携帯メモリにおさまりきらなくて、2台持つてるのよ」

「うそ！仕事用とプライベートでわけて2台持ちならわかるけど」
「本当。なんでもメモリがMAX近くなると携帯のアドレス帳の動きが遅くなるらしいわよ。アイツが愚痴って見せてくれた事あるもん」

まあ朝比奈が結構古い機種をいまだに愛用しているせいでもあるんだが。朝比奈の友達は100人レベルじゃない。桁が一つ足りないのだから、機械も根をあげるのかも。

「それでその7と8割ぐらいが女なの。全員の名前と顔と基本情報をすべて記憶してるから、急に連絡されても困らないらしい。アイツの頭ん中化け物よ。しかも聞き上手で、愚痴とか嫌な顔せず聞いてあげたりしてるのよね」

「まあ人の情報には私も敏感だし、女の情報を全部覚えてるのは信じるとして、信じられないのは、そのいい人キャラ。何か裏があるんじゃない？」

「もちろん裏あるわよ。朝比奈の元カノ達に話聞くと、だいたい最初は『異性としてありえない。ただの友達』って言うてんのよ。それがなんか悩み事とか相談すると、親身につてくれて『この人優しくて頼りがいあるかも』って勘違いするのよね。見た目ひよろつと頼りないけど、いざって時に頼りになるギャップ萌えてやつ？」
「もしかしてその数百人の『女友達』が全部彼のキープって事？」

私が頷くと、理子は絶句してあきれた。無理もない。キープがいくらでもいるから、より取り見取り。がつつしてないから、女の子達もつい油断してしまうのだ。

「最悪ね」

「うん。最悪。でも理解できないのがさあ。元カノ達で朝比奈の悪口言つ子がいなくて所なのよね」

「なんで？そんなとつかえひつかえじゃあ、修羅場なんていくらでもあるだろうし、2股とか……」

「朝比奈はうまく付き合ってる事を周囲に隠すのよ。そもそも交際期間が長くて2週間ぐらいだから、人の噂になる前に終わってるし。しかもアイツの言っ事を信じるなら2股はしない主義らしいわよ」
「めんどくさいから」って。ただ付き合っていないだけで常に同時進行で複数の女を落としにかかってはいると思うのよね。じゃなきゃ午前中で別れ話して、午後に別の女と付き合うなんて不可能だし」

これは私が実際目撃した事だ。一日に朝比奈の別れ話と他の女とのラブシーン目撃って、本当に朝比奈の悪さを見つけるセンサーが、私のどこかについてるとしか思えない。

「しかもなぜか知らないけど、別れた子がまた付き合いたって言っても絶対に復縁はしないのよね。そういう子多いのに。驚異の朝比奈リピーター率よ」

「別れた女に興味ないって？ますます最悪。嫌われずに綺麗に別れたいなんて男のエゴじゃん」

理子が心底腹立たしげに言うのを、私は笑って見ていた。確かにずるくて汚いのかも知れない。朝比奈の優しさなんてほとんど嘘だし。

でも嘘でもなんでもアイツとつきあった女の子達は幸せだったんだ。だからまた付き合いたいなんて言うわけで、嘘もつきとおして一生気付かなければ、本当なんじゃないのか？

私と朝比奈の『婚約』も嘘から始まった。でも気付けば嘘だって忘れて、朝比奈の女に嫉妬したり、久しぶりに変わらぬ姿を見て嬉しくなったり。いつのまにかアイツの隣が居心地良くて当たり前になつてた。

「そこまで朝比奈さんの事知ってて、よく彩花付き合っていていられるわよね。不安にならない？浮気してるんじゃないか？って」

「今までだつて浮気はしてるんじゃない？私が気付いてないだけで別にいいんだ。私の知らない所でやっててって感じ。もちろん知ったら腹がたつけど」

信じられないと理子は首を振った。恋愛なんてまともにした事ないから私にはわからない。私は人の噂なんて信じない。自分で見た事がすべて。知らない事を想像してもやもやとか気持ちが悪い。

そう思ってた最近までは。でも今は嫉妬とかもやもやとか嫌だからって、辞められるものじゃないんだと痛感する。

「そのリピーターが多いなら、真柴玲子も同じなんじゃない？」

「そうかもね。なんで何年もたつて、結婚もしてるのに、今更朝比奈にってのがわからないんだけど」

「だからその所今日はつきりさせようよ」

「どうやって？」

理子は可愛く笑った。表向きは可愛い笑顔なのだが、その裏に潜む何かを感じて、私は背筋が寒くなった。

ぶりっ子モードで理子は店員を呼びとめ、上目遣いで見上げた。

「今日オーナーさん来てないんですかあ？」

「もうそろそろ来る予定ですが」

「この子オーナーの知り合いなんです。来たら会わせてもらえませんかあ？」朝比奈さんの友達』って言えば通じると思つので」

「わかりました」

理子のぶりっ子に男性店員は戸惑いながら、まんざらでもない感じで安請け合いしていた。

「ちょっと。理子何する気よ。直接真柴って女にあつて何するの？」

「話すのは彩花よ。今聞きたい事全部ぶちまければいいじゃない。」

『なんで私の婚約者に付きまとうんですか』って。彩花には言う権利があるもの」

私は真っ青になった。もし私が朝比奈の本当の婚約者なら聞く権利あつたかもしれない。でも私達は偽物の婚約者だ。しかも相手はあの優姫さんの友達なわけで、下手な事して話が漏れたら、朝比奈の立場がなくなる。

朝比奈ってなんか家族に異常に気を使ってるからなあ。

しかし理子に私達の事情を話すわけにもいかず、どうしたものかと頭を抱えて悩んでいた。

しばらくして私達のテーブルにゆっくりと歩いてくる一人の女がいた。あの時朝比奈と一緒に歩いていた人……。

今日もパンツルックながら、コートを着てないせいでスタイルの良さがよくわかる。この前より化粧は控え目？やっぱ薄化粧でも綺麗だわ。

優姫さんは上品だけど知性的でキャリアウーマンっぽいけど、こ

の人はちよつと儂げで男が放っておけないような感じ？

「裕の友達かしら？はじめまして」

彼女は愛らしく小首を傾げながら、朝比奈の名を親しげに呼んだ。堂々とした態度になぜか私は敗北感を感じた。私朝比奈の事名前で呼んだ事ない。

「彼女は朝比奈さんの婚約者なんです」

理子が勝手に私の事を紹介すると、玲子は可愛らしく「まあ」と言っただけで私を見た。婚約者が突然現れても動じないってことはやましいことなんて何もないのよね。朝比奈並みにこの人も腹黒とかは嫌だ。

「それは是非話してみたいわ。ねえよかったら、奥の個室でゆっくりお話ししましょう」

「私、そろそろ帰るので、お二人でごゆっくり」

「ちよつと、待ってよ理子」

私が引きとめても理子は無視して帰って行った。余裕の笑顔の美女と二人残されて、私はどうしたらいいのかわからなくなった。

嘘八百を並べる

お店の奥にはソファの置かれた個室があった。並んで座って食事するスタイルで部屋はせまい。これはいわゆるカップル用の部屋か？なんで初対面の女同士で並んで座らなきゃいけないんだ。

「ごめんなさいね。急だったから、開いてる個室がここしかなくて」「いえ、いいです。ソファ好きだし。リラックスできますよね」

ソファは好きだが、一緒にいる相手がこの人ではちっともリラックスできない。相手がどんな人かもわからないうちは、嘘でも取り繕っておかなきゃ。

「でも知らなかった。裕にこんな可愛い恋人がいたなんて」「私も知りませんでした。朝比奈にこんな美人な知り合いがいるなんて」

玲子の無邪気な微笑みに、つられて笑いながら話を合わせる。なんで余計な嘘言っちゃうんだろう。

「じゃあどうして私の事知ったの？」

「……さっきの友達が、この店で偶然朝比奈とあなたが一緒にいる所見て」

話のつじつまを合わせようと、嘘に嘘を重ねる。嘘が嫌いな私には苦痛だ。

「そう。じゃあもしかして私達の事疑ってる？」

「いえ……その……結婚されてるんですよね」

わざとらしく玲子の左手の指輪を凝視しながら言った。

「そうよ。夫はいるわ。でも裕は特別だから。でもあの子、彼女がいるなら言ってくれればいいのに」

特別ってなんだ。意味深な言い回しだ。男として？人として？いずれにせよ、ただの知り合いとは思えなかった。

「ねえ、二人の馴れ初めって聞いていい？告白は裕からあなたから？」

答えづらい所を突っ込まれて、できるだけつじつまが合うようにいつくろった。でも女にだらしないとか酒乱とか朝比奈の悪口はまずいよね。優姫さんが聞いたら悲しみそうだ。

大学の同級生で、ずっと友達だったんだけどなんとなく仲よくなつて、気づいたら付き合う事になってた。私が卒業して就職するから、離れ離れになって男が寄ってこないように「男よけ」と婚約指輪をくれた。

嘘半分真実半分。話しながらつじつま合わせたから、私の話し方もたどたどしくなったが、玲子は嬉しそうに聞いていた。

一通り話し終わったら、話す事がなくなった。玲子も何も言わないので重い沈黙が続く。玲子の用意した口ゼは、さっきの理子と飲んだワインよりさらに甘くて、さらにむかむかする。

「私と裕の事何も聞かないのね。気になるからここに来たんじゃないな

いの？」
「……」

気になる。だからといってどう聞いていいのか？私は問い詰める言葉が見つからなかった。

「私と裕が初めてあったのは私が高校3年の頃。裕のお姉さんと私がクラスメイトで、裕がうちの高校の学園祭に遊びに来たのがきっかけだね。裕は4歳年下で初めは弟みたいに思ってたの」

嬉しそうに、切なそうに話す姿は、恋する乙女って感じていたたまれない。なんで『婚約者』の私が頬を染めて話す朝比奈との馴れ初めを聞かなきゃいけないんだ。

なんかこの人ずれてないか？

「初めは連絡先交換するだけだったんだけど、色々相談に乗ってもらってるうちにね……。あるじゃないノリでついとか？若かったしね、あの頃は……」

ノリで4歳も年下の男子中学生とつきあうのか？しかもクラスメイトの弟って遊びですむ問題なのか？しかしきっかけはなんであれ、いまだに『特別』なんていうぐらいだから未練が残るぐらいいい思い出だったのかもしれない。

「本当に朝比奈を好きだったんですね」

「そうでもなかったわよ。私その特別に本命の彼いたし」

私は初対面だという事も忘れて、思わず玲子を睨みつけてしまった。なんだそれは？自分は本命の彼がいながら、遊びで朝比奈を誘惑したのか？

「初恋って言葉が似合わないような、甘くない話だよ」

そう朝比奈が言っていたのを思い出した。アイツにとっては苦い思い出なんだ。そう思うと悔しくて仕方ない。

「怖い顔しないで。裕も初めて会った時から彼氏いるの知ってたのよ。相談っていうのも彼氏との事だったし」

男友達に恋の相談してて、そのうち気付いたらその男友達と浮気してた、なんて話聞いた事がある。私にはよくわからない話だが。

「それで朝比奈の方が好きになつて、彼氏と別れたんですか？」

「別れたのは裕と。彼氏にばれたらすごく怒られて。怖かったから謝って裕と別れたら許してくれたわ」

そりゃそうだ。彼女が浮気したら怒るだろう。そこで朝比奈をとらずに本命の彼氏とあっさり寄り戻すなんて！罪悪感の欠片もなく無邪気に語る玲子の姿に、虫唾が走った。

恋に流され、覚悟もなくノリで浮気し、怒られたからって浮気相手を簡単に切って捨てて。この女に自分の意志はあるのか？私とはまったく正反対の人間だ。まったく理解不能だ。

「その彼氏が今の旦那さんですか？」

「ううん。その時の彼とはその後1年くらいして、私が東京に出たのがきっかけで別れちゃった。その後もストーカーみたいに東京まで追ってきて怖かったわ。その当時モデル仲間を紹介してもらった

今の旦那に相談したら、追い払ってくれて。それがきっかけで付き合って、それから2年ぐらいで結婚したの」

男の事で相談して、その相談相手とまたくつつく。同じ事の繰り返し。確か朝比奈は旦那の愚痴聞いてるって言ってたけど、まさかまた今の旦那から朝比奈に鞍替えする気か？

「……もしかして、今日旦那さんの事、朝比奈に相談してるんですか？」

「そうなの。裕優しいから。でも誤解しないでね。まだ私達男女の仲ってわけじゃないから。ただ話を聞いてもらってるだけ。彩花さんよね。これからも裕と仲よくしてやってね」

私の堪忍袋の緒が切れた。「まだ」ってなんだ！これからどうにかなる予定なのかな？なんで上から目線で「仲よくしてやってね」なんて言われなきゃいけないんだ。恋人に不満があるからって、簡単にほいほい乗り換えて、それで捨てられた朝比奈はなんなんだ。

それに付き合う朝比奈も朝比奈だ。お姉さんの友達だからって遠慮するな。

「もう朝比奈と会わないでください」
「なんで？」

私になぜ怒ってるのかさっぱり理解していないようだ。私の顔をうかがって、媚びるような視線が鼻につく。男ならそんな甘えも可愛いと思うかもしれないが、女の私にまで通用すると思ってるのか。

かっとなった私は思わず玲子の頬を叩いていた。言っておくが私は女に暴力を振るったのは初めてだ。ちゃんと手加減もした。たいして痛くなかったはずだ。頬にも後はない。

それでも叩かれた事がショックだったのか、玲子は茫然と私を見つめていた。

玲子の顔には恐怖の色がはつきりと出ていた。そんなにおびえさせるほど私は怖かったのか？私は急に罪悪感でいっぱいになった。

「すみません。気が短くて、手が早くて」

「……怒るとよく手を上げるの？」

「時と場合にもよります。誰にでもってわけじゃあ」

「裕には？」

玲子は先ほどまでの脅えた姿から一転、真顔で私に詰め寄った。

暴力をふるった事はない……などとそこまで厚かましい嘘はつけなかった。優姫さんにはれるかもしれないけど、その時は素直に謝ろう。

「あります。アイツがバカな事すればすぐ」

そう私が言ったら、玲子の目つきがすぐに変貌した。それまでのか弱く幼い雰囲気や嘘のように迫力のある恐ろしい顔だ。

「あなたに裕は渡せない。二度と会わないで」

なぜ婚約者の私が元彼女の人妻からそんな宣言されるのか？理不尽だと思った。しかし私には『朝比奈と会うな』という権利はあったのだろうか？恋人じゃなくただの友達の私に。

嘘も方便

狭い個室で並んだ至近距離。例え細くて折れそうな美女でも怖かった。特に今の彼女の顔には何をしでかすかわからないような狂気を感じる。

「あなたなんかに裕を幸せになんかできない。やっぱり裕の事を理解できるのは私だけ、私を理解できるのも裕だけなのよ」

理不尽な言葉に言い返したい所なのだが、ちょっとでも刺激したらやばいんじゃないか？という気がした。それだけ玲子はおかしな豹変振りだった。相手が興奮すると、自分は逆に冷静に冷めていくのを感じる。

冷静に周囲を目だけで見回したら、個室の扉が少し開いていた。その隙間から誰かが見ている。

朝比奈だ。何でまたこういう時、都合よく現れるんだ。そう思いながら少しほつとした。今日初めて会った私より、朝比奈の方がこの人をどうにか出来るんじゃないか？私は視線だけで朝比奈に助けを求めた。

扉がゆっくりと開いて個室から朝比奈がはつきり見える状態になったのに、玲子は興奮して私に詰め寄るばかりで朝比奈の存在に気づいていなかった。

朝比奈は眉をひそめてため息をついた。そして拳で思いつきり壁を叩いた。

その音でさすがの玲子も気付いたようで、びくりと肩を震わせて朝比奈の方を見た。ゆっくりと一歩足を踏み入れる朝比奈、脅えて

縮こまる玲子。

朝比奈が手を伸ばして玲子の頭に手を置いた。

「大丈夫だよ。玲子さん」

優しい優しい笑顔と声で朝比奈は言った。恐る恐る見上げる玲子に微笑みながら頭を撫でる朝比奈。

「行こう。玲子さん」

頷く玲子の手を引いて朝比奈は立ちあがらせた。私は二人のやり取りを茫然と見ていた。心が苦しい、でも朝比奈の行動に文句ひとつ出てこなかった。

だって私は朝比奈のただの『友達』。朝比奈が誰と付き合おうと文句言う権利はない。そんな私の代わりに異議を唱えるものがいた。「なんでそこで彩花じゃなくてその女を庇うのよ」

扉の向こうに理子が仁王立ちで立っていた。かつてないほどに凶悪な顔で睨んでる。

朝比奈はやれやれといった感じで私の方を向いて言った。

「悪いけど、今日は理子さん連れて帰ってくれる？」

朝比奈はいつもの愛想笑いのままだったけど私にはわかった。朝比奈の優しさはみせかけた。本心ではは焦り、いらだってる。事情はわからないが、何か朝比奈が焦るほどまずい状況なんだ。

さきほどの玲子の狂気を間近で見て、朝比奈に助けを求めたのは私だ。ここは朝比奈の嘘に合わせよう。

「後で説明してよね」

「すべて終わったら必ず話す」

その言葉だけで今はいい。私は怒る理子を無理やり引きづって店を出た。

「なんで婚約者の彩花がすごすご帰らなきゃいけないのよ。おかしいわよ。あんな男いますぐ別れなさいよ」

「理子ありがとう。でもいいの。私は大丈夫」

「なんで？おかしいでしょう！」

「それより朝比奈をあの場合に呼んだのは理子？というか最初から修羅場になる事計算して舞台を作ったの？」

怒りで興奮していた理子が、気まずげに黙った。やっぱりそうか。ただ私を玲子と会わせるだけじゃなく、朝比奈まで呼び出してまで、そうまでして朝比奈と私を別れさせたかったのか？

「あんなろくでもない男と別れた方が、彩花のためだよ」

悲しそうに言う理子の言葉に嘘はなかった。彼女は彼女なりに本気で私を心配してくれたのだ。

「そうね。理子の言う通り。そろそろ朝比奈とも決着をつけなきゃね」

理子はそれを私の別れの決意と思ったようで、喜んでくれた。嘘も方便。でも本当は違うのだ。私は私の気持ちをはっきりさせて朝

比奈との関係に決着をつけようと思ったのだ。もうただの友達では
いられない。

玲子を優先した朝比奈を許したのは、玲子が危険だったからだけ
じゃない。朝比奈が私を選ばなかったとしても文句を言う権利が私
にはなかったからだ。今まで都合よく『友達』というぬるま湯の関
係でいたつけがまわったんだ。

12月に入ったが、あれから一度も朝比奈から連絡がない。あつ
さりと玲子と去る朝比奈をひき止めなかった自分を少し後悔してい
た。そしてそんな自分が嫌だった。

また忘年会シーズンで職場の人間と飲み会だ。会社の飲み会なの
に、やけになつて飲みすぎそうだ。私はビールが減ってきたので追
加を注文しようと店員を呼びとめた。いけないとわかっていても飲
まずにいられるか。

「熱燗……」

「彼女にお冷お願いします」

私の言葉をさえぎって勝手に注文したのは菱沼だった。少し離れ
た席にいたのに、わざわざ私の隣にやってくる。一樣仮にも上司。
皆のいる前で一方的に責めるわけにもいかない。それでも他の人に
わからない程度に睨んだが、菱沼は笑顔でかわした。

「忘年会は無礼講だつて建前、本気で信じてるわけじゃないよね？」

他の人間にわからない程度の声でさりげなく釘をさしてくる。悔
しいがその通りだ。酔っぱらったら最後、次の日から素面でも酔っ
ぱらいの烙印を押されて、会社にいる限り何年だつて付きまとう。

私が大人しくお冷を飲み始めても、菱沼が動く気配はない。私の隣に居座って見張る気か？いつそう強く睨むと菱沼は苦笑いした。

「そんな熱い視線で見てるのは嬉しいけれど、周りの視線が怖いなあ」

菱沼に言われて周りを見渡すと、いつの間にか何人かの男性社員が私に注目していた。やばい！会社でかぶってた猫がばれるか？菱沼に関わってる場合じゃない。

その時スーツのポケットに入れていた私の携帯が鳴った。取り出してサブディスプレイを見ただけで、私の頭は真っ白になる。

「周りにはごまかしておくから、行ってきたら？」

隣にすわる菱沼から思わぬ援護が入った。疑うべきだろうけど、今は気が動転していて、考えがまわらない。素直に頷いて私は席を立ってトイレに行くふりをした。

廊下に出て深呼吸。できるだけ落ち着いて電話に出た……つもりだったが、少し声がうわずった。

「何？」

「ごめん。急に。今大丈夫？」

あの日から1カ月も立ってない。それでも懐かしくて涙が出そうになる。なんで朝比奈の声を聞いてだけでこんなに苦しいのか。

「今会社の忘年会なの。用件なら早くしてくれる？」

嬉しいのにどうしても出てくる言葉はそっけなくなってしまう。
アイツが電話してきたっただけで嬉しくなるなんて悔しすぎる。

「約束通り終わったから話がしたい。今年も蟹祭りやらない？」

蟹祭り、朝比奈の誕生日。そんな事あったな……。去年の話なのにずいぶん昔の事のように感じる。あの頃はこんなに胸が苦しくなる事も、朝比奈との関係に悩む事もなかった。

「いいわよ……。今年は私の家で。その時説明してくれるのよね」
「うん。蟹持つてくから待ってて。ごめんね。忘年会中に邪魔しちゃって。また蟹祭りに」

朝比奈は気を使ったのかあっさり電話を切ってしまった。終わった電話を握りしめたまま、にやける顔を押しえられない。

朝比奈が誕生日に会いたい人間はまだ私なんだ。しかも次の日はクリスマススイブで祝日。

宴会の席に戻ると、菱沼が「ご機嫌だね」とからかってきた。まるですべてわかってるみたいだ。

言われて我に返った。なんでこんなに私浮かれてるの？朝比奈から連絡あったから？違う！またあの美味しい蟹が食べられるからよ！自分で自分に苦しいいいわけだと思いつつ、湧きあがる喜びを抑えきれそうにない。

嘘の皮が剥がされる

あー！焼きガニ美味しい。酔っぱらい蟹も、朝比奈の作ってきた料理も美味しい。

美味しいのにむなし。

蟹って食べてると会話なくても持つっていうけど、今日の目的ってこの前の一件について説明してくれるって事じゃないの？

なのになんで普通に無言で蟹食べてるんだらう？

いつものように朝比奈はやってきて、何事もなかったようにつまみの用意して、熱燗もほどよい温度であっためてくれた。

その間ほとんど会話なし。いただきますのあいさつの後は一言も会話なし。

朝比奈の嘘くさい笑顔もなんかいつもより下手で、なんかあったなと思うが、こちらから聞きづらく空気が重い。

今日ここにいてるって事は、別に玲子とは特につきあってるってわけじゃないわよね？『終わったら』って言ってたけど何が終わったんだらう？

私がそろそろ飲みごろの甲羅酒に手を伸ばそうとしたら、朝比奈が先にとって、一気に飲み干した。

「あー！私の甲羅酒！何すんのよ！ていうかあんた酒飲むの禁止！」「ごめん、ごめん。今新しいの温めるから。言いたしづらくて酔いたかったんだけど、酔うほど飲んだらまずいよね」

朝比奈の軽い言い訳に気まずい空気が少し緩んだ。私の酒とつたのはわざとだな。仕方ないここは譲って乗ってあげようじゃないの。

「言いだしづらいつて何よ？説明は？」

「うん……何から話したらいいかな……」

「あの玲子さんって女……私嫌い。悪気なく人を振り回して傷つける人間ってたちが悪い。あんた趣味悪いわよね」

「うん。僕も正直嫌い。できれば相手にしたくないタイプ」

あっさり同意する朝比奈に啞然とした。嫌いな相手にあそこまで優しくなれるのか？この男の女好きはいつそ病的なんじゃないか？

「じゃあなんで付き合ったのよ」

「そりゃあ、昔は僕も若かったし、美人だから見かけに釣られて……」

エロ朝比奈！呪い殺せそんな私の視線から目をそらし、朝比奈は笑ってごまかした。

「上条が玲子さんを叩いたのって僕のためだよ。ありがとう。嬉しかったよ」

急にお礼を言われて戸惑い、睨み続けられなくなった。朝比奈が本当に嬉しそうに笑うから。調子が狂う。

「でも大丈夫。僕は全部わかってたから、あの人が悪気なく人を振り回す人なのも、誤解されやすいのも、あの人なりに事情があるのも。昔も今もわかってて相手をしてるんだ。だからあの人自身に僕

は傷つけられないよ」

そこで朝比奈は一度言葉を止めて、何かに迷うように視線を泳がせた。私は朝比奈が次の言葉を話すまでじっと耐えて待った。

「きっかけはね。昔玲子さんが付き合ってた彼から暴力を振るわれてた事なんだ。ささいな事でストレス発散に玲子さんに当たる最低な男だったよ」

いきなり重い話には息を飲んだ。

「……それって、DVとかそういう事？」

「うん。その彼氏も他の人にばれないようにやってたし、玲子さんもああいう人だから友達少なくて信じてもらえないし、我慢してたみたい。それに僕が気付いたんだ」

玲子言っていた『彼の事で相談』ってそんなキツイ話だったのか？彼女の軽い感じからは想像もつかなかった。

「なんかほつとけなくて、彼氏と別れさせようと色々頑張ったんだけど、彼氏に僕達の事ばれて、怒った彼氏に僕が半殺しにされそうになった。それを止めようと、玲子さん別れようとしたのに彼氏の元に戻っちゃった」

つまり玲子は朝比奈を捨てたんじゃないじゃなくて、庇うために別れた？起こった出来事は同じなのにあまるで違う意味になる。朝比奈が美化してるとかじゃないよね？

「あの頃の僕はまだ子供で、玲子さんを守って戦う力もなくて、引

きとめる事も出来なかった。自分の無力さが悔しくてね」

それは仕方がない事だと思う。朝比奈は中2か3ぐらいで、玲子が4つ上なら彼氏も同じぐらいだろう。あの頃の4才差はかなり大きい。特に朝比奈は暴力とかは苦手そうだから、相手が荒っぽい人間じゃ太刀打ちできなくても仕方がない。

それでも朝比奈は後悔してるんだ。苦い思い出のまま。

「玲子さんもねえ……やつと暴力男と別れたのに、別れて結婚した相手がまた同じ様な男って所がつくづく男見る目ないバカなんだ」

「それって……もしかして……今の旦那もDV男って事？もしかしてそれでまたアンタ別れさせようとしてた？」

朝比奈は苦笑しながら頷いた。

「玲子さんがバカなんだし、同情もしてない。もう好きでもなんでもないんだけど、昔助けられなかった分、今度こそなんとかできないかなって……。たんなる僕の自己満足」

過去の自分の無力さに後悔してて、それをなんとか取り戻したい。そういう男の意地みたいなものコイツにもあつたんだ……。

だめだ。やばい。私こういう男の意地とプライドとかに弱い。朝比奈の言葉が全部ほんとのわけないのに、胸がドキドキする。

本当はわかってる。こういう自分の弱みを晒すような嘘は朝比奈は言わない。嘘をつくならことん隠す。だからこれはきつと本音だ。

認めたくない。認めたくないけど……私朝比奈の事好きかも。

そんな事を想ってすぐにその感情を否定した。な、何血迷ってるの私。男としてじゃなく、人としてよ。人として朝比奈が好き……。そんな風に心の中で自分にひたすら言い訳を続けたが、顔が赤くなるのを止める事が出来なかった。

「……そ、それで、終わったらって、その玲子さんと旦那の件うまくいったの？」

「とりあえず離婚する気にやっとなってくれた。年末帰省を口実に玲子さん実家帰ったよ。姉さんに事情話してあるから力になってくれると思う。離婚ってなると色々もめてたいへんだからね」

「そっか……。優姫さん弁護士だもんね。友達なら親身になってくれそうだし……。じゃあもうあなたの仕事は終わったのね」

「うん。終わった。疲れた！本当に……。あのわがままで情緒不安定な人にずっと気を使うのが……本当に何度投げ出そうかと思っただけ……」

朝比奈の最近の不調も、このやつれ方もそういう精神的な疲れからくるものなのか。わかってしまえばすっきりだ。むしろ朝比奈を褒めてやりたい。

私は立ちあがって向かいの朝比奈の隣に座りなおした。

「おつかれさん。よくやったじゃない。見直したわ」

そう言って、朝比奈の頭を撫でた。朝比奈の顔が赤くなったかと

思ったら、私から顔をそらした。横顔でもわかる。朝比奈の頬が緩んでる事。

朝比奈は自分の頬をつねって言った。

「痛くないって事は夢か……。上条がこんなに優しいわけないもんなあ」

朝比奈の減らず口に腹がたって、私は朝比奈の頬を平手打ちした。

「これでもまだ痛くないって言うなら、次は拳で殴ってあげるわよ」「い、痛いです。うん。これは現実だね。あいかわらず上条は手ごはや……」

私が拳を振り上げたので、朝比奈の減らず口はそこで終わった。

なんかこういう朝比奈のバカに突っ込んで、叩いてとかすごい久しぶりな気がする。それが嬉しかった。

私にとって居心地の良い、楽しい関係がまた戻ってきた。

これがつかの間の幸せだという事をこの時の私は知らない。

第7部終了

嘘の皮が剥がされる（後書き）

いちよう笑いで落ちつけた所で、一度上条編終了です

ちよつと長めの譲司編の後に、この続きの上条編書きます

そろそろ最終章まで見通しついてきたので、ここらで一度年表を更
新した物を間に入れます

時系列の整理にお役立てください

難攻不落彼女 年表（前書き）

時間の流れがわかりづらいつらいかな？と思い
活動報告に乗せた時系列を加筆修正して
最終章までの時系列を整理して記載しました

今後執筆予定の第8章以降の大まかな時期も記載されていますので
ご注意を

難攻不落彼女 年表

(第 章) は短編集内の作品で、その後が短編内のタイトルとなります

話の中で時間が大きく移り変わるのもあるので、大まかな時間の目安と思ってください

2006年夏

(第4章) 蝉時雨 2、3、4の前半

2007年春

(第4章) 蝉時雨 4ラストシーン

2007年～2008年頃

(第3章) 小さな恋の物語

2010年初夏

第2章 朝比奈編開始時

2010年10月頃

朝比奈、上條婚約

2011年2月

(第4章) とある編集者の憂鬱 1、2

2011年春

紫、M大学文学部入学

上條、I商事入社

譲司、経済学部3年進級

朝比奈、文学部大学院に進学

2011年5月頃

第1章 譲司編開始時

2011年夏

紫、譲司、オープンキャンパスのバイト

(第3章) 夏カレー

2011年9月～11月頃

(第3章) 秋波

2011年10月頃

朝比奈編最終話後半。婚約から1年後の話

2011年11月～12月末頃

(第3章) 冬の贈りもの

2011年12月初旬

(第3章) 恋の応援

2011年年末

(第3章) 金沢編

2012年1月～2月頃

第4章 譲司編2

第5章 朝比奈編2「第4章と第5章ほぼ同時期」

2012年2月頃

（第4章）とある編集者の憂鬱 3「3イラストから4にかけては春頃」

2012年3月上旬

（第4章）決裂

2012年3月末

（第3章）春雷

2012年4月上旬

（第4章）桜咲く頃

2012年5月

（第4章）嵐の前の静けさ

2012年7月上旬

（第4章）催涙雨

2012年7月中旬

（第4章）夏の思い出

（第4章）蝉時雨 1

2012年8月末～12月

第7章 上条編 1

2012年7月末～2013年1月末

第8章 譲司編 3【執筆予定】

2012年12月末～2013年1月末

第9章 上条編 2【執筆予定】

2013年2月

第10章 最終章【執筆予定】

難攻不落彼女 年表（後書き）

「古谷教授の秘密」と「100話記念 鍋」は特に時期は決まって
ません

おかしな所、わかりづらい所あればご連絡いただけると嬉しいです
年表、本文ともに修正させていただきまます

本文中に日付が記されている場合、実際の曜日とあわせています

思えども君は遠く(前書き)

第6章 「夏の思い出」の続きからスタートです

思えども君は遠く

『北斗』連載中の『源氏』こと田辺紫、初書籍「源氏の徒然日記」
。そこに収録されていた対談は、シヨック状態の譲司をさらに追い
込んだ。

仲の良さそうな二人の思い出話。特に葛城優吾は紫に好意を持つ
ているかのように語っている。

そして思い出すのは試写会の日、葛城優吾を見た紫の表情。食い
入るようにつめるあの顔。紫にとって葛城が重要な人物なのだ
俺には思えてならない。

紫を巡る恋のライバルが出てくるなんて思いもよらなかった。大
学内の紫の隠れファンは、積極的にアプローチできずに見ているだ
けの男ばかり。

見た目は普通。中身は腹黒。そんな彼女を本気で好きになるバカ
な男など、自分ぐらいだとうぬぼれていた。こんな強力なライバルが
いる事も知らずに。

俺はライバルにすらなっていないかもしれない。今まで紫にろくに
相手にされていなかったわけだし。

夏休み中、紫の携帯に連絡してもいっさい返事はなかった。いま
でそれは仕方がないと思っていたが、今ではあせるばかりだ。だか
らといって自宅に押し掛ければ、彼女の機嫌をまた悪くするだけ…
…。

早く夏休みが終わればいい。大学が始まったら紫とまた会える。そうしたら聞こう。『源氏』の事、葛城との事。素直に話してくれるかわからないが。

夏休み明け。意気込んで大学にきたが、予想外の事が起こった。というより予想しておくべきだったかもしれない。

紫の女子大学生作家という肩書は夏休みの間にM大学生の間に広まっていた。その結果皆が紫の周りを取り囲み、俺は近づく事もできなかつた。

今までは俺が『学園の王子』で紫は平凡な女子学生。俺のファンの目を気にすればよかった。でも今は立場が逆転したのだ。

彼女はいつだって愛想笑いを張りつかせ、他の学生達をあしらってる。俺はただそれを遠くから眺めているだけ。見える距離にいるのに手が届かない。

9月下旬さらに追い打ちをかけるような出来事が起こった。

「先輩！これどういうことですか？」

国文学研究室の皆が、駆け込んできた俺の姿に注目していた。朝比奈は困ったような笑顔を浮かべ、俺を資料室まで引っ張っていった。

「何の騒ぎだ。柎木」

「この雑誌の記事。どういうことですか？」

作家・田辺紫を取り上げたとある雑誌。紫の写真とともに、紫の友人としてインタビュウをうける『朝比奈裕一』の名前があった。

「先輩が田辺さんの友人ってありえないでしょう。なんでこんな記事……」

「本当に困るよね。写真は載せないでくれっていったのに、これ全国紙でしょ。金沢でも売られるのかな？まいったなあ」

確かに紫の背景に小さく朝比奈の姿が映っている。背景の様な小さな写真で困るなんて、おまえは指名手配犯か何かか！と怒りたい。朝比奈のとぼけ方に俺の苛立ちはひどくなる。

だって紫の友達のポジションに誰よりも近いのは自分だと思っていた。それなのに、どうしてもよりによって朝比奈なんだ。

「インタビュアーが田辺の『友達』を探してたんだけど、いなくて困ってるみたいだったから。協力しただけだよ」

「なんでそこで俺を呼んでくれなかったんですか。いつだってかけつけたのに」

朝比奈はこの男にしては珍しく、歯切れの悪い言い方で言った。

「田辺自身が柁木は呼ぶなって言ったんだよ」

俺を友達と呼ぶくらいなら朝比奈の方がまし。彼女にその程度の人間に思われていたのだ。そう考えると俺はさらに深く落ち込んでいった。

「柁木」

朝比奈は俺の額に軽くデコピンをくらわせて、俺を正気に戻した。

「あのひねくれた女の行動をまともに受け止めて落ち込むな。何か裏があるに決まってるだろう」

そうだ。朝比奈の言う通りだ。天敵ともいえるこの男にわざわざ友人役を頼むなんて、何かあるに違いない。

「田辺さん。何を考えてるんでしょうか？」

「さあな……。なんか後ろ暗い事があって、おまえを避けてるんじゃないか？」

そういえば彼女に近づけなかったのは、何も他の学生に邪魔されただけではなかった。近づこうとすればするほど、逃げられていたような気がする。紫がサークル入部当初俺を避けていた頃の様に。しかしなぜ避けられているのか理由が思いつかない。

渋谷に行った日、彼女が珍しく口にした別れの言葉。あれは俺との決別の意志だったのだろうか？あの時すでに彼女の計画は始まっていた？

彼女は何をしようとしているのか？それが気になってしかたがなかった。

好敵手（ライバル）の名は？

10月、本格的な秋の始まり。M大学にまたひとつ事件が起こった。葛城優吾が特別授業をしにくるといふのだ。1日だけなのに、売れっ子イケメン作家がやってくると大騒ぎだった。

なんで寄りにも寄ってうちの大学に。やっぱり田辺さんと噂になつてるから？気にはなるが文学部の授業。経済学部の自分には縁がない。そう思っていたのだが。

「なぜ俺が葛城先生の案内役を？文学部でもないのに」

久しぶりに古谷教授に呼び出されたと思つたら、葛城優吾が来校した時の大学内の案内係を頼まれた。なぜ俺？頼まれなくてもやりたい人間、文学部にいくらでもいるんじゃないか？

「内の学部はミーハーな人間から、熱烈な人間まで、葛城優吾ファンばかりですから。来客に失礼があるといけませんからね。部外者に頼む方がいいかと思つて」

いちよう俺も結構葛城優吾ファンだった……。田辺さんとの関係を知ってから、偏見を抜きにして、純粋に作品を楽しめなくなつてしまつたが。

「俺に頼まない方がいいと思います。私情を挟まない自信ありません」

「だから君に頼むんですよ。メディアを通してでなく。自分の目で葛城優吾がどんな人間なのか、見ておきなさい。有名人だからといつて、同じ人間なのですよ」

同じ人間。そうかもしれない。俺は葛城という男がどんな人間か直接的に知らない。遠くの別世界の人間で、紫を違う世界に攫って行ってしまいそうなそんな気がしていた。

どんな人物なのかこの目で確かめよう。

そして特別授業の日。来客用駐車場に約束の時間通りに葛城はやってきた。車を降りた葛城は学生である僕に対しても、実に礼儀正しくふかぶかとお辞儀した。

「今日は一日よろしくお願いします。葛城優吾です」

「こちらこそよろしくお願いします。案内役の榎木譲司です」

俺が下げた頭を上げて、まだ葛城は深いお辞儀のままだった。ただの案内役の俺が恐縮するぐらい。

時間に几帳面な所といい、この礼儀正しさといい、売れっ子作家を鼻にかけてない態度は非常に素晴らしいと思う。

ただ、身長がほとんど俺と変わらない高身長、しっかりとした体つき、そして貫禄がありすぎる強面なイケメンぶり。これで丁寧にお辞儀されると逆に怖い。なんかプレッシャーを感じる。しかし本人無自覚なんだろうな。

「まだ授業まで時間ありますが、どこか構内で行きたい所ありますか？それとも文学部の教授室で休まれますか？」

「部外者がうろちょろしていいのでしょうか？学生の皆さんの勉学の邪魔になりませんか？」

確かに葛城がうろちょろしていたら、絶対学生が大騒ぎする。しか

もこの目立つ外見でお忍びというのも難しい。俺も目立つ人間だから余計に……。やっぱり古谷先生。案内役の人選ミスじゃないですか？

「ええと……。人が多くなく静かな所でひっそりとなら……。大丈夫じゃないでしょうか？」

葛城は立ち止まって彫像のように固まった。何か考えているようだ。あまりの深刻さに『考える人』の彫像を思い出した。ちよつと時間つぶしをどうするか気軽に聞いたつもりなんだが、いちいち反応が生真面目すぎる。

「それでは図書館などどうでしょうか？大学の図書館にどのような本が揃っているか興味があります」

確かに静かで、人が多くはないだろう。しかし文学好き、葛城フアン密度が跳ねあがりそうなスポットだ。大丈夫か？しかし葛城の目は期待に輝いていた。少年の様に。なんかすつごく図書館行きたそうだな……。

「では図書館に。こちらです」

確か図書館の職員専用の裏口があったはず。そこから事情話してこっそりいれてもらおう。

図書館の職員さんのなかにも葛城ファンはいるわけで、プチサイン会状態になってしまった。しかし葛城は嫌な顔一つせず、丁寧に対応していた。

その結果職員一同、熱烈な葛城ファンとなった。おかげでカウンターの影から図書館内を見たり、書庫の中まで入れてもらったりとかなりの高待遇。端末で所蔵リストを眺めている葛城は本当に真剣

そつで、やっぱり作家も本好きなんだなと思った。

一通り見学が済んだ頃、職員に質問をしていた。本についてかな？と思っていたらとんでもない発言が……。

「あの……。田辺先生もよくこちらにいらっしやるのですか？」

図書館内をそわそわ見ながら落ち着きがない。やっぱり紫に気があるんじゃないか……。と気になったのだが……。

「田辺先生が取り上げた作家の作品がすべてそろっているのですが、もしかしてこの図書館で執筆なさってたりしませんか？特にこの作家のこの本とか絶版本とか、発行部数の少ない本まで」

すっごい輝いた目で質問していた。というか、作家としては葛城の方がずっと売れててベテランで年上なのに先生づけ。しかもなんか恋する女性に関しての質問というより、ミーハーなファンみたいな。

「田辺さんですか……。受付業務以外であまり話した事ないから……。柎木君の方が詳しいんじゃないか？田辺さんと一緒によく図書館きてるよね」

急に話を振られて戸惑った。葛城は強面顔のまま、俺に迫るように質問を繰り返す。

「田辺先生と仲いいんですか？」

葛城にこそ紫との関係を聞きたい。なぜ俺が質問されなきゃいけないのだろう……。ちよつと見栄を張って言ってみた。

「ま、まあ、友達なので」

友達ぐらいで見栄を張って恥ずかしい。そう思うのだが、葛城は心底うらやましそうな顔をした。友達ぐらいでなんでこんなに羨ましがられるのだろう。

「葛城先生こそ、田辺さんと仲いいんじゃないんですか？」

「いいえ、とんでもない。田辺先生と直接お会いしたのも今まで2回だけですし、いつも一方的に私がファンレター送っている方で……。親しいなんておこがましい」

……ん？聞き間違いか？なぜ葛城がファンレター送るんだろう？

「田辺さんにファンレター？もしかして私書箱住所に？」

「はい。『源氏』のペンネームで『北斗』に初投稿時からのファンなので。尊敬してます。私にとってあの方は神です」

真面目な顔して神とか、本気がこの人。しかもなんか勝手に『源氏』の素晴らしさ語りだしてるし。

紫を神聖視しすぎじゃないか？紫が葛城の前で猫被ったままだとしても、ただの平凡な女の子だろう。とても葛城の語るような、雲の上の存在とは思えない。

見事に紫に騙されてないか？この人。それともこの崇拜っぷりはこの人の天然か？なんだろう。恋のライバルのはずなのに、なぜかこの人の騙されっぷりがいつそ可哀想になってきた。

葛城優吾つてもつと大人で、しっかりとしたかつこいいイメージだったんだけど……。どこか抜けてて、むしろそばについてあげないといけないようなほつとけなさ。

古谷先生の言う通り、作家もただの人間。有名人のフィルターの

ない素の姿にどこかほっとした。

好敵手（ライバル）の名は？（後書き）

紫を巡る恋のライバルな二人の男の直接対決なはずが……
肝心のヒロイン紫が腹黒、譲司はお人よし、葛城は天然で抜けた人
争いにもならず、むしろ同情？なんだかおかしな三角関係になっ
てしまった

想いは深く

図書館を出た俺達は、特別授業を行う部屋に移動することにした。葛城は黙って俺の後についてくるが、時折立ち止まって大学内を見渡す。まるで誰かを探すように。誰かなんて一人しかいない。

「葛城さんは、さっき田辺さんのファンだって言いましたけど、それだけなんですか？」

「それだけというのは？」

「作家としてだけでなく、一人の女性として意識したりしないんですか」

葛城はうつむいて、言葉を失っていた。その苦しげな表情には迷いがあった。

「5年前、初めて彼女と会った時本当に驚いた。あの『源氏』が10代の少女だと思わなかったから。しかし話をして、私の尊敬していた『源氏』だとすぐわかった。そして彼女のおかげで『初花』というすばらしい作品を作り上げる事が出来た」

「俺は『初花』を読んで、大姫が田辺さんに似ていると思いました。たった1回あっただけでそう思うほど、田辺さんの事がわかったんですか？」

「彼女の名前も年齢も何もかも知らなかった。ただ『北斗』の『源氏』の投稿と1度会った彼女のイメージだけ。それで似ていると思ってもらえたなら嬉しいですね」

一流作家の観察力の凄さか、それともそれだけ紫への想いが強か

ったのか。葛城という男がライバルとして恐ろしい男だと今日初めて思った。

紫を想う気持ちだけは誰にも負けない自信があったのに、葛城もまた俺に負けないぐらいの想いがあるのではないか？

「『初花』ができ、また『源氏』に会いたいと思った。あの時また彼女に会って会い続けていたら、彼女にすがってしまい、作家としてだめになっていたかもしれない。しかしその後会う事はできなくなった」

葛城にとって紫は作品を作るインスピレーションを与える女神ミューズのような存在なのだろうか？女神だから作家として大切な存在？それとも紫が好きだからその気持ちでよい作品が作れるのだろうか？

「それから5年、私の作品をどこかで見ていてくれる。それだけでいいと思ってました。会わなかったから、名前も何もわからなかったから、尊敬する批評家『源氏』と作家の関係でいられた。おかげでこの5年、自分の力で作品を作り続ける自信ができた。諦めていたのに……また彼女と再会してしまった」

想う女性と再会できたのに、葛城はちっとも嬉しそうでなく、むしろ苦しそうだ。

「会いたくなかったのですか？田辺さんに」
「会いたくなかったわけではない。ただ会ってしまったら、彼女がどんな人間か知ってしまったら、自分の気持ちに歯止めが効かなくなる。だから知りたくなかった」

葛城は紫の事を何も知らなかったのだ。何も知らずに5年も想い続ける事などできるのだろうか？それとも何も知らないからこそ、

彼女を美しい思い出のまま美化できた。紫の腹黒さ、弱さ、人を信用できない所、何もこの男は知らない。

「あなたは何も知らない。田辺さんの事を知らないあなたの気持なんて……」

「知りません。だから知りたくて今日ここにきた。でも思ってた通りの人だったようだ。君の様な素晴らしい友達がいるなら、彼女もまた素晴らしい人なのだ」

「素晴らしい？どこが？」

「私を恋敵だと思いながら、それでも私の心配をしてくれる所が」

抜けているかと思えば、鋭い指摘が返ってきた。葛城は恋敵を見てると思えない程晴れやかな笑顔を浮かべた。

「私みたいなオジサンより、ずっと彼女にお似合いだ。あなた達が幸せになる事を祈ります」

こんな潔く身を引いてしまうなんて。負けたと思った。見返りを求めずに、相手の幸せを祈り続けて、遠くに身をひく。この純粹で優しい男だから、紫にとって特別だったのかもしれない。

「葛城さん。そんなに簡単に諦めるんですか？田辺さんはちゃんと覚えてましたよ、あなたの事」

葛城が目に見えて動揺した。そう、そんな簡単に諦められるなら、5年ぶりに会ったぐらいで心が揺れたりしない。

「俺と田辺さんで『過去からの手紙』の試写会に行っただんです。壇上にあがる葛城さんを見る田辺さんは、今まで見た事ないくらいに

真剣だった。年齢とか関係ない。俺は葛城さんと対等に戦いたい。俺も田辺さんが好きだから」

なぜ諦めた恋敵を引きとめてしまったのだろう。紫にバカだバカだと言われ続けて、本当にバカになってしまったのかもしれない。重い、重い沈黙。葛城が目映った迷いを振り切り、ゆっくりと言った。

「君にはかなう気がしない。でも、最後に選ぶのは彼女。正々堂々勝負しましょう」

葛城の中で眠っていた想いに火をつけてしまったのかもしれない。それでも俺は後悔しない。選ぶのは紫。ライバルがいるかどうかなんて関係ない。

「わかりました。行きましょう。授業が始まってしまふ」

俺と葛城は特別授業を行う教室に急ぎ足で向かった。

葛城が講義中、俺も混じって見ようかと思ったがやめた。あまりの人の多さにうんざりしたのと、ライバルのかわこしい所を見て、戦意喪失したくなかった。授業が終わるまで時間をつぶそうと構内をぶらぶら歩いていたら、見慣れない人と遭遇した。

地味で目立たないやせぎすな中年の女性。目立たない容姿なのに、若い大学生の多い構内では、逆に目立った。それに誰かに似てる気がして印象に残ったのだ。

「すみません。文学部の研究室のある建物はどちらですか？」

「あそこです」

俺が遠くに見える建物を指し示すと、女性は丁寧にお辞儀をして笑った。初対面の相手に失礼だが、嘘くさい作り物の様な笑顔だった。

「ありがとうございます」

てっきり職員か何かかと思ったが、道を聞かれるとは。他校からの外来かな？

不思議には思ったが、たいしたことではなかったので、すぐに疑問は消えてしまった。

葛城が授業を終えた後、文学部の教授達に挨拶がしたいとの事だったので、教室まで案内した。古谷教授の部屋の扉をノックしようとしたその時、中から大きな声が聞こえてきた。

「これ以上お話しする事はありません。すぐにお帰りください」

古谷教授の声だった。しかし今までこの様に声を荒げた事などなかった。聞こえてきた声が空耳ではないか？と疑ってしまう。

俺が戸惑っていると、扉が中から開いた。出てきたのは先ほど道案内した女性。俺達に会釈をして無言で立ち去った。

俺が中に入ると、古谷教授は険しい顔を慌てて取り繕って、いつもの穏やかな微笑みを浮かべた。それでも一瞬見た険しい表情が、先ほどの声が空耳ではなかった事を証明した。

「何があつたんですか？先生？」

「柎木君には関係ない事です。葛城先生、失礼しました。本日はお越しいただきありがとうございます」

「いえ、こちらこそ、お招きいただきありがとうございます」

二人の挨拶が始まってしまったので、それ以上追及する事は出来なかった。さっきの女性は何だったんだ？俺の疑問は解決する事はなかった。

また好敵手（ライバル）出現？

葛城にライバル宣言したものの、紫本人と会う事が出来ないのでは話にならない。

11月のとある日。大学内では人が多すぎて話しかけられないので、こっそり放課後に紫の後をつけた。

とある紅茶専門店に入っていく紫。彼女らしい場所だが家と学校の延長線上ではなく、ずいぶん遠回りした所だ。

少し時間をあけてこっそり中に入ってみる。慎重に店内を見渡すと、奥の方に紫の姿があった。向かい合わせに一人の男が座っていた。

スーツ姿のサラリーマン風な男。顔は童顔でスーツがあまり似合っていない。特別かっこいいというわけではないが、人当たりのいい笑顔や真面目な真剣な表情など、表情がくるくる変化していく。

愛嬌があつて雰囲気美男とでもいえばいいのか、こういう男を「可愛い」とか言つて好きになる女性もいるかもしれない。

さすがに話が聞こえるほど近づくと後をつけたのがばれてしまうので、遠くの席から二人の様子をうかがった。

しかし紫に学校外で会うような親しい人間がいるとは思わなかった。そういえば学校内の人間かお爺さん達以外の交友関係は知らない。

『源氏』ペンネームで執筆してたり、俺の知らない彼女はまだまだあるのかもしれない。

なんだか紫楽しそうだなあ。笑顔もいつもの愛想笑いばかりじゃ

なく、腹黒な彼女らしいシニカルな微笑みとか、俺をいたぶってる時みたいなき表情とか……。

あの顔を見れるのは俺だけだと思ってたのに！！ってあんまり嬉しくないか……。

しかし本性を出せるほど親しい相手なのは間違いない。どんな相手なのか気になる。

店に入って1時間以上経過している。ずいぶん長話だな。そんなに盛り上がってるのか？はらはらと時間が過ぎるのを待ち、やっと紫が席を立った。

まずい！俺は入口近くの席に座っているためばれるかも……。慌てて逃げようとしたが遅かった。

「また、後付けしましたね。もう後をつけたりしないって言ったのに。嘘つき粘着バカ犬。3回死んでから出直してください」

久しぶりに効く紫の猛毒発言に、俺は感動していた。4カ月ぶりに紫の声聞いた。しかもあいかわらず腹黒だ。

「罵倒されて快感を覚える、真正ドM変態豚」

豚！犬から格下げ？紫らしくない下品さじゃないか。バカ犬ご主人様じゃなくて、女王様になってしまいそうだ。

俺にこれ以上何を言っても無駄とばかりに、紫は無言で店を出ていった。俺が肩を落としてそれを見送ると、背後から笑い声が聞こえてきた。振り向くと先ほどまで紫と一緒にだったあの男がいた。

どうやら今のやり取りを見ていたらしい。

「田辺さんが本性さらけだしてあんな顔するとは……」

まだ笑いがおさまらないと言った感じでクスクス笑っている。俺は笑われて思わずむっとしてしまった。

「どなたですか？」

「失礼。申し遅れました。中沢出版『北斗』編集部の沢森といいます」

「え？もしかして、『源氏』の連載の担当編集者とかですか？」
「そうですね。不本意ながら」

てっきり葛城のように新たなライバル出現かと思ってしまうた。慌てて俺も名乗りを返す。

「田辺さんと同じ大学の榎木です。彼女のサークルの先輩というか……友達？みたいな？」

「友達が疑問形？まあ彼女にまともな友達がいるとは思えないけど」
人当たりのいい笑顔とは裏腹に、ずいぶん辛辣な事言う人だな。
まさか紫や朝比奈と同じ腹黒人種だったら嫌だな。

「ここ座ってもいいかな？できれば田辺さんについて情報交換したい。私は『源氏』の田辺さんしか知らないから」
「願ったりかなったりです」

俺は作家の彼女を知らない。しかもどうやらこの人は葛城と違って紫の腹黒さをよくわかっているようだ。

沢森は俺の向かいに座って追加の紅茶を頼んだ。メニューも見えない所を見ると、この店の常連で紅茶好きのようだ。紫と話があるかもしれない。

まず俺は簡単に紫の大学内での周りの評判と、自分の知っている腹黒な彼女について話した。

「普段は猫被って生活してるわけだ。あんな性格悪いままじゃ、周りともめるばかりだからね……私の前でも猫被ったまま大人しくしてくれれば、仕事も楽なんだけど」

「沢森さんも彼女の毒攻撃の被害に……」

「榎木君ほどひどい罵声ではないけど、それなりに騙されたり、からかわれたり、ばっさり切られたり、我がまま言われたり、ああ色々だね……」

もうそれ以上言わなくていいです。ようくわかりました。紫が楽しそうにしたのは沢森さんで遊んでたんだね。可哀そうに。俺と沢森は目だけでお互いに同情した。

「そんな腹黒とわかっていて、彼女が好きなの？」

沢森の直球ストレートな発言に思わず気管支に紅茶が入ってむせた。俺、紫が好きとは一言も言っていないけど。

「好きでもないのに、あそこまで言われても付きまとうわけないよね。私は仕事じゃなかったら、彼女と一切関わりたくないな」

眉間にしわを寄せてため息をつく沢森。その気持ち俺にもわからなくはない。なんで彼女を好きになったのか、いまだに時々首をかしげる

「……そうです。田辺さんが好きです。でもとっくに振られて振ら

れて、振られ続けて、いまだに友達とすら認めてもらえません」

「もてそうなのによりにもよってなんで彼女？もしかして田辺さんの言う通り、かなり特殊な志向の持ち主とか？」

興味津津といった表情だ。この人直球でひどい事言うな。初対面なんだから手加減してほしい。腹黒じゃなくて、素直で正直すぎるのか？

「違います。普通です。確かに腹黒だけど可愛い所もあるんです。むしろたまにしか見せないからその可愛さが引き立つというか……。ツンデレ？ヤンデレ？……違うなあ。毒デレ？」

「葛城先生といい、柎木君といい、理解できないな……」

「葛城さんをご存じなんですか？」

「二人を合わせたの私だから。君も？」

「この前うちの大学に特別授業に来た時に、案内役で色々話したので。というかあの田辺さんの本性知らずに夢見ちゃってませんか？」

「そうだね。神聖視？元々あの人の中で『源氏』は神だからね。それに恋愛が混ざって葛城先生本人もそこらへんよくわかってないみたいだよ。無意識に口説いてたみたいだし」

今度は飲んでいた紅茶を嘔き出した。ちょっと待った！真面目そうな顔して何やってんだ葛城！

「当時中学生だった『源氏』に『初花』を送って『この本を貴方に捧げます』なんて手紙書いちゃったらしい。本当に時々信じられないくらい危なっかしい人だよ。同じ年とは思えない……」

「同じ年？誰と誰が？」

「私と葛城先生」

俺、鼻から紅茶噴き出しそう。イケメンとしてそれだけはやっぱりいけないと根性で我慢したけど。葛城優吾は確か32か33ぐらいだったはずだが……。

「沢森さん若いですね。俺より少し上くらいかと思ってました」「よく言われるよ。いつまでたっても作家に新人編集扱いされてなめられたり、無駄に若く見えるのも困るよ」

ちょっと拗ねた顔が可愛い。こういう表情も幼く見える原因だと思っただけど、わかってないのかな。紫がからかうのもわかる気がする。反応がいちいち面白い。

「最近葛城先生と話してないんだけど、葛城先生とは田辺さんのどんな話したの？」

「田辺さんからあっさり身を引こうとしすぎて、思わず引きとめて正々堂々宣戦布告しました」

「バカか君は！なぜそこであっさり引かせないんだ」

おっしやる通りです。でももうちょっとソフトにお願いします。当事者の俺以上に怒ってる気がする。

「葛城先生をせっかく『源氏』から引き話せたかもしれないのに……。私達の計画が……」
「私達の計画ってなんですか？」

沢森はしまったという顔をして、慌てたように言い足した。

「こうなったら……君にも協力してもらおうか……くれぐれも田辺さんには内密に」

そう言っつて沢森が話したのは、『源氏』初書籍の意外な出版経緯だった。

心は重く

沢森は『源氏』の連載から書籍出版への経緯まで、すべて話してくれた。

紫は葛城のために二人の間がやましいものではないと証明するため、沢森と連載を続けている。葛城に対する恋愛感情はないのかもしれないが、葛城のために行動しようとしているのだから、紫にとっても葛城が大切な存在なのだ。

俺なんて避けられてるくらい相手にされてないのに……。そう思うと心は重く憂鬱だ。

誰かに相談するとしたら……。上条にまた二人で会ったら、後から朝比奈に何されるか恐ろしいし、古谷教授は忙しいし、気軽に相談できる相手じゃない。他に話せそうな人間……。となるとやっぱり一人しかない。朝比奈しか……。気は進まないが。

紫を嫌っている朝比奈の事だから、初めから紫を疑って「何か企んでる」と根拠もなしに断言しそうだ。

しかし朝比奈とは最近話どころか、学校であまり見かけてない。どうしたのだろうか？とりあえず文学部の研究室のある建物へと向かった。

研究室の並ぶ廊下で遠くから一人の女性をがやってくるのがわかった。以前道を聞かれた中年の女性だ。そういえばあの時も文学部の建物を聞かれたんだ。しかも古谷教授と話してたし、古谷教授の知り合いか？

しかしこの前の嘘くさいような頬笑みはなく、無表情に淡々と廊下に並ぶ扉を一つつつ開けては中を確認していた。

何をしているのか？保管庫の扉を開けようとして、鍵がかかって

いるのかあかなかった。鍵がなければ諦めるしかないはずなのに、執拗に扉を開けようと続ける。無表情にしかし冷気を漂わせるような怒りのオーラを漂わせて。

怖い！何してんだあの人。常軌を逸したように、乱暴に扉のノブを回し続ける女性に思い切って声をかけた。

「あの……鍵がかかってますから入れないと思うのですが……。どなたか講師の方に許可をとって開けてもらったら……」
「では、あなたが許可をもらってきていただけますか？」

なぜ見ず知らずの女性のためにそんな事をしなくてはならないのだろう？女性に優しい俺でも厚かましいと思ってしまう。

「許可をもらうには理由が必要なんです。なぜ保管庫に入りたいんですか？それにさっきからいろんな扉開けて何を探しているんですか？あなたは誰ですか？この大学の関係者ですか？」

俺の矢継ぎ早の質問に、女性は眉間にしわをよせて、無言で見上げるばかりでで何一つ答えようとしなかった。

「答えられないのは何か違法行為でもしようとしていたのですか？」
「私を犯罪者扱いするのですか！」

「では理由を言ってください。言えないなら不審者として警察に通報します」

女性は腹立たしげに俺を睨みつけて、建物の出口へと歩いていった。なんだったんだ？ドアノブ壊れてないかな？気になって念のためノブを回して見たら、すんなり扉が開いた。

あれ？さっきの女の人は開かずに苦労してたのに。空いたドアの

隙間から中に人がいるのが見えた。

朝比奈だ。久しぶりに見た朝比奈はますます痩せて、顔色も悪かった。表情も暗く無表情だ。

「朝比奈先輩。何してるんですか？」

「いつものように隠れて昼寝」

「もしかして今扉があかないように内側からふさいでました？」

朝比奈は眉間にしわを寄せて無言で見上げていた。その姿は先ほどの女性とそっくりだった。そうだ、初めて見た時誰かに似てると思ったが、朝比奈先輩だ。

「この扉を開けようとした女性、朝比奈先輩に似てたんですけど、何か心当たりありませんか？」

「知らない」

「家族とかですか？朝比奈先輩を探してたとか？」

「おまえに関係ないだろう！」

朝比奈が急にどなり声をあげたので驚いた。朝比奈がこんなに感情的に声を荒げるのはめったにない。俺を脅す時でさえ、淡々と冷静に静かに怒る。

「疲れてるんだ。用がないなら寝かせてくれ」

朝比奈はそう言って保管庫の床にうずくまった。もう11月で、床は冷たく寒そうだった。とても寝心地のいいとは思えない場所で、どうして隠れて寝るのか？

「先輩大丈夫ですか？具合が悪いなら、俺手伝いますから他の場所に行きましょう」

朝比奈は目をつむったまま返事も返してくれなかった。しかたがないので少しでも温かいようにと、俺の着ていた上着を布団代わりにかけた。そのまま立ち去ろうと背を向ける。

「僕に用があるからこんな所にまで来たんじゃないのか？」

「そうなんですけど……たいしたことじゃないので」

「話を聞くだけ聞いてやる。だからおまえもさっきの事は忘れる」

朝比奈はそう言って寝転がったまま、視線だけ俺に移した。少し迷ったが、俺も朝比奈の隣に座り込んで、紫の事を話し始めた。

すべてを聞いた後、朝比奈は目頭を押さえて、何か考えるようなしぐさをした。

「どこからどこまで田辺の計画なのか……」

「どこからって、どういうことですか？」

「田辺がその小松なんて編集長に騙されるような可愛げのある女か？それに『紫』というストーリーカーなんか相手にもせず平気で無視しそつだろっ」

「そこから疑うんですか？」

「一つの可能性だ。情報が少なすぎてわからないが。しかし田辺が何か企んでいるとしてどうするんだ？榎木は」

「どうするって……ただ俺は前みたいに田辺さんのそばにいたいだけ」

「いれればいいだろう、今だって。同じ大学に通ってるのも、避けられ続けているのも前と変わらないだろう。変わったのは榎木だよ」
「俺が？」

「田辺が『源氏』だったのは大学入学前から。榎木はずっと知らなかったただけだ。それなのにおまえが勝手に遠い世界の人間と思って近づけないだけじゃないか」

朝比奈の言う通りだった。俺は紫が作家活動を隠していた事にショックを受け、別人になっちゃってしまったように思っていた。でも紫は何も変わっていないのだ。この前だって相変わらず俺にひどい毒をかけた。以前と変わらず。

もう一度紫にアタックしてみよう。何度となく拒絶されながら、それでも少しづつ二人の距離は縮まっている……と思う……。
どんなライバルがいてもかまわない。

最大の好敵手（ライバル）は家族

11月も終わりにになると、街はクリスマスに彩られる。今年の1月24日こそは紫と一緒に過ごしたい。去年は誘ってもにべもなく断られたが、今年こそは絶対にデートに誘うんだ。

俺は一か八かの賭けに出た。紫の自宅に押し掛けよう。家族と過ごすと言って断られないように、先にお爺さん達に了承を得るのだ。以前訪れた時の紫の怒った姿はいまだに恐怖の記憶として残っている。しかし嫌われようがなんだろうが、なんとしても約束は勝ち取らなきゃ。

紫の不在を狙って田辺家を訪れた。出迎えてくれたのは、紫のお爺さん・幸吉だ。前に会った時より痩せて、顔色もすぐれない。

「おや、柁木君。ひさしぶりだね」

「ごぶさたしてます、おじいさん。今日はお土産にアッサムとシヨートブレッドを持ってきました」

幸吉は嬉しそうに頬を緩めて歓迎してくれた。しかしその笑顔も力なく、すぐ消えてしまった。

「さっそくだからいただいたアッサムでミルクティーを入れようか」
「勝子さんは？」

幸吉はそこで表情を曇らせて沈黙した。何かまずい事を聞いてしまったようだ。

「まずは上がってください。お茶を飲みながらお話ししましょう」

嫌な予感がしたが、何も言わずに素直に上がる事にした。幸吉の入れた温かいミルクティーを飲み、ショートブレッドを食べる。幸吉の大好きな紅茶を飲んでいるのに、紅茶の話は全く出てこなかった。

長い沈黙を破ってやっと幸吉が口にした言葉は、予想通り悪い話だった。

「勝子は今入院してます」

「そんな……。どうして？」

「ガンだと言われました。もう助からないかもしれない。以前榎木さんが入らして、少しした頃に……。倒れて病院に運ばれて」

俺は勝子の日だまりのように温かで可愛らしい微笑みを思い出して、胸の奥が苦しくなった。紫はそんな事になっても今までと変わったそぶりもなく、学校に通っていた。周りに騒がれても愛想笑いをふりまいて。

彼女はどんな気持ちだったんだろう。今どんな気持ちなんだろう。

幸吉の入れたミルクティーを飲みながら、暗く沈む気持ちを抑えきれなかった。幸吉は沈黙を破って、ぼつりと話し始める。

「紫は学校でどうしてますか？なんか色々騒がれて大変なんじゃ……」

「確かに作家という事で注目を浴びています。今じゃ皆の人気者で、いつも学生に囲まれていますよ」

「そうですね……。それでよかったですかね……。私達も本が売られる直前に知らされて驚きました。最初はむしろ黙って！と怒りもしましたが……。結果的には助かりました」

「助かった？」

「勝子の治療費、入院費が高額で、とても私の稼ぎだけではどうにもならなかった。しかし紫が作家で稼いだ金があるというって費用を出してくれたんです」

紫は本をたくさん売ってお金を手に入れるために、実名を出して葛城との仲を利用した？いや、勝子さんが入院する前から書籍の出版は決まっていた。何か別の目的があるはずだ。もっと以前からの何か……。何かが……。

しかし紫を12月24日のデートに誘う予定が、とてもそんな事言ってる場合じゃなさそうだ。そんな下心は封印して、田辺家のために俺が何かできる事はないか？

「あの……。柁木さん。時間があつたら勝子を見舞ってやっていただけませんか？学校での紫の事とか話をしていただきたいのです。入院中も紫の事が気になっているようで、勝子を元気づけてやりたい」

「もちろん。俺でよければ」

俺は幸吉さんに入院先を聞いて、翌日病院を訪れる事にした。久しぶりに会った勝子は、また日だまりの様な笑顔で迎えてくれた。しかし春に会った頃はふつくらしていたのに、今は別人のようにやせ細っている。変わらぬ笑顔が痛々しく、見ているだけで胸が苦しかった。

「まあ、嬉しいわ。こんな素敵なお客さんに来ていただいて」

「お久しぶりです。またお会いする約束が遅くなってすみません」

「いいんですよ。ああ、よかった。またお会いできて」

無邪気にそう言う勝子は自分の病気の事をどこまで知っているのか？死を覚悟しているからまた会えてよかったと言うのか？俺はつらい気持ちをぐっところえて、笑顔を作った。

「今日は紫さんの話をしにきました」

「あら、嬉しいわ。ぜひ聞かせてちょうだい」

それからしばらく俺は紫の事を話し続けた。大学で皆の人気者になっっている事、友達も増えて充実した学園生活がおくれるのではないかと。多少の誇張はかまわないだろう。少しでも喜んでもらえれば嬉しい。

病人にあまり長話はよくないだろうと、話を途中で切り上げる事にした。

「また来ます。続きはその時に」

「柁木さん。クリスマスは何か予定ありますか？」

勝子さんの唐突な質問に俺は戸惑った。しかし勝子さんの祈るような瞳を見て、素直に答える事にした。

「ありません。本当は紫さんを誘いたいんですけど」

「まあ！それはいいわ。ぜひそうしてください。24日にね」

勝子の提案に驚いた。勝子達にとっても大事な日であるはずなの

に、なぜ俺に紫の事を頼むのか？もしかしたら勝子と紫が一緒に過ごせる最後の12月24日かもしれないのに。

「私はこういう体だから紫に何もしてあげられないでしょう。夫も仕事と私の世話で忙しいし。紫にはさびしい思いをさせたくないの。楽しい1日してあげてくれませんか？」

「わかりました。まかせてください」

俺は俺のためだけじゃなく、紫のため、勝子や幸吉のため、何とんでも紫を口説き落とさなければ。俺は決意を胸に作戦を開始する事にした。

ファイナル アタック スタート

紫の自宅近くの公園。彼女が家に帰る時、いつもこの前を通るのは知っていた。だからそこで待ち伏せた。俺が視界に入ったとたん、紫の表情がこわばったのがわかる。

「とうとう私の前に現れましたか。祖父や祖母の周りでうるちよろしてたから、そろそろだろうと思ってた。バカ犬ストーリー」

この久しぶりに会った時もそうだったけど、彼女はもう俺の事は先輩とは呼んでくれない。

距離を感じてたのは気のせいではなかったようだ。

「今日は田辺さんをクリスマススイブのデートに誘いに来たんだ」
「お断りです。その日は家族とすごします」

「その勝子さんからぜひよろしくって頼まれたんだけどな」
「祖母が何か言ったとしても、私はクリスマススイブに犬といちゃつく趣味はないですね。その日は毎年世のカップルと幸せ家族に不幸を！と呪って過ごす事にきめてるんです」

紫らしい病んだ毒発言だ。しかし俺には彼女の寂しさからくる嫉妬にしか思えない。友達もいない。一緒に過ごしたい両親もいない。そして今年は祖父母もそろって過ごす事もできない。

彼女は街が親しい人々があふれかえる様子を、どれほど憧れ見続けてきたのだろうか。

最初から素直に紫が頷くなってると思ってなかった。俺は話を変えて

紫に揺さぶりをかける事にした。

「田辺さんは実名で本を出して、本当は何を企んでるの？」

「何のことですか？」

「連載の時はペンネームだったのに、書籍化で正体をあかしたり、葛城さんと親しげな対談を載せたり、これも君の計画だね。連載もタイミングが良すぎた。君は狙ってたんじゃないか？『北斗』に記事を載せるタイミングを」

「憶測で勝手な事を言わないでください」

「ただの推測だって言うなら、沢森さんや葛城さんに相談してみようか？」

「二人と連絡とってるんですか？」

「1回会っただけ。連絡先交換したからすぐに連絡は可能だけど」

紫は歯ぎしりするような悔しげな眼で俺を睨んだ。いつもなら俺が紫の腹黒さに痛めつけられているのに、今日は立場が逆転している。脅してでも彼女との約束を勝ち取りたかった。

「葛城先生は田辺さんの腹黒さを何にも知らないみたいだね。できれば綺麗なイメージを壊して傷つけたくないな」

「……要求は？」

「12月24日。俺と一緒に過ごそう」

「嫌です。24日だけは絶対に」

「どうしても？」

「どうしてもです」

ここまででは予定通り。紫はやはり沢森や葛城に何か感づかれたくない事をしているのだ。それでも24日だけは認めないと必死に抵抗を続けている。ここは折れ時だ。

「じゃあ23日でもいい。10代最後の日を俺にくれないか？」

「……どうして、それを？」

「好きな女の子の誕生日は初めにチェックするのが当たり前だ。もうずっと前から知ってた」

そう12月24日は紫の誕生日だ。そして今年は20歳の誕生日。大人と子供の境界の、人生でたった一つの記念日だ。絶対に寂しい思いなどさせたくない。

「絶対楽しい誕生日の思い出にしよう。一生忘れないぐらい。今までで一番楽しい誕生日に」

たぶん、紫の楽しい誕生日の記憶は両親がいた頃の誕生日だろう。それ以上の誕生日にできるか、正直自信はなかった。それでもできるだけの事はしたかった。

幸せは過去にしかないんじゃない。これからだってあるんだってわかってほしい。

「つまらなかつたら、これで最後でもいい。田辺さんの事あきらめるから」

紫が素直に楽しいなんていうわけがない。俺を永遠に紫を失うだろう。それでもたった1日にかける。

「……わかりました。これが最後です」
「ありがとう」

俺は達成感でいっぱいの気持ちだった。しかしこれはまだ始まりだ。最高の誕生日にできるかはこれからにかかっている。

「田辺さん行きたい所とか、したい事ある？誕生日だからなんでも言って」

「クリスマスでバカ騒ぎする外なんて歩きたくないです。あの無駄にセンス良く生活感のない部屋がいいです」

俺は思わず息を飲んだ。

「それって俺の家？」

「何か都合悪いですか？ああ、お父様がいるとか」

「いや……。たぶん、うちの親父はまた新しい彼女とデートでいないと思うけど。いいの？」

「かまいません」

まさか紫から俺の家に来たいなんて言うとは思わなかった。

「誕生日楽しみにしてますから、準備頑張ってくださいね」

悪魔的な微笑みで反撃をする紫。そつだ。自宅なら店みたいにお金を払えばどうにでもなるわけではない。

むしろ一番難しく、ハードルが高いかもしれない。

「約束通り。楽しい誕生日になるように、用意して待ってるよ」

残り時間はあと2週間。他の人間に手伝ってもらわなくてもいいから、時間との勝負だ。

紫が楽しんでもらえるような、手作り誕生日をしよう。

決意を胸に俺は最後の挑戦を始めた。

準備中

自宅で誕生日となった事で一番悩んだのは料理だ。正直に言うと俺の料理スキルは低い。いつも外食か買ってきた弁当で済ませてたので、碌に料理してない。

パスタ茹でて出来合いのソース和えるだけとか、レタスちぎってドレッシングかけるだけのサラダとかならできるだろうけど、誕生日祝いでそれはないだろう。

料理は練習するにしても、ケーキはさすがに無理なので予約する事にした。クリスマスシーズンはどこも品薄なので早めの方がいい。しかし料理をどうするか……。

悩んで結局また朝比奈に相談しに行く事にした。朝比奈がかなりの料理上手なのは知っている。学校にお手製弁当を持ってきた事があるが、見ただけで手が込んで美味しそうだった。

そういうわけで朝比奈を探すのだがなかなか見つからない。古谷教授なら手がかりを知っているかと思い、教授室へと向かった。

「失礼します」

ノックをして教授室を開ける。応接室のソファで朝比奈が堂々と寝ていた。毛布まで被って、本気で寝る気だ。

「何でこんな所で寝てるんですか、先輩」

「柎木か……。うち、鍵閉め忘れてた。まあいい。入るなら早く鍵閉める。誰かくるだろう」

「ずいぶんと堂々と寝てますね。毛布まで持ち込んだんですか？」

「研究室に泊りこむ人用の備品。さすがに床に寝ころぶのは寒い季節だから」

それはそうだが、だからといって、応接室で堂々と寝ていいのか？と突っ込みたいが、もはや何を言っても無駄だろう。俺は素直に部屋の鍵をかけた。

「で？今日は何の用だ。まったくだらない相談でもしに来たんだろう。早く話して早く帰れ」

朝比奈は毛布に頭からくるまったまま、顔を出す気もないようだ。あくび混じりの眠そうな声が聞こえてくる。

一樣、この前相談した後の経緯と、なんとか23日の約束をもぎ取った事を報告した。

「ああ、そう。で？今度は何？」

「先輩は上条先輩にクリスマスどんな料理作るんですか？先輩の事だから、さぞ凝った料理を……」

「メインは実家から送ってもらおう蟹だな。特に甲羅酒は重要だ。あとは煮物とか、ぬか漬けとか、お浸しや酢の物とか、鳥の竜田揚げとか」

「何でクリスマスにそんなおふくろの味なんですか！」

「仕方ないだろう。上条が好きなんだから」

「かすかにクリスマスっぽいのは鳥の竜田揚げくらいですね。かなり和風ですけど。それってどうやって作るんですか？」

「まさかおまえ作る気か？」

「そのつもりです。愛のこもった手料理を」

「それで唐揚げ作った事あるのか？」

「生肉買った事ないし、まして揚げ物なんてどうやるのかさっぱりです」

「辞める！どうせ悲惨なできになるのがおちだ。火が通り過ぎて黒こげても、肉が固すぎてもまずいし、かといって生はしゃれにならん。コンビニでチキンでも買っておけ」

練習すればなんとかいけるんじゃないかな？と思っただけで甘かったか。しかし他に誕生日っぽい、俺でも作れる料理ってなんだ？

「そもそも田辺はそんなに唐揚げ好きなのか？」

「……嫌いじゃないけど、どちらかと言うと肉より魚派ですね」

「別にクリスマスや誕生日らしいとかこだわるより、ヤツの好きそうな物でも用意しとけ」

「田辺さんの好きな料理って……寿司とか？でも寿司握るのは唐揚げよりハードル高いですよ」

「手巻き寿司でいいだろう。簡単だし。祝い事っぽいし」

「手巻き寿司ってなんですか？」

朝比奈は布団から顔を出して俺を見た。ものすごく呆れた顔をしていた。面倒くさそうに頭をかいて言った。

「そこから説明させる気が！ったく。少しは自分で調べるなり考えるなり……」

その時鍵が開く音がして、扉が開いた。部屋の主である古谷教授

だった。ソファで堂々とさぼって、朝比奈がまずいのでは……と心配したが、それは杞憂だった。教授は朝比奈の事はまったく気にせず、むしろ俺の方に注目していた。

「榎木君、こんな所で何をしているんですか？」

「ちよつと……朝比奈先輩に用事があつて……」

「あまり朝比奈君の手をわずらわせてはいけませんよ。それに榎木君卒論はどうなってるんですか？小池教授が嘆いてましたよ、授業もサボりがちで卒論の進みも悪いと」

教師としてしごくまっとうな小言だ。あまり古谷教授にこういう説教された事なかったので油断していた。しかし教授は穏やかな表情のまま、淡々と怒りを湛えていた。長年の貫禄から醸し出す凄味が恐ろしい。

「すみません。帰ってすぐとりかかります」

紫の事がいっぱいいっぱいで卒論が中々進まない。その上23日まで時間も無い。どうやら朝比奈にも、この研究室にも当分近づけそうにないようだ。

俺は仕方なく自力で何とかするべく、ネットで手巻き寿司の作り方を見てみた。

なんだ。寿司酢を炊いたご飯に混ぜるだけ。後は具と海苔を用意すればOK。これなら俺でも作れそうだ……と思ったのだが、難関が待っていた。

確か紫は玉子とかつぱ巻き食べないと落ち着かないって言った。きゅうりは切るだけだが、問題は玉子焼き。試しに作ってみたのだ

がどうにも形にならなかつたり、焦げてしまつたり難しい。

四苦八苦しながら23日が来るのを俺は待ち望んでいた。
これが終わりの始まりだとも知らずに。

今夜のメニューは？

「この入り玉子はなんですか？」

「玉子焼きだよ」

「原型がないほどぐちゃぐちゃなものを玉子焼きとは呼びません」

練習したがとうとううまく巻く事が出来なかったのだ。

「それに切ったのに繋がってる、紫蘇やキュウリと、買ってきた刺身。これで今度は何をしでかすつもりですか？」

テーブルに並べられた具材を見て紫はそう言った。どうやらまだ今夜のメニューに気付いていないようだ。サプライズ成功か？

俺は寿司飯をキッチンから持ってきて言った。

「手巻き寿司だよ。田辺さんが好きなお寿司」

雷で撃たれたように驚きを隠せない紫。サプライズ成功だ！と内心小躍りしていたら、紫から突っ込みが入った。

「それで海苔はどこですか？」

「海苔？……海苔は……ああっ！しまった。買い忘れた！買いに行つてってスーパーしまってる。コンビニでも売ってるかな？」

海苔を買い忘れるとは！痛恨の極み。涙目で落ち込む俺に、紫は呆れたように言った。

「もう今日はちらし寿司でいいんじゃないですか？」

「ちらし寿司って何？」

信じられないという感じで、ちょっとドン引きした紫。

「手巻き寿司用意できてちらし寿司知らないんですか？」

「正直言うと、手巻き寿司も知らなかった。朝比奈先輩に教えてもらったんだ」

「そんなことだろうと思いました。まったくあなたは人に助けてもらわないと何もできないんですか。小学生より使えない、足手まといのボンボンめ」

紫はぶつぶつ文句言いながら、勝手に大皿を持ってきて、寿司飯と具材をのせて、あっという間に綺麗なちらし寿司を作り上げた。紫は出来上がったちらし寿司を満足気に見つめながら、なぜか切ない表情を浮かべた。

「すごい！綺麗だね。手慣れてるね」

「いつもできあがるの見てるだけで、ちらし寿司作るのは初めてですが」

「田辺さん寿司好きだし、家で作らないの？」

「祖父は生魚だめなんです。祖母とお昼に回転寿司行ったりはしませんけど」

「じゃあ出来上がるのを見て立ってのは……」

「母が作ってくれました。雛まつりとか、ちらし寿司が定番ですし」

紫の両親との思い出なんだ。誕生日なのにちょっとしんみりさせてしまったかな？

気分を切り替えるために、俺は別の料理を出した。

「田辺さんカニ汁好きだったよね。作っておいたよ」

鍋の味噌汁を見て、なぜだか紫は震えた。

「何いれてるんですか……！」

「何って、タラバガニ」

「カニ汁にタラバガニなんて高級品どこの誰が、入れるって言うんですか。普通はワタリガニとか」

「お歳暮でもらってうちにあったから、余り物で作ったんだけど」

紫は青ざめた顔で何やらぶつぶつと、「タラバガニが余り物だなんて……このブルジョワめ……」と唸ってた。

榎木讓司のカニ汁レシピ

？余り物のタラバガニを適当な大きさにぶつ切りにする

？水張った鍋にカニを入れて適当に煮る

？最後に味噌といて終わり

「というわけで、簡単に余り物で一品を……」

「タラバガニが余るわけあるか！というかだし入れてないんですか？」

「カニからだし出るし。この味噌だし入りって書いてあるよ？」

「うん……まあ……カニのおかげでそこそこ美味しいです」

カニ汁はいまいちだったかな？でもさっきのしょんぼりした感じ

から立ち直ってるから、結果オーライ？次は渾身の力作。

「そろそろできてるかな？」

「今度は何が出てくるんですか？」

「茶碗蒸しだよ。田辺さん好きでしょ。」

なんだろう、その疑いの目は。おまえに作れるのか？って目。失敬なと思って蒸し器のふたをとった。

「あれ？固まってない。おかしいな。1時間以上蒸してるのに」

蒸し器の中の茶碗蒸しはまだどろどろだった。

「たぶんだし汁と卵の配分が間違いましたね。卵がたりないと固まらない」

「どうしよう？これ」

「卵スープだと思って食べる手もありますが……。ためしに卵たして蒸しなおしてみますか？」

「せっかくだから卵追加して作り直そう。熱いから俺やるよ」

蒸し器の中の器から、ボウルに移し替えていると、なんだか恐ろしく視線を感じる。

「どうしたの？田辺さん」

「それ茶碗蒸しですよ？なんかありえないものが見えたような…」

…何入れたんですか？」

「茶碗蒸しの作り方見てたらキツシュに似てるなと思って。キツシ

ユって言ったらやっぱりハウレンソウとベーコンが定番かなと……
それから玉ねぎとか」

「茶碗蒸しにハウレンソウもベーコンも玉ねぎも入りません。この西洋かぶれバカ。なんて事してくれたんですか。そのからっぽの頭をカニの様にぱっくり割って、いっぺん洗ってから出直してください」

俺の心のこもった手料理は、どれも外していたものの、なんだかいつも通りの紫の毒攻撃にほっとした。こんなに長く一緒にいるの久しぶりだったから、会話が持たなかったらどうしようか思ったんだよね。

お寿司に合わせて、熱い緑茶を用意して、できあがった料理を並べる。紫も俺の料理に呆れたりため息ついたりしていたが、もう諦めたようだ。

「ケーキは食後のお楽しみって事で先に食事でもいいかな？」

「はい。それでいいです」

「じゃあ田辺さんの十代最後の日に、ちょっと早いけど誕生日を祝って。誕生日おめでとう」

「ありがとうございます」

ちょっと恥ずかしそうに、でも嬉しそうに頬をそめる紫。そんな紫の姿を見て、誕生日祝いして良かったと本当に思った。

思い出の所在地

食事が終わって、いよいよケーキだ。

俺は部屋中の電気を消して、火のついたローソクが飾られたケーキをキッチンから持ってくる。

「ハッピーバースデートゥーユー。ハッピーバースデートゥーユー。ハッピーバースデー。ディア 紫。ハッピーバースデートゥーユー。おめでとう田辺さん」

お決まりのバースデーソングと一緒に、紫の前にケーキを置くとローソクの炎に照らされた紫の顔が見えた。

今にも泣き出しそうに顔を歪めている。涙をこらえながら、ローソクの火を吹き消す紫。

今明かりをつけてしまっているのだろうか？

彼女の泣きそうな顔を明るい照明の下にさらしてしまうのは、ためられる。

しかし真っ暗な部屋でいつまでも沈黙しているのは不自然すぎた。俺は仕方なく部屋の明かりをつけた。

「なんですか。この子供の粘土遊びみたいなケーキは」

涙をこらえながら、それでも強がって毒を吐く紫。しかしその声はいつもよりずっと弱く、儂い。確かに紫の言う通り、俺の苦心の作は好意的に言っても家庭的、クリームのデコレーションがむごい事になっている。

これでもかなり練習して、ケーキっぽくなったんだけどな。おか

げで形ある玉子焼きを作る練習ができなかったが。

「榎木讓司作。イチゴシヨートだよ」

「どうせスポンジ台買ってきて……生クリームとイチゴ飾っただけじゃないですか」

涙がこぼれないぎりぎりの所でこらえながら、紫はまだ強がりが続けた。俺はさらにとどめを刺すべく、紫にあるものを差し出した。

「誕生日にはプレゼントだよな」

「私に？」

紫は驚きながら受け取って、すぐに包みを開けた。中から出てきたプレゼントを見て、こらえていた紫の涙のダムが決壊した。

「小学生の図工か家庭科ですか……本当に……やる事がお子様レベル……」

堪えきれずに、声を出して泣き出した。俺が彼女にあげたプレゼントは、バラの押し花のしおりと、ブックカバー。両方とも俺の手作りだ。

紫なら高価なプレゼントよりも、こういう紫の好きな本に関するグッズで、手作り感あるものの方がいいと思ったのだ。

しかしまさか泣きだすとは思わなかった。嬉し泣き？だけとは思えなかった。

「田辺さん……大丈夫？」

「なんで、こうピンポイントにツボ押してくるんですか。先輩は…

…」

紫はしばらく泣いて、落ち着いた頃、少しづつ話し始めた。

「両親が私を預けて夜逃げしたのは、7年前の12月25日。私の誕生日の翌日です」

何でよりもよってそんな日に……と思うが、せめて最後に娘の誕生日を祝ってからという事か？

「あの時の誕生日も、ちらし寿司といちごのケーキで、祖父母がバラの鉢植えをプレゼントしてくれて、両親からのプレゼントはブックカバー。先輩被りすぎです。わざとやってるんですか!」
「知らなかったよ。すごい偶然だね」

「お母さんの作ってくれた、ちらし寿司やケーキのほがずっと、ずっと美味しく綺麗……なはずなんです。でももうあの味を思い出せない……。この先ちらし寿司やいちごケーキ見たら、今日の先輩が作った物を思い出しちゃうじゃないですか……どうしてくれるんですか」

子供の頃の記憶を人はどれだけ覚えてるだろう。時間とともに色あせ、新しい記憶に塗り替えられていく。それは避けようもない。時は残酷だ。

「思い出は時間と共に塗り替えられるものだよ。新しく楽しい思い出を作っていけばいい。一緒に作っていこう」

「嫌です。私はお父さんやお母さんといったあの日々を忘れたくない。新しい思い出なんていらない」

ダダをこねる子供の様な紫の前にひざまずいて、俺は下から彼女

の顔を覗き込みながら言った。

「それで今、田辺さんは幸せ？俺には家族にこだわりすぎて、田辺さんが苦しんでるように見える」

失われた家族の絆を取り戻したい。それが紫の願いなら、かなえてあげたい。しかしそれで本当に紫は幸せになれるのだろうか？

「家族の思い出は無理に忘れなくてもいい。でもたくさんの人と新しい思い出を作って、大切にしていく。それでは駄目なの？」

その時の紫の表情を的確に表現する言葉が見つからない。迷い、戸惑い、怒り、悲しみ、混沌とした表情のまましばらく無言だった。彼女も迷っているのだ。

新しい道へ踏み出す一步。その勇氣はどれほど大変か。家族以外の人を信用できない、そう言った彼女が他人を信用するのはとても大変な事だと思う。

しかし現実に両親は帰ってこない、祖母は倒れその命は長くはないだろう。彼女の家族は、今確実にいなくなっていくのだ。

「今すぐ答えを出さなくてもいい。少し考えてみてくれないか？」

無理に焦らず、ゆっくりと紫の心を解きほぐしていこう。

「もう時間はありません。遅すぎです、先輩」

「何が？」

しかし俺の問いに彼女は答えてくれなかった。

乾杯（前書き）

しばらく話ののろのろペースでしたが
ここからジェットコースターのように急展開になるはず……

乾杯

「お酒が飲みたいです」

紫がやけ酒にはしろうつとしてる！時刻は夜10時。そろそろ家に帰らないとまずいのでは……。

「田辺さん、今日はまだ未成年だし」

「じゃあ12時過ぎたら飲みましょう」

「終電なくなつて帰れなくなつちゃうよ」

「タクシーでもなんでも、意地でも帰るので、ご心配なく」

そこで泊まると言ってくれたら嬉しいんだけどな……。

「まず紅茶入れるよ。お酒は用意しておくから」

「お願いします」

さて、どうしよう。飲むとは思わなかったから、酒用意してないぞ。

まったく家にないわけじゃない。オヤジのワインコレクションなら、記念日にふさわしいワインがあるだろう。

しかし勝手に開けたらオヤジは大激怒、値段聞いたら紫は卒倒しそうなものばかりだが。

まあオヤジについては、真野の件で痛いめにあったのに、また性懲りもなく若い恋人とクリスマス過ごしてるバカなので、いい気味だと思つて無視しよう。

お酒を飲み慣れてない紫でも飲みやすい、甘口で炭酸系の爽やか

な飲み口がいいかな……。オヤジのワインコレクションをあさって
いて、ソレを見つけてしまった。

ドンペリニヨンのロゼ。甘口のシャンパンだ。当たり年のビンテ
ージ。値段は……考えない方がいいな。

お水の世界とかだとピンドンとか言われる、例のあれだ。ワイン
に詳しくない紫にも、『ベタでこのセレブが!』と言われそうな一
品。

むしろ罵りたい。……いや、DMに目覚めたとかじゃない。

やけ酒に走るほど落ち込んでる紫の気分を、少しでも明るくでき
るなら、喜んでいたぶられるさ。俺にできる事なんてこれぐらいだ
から。

「おまたせ。田辺さん。お茶入ったよ。田辺さんの好きなダージリ
ン、セカンドフラッシュ」

「……」

好きな紅茶を飲んでも、眉一つ動かさない。うん。重傷だ。

「後で、飲むお酒。これ、ドンペリニヨンのロゼだよ。ピンク色だ

「よ

「そうですね」

外したー! 笑いを取りに行つて滑つたみたいに、痛い。

もう、何話していいかわからず、俺は紫の隣に座つて、無言でお
茶を飲んだ。紅茶は美味しいけど空気が重い。

「先輩はすごいですね」

「え?何が?」

沈黙を破っていきなり紫がそう言った。紫に誉められた事などないので、何かあるんじゃないかと、怖くてしかたがない。

「この部屋も家も広すぎる。先輩が戻ってくるまでの間、寂しかったです。先輩はいつもここで一人だったんですね」

「オヤジはたまに帰ってくるけど、食事を一緒に食べる事もめったにないね」

「寂しくないですか？」

「昔は寂しかったよ。今も時々。でも家族だけが、すべてじゃないと思う。俺には田辺さんとか、他にも大切な人がいるから」

「私も先輩のようになれたらよかった。家族以外の誰かを大切に思っ
つて生きれたら」

「だから俺と……」

「でも、無理なんです。やっぱり私には今より過去の家族の方が大切だし。先輩の事信じたいのに、信じられない。先輩と一緒に未来に向かつて歩けません。だから私の事忘れてください」

今まで何度も紫に告白して、そのたびに手ひどく降られてきた。

それでもこんなに真面目に真剣に降られたのは初めてだ。俺の心に深く消えない傷が刻まれたようで、息もできない。

嫌だ、諦めたくなんてない。紫を一人にしたくない。

「田辺さんの事忘れられない。忘れたくない」

「じゃあ、今日までの普通の女の子だった『田辺紫』を覚えていてください」

「明日からは？」

「約束でしたよね。これが最後だって。いさぎよく負けを認めてください」

俺は反論の言葉も思いつかず、しかし頷く事もできず、ただ黙って紫を見つめた。家族を想い泣きだした、か弱い少女の素顔を愛想笑いの仮面で覆って、俺の前でゆったりとお茶を飲む紫。

俺の言葉は最後まで届かなかったのか？絶望だけが俺を支配した。どれだけそのまま時をすごしたのかわからない。ふと紫が呟いた。

「12時すぎました。お酒飲みましょう」

「……うん」

俺はシャンパングラスに注いで、紫に差し出した。

「20歳の誕生日おめでとう。田辺さん」

「ありがとうございます」

甘いシャンパンが、今は苦く感じる。紫の誕生日なのに、好きな子の誕生日をなぜ素直に祝ってあげられないのか……。

「甘くて飲みやすいです。美味しいですね。どうせ無駄に高級で嫌味なワインなんでしょうけど」

一口飲んでそう言ったかと思うと、紫は今度は一気にグラスの中身を飲みほした。

「おかわりください」

「ちよっと待った。そうやって飲むもんじゃないよ。田辺さん、お酒初めてなんだし、ゆっくり様子見た方が……」

「もう私は20歳ですよ。自由にお酒飲んで何が悪いんですか。誕生日くらい飲ませてください」

俺がつがないから、勝手にボトルを持ってつぎ始める紫。そう言えは大学のバイトの打ち上げの時、酎ハイ一口でほろ酔いだった気がする。絶対に危ない。

しかし俺が止める間もなく、紫はすごい勢いで2杯目を飲み始めていた。俺は紫の手からボトルを取り上げて、彼女の手が届かない高い戸棚に持っていく。

「何するんですか。高いお酒だからおしくなっただんですか。意外にせこいですね。しかたない。コンビニで買ってきます」

「ちよつと待った。まさか一人で買いに行く気？こんな夜中に危ないよ」

「大きなお世話……あれ……」

紫は立ちあがって歩こうとしたが、もう酔いが回ったのか足取りがおぼつかない。

「おかしいですね。……。先輩や古谷先生達はもつと飲んでも平気そうだったのに……」

「化け物と比較しちゃいけません。人それぞれ、お酒に強い弱いあるんだから、無理しない方が……」

「眠い……。寝ていいですか？寝ます。寝させてください」

ふらふら歩きながらそんな事をぶつぶつ歩く紫。ハラハラして放っておけない。とりあえず客室のベットでも用意しよう。普段使っ

てないから、掛け布団だしてこないと

「ちょっと待ってて。今ベッドの用意してくるから」

「先輩の無駄にでかくて、ふしだらなベッドでいいです」

「は?! っとちょっと待って田辺さん」

俺のベッドで本気で寝る気か? いやいや、紫は今明らかに酔っている。理性があるとは思えない。期待するな自分。

俺が動揺してる間に、ふらふらと俺の部屋まで辿りく紫。

「おやすみなさい」

紫は挨拶まで丁寧にして、俺のベッドにもぐりこみ、すぐにすやすやと眠り始めた。ベッドは小さな紫には大きすぎて、紫が子供の様に見える。

無邪気に無防備に寝顔を晒す紫の姿を見て俺は盛大にため息をついた。

俺さつき、思いつきり振られたよね。その直後にこんな可愛い寝顔見させられるなんて、拷問か? 変な気を起こす前に部屋を出よう……、でもこんな機会もう二度と来ないかも。もうちょっと寝顔見るだけ……。ああ可愛いな、頬をつつすら赤くして、食べちゃいたいくらい可愛い寝顔だな。……いかん、いかん、今何考えた俺?

俺の苦悶と苦悩も知らずに紫は安らかに眠っていた。俺は一緒に寝る度胸もなく、客室のベッドにもぐりこんだが、紫の寝顔がちらついてなかなか眠れない。結局寝たのは明け方の日が差し始めた頃だった。

翌朝、というより昼。明け方近くに寝たため、俺が目覚めたのは12時を過ぎた頃だった。

しまった！紫もう帰っちゃったかな？俺がリビングに戻ると、昨日の痕跡は何一つなく、ただ一枚の紙が置かれていた。

『昨日はありがとうございました。楽しかったです。先輩の事忘れません。たぶん1週間ぐらいは……？』

おばあちゃんみたいな達筆な字は、間違いなく紫の文字だった。なんだこの別れの手紙は。しかも忘れないと言ったそばから1週間したら忘れるのか！しかし、それは紫からの絶縁状に思えた。嫌な予感がする。俺は紫の携帯に電話した。

『この電話はお客様のご希望によりお繋ぎできません』

ご希望により……って着信拒否！今まで電話して繋がらなかった事はしょっちゅうだったが、着信拒否は初めてだ。俺は焦りながら家を飛び出した。

紫の家まで駆けつけると、ちょうどアパートの前に止まっていた大きなトラックが、発車する所だった。引越し業者のトラック。誰か引越しなのか？まさか？

俺は慌てて田辺という表札の付いた部屋のインターホンを押した。しばらくしてお爺さんが出てきた時ほっとした。……ああ、さっきのトラック関係なかったか……。そう思ったのだが、なぜかお爺さんは真っ青な顔をしていた。

「榎木さん……紫が……」

「紫さんがどうしたんですか？」

「家を出ていった」

「思いすごしではなかった。あのトラックは紫のものだったのだ。こうして彼女は俺の前から姿を消した。」

搜索

「そうですか。柁木さんも行き先知らんのですか」

「幸吉さんも？」

お爺さんは肩を落として小さく頷いた。元々小柄な人だったが、もっと小さくなったようだ。

「家を出ていったってどういう事ですか？」

「わしもこの所、仕事と勝子の世話で忙しくて知らんかったんですが、もう昨日までにこっそり荷づくりは終わっていたようなんです。昨日は柁木さんとこ行くって言うから安心してたら、全然帰ってこんで、今日いきなり引越し業者が来て荷物持ってくつて。残ったのはこれだけですわ」

そう言ってお爺さんが差し出したのは封筒だった。紫の字で『おじいちゃんへ』と書かれている。了承を得て中を見るとこっ書かれていた。

おじいちゃんへ

今日私は家を出ます。直接挨拶もせずにごめんなさい。

でも今日は約束の日だから、今日から私の好きなように生きます。

私は一人でも元気で生活できますので心配しないでください。

おばあちゃんには心配させるといけないから黙っていてください。

すべてが終わったら、また帰ってきます

それまで何があっても私を信じて、おばあちゃんの事よろしくお願
いします

紫

「この約束の日というのは？」

「たぶん前にお話しした、バイトで体を壊した時にした約束ですな。10代は私達が保護者だから、親代わりの私達の言いつけを守る事。その代わり20歳になったら自由にしてい、という約束でした。まさか20歳になったその日に家出するとは思ってもよらんかったが」

本当に紫は人の予想をはるかに裏切る行動をする。

「引つ越し業者の人に引つ越し先とか教えてもらえなかったのですか？」

「紫に口止めされたみたいで教えてくれなかった。わしにはな、こんな時紫がどこに行くのかわからんです。わしらの家だけがあの子の居場所だと、高をくくっていたから……それが悔しくて悔しくてたまらんです」

涙も見せずに落ち込むお爺さんを見ているだけで、いたたまれなくなつた。この人達を置いて紫はどこにいったのだ。

「俺もできるだけ探してみます。何かわかつたら連絡するので、連絡先教えてもらえませんか？」

俺は急ぎ連絡先を交換して、田辺家を出た。時間がたてばたつほど手がかりは失われていく。それに紫が何か計画していてそれを実行しようとしているのなら、それを止めるべきなのかもしれない。

思い返せば昨日の紫の様子はおかしかった。家族の思い出に苦しんでいると思つたが、何かためらっていたのではないだろうか？行

動を起こすかどうか。紫は時間がない、遅すぎると言っていたではないか。

もつずっと前から今日行動を起こそうとしていたに違いない。

俺が知ってる紫の関係者。まず学校関係だと古谷教授と朝比奈。しかし古谷教授は連絡先を知らない。あの人は携帯嫌いで持っていないし、自宅の連絡先も知らない。朝比奈なら知っているか？と思いますまずは朝比奈に電話してみた。

『電波の届かない所か、電源が入っていないためかかりません』

肝心な時に……と思ったが、そう言えば今日はクリスマスイブで日曜日だ。絶対上条先輩とデート中に違いない。今無理に連絡とろうとすれば、馬に蹴られる前に朝比奈に殺されそうな気がする。

他に紫の関係者……。そうだ、担当編集の沢森ならどうだろう？俺は沢森に電話をした。

『どうしたんだい、柎木君。君から連絡って、田辺さん関係のよくない知らせかな？』

沢森に事情を話すと、沢森はとても驚いていた。

『それは絶対何かしでかす気だろう。だけど引越すとか何も聞いてないよ。ああ……嫌な予感しかない……私からも田辺さんに連絡とってみるよ』

『小松編集長っていう人にも、確認とってもらえませんか？』

『どついう事？』

『引つ越しなんて誰の協力もなく、田辺さん一人でできる事じゃないと思うんです。保証人とか色々あるでしょう。もしかしたら沢森さんの知らない所で、田辺さんと小松編集長が繋がってたり』

『考えたくもないが有りうるな。わかった、そつちも探ってみる』

お礼を言つて俺は電話を切った。後すぐに連絡とれそうで紫を知っている人物というところ……。葛城優吾だけだ。考えたくないが、彼が紫に協力しているとか？葛城の所へ紫が行ったとか？想像だけで考えていても仕方がない。俺は葛城に電話をかけた。

しかしこちらでも電源が入っていないようだった。イブの日に彼は何をしているのだろう……。

結局打つ手なく、その日は大人しく帰るしかなかった。

その後沢森から連絡があったが、沢森も着信拒否されて紫と連絡が取れなくなつたらしい。小松も紫と連絡が取れないと聞いて、明らかに動揺して早く探せと言っていたらしいので、まず紫と繋がってる事はなさそうだという事だった。

また葛城はクリスマスマスあたりから毎年年末年始は海外で過ごすため、連絡が取れなくなるらしい。その後何度かかけてみたが繋がらなかった。

朝比奈に連絡して相談してみたが帰ってきた返事は冷たかった。

「放っておけ」

「なんでですか！」

「本人の意思で計画的に家を出たなら、別にいいじゃないか。犯罪に巻き込まれたわけでないし。それにおまえ振られたんだろ。さっさと諦めろ」

それ以上話す気のない朝比奈は、二度と紫の話しに付き合ってくれなかった。朝比奈の言うとおり、これは無駄なあがきなのかもしれない。それでも俺はまだ紫を追い続けたかった。

俺と過ごした23日の夜、彼女は迷っていた。俺とともに行くかどうか。そこにわずかな希望を残して。

しかし年が明けても紫の行方を知る事はできなかった。

そして正月休みももう終わりの1月7日、また俺の知らない所で事件は起こった。電車に乗っていた時、ふと中づり広告の見出しに目が止まった。

『売れっ子イケメン作家葛城優吾。聖夜のお泊まり愛発覚』

『週刊 時代』というゴシップ記事ばかりの三流雑誌に、なぜあの葛城が話題になるのか？しかもお泊り愛？俺は慌てて途中下車して本屋に行った。

レジで買った後、本屋を出る時間も惜しく、歩きながら雑誌を開いたら、入口の前で人にぶつかって買ったばかりの雑誌を落とした。余所見をしていた俺が謝るべきなのに、俺はただ茫然と立ち尽くした。

葛城優吾の記事に一番大きく掲載された写真には、紫の肩を抱いて葛城がマンションらしき所へ入っていく姿が映っていた。二人の

顔はしっかりと映っていて見間違えのないほど……。

交錯

三流ゴシップの記事なんて信じられない……。そうは思うものの、読まずにはいられない。

記事には12月24日の夜、葛城と紫の二人は都内のホテルでデイナーをした後、紫のマンションへ二人で入っていったと書かれている。

そのままお泊り？とここからは憶測でしかないが、少なくとも写真がある限り、二人がマンションに入った事は間違いなさそうだ。

問題は二人が紫のマンションに入った事になっている事だ。紫は23日にお爺さん達と一緒に住んでいたアパートを出て行って俺の家に来た。その後いつまでいたかはわからないが、アパートには帰らずに、引越し先のマンションに行ったのだろう。

そんな引越したばかりの部屋に、なぜ葛城と行ったのか？

当事者である二人に確認できれば一番だが、あいかわらず紫にも葛城にも電話はつながらない。しかたなく沢森に連絡してみた。

『榎木君もあの記事読んだのか？』

『はい。葛城さんと連絡とれないんですが』

『ああ。まだ海外から帰ってないようだ。後から確認してみたら、先生は25日の夕方の便で出国したようで、24日はまだ日本にいたようだ』

『じゃあ、あの記事は全くのでたらめではないわけですね』

『何を言ってるんだ。葛城先生は軽率な事をする方じゃない。これ

は何かの間違いだ』

『でも葛城さんが田辺さんを女性として意識してるのは間違いないですよ。クリスマスイブで、しかも彼女の誕生日と一緒にいるなんて、何か特別な関係としか……』

『12月24日が田辺さんの誕生日？それは知らなかった……。とにかく私は葛城先生となんとか連絡とってみる。連絡できたら、榎木君にも報告するよ。君は田辺さんの方を何か探ってくれないか？』
『俺は……もうたぶん無理だと思います……』

『そんな簡単に諦めるのか？あれだけひどい事言われても付きまわつてた君らしくないな。とにかく頼んだよ』

沢森に俺らしくないと言われた。俺らしいってなんだ？こっぴどく振られたあげくに、他の男と親しくしているのを全国紙レベルで知らされて、まだ諦めるなというのか？

でもまだ信じられない。人を信用できない紫が葛城を信じたのだらうか？なぜ俺ではなく葛城だったのか？それがはつきりしない事には、どこにも進めない。

冬休み明けの1月9日。大学にいつも通りに紫が大学にやってきた。しかし予想以上に学生達の反応はすごかった。夏休み明けの作家デビューのニュースの時も、紫は人に囲まれていたが、和やかで愛想笑いをふりまく余裕があった。

しかし今回は興味本位に記事の真相を知りたがる学生達に、紫は徹底的に無視をして話しかけられても眉ひとつ動かさない。

紫に親しげに話しかけたが、冷たくあしらわれた軽いヤツが文句

を言った。

「なんだよ。田辺のヤツ。作家とかいって有名になったから言い気になって、友達が話しかけてるのに返事もしないなんて、お高くとまってるな」

「誰が誰の友達だつて？」

俺は無責任な『自称紫の友人』に食ってかかってしまった。彼女がいじめられた時、誰一人助けようとしなかったのに、作家になったからって今更友人だと言い始めるなんて、ずうずうしいにもほどがある。

紫の友人になるのがどれだけ大変だと思っているんだ！いきなり切れた俺に驚いて、そいつはさっさと退散した。

しかし今日紫に近づくような人間は、同じ様なやつばかりで、以前から多少紫と交流のあった人間は、遠巻きに見ているだけだった。あの日、テニスコートで鈴木にセクハラを受けてた時と同じ。それなりに親しいけれど、特別仲がいいわけでもない。そんな距離感だから、皆変に遠慮している。

誰も信じない。友達なんかいらぬ。紫はそう言ったけど、俺はやっぱり今の一人だけの状態が許せなかった。

結局その日は俺も紫を遠巻きに見ることしかできなかった。一度確実に紫の視界に入っていたはずなのに、明らかに無視されて、彼女は本当に俺の手の届かない存在になったのだと痛感した。

明日こそはと固く誓ったが、そのチャンスは訪れなかった。

翌日から紫を大学で見かける事はなくなったのだ。

「今回は特例措置という事になったんですよ」

そう古谷教授が教えてくれた。なんでもあの記事のせいで、紫の周りが騒がしくなりすぎて、授業にならず他の生徒から苦情が相次いだそうだ。

元々授業は1月だけで、2月頭に試験があるだけだったので、緊急措置として1月の授業は大学に通わず、レポート提出のみで単位を認定。試験は他の生徒が春休みに入って落ち着いてからとなっらしい。

「それで、柁木君は卒論どうになりましたか？」

「今日はありがとうございます。失礼します」

紫の事で色々あって、卒論が終わってなかった俺は一目散に古谷教授から逃げ出した。朝比奈と連絡がとればよかったのだが、なぜか冬休み中もその後も朝比奈と連絡が取れなくなった。

週末に沢森から連絡があり、15日に葛城が帰国するので、一緒に話をしようと誘われた。どうやら葛城は日本でのこの騒ぎをまったく知らなかったらしい。

あの男がどう言い訳するのか？聞きたい様な、聞きたくないような複雑な気分だった。

衝撃

マスコミの目をかいくぐり、葛城の家で会う事になった。セキユリテイのしつかりした高級マンション。さすが売れっ子作家なだけある。

葛城の顔を見たら、殴ってしまいそうぐらい腹が立っていたが、実際あつたらそれ所ではなかった。元々迫力ある顔だったが、凄味が増してかなりの強面になつてる。無表情なのに目だけ鋭い。ちょっとひるむぐらいに怖い。

俺はこっそり沢森に耳打ちした。

「葛城さん怒ってるんですか？」

「いや、たぶん悩んでるとか落ち込んでるとかそういう顔だと思う。初めて会った時の大スランプ中の時こんな顔だった。正直びびるよね」

ソファの置かれたリビングに俺と沢森が並んで、向かいに葛城が座っていた。無言で視線はやや下向き加減で睨むような表情のまま葛城は固まっている。

話かけづらいのだが、葛城からあの日の事を聞かなくては始まらない。

「先生。24日何があつたんですか？田辺さんとはどんな？」

「申し訳ない。私の軽率な行動で、私ばかりでなく、田辺さんの名誉まで傷つけてしまった」

「軽率な行動ってどういう事ですか？田辺さんに何をしたんですか？」

「誤解しないでほしい。軽率な行動というのは疑われるような行動をしたという意味で、何も後ろめたい事はしていない。誓ってもいい」

葛城の真剣で鋭い声に、俺は怒りを抑えて話を促した。

「きっかけは去年の4月の終わり頃、4年ぶりに再会したあの対談の時だった。対談の取材が終わった後、雑談をしていたら誕生日の話になって、12月24日が誕生日だと聞いたんだ。誕生日にはお祝いをすると言ったら、喜ばれてその時連絡先を交換した。だけどその後田辺さんからは連絡もなく、社交辞令だと思っていた」

葛城の低い低音でゆっくりと語られる言葉は重みがあつて、俺の言葉にずしりと響いた。まだ紫の作家デビューとか何も知らずに、能天気にな彼女の隣にいた頃、あの頃にはもうこの男と紫の間にそういうやり取りがあつたのだ。

俺が連絡先知るのにどれだけ努力した事か。それに比べて葛城は当たり前のように、紫と連絡先交換して……。まあ正体はしらなくても知り合つてからの期間は葛城の方が長いのだが。

「去年の11月頃、急に田辺さんから連絡があつた。誕生日のお祝いの事覚えてるか？と聞かれた。いつもは家族で祝っているのだが、今年は家庭の事情でそれもできそうにない。できれば私に当日一緒に祝つてほしいと言われたんだ」

家庭の事情というのは、お婆さんの事だろう。しかしだからといって、紫から積極的に葛城に頼むなんて、俺は信じられなかった。

「20歳の誕生日だから、大人の人にお酒が美味しい所につれてって欲しい、保護者としてでもいいからと言われて、彼女が可哀そう

になったんです。誕生日に自分から誰かに祝ってほしいと言っしかなかった彼女が」

「それで24日にホテルのレストランに？」

「クリスマスイブでどこも予約が多くて。せつかくの誕生日だからちゃんとした所で祝ってあげたかった。そのホテルは執筆で缶詰めになる時によく利用してて、少し無理が言えたから何とか予約が取れて」

紫を24日に誘っても駄目だったのは、葛城との先約があったからなのか。それとも初めから俺は相手にされてなかったのか？

彼女が消えた24日。俺が彼女を探しまわる中、葛城と紫はホテルのレストランで過ごしていた。しかも彼女からそれを望んだのだ。その事実には絶望するしかなかった。

俺が言葉を失っている間に、沢森が代わりに葛城に質問した。

「それでどうして田辺さんのマンションに行くような事に？」

「レストランで食事中、彼女が引越しをしたという話になって。今までの住所では郵便物は届かなくなるからと、新しい住所を聞いたんです。それからお祝いにお酒を開けて、そう彼女のリクエストでロゼのドンペリニヨンだった」

俺がその前日紫と飲んだシャンパン。なぜそこでその酒を選んだんだ？酒を知らない彼女の知っている唯一の酒だったから？それとも俺と過ごした夜を、その時はまだ覚えてくれたのか？

「ただ……その……田辺さんがあそこまでお酒に弱いとは思わなかったんです。グラス1杯をゆっくり飲んだのに、酔ってしまっ、とても一人では帰れなさそうでした」

「それで田辺さんを家まで送り届けた？聞いていた住所を頼りに？」
「そうです。まともに歩けそうになかったから、部屋まで送り届けて、部屋に上がらずにすぐに帰ったんです。本当にそれ以上の事は何もしていない」

葛城の言葉をそのまま信じるなら、好きな女性とのデートというより、可哀想な女の子への同情だろう。

しかし葛城は紫に好意を持っているのだ。単なる同情だけとは思えなかった。そこにまったく下心がなかったと言えるだろうか？

「先生。それが事実なら、やましい事はないのですから、堂々とマスコミに公表しましょう。ただ誕生日の祝いをしただけで、特別な関係ではないし、何もやましい事はないと」

「果たしてそれで世間は納得してくれるのでしょうか？」

「確かに面白おかしくでつちあげるようなマスコミもいるでしょう。しかしこのまま黙ったままにいるのは、田辺さん以上に葛城先生のイメージダウンです」

「私の事はいいんです。ただ田辺さんが無責任な報道でどれほど傷ついているかと、それだけが心配で」

葛城の紫を想う真剣な気持ちに俺達は何も言えなくなった。

紫は今は20歳になったので未成年淫行とは言われなくてもいいが、この報道を見た人間は以前から二人は深い仲だったと思うに違いない。

そうなったらやはり葛城は未成年に手を出した男として、世間からの風当たりは強くなるだろう。

しかし自分の保身より紫の事を想う純粋な心に、この男もまた本気で彼女を好きなのだとその想いの強さを思い知らされた。

どうしたものと頭を悩ませていた所で、沢森の携帯が鳴った。

「失礼します。会社から何か連絡のようです」

そう断って沢森は電話に出た。

「どうした？テレビ？なぜ今？……わかった。すみません葛城先生。テレビをお借りしてもいいですか？」

「どうぞ」

そう言って葛城はテレビのリモコンを渡した。テレビをつけるとちょうど昼のワイドショーがやっていて、何か記者会見のようだった。

テレビ画面に映し出されたテロップには、こう書かれていた。

『田辺紫、緊急記者会見。葛城優吾との仲は？重大報告とは？』

テレビのリポーターがテロップと同じような事を繰り返して言うていた。

「こちらの対応が遅れている間に、田辺さんが先手を打ってきたか。さすが彼女しっかりしてるな」

沢森がのんきに感心していたが、俺は嫌な予感しかしなかった。

テレビ画面に移る紫の顔には、悪魔の様な微笑みを浮かべている。何か企んでいる顔だ。

その後始まった記者会見は、俺達三人を凍りつかせるような衝撃

的な内容だった。

悪意

記者達に取り囲まれ、しきりにフラッシュがたかれる中で、雰囲気のにまれる事なく紫は悠然と微笑んだ。

記者の質問に答えるという形式で会見は始まった。

『田辺さん。葛城さんとはどういう関係ですか？』

『どういう関係でしょう？葛城先生が私の事をどう思っているのかはわかりませんが、私は葛城先生を作家として、一人の男性として好意を持っています』

紫の発言に記者達は大きくどよめき、それを見ていた俺達3人は凍りついた。紫が葛城を好きだとテレビ中継を利用して公開告白したのだ。

紫と葛城の関係にやましい事はないと、弁解すると思っていたのにまったく反対の回答だ。

『それではクリスマスイブのデート報道は真実なんですか？』

『確かにその日葛城先生とデートしました。どこまでの関係かは皆さんのご想像におまかせします』

思わせぶりな話し方は、まるで二人がすでに深い中であるような誤解の与え方だ。葛城の言ってる事と、紫のこの回答が食い違っている。どちらを信じるかと言えば、紫を信じたいが、腹黒な彼女が真実を言っている自信はまったくなかった。

紫の発言を信じられない事を聞いたように、茫然としている葛城の方が誠実で説得力があった。

『あまり時間がありませんので、このあたりで質問は終わらせてい

たきます』

会見をしきる人間のこの発言に、記者達は皆不満の声を上げた。まだたつた二つの質問にしか回答されていない。しかも先が気になるような話をされたばかりだ。

『皆様のご質問にお答えできずにすみません。しかし私と葛城先生の関係は短い時間にお話しするのは難しいのです。続きは来週23日に庚洋社から発売されます私の新刊『初蕾』をご覧ください。今日は皆さま、お忙しい中お時間いただきありがとうございます』
『それでは会見を終わらせていただきます』

そこで紫の会見は終わり、ワイドショーのスタジオでコメントーター達の、無責任なコメントに変わった。

「なんだ！このふざけた会見は！何考えてるんだ、この女は！」

真つ先に声を上げたのは沢森だった。葛城の前だという事も忘れて、怒りをあらわに声を荒げた。

「これは……何かの、間違いですよね……？田辺さんが私に好意を持ってるだなんて？」

葛城は喜んでもいい事なのに、あまりの突然の展開についていけない。俺はそんな二人を見ながら、紫の真意を考えていた。今のテレビでの会見、今までの行動と計画と紫の性格などから、無言で思考し続けた。

紫が公共の電波を使って、わざわざ発言したのには絶対理由がある。本心を言ってるとは思えない。

俺はずっと考え続けてある結論にたどり着いた。わかったとたんに低い笑い声が込み上げてきた。

「何を笑ってるんだ柁木君。今はそんな場合じゃあないだろう」「……すみません。田辺さんに踊らされる俺達やマスコミが、あまりに愚かで滑稽で……。あまりに怒りが強すぎると、人間笑えるものなんですわ……」

そう、俺は今人生最高に不機嫌で腹立たしかった。

「どういう事ですか？何かわかったのですか？」

葛城が身を乗り出すように答えを求めた。彼に俺の考えを聞かせるのは正直つらい。一番の被害者は葛城なのだから。しかも俺よりも紫の腹黒に対する耐性はないだろう。

「田辺さんの狙いがわかりました。これはただの売名行為です。葛城さんは彼女に利用されたんですよ。沢森さんもかな」

「どういう事だ？」

「来週出る紫の新刊『初蕾』は庚洋社ですよ。7日にスクープ記事を書いた『週刊 時代』の出版社も庚洋社。おそらく紫は庚洋社と組んでスクープを作り出した。つまり葛城先生はめられたんですよ」

「本気で言ってるのか？彼女がそんな事するわけない！柁木君も田辺さんの事が好きなのはさだらう。なぜ彼女の事をそんな貶めるような事を言えるんだ」

「葛城先生は知らないだけです。田辺さんの性格の悪さを。沢森さんならわかるでしょう?」

話を振られた沢森は青ざめた顔で言った。

「確かに彼女ならやりかねない。そうなるどころから彼女の計画だ?書籍化も小松編集長の策略だと思っていたが、もしかして彼女の方から持ちかけたのか?」

「たぶんそうでしょうね……。俺は連載開始も彼女の計画だと思います。『紫』という名のストーリーカー的ファンだって彼女の自作自演かもしれない」

「初めから、私達は騙されていたという事か……。ああ、だから彼女と仕事なんかしたくなかったんだ。なんで油断してたんだか、自分が嫌になる」

俺と沢森のやり取りを聞いても、まだ葛城は俺の話の信じていないようだった。それとも信じたくないのか。

「葛城さん。冷静に考えてください。24日にマンションに2人に入る所を、週刊誌に写真とられてますよね。普通ああいいうスクープは、マンション前に何日も張り込んでチャンスを待つものじゃないですか?」

「そうですね……」

「でもあのマンションに紫が引っ越したのは、12月24日なんです。引っ越す事を家族も知らなかったのに、その引っ越し当日に嗅ぎ付けて、スクープ写真なんて常識で考えてありえないですよ。田辺さんの協力がなにかぎり」

「……」

「12月24日に葛城先生とデートに見せかける口実を自分から作り、酔った振りして送らせて写真を撮らせる。そしてマスコミを煽って期待を持たせて、事前に発売予定だった書籍の宣伝をする。それが彼女の計画だった。じゃなきゃこんなタイミング良く本なんてだせるわけがない」

葛城ももはや紫を庇う言葉を失って、力なくうなだれた。青ざめた顔の沢森は怒りに肩を震わせて言った。

「葛城先生の著作『初花』に便乗して、『初蕾』なんてタイトルつけたわけだ。ふざけたまねしてくるな……。葛城優吾のスキャンダルと暴露本の話題性だけで本を売る気だな……」

「内容は発売してみなければわかりませんが、まず世間からは暴露本だと思われるでしょうね。庚洋社もその本の売り上げ目当てに紫に協力したのでしょうか。たぶん、マンションの契約とかそういう事も」

葛城が弱々しく立ちあがってよろめいた。

「先生！」

「少し一人で考えさせてもらえませんか……すべてが信じられなくて」

顔を片手で覆って葛城はそう言った。わずかに涙の混じるその声は、心の底から悲しみを引きずり出したような悲痛な響きがした。葛城はそのままリビングからゆっくりと自分の部屋へ向かった。その後ろ姿を見て、ますます紫の怒りがましてきた。

葛城は何も悪くない。純粹に一途に紫を想っただけ。しかも自分

の想いが叶う事も諦めて。そんな人間を騙して利用して、金儲けの道具にするなんて……。

紫がいくら腹黒でも、やっていい事と悪い事の区別ぐらいについていると思っていた。本当は人を思いやれる優しい女の子だと。

俺も葛城と同じ様に、紫に自分の願望を押しつけて幻想の中の彼女に恋していただけなのか？裏切られたような気持ちがある。悲しみと怒りが混ざったドロドロとした感情に引きずられて、俺もどうになっちゃってしまいそうだ。

あんなに好きだったはずの紫と言う人間に俺は今失望していた。

決別

ワイドショーで会見を行った日から、田辺紫の名は日本中に知れ渡った。

葛城との仲を興味本位で面白おかしく推測する人間もいた。しかしまだ20歳の若さで堂々と会見をし、しかも自分の著作の宣伝までする。そこに彼女の事を知らない人間でも、どこか胡散臭さを感じたようだ。

マスコミの非難は紫に集中した。

ワイドショーのコメンテーターの中にも、著作を売るための売名行為だと気付く人間もいた。世間の目は紫を責め、葛城に同情的だった。

葛城はショックから中々立ち直れないようで、俺や沢森からの連絡にも出ないで、家に閉じこもったまま、マスコミに弁明する気力もないようだ。

葛城が沈黙したまま、紫サイドからのわざとらしい、二人の親しげなアピールは続いた。

マスコミがこの一件を取り上げるのを見るたびに、こみあげてくる不快感が気持ち悪い。紫の悪意も、それをネタに騒ぎたてるマスコミも、それを見て楽しむ人々も、すべてが嫌になる。

俺自身がどれほど紫に傷つけられようと、すぐに立ち直る事はできた。しかし彼女が他の人間を傷つけ苦しめ、これだけ大事にしまった事は簡単に飲みこめるものではない。

俺はろくに夜も眠れず、あの会見の日から数日を過ごしていた。

週明けの月曜日21日。沢森から連絡が入った。紫の住んでいる

マンションの住所がわかったという事だ。これだけマスコミに注目されたため、紫のプライベートにもマスコミの人間が張り付き、その家がどこにあるのかも特定されたという事らしい。

しかしマスコミ関係者に知られてしまったがため、マンション周辺は取材の人間で騒がしく、紫も自宅でマスコミを相手にしないように無視しているため、住所がわかってもし沢森達もまったく接触できないそうだ。

紫の著作『初蕾』の発売まであと2日。著作が発売されれば、ますます報道が過熱して近づきにくくなるのは目に見えていた。もし会うなら明日までだ。

紫の本を売るための売名行為という、俺の推測が間違っているとは思わない。それでもまだ推測だ。紫に会って、直接確認したかった。

「榎木君も困った物ですね……」

古谷教授はいつもの穏やかな笑顔を曇らせて、ため息をついた。今まで卒論の事で逃げ回ってばかりいたが、今回は古谷教授の協力がなければどうにもならない。

「お願いします。田辺さんに会うチャンスが欲しいんです。このままじゃ勉強も手に付きません」

「会ってどうするんですか？」

「聞きます。なぜ今回のような事をしたのか、理由を聞きたいんです」

「田辺さんが正直に話すとはかぎりませんよ」

「その時はその時です。この場で俺に嘘をついてごまかすようなら、きっぱり諦めます」

「わかりました。この課題は柁木君に届けてもらいましょう。先週分のレポートも受け取ってきてください」

「ありがとうございます」

そこで古谷教授は立ちあがって俺を見降ろした。背筋をのばし顔は前を向いた状態で、視線だけ俺に向けている。その威厳のあるたずまいに、思わず居住まいを正して聞いた。

「人を信じる事は難しい。特に田辺さんのように人を信じられない人の、心を開かせる事はもっと難しい。でも諦めてはいけませんよ。諦めたらそこで終わります。最後の最後まであがきなさい」

古谷教授の言葉が俺にずしりとのしかかった。俺は今紫を諦めるために会いに行こうとしていた。しかし先生は諦めるなどというのだろうか？この絶望的な状況で。

マスコミが取り囲むマンション前を通り越し、オートロックの前までやってきた。部屋番号を押しして少し待つ。紫の声が応答した。

『はい。田辺です』

『田辺さん？俺だよ。古谷教授に頼まれて、課題持ってきた』

『……ポストに入れておいてもらえませんか？』

『先週分のレポートを受け取ってくるように言われてるんだけど』

『……わかりました』

少ししてオートロックの扉が開いた。俺は彼女の部屋に向かった。

ドアが開いて久しぶりに見た彼女の顔は、青ざめて替えているように見えた。当然かもしれない。日々マスコミにつけ狙われ、テレビでは売名行為を責め立てられ暮らす日々。マスコミの前では余裕の笑顔を作れても、日常までその余裕はないだろう。

しかし紫はその疲労も隠すように、すぐに愛想笑いの仮面をかぶった。

「本当にしつこい男。まだ私の事つけまわす気ですか？」

「確認したい事がある。それがわかっただらすぐ帰るよ」

紫は無言で部屋の中に俺を招き入れた。

部屋の中は広々としていた。広々としすぎていた。彼女の部屋は、元は5帖の和室だった。あの時も物が少なく殺風景だったが、それよりも広い部屋になったせいでより殺風景になった。

あの部屋で見かけなかったものは小さな折りたたみのテーブルと床にしかれたカーペットくらい。それ以外何も買っ足していないのだろう。

紫は無言でキッチンからお茶を入れて戻ってきた。紅茶ではなくほうじ茶。その温かいお茶を紫の向かいに座って飲んだ。なにかから切りだそうかとためらっていると、紫の方から話し始めた。

「お人よしのあなたの事だから、葛城さんの事で怒って私にどなりこみにきたんですか？」

「そういう答えが返ってくるって事は、やっぱり葛城さんを計画的

に利用したんだね」

「そうですね。やっぱり気付きましたか」

「何のために？」

「決まってるじゃないですか。本がたくさん売ればお金がたくさん入ってきますから。一人で一生生きていくのに、お金があればあるほどいいですからね」

俺は紫が女の子じゃなければ、今殴っていたかもしれない。紫の態度はわざと俺を怒らせてるんじゃないかというほどふてぶてしい。

「見損なつたよ」

「私は元からこういう人間ですよ。お金を稼ぐため、自分の利益のために、あなたを何度も利用した事忘れたんですか？」

「覚えてるよ。でもどれもたいした事じゃなかった。それに俺も君に嫌われながらしつこく付きまとって嫌な思いをさせた。でも葛城さんは違う。何も君を傷つけるような事はしていない。君をただ純粹に想っただけで」

「それが迷惑なんです。気持ち悪い。今回の事である人も懲りてもう二度と私に近づかないでしょうね。あなたもわかってくれるなら嬉しいですが」

「ああ。理由がわかってすっきりした。おかげで心底君が嫌いになれたよ。もう田辺さんの事は忘れる」

俺の言葉にわずかに紫は顔を歪めた。それは苦しさや悲しさだったと思う。しかしすぐに彼女は表情を変え、笑顔になった。

「ああよかった。これで変態ストーカーからも解放されます」
「君の望み通り、これからは一人だ。誰もいない世界で生きていけばいい」

俺は紫からレポートを受け取ると逃げるように家を出た。一度も振り返る事なく、ただ悲しくて涙がこぼれた。

彼女と過ごした2年近い日々は、楽しかったはずなのに、今は苦くただ苦しいだけの思い出だった。

去年の正月に湯島天神に行った時、彼女が言った言葉を思い出した。

「私が道真みたいに遠くへ行っても、先輩は覚えていてくれますか？」

あの時忘れないと誓ったが、たった一年でその約束を破る事になるとは思わなかった。それともあの時彼女の計画はもう進行中で、こうなる事がわかっていたからあんな事を言ったのか？

もう何も考えたくない。忘れてしまおう。この胸の痛みとともに、紫の存在すべてを。

離別

紫の事を考えなくなかったが、翌日には『初蕾』が発売され、また『田辺紫』が注目されていた。しかもマスコミの騒ぎ方から、葛城との仲を暴露する内容ではなかったようだ。

俺も結局発売日を買った。本の帯には『今、一番会いたい人がいる』と言う思わせぶりな言葉が大きく書かれている。

『初蕾』は『田辺紫』の回想録だった。両親の借金問題で家庭崩壊した過去。そこから人を信じられなくなった過程。

葛城との出会いや手紙のやり取りで心を開きかけるも、信じ切れずに苦悩する姿。大衆が目にする本で、どこまで彼女が本音を語っているのかはわからない。しかし俺の信じていた紫の姿がそこにはあった。

そして本の最後には行方知れずの良心の安否を気遣い、生きていけるなら帰ってきてほしいという願いが書かれていた。

『今、一番会いたい人がいる』というキャッチコピーは葛城ではなく、両親の事だったのかとわかった。

紫がこの本を売る事に固執した理由がわかる。多くの人間に読んでもらい、その中で両親に紫の気持ち伝わる事を祈っている。

どこにいてもわからない両親を探しに行くより、自分が目立つ所において呼びかけようとしているのだ。

金のためだと言った彼女の言葉は嘘だった。それは俺や葛城を切り捨て、孤独になるための。もしこんなことを知ってしまったら俺達が苦しむと思ったんじゃないか、という彼女なりの気遣いだった。

のだろうか？

例えどんな理由があつたとしても、葛城を利用し、売名行為を行ったのは事実だ。しかし理由がこんな理由では同情心が湧いてしまふ。彼女への未練がどうしても断ち切れなくなつてしまふ。

俺は紫を忘れると決めたはずなのに、この本を読んでさらに迷つてしまつた。彼女への想いがまだ俺の中でくすぶっていたようだ。数日後沢森から連絡があつた。

『葛城先生、『初蕾』を読んで少し立ち直つたみたいだ。優しい方だから彼女の境遇に同情したんだろう』
『そうですか。よかつたです』

『私は同情する気ないけどな。本当に『源氏の徒然日記』の印税を渡すなつて言いたいくらいだ』

『『源氏の徒然日記』の印税ってまだ田辺さんにわたつてないんですか？発売したの去年の夏ですけど』

『本の印税って作家にわたるの遅いんだよ。どれだけ売れたかある程度確定してからだから』

『じゃあ今まで中沢出版から田辺さんに支払われた金額ってどれくらいなんですか？』

『連載の時の原稿料は、新人だしひと月2〜3万つて所ぐらいかな。書籍化にあつて契約料とかなかつたし』

それでは紫の手に入った額は50万もないだろう。引越しゃお婆さんの治療費をだしたりとても出来る額じゃない。

『本を出す時、出版前に事前にお金もらったりできる場合あるんですか？』

『よっぽど売れる見込みがあれば、契約料という事で事前に払われるかもしれないね』

俺はそこで一つの可能性に思い当った。紫はお婆さんの治療費を捻出するために、『初蓄』の出版を決意したのではないだろうか？

俺は幸吉さんに治療費の額や、お婆さんの倒れた時期を確認した。するとやはり原稿料だけでは足りる額ではなく、倒れた時期も昨年の4月中旬だったそうだ。葛城が対談で紫に会ったのはその直後だ。契約料をもらうにはある程度売れる見込みが必要だ。そのために葛城を利用した。

確かに金のためにあの本を書いたともいえる。しかしそれは追いつめられたがゆえの行動だったのか。

しかし『源氏の徒然日記』の連載や書籍化はその前から決まっていた。彼女の計画はその前から始まっていたはずだ。では、お婆さんが倒れた事で計画を変更した？

紫に聞いてみたいと思った。しかしあれほどきっぱりと決別したばかりに、会いに行く事は躊躇われた。

俺が迷っている内に、時間は過ぎて行った。そして2月1日の明け方、紫から突然の連絡が訪れた。携帯の着信表示を見た時間違いではないかと疑った。しかし確かに紫からの電話だった。

『どうしたの？田辺さん』

『先輩。聞きたい事があるんです』

紫のその声は、変に浮かれているような、呂律が回っていないような、おかしいものだった。もしかして酔ってる？酔っぱらって勢いで俺に電話してきたとか？

『永遠の輝きってなんですか？』

『は？何言ってるの？』

『9文字なんですけど』

『エンゲージリングとか？』

『ああそうか……。英語なんですね。』こんやくゆびわ』だと文字あわないなと思ったんですよ。やっと解けたクロスワードパズル』

クロスワードパズルの答えが聞きたいがために、わざわざ電話してきたというのか？この前あれだけ怒って、絶縁状を叩きつけられた相手に？信じられずに呆れてしまった。

『でもバカですよ。この世に永遠なんてあるわけがないのに。それを形にして相手を縛りつけようなんて』

『目に見えないものだから形が欲しいんじゃないかな？』

『そうですね。目に見えないからわかりやすい形が欲しくなる。家族なら安心なんて保障どこにもないのに……。』

浮かれたような声から一転、彼女の声が涙交じりの弱々しいものになった。このめまぐるしい情緒不安定さはおかしい。何かあったのか？

『田辺さん。どうしたの？何かあったの？』

『……。父から連絡がありました。両親とも生きてはいたみたいです

ね

皮肉げな話し方は、感動の再会とはいかなかったようだ。何かあったのか？しかし深く聞いて追いつめてはいけないような、危うさが今の紫にはあった。

『話したくないなら無理に話さなくても……』

『先輩。以前私言いましたよね。家族以外の人間なんて信用できないって。今思えば甘かったなって思います。家族だからって信用できるわけなかったんです』

紫の声が一度途絶えて、重い沈黙が訪れた。電話越しに聞こえる紫の呼吸は、震えていてすすり泣いているようにも聞こえた。言葉こそいつももの紫らしい毒のあるものだが、それもやけになって強がっているだけの様に聞こえる。

今紫を一人にしておく事は非常にまずい気がした。

『田辺さん。今どこにいるの？家？今からそこに行くから待ってて……』

『この世に信用できる人間なんて存在しません』

彼女は暗い声でそう言うのと電話を一方的に切った。俺はすぐにかけなおそうとしたが、紫の電話は電源が切られたようでつながらなかった。

俺は夢中で家を駆けだした。始発が走り始めたまだ薄暗い中。今の時間なら車が一番早い。制限時速ぎりぎりの速度でとばして、紫のマンションについた。

オートロックの前で何度もチャイムを鳴らしたが、応答はなく家

の中にまだいるのかわからなかった。

管理人室に管理人がいたので、慌てて駆け込む。

「すみません。田辺紫さんの友人なんですけど、さっき電話の途中で様子がおかしくなって、心配で見にきたんですが、部屋に入れてもらう事できませんか？」

「田辺さんは昨日の晩から帰ってきてませんよ」

では先ほどの電話はどこからかけてきたのか？紫は今どこにいるのか？

その後沢森に協力してもらって搜索したが、手がかり一つ残されていなかった。沢森から庚洋社にも連絡を取ってもらったが、庚洋社もまた紫と連絡が取れなくなって困っていたようだ。

こうして田辺紫は突然失踪した。彼女が思いつめて、早まったことをしていないように、祈るばかりだ。

第8部終了

離別（後書き）

続きが気になる所でこの章は終わります

次は上条彩花編2となり、その後この話の続きになります
お待たせしてすみません

子守唄（前書き）

第7章最終話の続きです

お忘れの方は「嘘の皮が剥がされる」をご覧ください

子守唄

話は第2回上条彩花認定蟹祭り（朝比奈の誕生日）の続きから始まる。

振り上げたこぶしを下ろして、さあ久しぶりのどつき漫才も終わり。また定位置の向かいの席に戻ろうと立ち上がるうとした。すると朝比奈が私の袖を掴んで引きとめる。

その仕草にドキツとした。すぐに名残惜しげに手を離す朝比奈。さっきまで友達でいられたのに、こんな風に急にドキツとさせられると男だと意識してしまう。

隣にいてほしいわけ？甘えられてる？今日はこの男の誕生日なわけで、しかもなんだかお疲れ気味な感じだ。

お疲れ様という気持ちもこめて、渋々私は朝比奈の隣に座りなおした。

ちよつとだけスペース開けたけどね。だってすぐ隣でくつつくのなんか変じゃない。

食事が終わると、満腹になったせいかわ朝比奈のあくびが目立ってきた。疲れた顔してるし、あんま寝てないのかな？

私がつまみを食べながら、ちびちび熱燗飲みつつ、横目で朝比奈を観察していると、朝比奈は眠そうに眼鏡を外して目をこすった。

朝比奈が眼鏡外すの見たことあったっけ？

この男は昼寝中でも外さない。本当に眼鏡が顔の一部ってぐらいに、眼鏡なしなんてありえない。

そんな貴重な眼鏡なし姿に思わず見入った。

あつ、意外に睫長かった。眼鏡だと大人しく真面目な印象だけど、素颜だと意外に可愛い顔してるかも……。特に眠そうに目をトロンとさせてる表情が子供みたいでいいな……。

何考えてる私！眼鏡外した素颜に、ドキドキするなんて、マンガか自分。

私は決して眼鏡男子好きなわけではなく、どちらかという健康的なマツチヨ系な方がかつこいいなと思う方だったはず。

上條彩花しつかりしろ。これは何かの気の迷い。

「上條どうしたの？」

「ううん。眼鏡外してるの珍しいなと思って」

「眼鏡なしだと全然見えないからね。この距離でも、上條の顔ぼんやりとしかわからない」

すぐ隣に座ってるのに見えないのか。目がいい私にはわからない世界だ。

「どれくらい見えないのかっていうと……」

そう言って朝比奈は急に顔を近づけてきた。このままくっついちゃうんじゃないかと慌てる。

顔と顔の間10cmという至近距離で朝比奈は止まって笑った。素颜の朝比奈の笑顔はいつもより素直で無邪気に見える。

「ああ。やっと上條の顔見えた」

こんな至近距離でそんな顔して笑うな！顔赤くなってるのバレるじゃない！

「顔近すぎ！」

私は思わず朝比奈を突き飛ばしてた。ついでに肘鉄も入ってたと思う。朝比奈が後ろに倒れてうめいてた。

またやりすぎた。しかし眼鏡外しギャップ萌とか、至近距離とか、これが朝比奈のたらしテクか？

恐るべし。恋愛音痴の私がペースに乗せられる所だった。

「うわ！どうしよう？」

朝比奈が眼鏡を至近距離でじっと見て困った顔をした。

「どうしたの？」

「今の弾みで眼鏡のつるが曲がった」

確かによく見ると少し歪んでる。

「これ買い換え時かな……」

ため息をつきながら名残惜しげに眼鏡をさする朝比奈。眼鏡愛か？

「ごめん」

「ん。大丈夫。明日予定ないから眼鏡買いに行く。そろそろ度が合わなくなってきたなと思ってたし」

明日予定なし。それを聞いて思わず嬉しくなった。
実は明日誕生日のサプライズを用意してたのだ。

「じゃあ明日一緒に眼鏡買いに行こう。あんたその目じゃ、一人でまともにたどり着けそうにないし」

「ああ。大丈夫だよ。古くて度はあつてないけど予備あるから」

そう言って、手探りで自分のバックを探し始める。

「あつた、でも度があつてないから見にくいな」

朝比奈がかけたのは、さっきかけてたのとそう変わらないデザイン
の眼鏡。この男、同じデザインのばかりわざわざ揃えてるのか？

「いいから私もついてく。夜まで私につきあいなさい。夕飯奢つてあげるから」

「またいつもの新橋ガード下の行き着け？」

「なんでクリスマススイブにそんな所行かなきゃいけないのよ。ちゃ
んとしたホテルの中の店よ」

「それこそスイブに予約なしで無理でしょう」

「予約してある。あんたと行くことと思って」

本当は直前にある人物から譲ってもらったのだが、その相手につ
いては言いたくない。

朝比奈はまたしても、自分の頬をつねった。そんなに私の言葉が
信用できないのか腹が立つ。

「そこでまた痛くないなんていったら、痛くなるまで、ボコボコに殴るわよ」

「あ……痛いね、うん。夢じゃないんだ」

「誕生日プレゼントよ」

朝比奈は大きさに驚いた顔をした後、顔をくしゃくしゃにして笑った。

「ありがとう上条。嬉しい」

素直にお礼言われるとそれはそれで照れるな。朝比奈から顔をそむけ、「別に……」とそっけない態度をとってしまう。ああ、私ってこういう時可愛げないのよね。って別に、朝比奈に可愛い所見せたいわけじゃないけど。

朝比奈から目を離していたら、急に肩に重みを感じた。あれ？と顔を向けると至近距離に朝比奈の顔があった。思わず飛んで逃げそうになったが、踏みとどまる。

眠くなりすぎて、倒れてきたようだ。私の肩にもたれかかって、気持ち良さそうに目をつむってる。

「ちょっと、あんた離れなさいよ」

「……うーん。じゃあ……肩がだめなら膝枕で……」

「絶対嫌！」

「……残念。上条に膝枕されてみたかったな」

「このエロ朝比奈。ていうか寝るんだったら布団しくから、そこで寝て」

「……」

どうやら本気で寝てしまったようだ。間近で見ると、昔より痩せた頬、目の下のクマ、顔色の悪さが目立って気になる。元々細いし白いし、もやしみたいによわっちいやっではあったんだけど、疲れてんだなあと思うと可哀想になる。

まあ今日だけは肩ぐらい貸してやるか。友達だし肩貸すぐらいいいよね。

至近距離で安らかに眠る朝比奈の寝顔が可愛いから……、なんて理由じゃ絶対ない……。

子守唄（後書き）

いきなり甘々な感じではじまりました
はたしてこのムードがどこまで続くのか？

眼鏡越しの空（前書き）

2人のクリスマスエピソード中のタイトルは
歌のタイトルでそろえようかなと思ってます
どこまで続くか

眼鏡越しの空

24日の朝はゆっくり目覚めた。昨日の残り物で適当に食事して、だらだら過ごしてたら家を出る頃には正午少し前だった。

天気はさすがしく晴れていたけど、冬の空気は冷たく、思わず顔をマフラーにうずめる。

朝比奈と昼間から出かけるなんてものすごく久しぶりかもしれない。デートらしいデートなんて初めてだ。認めたくないが嬉しい自分がいる。

朝比奈がよく行く眼鏡屋について、フレームを選んだ。朝比奈が気に入った物は、やはりいつもと同じ様なデザインでどうにもつまらない。少し丸みがあったスクエア型のシンプルなメタルフレームの眼鏡だ。

「たまには冒険してみなさいよね。今流行りのセルフレームとかは？」
「僕がつけるとなんか軽いんだよね」

試しにつけてみると、いつもよりチャラい感じで笑えた。

「遊び人な内面がよく出てていいじゃない」

「やだよ。最近遊んでないし」

「じゃあこっちの縁無しとかは？」

「僕のレンズの厚さじゃ、縁無しは強度的に無理」

「古谷先生みたいに銀縁とか。真似してみれば」

「銀縁が似合うのは、ある程度年取ってからでしょ。オジサン臭い」

「じゃあ、いつそ丸メガネ」

「それ本気で言ってる？似合うと思うの」

「思わない」

私が大笑いしながらそう答えると、朝比奈はむっとした顔をした。眼鏡フェチか？結構こだわるなあ。しかし私は眼鏡なんて買った事ないから眼鏡屋が珍しいし、こうやって朝比奈とああだこうだいいながら選ぶのは楽しい。

「これはどう？」

そう言っただけで朝比奈にかけたのは、スクエア型だが、上半分だけフレームがあり、下は縁なしタイプだ。いつもよりシャープで出来る男っぽく見える。

「それいいんじゃない」

「本当に？」

朝比奈はそう言っただけで私の顔に思いつき寄り寄せてきた。

「顔近いって、なんで寄ってくるのよ」

「だってこのフレームが入ってないから、近づかないと上条の表情わからないもん。またからかっているかもしれないじゃないか」

「冗談じゃなく似合うって。鏡見てみれば」

朝比奈は鏡に思いつき寄り寄って、よくよくメガネチェックをして

いる。まんざらでもない様子だ。私も隣で見ていた。鏡に映る私と朝比奈。きつと周りの人間からは恋人同士に見えるんだろうな。でも実際はどうなのか？いまだ不明の曖昧な関係だ。ただの友達にしては仲が良すぎる。

「じゃあこれにする」

「決めるの早いわね。色とか他にも色々……」

「上条が選んでくれたから、これがいい。ちょっとは惚れなおした？」

「何バカ言ってるのよ！さっさと買ってきたら」

私はレジに向かって、朝比奈を叩きだした。

「検眼とかあるから、少し時間かかるよ」

「そうなの？じゃあうるうるしてるわ」

「了解」

眼鏡屋のシヨウウインドウのガラス越しに見る空は、とても澄み渡って綺麗だった。ふと思いついて手近なメガネを手にとって、かけてみる。

度の入っていない眼鏡越しに見る空はやっぱり綺麗だったが、眼鏡のフレームが空を切り取って先ほどと違う空の様に見えた。

朝比奈にはいつもこんな風に見えるのかな？眼鏡をかけた事のない私の知らない世界だった。当たり前な事だけど、朝比奈と私は全然違う人間で同じものを見ても、違う物に見えるのかもしい。

でもずっと肩を並べて同じ目線でいたから、同じ様に見える

ものだと思っていた。

私の知らない朝比奈の世界が色々ある。それをもっと知りたいと思っ
た。

「お待たせ」

「あれ？さっきの眼鏡？新しいやつは？」

「レンズの加工とかあるから、後日受け取りにまた来るよ。これは
昨日曲がった眼鏡。応急処置で直してもらったから、新しいの出来
るまでくらいなら持つよ」

「そう。よかったわね」

そうは言いながらちよつと残念だった。私の選んだ眼鏡をつけた
朝比奈と今日一日過ごして見たかった。

870

「この後どうする？予約って夜でしょう？まだだいぶ時間あるよね」
「そうね。お腹はすいてないし、今日はどこも混むわよね。祝日だ
しイブだし」

「映画とかチェックしてみる？」

そう言いながら朝比奈はバックから取り出した携帯の画面をいじ
った。

「あれ？携帯スマートフォンに変えたの？あんたの2台とも折りた
たみじゃなかったっけ？」

「これ似てるけどスマートフォンじゃないよ。PDA。通話機能は
ないんだ」

「なんで携帯持つてるのにわざわざ別で持つてるの？」
「スマートフォン出る前から使ってたから。主にスケジュール管理とか、電子書籍読んだり、音楽ダウンロードして聞いたり、辞書とかはよく使うかな。日中や中日辞書ダウンロードしておけば別で電子辞書持ち歩かなくても、外で翻訳作業できるし」

「あんた家電音痴な割に、パソコンとかそういうハイテク危機だけはやたら強いわよね」

「必要に迫られればね。家電でも使う物もあるよ。炊飯器とか電気ポットとか必要だと思った事ないから興味ないだけで」

朝比奈はPDAを見ながら、私に聞いた。

「上条どういふ映画見たい？」

「ハリウッド超大作の派手なアクションとか」

「上条らしいね。でも残念だけどそういうの今やってないみたいだよ。最近邦画ブームだから、日本映画の方が多いな。ああ……、僕が興味あつた小説が映画化してる」

「眠たいのは嫌よ。途中で寝るもん私」

「じゃあ映画は辞める？」

「そうね……どうしようか？」

そう言いながらふと思いついた。さっき思った私の知らない朝比奈の世界が知りたいな。

「そのPDAに音楽ダウンロードしてるのよね？アンタ普段どんな

曲聞くの？」

固いクラシックか？普通のJPOP？ビジュアル系とかロックだったら意外で面白いんだけどな。

「聞いてみる？」

朝比奈に渡されたイヤホンから聞こえてきたのは、弦楽器の奏でる音楽だった。ちよつとノスタルジックで穏やかなヒーリングっぽい感じの……。

「これハープ？」

「うん。アイリッシュハープでアイルランド民謡だよ。あと二胡とかも好き。国を問わず弦楽器で民族音楽系が好きだな。あんまり激しいやつじゃなくて、穏やかな音楽が。寝る前とか昼寝中に聞いたりするよ」

あまり音楽に詳しくないのでよくわからないが、癒し系の音が好きなのかな？静かに読書するのが朝比奈に似合うような、腹黒な朝比奈に似合わないような。

それでも6年ぐらいの付き合いでまったく知らなかった事だ。

そう私は何も知らなかった。朝比奈の好きなもの、好きな事。いつも朝比奈は私の行きたい所を優先してくれてたし、食べ物だって私好みの味で作るばかりで、私は知ろうともしてなかった。朝比奈の好きなもの。

遅すぎるかもしれないが、その事実には焦り始めていた。

冬桜

「どこいこっか」

「たまにはあんたの行きたい所がいい」

「え？僕の行きたい所？」

朝比奈は急に振られて戸惑っていた。予想外だったのか、ずいぶん間抜けヅラだと思う。

「別に特に行きたい所とかないかな……しいていうならうるさくない、のんびりできる所？」

「じゃあ、好きな所とか」

ますます困ったように首をかしげる朝比奈。しばらく悩んでやっと思いついた。

「あそこなら、今日も静かでのんびりできるし、好きな所だな」
「どっ？」

朝比奈は微笑を浮かべるだけで教えてくれなかった。仕方なく朝比奈の後について電車に乗った。

「なんでここ？というかここどこ？」

「目黒川だよ」

そう。私達は中目黒で降りて、駅から近い川に来た。

「なんでこの川なの？人少ないし」

「いつもはこの近くの喫茶店にくるついでに見に来るんだけど、今日はその店休みだから。桜のシーズンならすごい人多いよ。最近夜イルミネーションやってるみたいだけど、昼間だしのんびりできるでしょ」

「じゃあ夜のイルミネーションの時にまた来れば……」

「僕はこの静かで、何も無い桜並木と目黒川が好きなんだよ」

川にかかった橋の途中で立ち止まって、朝比奈は川を見ながらそう言った。桜の季節なら絶好の花見ポジションだろうが、今は葉一枚も残っていない木が並ぶだけだ。

「冬のこの景色を見ながらね、春になれば桜が咲くんだな……って、その姿を想像するんだ」

「春に咲いた桜見ればいいじゃない」

「咲いた桜は嫌いだよ。咲いたら後は散るだけだから。散ってしまっただけだと思うと悲しくなる」

朝比奈がそう呟く。その横顔は今にも消えてしまいそうなほど、寂しい表情だった。なんかすごいネガティブ思考。こいつこんなやつだったっけ？それともやっぱりなんかあったのかな？

「なんでそんな寂しい事考えるのよ。いいじゃない。その時の桜の綺麗さを素直に感動していれば」

「どうしてだろうね。今が楽しければ楽しいほど、未来が不安で怖くなる。いつか終わりがくるからかな」

「今楽しい？」

「楽しいよ。上条とこんな風にここにこれるとは思ってたなかった」

本当だろうか？朝比奈は楽しそうに見えなかった。寂しそうで、私が隣にいるのに、まるで一人みたいに孤独だった。

「終わらないわ。私達はずっと……」

友達だと言おうとして言えなかった。私の中で朝比奈はもうすでに友達以上だ。でもまだ恋という言葉にためらう自分がいる。私はわがままで。友達以上恋人未満の曖昧な関係が続けたいだけなんだ。そんな事もう終わりにしようと思って、決心して今日朝比奈を誘ったはずなのに、まだ勇気がでない。

「終わりがないものなんてこの世界にはないよ」

こうやって二人で過ごす時間もいつか終わりがくる。当たり前だ。寿命だってあるし、この先私達の関係がすれ違ったり、けんか別れしたりするかもしれない。でも今日こんな楽しいのに、そんな悲しい未来を想像したくなかった。

ネガティブ朝比奈を慰める言葉もみつからず私は途方にくれた。そして結局私は、重い空気から逃げる口実を口にした。

「寒い。缶コーヒー買ってくる。あんたも飲む？」

「じゃあお願い。ブラックがいいな」

「アンタ、胃弱いんだからカフェオレにしときなさいよ」

朝比奈は困ったように苦笑しながら、頷いた。

私は朝比奈に背を向けて歩き出す。少し歩いて振り向くと、朝比

奈はまた桜を見上げていた。一人が似合う男だと思った。

でも一人が好きなんじゃない。だってすごい寂しそうで、誰かにそばにいてあげなきゃいけないような雰囲気がある。

嘘で塗り固められた朝比奈の素顔は、いくつもの複雑な壁に隔たれて、一向にたどり着けそうにない。どれだけの物を内側に隠しているのだろう。

私は缶コーヒーを買って戻るが足取りが重かった。またさつきみたいにながタイプな話になったら、どうやって慰めたらいいんだ？ 楽しい一日の予定が、暗い一日になりそうだ。

ここはなんか明るく空気を変える事を考えなきゃ。ベタだけど、こっそり近づいて缶コーヒー頬にくっつけて熱っとかなんかさういういたずらでもしてみるか。

私は朝比奈に気付かれないように、こっそり戻ろうとした。遠くから朝比奈を見かけた時、隣に見知らぬ女が立っていた？

誰？ と思いつつそりゆつくり近づく。なんか楽しそうに笑いながら話してるな。なんかむかつく。

やっと声が聞こえる距離まで近づいた。

「じゃあ今度お茶しましょう」

「これ私の連絡先です」

「ありがとうございます。また連絡します」

私は女が立ち去るのを待ってゆつくりと近づいた。

「何やってるのよ！」

「道聞かれたんだよ」

「道聞くだけでなんで連絡先交換してんのよ」
「見てたんだ」

「人の目の前でナンパするな！このすけこまし」

叫ぶと同時に蹴りを朝比奈の腹に決めた。朝比奈はよろめいて後ろに尻持ちをついて倒れた。蹴られてもへらへら笑ってる。

「上条、スカートで蹴りは辞め時だよ。僕は嬉しいけど」
「バカ！」

朝比奈の余計なひと言に、裏拳をお見舞いしてやった。まったく何考えてんだこの男は、心配して損した……と腹がたつたが、ふと気がついた。

もしかしてわざとか？私の目の前でナンパしてみたのも、余計なひと言も。さっきの暗い雰囲気を変えるため？

朝比奈の笑いはいつもの嘘くさい仮面のような笑顔で、本心はさつきみたいなネガティブな鬱々としたものかもしれない。

朝比奈は人に弱みを見せたがらない。さっきの弱気は珍しく私に見せてくれた甘えだったのだろうか？なのに私は逃げてしまった。だから朝比奈も本心を隠してしまったのだろうか。

「朝比奈、ごめん」

「大丈夫だよ。上条の攻撃には慣れてるから」

「違う……そうじゃなくて……」

「寒いし他の所行こうか？」

朝比奈は強引に私の手をとって、コートのポケットに入れて歩き始めた。

「ちょっと、朝比奈」

「何？こっちの方があつたかいよ。寒いんでしょ？」

手をポケットの中で繋ぐなんて、恋人みたいな事恥ずかしくて嫌だったけど、朝比奈の手は私以上に冷たくて、強く握りしめられた手を振りほどく事ができなかった。

この手を離したら、朝比奈はいなくなってしまう感じがしたから。

最初は朝比奈が私を追いかけてたはずなのに、いつからだろう。私の方が朝比奈を見失わないように必死になってる気がする。

秘密のデート

予約時間より少し早い夕暮れ時に、私達はホテルについた。

「このホテル……あの懇親会の時の……」

2年前の夏、古谷教授に誘われ、私をまきこんで朝比奈が参加した懇親会が行われたホテルだった。

「懐かしいわね。あの時の朝比奈の酒癖の悪さ……本当に最悪だったわよ」

「上条の容赦ない攻撃もね、すごかったね。本気で死ぬかと思った」

「わざわざ思い出の場所にしてくれたの」

「……まあね」

本当はたんなる偶然だ。なぜこのホテルのレストランの予約がとれたのか？それは会社の忘年会の日にさかのぼる。

朝比奈から蟹祭りに会おうと連絡があつてご機嫌だった私は、二次会のカラオケまで参加してしまった。

だがなぜかここでも隣の席は菱沼。騒ぎにまぎれて席を移動しようとした私を菱沼は引きとめた。

「ここにいた方が上条さんのためにいいと思つよ」
「どうしてですか？」

「気付いてないみたいだけど、何人か上条さんを狙ってるよ。今は私が睨み効かせてるから、みんな様子見だけだ」

言われて周りを見渡すと何人かの男子社員がこちらを見てる。そういえば一次会の席でも何度か視線を感じたな。

「上条さん前は仕事しか興味ありませんって感じで全然隙がなかったけど、夏ごろから仕事中にため息ついたり憂い顔になって、狙い始めた男が多いみたいだよ」

仕事に集中できなかつたのは朝比奈の事や新谷の事で、色々ごたごたしていたからだ。それがいいというのはよくわからない。

しかし面倒だ。私は営業の部署では新人。さっきから私を見てる男達は皆先輩だ。下手に振って睨まれたら、仕事がやりにくくなる。不本意だがここは菱沼を利用した方が、角が立たずにあしらえる。

「どうして主任が私を助けてくれるんですか？」

「恋愛トラブルで業務に支障がでないようにしてるんだけど、私が助けるのが気に食わない？」

「……そうじゃないです」

ただ胡散臭いだけだ。建前は上司だからと言い訳してるが、そんな建前を無条件に信じるほど私ももう甘くない。

「じゃあ取引しよう。私が弾よけになるかわりに、ひとつ頼みごとがあるんだけど」

ほらきた。ここからがこの男の真の狙いだろう。何をしかけてくるきだ？と身構えた。菱沼は騒がしいカラオケルームの中でも聞こ

えるように、私の耳元に顔を近づけて囁いた。

「Tホテルで12月24日に食事つきペア宿泊券を手に入れたんだ」

思わず悪寒が走るほど嫌な予感がする。私は周りに怪しまれないように、無表情を取り繕うのでいっぱいだった。

「まさかそれに付き合えとか言うんじゃないですよ。セクハラですよ」

「まさか。妻と行く予定で手に入れたんだけど、妻が忙しくて行かなくなっただ。高かったし誰か買い取ってくれないかなと探してたんだ。朝比奈君と行ってくれば」

朝比奈と？イブにホテルなんて……ありえない。いや、一樣公式では私達は婚約者って事になってるからおかしな話ではないし、むしろ美味しい話。ここで断るのは不自然だ。

「いくらなんですか？」

「ホテル内のレストランで夕食付で7万」

私は驚きの声を上げたが、幸い今ノリのいい曲でにぎやかだったので、周りに気付かれなかった。いくらクリスマスイブで食事つきだからって、無茶苦茶な値段だ。

「それ本気ですか？」

「高かったって言っただろう。それでも正規の値段だよ。一流ホテルだししかたないよ」

冬のボーナスに手をつけてなかったから出せない金額じゃない。問題は朝比奈と行く私の覚悟だ。

ただの友達という曖昧な関係じゃなく、朝比奈の女性関係に文句
言えるような、そんな立場になりたいとは思った。

でもまだアイツとホテルに泊まるような関係になる覚悟はない。

「高すぎます」

「今後の会社内での弾よけもサービスにつけてあげるよ。まあまだ
時間あるから考えておいて」

悩んで結局その日に返事が出せなかった。それでもやっぱり1週
間後に菱沼と取引してしまったのだが……。

というわけで、ホテルで食事だけでなく、宿泊券もあるのだが、
この土壇場になってもまだ踏ん切りがつかない。

「まだ時間あるからラウンジでお茶しよう。私トイレ行ってくるか
ら席探して注文しといて。私コーヒーでいいから」
「了解」

私はトイレに行くふりをしてチェックインの手続きをする。宿泊
券に食事がついているので、例えば泊まらなくてもチェックインして
おかなければいけない。

手続きを終えてラウンジに向かう途中、ひと組の男女が目に入っ
た。

男の方に見覚えはない。背が高く迫力のあるいい男で、周りの人
目を引いている。

しかし私が気になったのは相手の女性の方だった。小柄で折れそ
うな細い体。黒くつややかなストレートロングの髪。後ろ姿だけで

もどこかで見たような気がしていた。気になって見ていたらわずかに振りかえった。

田辺紫だった。なぜ今日こんな所にいる？二人はにこやかで親しげな雰囲気だ。まさかクリスマススイヴの日に、田辺の隣にいる男が柁木じゃないなんて……。信じられずに茫然と見ていた。

「上条？」

気づけばいつの間にか隣に朝比奈がいた。

「遅いからどうかしたのかと思って見に来たんだけど。寄りにも寄ってこんな所でアイツを見かけるなんてね」

「どうしよう……柁木君に言った方がいいかしら？」

「やめておきなよ。田辺が柁木じゃなくてあの男を選んだって事だろう。僕達が関わる事じゃないよ」

朝比奈の言う通りかもしれない。相手の男が誰かは知らないが、人の恋愛に口を出すべきじゃない。

「コーヒー冷めるよ。行こう」

朝比奈はあっさりとそう言った。朝比奈は柁木には結構優しいと思っていたのだが、ずいぶん冷たいなと思う。それともこの男は何か知ってるのだろうか？

秘密のデート（後書き）

上条は小説などは読みません
だから有名作家の顔などは知りません

僕、ディナー

「クリスマスにホテルでディナーなのにここ？上条らしいけど」

朝比奈はそう言いながら思い切り笑っていた。ここはホテル内の寿司屋だ。思いっきり和で日本酒だ。言い訳だが菱沼が選んだのであって、私が選んだわけではない。でもそんな事情を朝比奈は知らないのだから仕方がない。

「いいでしょ。あんただって和食嫌いじゃないし」

「うん。寿司は嫌いじゃないよ」

そう言えば私は朝比奈の好きな食べ物って知らない。実家が和食中心の家って言うてたから、和食の方が食べ慣れてると思うが、好きとは少し違う気がする。

朝比奈は私の好きな食べ物も、好きな味付けまで知ってる。知り尽くしてそれを餌に泊まり込んでた頃もあった。

あの頃は朝比奈のペースの攻めに押されて、どんどん私の生活にヤツが入り込んできた。

『もし』あのまま流されていたら今頃恋人になっていただろうか？それは『if』の話。営業になって忙しくなって、朝比奈を放っておいたうちに、いつの間にか溝ができてた。

私のせいだけでないと思う。会わない内に朝比奈にも色々会ったんだと思う。それでも私がそばにいたら変わったかもしれない。

「今日は熱燗じゃないんだ」

「ここはいいお酒しかないんだもん。燗にするのはもったいないわ。」

「あんたも飲んでみる？」

「いいの？」

「暴れるほど飲まなきゃね」

「僕も上条に殴られたくないから、ほどほどにしておくよ」

お猪口を用意してもらって朝比奈についだ。

「ああ……菊姫か、いいね。懐かしい」

「そっか、石川の酒だから地酒だもんね。でも大学から東京でしょ？懐かしいってあんた……」

「大学入る前に一時期はまった時期があるんだ。親に隠れてこっそりね」

「この不良が！」

「上条は飲んでなかったの？酒好きそうなのに」

「正月だけ大目にみてもらって飲んだ事はあつたけど。ちゃんと飲み始めたのは20歳すぎてからよ。すぐに日本酒好きになったけど。不思議よね。なんか地元の酒って体にあう気がするわ」

「確かに。水があうのかな？あんまり悪酔いしなかったし」

「暴れたりしなかったの？」

「暴れたよ。一緒に飲んでくれる人いなくなつて、一人で飲んでた」「あんたバカ？」

しかし暴れて友達なくしても飲むなんて、そんなに酒が好きだったのか？それとも酒に溺れてたのか。

優姫さんは誰の前でも朝比奈は優等生を演じてて、すぐストレス貯め込むって言ってたけど、そのストレス発散に酒に走ったんだろ
うか？

そういえば煙草も吸ってたなこいつ。最近匂いしなくなっただけど、それもストレス発散のためだった？女の子と遊んだり、酒におぼれたり、煙草に走ったり、相当なワルな感じだけど、きつといつも朝比奈はそうやって何かに逃げて生きてきたのかもしれない。

そうやってしか生きられない程、この男にはつらい人生なんだろうか？今が楽しいのに未来が怖いって、どんな人生過ごしたらそんな気持ちになるのか、私には理解できなかった。

私は嫌な事もあまり引きずらないし、前向きでポジティブだとよく言われる。大雑把だっってよく言われるし、朝比奈みたいな繊細さはない。

「やっぱりいい所の寿司って美味しいね」

「私も一度寿司で飲みに行きたいと思ってたのよ。今日はコースで握りだけだけど、今度肴も作ってくれるような所また行きたいわね。蕎麦屋で飲みとかもいいな……。私飲みのために働いてる気がするのよね。今度美味しいもの食べるぞ！って思ったら頑張れるじゃない」

「……。あんまりそういうの考えた事なかったな……。僕は上条ほど食べ物に思い入れないから」

「そうなの？じゃあ、私と飲みに行くの嫌？」

「そんな事ないよ。美味しいものは美味しいし、それに上条が美味しそうに食べたり飲んだりするのを、見てるのが楽しいんだよね。料理も作りがいあるし」

「そんなに私食い意地はってる？」

「いいと思うよ。美味しそうに食べる女の子って魅力的だし」

見るのが好きって変わってるなと思った。朝比奈と一緒に居心地いいと思ってたけど、一緒にいても感じているのは全然別の事だったんだ。

でも全然違うタイプだから、一緒にいて楽しいのかも。似た者同士が合うとはかぎらない。

「もうそろそろ寿司終わりだね。この後どうする？上条明日仕事でしょ？遅くならないように早めに帰る？」

「明日は半休とって午前中休みだから、遅くなっても大丈夫」

「珍しいね」

「休日出勤多かったから、代休たまってるのよ」

代休たまってるのは本当だが、この忙しい年末は本当なら休んでいられる状況じゃない。しかし今回は上司の菱沼公認だから、協力してもらえた。1日有給取りたい所だが、さすがに仕事が残ってるのでそれはできない。

「じゃあどうしようか？」

私はまだ迷ってた。チェックインはしてある。部屋をとってあるからと言えいいのか？しかしそんなの誘ってるみたいで恥ずかしい。

菱沼が予約した部屋はスイートルームで、ルームサービスでワインがついてたから、部屋で飲みなおすのもいいだろう。だがしかし、次の日半休とってホテルに泊まるなんて、やっぱりそういう事を誘ってるみたいだ。

その状況でただ飲むだけなんて言い訳通用しない。

本当の恋人になってしまえば、そういう関係になってしまえば、堂々と朝比奈を自分の物だと言える。もうもやもや一人で悩んだりしないでいい。

それでもやつぱりいきなりそういうのは……。正直私男性経験どころか、お付き合いもした事がない。それなのにいきなりお泊りって、ハードルが高すぎる。

そのハードルは踏み越えられずに、私はまた逃げた。

「ちょっと酔い覚ましに歩きたい。ホテルの庭でも歩かない？」

「外寒いけど大丈夫？」

「寒いくらいがちょうどいいわ」

朝比奈の事考えすぎて疲れた。少し頭を冷やしたい。それにこのまま朝比奈と別れてしまうのはおしい。せっかくの機会なのに、何も伝えられないままだ。

ただの時間稼ぎかもしれない。それでももう少し朝比奈と今日という日を過ごしたかった。

煙が目にしみる

外に出るとやはり寒かった。朝比奈が寒そうに肩をすくめているので、私は自分のマフラーをほどいて、ヤツのマフラーの上に重ねてかける。しかし朝比奈はすぐにほどいて、私に返した。

「上条、大丈夫だよ」

「あんた脂肪なさすぎて寒そうだから、風邪ひいたら困るし」

「上条が風邪引いたら僕も困るよ。それに、マフラーよりこっちの方がいいな」

朝比奈は私の手を両手でとった。

「冬でも上条はあつたかいね。カイロみたいだ」

「あんたの手が冷たすぎるのよ」

冷たい朝比奈の手に包まれてるだけで、ドキドキして熱が上がりそう。朝比奈はこんなこととして照れたりしないのか？こいつは女たらしだから、こんな事何でもないのだろうか？

「行くわよ。両手で掴まれると、歩きにくいんだけど」

「じゃあやっぱりこつかな？」

朝比奈はそう言って、昼間みたいに私の手を握ったままコートポケットに手を入れた。だからそういう事当たり前みたいにするな。私は朝比奈から顔をそらして中庭の方へ歩き始めた。

「懐かしいね。酔って上条に絡んだのここだったよね」
「そうね」

中庭のベンチに朝比奈と並んで座った。まだ手は握られたままコートの中。私は緊張して普段の様に言葉が出てこなかった。

昼間やホテルの中は周りに人がいたけど、こんな寒い夜に中庭に来る人間なんていない。今、本当に二人きりだ。

俯く私の顔を、朝比奈が覗き込んできた。

「どうしたの上条。寒い？大丈夫？」

顔近い。なんでそんな普通にでいられるの？私一人がドキドキしてバカみたいだ。こんな所で長居はできない。思い切って言ってみえ。

「あのさ……。私達嘘の婚約者よね。友達だったわよね」
「そうだね」

朝比奈は夜空を見ながら相槌をうっていた。私は顔をあげてその横顔を見ながら思い切って言った。

「その嘘のつての止めない？普通にアンタと付き合いたい」
「……え！本気？どこかに付き合って行くとかじゃないよね？」

朝比奈は驚きすぎて茫然とした表情で私を見た。まあ朝比奈が疑うのも無理ないくらい唐突だった。今まで散々朝比奈が誘っても、私は拒み続けてきたのだ。

「うん。恋人になるって事。私、あんたが他の女と親しくしてるの見るの嫌だから。文句を言える立場になりたい」

朝比奈は私の言葉を黙って聞きながら、何度も瞬きをした。朝比奈がずっと黙ったままなので、返事を聞くのが怖くなってきた。

「嫌ならいいわよ。別に今まで通り、ただの友達でも……」

私はそれ以上言葉を続けられなかった。朝比奈が握った手を、さらに強く握りしめたまま、開いた手で私を抱きしめた。

私は驚いて何も言えず、何もできなかった。

「嫌なわけないよ。嬉しいよ」

耳元で聞こえる朝比奈の声はかすれて、いつも以上に艶っぽい。ますますドキドキする。心臓の音がうるさすぎて、朝比奈に聞こえてしまうんじゃないかと焦った。

人気のない所で抱きしめられてるだけで、私の許容範囲の限界を超えている。それなのに朝比奈はさらに大胆だった。抱きしめる力が弱まったかと思ったら、目をつむって顔を近づけてきた。

キスされる……。そりゃあ、今私告白したし、朝比奈はOKしたんだし、もう晴れて恋人だ。恋人ならキスの一つくらい当たり前なものかもしれない。だけどやっぱり私の気持ちはそれを受け入れられない。まだ気持ちはそこまでついていかない。

私は朝比奈を思い切り突き飛ばして立ちあがった。

「朝比奈ごめん。私まだ無理だわ。そういうの」

「まだ無理って、この先も無理なんじゃない」

朝比奈の皮肉っぽい言い方に嫌な予感がして朝比奈の顔を見た。

朝比奈はあからさまに不機嫌な顔をしていた。

「上条はさ、本当は僕が好きじゃないんでしょ、ただ流されてるだけだよ。きつとこの先もずっと」

「そんな事……」

「じゃあ僕が好きなの？」

好きだと口に出して言えなかった。正直私にもまだわからなかった。朝比奈を好きなのか。だから朝比奈の言う通り、付き合ったらこの気持ちがあつきりするかなんてわからない。

「今は好きかは分からないけど、好きになるように努力はする」

「上条って残酷だね。そうやって期待を持たせて突き落とすぐらいなら、いつそ初めから期待させないでほしいな」

「なんでこれから好きになるじゃ駄目なの？先の事はわからないじゃない。私があんたを好きになると信じられないの？」

「僕は未来を信じてないからね。いつか幸せになるとか、夢物語だ」

刹那的で投げやりな言葉は、朝比奈の本心かもしれない。私が付き合おうって言うだけじゃ信用できないのか？

だったら私がもし好きと言ったって、私の言葉を信用できるのか？私にとって朝比奈が大切な存在なんだって事、キスとか形にしないと伝わらないのだろうか？

そのまましばらく気まずい沈黙が続いた。だめだ、今何か言っても朝比奈に伝わるようには思えない。言う事は言ったし、今日は仕切りなおそう。

「どこかで飲みなおさない？あんたも酔いが冷めたから、少しなら飲めるでしょう？ホテルは混んでそうだから、どこか飲みに行くのもいいわね」

「あんまり遠いと、酔ってホテル戻ってくるのが大変にならない？」

朝比奈は冷たい微笑を浮かべてそう言った。なんか嫌な予感がする。

「どうしてホテルに戻ってくるの？」

「せっかく部屋とつてあるのに、泊まらないのもったいないでしょう」

私は息をするのを忘れるほど驚いた。なんでそれを知ってる？今日このホテルに予約してるの知ってるのは、私と菱沼ぐらいのはず……。そこまで考えて私は背筋が凍りついた。

「……もしかして、あんたと菱沼って繋がってる？今日ここに来るようにあんたがしむけた？」

朝比奈は意地の悪い微笑を浮かべるだけで否定しなかった。腹黒いとは思っていたが、こんな手の込んだ事してまで、私をはめようとしたのか？

「最終的にここに来ると決めたのは上条でしょう。なんでここまできてためらうかな。覚悟してたんじゃないの？」

朝比奈の意地の悪い言葉に思わず手がでた。朝比奈の頬を叩くといい音がした。叩かれてなおなんともない顔で薄笑いを浮かべる朝比奈。

心底この男が怖いと思った。殴りかかるほど対立した菱沼と繋がって、私を操って。もしかして菱沼が弾よけになるなんて言い出したのも朝比奈の差し金？会社での私の情報は全部つつぬけ？

私が菱沼に狙われてた時も、なぜか情報つかんで居場所まで突き止めてたし、私は永遠にこの男の手の中で踊り続けるのだろうか？

「前言撤回。あんたなんかと絶対つきあわない。一緒にホテルに泊まるなんてごめんよ」

「わかった。じゃあもうこれもういらないからあげる」

そう言って朝比奈は左手の薬指にはめていた指輪をとった。

「捨てるなり、売るなり好きにして。もう上条の事諦めるから」

あまりの引き際の良さに唖然とした。手の込んだ事してまで私とデートしようとしたのに、こんなあっさり諦めるのか？

「何それ？なんでそんな簡単に……」

「絶対つきあわないんでしょう？望みがないなら諦めるよ。もう上条にこだわるとやめる」

「何それ駆け引きのつもり？」

「駆け引きじゃなく本当に諦めるって事。最後にいい思い出できたし。じゃあね」

朝比奈はあっさりそう言っ、歩き出した。引きとめたかったがなんて言葉をかければいいかわからなかった。

好きだとは言えない。怖い男だとも思う。でもまだすこしだけ未練がある。もう会わないのは寂しい。それは朝比奈の言うように残

酷な事なのかもしれない。期待させるだけで私は朝比奈に何もできない。

朝比奈がいなくなつて、ますます寒くなつた気がしてきた。心中まで冷え切つたような。

私はホテルのバーに一人入つて飲む事にした。バーは混んでいてカウンターに1つ席があるだけだつた。しかも隣の男は煙草を吸っている。

普段の私なら煙草が嫌いだから座らなかつただろう。しかし今日は飲みたかつたし、だからといつてこんな暗い気持ちのまま街をさまよいたくなかつた。

しかたなくその席に座つてウイスキーを注文した。隣から煙草の煙が漂つてくる。懐かしい匂いだつた。朝比奈の部屋に泊まつた時、布団からした匂い。あの時は慌てたな。まさかあの時は朝比奈との関係でこんな風に悩む日が来るなんて考えもしなかつた。

なぜだか目が潤んできた。朝比奈とうまくやつてたあの頃に帰りたいなつたのか、朝比奈と喧嘩別れしたのが悲しいのか？

きつと煙が目にしみたからだ。私は涙をこらえて、ウイスキーを飲んだ。

迷い道

バーでウイスキーを2杯飲んだ後、一人でスイートに泊まった。サーブスでついてきたワインを一人で開けて、部屋にあった酒もついでに全部飲んだら、さすがに酔いが回って泥の様に眠った。

もちろん次の日の目覚めは最悪な二日酔いだった。

普段あまり飲まないウイスキーやワインを大量に飲んだせいか、かつてないほどにひどい二日酔いだ。それでいいと思った。気分が悪くて余計な事を考えている余裕がない。

シャワーを浴びて酒を少し抜き、一度家に帰ってスーツに着替えた後会社に向かう。

二日酔いは一向に治る事なく、仕事の能率は悪く、結局終わらない仕事のために残業した。年末の忙しさに残業をする人が多かったが、徐々に帰宅し残ったのは私と菱沼だけになった。

「上条さん、そろそろ帰ったら」

「今日中に終わらせなきゃいけない仕事はまだ残ってるので」

「体調不良で無理してやっても、能率悪いしミスの元だよ」

無理をしいつものようにふるまったつもりだが、やはり菱沼には見抜かれていた。意味ありげな微笑みを浮かべて、菱沼は私を見ている。

「寝不足かな？」

「ご期待にそえずにすみませんが、やけ酒で二日酔いです」

私の嫌味に菱沼は意外な顔をしている。この男は朝比奈とのデー

トをおぜん立てしたのだ、それが予想を裏切る展開になったので驚いているのだろう。

「どうしたの？喧嘩でもした？」

「朝比奈に聞いたらいいじゃないですか。仲いいんでしょう」

菱沼はいつもより黒い笑みを浮かべた。

「ばれちゃったんだ。というより朝比奈君がばらしたのか。彼が尻尾を掴まれるようなミスをするとは思えない」

朝比奈がばらした？そういうえばホテルをとつてあるなんて、朝比奈から言わなければ、私が菱沼との関係に気付く事なんてなかっただろう。あれはわざとだったのか？

どうして？キスを拒んだ後、朝比奈は不機嫌だった。あれで怒ってやけになった？あんな事では？

「彼もよくわからないね。上条さんに執着したかと思えば、怒らせてわざと距離をとったり。何がしたいんだろう」

朝比奈が何がしたいのか、なんてこつちが聞きたいくらいだ。

昨日の朝比奈を思い出そうとするとネガティブな言動ばかり思い出す。今が楽しいほど未来が不安で怖くなる。未来なんて信じてない。

私との幸せな未来を期待できずに、怖くなって逃げ出した？壊れてしまっぐらいなら先に壊してしまえと自棄になった？

私が好きだとはつきり言ってアイツを受け入れてたら、アイツの不安は取り除かれたんだろうか？

結局残業は途中で切り上げて、私は帰る事にした。昨日の事を繰り返し思い出しながら考える。朝比奈に操られたとか、見張られてたとかそんな恐怖は今もう薄れていた。

あの男の腹黒さには慣れた。そういう男だと思えばしかたがないと諦められる。それよりも今心に残るのは目黒川の橋で桜を見上げていた姿。

孤独が似合う、でも寂しくて仕方がないような姿。自分から他の人間との距離をとって、一人でいるのに寂しがる。

あの男は寂しがりに、心から人を信用できないのか。人の愛情を信じ切れずに疑って脅えているのかもしれない。寂しい男だと思ふ。

少し距離をとって頭を冷やしてみよう。朝比奈に流されるんじゃない、自分自身がどうしたいのかゆっくり考えてみたい。そう思つて冬休みも実家に帰らず一人で過ごした。

コンビニやスーパーの弁当や外食ばかりの味気ない食事だったが、私は一人でいる事は苦ではない。

元々集団行動とか苦手だし、理子のような友達ができてても時々食事するぐらいで付き合いはドライだ。あんなにしょっちゅう顔合わせで、苦じゃなかったのは朝比奈ぐらいだ。

考え方も全然違うのに、どうしてだろう？朝比奈が合わせてくれていたから？それだけじゃないと思う。朝比奈だって楽しんでいたはず。私が食事している姿を見るのが楽しいと言っていた。

元旦に理子からあけましておめでとうメールがきた。休み中に一

回ぐらい飲もうと書いてあったので了承の返事をした。

恋愛音痴な私が一人で考えていても駄目なのかもしれない。恋愛相談なんてできそうな友人は理子ぐらいだ。

「クリスマスにデートして喧嘩したと。というかまだ諦めてなかったの？ さっさと別ればよかったのにあんな男」

「玲子っていう女の事は色々事情があつて、別に浮気でもなんでもなかったのよ」

「だとしても、女の影に疑ってビクビクするようなつきあい、つらいだけよ。別れて正解」

「別れたわけじゃない。つきあつてもいなかったんだから」

「どういう事？」

私は朝比奈との約束を破つて、嘘の婚約の事も全部話した。長い長い話を終えると、理子は大きなため息をついた。

「そんな事だったとは、なんかおかしいと思つてたのよね。ミイラ取りがミイラになった？ 婚約者の振りしてたら本当に好きになっちゃったんだ」

「いまだに朝比奈が好きなのかどうか、自分でもわからないのよ」

理子は開いた口がふさがらないといった顔で啞然としていた。

「まあ驚くのも仕方ないわよね。嘘の婚約者なんて馬鹿馬鹿しい事してたと思うもん」

「驚いてるのはその事じゃないわよ。今までただの友達のもりだったわけ？ いまだに恋愛かもわからないの？」

「そうだけど……」

「私から見たら、とっくに朝比奈さんの事好きだったように見えたけど。気付いてないだけじゃない？それでずっとお預けだなんて、あの腹黒な朝比奈さんが可哀そうになっってきた」

「私が朝比奈を好きだった？」

「そうよ。他の女と一緒になのが嫌って嫉妬じゃない。女の影を文句言える立場になりたいって完璧な告白だけ」

「……でも、その……朝比奈とキスとかそういうの、まだ無理だなとか思うし……」

「まだ、でしょ。それは単に彩花の恋愛経験値が低すぎて、早い展開に心の準備がついていけないだけで、ゆっくり距離を縮めればいい話でしょう。朝比奈さんだってわかってるはずだから、彩花に合わせて回りくどく攻めてたんじゃない」

心の準備がついていけないだけ、本当はとっくに朝比奈が好き？そうなのかな？

「それよりも朝比奈さんのその態度よ。なんか裏があるわね。彩花から告白したのに逃げるなんておかしいもん。なんか隠してるんじゃない？」

「なんか様子はおかしかった。ネガティブすぎるっていうか……」

「でも菱沼に協力させて、ホテルでディナーになるようしむけたんだよ。わざわざそこまでしといてなんで逃げるの？最後の思い出作り？」

最後の思い出作りという言葉に心が凍った。夏をすぎてからの朝

比奈は、ずっと様子がおかしくていつも距離があつた。玲子の件で大変だつたからと思つていたが、それだけじゃなくあの時から私と距離を置こうとしてた？

朝比奈はまだ何か隠してる。朝比奈が隠したがる事つてただの軽い遊びでいどじゃない気がする。何かもっと大きな事じゃないか？それを暴いてしまいたいような、暴いてしまつたら取り返しがつかないような。私はまた悩み始めるのだった。

会いたかった

冬休みも終わり、仕事が始まって初めての週末。1月11日の夜、見知らぬ番号から電話がかかってきた。誰だろう？間違い電話とかかな？

「彩花さんですか？」

「どなたですか？」

若い女の子の声。名前を言われたのだから間違い電話ではないだろうが、心当たりがなかった。

「一度あっただけじゃ声まで覚えてないですよね。雛姫です。朝比奈雛姫。兄がいつもお世話になってます」

「え！雛姫ちゃん！なんで私の電話番号知ってるの？」

突然すぎる雛姫からの電話に驚いた。一昨年の年末に挨拶をしたきり、一度も会っていない。

「彩花さんの番号はお姉ちゃんに聞いたんです。勝手に聞いてすみません」

「雛姫ちゃんなら別にいいわよ」

そういえば優姫さんには名刺をもらった時に、私の番号を教えた。しかしなぜ今頃連絡してきたのか？

「彩花さん今日これから時間ありますか？」

「ええ。仕事終わったし予定ないから時間は大丈夫よ」

「実は今東京に来てるんです。よかつたら一緒にご飯食べませんか？」

「東京にいるの？なんで急に」

「会って話しましょう。中野で待ってるんでついたら連絡してください。ああ。女同士の話なのでお兄ちゃんには内緒ですよ」

明るく無邪気に、しかしかなり強引に押され、私は仕方なく中野に向かった。

「彩花さんお久しぶりです。会いたかった。彩花さんに会いたくて東京来ちゃいました」

語尾にハートマークがつきそうなほど、甘い声で言われた。

両手にファッションブランドのショッピングバックをたくさんぶら下げた姿で、私に会いたくてなんて言われても全然説得力ないのだが……。おもいつきり東京で買い物したくてきたんじゃないか？私の視線がショッピングバックに向かっているのに気付いたようで、ごまかすように笑いながら言った。

「これはついですよ。せっかく東京来たんだし、彩花さん昼間仕事でしょ。時間つぶしに原宿行ったらつい。お腹すいてませんか？食べに行きましょう。ねえ」

雛姫のペースに押されながら、私はついていくことにした。

「雛、ラーメン食べたいんですけど、いいですか？」

「ラーメンでいいの？せっかく東京きたのに」

「行きたい店があるんです」

確かに中野はラーメン激戦区として有名だ。金沢でも知られるような有名店はあるだろう。しかし雛姫がラーメンというのは少し意外な気がした。いかにも女の子が好きそうなカフェとかがいいと言っかと思っただ。

先に中野にいた雛姫がお店の場所は確認済みなので、私はついていくことにした。

ついたのは地味な店だった。ラーメンに詳しいわけではないが、普通の街のラーメン屋という感じだ。なんでここ？

店の中にはカウンターとテーブル席があったので、テーブルに向かい合わせで座る。

「しょうゆラーメン大盛りと高菜ご飯のセットでギョーザもつけてください」

雛姫の注文に驚いた。雛姫はそうとう細身のスタイルなのに、どこにそれだけ入るといふのだ？

「彩花さんはどうします？」

「私も同じでいい」

「すごい。彩花さんスタイルいいのに、結構食べるんですね」

その言葉そっくりそのまま返したい。なんだろう……女同士の大食い大会みたいになってきた。

「雛姫ちゃん。どうして東京に来たの？」

「お兄ちゃん最近おかしいんです。夏休みも冬休みも帰ってこなかったし。もう1年も顔を見てない」

「忙しかったんじゃない？」

「でも去年の初め頃からネット電話もしてくれなくなっちゃったし」

「ネット電話？」

「webカメラで相手の顔を見ながらできるテレビ電話です。お兄ちゃんが東京に行ってから、ずっと月に1回はしてたのに」

遠距離恋愛の恋人同士じゃあるまいし、兄妹でそこまで仲いい方がむしろ怖い。それだけでおかしいと思うなんて、ブラコンすぎる雛姫に引いてしまった。

この妹に付き合わされて、朝比奈も大変だな。そろそろ妹のワガママに付き合うのに、疲れたんじゃないだろうか？

それを言っても雛姫が納得するとは思えないが。

「それで大学はまだ冬休みだし、彩花さんやお兄ちゃんに直接会うと思って東京きちゃいました。お兄ちゃんには明日会いに行くつもりです。明日土曜日ですけど、お兄ちゃん大学にいますか？」

「たぶん、いると思うわよ。授業がなくても大学の研究室とか図書館とか通ってるから」

「じゃあ明日は内緒で突撃しましょう。よかったら彩花さんも来ませんか？」

可愛い笑顔でぐいぐい押してくる雛姫に、苦笑するしかなかった。

「お待ちどう様」

「わーい。ここの高菜ご飯一度食べてみたかったんだ」

「ここの高菜ご飯そんなに有名なの？」

高菜ご飯目当てにラーメン屋来るなんて珍しい。私の反応に雛姫は驚いていた。

「彩花さんお兄ちゃんの彼女なのに知らないんですか？ここの高菜ご飯お兄ちゃんのお気に入りなのに」

雛姫に言われ、朝比奈が好きな食べ物って知らない事が恥ずかしくなった。

彼女なら知ってて当たり前なのか……。

「お嬢ちゃんのお兄ちゃんって、いつもネギだけラーメン頼む人かな？」

店のおじさんがそう尋ねると、雛姫は大きく頷いた。

「多分そうです。お兄ちゃんチャーシューとメンマと味付け玉子嫌いだから。ネギだけになっちゃうんですよね」

「もっと食べて太れって、高菜ご飯サービスしてやってるよ」

雛姫とオヤジが楽しそうに話しているのを聞きながら、私は呆然としていた。

今まで朝比奈と何度も食事した事あるけど、嫌いって言ったの力ピスぐらいだったと思う。

「前に朝比奈とラーメン食べた時、普通に残さず食べてたけど」

「お兄ちゃん、人と一緒だと嫌いな物でも我慢して食べちゃうから。」

気づかないだけでかなり偏食だよ」

表情にはそんな事も知らないのか？という悔りの色が混じっていた。なんか妹に負けてるのって悔しい。

朝比奈と付き合うためには、この妹は強力なライバルのようだ。

「彩花さん。お兄ちゃんの事もっと教えてあげましょうか？その代わり雛のお願い聞いてほしいな」

天使の微笑み（エンジェルスマイル）を浮かべる雛姫のお願い……。なんか怖い。それでも私が朝比奈の事何も知らないのは事実で、ここは貴重な情報を手に入れるチャンス。私は頷くしかなかった。

会いたかった（後書き）

小悪魔・朝比奈雛姫、乱入編です

ここは短めに終わらせたいと思うのですが、どうなる事が雛姫のイメージでタイトル選んでます

言い訳 Maybe

雛姫のお願いとは、私の家に泊めてほしいというものだった。

「買い物しすぎて、ホテル代なくなっちゃった」

無邪気な笑顔でえへへと言われて呆れた。私が嫌だって言ったらどうするつもりだったんだ。無計画にも程がある。

「わー、いい布団。ふかふか」

「朝比奈が使ってるのよ」

「お兄ちゃん用？彩花さんは？」

「こっちのベット」

「なんで？恋人なのに一緒に寝ないの」

雛姫は信じられないと大きな声で言った。

「彩花さんって本当にお兄ちゃんの恋人なの？食べ物好みもわからないし、そういう事もしないし、全然恋人らしくない」

「友達期間が長かったから、その気分が抜けないというか……」

疑いの眼差しを向ける雛姫の勢いに言い訳したものの、二人の関係について自分でもわからなくなった。

嘘だけと婚約者の振りをしてた。朝比奈は私の事好きなんだと思ってた。なのに私の告白を一度は受け入れたように見えて結局駄目

になった。それも朝比奈がそうなるように仕向けた。結局朝比奈は私の事本当に好きなの？

そして私は朝比奈が好きなんだろうか？

冬休みの間ずっと朝比奈の事考えてた。連絡したくても別れが気まずくてできなかった。会えない、連絡も出来ない。そう思うと朝比奈に会いたくて仕方なかった。これを恋というのだろうか？

「彩花さん、お兄ちゃんの事本気で好きじゃないなら、早めに諦めてもらえませんか。お兄ちゃんが落ち込んでも、雛が慰めてあげますから大丈夫ですよ」

「それは朝比奈と私の関係で、妹の雛ちゃんに言われる事じゃないわ」

ついつい意地を張って対抗してしまっただが、妹とライバル宣言してどうするんだ……。雛姫の可愛い顔には真剣な表情が浮かんでいた。私をまつすぐに見る姿には、本気で私とぶつかる覚悟なんだと感じた。

「じゃあ勝負しましょう。明日一緒にお兄ちゃんに会いにいったら、二人がどれだけ仲がいいか見せてください。納得したら私も認めます」

無理だ。朝比奈と絶交中なのに仲の良さを見せるだなんて。しかしここで引くのは不自然だ。妹に反対されたから辞めるなんて嫌だ。

「良いわ。受けて立つ」

勝算なんて微塵もないが、それでも最初から勝負を投げるつもりはない。勝負事に熱い上条彩花の底力みせてやる。

次の日の昼過ぎに雛姫とともに久しぶりにM大学に向かった。クリスマスの夜以来初めて朝比奈に会う。あんな別れ方して気まずいし、雛姫の前で仲良い所を見せる自身もない。

それでもなぜかそわそわして、落ち着かない。早くついて朝比奈に会いたい。久しぶりに会えるのが嬉しい自分がいる。

大学についてまずは文学部研究室に向かった。ただでさえ見つけにくい朝比奈が、授業のない土曜日はどこにいるか？手がかりなしでは困難だ。

まずは古谷教授に聞いてみようと思つた。

「教授室ですか？どうしてここに？」

「朝比奈を可愛がつてる、古谷教授の部屋なのよ」

私はノックをして部屋の扉を開けた。てっきり古谷教授がいるものと思つたが、不在だった。代わりに朝比奈がソファで寝そべっていた。頭から上着を被っているが、服や体格で私も雛姫もすぐわかつた。

「すごい。こんな簡単に場所わかるなんて、さすが恋人」

私も予想外だ。朝比奈がさぼって昼寝するのはいつもの事だが、教授室でこんな堂々と寝てるとは思わなかつた。

とつさに朝比奈と気まずかつた事さえ忘れて、以前の調子で怒つてしまった。

「こんな所で堂々と寝てるんじゃない」

私は上着を取り上げて抗議したが、朝比奈は目も開けずに面倒くさそうに言った。

「なんで上条がここにしているの？……まあいいや。もうちょっと寝かせて」

「こら！二度寝するな」

私達の漫才の様なり取りに、雛姫が笑い声をあげた。しまった。ついつつかりバカな醜態をさらしてしまった。

その笑い声を聞いて朝比奈は飛び起きた。私に隠れて雛姫の姿が朝比奈に見えてなかった。私の横から雛姫を覗き見る。

「何で雛がここにいる？」

朝比奈はただでさえ悪い顔色を真つ青にしてうるたえていた。その顔を見て雛姫が朝比奈に飛びついた。雛姫は笑い顔から一転怖い顔になった。

「お兄ちゃんどうしたのこの顔。がりがりに痩せて、顔色も悪いし、だから私に見られたくなくて帰ってこなかったんでしょ」

「う、ごめん」

「ちゃんと食べなきゃだめじゃない。彩花さんどうしてこんな状態で放っておけるんですか。弱ってこんな所で休むくらいひどいのに……」

朝比奈が寝るのは別に具合悪いわけじゃないのに。確かに最近の朝比奈はちょっと痩せすぎで気にはなっていたけど。

「雛。心配してくれてありがとう。でも上条のせいじゃないから」
「でもでも……」

「それ以上この件で上条を責めたら、いくら雛でも怒るよ」

朝比奈は微笑んではいたが、怒っている時にいつもする冷たい笑顔だった。むしろ痩せすぎて顔色の悪い今の朝比奈は、いつも以上に凄味がある。雛姫が思わず脅えるほどに。

「驚かせちゃったかな。ごめんね雛」

すぐにいつもの朝比奈の嘘くさい笑顔で雛姫の頭を撫でた。雛姫も少し表情を緩めたが、まだ少し緊張していた。たぶん朝比奈の腹黒い一面を雛姫は知らないんだ。

その時教授室の扉が外から開けられた。入ってきたのは陣野助教だった。30後半まで役職にもつけず、やっと去年古谷教授の下で助教になった男だった。そう朝比奈から聞いた事がある。

陣野は部屋の様子を見るなり顔をしかめた。そして私達を無視して朝比奈を見ると、すぐに皮肉混じりの冷やかな一言を浴びせる。

「古谷先生の教授室でさぼりかい。いい御身分だね。さすが古谷先生のお気に入り。虎の威を借る狐。実力もないのにご機嫌とってれば、いい点とれるんだから楽だね」

確かにサボってた朝比奈は悪い。しかし私は許せなかった。朝比奈の努力も苦勞も何も分からず、偏見でバカにするこの男が。私は

瞬間的に拳を振り上げた。

殴りかかろうとしたが、あまり親しい相手ではなかったから、手加減して寸止めにした。それでも陣野は十分びびって震えた。

「そんな偉そうに嫌味言うくらいだから、朝比奈よりよっぽど素晴らしい論文が書けるんでしょうね」

「そ、それは……」

「本当は朝比奈の能力に嫉妬してるだけでしょう。努力もしないで、人を妬んで嫌味言うくらいの脳しかないなら、学者なんか辞めてしまえばいい」

「何も知らないくせに、バカな女が口答えするな」

陣野が私に掴みかかろうと伸ばした手は、別の手によって塞がれた。

「上条……ありがとう。もういいから。サボってた僕が悪いんだし」

気づけば私のすぐ隣に朝比奈がいて、陣野の腕を押さえていた。これ以上ないくらい嬉しそうな顔で私を見つめている。一瞬その表情にドキドキしてしまった。

他の人間が悪口言うのが許せない程、やっぱり私こいつの事好きだ。

しかしそんな心の揺らぎはすぐに消し飛んだ。朝比奈が陣野の方に視線を向けて、先ほどの雛姫に見せた以上に恐ろしい笑顔を浮かべた。

「それで、そんな偉い陣野さんが、古谷教授の不在中にどうしてここに来たんですか？」

「……そ、それは……先生が不在と知らずに……」

「そういえば最近教授室に保管されている、貴重な書籍が紛失しているそうなんです。ちょうど陣野さんが今研究している『更級日記』に関連するものばかり」

「わ、私を疑うのかね」

「疑うような事言つてすみません。一般にあまり出回らない書籍だからって、自分の論文にそのまま流用だなんて程度の低い事、まさか陣野さんがするわけありませんよね」

「……あ、あたりまえだ」

「ちなみに、僕その紛失した書籍全部個人的に持つてるんで、もし陣野さんの論文が似てたらすぐわかりますから」

陣野はそれ以上強がりと言う事が出来なくなった。朝比奈は一步距離を詰めて、陣野の耳元に囁いた。

「論文の締め切り来週ですよ。急がないと間に合わないんじゃないかな。古谷教授は才能ない人間以上に、盗作をするようなやる気のない人間は嫌いですよ」

陣野はガタガタと震えて部屋を飛び出していった。

「あんたこの件古谷先生に報告するつもり？」

「もちろん。あの男がこの昨日書きかけの論文を置き忘れてたから、コピーとつてあるんだ。証拠は押さえてあるから、古谷教授だけじゃなく、近隣の大学の文学部にも噂ばらまいて、この世界で生きて

いけないようにしないとね」

容赦のない腹黒さに呆れてため息をつく、朝比奈は不満そうに口をとがらせた。

「上条をバカにするなんて100年早いんだよ」

「は？あんな怒る所そこなの？嫌味言われた事怒らないの？」

「別に。僕がサボってるのも、古谷教授が鼻屑してるの事実だし。この使用許可を古谷教授にもらってて、最近ここではっかりさばってたから……。そろそろ場所変えないとな……」

何も言えない程呆れた。自分の事は平気で、私がちょっとバカにされたからって、あんなに怒るなんて……。そんな態度見せられたら期待しちゃうじゃない。

朝比奈はまだ私の事好きなんじゃないかって。

「上条。庇ってくれてありがとう」

「あんたもね。一樣礼を言っとくわ」

クリスマスの時のわだかまりがなかったように、私達前と同じ様に戻れるのだろうか？

「あの一。私いるんですけど。二人の世界作らないで」

雛姫の遠慮がちな抗議に、私は顔から火が出そうなほど真っ赤になった。し、しまった！恥ずかしい姿を見られた！！

Beginner

「お兄ちゃん。雛夕ご飯に食べに行きたいお店があるんだ」

雛姫のワガママで今日は池袋に向かう事になった。

昨日はラーメンだったけど今日はどこに行くつもりだろう？
雛姫に連れて行かれたのは中華料理屋だった。

昨日のラーメンといい中華好き？

「ここ、飲茶食べ放題にできるから、いっぱい食べようね」

また女同士の大吃い大会か？雛姫は細い体で量重視なのか？

「僕はそんなに食べらんないから、食べ放題じゃなくても……」

「大丈夫。ここの烏龍茶美味しいから、いつもよりたくさん
食べちゃっよ」

油っこい中華もさっぱりとしたお茶と一緒に、食が進むが、朝
比奈は本当に小食だから食べ放題では元がとれなさそうだ。

しかし朝比奈はドリンクメニューを嬉しそうに見ていて、これ以
上反対する気はないようだ。

「いいお茶揃ってるね……。雛はお茶でいいよね。上條はどうする
？ビール？紹興酒？」

「私もお茶でいい」

「上條が珍しい。具合悪いの？」

「なにそれ？失礼ね。元気よ。食べ放題なら食べるのメインにする

からお茶でいいの」

雛姫は笑いながら私達のやりとりを見ていたが、店員を呼び止めて注文を始めた。

「時間内ならメニューの中から好きに注文してよくて、注文してから作るからできたてが食べられるんだって」

「美味しそうね。何がいいかしら」

「すみません注文いいですか？海老餃子に翡翠餃子に小籠包にニラ饅頭に大根モチに……」

いつまでも続く雛姫の容赦ない注文に、口を挟む隙もない。

「雛、上條が注文できないよ」

「ごめんなさい。何がいいですか？」

「ニラレバとエビチリ」

本当はもつと食べたい物があつたが、とても一度にテーブルに乗り切らなさそうだったので、後で注文する事にした。

朝比奈はドリンクの注文だけで、メニューを見ることすらしなかつた。

最初にお茶ができたのだが驚いた。

手のひらサイズの小さな中国茶器が大きな盆に載せられて、お湯ポットと一緒にきた。

「お入れしましょうか？」

「大丈夫です」

朝比奈は小さな茶器を流れるような手つきで動かし、ゆっくりとお茶を入れてった。

日本茶や紅茶とも違う独特の入れ方は、美しく思わず見とれてしまった。

「上條?どうしたの?」

私は目の前に茶碗を出されても、まだ余韻に浸るようにぼーっとしていた。

「な、なんでもないありがとう」

受け取った茶に口をつけて驚いた。

今まで飲んできたペットボトルの烏龍茶とは比べものにならないほど香りがよい。

確かに烏龍茶の味はだと思っただが、まるで別物のようだ。

「こんな美味しい烏龍茶飲んだの初めて……」

「良かった。美味しいお茶だね」

「朝比奈ってこういうお茶好きなの?」

「中国茶は好きだよ。前言った中目黒のお気に入りのお喫茶店も中国茶専門店だし」

翻訳や通訳できるほどに中国語に堪能だし、中国文化に詳しいとは思っていたが、わざわざ専門店に通うほど中国茶が好きとは知らなかった。

「お兄ちゃん東京に来てからはまったんだよね。金沢に中国茶専門

店なんてないから、お茶買ってきて入れてくれるの楽しみにしてたのに……。最近全然帰ってきてくれないし……」

「雛ごめんね」

雛姬ちゃんは朝比奈のお茶好きな趣味知ってたのか……。しかも大学からなら、私が出会ってから増えた趣味なのに知らなかった……。

本当にこんなんで仮でも恋人なんて名乗れない。

次々と料理が運ばれてきた。どの料理も食べ放題とは思えないほど美味しい。

しかし気になる事があった。

小食な朝比奈が珍しくよく食べているが、雛姬が頼んだ料理ばかりで、私が頼んだ料理は箸もつけなかった。

「朝比奈、レバニラ食べない？エビチリは？」

「二人で食べていいよ、僕そんなに食べられないし」

私の選んだ料理は食べたくないのか？私より雛姬の方が可愛いのだろうか？

他にも色々頼んだのに、やっぱり私が選んだものは食べてくれない。

ラストオーダーにデザートを頼んだ頃、朝比奈がトイレに行った。

「彩花さん、お兄ちゃんがどうして私が選んだ料理ばかり食べたのかわかります？」

「わからないわ」

「私の方が可愛いから……じゃないですよ。彩花さんが頼んだ料理がお兄ちゃんの嫌いなものばかりだっただけです」

「……え」

「レバー嫌いだし、エビは好きだけどエビチリみたいなしつこい味よりあっさりした味つけの方が好き。他にもこっちの料理は、嫌いな八角が入ってるし」

次々と言われる細かい好みにうんざりした。

「好き嫌いの多い面倒なヤツ」

「でも餃子とか饅頭とか飲茶はかなり好きな方なんだよ。だからお兄ちゃんにしてはいっぱい食べたでしょう？」

雛姫に店選びから差をつけられてたわけだ。

朝比奈とは長い付き合いなのに、本当に何も知らなかった。恥ずかしい。

俯く私に雛姫が慌てた。

「落ち込まないください。お兄ちゃんってすごいわかりにくいし、面倒だし、しかたないですよ」

「でも……」

「お兄ちゃんが食べたがらない時は、わがまま言って食事に連れ出しつつ、さりげなくお兄ちゃんの好きなものばかり選ぶといいんだ」

雛姫のワガママは朝比奈のための計算なのか……。負けた。

「今日は朝比奈祐一講座ビギナー編です。これからは私が知ってる

好み全部教えます。知らない事はこれから知ればいいんだから」

「雛姫ちゃん……」

「昼間お兄ちゃんを庇う彩花さんと、彩花さんを守るお兄ちゃんを見てかなわなくなってる思った。私ワガママは言えてもあんな風に強くなれないから」

雛姫は寂しげな表情でそう言った。

「私はいつもそばにいられないし、お兄ちゃんが無理すぎないよ
うに、見張ってってくれる人がいる方が嬉しいな」

「わかったわ。任せて。だから色々教えてくれる？」

「はい」

雛姫の眩しいほどのエンジェルスマイルに目を細める。

こんなに一途に妹に思われたら、朝比奈が可愛がりたくなる気持ちわかるかも

「そういえばお兄ちゃん遅いですね」

「そうね……まさか食べ過ぎで気持ち悪くなったりしないわよね」

「そこまで無理に食べさせてないはずなんですけど……」

噂をしてたらちょうど朝比奈が戻ってきた。誰かと携帯で話しながら。

「雛。姉さんだから代わって」

「えっ！嘘、お姉ちゃん！」

慌てて電話に出る雛姫。震えた顔でしきりに謝ってる。

「昨日学校サボって、東京にも家に内緒できてたみたい」

「あんたそれ気づいてたの？」

「まあ。でも僕が怒っても聞かないし。家では姉さんが一番怖いから」

意地の悪い笑顔を浮かべる朝比奈。雛姫ちゃんを猫可愛がりするばかりでもないのね。

電話を終えた雛姫は恨めしげな目で朝比奈を見て言った。

「お姉ちゃんに言いつけるなんて……お兄ちゃんの意地悪！」

私と朝比奈を振り回し続けた小悪魔にも、弱点はあったようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9186u/>

難攻不落彼女

2011年12月19日00時29分発行